

『パワープロ成長』でダイヤのA

ネコガミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

練習や試合での経験を経験値として得て任意に成長できる『パワーロ成長』

努力をすれば必ず実るというチート特典を得た主人公がダイヤのAの世界へ転生する。

ダイヤのAにチート特典を持ったオリ主をぶち込んだ作品です。

その事を踏まえた上でご一読ください。

サブタイトルの後に☆がついている話には主人公のステータスが表記してあります。

サブタイトルの後に★がついている話は掲示板要素があります。

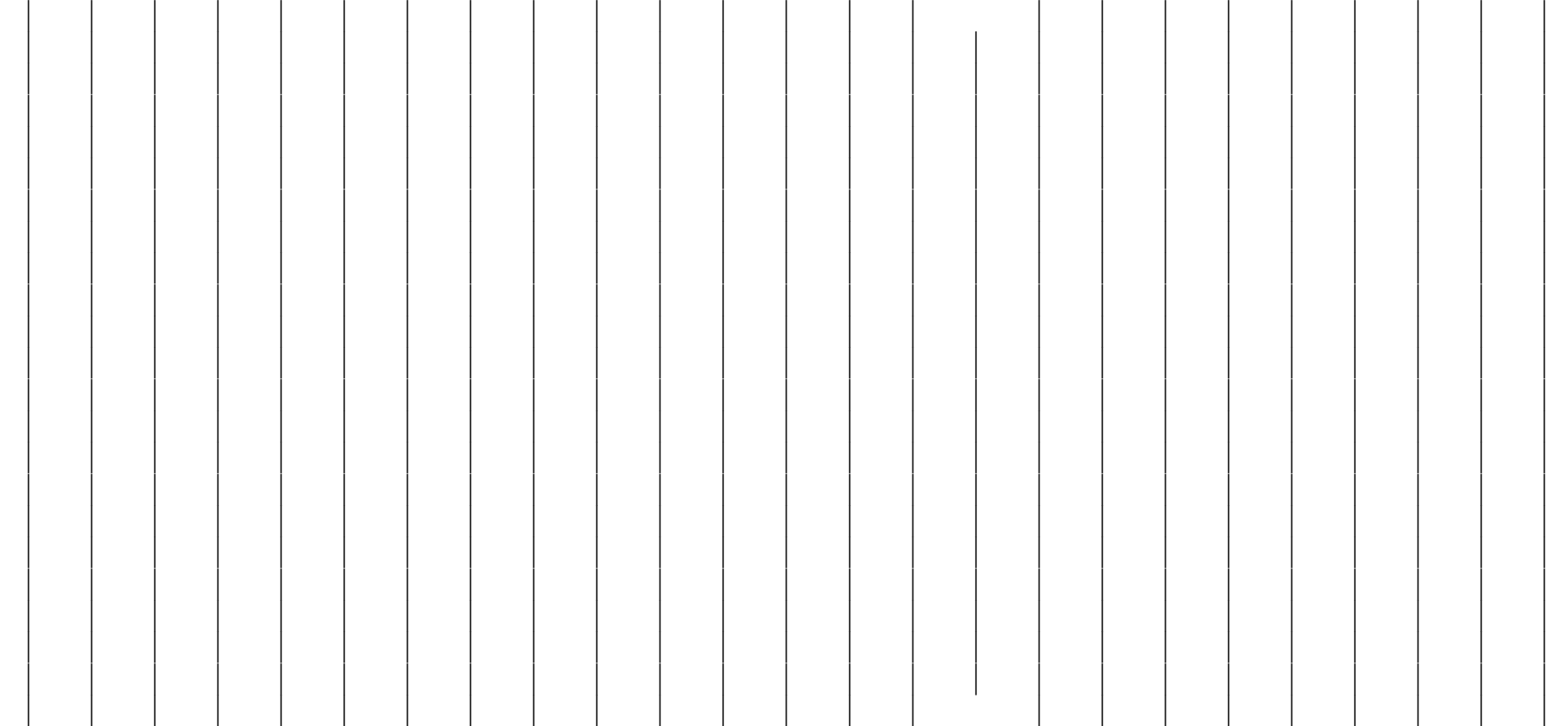
目次

プロローグ	1
幼稚園編	
第1話☆	4
第2話	9
第3話	13
第4話	16
第5話	20
リトルリーグ編	
第6話	24
第7話	29
第8話☆	33
第9話	38
第10話	42
第11話	47
第12話	52
第13話☆	55
第14話	59
第15話	62
第16話	66
第17話☆	70
第18話	74
第19話	78
第20話	82

第44話	173
第43話☆	169
第42話	165
第41話	162
第40話	158
第39話	154
第38話	150
第37話	146
第36話☆	142
第35話	139
第34話	136
第33話	133
第32話☆	129
第31話☆	124
第30話	121
シニアリーグ編	
第29話	117
第28話☆	113
第27話	109
第26話☆	105
第25話	101
第24話	97
第23話☆	93
第22話	90
第21話	87

第67話	第66話	第65話	第64話	第63話	第62話☆	第61話	高校野球編	幕間：とある女性教諭のスカウトメモ	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第55話	第54話	第53話	第52話	第51話	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話☆	第45話
267	262	257	254	250	245	242		237	233	229	226	222	218	214	210	206	203	200	197	193	190	185	180	176

第9話 第91話 第90話 第89話 第88話 第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話 第77話☆ 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話



354 350 347 344 341 336 332 329 326 321 318 314 311 308 305 301 298 295 292 288 285 281 277 274 271

第 1 1 7 話	第 1 1 6 話	第 1 1 5 話	第 1 1 4 話	第 1 1 3 話	第 1 1 2 話	第 1 1 1 話	第 1 1 0 話	第 1 0 9 話	第 1 0 8 話	第 1 0 7 話	第 1 0 6 話	第 1 0 5 話★	第 1 0 4 話☆	第 1 0 3 話	第 1 0 2 話	第 1 0 1 話	第 1 0 0 話	第 9 9 話★	第 9 8 話	第 9 7 話	第 9 6 話	第 9 5 話	第 9 4 話	第 9 3 話
452	448	445	440	436	433	429	425	421	417	413	409	401	396	392	388	385	382	376	373	370	367	364	361	358

第 1 4 2 話	第 1 4 1 話	第 1 4 0 話	第 1 3 9 話	第 1 3 8 話	第 1 3 7 話	第 1 3 6 話	第 1 3 5 話	第 1 3 4 話	第 1 3 3 話	第 1 3 2 話	第 1 3 1 話	第 1 3 0 話	第 1 2 9 話 ☆	第 1 2 8 話	第 1 2 7 話	第 1 2 6 話 ★	第 1 2 5 話	第 1 2 4 話	第 1 2 3 話	第 1 2 2 話	第 1 2 1 話 ★	第 1 2 0 話	第 1 1 9 話	第 1 1 8 話 ★
548	544	541	537	533	529	525	522	518	515	512	509	505	501	498	495	490	484	480	477	473	467	463	460	455



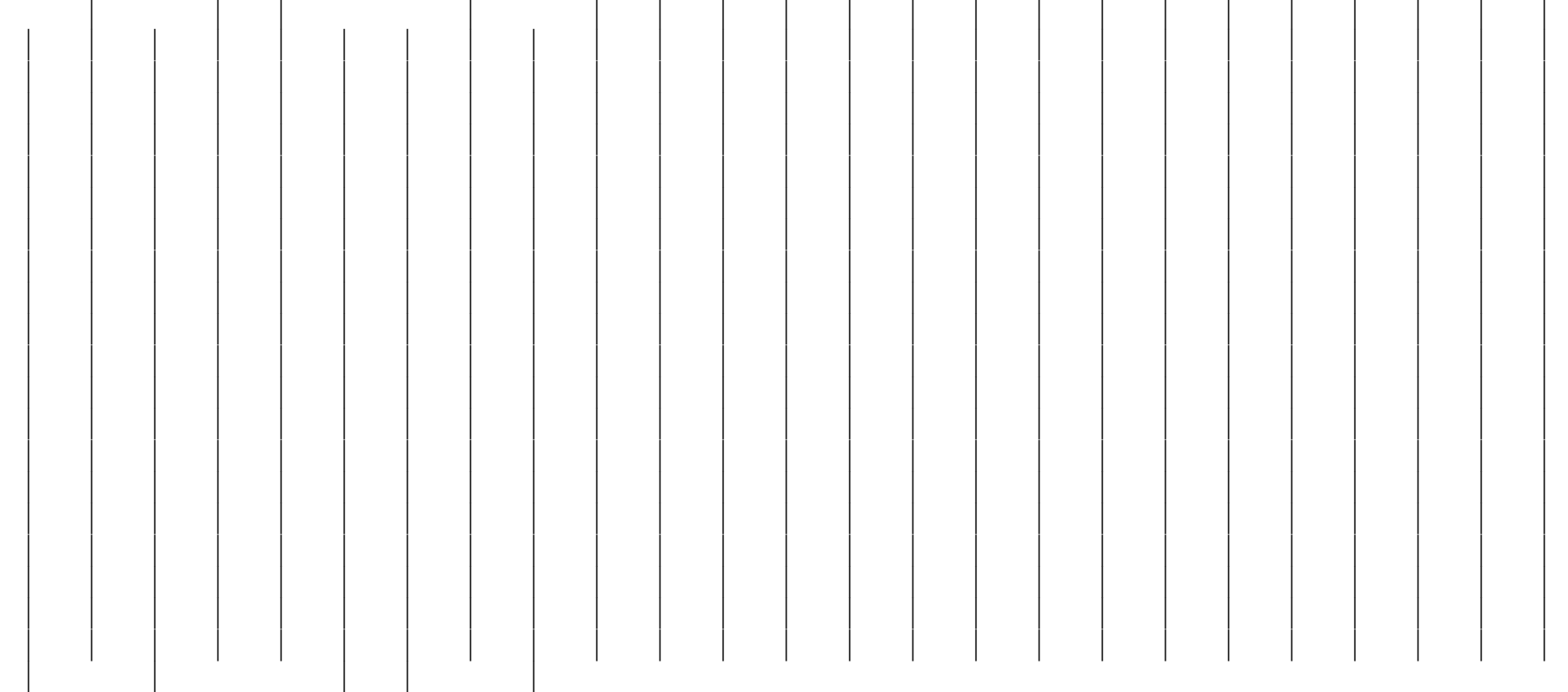
原作開始・高校野球2年編

第166話	第165話	第164話★	第163話	第162話	第161話	第160話★	第159話	第158話☆★	第157話	第156話	第155話	第154話	第153話	第152話	第151話	第150話	第149話	第148話	第147話	第146話	第145話	第144話	第144話	第143話
635	632	628	625	621	617	613	610	603	600	595	591	588	585	582	578	575	572	568	565	562	559	555	555	552

第191話  
第190話  
第189話★  
第188話  
第187話  
第186話  
第185話  
第184話★  
第183話  
第182話  
第181話  
第180話  
第179話  
第178話  
第177話  
第176話  
第175話  
第174話☆  
第173話  
第172話  
第171話★  
第170話  
第169話  
第168話  
第167話

722 719 714 711 708 703 700 696 692 689 686 683 680 677 674 670 667 663 660 656 651 647 644 641 638

第216話☆  
第215話  
第214話★  
第213話  
第212話  
第211話★  
第210話★  
第209話  
第208話☆  
第207話  
第206話  
第205話  
第204話  
第203話  
第202話  
第201話  
第200話  
第199話  
第198話  
第197話  
第196話  
第195話  
第194話  
第193話  
第192話



807 804 801 797 794 790 786 783 779 776 773 769 765 762 758 755 752 749 745 742 739 735 732 729 725

第 2 4 1 話	第 2 4 0 話 ★	第 2 3 9 話	第 2 3 8 話	第 2 3 7 話	第 2 3 6 話	第 2 3 5 話	第 2 3 4 話	第 2 3 3 話	第 2 3 2 話	第 2 3 1 話 ★	第 2 3 0 話	第 2 2 9 話	第 2 2 8 話	第 2 2 7 話 ★	第 2 2 6 話	第 2 2 5 話	第 2 2 4 話	第 2 2 3 話	第 2 2 2 話	第 2 2 1 話	第 2 2 0 話	第 2 1 9 話	第 2 1 8 話	第 2 1 7 話
893	888	885	881	878	874	870	866	863	860	855	852	849	846	841	838	835	832	829	826	823	820	817	814	811

第264話	974
幕間：プロに行った青道卒業生達の春のキャンプ	970
第263話	967
第262話	964
第261話	961
第260話	958
高校3年編	
第259話★	954
第258話☆	950
第257話	946
第256話	943
第255話★	940
第254話☆	937
第253話	935
第252話	931
第251話	928
第250話★	924
第249話	921
第248話★	917
第247話	913
第246話	910
第245話★	905
第244話	902
第243話	899
第242話	896

エピソード  
第287話★  
第286話  
第285話  
第284話★  
第283話  
第282話☆  
第281話  
第280話  
第279話★  
第278話  
第277話  
第276話  
第275話  
第274話  
第273話★  
第272話  
第271話  
第270話  
第269話  
第268話★  
第267話★  
第266話  
第265話☆

10551051104810451042103910351032102910261023102010171014101010071003 999 996 993 989 984 981 977

## プロローグ

俺は今、手の中にあるカードを見詰めている…。

『パワープロ成長』

カードにはそう書かれている。

「へえ、良い特典をゲットしたじゃない。」

俺に話し掛けてきたこの美女は女神である。

いや、比喻表現じゃなくてマジものの女神様だ。

というのも、ビールを飲みながらテレビでプロ野球を見ていた時に色々あつて俺は人生を

終えてしまったのだが運良く女神様に拾ってもらえたので転生できるとなったのだ。

「こっちは適当に選んだだけなんだけど、選ばれただけあつて貴方は運が良いのね。」

女神様に転生してもらえる…所謂、神様転生ということで特典を貰える事になったのだが

まさか特典を選ぶ方法が運任せのカード引きだとは思わなかった。

「それじゃ、特典も決まった事だし転生させるわよ。」

「待って！待ってください女神様！」

俺の制止の言葉に億劫そうに女神様は顔を向けてくる。

「せめて特典の説明をしてください！」

「え…もう、面倒ね。」

女神様は両手を腰に当て、ため息を1つ吐いてから話し始める。

「貴方の特典は練習や試合での経験を経験値として得ることが出来て、それを使って

任意に自身を成長させる事が出来る特典よ。」

俺は女神様の説明を一言一言噛み締めるようにして聞いていく。

「つまり、貴方の特典は『努力をすれば必ず実る能力』と言えるわね。」

努力をすれば必ず実る…。

「その能力を貴方の世界のゲームから拝借して便宜上『パワープロ成長』と名付けたわ。」

何故にパワプロから盗った…もとい取ったのだろうか？

「説明はこんな所ね。後は転生してから貴方自身で確認しなさい。それじゃ転生…。」

「ワ——ッ！待って！まだ転生先の事を聞いてないから！」

せつかちな女神様相手故について敬語を忘れてしまう。

「細かい男ねえ…そんなんだから彼女の1人も出来なかったのよ？」

「グハア！」

女神様の言葉のビーンボールが俺の心に直撃した。

「ほら、教えるからさっさと顔を上げなさい。」

「はい…。」

俺は憂鬱な心を奮い起たせて顔を上げる。

「貴方が転生する先は『ダイヤのA』が元になった世界よ。」

「ダイヤのA？」

「知ってるでしょう？」

「あの、俺はサ○デー派なので…。」

俺の言葉により俺と女神様の間に沈黙が流れる。

「そう…貴方とはわかりあえないのね…。」

女神様は片手で目元を覆って悲しそうな様子をみせる。

「まあ、いいわ。それなら遠慮せずに振りきれるところのものよ。」

そう言った女神様はどこからともなく金属バットを取り出した。

「え？あの…そのバットで一体何を…？」

「貴方の魂、つまりは今の貴方を転生先に打ち込む…もとい、送り込む為の道具よ。」

「いま打ち込むって言ったよね!？」

素敵な笑顔を見せながらバットを手に近付いてくる女神様の姿に俺は後退りをする。

「さあ、覚悟をして打たれなさい！これはストレス解消…じゃなくて仕事なんだから！」

「言った！今、ストレス解消って言った！」

逃げようとする和不意に金縛りにあったように体が動かなくなってしまう。



「さあ、九回ツーアウトで一点差！ランナーは二塁！同点を狙うべきか、はたまた

一発逆転を狙うのかそれが問題ね。」

ブンツ！ブンツ！

女神様が往年の名選手である世界のホームラン王の様な見事な一本足打法で素振りをする。

「せめて！せめて見えないように後ろから！」

「本当に細かい男ねえく…さっさと逝きなさい！」

カキーン！

金属バット特有の甲高い音が耳に響くと同時に、俺は意識を失うのだった。

## 幼稚園編

### 第1話☆

女神様にホームランされて目が覚めると幼児になっていた。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ…。

と、ネタに走ってしまいそうになるほど吃驚したが、次第に混乱は治まっていく。

記憶が統合されていったとでも言えばいいんだろうか？

現状を当たり前のものと認識し始めたのだ。

「俺は葉輪 風路（はわ ふうろ）、今年3歳でこれから幼稚園に入園する所つと…。」

なんとなく思い出せる事を呟いてみると不思議と受け入れる事が出来た。

「これも女神様のおかげなのかな？」

かつ飛ばされた事は甚だ遺憾ではあるのだがこうして転生させてもらった以上

受け入れて生きていくしかないだろう。

「さて、まずは特典の確認でもしようかね。」

そう呟いて俺は、自分の中にある感覚を頼りに特典を使う。

今生の父さんは仕事に行っているし、母さんは台所にいるから問題無いだろう。

俺の目の前にゲームのメニュー画面のような物が浮かび上がった。

勿論、これは俺以外の人には見えない物である。

ご都合主義バンザイ。

基礎能力

最高球速：？ km

制球：？

スタミナ：？

※一定年齢に達するまで基礎能力の表示、及び成長は出来ません。

「おろっ？」

そう表示された事で疑問が口に出てしまう。

最後の注意書きの様なものから察する。

「なるほど、確かに幼児が160kmの豪速球を投げたりしたらおかしいもんなあ…。」

努力をしたら実るけど、あくまでも人の範疇でと言った所なのだろう。

「まあ、それでも十分にチートだから文句は言えないな。」

俺はメニュー画面を別のページに切り替える。

現在使用可能ポイント

筋力：500

敏捷：250

技術：500

変化球：0

精神：500

※金特殊能力の取得条件を満たした為、ボーナスポイントを取得しました。

「ファッ!？」

吃驚し過ぎて変な声が出てしまった。

「あら、フー君。どうしたの?」

俺の声に反応して台所にいた母さんが来てしまった。

やべえ…:なんとか誤魔化さないと。

「あのね、黒くてカサカサしたのがいたからビックリしたんだ。」

俺の言葉を聞いた母さんは「あらあら」と言いながら履いていたスリッパを左手に取った。

すまぬ…:罪無き油虫よ…。

それはさて置き『メニュー』の再確認だ。

※金特殊能力の取得条件を満たした為、ボーナスポイントを取得しました。

このように表示されているので何かログが残っていないか『メニュー』を弄ってみる。

目線だけで操作出来るのはとてもありがたい。

空中に手を伸ばしてアレコレしていたら痛い奴だと思われるからな。

※『鉄腕』の取得条件を満たしました。

※『鉄人』の取得条件を満たしました。

お？あった。

どうやらこれがポイント取得の原因らしい。

俺はこの金特殊能力なるものの詳細を確認する。

『鉄腕』

・ 投球等の動作による怪我に非常に強くなる特殊能力である。

・ この能力を取得すると練習や試合での投球で怪我をしなくなる。

・ 但し、ピッチャー返し等の打球が身体に当たった場合等はその限りでは無い。

※取得条件：3年間1度も怪我をしない事。

おお！めっちゃ良い能力やん！

思わず似非関西弁が出るぐらい素晴らしいものだ。

そして、どうやら俺の意識が無い間にこの取得条件を満たしていたようだ。

俺はもう1つの能力の詳細をしてみる。

『鉄人』

- ・怪我や病気に非常に強くなり、回復も早くなる特殊能力である。
- ・この能力を取得すると練習や試合、日常に於いて外的要因以外で怪我をしなくなる。

- ・この能力を取得すると病気に掛からなくなる。

※取得条件：3年間1度も病気にならない事。

おお！これもまた素晴らしい能力だ！

3年間、しっかりと俺の世話をしてくれた両親に全力で感謝を捧げよう。

「お母さん、ありがとう。」

年齢的にやや舌足らずな言葉で母さんに感謝の言葉を告げると母さんは

少し驚いた顔をしてからスリッパを持っていない手で頭を撫でてくれた。

「フー君、どうしたの急に？」

「んー、よくわかんない。」

俺の返答に母さんはニッコリと笑いながら頭をワシワシと撫で続けてきた。

：未来が心配になるのでそろそろ勘弁してください、ママン。

さて、メニューを見ると特殊能力は取得可能なようなので早速2つを取得するでしょう。

そう思つて俺はメニューを目線で弄つて特殊能力のページに切り替える。

どうやら『鉄腕』は『ケガしにくさ』の、『鉄人』は『回復』の最上位能力らしい。

目線でメニューをポチポチと操作して金特殊能力を取得するとかなりあつたと思つた

ポイントが全て0になつてしまった。

そのうちポイント関連の事を調べないとな。

俺がアレコレと頭を悩ませていると、母さんが見事な投球フォーム

でスリッパを投げ込んだ。

すると、壁を這っていた油虫に直撃して見事油虫を討ち取ったのだった。

本当にいたのね、油虫…。

## 第2話

「は〜い、皆？これは何かなく？」

「『ゾウき——ん！』」

母さんに連れられて無事に幼稚園に入園した俺は今、保育士さんによって

教育を受けている所である。

保育士さんが絵が描かれた物を掲げたのを見て園児の皆で答えていくという

とても可愛らしい光景が続けられている。

勿論、俺も今は園児なので皆と一緒に答えているぞ。

思考は転生前と変わらないが記憶が統合された事で感覚は年相応になったからな。

まあ、それはいいんだが…。

「は〜い、皆？これは何かなく？」

「『リスさんと栗——！』」

保育士さん…さっきから絵のチョイスに意味深なモノを感じるのは気のせいですかね！

その後もキリンやらヘビやらと何やら意味深なチョイスに感じる絵を答えていつて

俺を含めた園児達のお勉強は続いていったのだった。



さて、勉強が終われば遊びの時間である。

園児達は幼稚園の敷地を所狭しと駆け回っている。

そして、元大人である俺はというと…。

「うわあ——！パワプロだあ——！」

「怪獣パワプロが来たぞ——！お城を守れ——！」

幼児と一緒に思いつきり遊んでますが何か？

ええ、文字通り童心に帰るといつか身体的に童心そのものなので遊

びがめつちや楽しいです。

事案？

何処かの体は子供な高校生探偵だつてやっている事だ。

何か問題があるかね？

それはそれとして俺は今、園児達の1グループが作った砂のお城を怪獣の役で

壊そうとしている所である。

悪役：凄く、面白いです…。

「ぎやおおおおおおん！」

「わーわー——！——」

フハハ！慌てるがいい童共！お城の耐久力は十分か？

喜び勇んで幼児が作った砂のお城を壊そうとする外道な事をしていたが、幼児の1人が

腕を十字にしてビームを撃つ振りをしたのでそれに合わせて倒された振りをする。

感覚は幼児に戻つたがそのぐらいの分別はあるのだ。

さて、怪獣パワプロが倒された事で一緒に遊んでいた園児達がキヤツキヤツと喜んでいるが

ヤ○チャポーズで倒れた俺の視界には遠くにヨロシク無い光景が見えている。

1人の男の子を中心とした複数の男の子が1人の美少女を泣かせているのである。

これはあれか？

気になるあの子に振り向いて欲しくてイジワルしちゃうあれか？

いかん！このままではあの男の子は本当に嫌われてしまう！

ここは惜しくも砂のお城を壊さなかつた大人の分別のある俺が助けなくては！

決して美少女の前でカッコつけたい訳ではない。

カッコつけたい訳ではない。

今行くぞ、美少女！

ポーリングをしながら立ち上がった俺を見て「怪獣パワプロが復活



した―」と園児達が騒ぐが

俺はそんな園児達に「今度は向こうで遊んでくるね」と手を振る。

「「また遊ぼうね。パワプロくーん」」

死闘を繰り広げた宿敵（とも）と別れを告げた俺は颯爽と美少女の所へと走っていく。

ちなみに俺、葉輪 風路は幼稚園の同じ組の皆に『パワプロ』という渾名で呼ばれている。

これは自己紹介をした時に誰かが「パワプロ？」と言った事がキツカケだ。

保育士さんが訂正してくれたのだが、注目が集まっていた事でテンションが

上がってしまった俺はポーズをしながら「パワプロって呼んでね！」などと

やってしまったので事故紹介になってしまったのだ。

感覚が子供になった事で目立つのが好きになってしまったらしい。

それはともかく美少女の救出である。

「とうー！」

大きな声を出しながら美少女と男の子達の間立ち塞がる。

「なんだよー。お前、あつちいけよー。」

不満な気持ちを隠そうともしない男の子が微笑ましい。

だが、折角の美少女の前でカッコつけるチャンスもとい、男の子が美少女に嫌われないように救うチャンスなのである。このチャンス

…逃しはしない！

救うチャンスなのである。このチャンス…逃しはしない！

「シャキーン！」

効果音を口に出しながらポーズをする。

すると、それを見た男の子達も思い思いにポーズをする。

この世界にある変身ヒーローのポーズだ。

「オンドウルルララギッタンデスカ！」

「うるさいー！しょうぶだー！」

そして始まる俺を含めた男の子達の殺陣。

殴られた振りをして前転をしたりと大忙しである。

「オデノカラダハボドボドダァー…。」

「あっはははー！」

見事に男の子達は美少女の事を忘れて変身ヒーロー遊びに夢中である。

めっちゃ楽しい！じゃなくて、作戦通りである。

「その可愛い女の子…ここは俺、パワプロに任せて早く行くんだ！」

「ふえ？なに？」

舌足らずな返事まで可愛い美少女バンザイ！

いや、それはいいから早く何処かへ行って欲しい。

この変身ヒーロー遊びは楽しいもとい、とても疲れるのである。

少しでも休んだらそのまま寝てしまいそうなのだ。

「さあ、行くんだ！」

「よくわからないけど、ありがとう、パワプロくん！」

そう言った美少女は涙をグシグシと手で拭ってからトテトテと走り去っていく。

こうして純真無垢な男の子と美少女の危機を救う事が出来たのだ。

その後、件の男の子達と体力の続く限り変身ヒーローゴッコを楽しんだ俺は、

お昼寝の時間になると爆睡するのだった。

### 第3話

わたし、藤原 貴子。4歳。

少し前から幼稚園の同じ組の男の子が嫌な事をしてくるようになったの。

今日もお遊びの時にその男の子がお友達と一緒にわたしに嫌な事をしてきたの。

どうしてそんなことをしてくるのかわからなくて。

やめてって言ってもやめてくれなくて泣いちゃったの。

でもね、今日はいつもと違ったの。

知らない男の子がわたしを助けに来てくれたの。

その子は『パワプロ』くんって言うの。

なんかわたしに嫌な事をしてきた男の子と遊んでるみたいだけど、パワプロくんだけが

わたしが嫌な事をされてる時に来てくれたの。

ちゃんとありがとうって言えたけど、本当に嬉しかったからもう一

回言いたいな。

でも、お昼寝の時間になっちゃった…。

起きたらすぐにありがとうって言えるようにお隣で寝るの！

先生！パワプロくんのお隣を取ったらダメー！

パワプロくんにおやすみって言おうと思ったらもう寝ちゃってる…。

でも、パワプロくんの寝顔はとっても可愛かったよ！

貴子も泣いたら眠くなっちゃったからもう寝るの。

おやすみ、パワプロくん…。



保育士さんに起こされて目が覚めると隣で美少女が寝ていた。

あ、ありのまま…。

「おはよう、パワプロくん」

混乱の極みに達しようとしていた俺に美少女がおはようの挨拶をしてきた。

ここは紳士としてしつかりと返事をしなければ。

「おはよう、えくと…?」

「あのね、わたし、貴子。」

「貴子?」

俺が美少女の名前を知らなくて悩んでいると美少女が名前を教えしてくれた。

「うん、藤原 貴子だよ。」

「そっか、おはよう、貴子ちゃん。」

「おはよう、パワプロくん!」

改めて貴子ちゃんとおはようの挨拶を交わすと彼女は花開いたようにうな

素敵な笑顔を見せてくれた。

うんうん、将来有望な美少女ですな!

ところで、保育士さん?その生暖かい目を向けてくるのをやめていただけませんかねえ…。

その後、貴子ちゃんにありがとうと言われて何の事かわからず混乱した俺だが、

お迎えが来るまで貴子ちゃんのお喋りを楽しむのだった。



俺と貴子ちゃん双方のお迎えが来て驚愕の事実が判明した。

なんと、俺と貴子ちゃんは御近所さんだったのだ。

というか、我が家の目の前が貴子ちゃん宅らしい。

世間は狭いものだなと一人頷いているとそれを見ていた皆が首を傾げていた。

それと、母さんと貴子ちゃんのお母さんの話でわかったのだが、どうやら貴子ちゃんは

俺の1つ年上らしい。

それを知った貴子ちゃんは「わたしがパワプロくんのお姉ちゃんだね！」と言ってきた。

背伸びをする貴子ちゃんに微笑ましいものを感じた俺は貴子ちゃんの頭を撫でた。

だが、何故か貴子ちゃんは頬を膨らませて不満そうな顔をしてきた。

解せぬ…。

俺と貴子ちゃんが同じ幼稚園で友達になった事で、それまで御近所付き合い程度だった両家は

家族ぐるみでの付き合いをしていくようになる。

両家の父親が野球経験者で意気投合した事も関係しているようだ。

それからの俺は幼稚園、休日等で貴子ちゃんと一緒に遊んだり、勉強したりしていく。

元大人である俺は勉強で大人に誉められていく。

1つとはいえ年上の貴子ちゃんが嫉妬するかなと思ったのだが、貴子ちゃんは俺に教えてと笑顔で言ってくる。

俺は親に教えてもらってはどうかとやんわり家族交流を進めるが、貴子ちゃんは

頬を膨らませて不満な気持ちを表現してくるのだ。

解せぬ…。

そんな光景を両家の母親達は「あらあら♪」と楽しそうに眺めてくる。

いや、奥さん？これは違うのですよ？

恋とかじゃなくて、友達としてのあれですよ？

流石にまだ恋は早すぎるんじゃない？

そんな感じで俺は特典の事などすっかり忘れて日々を楽しんでいく。

季節は移り変わり夏真っ盛りとなった頃、俺は今生での生き方を決める

運命の光景を目にするのだった。

## 第4話

日本の夏には風物詩と呼ばれる物が幾つもある。

祭り、花火、学生の長期休暇。

そして、葉輪家と藤原家が一緒に見ようとしている高校野球もその1つだろう。

『さあ、夏の高校野球選手権大会の決勝戦が甲子園球場で行われようとしていきます！』

決勝戦に出場するのは西東京地区から勝ち上がってきた青道高校と…。』

青道高校。

俺の家から歩いて行ける近所にある高校だ。

地元の高校が数年振りに甲子園に出場、しかも決勝戦まで勝ち進んだとあって

葉輪、藤原両家の野球好きである父親達は大盛り上がりだ。

『甲子園のマウンドに上がるのは後攻の青道高校のエース、片岡 鉄心です！』

テレビのアナウンサーが紹介する地元の高校のエースの顔がテレビ画面にアップで映る。

怖っ！

この人、本当に高校生か!?

テレビ画面には片岡という人の投球練習の姿がある。

「疲労はあるだろうけど、踏ん張れよ片岡——！」

「後はこの試合だけだ！投げきれ片岡！」

我が家の父さんと貴子ちゃんの父さんがメガホン片手に応援している。

『解説の——さん。決勝戦の展開をどう予想しますか？』

『青道高校は片岡君が最後まで投げきれれるかが勝負のカギでしょうね。』

『片岡選手と言いますとドラフト候補として高校野球界では注目されていますね。』

『ええ、こう言っては何ですが青道高校は伝統的に打者は優秀なのですが投手の方は

あまり高校野球界で有名な選手が出てきていませんでしたからね。』

テレビではアナウンサーと解説者の話が続いていく。

『そんな青道高校にあつて頭角を現してドラフト候補にまで成長したのが片岡君です。

酷な言い方ですが彼以外の投手がこの舞台で投げるのは荷が重いでしょう。』

『なるほど…おっと、どうやらそろそろ試合開始のようです。実況は私…。』

間もなく決勝戦が始まるとなって父さん達が拳を握りしめてテレビを見ている。

だが、俺はそれほどではない。

何故なら俺は前世でプロ野球観戦が趣味だったからだ。

そのせいか、高校野球はプロへの登竜門的な感じで一段低く見ている所がある。

だから、父さん達の熱狂が正直理解出来なかったのだ。

だが、そんな俺の認識は今日壊れる事になる。

『さあ、マウンドの片岡選手、第一球を振りかぶって投げました!』

『140台後半の真っ直ぐが打者の膝元一杯に決まりましたねえく。流石は片岡君

キレもコントロールも見事ですな。』

『ええ、それにあのマウンドで見せる闘志!迫力十分です!』

『あれには青道サインも勇気を貰えるでしょう。』

気がつけば、俺はテレビ画面を食い入るように見詰めていた。

隣で見ていた貴子ちゃんも俺の手を握ってくる。

俺は軽く握り返しながらもテレビ画面から目を離さない。

『片岡選手!まずは一回を三者でキツチリと抑えました!』

『疲労がある筈なのですがそれを見せない素晴らしい気迫ですねえ。』  
試合が進んでいく中で俺の認識が変えられていく。

プロの様に洗練されたプレイも魅せるプレイも殆ど見られない高校野球だが

彼等が一心に白球を追っていく姿が俺を昂らせていく。

「カッコいい…。」

俺は無意識にそう口にしていた。

「うん！カッコいいね！フーくん！」

俺の手を握っていた貴子ちゃんが賛同してくる。

以前は俺の事を《パワプロくん》と呼んでいたのだが皆と違うのが良いと

こうして母さんと同じ《フーくん》と呼ぶようになったのだ。

「はっはっはー！そうか、カッコいいか、風路！」

「うん！カッコいいよ、父さん！」

「野球の良さがわかってくれて父さんは嬉しいぞー！」

俺は父さんとの会話の間もテレビ画面から目を離さない。

いや、離せない。

俺は片岡 鉄心の熱投に、闘志に魅せられていた。

試合は投手戦で進んでいき八回、ここまで0点に抑えていた

片岡選手が相手打線に捕まり始める。

『あーっと、片岡選手！連打を浴びてワンアウト、1、3塁です！』

『片岡君が肩で息をするようになりましたね。ここは踏ん張り所ですよー！』

父さん達と一緒に俺と貴子ちゃんもテレビ画面の片岡選手に声援を送る。

『三振！片岡選手、ツーアウトまで辿り着きましたが次の打者は4番バッターです！』

『ツーアウトですし歩かせてもいいのですが、片岡君なら勝負するでしょうねえ。』

解説者の言葉通りに青道高校は勝負を選択する。

そして…。

『カキーン！』

テレビ画面から響いたのは無情な金属音だった。



『タイムリーヒット——！片岡選手！遂に点を取られました！』

『この終盤で先制点を取られてしまいましたねえ……。』

テレビ画面からは歓喜の声援と悲鳴の様な声が聞こえてくる。

その後、八回、九回と青道高校も得点圏にランナーを置くが相手高校の継投策の前に後一本が出なかった。

『西東京の雄、青道高校！惜しくも敗れてしまいました！』

『敗れてしまいましたが、両校共に良い試合を見せてくれた事に拍手を送りましょう。』

テレビ画面では試合終了の挨拶の為に選手達が整列している。

青道高校の選手達は俯き涙を流している。

だが唯一人、片岡 鉄心だけは涙を流しながらも顔を上げ前を見据えていた。

俺はそんな片岡選手の姿に心が熱くなり、強い憧れを抱くのだった。

## 第5話

「くうー！惜しかった！」

夏の高校野球選手権大会の決勝戦の中継が終わると父さんが頭を抱えながら立ち上がった。

「打の青道だろう?!片岡の熱投に伝えてやれよ！」

父さんだけでなく貴子ちゃんの父さんまで立ち上がって叫ぶ。

そんな2人を見て貴子ちゃんはキョトンとしている。

ちなみに俺の手を握ったままだ。

野球中継は終わったが俺の胸の中に熱い物が残っている。

その熱い物が特典を貰ってただ流されるままに野球をやろうと思っていた

俺の心を塗り替えていく。

俺は貴子ちゃんの手をそっと離して立ち上がる。

「父さん！」

俺が声を上げると皆が俺を見てくる。

注目が集まる事で心が昂るがこれは目立つ為じゃない。

俺が俺の意思で野球を始める為の宣言だ！

「俺！野球選手になる！」

胸の前で両手を握り締めて高らかに宣言する。

俺の言葉の意味を理解した父さんが喜びの声を上げる。

そして、俺を高々と持ち上げて喜びの感情のままにグルグルと回るのがあった。

もちろん、俺と父さんは目を回してその場で寝転ぶ事になったがな！



野球選手になると宣言をした翌日から、俺の生活は少し変わった。

貴子ちゃんと遊ぶ時間が少し減った代わりに、走り込みやキャッチボールを始めたのだ。

走り込みは子供達が元気に走り回るだけのものと違って、一定のリズムで足腰を

鍛える事を目的に家の周囲を回る時に走る。

その距離は現在の所1km程度だ。

父さん曰く、やる気があるのは大いに結構だが小さい内に無理をしたらダメらしい。

流石に特典で得た特殊能力の事を言う訳にはいかないので野球経験者である

父さんの指示に従っている。

走り込みが終わって次にやったのがキャッチボールだ。

キャッチボールをする時に俺が初めて投げたボールは、全く父さんに届かなかった。

なので、ボールを届かせようと上に角度をつけて投げようとしたら父さんに注意された。

父さん曰く、野球の試合では上に向かって投げる事はないからその投げ方はダメとの事。

俺は目から鱗が落ちる思いがした。

前世でプロ野球選手の遠投なんかをテレビで見たが、経験者の父さんからするとあれは

一種のフアンサービスであるらしい。

俺は実践経験豊富な父さんにキラキラと憧れの目を向けて「父さん凄いい！」と称賛する。

すると、父さんがドヤ顔をするのだが、貴子ちゃんと一緒に俺の練習を見ていた

貴子ちゃんの父さんが割り込むように参加してきた。

どうやら貴子ちゃんの父さんも貴子ちゃんの前でカッコつけたいらしい。

貴子ちゃんの父さんが提示した練習はペッパーと呼ばれるものだ。

相手が左右に放る物をしっかりと体重移動してキャッチするといった

遊びの様に見える練習方法だった。

「おもしろそう！貴子もやりたい！」

という事で俺と貴子ちゃんはペッパをやる事になった。  
怪我をしないようにゴムボールを使用する。

最初はキャツキャツとはしゃぎながらやっていた貴子ちゃんだが、  
20回辺りで

息を切らしてその場に座り込んでしまった。

「ははは、貴子は疲れちゃったかな？」

「うん…ちよつと疲れちゃった…」

そして、貴子ちゃんの父さん…まだ若いけどおじさんでいつか。

おじさんが貴子ちゃんを抱えて移動させようとしたのだが、貴子  
ちゃんが俺を指名してきた。

「フーくん、おんぶ〜。」

貴子ちゃんの言葉におじさんは苦笑いする。

俺、走り込みをして結構疲れてるんだが…。

とはいえ、そこは幼児と言えども男の意地がある。

この歳ぐらいだと基本的に女の子の方が身長が高いというか成長  
が早いので、

俺は貴子ちゃんの足が地面につかないように必死に耐えながら貴  
子ちゃんを運ぶ。

「フーくん、ありがとう！」

ペッパをやる前から疲れてしまったが、貴子ちゃんの笑顔が報酬  
ならば悪くない。

美少女の笑顔…プライスレス！

その後はおじさんが俺を振り回す様にゴムボールを放ってくる。

大人気ないぞ！おじさん！

ペッパをやる前から既に疲れていたものの、男の意地でなんとか  
貴子ちゃん以上の

回数をこなそうと頑張る。

20回で地面にぶっ倒れましたが何か？

そんな感じで野球の練習を始めた俺の日常が過ぎていく。

そして、時は流れて俺は小学3年、貴子ちゃんが小学4年生になっ

た頃の事。  
俺は小学生野球のリトルリーグのチームに入っていた。

## リトルリーグ編 第6話

「フーくん、一緒に帰ろう!」

小学4年生になった貴子ちゃんが校門前で同学年の女の子と喋りながら俺の事を待っていた。

「うん、一緒に帰ろう。」

「それじゃ皆、またね。」

女友達に手を振ってから貴子ちゃんが俺の隣にやってくる。

そして、俺達は並んで歩き始めた。

「フーくん、いよいよ明日だね。」

「うん。」

貴子ちゃんの声に顔を向けると、そこには昔の美幼女から美少女へと

成長中の貴子ちゃんの姿が目に入る。

つり目と腰まで伸ばしている髪が特徴の貴子ちゃんは

俺達が通っている小学校でも1、2を争う美少女だ。

そんな美少女である貴子ちゃんと幼なじみである俺は最早勝ち組であると

言っても過言ではないだろう。

ビバ!美少女な幼なじみ!

「フーくんはこのチームに入るんだっけ?」

「色々と考えたけど、丸亀リトルにしたよ。」

丸亀リトル。

強豪と言われる丸亀シニアの下部チームである。

最初はチームを決める時に弱小チームで勝ち上がって俺ツエーをしようかと思っただけだが、

某ノロー君の様な事はやめる事にした。

というのも、俺の目標は片岡選手の様にあの舞台に立つ事だからだ。

俺がこれから飛び込む場所はアマチュアだがアスリートの世界である。

天才と呼ばれる者達が争い努力を尽くしても辿り着けないかもしれない場所を目指すのだ。

そんな縛りプレイをしている暇などない。

努力をすれば実るチートがあれども、実るだけの努力をしなければ意味が無いのだから。

あの舞台に立つ為に俺は最善を尽くすつもりだ。

勿論、その中で野球を思いっきり楽しんでいこうと思う。

「フーくんの希望のポジションは？」

「勿論、ピッチャー！」

マウンドという球場の注目を一身に浴びる事の出来るあの場所。

俺にはピッチャー以外のポジションなど考えられなかった。

「フーくんはピッチャーとして私を甲子園に連れて行ってくれるのね。」

「ああ！俺が貴子ちゃんを甲子園に連れて行くよ！」

幼なじみの美少女との約束。

これ以上に燃える展開などそうはないだろう！

チームに入る前から俺のポジションは上がりっぱなしだ！

「約束だからね♪」

「おう！約束だ！」

そうやって俺と貴子ちゃんは指切りをする。

美少女と触れあう小指に踊りだしたい気分だ！

「そう言えばフーくん？丸亀リトルってマネージャーの募集はしてるのかな？」

「うーん…どうだろう？」

父さんが高校野球のマネージャーとしてベンチに入るのなら、スコアブックをつけられる様に

ならないとダメと言っていた。

なので貴子ちゃんは小学生になってからスコアブックのつけかたを勉強している。

そして、実際にスコアブックをつけて将来の為に練習したいので、どこかの野球チームにマネージャーとして入りたいようなのだ。

「丸亀リトルに入ったら監督に聞いてみるよ。」

「うん、お願いね、フーくん。」

貴子ちゃんと話していると時間が過ぎるのが早く、気がつけば家の前に到着していた。

俺はランドセルを部屋に置いてジャージに着替えると家の外で準備運動を始める。

そして、いつも通りに貴子ちゃんが見守る中で練習をしていくのだった。



「名前は白河 勝之…希望ポジションは遊撃手（ショート）です。」

今年、丸亀リトルに入る新入り達の挨拶が進んでいく。

そんな中で俺は拍子抜けをしている。

同い年の中で投手志望が俺しかいなかったのだ。

同い年のライバルとのエース争いに勝ってやるという俺の意気込みを返して！

「よお〜し！皆、二気度いい挨拶だったぞ！そんな皆はまずは球拾い！」

監督の言葉に俺を含めた新入り達は「えーっ！」と不満な声を上げる。

「はっはっは！いい反応だ！だけど冗談だ、冗談！」

どうやらいきなり雑用は避けられたらしい。

「だけど、皆で練習する以上は君達にも球拾いをしてもらう時があるからな！」

これは上級生も例外無く同じだ！」

結局は雑用をする事があるが新入り専門の仕事で無いだけマシンだな。

「それじゃあ希望ポジションに別れて練習を見学、参加していつでも



らうぞ！

まずは野球の楽しさを感じ取ってくれ！」

ニツと笑って言う監督の言葉に新入り達が元氣良く「はい！」と応える。

そして、待機していた上級生の案内に従い別れていく中で俺だけがそこに残った。

「お？確か…葉輪だったよな？」

「はい！パウプロって呼んでください！」

監督は俺の言葉に笑顔で頷く。

「元氣があつていいぞ！よろしくな、パウプロ！」

「はい！」

まずは好感触。

首脳陣へのアピールは大切だからな！

「今年のピッチャー志望はパウプロだけだからなあ…クリス！」

悩んでいた監督が1人の名前を呼ぶ。

「なんでしよう、監督？」

監督に呼ばれてやってきた人が小さな声で話す。

良く見るとクリスと呼ばれたこの人…目の色が違う？

外人さん？ハーフ？日本語でOK？

「パウプロに投手練習の見学、もしくは参加させてやってくれ。」

「…わかりました。」

「すまんが頼むぞ、今年は野手志望が多いからそっちをメインで見ないとならないんでな。」

だから、ブルペンのコーチによろしく言っておいてくれ。」

そう言っただけで監督は野手が練習をしているグラウンドに向かって行った。

え？この人、俺とそんなに年齢変わらないよね？

1つか2つ上ぐらいでしょ？

それなのに任せていいの？

監督の責任問題になったりしない？

俺がアレコレと考えているとクリスという人が歩き始める。

「ブルペンに行くぞ、ついてこい。」

そう言われたので俺も慌ててついていく。

しかし……この人、声が小さくて聞き取りづれえ。

そんな俺の思いは届かずにクリスという人は無言で歩き続ける。

そして、上級生のピッチャー達が投げ込みをするブルペンへと到着したのだった。

## 第7話

「まずはコーチに挨拶をしてこい。」

クリスという人に促されて俺はブルペンの横で投球練習を見ているコーチの所に向かった。

「おはようございます！今年入った葉輪 風路です！パワプロって呼んでください！」

ピッチャー志望なので指導をよろしくお願いします！」

コーチの所にたどり着いた俺は元気良くハキハキと挨拶をする。

ふふふ、完璧な挨拶だ！」

俺の挨拶が聞こえたのかコーチだけでなく投球練習をしていた人達も俺を見てきた。

ライバル達の注目を集める…。

いいね！俺と切磋琢磨しようぜ！

だが、先輩方は直ぐに投球練習に戻った。

オノーレ！」

「おう！元気があって結構！だがな、悪いが俺はお前達が怪我をしなないように見てるだけだ。」

コーチの言葉に俺は目が点になる。

「俺は監督と違って野球経験が無くてな…だからコーチとは名ばかりなんだ。」

そう言ってコーチは苦笑いする。

「だけど運動はそれなりにしていたからな、怪我には詳しいぞお」

コーチが今度はニツと笑う。

とても表情豊かな大人である。

「だからな、怪我をしそうな無理をしていたら止めるのがコーチとしての俺の役目なんだ。」

ビシッとコーチがサムズアップしたので俺もビシッと返す。

「おう！ノリがいいなパワプロ！」

「はっはっは！任せてください！」

そんな俺とコーチのやり取りをクリスという人が呆れたように見

ている。

「それじゃ、怪我をしないように楽しんで練習してくれ！」

「はいー！」

俺は元気良く返事をしてブルペンへと向くが先輩方が練習をしていて空いている場所がない。

「あく…煽っておいて悪いが見学だ、パワプロ。」

「うえーい…。」

という事で先輩方の投球練習を見ていく。

「あれってどのぐらい球速出てるんですか？」

「あく…きつきもいったが俺は野球経験無くてな。」

3人の先輩方が直球を投げ込んでいるのでどのぐらいの球速か知りたかったのだが、

残念ながらコーチはわからないようだ。

「…90km程だな」

俺とコーチが顔を見合わせて苦笑いしているとクリスという人が教えてくれた。

「早いですか？」

「…リトルリーグならばそこそこといった所だ。」

「へ〜。」

「だが、全国のエースクラスには100kmのフォーシームを投げる奴もいる。」

「フォーシーム？」

「日本の野球で一般的に直球と言われるものの事だ。」

その後、俺はクリスさんにボールを使ってフォーシームの握りを教えてもらった。

「おお！カッコいい！」

「…ピッチャー志望なのに知らなかったのか？」

「走り込みとキャッチボール！それとペッパをやりました！」

「…つまり素人か。」

俺の言葉にクリスさんがため息を吐く。

しょうがないやん！父さん達がまずは基礎だってそれ以上教えて

くれなかつたんだから！

それと、一応フォーシームぐらいは知ってるけど、今生では前世と微妙に

名称が違ったりするから下手に知っていると言う事ができないのだ。

例としてあげると相対性理論で有名なあの人は今生では『バレンシユタイン』という。

初めて知った時はそのカッコいい響きに俺の中の何かが騒いだものだ。

だが、おかげで今生での勉強をしつかりやる事になったがな！

閑話休題。

見学を始めて30分ぐらい経った頃、先輩方の投球練習が終わった。

「コーチ、そろそろ投げ込みは終わりにして打撃練習に行ってください。」

「ちゃんとアイシングしてから向かえよ。」

帽子を取って挨拶をした先輩方が小走りで去っていく。

すると、投球練習の相手をしていたキャッチャーの人達も去って行ってしまった。

「あれ？これじゃ俺、投げ込み出来ないんじゃない？」

「ハツハツハツハ、安心しろパワプロ！クリス、相手をしてやってくれ。」

クリスさんがコーチに小声で返事をするとうつ具をつけ始めた。

「コーチ、大丈夫なんですか？」

「ん？大丈夫さ、クリスのポジションはキャッチャーだからな。」

でも、先輩方の球を受けてませんでしたぞ？

「素人のお前よりはマシだから安心しろ。」

その言葉に振り返るとそこには防具を身につけたクリスさんがいた。

「まずは肩を温めるのにキャッチボールからだ。」

そう言われたのでクリスさんとキャッチボールをしていく。

俺は早く投げ込みをしたくてウズウズする。

「もういけます！・いけます！・早くやりましょう！」

「…はあ。」

テンションが上がる俺に反してクリスさんのテンションは下降気味だ。

もつと熱くなれよ！

クリスさんが座つたのを確認して俺もブルペンにあるマウンドへと上がる。

胸がドキドキしてきた！

さあ、行くぞ！

腕を振りかぶり、右足を踏み込んで左腕を振る。

すると、ボールは山なりの軌道でクリスさんの頭を越えて、後ろのフェンスにぶつかるのだった。

## 第8話☆

ガシャン!

ブルペンの後ろに立ててあるフェンスに俺が投げたボールがぶつかる。

「あるえ?」

イメージと違うボールに俺は首を傾げる。

だが、そんな俺の脳内に機械音が響く。

ピロン♪

吃驚して身体をビクツとさせる俺を見てコーチとクリスさんが首を傾げながら近寄ってくる。

「大丈夫か、パワプロ? 怪我でもしたか?」

「い、いえ! 大丈夫です! 頑丈なのが取り柄なので!」

「そうか? まあいきなりストライク投球なんて難しい事は言わないかな。まずは楽しめ。」

そう言つてコーチは俺の被っている帽子をポンツと軽く叩いてから離れていく。

クリスさんも俺に直接ボールを渡すと元の場所に戻っていった。

「なんの音だったんだ?」

俺はなんとなく能力を使って操作画面を開くとそこには1つの通知があった。

※基礎能力の表示と成長の一部が解放されました。

お?

通知されていた言葉が気になって俺は基礎能力のページを開く。

基礎能力

最高球速 : 60 km (所属カテゴリーでの成長限界110 km)

制球 : G

スタミナ : F

うわぁ…俺の能力低すぎ？

能力表示の詳細が気になるので目線でポチポチ操作する。

能力表示の詳細

- ・能力のランクは所属カテゴリーを参照して表示される。
- ・能力のランク評価は以下の物である。
- ・ G : 素人
- ・ F : 二軍控え
- ・ E : 二軍スタメン
- ・ D : 一軍控え
- ・ C : 一軍スタメン
- ・ B : 一軍主力
- ・ A : タイトル争いをする一流選手
- ・ S : 天才、怪物と呼ばれる超一流選手

どうやら俺の現在の能力は八段階評価の下の方らしい。

しかし、所属カテゴリーって事はシニアとかに上がったら能力の表示ランクが変わるって事？

うくん…よくわからん！

でも、取り合えずこの素人レベルの制球は成長させた方がいいだろうなぁ…。

俺はポチポチと制球にポイントを振っていく。

基礎能力

最高球速 : 60 km (※110 km)

制球 : F

スタミナ : F

よし！まずはこれで試してみよう！

「お待たせしました！次行きます！」



そう言っただけは大きく振りかぶって投げる。  
パシッ。

俺の投げたボールはホームベース手前辺りでバウンドしてからクリスさんのミットに入る。

「ノォ——！」

制球の能力を上げてても変わんないじゃん！

クリスさんがため息を吐きながらボールを投げ返してくる。

俺はボールを受けるともう一度投げ込む。

上に逸れたボールをクリスさんが飛び上がって捕る。

そんな感じで荒れすぎるボールを十球ほど投げた頃、クリスさんがボールを投げ返さずに

マウンドに歩いて近づいてきてこう言った。

「…ヘボピッチャー。」

「ガーン！」

俺はクリスさんの言葉に頭を抱えて身を振るオーバーリアクションで反応する。

ちくしょう！制球Fじゃあかんのか？それならEに…！

そんなふうを考えているとクリスさんにミットで軽く頭を叩かれる。

「うえい!？」

「落ち着いたか？」

俺はクリスさんの言葉に何度も頷く。

「投げてみてどうだった？」

「ボールをぜんぜんコントロール出来ません！」

「キャッチボールでも同じか？」

「いえ！キャッチボールなら結構狙った所に行きます！」

「そうか…なら足元を見てみる。」

「足元？」

俺はクリスさんの言葉に従い視線を下に向ける。

「何がある？」

「マウンドです！」

「マウンドを横から見てみる。」

俺はクリスさんの言葉に従ってマウンドを下りて横から見てみる。

「キャッチボールをしている時との違いはわかったか？」

「…マウンドの傾斜？」

「そうだ。それを考えて投げてみる。」

そう言っただけクリスさんが俺にボールを渡してくる。

「それと、リリースを安定させろ。」

「リリース？」

「投げる時にボールを放す場所だ。お前のリリースは一回毎にバラバラだぞ。」

そう言ったクリスさんはボールを受ける場所へと歩いていく。

傾斜にリリースか…。

俺は能力画面を開いて目を通していく。

### 特殊能力

『リリース○』

・ 投球毎の腕を振る角度とリリースポイントが安定する特殊能力である。

・ 使用している投球フォームに適したリリースポイントで投げる事が出来るようになる。

・ 上記の事から『球持ち○』との同時取得は出来ない。

おお！なんてタイムリーな能力だ！

俺は速攻でポチって能力を取得する。

平均で500程あったポイントが100程まで減ってしまったが気にしない。

ふふふ、行ける！

今度こそミットに投げ込んでやるぜ！

「行きますー！」

マウンドの傾斜を意識しながら大きく振りかぶってから踏み込んでいく。

左腕を振り始めると感覚的にどこで放せばいいのか直感でわかる。俺はその直感に従ってボールを放る。

すると、ボールはクリスさんに届かずにワンバウンドするのだった。

あるえ〜？

## 第9話

腕の振りやリリースの感触と違ったボールに俺は首を傾げる。  
すると、クリスさんが近づいてきた。

「葉輪、腕だけで投げてるぞ。」

「腕だけ？」

「ああ、しっかりと体重移動せずに腕だけで投げている。」

「体重移動？ちゃんと踏み込みましたぞ？」

「踏み込みの幅が大き過ぎだ。そのせいで倒れたりしないようにバランスを取る為に」

「身体が後ろに残ってしまっている。」

「ファッ!？」

「どうすればいいんですか先生!？」

「誰が先生だ…踏み込みの幅をもっと小さくしてみろ。」

クリスさんの言葉に疑問を持ったのでぶつけてみる。

「投手の人って踏み込み大きく無いですか？」

「確かに日本の投手は踏み込みが大きな選手が多い…だが、メジャーでは」

「逆に小さい選手の方が多いくらいだな。」

「メジャーとな？」

「先生!どういうことでしょうか!？」

「メジャーでは踏み込みの幅を小さく使って投球の際に膝を伸ばす動きをする。そうする事で」

「股関節を回して横回転の力を利用するんだ。」

「横回転？」

「ああ、対して日本の選手は縦回転で投球する事が多い。」

「先生!どっちがいいんでしょうか!？」

「人によりけりだな。」

「うえ〜い…。」

クリスさんの答えに俺は項垂れてしまう。

「今日始めたばかりでフォームの固まっていない今の内に色々試し

てみる。」

「おっすー！」

俺はクリス先生の言葉に元気よく返事をする。

「それと、あまり足を上げない方がコントロールが安定するとか聞いた事がある…」

合わせて試してみろ。」

そう言っつてクリスさんがボールを受ける場所に戻っていった。

さて、歩幅に足の高さか。

取り合えず1つ1つ試していくか！

俺は歩幅を小さくして投げてみる。

すると、クリスさんが目一杯手を上に伸ばしてギリギリ取れる場所

までコントロール出来た。

「おお！今のどうですか!？」

「…判定はボールだな。」

そういうことじゃないよ！

クリスさんが投げ返してくるボールを受け取って今度は足をあまり上げないで投げてみる。

ボールはクリスさんの顔の高さぐらいでミットに入った。

「よっしやー！どうですか!？」

「…さっきの球より遅いな。」

「ちくしょー——!」

それから俺はアレコレ試行錯誤しながら投球していく。

振りがぶると意識がそっちにいつてコントロールがよくないので振りがぶるのはやめた。

カツコいいんだけどなあ…振りがぶるの…。

歩幅を狭くして膝を伸ばすようにして投げると、リリースの感触がいい感じになつて

我ながらいいボールが行くのだが、コントロールがよろしくない。

足を上げないようにするとコントロールは比較的いいのだがボールの勢いが無い。

俺はこの二者択一に悩まされ続けた。

「うくん…。」

「葉輪、今日初めてにしては十分な成果だろう。そう欲張るな。」

「そうだぞ、クリスの言う通りだ。」

クリスさんとコーチがそう言ってくるが俺は納得いかない。

「それに、そろそろクリスに自分の練習をさせないとな。」

「…そうですね。」

「ワー！待って！後10球だけ！」

俺の言葉を受けてコーチとクリスさんは顔を見合わせるとお互いに頷く。

よ、よかった…まだ投げられる。

とは言うものの、このままでは満足な結果にはなりそうにない。

うくん…歩幅を狭くするフォームと足を上げないフォームのどちらを優先しよう？

ん？待てよ？

どっちもやるのって有りじゃね？

そこまで思い至ると不意に俺の頭に前世の記憶が甦る。

頭に浮かぶのはとある選手の投球フォーム。

俺と同じ左投げで現役メジャーリーガー最強の左腕と称された口サンゼルスのエース。

それが、俺が思い至った今の俺に最適な投球フォームだった。

よし！思い立ったら即行動だ！

脳裏に思い描くイメージに重ねるようにして投球動作に入る。

ボールを投げ込む瞬間に今までに無いほどの強い感触を指先に感じる。

すると、俺が投げ込んだボールはクリスさんのミットに吸い込まれるようにして入っていった。



後10球か…。

俺はため息を吐きながらキャッチャーボックスに座る。

葉輪 風路。

今年入ってきた新入りだ。

その新入りがブルペンのマウンドで悩んでいる。

あまりに下手くそだったので色々口を出してしまったが素直に聞いた事に逆に驚いた。

投手志望の者は色々癖の強い奴が多いので葉輪の素直さに驚いてしまったのだ。

もつとも、その葉輪もリアクションが大きかったりと癖が強いのだが…。

そんな事を考えていると葉輪の目に力が入ったのがわかる。

どうやら投げ込んでくるようだ。

俺が面を大きく見せるようにミットを構えると葉輪が動きだす。

ノーワインドアップで動き出して足を大きく上げる。

…葉輪が選択したのは制球よりも球威か。

だが、そこからの葉輪の投球フォームは俺の予測と違っていた。

大きく上げた足をゆっくり下ろす様にして軸足にしつかりと体重を乗せていく。

そして、足を下げていくと今度は前に滑る様にして体重移動を開始する。

小さく踏み出した足の膝を伸ばすようにして股関節を使いオーバースローで左腕を振る。

これまでのどこかぎこちなかった投球フォームに比べて遥かに洗練された葉輪の投球フォーム。

その投球フォームから投げられた一球は俺が今日教えたものが集約された最高の一球だった。

## 第10話

パンツ!

ミットの乾いた音が耳に心地良く響く。

今までと違う手応えに俺のテンションはマックスである。

「オオーツ！どうですか!」

マスクで見えないのでクリスさんの表情がわからない。

そんなクリスさんは無言でボールを投げ返しミットを構える。

あるえく?

手応えバツチりだったのに無言?

俺はボールを受け取ってから首を傾げるのだがその時、また機械音が聞こえてきた。

ピロン♪

お?

俺は反射的に操作画面を開く。

※『ノビ4』を取得しました。

※上記の能力取得により最高球速の成長限界が『105km』に変更されました。

※フォームの改善により最高球速が65kmに成長しました。

フアツ!?

俺は能力の詳細を確認する。

『ノビ4』

- ・フォーシームのノビが良くなる特殊能力である。
- ・打者の体感速度が上がる効果がある。
- ・上位能力に『ノビ5』最上位能力に『怪物』が存在する。

へえく、いい能力じゃん!

でも、なんで取得出来たんだ?



それに、なんで最高球速の成長限界が下がったんだ？  
俺は首を捻って考えるがサツパリわからない。

まあいいか！早く続きを投げよう！

その後、俺はクリスさんの構えるミットにドンドン投げ込んでいく。

だが、狙った場所であるミットにちゃんと投げられたのは、このフォームにしてからの最初の一球だけだった。



「みんなお疲れ！」

「「お疲れ様でした！」」

投げ込みを終えた後は初日ということもあって新入りである俺の練習は終わりになった。

まあ、投げ込みが終わって上がっていたテンションが下がると一気に疲労が来たので

それ以上の練習はきつかったからちようどよかったけどな。

「それじゃ、気を付けて帰れよー」

「「はい！」」

先にチームに入っている上級生達の練習はまだ続くらしい。

流石に強豪シニアの下部チームだけあって練習量が多いようだ。

「監督ー」

「お？パワプロか、どうした？」

俺は帰る前にマネージャーの事を監督に聞いた。

「そうだな…：近いうちにマネージャーの仕事の事を詳しく書いてパワプロに渡すから

お前からマネージャー志望の子に渡してくれるか？」

「それは募集中って事でいいんですか？」

「ああ、そうだな。でもマネージャーの仕事がイメージと違って野球を嫌いになられると

嫌だからな…：まあ、念の為に確認といったところだな。」

「わかりました。」

貴子ちゃんなら大抵の仕事は笑顔ですると思うけどな。

本当に野球が好きだし。

「そういうわけだ、頼んだぞパウプロ！」

「サー！ イエッサー！」

俺は監督に敬礼をしてからショルダーバッグを右肩に掛けて走り出す。

次の練習の日が楽しみで仕方がない。

俺は今日の事を貴子ちゃんや父さんにどう話そうかと考えながら走り続けた。



「やれやれ、元気な奴だ。」

今年の新入りで特に元気なパウプロの後ろ姿を眺めながら思う。  
う。

「監督。」

俺を呼ぶ小さな声に振り向くとそこにはクリスがいた。

「お？クリスか。今日はパウプロの事を頼んで悪かったな。」

「いえ…。」

滝川・クリス・優。

プロ野球選手を父親に持つ二世。

父親の影響なのかまだ4年生なのに6年生にも負けない技術を持った天才だ。

「それで、どうかしたのか？」

「葉輪の事ですが…。」

「パウプロがどうかしたのか？」

クリスは天才と言えるのだが、生来の小声のせいで話をする時はしっかりと耳を傾けないと

声が聞き取れないのが唯一の欠点だな。

「来月の紅白戦に使って貰えませんか？」

「紅白戦？夏のリトルリーグ選手権大会のメンバー選考を兼ねているんだぞ？」

「はい、わかっています。」

俺はクリスの言葉に驚く。

クリスは優れた技術と知識を持つからか、上級生であつても意見をズバズバ言うことがあるが

今までにこうして誰かを推薦した事など一度も無かつたのだ。

「パワプロはそれほどなのか？」

「いえ、ハッキリ言つて下手くそです。」

クリスのハッキリとした言い方に俺は転けそうになる。

「球速は遅く制球もまだまだです…ですがフォーシームの質は6年の先輩よりも上かと…。」

「ほう？」

俺はクリスの言葉でパワプロの投球に興味が沸いてきた。

「クリスがそう言うんならブルペンを見てみたかったな。」

俺は顎を擦りながら考えを巡らせる。

「よし、パワプロだけを鼻負する訳にはいかないからな。夏のレギュラーが決まったら

レギュラー以外でチームを作つて紅白戦をやらせてみるか。」

今年は野手志望の新入りが多かつたからメンバーの数は十分だからな。

「それと、紅白戦までパワプロをクリスに預けてもいいか？」

「俺は構いませんが…いいんですか？」

「俺が言わなくてもクリスは自分の練習をサボつたりしないだろう？」

俺の言葉にクリスは首を縦に振つて肯定する。

「それじゃ頼んだぞ。プロ野球の影響なのか本当に野手志望の子が多くてな…。」

トリプルスリーを達成した埼玉のプロ野球チームの遊撃手や、神戸の天才外野手の影響なのか

最近の子供達は野手志望が多くなっているのだ。

「俺の時代では投手志望が多かったんだけどなあ…。」

時代の流れを感じて一人言を溢すとクリスが首を傾げる。

「いや、なんでもない。それじゃ練習に戻ろうか。」

「はい。」

休憩をしている子達に練習再開の声を掛けながら歩いていく。

そして、今日もグラウンドに響き渡る元気な声と共に子供達と一緒に汗を流すのだった。

## 第1話

家に帰った俺はシャワーを浴びてから貴子ちゃんの家に向かう。  
汗臭いと言われたくないからな。

今日は俺がリトルリーグのチームに入って初めて本格的に野球を始めたお祝いをとの事で、

葉輪、藤原両家で食事をするのだ。

「フーくん、練習はどうだったの？」

「凄く楽しかった！」

貴子ちゃんが早速今日の事を聞いてきたので俺は身振りや手振りを加えて話していく。

「へく、いきなり練習とはなあ…俺の時は草むしりだったけどなあ。」

「そうそう、草むしりに球拾いに用具の出し入れとかして上級生の使い走りだったなあ。」

俺の話を聞いた両家の父親が昔を懐かしむように話していく。

「風路、お前の同期で投手志望は何人いるんだ？」

「俺だけだよ、父さん。」

俺がそう答えると両家の父親は目を見開いて驚く。

「これも時代の流れかねえ…。」

「そうだなあ…。」

両家の父親がしみじみとそう言い放つ。

「あ、貴子ちゃん。監督が今度マネージャーの仕事を纏めた紙をくれるから、それを見てから」

マネージャーになるか決めて欲しいって言ってたよ。」

「じゃあ、マネージャーは募集してるんだね、フーくん。」

貴子ちゃんが嬉しそうに笑顔になる。

いいね！美少女の幼馴染みがマネージャーとか最高やん！

その後も話をしていくのだが、練習で疲れていたのか俺は途中で寝落ちしてしまうのだった。



俺が丸亀リトルに入ってから1週間後、貴子ちゃんがマネージャーとしてチームに加入した。

マネージャーが加わったと聞いた野球少年達はテンションが馱々上がりである。

ええい！俺の目の黒い内は貴子ちゃんに手出しはさせんぞ！

そう気張った俺だったのだがそれは杞憂だったようだ。

というのもマネージャーの仕事として雑用やらをするのだが、そのおかげで練習時間が

増える事を野球少年達は喜んでいたからだ。

そんな貴子ちゃんは笑顔で黙々とマネージャーの仕事をして手が空いたら

俺の練習を見学している。

「ブーくん、頑張れ〜！」

フハハ！貴子ちゃんの応援で俺はテンションが有頂天である！

貴子ちゃんの視線を一人占めする俺は嫉妬の嵐に曝されるかと思いきや、

強豪の丸亀シニアの下部チームである丸亀リトルで本気でレギュラーを目指す野球少年達は、

練習に熱中し続けているのでそんな事にはならなかった。

まあ、今の年齢ぐらいだと色気より食い気だったりするからなあ…。

むしろ、そんな貴子ちゃんと俺をよく冷やかしてくる。

冷やかされた貴子ちゃんは顔を赤くして照れる。

美少女の照れ顔：プライスレス！

いいぞ！もつとやれ！

照れた貴子ちゃんを俺が「可愛い！」と称賛すると貴子ちゃんは頬を膨れさせながら

両手で俺の頬を横に引っ張って変顔にさせてくる。

解せぬ…。

そんな訳でマネージャーの仕事を丁寧に笑顔で元気良くやってい

る貴子ちゃんは、

丸亀リトルのマネージャーとして少しずつ受け入れられていつて  
いる状況だ。

俺の方はというと何故かクリスさんに付きつきりで指導されてい  
る。

あの、自分の練習は大丈夫ですか？

あ、大丈夫？そうですか。

基本的な練習としてグラウンドの外周の走り込みとベースランと  
言われる練習を

野手の人達とやった後は、クリスさんとブルペンでの投げ込みをし  
ている。

あの、守備練習とか打撃練習は？

え？監督の手が回らないから無理？

なんてこつたい！

そんなこんなで俺は貴子ちゃんとコーチが見守る中で、今日もブル  
ペンで

クリスさんと投げ込みである。

例の投球フォームで楽しく投げ込みをしていく。

大抵は思った通りに制球出来ないのだが時折ビシツと感覚的に嵌  
まる時があつて、

そういう時にはミットに吸い込まれるようにして納まるので気分  
がいい。

クリスさんに助言を貰いたいのだがクリスさん曰く、今はしつかり  
とフォームを固めろとの事。

という訳なので今は制球はあまり気にするなと言われた。

そうやって練習しているとブルペンに先輩方が来て隣に並んで投  
げる事もあるのだが、

その時に気づいた事が1つある。

他のキャッチャーの人よりもクリスさんの方が捕球の際にいい音  
を出すのだ。

フハハ！これが俺の実力か！

そんなふうに勘違いする程にクリスさんはいい音を出してボールを捕ってくれるのだ。

もつとも、俺と先輩が同時にボールを投げたら先輩の方が先に捕球されるから、

俺のボールが勝っているという訳じゃないのは一目瞭然だ。

その事に頭を抱えて身悶えしているとクリスさんがマウンドにやってきてこう言ってくれた。

「球速では負けてるが球質ならお前も捨てたものじゃない。」

…もつと素直に誉めてくれてもいいのよ？

そんな感じで練習を続けていって俺が丸亀リトルに入ってから1ヶ月が経った頃の事。

夏のリトルリーグ選手権大会のレギュラー選抜の紅白戦が行われたのだが、

残念ながら3年生は参加出来なかった。

なんでもリトルリーグの協会規定でチームに所属してから1年は公式戦に参加出来ないらしい。

リトルの公式戦はシニアと日程が被る事が多く試合のルールや流れを知らない者が参加すると、

試合進行が予想以上に遅れて大会運営に支障が出るからとの事。

その為、公式戦のレギュラー選抜の為の紅白戦には参加出来なかったのだ。

だが、ここで監督が粋な計らいを見せてくれた。

今年チームに入った3年生とレギュラー選抜に漏れた上級生で、紅白戦をすると発表してくれたのだ。

上級生にとっては控え選手の座を勝ち取る為のアピールの場であり、3年生にとっては

初めての試合形式を経験出来る場である。

レギュラーが確定した者達以外の目は燃え上がっている。

勿論、俺だって燃えている。

ここで燃えなかつたらいつ燃えるんだ！

監督が言うにはその紅白戦はグラウンドの貸し出しの関係で1週間



後との事。

試合の日が発表されて皆の目がキラキラと輝き出す。

尚も監督の話が続くので耳を傾けていく。

「今言った通りに控え選抜の紅白戦は1週間後だ！各自怪我に気を付けて練習しろよ！」

「はい！」

「よし！それじゃ今日の練習は終わりだ！解散！」

「お疲れ様でした！」

練習が終わって疲れているというのに皆が笑顔で走って帰っていく。

「フーくん！いいいよ試合だね！」

「おう！すっごい楽しみだよ、貴子ちゃん！」

「私も楽しみだよ、フーくん！」

俺と貴子ちゃんはテンション高くアレコレ喋りながら帰っていく。

そして1週間が経ち、俺は初めて野球の試合を経験するのだった。

## 第12話

「今日は1日グラウンドを貸しきってるから午前控え選抜の紅白戦、

午後には3年生の紅白戦をやっていくぞー！」

監督の言葉でチームの皆が歓声を上げる。

勿論、俺も一緒に歓声を上げているぞ。

うお——！

「それと、3年生は実際に試合をするのは初めてだから簡単に試合のルール確認をするぞ！」

上級生はもう知っていると思うから先にアップを始めていてくれ！」

監督の言葉を受けて控えの座を勝ち取るべく上級生達が動き出す。

俺達3年生はそのまま監督の言葉を待っている。

「よおーし！リトルリーグの試合のルールを簡単にだけど言っていくぞー！」

監督の言葉を要約していくところなる。

・リトルリーグの試合は硬式球を用いて1試合六回＋延長戦三回で行われる。

・延長戦はノーアウト1、2塁の状況から始まるタイブレーク方式である。

・延長戦で決着がつかなかった場合は交代人数が多く残っているチームの勝利である。

・交代人数残数が同じだった場合は先攻チームの勝利となる。

・球場のホームベースから60.95m以上の地点にフェンス等が設置されているが、

それをノーバウンドで打球が超えればホームランとなる。

・フェンスを打球がワンバウンドして超える、もしくはフェンス等の間に打球が

潜り込んだ場合等はエンタイトルツーベースとなる。

「リトルリーグの公式戦はそんな感じのルールで進められるぞ！詳しく

くはルールブックを

見るか、紅白戦を見ながら一緒に見学するレギュラーの上級生に聞いてくれ！」

そうやって監督は話を終わり紅白戦の準備に入る。

監督が試合の主審を務めるからだ。

他にも墨審にレギュラーの上級生が入る事になっている。

俺達3年生は午後のチームメンバーに別れてそれぞれのベンチで観戦と応援だ。

ちなみに貴子ちゃんはコーチと一緒にスコアラーをするようだ。

そして、控えの座を賭けて上級生の紅白戦が始まった。

誰一人欠けることなく気合い十分に試合が進んでいく。

「何か疑問はあるか、葉輪。」

試合が三回まで進んだ頃、上級生の紅白戦を見ながら隣に座るクリスさんがそうやってきた。

驚く事にクリスさんは4年生でありながらレギュラーの座を勝ち取ったのだ。

そういうわけでクリスさんがここにいるのだが、時折首を傾げていた俺を見て

クリスさんから話し掛けて来てくれたようだ。

「そうですね…まだ変化球を覚えてないなあつて。」

「なんだ、そんな事か…。」

クリスさんはそう言ってくるが上級生は普通に投げているので羨ましいのだ。

「葉輪、お前の公式戦出場機会は来年からだ。今は焦らずに基礎を磨け。」

「焦っているというか羨ましいんですけどよね。」

俺の言葉にクリスさんが「ぷっ」と笑う。

「そうか、羨ましいか…。」

クリスさんが笑いを収めるように1つ息を吐いてから話を続ける。

「それで、お前はどんな変化球を覚えたいんだ？」

クリスさんにそう言われて俺は予め考えていた事を答える。

「色々と考えたんですがムービング系はいららないかなと。」

「なるほど、オールドスタイルでいくわけか。」

「ダメですか?」

「いや、ダメではない。」

この1カ月クリスさんと一緒に練習してきたが、クリスさんは野球関係の話だと

結構饒舌になる所があるのがわかった。

「それで、どういった理由でそう決めたんだ?」

「三振の方がカッコいいからです!」

「…そうか。」

クリスさんがまるで困った奴だとしても言うように苦笑いをする。

「習得しようと思っっている球種は?」

「とりあえずはカーブですね。後はスライダーとチェンジアップを考えています。」

まずはカーブが物になってからでいいかなって。」

俺が選んだ球種は元にしたフォームの人と同じ球種だ。

「なるほど、お前のフォーシームの質を考えると悪くない選択だ。」

「おお!そうですか!」

「もつとも、お前が覚えられるかは別の話だけどな。」

「ちくしょー!」

その後、試合は進んで上級生の人達は笑顔の人と涙を流す人々に別れる。

監督の試合総評と激励の言葉を受けた上級生達を見届けて俺達はお昼ご飯の時間となる。

お昼ご飯を食べて1時間経ち腹もこなれてきた頃。

いよいよ俺の初めての試合の時がやってきたのだった。

## 第13話☆

「さあ、いよいよ3年生達の紅白戦だぞ！お前達！準備は出来ているか!？」

監督の言葉に俺達3年生はありったけの大声で返事をする。

「よおーし、いい返事だ！3年生の投手志望は。パワプロしかないから午前中に試合を

しなかったレギュラーにも投手をやってもらうからな！」

そんな監督の言葉に3年生から不満気な声上がる。

「お前達、公式戦に出れば年上と試合をする機会なんていくらでもあるんだぞ？」

そう言う監督の言葉に3年生達は声が詰まったように黙る。

「いきなり打ってみろなんて言わないさ。まずは試合を！野球を楽しめ！」

「はい！」

監督の言葉が終わり3年生は試合前のアップに入る。

さて、俺は試合が始まる前に能力でも確認しておこうかな。

基礎能力

最高球速：65 km (※105 km)

制球：F

スタミナ：F

基礎能力2

弾道：1

ミート：G

パワー：G

走力：E

肩力：F

守備：G

捕球：G

うへえ：投手の方はまだいいけど打者としての能力はほとんど素人レベルだな…。

まあ、練習はほとんど投げ込みしかやってなかったから仕方ないな！  
さて、特殊能力も確認しておくか。

特殊能力

『鉄腕』

『鉄人』

『身長高い』

『リリース○』

『ノビ4』

特殊能力の表示にある『身長高い』は小学校に入学した辺りで取得した特殊能力だ。

詳細はこんな感じ。

『身長高い』

- ・成長期に身長が伸びやすくなる体質になる特殊能力である。
- ・この特殊能力を取得すると最低でも180cm以上の身長になる事が出来る。

- ・伸び幅は成長期の栄養摂取と運動や睡眠が影響する。

といった具合の特殊能力だ。

これは幼稚園の頃に見つけた特殊能力で見つけた瞬間にポチッたんだけど、

その時はポイントが足らなくて小学校入学までポイントを貯めることになったんだ。

くくく、これで俺も高身長間違い無しだぜ！

もつとも、体質が変わる特殊能力のせいか熱が出て3日間寝込む事

になったけどな！

『鉄人』が無かったらどれだけ寝込む事になったかなんて考えたくもない…。

あの時は本当に両親や貴子ちゃんを心配させてしまい申し訳無い気持ちで一杯だったな。

そんな事を考えているとクリスさんがミットを手に俺の所にやってきた。

「葉輪、肩を暖めるのにキャッチボールをするぞ。」

クリスさんはこういつた気遣いをよくしてくれる。

流石は捕手といった所だな！

クリスさんとキャッチボールをして肩が暖まった頃、監督が紅白戦を始めると声を上げた。

「それじゃ、行ってきます！」

「ああ、楽しんでこい。」

クリスさんに挨拶をして俺は小走りで集合場所に行って整列する。

「3年生の紅白戦を始めろ！礼！」

「二！お願いします！」

試合開始の挨拶が終わって3年生達が元気よくグラウンドの各所に散っていく。

俺のチームは白組で後攻だから俺はマウンドへと向かう。

「ブーくん、頑張れ！」

コーチと一緒にスコアラーをしている貴子ちゃんの応援が聞こえてきた。

俺は貴子ちゃんに向かって笑顔で親指を立てる。

「パワープロ〜！早く投球練習を始めろ〜！」

主審を務める監督が笑いながら俺に催促してきた。

おっと、それじゃ始めますか。

俺はマウンドの感触を確認する様にフォーシームを投げていく。

俺自身コントロールが悪いのは自覚しているが、同じ3年生のキャッチャーは

ポロポロとボールを落としていた。

俺がキャッチャーが投げ返してくるボールを受け取る度に、同じ3年生の

キャッチャーが首を傾げている姿がある。

うん、すまん。コントロールが悪くて。

そんな感じで投球練習をしていって規定投球回数が終わって監督の声がグラウンドに響き渡る。

「プレイボール！」

監督の声で俺の後ろにいる同級生達の空気がピシッと引き締まるのがわかる。

俺はこれから試合が始まるんだなとテンションが上がってしまう。

笑顔が止まらない。

プレートに足をかけてノーワインドアップで動き始める。

足を大きく上げてゆつくりと下げていき滑るように踏み込む。

踏み込んだ足の膝を伸ばすようにして、股関節を使い横回転を利用して、

オーバースローで左腕をしつかりと振る。

フォーシームで投げられたボールはしつかりとバックスピンが掛かり進んでいく。

だが…。

あ、高めに浮いちやった。

それでも釣り球の効果があつたのか、相手が振ってくるバットの上を

すり抜ける様にしてボールが通過していく。

ついでにキャッチャーのミットも一緒に…。

「ぶっっっ！」

そしてキャッチャーのミットもすり抜けたボールは、主審をする監督の被るマスクに直撃したのだった。

やっちまった——！



## 第14話

「監督——！無事ですか!?傷は浅いですよ!」

第一球からやらかしてしまった俺は大声で監督の安否を心配する。「マスクに当たったから大丈夫だ!心配するなパウプロ!それと、不吉な言い方をするな!」

俺は嫁さんを貰うまで絶対に死なんからな!」

思わぬ所で監督の独身がわかってしまったグラウンドでは笑い声が響き渡る。

「元氣いいなお前ら!パウプロ!ぶつけた事を気にして腕が縮こまったら怒るからな!」

試合を思いつき楽しんでいけよ!」

「はい!」

出来た大人である監督の励ましに俺は大きな声で返事をする。

「よおーし!プレイ再開だ!」

監督にぶつかって地面に落ちたボールは、砂まみれになったので代わりのボールが投げ渡される。

俺は1つ息を吐いてから投球モーションに入っていく。

キャッチャーがミットを構える場所は一番の左バッターに対するアウトロー。

そこに向かって左腕を振る。

俺の指先から投げられたボールは少し内側に入ってボール一個分浮いてしまう。

ヤベツ!絶好球!?

そう思ったものの、振られたバットは低め一杯を通過する。

「ストライイク!」

キャッチャーがボールをポロツと落としてしまうがこれでツーストライイクだ。

落としたボールをキャッチャーが手で握ねて砂を落としてから俺に投げてくる。

ボールを受け取った俺は直ぐにプレートを踏んでキャッチャーを

見る。

キャッチャーの要求は真ん中高め。

一球目の事が頭を過るが監督の言葉を思い出して俺は笑う。

「野球、すっげえ楽しいですよ。監督！」

ノーワインドアップで投げられる一球はビシッと感覚が嵌まって狙い通りのコースへ。

パンツ！

「ストライク！バッターアウト！」

俺の記念すべき初試合は監督の顔への直撃と三振から始まったのだった。



いい球質だな。

主審を務めながら俺はそう思う。

キャッチャーの後ろという特等席でパウプロのボールを見た事で、以前にクリスが言っていた事が理解出来た。

1人目はバットに触れさせる事もさせずに三振。

まだ本格的に野球を始めたばかりの3年生に、あれを打てと言うのは酷だろう。

そして、それはパウプロのボールを受けるキャッチャーも同様だ。パウプロが投げるフォーシームを何度も捕り損なっている。

ノビのある球質に目測、予測を誤っているのだ。

パウプロはそんなキャッチャーのキャッチングに不満を見せていない。

むしろ自分が要求通りのコースに投げ込めないのが悪いと思っている様な感じだ。

ピッチャーとしての意識が高いのか大物なのか…。

いや、あの笑顔を見るに野球が楽しくて仕方ないんだろうな。

ああいう奴はドンドン成長していくものだ。

ケガをしないように指導者として注意していてやらないとな。

ケガと言えばキャッチャーもだ。

パウプロの球速はそれほど速くないとはいっても使っているボールは硬球だ。

パウプロの球をいい音をさせてキャッチング出来たのが嬉しいのか、

マスク越しでもわかる笑顔だが少しでも痛そうな素振りを見せたら交代させないとな。

マウンドではパウプロが元気良く野手に「ワンアウトー！」と声を掛けている。

それに野手も応えてグラウンドに子供達の声が響き渡る。

うんうん、いい雰囲気だ。

そんな声が響き渡る中で、ネクストバッタースークルに控えていた子が

バッターボックスに入ってくる。

新しく現れたバッターにパウプロが笑顔を見せる。

本当に野球を楽しそうにやる奴だ。

そんなパウプロだったが、クリスの評価の通りに制球はまだまだと言った所で

2人連続で歩かせてしまい、ワンアウト、1、2塁のピンチを招いてしまう。

ピンチの情況にマウンドには内野陣が集まってくるが、それでもパウプロは笑顔のままだった。

## 第15話

「タイム！」

キャッチャーが主審である監督にそう言つてマウンドに走つてくる。

なぜか内野陣まで一緒に集まってきた。

「まあワンアウト、1、2塁のピンチだからしょうがないか。」

俺はそう言いながら苦笑いをする。

さて、集まってきた皆にまずは謝るか。

俺は謝る事の出来る男だからな！

「皆、すまん！コントロールが悪くて連続で歩かせちゃった！」

俺の言葉に内野陣は顔を見合わせる。

「そう言うけど、笑つてるよね？」

確かに俺はピンチの状況だが笑っている。

そう言つてきたのは遊撃手の…えつと…？

「誰だっけ？」

「白河…まあ、一緒に練習してないから知らなくても仕方ないけど。」

白河か！お前の名前は忘れるまで忘れないぞ！

だって、人の名前を覚えるの苦手なんだもん。

「それで、何で笑つてるの？」

「いやあ、野球してるなあつて感じてさあ。」

俺の言葉に集まった内野陣はまた首を傾げる。

「それに、ピンチの場面をバシツと抑えたらカッコいいじゃん！」

「自分で招いたピンチだよね？」

「それは言わないであげて！」

そう言つて俺が頭を抱えて身を振ると内野陣からも笑い声が出てくる。

「さて、キャッチャーさんやい、ちよいと相談があるんだけど。」

「何？」

「コントロール悪くてコーナーを狙えないからさ、真ん中に投げて勝負したいんだけど。」

俺の言葉を聞いた内野陣が驚きの表情を浮かべる。

「えつと、俺はいいけど…」

「よっしゃ！そう言う訳だから内野陣の皆もよろしく！」

俺の言葉を聞いた内野陣がグローブを拳で叩いてパンツと音を出す。

「俺の方に打たせればアウトにしてあげるよ。」

「ハッハッハッ！白河！俺にそんな技術は無いぜ！」

「知ってる。」

「ちくしょ——！」

俺と白河のやり取りを見て内野陣が笑いながら守備位置へと戻っていく。

さあ、試合は始まったばかりだ。

楽しんで行くぜ！



「真ん中に集めて打たせてとるつもりか…。」

クリスがベンチで見学をしながら、キャッチャーのミットの位置を見てそう判断する。

「葉輪のコントロールを考えれば悪くない選択だ。」

下手にコーナーを狙っていつて押し出しになるよりはマシだろうとの考えだ。

クリスがそう考えているとマウンド上のパウプロが、ランナーを背負いながらも

ノーワインドアップの投球モーションに入っていく。

「…そのうちセットポジションを教えないとな。」

パウプロが投げたボールは高さはあっているが少し内よりになり絶好球となる。

だが、振られたバットは空を切る。

「明らかに振り遅れているな。」

クリスはベンチでこうして観察するのも悪くないが、やはり実際に

この手で

受けてみたいなど考える。

クリスがそう考えているとパウプロが2球目を投げる。すると、バッターはボールを打ち上げてしまった。

ショートフライでツーアウトだ。

続くバッターは2球で追い込むと今度はピッチャーフライを打ち上げてしまう。

「…これで交代か。」

なんと助言をしようかとクリスは考え始めるが、ここでパウプロがやらかしてしまう。

なんと、ピッチャーフライを落球してしまったのだ。

「やっちゃまった——！」

ランナーが埋まり満塁となったマウンドで、パウプロが叫んでいるのを見て

クリスはため息を1つ吐く。

「…守備も教えないとダメだな。」

クリスが頭を抱えながらそう呟く。

やらかしてしまったパウプロだがマウンドで1つ息を吐くと直ぐに笑顔に戻る。

その後、パウプロは次のバッターを空振り三振で抑えて初回のピンチを切り抜けたのだった。



なんとか切り抜けた1回に続く2回ではまたフォアボールでランナーを出したり、

送りバントをお手玉してバッターランナーもセーフになったりともまたピンチを招いてしまった。

そして、ツーアウトになってからまたバッターにピッチャーフライを打ち上げられたのだが、

高めに上がったからなのか遊撃手の白河が走ってきてピッチャー

フライを

ショートフライにしてみました。

ナイスだぜ！

そして続く3回。

またしてもフォアボールでランナーを出すもなんとかツーアウトまで辿り着く。

だが、俺はマウンドの上で肩で息をする程にバテていた。

「…きつつー」

そう言いながらも俺はマウンドの上で笑う。

前世ならさつきと風呂に入って寝たいとか思っている所だな。

「パワプロく、この回が終わったら交代だぞー頑張れ！」

主審をする監督の声に笑顔で手を振り応える。

すんません、声を上げるのがキツイっす…。

でも監督？こっちに肩入れしていいの？

よく見ると監督は相手チームにも声を掛けています。

おのれ！純情な少年の心を弄びおつて！

「フーくん！後1人だよ！頑張つて！」

フハハ！任せてくれ貴子ちゃん！

バテ過ぎて声を出して返事出来ないけどな！

俺は1つ大きく息を吐いてからプレートに足を掛ける。

「…俺には足りないものが多すぎる。」

球速、制球、スタミナ、変化球と考えればキリがない。

「あと、やりたいことも多すぎる。」

足りないものを考えるとそれを出来る様になりたいと思つてしま  
う。

「やりがいがありすぎるだろう、野球！」

多分、今の俺は今日一番の笑顔をしている筈だ。

俺はノーワインドアップで踏み込んで左腕を振る。

投じられたボールがミットへ納まり心地良い音を鳴らすと、俺はさ  
らに笑顔を深めるのだった。

## 第16話

「へー、初めての試合で失点0かあ…頑張ったなあ風路くん。」

紅白戦が終わって家に帰って来ると、フー君はシャワーを浴びてご飯を食べたら直ぐに寝てしまったわ。

そして、今は葉輪家に私の家族も集まって私が書いたスコアブックをお父さん達が見ている所ね。

「でも、三回でこれはちよつと球数が多いよなあ。」

「いやいや、葉輪さん。立派なもんですつて。」

おじ様（フーくんのお父さん）と私のお父さんがそう話している。

「風路の課題はコントロールかな？」

「変化球を覚えても面白そうですね。」

「変化球かあ…最近、日米野球で良く見るようになったムービング系がいいかな？」

「メジャーに渡った日本人投手がバッターを唸らせているあのフォークも捨てがたい。」

おじ様とお父さんがそんな風にフーくんが覚えるべき変化球の事を話している。

私はフーくんが覚えるつて言った変化球を知っている。

残念ね、お父さん達…フーくんはその変化球を覚えないわよ。

私はお父さん達が置いたスコアブックを手に取る。

スコアブックに目を通していくと私はフーくんの勇姿を思い出して微笑むのだった。



初めての試合を終えてからは野球が更に楽しく感じるようになった。

もっと上手くなりたいと強く思う。

さあ、クリスさん！もっと色々教えてください！

え？基礎が出来てから？



走り込み行つてきます！

そんな感じで日々が過ぎていき夏になるとリトルリーグの公式戦である選手権大会が始まる。

結果だけ言うと東京地区大会準決勝で松方リトルというチームに負けた。

来年、俺が投げてリベンジしてやるぜ！

選手権大会が終わると6年生の半分以上がチームを去っていく。

中学受験に専念するためらしい。

幾人か残つた6年生も秋の大会が終わるとチームを去っていった。

ちなみに春のリトルリーグ選抜大会の予選となる秋の大会は三回戦で負けた。

夏の大会で主力だった6年生が多く抜けたのが原因だろうな。

6年生全員がチームを去るとレギュラーの座を勝ち取ろうと皆が

練習に熱心になっていく。

俺だつて負けないぜ！

6年生が去つた事で監督の手が空いたのだ。

これで投げ込み以外の練習が出来るぜ！

さあ、監督！俺はどんな練習をやればいいんですか！？

え？俺は走り込みがメイン？

ならばチームの誰よりも走つてやるぜ！

そんな感じで走り続けて秋が過ぎ、冬を越え、春が来る。

俺は4年生、貴子ちゃんは5年生になると今年のレギュラー選抜の

紅白戦が始まるのだった。



「よおーしーそれじゃ夏の公式戦のレギュラーを発表するぞ！」

紅白戦が終わりグラウンドの後片付けを終えると解散前に監督がそう話し出した。

「先ずは野手からだな…キャッチャー！クリスマス！」

「はー！」

クリスさんが普段は聞くことのない大きな声で返事をする。

試合中の野手への声掛けとかも大きな声を出しているのになんでいつもは小声なんだろうな？

そんな事を考えていると監督の野手のレギュラー発表が終わり投手の発表となる。

「続けて投手のレギュラーを発表するぞ！投手のレギュラーだが…。」

監督がそう言って少し間を空ける。

こい！

俺の名前来い！

「うちは投手の人数が少ないから4年生以上の奴は全員レギュラーだ！少ないと言っても

今年の3年生は投手志望がいつもより多いけどな！ハッハッハッ！」

監督の言う通りに今年の3年生は投手志望が5人もいる。

間違いなく日本人野球選手のメジャー進出のキツカケとなったあのパイオニアの影響だろうな。

だって、3年生達がブルペンで投げる時のフォームが思いつきり腰を捻っているんだもん。

それはそれとして…。

監督！俺の名前を呼んでくれと意気込んでいた俺の思いを返して！

「そういう訳だから投手の皆はいつでもいけるように準備しておいてくれよ。」

「はい！」

俺を含めた投手達が気合いを入れて返事をする。

「レギュラーに選ばれなかった皆もチームの一員として大会では応援してくれよ！解散！」

「お疲れ様でした！」

監督の号令で解散すると俺はいつも通りに貴子ちゃんと一緒に帰っていく。

「フーくん、公式戦頑張ってたね！」

「おう！頑張るぜ！」

その後は貴子ちゃんと色々と話しながら歩いていく。

そして、時が過ぎて今年の夏のリトルリーグ選手権大会が始まる。

いよいよ俺が公式戦デビューをする時が近づいてきたのだ。

よっしゃ！やってやるぜ！

## 第17話☆

夏の公式戦が始まり、いよいよ俺のデビュー戦だと意気込んだものの

一回戦では俺の出番が無かった。

というのも、監督が決めた投手の役割のせいだ。

うちのチームの投手人数は俺を含めて5人。

6年生が2人、5年生が2人に4年生の俺が1人だ。

そう言った事情で監督が決めたそれぞれの役割はこういった感じだ。

6年のエースを先発にして、もう1人の6年生はクローザー。

5年生の2人は中盤から終盤の勝負所での中継ぎを担当。

そして、余った俺は第2先発をやる事になった。

公式戦未経験の俺に、難しいポジションである中継ぎや抑えは任せられないという事だな。

だが、消去法であれど先発が出来るのは嬉しい。

そう言う訳で二回戦の先発は俺である。

相手は江戸川リトルというチームらしい。

よっしゃ！やってやるぜ！



「クリスさん、どうしたんですか？」

試合前にクリスさんがメンバー表をジッと見ている。

「相手チームの捕手が気になってな……。」

「捕手？」

クリスさんの言うことが気になって俺はメンバー表を覗き込む。

「えっと、御幸 一也……4年生？」

「ああ、お前と同じ年だ。」

へー、4年生で試合に出るなんて御幸とかいうのもやるじゃないか！

「葉輪、江戸川リトルはそれほど有名なチームというわけではないが……油断するなよ?」

「オッスー!でも、俺はいつだって全力で野球を楽しむだけですよ!」  
俺の宣言にクリスさんが苦笑いをする。

そんな感じでクリスさんと話していると、相手チームのグラウンド練習が終わり

俺達の練習時間となった。

「葉輪、いくぞ。」

「はい!」

クリスさんに返事をしながらマウンドに向かう途中で、俺は自身の状態を確認する。

基礎能力

最高球速：75 km (※105 km)

制球：D

スタミナ：E

変化球：カーブ1 (※所属カテゴリーにおける成長限界：3)

これが今の俺の投手能力だ。

一年前から球速が10 km上がって、制球が2段階、スタミナが1段階成長した。

変化球は7段階ある中で1と最低の数値だが、ポイントが足りなくて現状これが精一杯なのだ。

そして、俺が覚えた変化球はカーブだ。

このカーブなのだが、カーブの種類は4種類しか無かった。

その4種類はこんな感じだ。

『カーブ』

『パワーカーブ』

『スローカーブ』

『ナツクルカーブ』

俺の拙い知識では『ドロップ』とかあった気がしたんだが、能力で覚えられる物は

この4種類だけだった。

どうやら今生では縦変化のカーブは『ドロップ』等の別の名称は無くくて

カーブで統一されているらしいのだ。

なので、速いカーブが『パワーカーブ』で遅いカーブが『スローカーブ』と

区別されているぐらいでドロップとかいう呼び方はない。

後は握りがハッキリと違う『ナックルカーブ』があるぐらいだ。

投手能力の確認はこのぐらいにして、次は野手能力の確認をしよう。

基礎能力2

弾道：I

ミート：G

パワー：G

走力：E

肩力：E

守備：F

捕球：F

うん、野手能力は大して成長していないんだ…。

だって！ノックとか打撃練習をしないで、投げ込みと走り込みばかりだったんだもん！

そのせいで野手能力にまで回すポイントがほとんど無かったのだ。こんな所が現状の俺の能力である。

「葉輪」

おっと、クリスさんが座ってボールを要求している。

俺はクリスさんのミット目掛けてフォーシームを投げ込む。

一年前に比べてずっとよくなったコントロールは、狙い場所からボール2つ分ずれたぐらいで

クリスさんのミットに納まった。

パンツ！

いい音をさせて捕球してくれるクリスさんのキャッチングに、俺は自然と笑顔になる。

そして俺達、丸亀リトルのグラウンド練習も終わって両チームが整列をする時間となる。

俺は早く試合がしたいとウズウズしながら挨拶をするのだった。

「「お願いしますー！」」

## 第18話

いよいよ俺の公式戦デビューとなったが、うちのチームが先行なので

今はベンチで応援をしている所だ。

一番の左バッターは緩い球を引っかけてセカンドゴロ。

二番の右バッターは速い球を打ち上げてサードフライ。

あつという間にツーアウトである。

だが、三番の6年生バッターが三遊間を抜くシングルヒットで出塁する。

そして、四番のクリスさんに打順が回る。

カキーン!

クリスさんは緩い球を狙いすました様に強く叩くと打球が外野へと飛んでいく。

そして、その打球は外野フェンスをノーバウンドで越えてホームランとなった。

クリスさんがゆっくりとベースを回っていく。

その姿にうちのチームのベンチは総立ちで声を上げる。

もちろん、先制点を取ってもらった俺も一緒に声を上げる。

うお——!

ホームインしたクリスさんがベンチに戻ってきてて防具をつけ始めた。

「クリスさん! ナイスホームランです!」

「葉輪か…絶好球だったからな。」

クリスさんは防具をつけながらクールに切り返してくる。

「何を打ったんですか?」

「真ん中に抜けたチェンジアップだな。お前もコントロールには気をつけろよ?」

「はい!」

その後は、五番の6年生がファーストゴロでうちのチームの一回の攻撃は終わりとなる。



いよいよ俺の出番だ！

俺は、逸る気持ちを抑えて小走りでマウンドに向かう。

マウンドにたどり着きプレートに足を乗せるとニヤニヤが止まらない。

クリスさんがキャッチャーボックスに座ったので投球練習を始める。

ボールとマウンドの感触を確かめる様にフォーシームを投げ込む。

…いい感じだ。

試合前のグラウンド練習では嵌まりきらなかつた感覚がビシツと指先に返ってくる。

今日は絶好調なのかもしれない。

投球練習が終わり、内野のボール回しが済むと一番バッターがバツターボックスに入る。

審判の合図で試合が動き出す。

クリスさんのサインに頷き、俺は投球モーションに入る。

公式戦デビューの第一球目はフォーシーム。

相手チームの一番の左バッターの膝元一杯に目掛けて左腕を振る。

「ストライク——ク——」

ミットの音をかきけす様に審判のコールが告げられると、俺は震えるほど歓喜したのだった。



マウンドの上で葉輪が歯を見せて笑っている。

そんな葉輪にボールを投げると、葉輪は間をおかずに構える。

「やれやれ…。」

俺はマスクの中で呟く。

宣言通りに全力で野球を楽しんでいる葉輪に苦笑いするしかない。

「少しは緊張するものだろう…。」

そう言いながらも俺はサインを出してミットを構える。

要求したのは内角高めへのフォーシーム。

葉輪がサインに頷き投球モーションに入る。

投げられたボールは、ボール1つ分真ん中に寄り、ボール2つ分低い。

やや甘めのボールだが、ノビのある球質のフォーシームがバットの上を通過する。

「ストライクツー！」

審判のコールにバッターがタイムを取って打席を外す。

そして、打席の外で数回の素振りを始めた。

俺はボールを葉輪に投げながら次の一球を考える。

バッターの素振りを見る限り、狙いはフォーシームだろう。

カーブでタイミングを外すか？

バッターがヘルメットに手をやりながらバッターボックスに入ってくる。

…押しきるか。

俺はサインを出して外角低めにミットを構える。

そして、葉輪の投じたフォーシームはミットに吸い込まれる様にして入ってきた。

バシッ！

「ストライク——クー！バッターアウト！」

見逃し三振の結果に相手チームのバッターが審判を見るが、黙ってバッターボックスを去る。

そして、ベンチに戻る前に次のバッターに何かを耳打ちしていた。

それを横目で見ながら俺はリードを考えていく。

まだ試合が始まって数球しか受けていないが、今日の葉輪はいつもよりもコントロールがいい。

これなら色々と出来そうだ。

マウンドで葉輪が「ワンアウト——！」と声を出している。

初めての公式戦だというのに堂々とした奴だ。

「初めての公式戦か…勝たせてやりたいな。」

2番バッターがバッターボックスに入ると葉輪がサインを覗き込

んでくる。

俺がサインを出すと、葉輪は直ぐに頷く。

外に寄ってミットを構えると、葉輪が投球モーションに入る。

そして、葉輪が投じたボールがミットに納まると、審判がストライクをコールするのだった。

## 第19話

一回の裏、俺は三者三振で完璧なスタートをきった。

そして、二回の表のうちのチームの攻撃ではツーアウト、一塁の場で俺の出番となる。

だが…。

「ストライク…バッターアウト！」

空振り三振しましたが、何か？

素人レベルのミートとパワーでどうにか出来るわけないだろ！

「パワプロ…バッティングは気にするな！ピッチングをしつかり頼むぞ！」

「サー！イエッサー！」

監督の言葉に俺は元気よく返事をする。

そういうわけで二回の裏、相手チームの四番をサードフライ、五番を三振にして

ツーアウトまでこぎつけた。

そして、六番をカーブでボテボテのピッチャーゴロに打ち取るのだが、そこで俺はお手玉を

してしまい、俺のエラーで六番が出塁してしまう。

「やっちゃった——！」

あの紅白戦からバント処理はそれなりに練習したんだけど、ノックなんかはほとんど

やっていないからか、打球処理はいまだに素人レベルなのである。

「気にするな、葉輪。」

「はい！」

クリスさんがタイムを取ってマウンドまで来てくれた。

「そういえば、次のバッターはクリスさんが気にしてた奴ですよ？」

「ああ…だが、お前はいつも通りに投げればいい。」

「はい！」

そして、クリスさんがキャッチャーボックスに戻っていき試合が再開される。

左打席に立った相手を見る。

えつと…御幸…だったっけ？

名前を思い出そうとするがうろ覚えである。

まあ、いいか！

俺はクリスさんのサインに頷いて投球モーションに入る。

一球目はフォーシームをアウトローに。

「ストライク——ク——」

よし！見逃しでまずはワンストライクだ！

次の要求は？

俺はクリスさんのサインを覗き込む。

お？次もフォーシームか！

俺はサインに頷いて投げる。

今度のコースはアウトハイだ。

相手は大きな空振りをする。

「ストライクツ——」

フハハ！このまま押しきるぜ！

ボールとバットがかなり離れていたの、俺は次もフォーシームのサインが出ると思っていた。

だが、クリスさんが要求してきたのはカーブだった。

あるえ？

どういうこと？

うくん…まあ、いいか！

アレコレ考えてもわからんから、後でクリスさんに聞こう！  
そう思いきって、俺はカーブ投げる。

だが…。

ヤベツ！真ん中にいつちまった！

緩い変化球がど真ん中の甘い所に向かう。

でも…。

「ストライクスリー——バッターアウト——チェンジ！」

相手バッターはバットを振らずにど真ん中を見逃したのだ。  
うえい!?

なんで？なんで絶好球を見逃したのん？

俺は無事に二回を抑えても首を傾げながらベンチに戻るのだった。



「たはっ、あの空振りは大げさだったかな。」

俺はベンチで防具をつけながらさっきの打席を思い出す。

「クリスさんか…バツターの反応をよく見てる事で…。」

うちの打線がまともに捉えられない、あのフォーシームを叩いて流れを呼び込もうと考えた。

だが、その思惑は丸亀リトルのキャッチャー、クリスさんに読まれてしまった。

「二球目で球筋を見て、二球目の空振りでタイミングを計りながら次の  
の

フォーシームを誘ったけど…ダメだったな。」

俺は自分の言葉に苦笑いをする。

「クリスさん…次は打たせて貰いますよ」

俺はキャッチャーボックスに向かいながらそう呟く。

そして三回から始まる丸亀リトルの上位打線を、どう抑えるのか考えていくのだった。



「え？あの空振りって誘いだったんですか？」

ベンチに戻った俺は、クリスさんに先程の事を聞いていた。

「ああ、おそらくだな。」

「ふえ〜…。」

「葉輪、俺の読みではあの打者は『決め打ち』をする奴だ。」

「決め打ち？」

「狙い球を決めて打つ事だな。」

「どういう事ですか？」

「例えだが、狙い球以外は全部見逃すと言えば、あのカーブの見送りにも納得がいくだろう?」

俺はクリスさんの言葉に何度も頷く。

「もつとも、それは極端な例だけだな。」

そう言いながら、クリスさんはベンチの前の方へ席を移す。

「緩急による揺さぶりが効きにくい相手だが…やりようはある。任せ  
ておけ。」

「はい!」

俺が返事をする、クリスさんはジッと相手の捕手の観察を始めた。

これが駆け引きかと思うと、俺はますます野球を楽しく感じてきた。

ああ——!早く投げてえ——!

味方打線には打って欲しいけど早く投げたい。

俺はそんなジレンマに頭を抱えて身を振る。

そんな俺を見ていた貴子ちゃんは、口元を押さえてクスクスと笑うのだった。

## 第20話

三回は両チーム共に三者凡退。

そして、四回のうちのチームの攻撃では、先頭打者のクリスさんがツーベースヒットで出塁

するものの、後続が続かずに追加点とはならなかった。

四回裏は、予定では俺の最後の投球回となっていたので、一球一球楽しむ様に投げた。

結果は三振を一つ含む三者凡退だった。

「パワプロ、どうする? 狙うか?」

五回表のうちの攻撃、打順は八番からで次のバッターは俺だ。

なので、ネクストバッターサークルに行こうとしたら、監督にそう呼び止められた。

「うえい? 狙うって何をですか?」

「気づいてないのか?」

俺は監督の言葉に頷く。

「パワプロ、お前、ここまでノーヒットピッチングだろう?」

「…そういえば、そうですね。」

言われて初めて気づいた。

「そこでだ、ノーヒットノーランを狙わないか?」

「ノーヒット…ノーラン!」

え? それって、あれだよな!?

「ノーヒットノーランって…ノーヒットノーランですよね!」

「おう! そうだ!」

「狙っていいんですか!」

「おう! 狙え狙え!」

そう言って監督がニツと笑う。

「パワプロのここまでの球数は44球だ。4年生と5年生は75球の球数制限があるが、

残り二回で30球投げられるなら十分狙えるだろう?」

監督の言う通りにリトルリーグでは球数制限がある。



ちなみに6年生は85球が上限だ。

但し、相手バッターと勝負の途中で球数制限に達しても、その勝負が終わるまでは投げられる。

「狙います！やっつけてやりますよー！」

「はっはっはー！そうか、やっつけてやれ！パワプロ！」

「はいー！」

俺は今日一番のテンションの高さでネクストバッターサークルに向かう。

「あ、パワプロ！ノーノーを狙うんだから、体力温存でバットを振るなよー。」

ガクツ。

俺は監督の一言で転けそうになる。

監督！俺のやる気を返して！

その後、打つ気が無いのがバレバレだったのか、三球三振でベンチに戻る事になる。

そして五回が始まると、俺は誰よりも早くグラウンドに向かうのだった。



マウンドに立って、さあ早く！と意気込むものの、クリスさんがマウンドにやってきて

少し話をする事になった。

「はい？新しいサインですか？」

マウンドにやってきたクリスさんがそう提案してきたのだ。

「そうだ。」

そう言っつてクリスさんは俺に耳打ちをしてくる。

「…というわけだ。わかったか、葉輪？」

「よくわからないけど、わかりましたー！」

俺はクリスさんの言葉に敬礼しながらそう答える。

そんな俺を見て、クリスさんは苦笑いだ。

「葉輪、この試合の山場は、この回の最後の打者だ。」

「えつと、御幸?とかいう奴ですよね?」

「そうだ、そこを越えればノーヒットノーランも見えてくる。」

俺はクリスさんの言葉に笑顔になる。

「俺を信じて投げてこい。」

「はい!お願いします!」

クリスさんが、ミットで軽く俺の胸を叩いてからキャッチャーボックスに戻っていく。

「プレイ!」

審判の合図がグラウンドに響くと、クリスさんがサインを出す。

俺は首を横に振る。

そして、出し直されたサインに頷くと、俺はミット目掛けてカーブを投げるのだった。



「お?首を横に振った?」

この回の三人目のバッターなのでまだベンチにいるが、相手バッターリーの観察は欠かさない。

「あのピッチャー…欲でも出たのか?」

俺は、ピッチャーはどこか癖が強かったり、我儘な奴が多いと思っている。

だから、ここまでノーヒットピッチングを続けた事で、あのピッチャーに欲が出たと思った。

「前の回の打席…明らかに打つ気が無かったからな…。」

この回の先頭打者がアウトになったので、俺はネクストバッターサークルに向かう。

「…またカーブ?」

ピッチャーが首を横に振ると、次はカーブを投げて来ている。

「大した変化でもないのに…なんで投げるんだ?」

ピッチャーがまた首を横に振ってカーブを投げる。

「あいつ…俺と同じ年だよな？」

同じ4年生…。

「覚えてたての変化球を使いたいのか？」

そう言葉にするが、どうもしっくり来ない。

「どちらにしろ、クリスさんのリードに逆らっているのは確かだな。」

このままノーヒットノーランをやられるのは面白くないし、一打で流れを変えられるかもしれない。

「悪いけど、狙わせてもらうぜ。」

前のバッターが、首を横に振ってからのカーブで内野ゴロに打ち取られる。

そして、俺の打順が回ってきた。

「野球はツーアウトからってね。」

左打席に入ってバットを構える。

一球目、ピッチャーは首を横に振る。

そして、次のサインに頷くとカーブを投げてきた。

俺は球筋を確認する為に見送る。

これで、ワンストライク。

二球目、素直に頷いて投げて来たのはフォーシーム。

アウトローに来たフォーシームを見送る。

下手にスイングを見せると、前の打席の様に狙いがバレるかもしれないからな。

判定はストライク…これでツーストライク。

三球目、素直に頷いてフォーシームを投げてくる。

これはアウトハイに外れてボール。

カウントはワンボール、ツーストライクのバッティングカウント。

四球目、ピッチャーは首を横に振る。

…ここだ！

俺は集中力を高める。

狙いは次のカーブ！

思いつき叩く！

ピッチャーが、ノーwindアップの独特のフォームでボールを投

げ込んでくる。

俺はカーブにタイミングを合わせて踏み込む。

すると、ピッチャーの投げたボールは、俺の膝元にノビのある球筋で入り込んでくる。

「…は？」

バシッ！

俺の耳にミットの音が響く。

そして…。

「ストライーク！バッターアウト！チェンジ！」

グラウンドに響く審判のコールに俺は呆然とした。

そして、無意識の内にクリスさんを見る。

すると、マスクの奥のクリスさんの表情は、確かに笑っている様に見える。

クリスさんは、何事も無かった様にキャッチングしたボールを審判に渡すと、雄叫びを上げる

ピッチャーの胸を、ミットで軽く叩いてベンチに戻っていく。

「…たはっ、やられた。」

## 第21話

パンツ!

クリスさんのミットの音がグラウンドに響き渡る。

そして…。

「ストライク——ク！バッターアウト！ゲームセット！」

審判が試合終了を告げる。

俺は、初めての公式戦でノーヒットノーランを達成する事が出来た。

「…よっしゃ——!!」

俺は雄叫びを上げながら、両手を天に突き上げるガッツポーズを取る。

すると、チームメイトが俺を祝福するべく走って集まってきた。

「やったな！パワプロ！」

皆がバシバシと俺の背中を叩いて激励してくる。

痛いって!

だが、その痛みも興奮を煽るものにしかならない。

「丸亀リトル！整列を！」

おっと、試合終了の挨拶をしないとな!

「2-0で丸亀リトルの勝利！礼！」

「ありがとうございました！」

挨拶が終わると、チームメイトがまた俺の背中を叩こうとワラワラ集まってくる。

やめて！紅葉が出来る場所なんてもうないのよ!?

俺は逃げる様にして皆と一緒に相手ベンチに挨拶に向かう。

「ありがとうございました！」

挨拶をすると、江戸川リトルの監督の話を一言二言聞いてから自チームのベンチに戻る。

「よおーし！お前ら！よくやった！」

「はい！」

「疲れてるだろうから細かい事は後日だ！でも、これだけは先に言う

ぞー！」

監督が少し溜めを作ってから言葉を発する。

「パワープロ！おめでとうー！」

「ありがとうございますー！」

監督の言葉にチームメイトが沸き立つ。

このまま皆と騒いでいたいのが、次の試合が控えているのでベンチを空けないといけない。

なので撤収作業を始めるのだが、そこに江戸川リトルの選手の1人がやってきた。

「クリスさん、今日は負けました。」

そう言って、その少年はクリスさんに手を差し出す。

クリスさんも手を差し出して握手をする。

「御幸…だったな？」

「はいー！」

「初回の失投以外、うちの打線はそっちのピッチャーの球を捉えきれなかった…いいリードだ。」

「たはっ、こっちはノーノーをやられましたけどね。」

クリスさんの言葉に御幸は苦笑いをしている。

「クリスさん、五回にピッチャーが首を横に振ったの…あれ、サインですよね？」

「さて、どうだったかな？」

「うわあ、性格悪いっすね。」

「キャッチャーにとっては誉め言葉だな。」

「そうですね。」

そんな会話をする2人は一緒に笑っている。

同じキャッチャーとして、通じ合う何かがあるのかな？

「次は勝たせてもらいますよ。」

ニツと笑いながらそう言った御幸は、走って帰っていった。

これは、あれか？

ライバル関係成立って奴か!?

熱い展開だな！

俺も負けないぞ！

その後、家に帰りついた俺は両親と藤原家のおじさん、おばさんに試合結果を報告する。

両親は大いに喜んでくれて、お祝いにステーキを焼いてくれた。

ひゃっほい♪

食事をしながら貴子ちゃんと、今日の試合の事を色々と話している。

だが、腹が膨れると急激に眠気が襲って来たので、俺は先に寝ることにした。

みんな、おやすみ。



「かー！仕事休んで見に行けばよかったなあ！」

フーくんが先に寝ると、おじ様がそう話す。

「貴子、風路くんはどうだった？」

「カツコ良かったよ、お父さん。」

私の答えを聞いたお父さんが「違う、そうじゃない」って言ってる。

野球は好きだけど、まだそこまで詳しいわけじゃないから、上手く説明できないわ。

「しかし、風路がエラーをしなきゃパーフェクトかあ…。」

「まあまあ、葉輪さん。今は風路くんを誉めてあげましょうよ。」

うん！ちゃんとフーくんを誉めてあげなきゃダメよ、おじ様！

「そうですね。じゃあ、乾杯しましょうか！」

「カンパ——イ！」

そう言ってお父さん達はお酒を飲み始めた。

私はスコアブックを見ながらフーくんのガッツポーズを思い出す。フーくんの本当に嬉しそうな、楽しそうなあの笑顔を思い出すと、私は顔が熱くなってしまった。

## 第22話

試合の翌日、目を覚ました俺は能力画面を見てメチャクチャ吃驚した。

なんと、昨日の試合だけで3カ月分の経験ポイントを得ていたからだ。

これがノーヒットノーランのおかげなのかわからないが、

このポイントを使えば一回り成長する事が出来る。

だけど、俺は大会期間中の成長はしない事にした。

理由としては、能力を上げると感覚が変わってしまうからだ。

その感覚に慣れるには少し時間が掛かる。

なので成長は大会終了まで見送りだ。

さて、丸亀リトルは三回戦にも勝って準決勝となる四回戦に駒を進めた。

相手は因縁の松方リトルだ。

この試合の先発として俺が投げたのだが、江戸川リトルの時と違って

コントロールが定まらなかった。

いや、本来の自分のコントロールになったと言った方が正しい。

なのでボールは度々甘いコースに行ってしまう。

強豪の松方リトルの打線がそんなボールを見逃す筈もなく、アツサリとヒットを打たれる。

そして、出塁をすれば走って来たりと揺さぶりをかけてくるのだ。

まだクイックの出来ない俺では松方リトルの足を止める事は出来ない。

おかげで毎回の様に得点圏にランナーを背負って投球する事になる。

もつとも、そのぐらいで腕が縮こまる程俺の心は繊細ではない。

むしろ、その状況をビシッと抑えればヒーローだとウキウキで投げていく。

仕方ないやん！クイック出来へんのやから！



コントロールが定まらない事で球数は嵩むが、要所では抑えて得点を与えない。

そうやってなんとか三回まで無失点で抑えてきたのだが、俺が投げる最後の回である四回で、

俺は人生初めてとなるホームランを打たれたのだった。



「おう、よく飛んだなあ。」

俺はレフト方向を見ながらそう言う。

ツーランホームランを打ったバッターが拳を上げてベースを回っている。

「葉輪。」

クリスさんがマウンドにやってきた。

「すいません、クリスさん。カーブが真ん中に行っちゃいました。」

「気にするな…いや、言うまでもなく大丈夫そうだな。」

「まあ、悔しいですけど。それでもチームはまだ勝ってますからね。」

そう、現在は3-2で勝っているのだ。

そう言う俺に、クリスさんがミットで軽く胸を叩いてくる。

「この回までだ。残りは抑えていくぞ。」

「はい。」

俺が元氣よく返事をすると、クリスさんがキャッチャーボックスに戻っていく。

俺は気持ちをリセットしようと一息を吐く。

平然としているように見せたつもりだけど、実際はメチャクチャ悔しいのだ。

「失投を打たれるのはスッゲー悔しいんだな…。」

俺はロージンバッグを左手の上で軽くポンポンとして滑り止めをつける。

「大会が終わったらコントロールを中心に成長させるか。」

フーッと息を吹いて余計な滑り止めを左手から落とす。

目を相手ベンチに向けるとさっきのホームランで勢い付いているようだ。

「いいね！でも、俺も負けないぜ！」

ニツといつも通りに笑顔を浮かべるとクリスさんのサインを覗き込む。

そして、サインに頷いてクリスさんのミットに目掛けてボールを投げ込むのだった。



四回戦の松方リトルとの試合。

結果はうちのチームの負けとなってしまった。

俺は四回を2失点でマウンドを降りたのだが、松方リトルも強豪の意地とでも言うべき

猛攻を見せて最終回である六回に追い付かれてしまった。

そして、延長戦に入るとハッキリと明暗が別れる。

追いついた勢いのある松方リトルは、延長のタイブレークルールによる

ノーアウト、1、2塁から始まる状況で打順はクリーンナップから。対してうちのチームは七番からの下位打線だ。

延長戦の七回でキツチリとランナーを帰した松方リトルに軍配が上った。

これでうちのチームの今年の公式戦は終わりとなった。

この大会で6年生の投手がいなくなるのだ。

そうになると、うちのチームで公式戦に出れる投手は3人だけとなる。

無理はさせられないと監督が秋の大会に出ない事を明言した。

俺達は来年のリベンジを誓って練習を続けていく。

そして俺は5年生、貴子ちゃんが6年生になって夏が来る。

夏のリトルリーグ選手権大会。

俺は5年生ながらエースとして大会に挑む事になるのだった。

## 第23話☆

俺は試合の前に自身の能力を確認していた。

基礎能力

最高球速：90 km (※105 km)

制球：A

スタミナ：D

変化球：カーブ3 (※3)

うん、投手能力はいい感じに成長出来たな。  
続けて野手能力も確認するか。

基礎能力2

弾道：1

ミート：E

パワー：F

走力：C

肩力：C

守備：D

捕球：D

打撃以外は一軍レベルにまで成長出来た。

クリスさんからも及第点を貰えたので嬉しかったぜ！

「行くぞ、葉輪。」

おっと、整列しないとな。

やってやるぜ！



5年生になっての夏のリトルリーグ選手権大会は順調に勝ち進ん

だ。

一回戦目は被安打1の完封。

三回戦目はあの御幸がいる江戸川リトルとの試合で被安打2で完封だ。

ちなみに御幸は無安打で抑えたぜ！

そして、決勝で松方リトルとの試合に先発。

結果は…うちのチームの勝ちだ！

やっとりベンジ出来たぜ！

俺の投球内容は被安打4、1失点の完投勝利だ！

そして俺達、丸亀リトルは全国大会に駒を進めたんだ。



全国大会でも俺達は順調に勝ち進んだ。

その勝ち進んでいく中でも、クリスさんは他を圧倒する活躍をしていった。

ランナー1塁の状況で投手の球を捕ったクリスさんは、ランナーの帰塁が遅いのを見ると

矢の様な送球でアウトを取る。

他にも盗塁を何度も阻止するし、打撃では三冠王争いをしたりと、おかしいと言える

レベルでの活躍だ。

そして、全国大会となると記者の人もいたりしてクリスさんに取材をしていた。

…俺の所にも来ていいのよ？

そう思ったのだが、残念ながら今大会中に記者さんは俺の所にこなかった。

ちくしょ——！

そして、遂に全国大会の決勝にまで勝ち進んだ俺達は、夏のリトルリーグ選手権大会の

最後の試合に挑むのだった。

◆ 「ストライカー・バッターアウト！ゲームセット！」  
審判のコールが球場に響き渡る。

「…よっしゃ——！」

俺はマウンドで雄叫びをあげる。

チームの皆がマウンドに駆け寄ってくる。

そして、歓喜の輪がマウンドに出来上がるのだった。

その後は試合終了の挨拶をして大会表彰式に移る。

そこで、クリスさんがMVPに選ばれた。

これでクリスさんは全国区の選手だな！

ちなみに俺は敢闘賞を貰えた。

最優秀投手賞は決勝の相手チームのエースが選ばれた。

まあ、全国大会では試合毎に1、2失点したからなあ…。

大会の通算奪三振数は俺が一番だったけど、通算防御率で相手エースの方が上だから

選ばれなかったというのが監督の予想だ。

く、悔しくないもん！

あ、やっぱ悔しいっす！

なのでガ○ガリ君奢ってください、監督！

◆ 「クリス！MVPおめでとう！」  
「監督…。」

今年でチームを去るクリスに俺は称賛の言葉を贈る。

「パワプロは運が悪かったな。」

「いえ、俺がすっかりとリード出来なかったのが原因です。」

クリスが悔しそうにそう話す。

「いや、優勝候補とばかり試合をして優勝したんだ。それは間違いな

く

クリスの力もあつたからだぞ。」

俺のフォローの言葉をクリスは納得していないようだ。

「葉輪は俺のリードに応えてしつかりと投げてくれました。」

「ああ、あいつは本当にコントロールがよくなったよな。」

パウプロは夏の大会を通じて僅か与四球3だ。

うちに来た2年前と比べると見違える程の成長をした。

「勝負を急ぎすぎた場面が幾つもありました…あいつが打たれたのは俺の責任です。」

責任感が強く、ストイックなのがクリスの良いところではあるんだが…。

「クリス、背負い込み過ぎるな。」

「ですが…。」

「まったく…パウプロは優勝を素直に喜んでいないじゃないか、今はお前も一緒に喜べ。」

クリスはチームの皆と一緒ににはしゃいでいるパウプロの姿を見る。

「向上心を高く持つのは悪い事じゃない。でもな、まずは勝った事を素直に

喜べるようにならないとな。それが、失敗を明日に引き摺らないコツだぞ。」

「監督…。」

クリスは俺に頭を下げるとチームの皆の所へ向かった。

「やれやれ、MVPを取るような奴だっていうのに世話が焼ける。」

まあ、だからこそ指導者っていうのは面白いんだけどな。

「さて、クリスにも言った事だし、俺も喜ぼうかね。」

クリスの控え目な笑顔を見て、俺も子供達の所に向かう。

こうして俺達、丸亀リトルの最高の夏が過ぎて行ったのだった。

## 第24話

夏の大会が終わった事で多くの6年生がチームを去っていったが、そんな中でクリスさんは

秋の大会まで残ると言った。

なんで残るのか聞いてみたんだけど、なんかやり残した事があるらしい。

MVPを取ってもまだ足りないとか、向上心が高過ぎる！

俺も負けられないぜ！

夏の大会のおかげでポイントがかなり貰えたのだが、秋の大会まであまり時間が無いので

制球だけ成長させる事にした。

成長させた感覚に慣れるのに時間が掛かるんだよね…。

制球のランクをSまで成長させて挑んだ、秋のリトルリーグ選抜東京地区大会。

丸亀リトルは順調に勝ち進んだ。

どのチームも新戦力が纏まり終わっていない中で、MVPのクリスさんが残っているのが

大きいんじゃないかな？

一回戦は被安打3で完封勝利。

三回戦は松方リトルとの試合になったが、被安打2の完封勝利。

そして決勝戦の江戸川リトルとの試合。

俺は順調にアウトを積み重ねていき、マウンドで最後のバッターと対峙していた。



俺はマウンドからスコアボードに目を向ける。

スコアボードの相手側には0が並んでいる。

最終回である六回ツーアウト、バッターボックスには18人目の代打で出てきた

右打者が必死な表情で立っている。

そう、俺は完全試合を目前にしているのだ。

俺はプレートの左側に寄って立つ。

夏の大会が終わった後、クリスさんから貰ったアドバイスを立ち位置を変更したのだ。

『今の葉輪なら横の角度をつけてもボールを十分にコントロール出来るだろう?』

なんて言われたら挑戦せざるを得ないじゃないか!

そういつた訳で今はプレートの左側が俺の立ち位置だ。

俺はクリスさんのサインを覗く。

クリスさんのサインは『ロージンバッグを使え』だ。

俺は逸る気持ちを抑えてプレートから足を外す。

すると、グラウンドに応援に来ている人達のため息が聞こえてくる。

焦らしてすまん!

俺はロージンバッグを軽くポンポンとしてから改めてマウンドに立つ。

ドキドキが止まらない。

楽しくて仕方ない。

俺はクリスさんが出したカーブのサインに頷き投球モーションに入る。

しっかりと腕を振って投げられたカーブは、右打者にとってアウトコースのボールゾーンから

アウトローギリギリのストライクゾーンへと入り込んでくる。

パシッ!

「ストライク!」

審判のコールに驚いた打者が審判の顔を見る。

打者はタイムを取るとバッターボックスの外で素振りを始めた。

「確か、今のは《バックドア》って言うんだよね?」

俺はクリスさんの返球を受けながらそんな事を考える。

ちなみに、インコースのボールゾーンからストライクになるのは



《フロントドア》とか言うみたいだ。

素振りを終えたバッターが打席に入りながら気合いの声を上げる。俺はそのバッターの気合いに笑顔を返す。

クリスさんのサインに頷いて2球目を投げる。

今度はインローにフォーシームだ。

バシッ！

ブンッ！

「ストライクツー！」

バッターが振り遅れてツーストライクと追い込んだ。

クリスさんがサインを出す。

俺が頷くと、クリスさんはミットをインハイのボールゾーンに構える。

クリスさんは夏の大会ではこういったボール球をあまり要求してこなかったのだが、

今大会ではそれなりに要求してくる。

そのおかげなのか、今大会ではかなり三振を奪う事が出来て凄い気分がいいのだ。

「これも駆け引きって奴なのかな？」

俺はクリスさんの要求通りにインハイのボールゾーンにフォーシームを投げる。

それに釣られたのかバッターがスイングをするが途中でバットを止めた。

捕球をしたクリスさんが塁審を指差してーフスイングの判定を求めろ。

塁審の判定はーフスイングでは無い。

うゝん、残念。

バッターは大きく息を吐くと主審にタイムを求めろ。

打席を外してスイングをする打者をクリスさんが横目で観察をしていく。

捕手の人はあれでどんな情報を読み取っているんだ？

俺にはサツパリわからん世界だ。

素振りを終えたバッターが打席に入る。

グラウンドに一際大きな歓声が聞こえてくる。

「ブーくん！頑張ってる！」

そんな歓声の中でも貴子ちゃんの声がハッキリと届く。

俺はベンチの貴子ちゃんに笑顔を向ける。

貴子ちゃんの応援でテンションマックスだぜ！

俺はクリスさんのサインに頷く。

投じられたボールは1球目と同じバックドアのカーブ。

そのカーブは、まるで時の流れが遅くなったようにゆっくりとクリスさんのミットへ向かう。

バッターは先程のインハイが目には焼き付いた影響なのかバットが出ない。

パシッ！

グラウンドに一瞬の静寂が訪れる。

そして…。

「ストライク！バッターアウト！ゲームセット！」

審判のコールがグラウンドに響くと、クリスさんがマスクを外しながら

真っ先に俺の所に駆けてくる。

そして、俺をマウンドの上で高々と抱えあげてきたのだ。

クリスさんの行動に驚いた俺だが、俺は喜びの感情を爆発させるように、

人差し指を立てた左手を天高く突き上げて雄叫びを上げるのだった。

## 第25話

秋の大会が終わって数日、江戸川リトルの練習場で御幸 一也はスコアブックを見比べていた。

「…やっぱりクリスさんのリードが変わってる。」

御幸が見比べているスコアブックは、夏の大会の物と先日の秋の大会の物だ。

「クリスさんは俺と同じストライク先行のリードで、遊び球が少なかった…。」

そこまで言って御幸は秋の大会の丸亀リトルとの試合のスコアブックに指を置く。

「だけど、秋の大会では明らかな釣り球や遊び球がある…何でだ？」

御幸はクリスの変化したリードに首を傾げる。

「でも、その結果は完全試合…。」

御幸は自分の言葉に先日試合を思い返す。

あの試合の後、あまりの悔しさに普段ではやらない自主練の走り込みをやって

体力を使いきれないと眠れない程だった。

頭が冷えた今、こうしてスコアブックを見直し反省をしようとしてクリスの変化に気づいたのだ。

「はあ…今度、直接聞きに行ってみるか。」

そう言って御幸は頭をガシガシと掻きながら立ち上がる。

そして、ブルペンに行くと投手の球を受けていくのだった。



後日、クリスの連絡先を知らなかった御幸は丸亀リトルの練習場所に訪れた。

そこには、既にチームを卒業した筈のクリスの姿があった。

「御幸か…お前、江戸川リトルの練習はどうした？」

「クリスさんに聞きたいことがあったんで、監督に言っサボってこ

こに来ました。」

御幸の返答にクリスはため息を吐く。

そんなクリスの反応に御幸は苦笑いだ。

「それで、何を聞きたいんだ？」

「クリスさん、リード変わりましたよね？」

クリスは御幸の気付きに感心の声を上げる。

「夏ではあまり要求しなかった遊び球を秋ではかなり要求してました  
…何ですか？」

クリスは御幸に返答せずに背を向ける。

「クリスさん！」

「御幸…答えが知りたければついてこい。」

そう言つてクリスは歩いていく。

その言葉を受けた御幸は、黙ってクリスについていくのだった。



「あれ？クリスさん？」

俺は監督が見ている前でブルペンで投球練習をしていると、クリス  
さんが

誰かを連れてブルペンにやつてくる姿を見つけた。

「どうした、クリス？…って、後ろにいるのは江戸川リトルの子か？」

「はい、こいつは練習をサボって来たようなので、うちの練習に参加さ  
せたいのですが…。」

うえい？

俺はクリスさんの言葉でクリスさんの後ろにいる奴を見る。

…御幸だよな？

俺が首を傾げて見ていると、それに気づいたのか御幸と目が合っ  
た。

手を上げて挨拶をしてきたので俺もやり返す。

「いっど。」

フアッ!?

監督が躊躇せずにはクリスさんの願いを受け入れた事に驚いた。  
いいの？他所様のチームの奴を練習に参加させていいの？  
情報だだ漏れちゃうのん？

「それじゃ…御幸だったよな？防具とミットを貸すからパウプロの球を受けてくれ。」

監督!?

俺は驚きながらクリスさんを見ると、クリスさんが頷いてきた。

いや、頷かれてもわかりませんって！

俺の混乱が続く中で、準備を終えた御幸がキャッチャーボックスに座る。

まあ、投げていいんだったら投げるけどね。

俺は1つ息を吐いて気持ち切り替えると、御幸に球種を伝えてからフォーシームを投げ込む。

すると、御幸はクリスさんに負けない程のいい音をさせてボールを取るのだった。



クリスさんの後についていくと、何故か葉輪の球を受ける事になった。

「フォーシーム行くぞ〜。」

葉輪が球種を伝えてきたのでミットを構える。

あの独特なノーワインドの投球モーションで葉輪が投げ込んでくる。

葉輪が投げたボールは寸分違わずにミットに吸い込まれる様に納まった。

(ノビのある、いいフォーシームだな。)

「ナイスボール!」

俺はそう言いながらボールを返球する。

今度はミットを右打者のインローに構える。

またも狙い違わずにボールはミットに。

その後も色々ミットを構える場所を変えるが、葉輪のボールは正確にミットに納まっていく。

「葉輪、そろそろカーブも投げろ。」

「はいー。」

葉輪がクリスさんの言葉に返事をする。

俺はエースの決め球まで受けさせていいのかと驚きながらもミットを構える。

葉輪が投じるカーブはフォーシームと変わらぬ精度でミットに納まっていく。

「…たはっー。」

気付けば俺は笑っていた。

こいつのボールを受けるのが楽しくて仕方ない。

頭の中で、試合では葉輪をどうリードしようか考えながらボールを受けていく。

俺は当初の目的を忘れて、葉輪のボールを受けるのを楽しんでいた。

## 第26話☆

投げ込みが終わると、御幸はクリスさんと少し話をしてから笑顔で帰っていった。

：何だつたんだ？

クリスさんに聞いてみるとキャッチャーとして悩みがあったようだ。

よくわからんが、その悩みは俺の投げ込みを受ける事で解決したらしい。

正直な所、「へ〜」としか言いようがないな。

御幸が帰るとクリスさんがうちのチームのキャッチャーと話し合いをしていく。

なんかリードに関してアドバイスをしているみたいだな。

というのも、うちのチームはクリスさんという不動の正捕手がいたので、

他のキャッチャーは公式戦の経験が少ないのだ。

なのでクリスさんが春に行われる選抜大会の全国決勝トーナメントに向けて、

後輩のキャッチャーにアドバイスをしているのだ。

そして、アドバイスを終えたクリスさんはうちのチームを卒業していった。

俺に『シニアで待っているぞ』という言葉を残して…。



春の選抜大会の決勝トーナメント。

俺は試合前にいつもの様に能力で自分の状態を確認していた。

基礎能力

最高球速：100km (※105km)

制球：S

スタミナ：C

変化球：カーブ3（※3）

球速が遂に100kmに到達したぜ！

夏までには上限まで成長させたいな。

俺は続けて野手能力を確認する。

基礎能力2

弾道：2

ミート：D

パワー：D

走力：C

肩力：B

守備：C

捕球：C

去年の夏、秋の大会で得たポイントで野手の能力もかなり成長出来た。

打撃でも戦力として見て貰える様になったぜ！

特殊能力も確認しておく。

特殊能力

『鉄腕』

『鉄人』

『身長高い』

『リリース○』

『ノビ4』

『キレ○』

新たにゲットした特殊能力は『キレ○』だ。  
能力の詳細はこんな感じ。



## 『キレ〇』

- ・変化球のキレが良くなる特殊能力である。
- ・変化球の曲がり始めが打者よりになる効果がある。
- ・上位特殊能力として『キレ◎』が存在する。

この特殊能力をゲットする際に、変化球の2球種目とどちらにするか悩んだのだが、

2球種目は現所属カテゴリーでは取得出来ないみたいなので『キレ〇』を取得した。

俺はこんな感じの能力で春の選抜大会の全国決勝トーナメントに挑む。

目指すは夏に続いての全国制覇！  
やってやるぜ！



春の選抜大会の全国決勝トーナメント。

丸亀リトルの大会前の評価は低いものだった。

夏の大会のMVPであり、扇の要であったクリスが抜けた事を危惧する者が多かったからだ。

だが、丸亀リトルはそんな評価を覆して快進撃を続けていく。

エースである葉輪が最速100kmのフォーシームと、キレのあるカーブのコンビネーションで

強豪リトルの打線を抑える活躍を見せる。

そして、丸亀リトルの打線も一発は無いものの地道に繋いで得点をしていく。

大会関係者は驚きを隠せない。

特にどんな状況でも笑顔を崩さないエースの葉輪の姿に、球場に応援に駆けつけた

野球好きな者達は目を奪われ続けた。

丸亀リトルが決勝戦まで勝ち進むと、当たり前のようにエースがマウンドに笑顔で立つ。

3試合目の先発でも疲れを一切感じさせない姿に、一部の野球好きは葉輪がこの世代の

中心選手になるかもしれないとの考えを抱き始める。

そんな野球好きな者の考えを後押しするように、決勝戦のマウンドで葉輪は躍動するのだった。

## 第27話

春の選抜大会の全国決勝トーナメント。  
俺達、丸亀リトルは準優勝の結果に終わった。

俺は決勝戦で被安打3の11奪三振で六回を完封したのだが、うちの打線も相手から

得点を奪う事が出来なかった。

そして、俺が交代した延長ではタイブレークルールである事もあって点の取り合いになった。

だが、八回に追い上げきれずに3-5で負けてしまった。

正直に言っただけ悔しい。

夏にリベンジしてやるぜ！

それはそれとして、俺はMVPに選ばれた。

めっちゃビックリしたけど素直に嬉しい。

ひゃっほい♪



丸亀リトルの遊撃手である白河 勝之はMVPとして表彰されている葉輪の背中を見ながら

今大会の事を思い返している。

前評判では、1年先輩であるクリスがいなくなって厳しいというのが

丸亀リトルに対する評価だった。

だが、いざ大会が始まって見れば丸亀リトルのエースは大車輪の活躍をした。

春の選抜大会の全国決勝トーナメントを通じて僅か1失点。

そしてMVP。

「キヤッチャー関係ないじゃん…。」

そんな白河の呟きは、葉輪の表彰に向けられる拍手で消えていくのであった。



春の大会が終わって俺は6年生、貴子ちゃんは中学1年生になった。

貴子ちゃんの制服お披露目は葉輪、藤原両家で行われた。

貴子ちゃんの制服姿はめっちゃ可愛かった。

なので素直にそう伝えたら、貴子ちゃんに顔を赤くしながら俺は両頬を横に引っ張られた。

解せぬ…。

貴子ちゃんは中学生になった事で丸亀リトルから卒業した。

俺は、貴子ちゃんは丸亀シニアにマネージャーとして入ると思ったのだが、

どうやら違うようだ。

なんでも、1年は勉強に専念するらしい。

というのも、俺と貴子ちゃんは青道高校に入る事を決めているのだが、貴子ちゃんは

一般入試で青道高校に入るつもりらしい。

貴子ちゃんぐらい頭が良ければ推薦でもいけそうな気がするけどな。

ただ、この貴子ちゃんの考えは両家の両親は同意なのだそうだ。

みんな曰く、貴子ちゃんが丸亀シニアのマネージャーになると、部活等の実績がないので

内申書で不利になる可能性がある。

なので、確実に入るなら推薦に頼らずに勉強しておくのが一番らしい。

だから俺も一緒に勉強しなさいと言われた。

そういう訳で丸亀リトルの練習が無い時は、走り込み等の自主練をしたら

貴子ちゃんと一緒に勉強をしている。

貴子ちゃん、俺が教えるのは構わないけど…くつつき過ぎじゃない

かな？

いや、めっちゃ嬉しいです。

ちよつと、奥様方？これは違いますよ？

だから、そんな暖かい目で見守らないであげてくれませんか？



一緒に勉強をしているフーくん和我的肩が触れ合ってる。

少し恥ずかしいけど…それ以上に嬉しい。

最近のフーくんは女子に人気が出てきた。

野球が出来てカッコ良くて、勉強も出来るし、性格も明るくて楽しい男の子。

幼馴染みとしての鼻肩目無しでもフーくんはカッコいいと思うわ。

今年の2月にフーくんは私以外の女の子からもチョコを貰ってた。

その時に私は、ちよつと嫌だなと思った。

だけど、フーくんは私のチョコが一番嬉しいって言ってくれた。

ちよつと優越感。

その事をお母さんに話すと、フーくんにもつとアピールしないとダメと言われた。

お母さん曰く、恋は戦争だつて…。

そう言う訳で、私はフーくんの隣で一緒に勉強をしている。

お母さんとおばさま…なんで私がフーくんを好きってわかったのかしら？

そう、私はフーくんが好き。

幼稚園でフーくんに助けて貰ったあの時からずっと好き。

フーくんは…気づいてないよね？

でも、フーくんは私と一緒にいるのを喜んでくれる。

それが何よりも嬉しい。

私が小学3年生の頃、いつもフーくんと一緒にいるのをからかわれた事があるけど、

その時にフーくんは『はっはっはっ！羨ましいだろう！』って言い

きった。

カツコ良かったな：フーくん。

それ以来、私は周りの目を気にしなくなった。

今でも時折からかわれるけど、そのほとんどは好意的な感じのものだ。

それでも、フーくんの事が気になってる女の子は一杯いる。

お母さんの言う通りに油断しちやダメだよね！

私はフーくんの顔を見る。

野球が本当に好きで、いつも笑顔で楽しんでいる：私のヒーロー。

私はこれからもずっとフーくんの隣にいたいな。

…ところで、お母さんとおばさま？

いつまで見ているつもりなの？

## 第28話☆

俺が6年生になって迎えるリトルでの最後の公式戦。夏のリトルリーグ選手権大会が始まろうとしていた。ちなみに、丸亀リトルの監督も今年で最後のようだ。なんでも、丸亀シニアの現監督が高齢な事が理由で勇退するらしい。

そこで全国大会等の指揮の経験がある我らが監督が後継に指名されたようだ。

来年からも顔馴染みの監督が指導してくれるとあって6年生は嬉しそうな顔をしている。

そして、丸亀リトルの監督は一時的にコーチが代行するとの事。

期間はシニアの現監督が代わりを見つけるまでらしい。

コーチは野球経験無いからなあ…。

それを抜きにすれば、練習後のケアの仕方とかを教えてくれる優秀な指導者なんだけど…。

まあ、そんな感じで俺のリトルでの最後の大会が始まる。

俺はいつもの様に能力を確認する。

基礎能力

最高球速：105 km (※105 km)

制球：S

スタミナ：B

変化球：カーブ3 (※3)

球速を上限まで成長させる事が出来た。

これ以上はシニアに行つてからだな。

続けて野手能力も見ていこう。

基礎能力2

弾道：2

ミート：C  
パワー：C  
走力：B  
肩力：B  
守備：B  
捕球：B

野手能力もかなり成長出来たんじゃないかな？

打撃練習でホームランを打つ事も出来る様になったので試合が楽しみだ。

特殊能力は特に増えていないので割愛する。

こんな感じの能力で俺は最後の大会に挑む。

春のリベンジだ！

やってやるぜ！



夏のリトルリーグ選手権大会の東京地区予選。

俺達、丸亀リトルは決勝戦まで勝ち進んだ。

ちなみに俺は三回戦で公式戦初のホームランを打つ事が出来た。

ひゃっほい♪

決勝戦の相手は準決勝で松方リトルに勝った江戸川リトルだ。

この3年、なんだかんだで御幸とは縁があるなあ…。

最後まで勝たせてもらうぜ！



夏のリトルリーグ選手権大会、東京地区予選の決勝戦の二回の裏。

俺は先頭打者の4番バッターである御幸にホームランを打たれた。

御幸は右腕を突き上げながらベースを回っている。

「嬉しそうな顔をしてるねえ…。」



インローのフォーシームを見事に捉えられた俺は苦笑いするしかない。

ベースを回っている御幸と目が合った。

御幸は俺にサムズアップして来た。

俺は舌を出して返事をする。

へんっ！次は三振にしてやるからな！

御幸にホームランを打たれた事で試合は1-1の同点になってしまった。

先制点を取られて直ぐに追いついたからか、江戸川リトルの

ベンチは活気づいている。

「いいねー！そうこなくちやー！」

俺はマウンドで笑みを浮かべる。

本当のエースなら戦いの流れを引き寄せる様な投球が出来るのかもしれない。

でも、俺に出来るのは野球を本気で楽しむ事だけだ。

なら！とことん楽しまなきゃな！



葉輪からホームランを打ってベンチに戻ってきた俺は、祝福の紅葉を背中に作った。

「いって…まあ、この痛みも嬉しいもんだ。」

俺は防具を着けながらマウンドの葉輪を見る。

「同点に追いつかれる…しかも、ホームランを打たれてだ。それなりに動揺する筈なんだけど…」

マウンドの葉輪は「ごめん！打たれた！」とか言っている。

そんな葉輪に他のチームメイトが口々に「ドンマイ！」と葉輪を盛り立てている。

「崩れねえなあ…」

俺は苦笑いするしかない。

「ほんと、いいピッチャーだわ。」

俺の後のバッターは三者三振で抑えられた。

「さて、リトルで最後の大会……1回ぐらいあいつに勝たないとな。」

そう呟きながら俺はキャッチャーボックスに向かう。

だけど、その後は葉輪から得点する事は出来ず1―3で負けてしま  
う。

こうして俺達、江戸川リトルの夏は終わった。

そして俺達に勝った丸亀リトルは、全国優勝という最高の結果で夏  
を終えたのだった。

## 第29話

俺達、丸亀リトルは夏の大会を全国優勝という最高の形で終える事が出来た。

監督が交代する事もあって今年の6年生は秋の大会まで残らずに去る。

そして、監督が交代するので壮行会として紅白戦をする事になった。

これは監督代行をするコーチに試合の指揮経験を積ませる為だ。

という訳で紅白戦をするのだが、何故か御幸が俺達の紅白戦を見に来た。

「よっー!」

御幸が片手を上げて挨拶をして来たので俺も挨拶をする。

「どうしたんだ、御幸?」

「ちよつと聞きたい事があってな。」

聞きたい事?

クリスさんはいないぞ。

「お?御幸か、どうした?」

「監督さん、少し葉輪を借りてもいいですか?」

「いいぞ。」

監督、俺は物じゃないんだけど。

「というか、御幸?お前、江戸川リトルの方はいいのか?」

「誰かさん達に負けて夏が早く終わったからな。問題無いさ。」

御幸が肩を竦めながらそう言う。

「それで、葉輪。聞きたい事なんだけどな…。」

「御幸、俺の事はパワプロでいいぜ!」

なんだかんだ御幸とは縁があるからな。

だから皆が呼んでくれている愛称呼びを提案したんだ。

ビシツと親指を立てる俺を見て御幸が笑う。

「じゃあ、俺も一也でな。」

「おう!よろしくな一也!」

俺と一也は握手する。

「それで、一也は何が聞きたいんだ？」

「ああ…パワプロ、お前はライバルってのをどう思う？」

うえい？

「ライバル？」

「そう、ライバルだ。」

ライバルねえ…。

「どういう事？」

「あく…ライバルって味方なのか、敵なのかって言えばいいのか？」

ふむん？

「一緒のチームで競い合うのか、敵として戦うのかって事でいいのか？」

「だいたいそんな感じだな。」

うん…。

「あくまでも俺の考えになるけど、それでもいいか？」

「おう！」

一也が返事をしたので俺の考えを伝える。

「俺は一緒のチームで競い合う方がいいと思うな。」

「なんでだ？」

「だって、目に見える場所にいた方が頑張れるじゃん。」

一也が少し首を傾げる。

「敵として戦う方が燃えないか？」

「それもわかるけど、目標ってわかりやすい方が頑張れると思うんだ。」

一也が頷いて俺に話の続きを促す。

「負けたくない、勝ちたいって思える相手が近くにいればさ、相手より

1回でも多く練習するだろ？」

「…そうだな。」

「だろ？でもさ、相手が見えないところにいると『これだけ頑張ったからもういいや』って

思っちゃう事があるんじゃないか？」

一也が何度も頷く。

「だから、俺はライバルは近くにいた方がいいと思うぞ。」

「でも、パワプロってライバルいないだろ？」

「え？一杯いるけど？」

俺と一也はお互いを見ながら首を傾げている。

「え？一杯って…そんなにいないだろ。」

「丸亀リトルの投手、皆がライバルだぞ。」

俺の言葉に一也は眉を寄せる。

「去年までなら年上がいたからまだわかる。けど、今年は年下しかないだろ？」

「そうだけど、あいつらは俺が投げられない変化球を投げるからな。」

一也が驚いた様子をみ開く。

「…それだけの理由で？」

「おう！」

一也が呆れた様にため息を吐く。

「俺が持っていないモノを持っている。なら、立派なライバルだ！」

一也が頭を掻きながら「たはっ」と笑っている。

嘘は言っていないぞ。

それに、そうじゃない奴も含めて皆がライバルだ。

マウンドに立てるのは1人。

なら、そこに立つには投手をやっている皆に勝たなくちゃならないからな！



俺はパワプロの言葉を聞いて思わず笑ってしまった。

勝てないわけだ…。

パワプロはずっと誰かと競いあつて成長をしてきた。

きつと、クリスさんもそんなパワプロに負けないように頑張っていたんだと思う。

対して、俺はどうだ？

4年生の頃から6年生に負けずにずっとレギュラーだった。ハッキリ言って同じチームにライバルと思っていた奴はいない。レギュラーの座は安泰だった。だからという訳じゃないけど、たまに練習をサボる事もあった。こんな事で勝てるわけがない…。

変えなきゃダメだ。

変わらなきゃダメだ。

だって…俺は野球が好きなんだから。

だから、パワプロの様に本気で野球を楽しめる様になろう。

「おっ、話は終わったかあ〜？」

丸亀リトルの監督が来た。

「はい、ありがとうございます。」

そう言っただけは監督さんに頭を下げる。

「はっはっはっ！礼はパワプロに言ってくれ。」

そう言った後、監督さんはイタズラをする子供の様な笑みを見せる。

…なんだ？

「ところで、御幸も紅白戦に参加しないか？」

まったく…大人ってズルいよなあ…。

「お願いします！」

「おう！それじゃ、防具とミットを貸すからパワプロのボールを受けてくれ！」

監督さんの言葉にパワプロは吃驚しているが直ぐに笑顔になる。

ああ…ほんとズルいわ。

この人、現役時代は絶対にキャッチャーだろ。

こうして俺は、丸亀リトルの紅白戦に参加してパワプロのボールを受ける事になった。

試合形式でパワプロのボールを受けた事で俺の腹は決まる。

レギュラー安泰なんて考えは捨てる。

俺は野球を本気で楽しむ為に挑戦する事を決めたのだった。

## シニアリーグ編 第30話

壮行会を兼ねた紅白戦が終わり、俺は丸亀リトルを卒業した。

紅白戦を終えた後、一也は何か吹っ切れた様に笑顔で走って帰っていった。

悩みが晴れたのはいい事だ。

そして、走り込みやらの基礎と貴子ちゃんとの勉強をして時が過ぎていく。

俺は中学1年、貴子ちゃんは中学2年生になった。



俺は中学校の制服を着て家の前に出てきた。

身長が伸びる事を考えて大きめなのがポイントだな。

「フーくん、かわいい!」

貴子ちゃん：男としてかわいいはどうかと…。

「今は制服がブカブカだけど、その内ピッタリになるわ。」

母さんがそう言ってくれる。

早く身長が伸びて欲しいものだ。

「フーくん、行こう!」

貴子ちゃんが手を差し出してくる。

小学校の時と同じく、俺と貴子ちゃんは中学校も同じ所に通うのだ。

俺は貴子ちゃんと手を繋いで歩き出す。

幼馴染みの美少女と登校。

まさに青春だ!

こうして俺の中学校ライフが始まるのだった。

母さん、行ってきます!



中学生になった俺は、今年から丸亀シニアで野球をしていく。貴子ちゃんも今年から丸亀シニアでマネージャーをしていくぞ。

そして、恒例と言えるチームの新メンバーの自己紹介なんだが…。

「江戸川リトル出身の御幸 一也です！一年先輩のクリスさんからレギュラーを奪いに来ました！」

なんで一也がいるのん？

一也を見ていると目が合った。

一也は何故かサムズアップしてきた。

よくわからないけど俺もサムズアップを返す。

「よぉーし！自己紹介は終わったな！それじゃ、練習を始めるぞ！」

監督の言葉に見知った奴等と新規の奴等が大きな声で返事をする。

そして、いよいよシニアで初めての練習が始まった。

走り込みやベースランニング等の基礎を終えて俺はブルペンに向かう。

「久しぶりだな、葉輪。」

ブルペンには新入生の挨拶の間に、既に練習を始めていたクリスさんがいた。

「はい！お久しぶりです！クリスさん！」

「身体は鈍ってないだろうな？」

クリスさんが少しからかうように言ってくる。

「走り込みとかの基礎は続けてました！」

「そうか…まずはキャッチボールからだ。」

そう言っただけクリスさんがミットを構える。

すると…。

「パワプロ！キャッチボールしようぜ！」

なんと、一也が割り込んで来たのだった。

クリスさんと一也の目が合う。

「御幸か…。」

「どうも、クリスさん。」



一也はそう言いながら手を差し出す。

クリスさんは一也の手を取って握手を交わす。

「レギュラー貫いますからね。」

「奪えるのならな。」

2人の目の間にバチバチとした光が見える気がする。

おお！まさにライバル！

いいね！俺も負けられないぜ！

「そういう訳でキャッチボールしようぜ、パワプロ。」

「どういうわけだ、御幸。」

一也の言葉にクリスさんがツツコミを入れる。

「いやあく、初めての練習ですからね。まずは顔見知りとやろうか

と。」

「顔見知り以外とやって親交を深めるのも悪くないだろう。」

「それもそうなんですけどねえ、まあ此処は可愛い後輩に譲ってくださいよ。」

「さうよ。」

「レギュラーの座を奪うと言う後輩が可愛いとは感じないな。」

「うわあ、性格悪いっすよ、クリスさん。」

「キャッチャーにとっては誉め言葉だな。」

握手をして笑顔の筈なのに、2人の雰囲気は勝負そのものである。

2人共熱いな！

さすがライバルだぜ！

ところで…どっちが俺のボールを受けてくれるの？

俺、早く投げ込みをしたいんだけど！

### 第31話☆

「クリスさんーフォーシーム行きますー!」

クリスさんと一也が、どっちが俺のボールを受けるのか話し合いをしていたのだが、

通り掛かった監督がクリスさんを指名した事で決着がついた。

そう言う訳で、俺はブルペンでクリスさんを相手に投げ込みを始める。

ちなみに一也はクリスさんの捕球とかを見て勉強するらしいので見学だ。

俺の投げる球種を聞いたクリスさんがミットを真ん中に構える。

上半身を起こして的確を大きく見せる様な構えだ。

俺は様子を見る様に軽くボールを投げる。

パンツ!

クリスさんのミットがいい音を出してボールを取る。

だけど、捕球した位置は狙った所より低い場所だった。

「あるえ?」

手応えと違う結果に俺は首を傾げる。

そして、ブルペンの中に何か違和感を感じる。

なんだこれ?

俺がそんな事を考えているとクリスさんがボールを投げ返してくる。

そのボールを受け取ったその時…。

ピコンッ♪

俺の頭の中に機械音が鳴り響いた。

「うえい?」

俺は反射的に能力を使う。

※所属カテゴリーを参照して能力のランクを修正しました。

※能力の成長を一部開放しました。

おおう？

俺は通知を確認る為に能力を使って状態を確認する。

基礎能力

最高球速：105 km (※145 km)

制球：C

スタミナ：D

変化球：カーブ3 (※5)

ファツ!?制球のランクがSからCまで下がってる!?

「どうした、パワプロ?」

俺の投げ込みを見学していた一也がそう聞いてきた。

一也が話し掛けてきたからなのか、クリスさんも俺の所にやってきた。

「何かあったのか、葉輪?」

「いや、その…なんか違和感というか…。」

取り合えず俺はブルペンに感じる違和感を伝えて混乱を誤魔化する。

「なんだ、先輩達に見られて緊張してるのか?」

一也がそう言って茶化してくる。

一也が言った通りに、ブルペンで投げ込みをしている先輩達はチラチラと俺の方を見てくる。

「葉輪、違和感というのはどんなものだ?」

「うくん、何かクリスさんの場所が遠いというか…。」

俺がそう言っていると、クリスさんと一也は顔を見合わせてため息を吐いた。

「葉輪、シニアとリトルではマウンドからキャッチャーボックスまでの距離が違うぞ。」

「うえい?」

「そうなの?」

「パワプロ…知らなかったのか?」

「知らなかった!」

一也の言葉に俺がハッキリと答えると、クリスさんと一也がまたため息を吐く。

仕方ないじゃん！

知らないものは知らないだから！

「違和感の原因がわかったなら投げ込みを続けるぞ、葉輪。」

「はいー！」

俺が返事をする、クリスさんはミットで軽く俺の胸を叩いてから戻っていく。

さて、投げ込みを再開する前に能力を成長させるか。

公式戦まで時間はあるからな。

基礎能力

最高球速：110km (※145km)

制球：B

スタミナ：D

変化球：カーブ4 (※5)

あんまり一気に成長させると、熱が出て寝込む事になりかねないの  
でこのぐらいで抑えておく。

よし！久し振りの投げ込みを楽しむか！

クリスさんの構えるミットを見ると自然と笑顔になってしまう。

その後クリスさんを相手に投げ込みを続けていき、リトルの時と変わった距離感や能力に

少しずつ感覚を慣らしていくのだった。



パウプロがクリスさんを相手に投げ込みをしていく。

「やっぱり、パウプロはコントロールいいな。」

最初は距離感の違いに戸惑ったのか、少しボールが散っていた。

でも、投げ込みを続ける内にボールは狙った場所からボール1、2

個分

ずれるぐらいで纏まってきている。

「リトルの時程ドンピシャじゃないけど…これなら十分カウントを計算出来るな。」

パウプロの投げ込みをチラチラと見ている先輩達も驚いている。

そして、慌てる様に自分の投げ込みに集中しだした。

「速い人で130km前後って所か。」

現在のエース候補が投げるファストボールを見て、大体の球速を割り出す。

そのエースは自分のボールに満足気に笑みを浮かべている。

「確かにそっちの方が球速は速いけど、球質とコントロールはパウプロの方が上だな。」

俺はそう呟いてパウプロに目を戻す。

すると、パウプロはカーブを投げるとクリスさんに宣言した。

パウプロが投じたカーブは、リトルの時よりも大きく鋭い変化を見せてワンバウンドする。

だが、クリスさんは素早く膝を落としてブロックの態勢を取り、ボールの後逸を防いだ。

「すいません、クリスさん！」

コントロールに失敗したからなのか、パウプロがそう声を上げる。

クリスさんは無言でボールを投げ返すが、マスクの中では笑みを浮かべている。

「…たはっ！」

リトルの時よりも更なる成長を見せるパウプロ、そしてそれに応えるクリスさん。

「こんなの見せられて燃えないわけないだろう…！」

身体がウズウズとする。

練習がしたいと心の底から感じる。

「すいません！誰かボールを受けさせてくれませんか！」

気がつけば、俺はそう声を上げていた。

「おお、こっち交代してくれ！」

ボールを受けていたキャッチャーの1人が手を上げた。  
パウプロの癖が移ったのか、俺も笑顔になってしまう。

「はいー！」

俺は大声で返事をして防具をつけていく。

そして、俺は楽しみながらボールを受けていくのだった。

## 第32話☆

シニアでの初練習を終えて貴子ちゃんと一緒に帰る。  
一年ぶりの感覚だな。

俺が貴子ちゃんと一緒に帰ると一也が凄い驚いていた。  
でも、その後直ぐにニヤニヤとしていたな。

性格悪いぞ、一也！

え？誉め言葉？

まあ、いいか。

そんな感じでシニアの練習をして時間が過ぎていく。

そして、いよいよシニアで初めての公式戦。

夏のシニアリーグ選手権大会に参加する事になった。

シニアで初めての公式戦だが、俺は第2先発に選ばれたぜ！

監督曰く、リトルでの経験を買ってだそうだ。

ただ、マウンドとキャッチャーの間の距離が伸びた事と、シニアでは1試合七回になった

影響がどこまであるかわからないので、四回く五回で交代を考えているそうだ。

まあ、どんな役割を与えられても俺に出来るのは野球を楽しむ事だけだ！

あ、ちなみに一也はベンチ入りしたけどレギュラーじゃない。

一也も色々と監督にアピールしたんだけど、クリスさんからマスクを奪うには

まだまだ足りないようだな。

一也は残念そうだったけど納得もしていた。

でも、キャッチャーのスタメンの座は微塵も諦めていないとさ。

クリスさんも一也と競いあう様になってから、さらに練習に熱を入れる様になっている。

これからも2人には切磋琢磨していつてもらいたいな！

でも、俺も負けなげ！



夏の大会の第二回戦。

俺は城南シニアとの試合で先発をするので能力を確認していた。

基礎能力 2

弾道 : 2

ミート : F

パワー : E

走力 : D

肩力 : D

守備 : E

捕球 : D

シニアに上がったからか軒並み野手能力が下がっている。

特にミートがめっちゃ下がってるんだよなあ…。

投手能力はシニアの練習初日に成長させてから変わらないから割愛だ。

「お〜いパワプロ、見てみるよ。」

能力を確認していると、一也が呼んで来たので行ってみる。

手にしているのはメンバー表かな？

「どうしたんだ、一也？」

「城南シニアのスタメン、2人が1年なんだ。」

「へ〜。」

どれどれ？

「センターにカルロスって言うのと…ピッチャーに成宮？」

「ああ、向こうのベンチにいる白黒の2人だな。」

一也の指が示す方に顔を向ける。

すると、肌が黒い人と髪の毛が白い人がいた。

「リトルでは見たことないなあ。」

「俺も無いな。でも、1年でレギュラーって事はそれだけ実力があ



るって事だろうな。」

一也の言葉に適当に頷いていると、向こうのベンチの白髪くんと目が合った。

俺は彼にサムズアップをする。

俺と切磋琢磨しようぜ！

だが、白髪くんに目を逸らされた。

うーん、残念。

「葉輪、投球練習を始めるぞ。」

おっと、クリスさんに呼ばれたから行かないと。

「それじゃ、行ってくるぜ！」

俺は一也に手を振ってベンチを出る。

貴子ちゃんと目が合ったのでサムズアップをする。

貴子ちゃんはニッコリと笑顔で手を振ってくれた。

おかげで俺のテンションはMAXだぜ！



城南シニアのベンチで1人の少年が葉輪の投球練習を見つめていた。鳴。

「どうした、鳴。」

投球練習を見つめていた少年、成宮 鳴に話し掛けたのは神谷 カルロス 俊樹という少年だ。

「あいつ、生意気。」

そう言っ成宮が指差すのは投球練習をしている葉輪だ。

「たしかリトルのMVP投手だろ？」

「俺の方がボール速いし！」

そう言う成宮にカルロスは苦笑いする。

「じゃあ、あいつに投げ勝って鳴の方が上って証明してやれよ。」

「俺の方が上だし！投げ勝つのは当たり前じゃん！」

カルロスは1つ肩竦めてからバットを手に取りベンチを出ていく。

成宮は葉輪の投球練習から目をチームメイトに向ける。

見ると、チームメイトの皆がそれとなく視界に葉輪の姿を入れて、  
タイミングを

取りながらバットを振っている。

チームメイトだけじゃない。

耳に入ってくる声から、球場に応援に駆けつけた人達も葉輪に注目  
しているのがわかる。

成宮はそれも気に入らない。

自分が投球練習をしていた時はそうじゃなかったからだ。

「あいつ、やっぱり生意気。」

### 第33話

俺のシニアリーグ公式戦デビューとなる試合が始まった。

俺は先発投手で打順は九番だ。

そして、先攻は丸亀シニアなので今はベンチで応援している。

「成宮の持ち球はフォーシームとスライダーって所ですかね？」

「ああ、それをプレート左側の左側に立って横の角度をつけて投げているな。」

そんな感じで一也とクリスさんが白髪くんを分析している。

白髪くんは成宮って言うのか。

どうも人の名前を覚えるのは苦手なんだよなあ…。

その成宮なんだが、彼は俺と同じ左投げの投手だ。

「内外はしっかりと投げ分けていますね。」

「そうだな。だが、高さは甘くなる時があるな。」

キャッチャーコンビの分析力すげえ！

「クリスさんだったら何を狙います？」

「ベルト付近まで浮いてきたインコースのスライダーだな。」

そう2人が話している内に一番バッターが打ち取られてしまった。

そして、二番バッターの丸亀リトルからの同級生である白河が打席に入る。

あいつも1年ながらスタメンの座を勝ち取ったのだ。

白河はアウトコースのボールを流し打ってファーストの頭を越えるシングルヒットだった。

「フォーシームに比べてスライダーはコントロールが甘いみたいですね。」

「ああ、狙い目だな。」

そう言ってクリスさんはネクストバッターサークルに向かった。

三番バッターの右打者はインコースのフォーシームを引っかけて内野ゴロに打ち取られた。

だけど、それが進塁打になってツーアウト、2塁のチャンス。

そしてバッターは四番のクリスさんだ。

キンツ!

綺麗な金属音がベンチにまで響いてくる。

打球は高々とレフト方向へと飛んでいく。

そして、打球はそのままスタンドまで届いてホームランとなった。

ベンチはクリスさんのホームランで大盛り上がりだ。

俺も一緒に盛り上がるぜ!

ウオ——!

ホームランを打たれた成宮はマウンドをスパイクでガシガシと削っている。

踏み込んだ時に足でも滑ったのかな?

まあ、いいか。

ホームランを打ったクリスさんを出迎えよう。

「ホームランお見事です、クリスさん!」

俺はクリスさんとハイタッチをする。

イエーイ♪

「何を打ったんですか?」

「インコースの甘いスライダーだな。予想以上に横の角度がきつかったが、ベルト付近の」

高さだったからホームランにする事が出来た。」

狙うって言うっていたボールを打ったのか。

流石っす!

「葉輪、わかっていると思うがお前もコントロールには気をつけろよ?」

「はー!」

その後、五番バッターは打ち取られて交代となる。

いよいよ俺のシニアデビューの時が来た。

よっしゃ! やってやるぜ!



丸亀シニアと城南シニアの試合。

その試合を眼鏡をかけた1人の美女が、手帳を片手にスタンドから見学している。

「クリス君は流石はリトルMVPといった所ね。インコースのスライダーを上手く捌いて

ホームランを打つのだから。」

そう言いながらその女性は手帳に何かを記入していく。

「出来れば御幸君のプレーも見てみたかったのだけど、それは後日に丸亀シニアの練習を

見せてもらう事で我慢しましょう。」

球場のスタンドが僅かにざわつき始める。

「ふふ、本命の登場ね。」

そう言って女性は手帳を畳む。

「少しの間、1人の野球ファンとして楽しませてもらうわ。」

女性が見つめるマウンドには葉輪 風路の姿がある。

笑顔で投球練習をしている葉輪の姿を見ると女性が微笑む。

「本当に楽しそうに投げる子ね。」

そう言って女性がスタンドに応援に駆けつけた人々に目を向けると、先程の女性の様に

葉輪を笑顔で見ている光景があった。

「リトルの時に噂があっただけど、彼は本当にこの世代の中心選手になるかもしれないわね。」

## 第34話

一回表の丸亀シニアの攻撃が終わり、いよいよ俺が投げる時が来た。

俺はマウンドの上でロージンバックをポンポンとしながら、城南シニアの

一番バッターを見ていた。

「えつと…カリオストロ、じゃなくてカルロスだったっけ？」

右打席に入った一番バッターを見ながらそう言葉にする。

「一年で一番バッターかあ…いいね！燃えてきた！」

俺はクリスさんのサインを覗き込む。

サインはフォーシーム。

俺は頷いて投球モーションに入る。

そして、フォーシームを投げ込むとカルロスはバントの構えを見せる。

「うえい!？」

カルロスはそのままセーフティーバントをする。

だが、カルロスはボールを転がせずにとってしまった。

主審の後ろ、ファールグラウンドにボールが飛んでいく。

そのボールにクリスさんがマスクを外しながら素早く反応する。

そして…。

「アウト！」

クリスさんはダイビングキャッチで見事にボールを捕球したのだった。

「クリスさん！ナイスキャッチ！」

俺の掛け声にクリスさんは軽く手を上げて応える。

そして、指を一本立ててグラウンドの皆に「ワンアウト！」と声を出してチームを鼓舞した。

クリスさん、カッコいい！

続く二番、三番打者は三振で抑えて一回の裏を終えた。



その後、試合は俺と成宮の投手戦となった。

成宮は2打席目の白河を四球で歩かせたが、それ以外は丸亀シニアの打線を抑えていく。

俺もそんな成宮の投球に応えるように城南シニアの打線を抑えていった。

だが、四回に試合が動く。

四回の表、先頭打者のクリスさんがヒットで出塁すると成宮の制球が乱れる。

クリスさんに続く五番バッターを四球で歩かせてしまったのだ。

これで一回の表以来のチャンスが丸亀シニアに訪れた。

だけど、ここから成宮が底力を見せる。

六番、七番バッターを連続三振で抑えたのだ。

そして、続く八番バッターの場面で俺達の監督が動いた。

「代打、御幸！」

八番バッターの2年生の代わりに、1年生である一也を代打に送ったのだ。

一也はゆつくりと素振りをしながら打席に向かう。

「一也！ヒーローになるチャンスだぞ！」

一也は俺の声に振り向くとサムズアップをしてきた。

楽しめよ、一也！

一也が打席に入ると成宮がセットポジションからサインを見る。

だが成宮は首を横に振ると、プレートから足を外してロージンバツクを手取る。

グラウンドは緊張感に包まれていく。

熱い勝負だ！

その後も何度か首を横に振ってから成宮が漸く頷く。

そして、成宮がボールを投げると…。

キンッ！

一也の打球が右中間へと飛んでいく。

成宮は打球の方向を呆然と見ている。  
一也が2塁にスタンディングで辿り着くと右腕を突き上げる。  
走者一掃のタイムリーツーベースヒットだ。  
ここで城南シニアの監督が動く。  
どうやら投手交代のようだ。  
成宮は帽子を深くかぶり直しながらベンチに戻っていった。



城南シニアとの試合、5―1で俺達が勝った。  
俺は五回を被安打2の無失点で終えた。  
え？四回裏のチャンスの打席？  
凡退しましたが何か？

それはともかく、シニアのデビュー戦を勝利で飾る事が出来てよ  
かったぜ！

試合が終わったので帰り支度をしていると、成宮がこちらにやって  
きた。

「おい、お前！」

ん？俺の事？

俺は自分を指差しながら成宮と目を合わせる。

「そう、お前！名前は何て言うんだ！」

俺は成宮の言葉に笑顔で答える。

「俺は葉輪 風路！パワプロって呼んでくれ！」

俺がそう言うと、成宮は俺を指差しながら宣言する。

「パワプロ！次は俺が勝つからな！」

そう言って成宮は戻っていった。

これはあれか？

ライバル宣言か！？

いいね！

成宮！また投げ合おうぜ！



## 第35話

城南シニアに勝った俺達丸亀シニアは、その勢いそのまま東京地区予選を勝ち抜いた。

そして、全国大会の三回戦で敗れてしまった。

俺は東京地区予選の四回戦と、全国大会の二回戦でも先発したんだけど、城南シニアとの

試合の様に無失点とはいかなかった。

東京地区予選で五回を2失点、全国大会で四回を3失点という結果だった。

シニアの洗礼とでも言うのかな？

まあそんな感じで丸亀シニアの夏が終わった。

そして、中学3年生の先輩が丸亀シニアを去っていった頃、1人の美人なお姉さんが

丸亀シニアの練習を見学に来たのだった。



「おい、パワプロ見てみるよ。」

俺は一也の指差す方を見してみる。

そこには美人なお姉さんと話をしている監督の姿があった。

「監督が鼻の下を伸ばしてるねえ。」

「いや、そつちじゃねえよ。」

一也のツツコミを受けてお姉さんを見る。

「一也、あの人って監督の恋人だと思う？」

「いや、ありえねえだろ。」

ありえねえとは酷い言い草だ。

まあ、俺も無いとは思うけどね。

だって、監督なんだもん。

「あのお姉さんは何をしに来たんだ？」

「どこかの高校のスカウトだとしたら、クリスさんを見に来たんだろ

うな。」

なるほど、一也の言うことに納得した。

「一也、ブルペンに行くからボールを受けてくれない？」

「よしーじゃあ行くぞー！クリスさんが来る前になー！」

俺は妙にやる気になっている一也に引つ張られる様にしてブルペンに向かった。



「それでは、今日は見学をさせて頂きますね、監督さん。」

「ええ、ゆっくり見学してってください、高島さん。」

夏のシニアの大会を見ていた眼鏡の美人、高島 礼が丸亀シニアの練習を見学しに来ていた。

「それで、今日は誰が目当てですか？」

「そうですね…大会でスタメンとして出場しなかった御幸君を中心に見てみようかと。」

高島の言葉を受けて丸亀シニアの監督は辺りを見回す。

「クリスが野手連携でグラウンドにいるとなると、御幸はパワプロとブルペンにいるかな？」

「ではブルペンに行ってみますね。」

「案内しますよ。」

そう言って監督は高島と歩きだす。

監督は風により流れてくる高島の香りに鼻の下を伸ばしている。

それに気づいた丸亀シニアの子供達は苦笑いだ。

「監督さん、1つお聞きしてもいいでしょうか？」

「はいはい、何でもお聞きしてください。」

この男、美人な高島にデレデレである。

「なぜ御幸君を公式戦の時にスタメンでお使いにならないのですか？」

監督は高島の言葉で顔を引き締める。

普段からこのように真面目であれば少しは女っ気もあるのだろう

が…。

「クリス君の実力が際立っているのはわかります。ですが、御幸君にチャンスをと

与えてみてもいいのではと思ひまして。」

監督は高島の言葉に頭を掻きながら苦笑いをする。

「高島さんのおっしゃる通りです。俺も御幸にチャンスが欲しいか聞いてみたんですがね、

その時御幸が言ったんですよ。『実力で奪い取るのでいりません』ってね。」

高島は監督の言葉に驚いた表情を見せる。

その時、監督は『美人は驚いても美人だな』と再び鼻の下を伸ばしていた。

「そうですか…御幸君は私が思っていたよりもストイックな子だった様ですね。」

「御幸はムラツキがある奴ですが、間違いなく逸材ですよ。そのムラツキをやる気に

向けさせるのが俺の仕事です。」

監督は御幸を立てながらも、然り気無く自分をアピールしていく。教え子をだしにして自分をアピールする。

かつて御幸が思った通りにズルい男である。

「そうですか、それは御幸君の練習を見るのが楽しみですね。」

だが監督のアピールは届かず、高島はにこやかな笑顔でブルペンへと歩いていく。

ブルペンに向かう道中、監督は心の中でそっと涙を拭うのだった。

### 第36話☆

ブルペンで一也相手に投げ込みをしていると、あの美人なお姉さんが見学にやってきた。

「私の事は気にしないで練習を続けて。」

そう言われたので気にせず練習を続けていく。

夏の大会で得たポイントで成長させた能力に秋の大会までには慣れないといけないからな。

ちなみに今はこんな感じの能力だ。

基礎能力

最高球速：115 km (※145 km)

制球：A

スタミナ：D

変化球：カーブ4 (※5)

変化球2：チェンジアップ1 (※5)

新しい変化球としてチェンジアップを習得した。

このチェンジアップを習得する前に、スライダーとどつちがいいかクリスさんと一也に相談したらそこで一悶着あったんだよね。

チェンジアップを推すクリスさんと、スライダーを推す一也の舌戦が起こった。

クリスさん曰く、同じボールを抜く系統の変化球であるチェンジアップを覚えれば

俺のカーブの成長につながる可能性がある。

そしてボールを抜く感覚を養う事で、逆にボールが指にかかる感覚が

増す可能性があり、フォーシームが成長するかもしれないとの事だ。

対して一也曰く、縦変化の強い俺のカーブを活かす為に横変化のスライダーを

覚えた方が三振を取ったり、打者を打ち取りやすくなると主張した。

どちらの主張も一理あるなあと思ったんだけど、俺はチェンジアップを選んだ。

選んだ理由はクリスさんが言ったフォーシームの成長の可能性に惹かれたからだ。

ちなみに、野手能力はそのままである。

野手能力の成長は新変化球に慣れる時間の為に犠牲になったのだ…。

「パワプロ！そろそろアレ投げてくれ！」

おっと、一也から催促が来たから投げないとな。

俺は要求通りにチェンジアップを投げる。

だけど、ボールは狙った場所からかなりずれてワンバウンドしてしまった。

うーん、チェンジアップはまだちゃんとコントロール出来ないなあ…。

「一也！もう一球同じの行くぞ！」

俺の声に応える様に一也がミットを叩き鳴らしてから構える。

その仕草だけで俺は笑顔になってしまう。

俺は新たな変化球による新鮮な感覚を楽しみながら投げ込みを続けていった。



「御幸君もクリス君に負けない見事なブロックングね。」

高島はパワプロが投じたワンバウンドのボールを、後逸せずに受け止めた御幸を称賛する。

「それにしても…今、葉輪君が投げているのはチェンジアップ？」

フォーシームと変わらぬ腕の振りで投げられるボールは、僅かに利き腕方向に

変化しながら沈んでいく。

「葉輪君のチェンジアップはまだ大きな変化をしないけど、この緩急は

十分に武器になるわね。」

だが上手く制球出来ないのか、パワプロは何度も御幸に「ごめん！」と謝っている。

「ふふ、この子達はこれからも要チェックね。」

そう言つて高島は何かを手帳へと書き記すと、パワプロが投げ込みを終えるまで

ブルペンを見学するのだった。



投げ込みが終わると、美人なお姉さんに一也と一緒に声を掛けられた。

お姉さんは高島 礼というらしい。

俺と一也は礼ちゃんと呼ぶ事にした。

礼ちゃんはなんと青道高校のスカウトだった。

それを知った時はめっちゃテンションが上がってしまった。

礼ちゃんと話をすると、俺と一也はまだ中学1年生だから顔合わせ程度で

主目的はクリスマスさんみたいだ。

でも礼ちゃんはこれからも俺と一也に顔を見せにくるらしい。

これからも礼ちゃんが来ると知った監督がグツと拳を握つたのは見逃さない。

後で一也と一緒にイジツてあげよう。

礼ちゃんが帰ると監督は黄昏ていた。

監督？皆待つてるよ？

そんな事があつたが、今日の丸亀シニアの練習が終わつて貴子ちゃんと一緒にの帰り道での事。

何故か貴子ちゃんがむくれていた。

俺は膨らんでいる貴子ちゃんの頬をつつく。

だが、貴子ちゃんに両頬を引っ張られてしまった。  
解せぬ…。

その後、貴子ちゃんが礼ちゃんの事を聞いてきたので青道高校のスカウトだと説明した。

そうしたら貴子ちゃんにいつもの可愛い笑顔が戻った。

うんうん、貴子ちゃんは笑顔でいる方がいいね。

もちろん、むくれている顔も可愛いけどな！

その事を素直に伝えたら、また両頬を横に引っ張られた。

解せぬ…。

こうして俺の中学1年生の夏は過ぎていった。

そして季節が秋へと移り変わると、シニアリーグの秋の公式戦が始まるのだった。

## 第37話

シニアリーグで初めての秋の公式戦が始まった。  
俺は1年生ながらエースとして投げる事になった。

監督曰く、俺が一番コントロールが良くて試合を作れるからとの事。

ふふふ、監督の期待に応えて見せるぜ！

秋の公式戦の一回戦は六回を被安打3の無失点の結果だった。

試合の方は6―1で俺達の勝ちだ。

最後まで投げたかったけど、監督に大会はまだ続くから体力温存だと言われた。

大会が終わったらスタミナの成長も検討しよう。

丸亀シニアは二回戦も無事に勝ち抜く。

そして、三回戦は成宮のいる城南シニアとの試合だ。

成宮、勝負だ！



城南シニアとの試合。

俺達、丸亀シニアは後攻だ。

俺は一回の表を3人で抑える。

新変化球のチェンジアップは一回戦を含めてまだ使っていない。

クリスさん曰く、勝負所まで温存するとの事だ。

攻守交代で一回の裏。

城南シニアは成宮がエースとして先発している。

成宮はツアアウトまで取ると、うちのチームの三番打者を四球で歩かせてしまった。

ランナー1塁の状況でバッターは四番のクリスさん。

1つ息を大きく吐いてから成宮が投球を始める。

成宮は左右を幅広く使ってクリスさんと勝負していく。

夏の頃と比べて球速が上がってるかな？



3球目のバックドアのスライダーをクリスさんがファールして、カウントは

ワンボール、ツーストライクのバッティングカウント。

成宮がプレートから足を外してロージンバッグを手に取る。

クリスさんはそんな成宮を観察し続けている。

成宮が余分な滑り止めをフーツと吹き飛ばしながらプレートに足を掛ける。

そして、勝負の一球。

成宮が投じたボールは真ん中に行ってしまう。

クリスさんが力強くバットを振る。

だけど、クリスさんのバットからは快音が響かなかった。

「ストライク！バッターアウト！チェンジ！」

クリスさんを三振に抑えた成宮が吠えながらベンチに戻っていく。

ベンチに戻っていく成宮と目が合った。

成宮が俺を指差してくる。

なので、俺はサムズアップで応えた。

成宮！ナイスピッチング！

だけど、成宮はプライツと顔を逸らしてベンチに戻っていった。

あるえ〜？



三振してベンチに戻ってきたクリスさんに、一也が防具の着用を手伝いながら話掛けた。

「クリスさん、最後の一球…落ちました？」

「ああ、おそらくフォークだろう。」

フォークとな？

「夏は投げてなかったですよね？」

「ああ、夏が終わってから秋の大会までの間に覚えたんだろうな。」

ほほう、成宮も新変化球を覚えたのか。

やるな！成宮！

「さっきの打席はフォークの事は頭に無かったからな…次は打つ。」  
そう言うクリスさんの目には炎が見える様な気がする。

おお！燃えているな、クリスさん！

これまでクリスさんは、凡退する事はあっても三振する事はほとんど無かった。

そんなクリスさんは成宮に三振させられた事で、心に火がついたのかもしれない。

凄いな！成宮！

俺も負けないぜ！



城南シニアのベンチ。

そこには上機嫌の成宮の姿があった。

「クリスさんを三振にしたぜ！気持ちいい——！」

そう言いながら成宮は丸亀シニアのベンチに目を向ける。

「あんなに暑い中で一杯走ったんだからな！」

そう言う成宮の顔には、つらい練習を思い出している様には見えない笑顔がある。

野球で初めてライバルと認めた相手との試合を待ち望んでいたのだ。

成宮はベンチの最前列に行つて味方打線を応援していく。

四番、五番バッターが連続で打ち取られて六番バッターの成宮の打順になる。

1年生ながらエースとして先発しながらの六番バッター。

その事実が成宮の野球の才能を示している。

だが、そんな成宮をパウプロはフロントドアのカーブで見逃し三振に抑える。

「くっせ——！」

成宮は肩を怒らせながらベンチに戻りグローブを手取る。

「今日は俺が勝つからな、パウプロ！」

城南シニアと丸亀シニアの試合は、地区大会とは思えない両者譲らぬ投手戦となるのだった。

## 第38話

丸亀シニアと城南シニアの試合は、両チームのエースが一本のヒットも打たせないで中盤まで進んでいった。そして、四回の裏。

ツアアウトで丸亀シニアの打者は2打席目のクリス。成宮は初球からフォークを投げた。

クリスは球筋を見る為にこれを見送りワンストライク。

2球目はインコースにスライダー。

クリスはこのスライダーを打つがこれは三塁線を切れてファールとなる。

3球目はアウトハイにフォアシーム。

これは高めに外れてボール。

4球目に成宮はバックドアのスライダーを投げる。

これも外れてツーボール、ツーストライク。

そして、勝負となった5球目。

成宮はインコースにフォアシームを投げ込んだ。

クリスがバットを振る。

勝負の結果は…。

「オーライ！」

成宮が両手を拡げて内野手を制する。

そして…。

「アウト！スリーアウト！チェンジ！」

クリスと成宮の2打席目の勝負は、二度成宮に軍配が上がった。

この結果に球場の観客はざわめく。

リトルリーグMVPの看板を背負ってシニアデビューをした事もあり、

クリスの名は既にシニアリーグでは全国区となっている。

成宮はそのクリスを2打席連続で完璧に抑えたのだ。

この結果に丸亀シニアのチームメンバ―は動揺してしまう。

クリスが打ち取られて迎えた五回の表。

パワプロは城南シニアの四番、五番をそれぞれセカンドゴロ、サードゴロに打ち取るのだが、

丸亀シニアのセカンドとサードがその打球を続けてエラーをしよう。

これでノーアウト、1、2塁の状況となり、城南シニアのバッターは六番の成宮。

この状況に丸亀シニアの内野陣がマウンドに集まるのだった。



「悪い、パワプロ…。」

「俺もすまん…。」

先輩2人がめっちゃ凹んでる。

「大丈夫ですって！まだ点をとられたわけじゃないんですから！」

俺はそう言うのだが先輩達の顔色は晴れない。

仕方ないなあ…。

「先輩達、1ついいですか？」

「なんだ？」

先輩達が揃って返事をしてくる。

「俺、このままノーノーやりますので試合終わったらジュース奢ってください。」

俺がそう言うのと内野陣が顔を見合わせてから笑いだす。

「わかった！奢ってやるよ！」

「でも、失敗したらパワプロが奢れよな？」

そう言ってクリスさんを除いた内野陣は、俺をグローブで軽く小突いてから

それぞれの守備位置へと戻っていった。

「葉輪、チェンジアップを使っていくぞ。」

皆が離れた後、クリスさんがそう言ってくる。

「おおーほんとですか!？」

「ああ、あいつらにジュースを奢らせるつもりだからな。」

「ジューズは2本だから俺とクリスさんで丁度ですね。」

俺が笑ってそう言うと、クリスさんはミットで俺の胸を軽く叩いてから

キャッチャーボックスに戻っていった。

俺はプレートに足を掛ける前にロージンバッグを手に取る。

「ピンチはヒーローになるチャンス…。」

そう呟いてから俺はロージンバッグを置いてプレートに足を掛ける。

「楽しまないと損だよな！」

クリスさんがサインを出す。

俺は頷いてセツトポジションから投げ込む。

リリースの瞬間、カチリと指先の感覚が嵌まる。

1球目はフロントドアのカーブ。

成宮が一瞬仰け反る様に動くけど、ボールはインローギリギリに入り込んでいく。

「ストライクー！」

狙った場所に寸分変わらずに投げ込めた。

チェンジアップを覚えて投げるようになってから、以前よりも指先にボールの縫い目を

感じる様になった気がする。

そのおかげなのか、リリースの瞬間にカチリと感覚が嵌まる事が多くなった。

クリスさんが投げ返してきたボールを受け取ってから直ぐにサインを覗く。

サインに頷いて2球目を投げる。

1球目と同じ様にカチリと感覚が嵌まる。

2球目はアウトローにフォーシーム。

成宮がバットを振る。

だけど、ボールはバットの上を通過する。

「ストライクツーー！」

成宮を追い込んだ。

成宮はタイムを取ってから打席を外して素振りをする。  
胸がドキドキする。

早く投げたい。

成宮がヘルメットに手をやりながら打席に戻る。

俺はクリスさんのサインを覗き込むようにして見る。

クリスさんが出したサインに俺は笑顔になる。

遊び球は無し。

勝負だ！成宮！

俺はセットポジションからボールを投げ込む。

リリースの瞬間、指先の感覚がカチリと嵌まる。

勝負の3球目。

投げたのはアウトローへのチェンジアップ。

成宮が力強くバットを振る。

だけど、ボールはまだベースに届いていない。

そして…。

「ストライク！バッターアウト！」

成宮を三球三振に抑えた俺は、マウンドの上で雄叫びを上げるの  
だった。

## 第39話

成宮を三球三振で抑えた俺はその勢いで残る2人の打者も三振で抑えた。

五回の表のピンチを切り抜けた丸亀シニアだが、その後も成宮からヒットを

打つことが出来なかった。

そして、両チーム共にノーヒットで迎えた最終回。

俺は七回の表もノーヒットで抑えた。

そして七回の裏。

ここで成宮を攻略出来なければタイブレークルールの延長戦となる。

俺はノーヒットだが、延長では交代する事を監督から告げられた。体力的な問題でこれ以上投げるのはキツイんだよね…。

そして七回の裏を始める前のイニング間に監督の檄が飛んだのだった。



「お前ら、五回の表の事を覚えてるか？」

監督の言葉に丸亀シニアの皆が頷く。

「パワプロはチームのピンチを救ってくれた！お前らはこのままでもいいのか!？」

丸亀シニアの皆が拳を握りしめる。

「パワプロの熱投に伝えてやれ！」

「はい！」

そう皆が声を上げて七回の裏が始まる。

先頭打者は2番の白河だ。

白河は器用に成宮のボールをファールにして球数を稼いでいく。

「藤原、成宮の投球数は？」

「100球を超えました。」



監督の質問に貴子ちゃんが答える。

マウンドの成宮を見ると肩で息をしている。

白河はフルカウントになっても粘っていく。

そして、成宮が投げた11球目…。

「ボール！」

白河が成宮に粘り勝ってノーアウト、1塁。

遂に一回の裏以来のランナーが出たのだった。

この結果に丸亀シニアのベンチは盛り上がる。

続く2人目の三番バッターは成宮に三振で抑えられてしまう。

そして、この試合三度目となるクリスさんと成宮の対決。

丸亀シニアのベンチだけでなく、球場全体が盛り上がり始める。

打席に入るクリスさんを成宮がマウンドの上から睨みつけている。

成宮がアンダーシャツで額の汗を拭ってからロージンバッグを手  
に取る。

そして、成宮がプレートに足を掛けると球場全体が静まりかえる。

成宮はランナーがいるのを気にせず振りかぶって投球モーションに入る。

白河がすかさず走るが成宮の投球モーションに乱れは無い。

1球目。

成宮はバックドアのスライダーを投げる。

コースはアウトローにギリギリ入ってストライク。

この土壇場で成宮は最高のボールを投じている。

凄いな、成宮！

丸亀シニアの皆がベンチからクリスさんを応援していく。

対する城南シニアも負けじと成宮の後ろで守る者達が成宮を盛り  
立てていく。

二度、成宮が振りかぶる。

白河はその間に三塁へ走る。

2球目。

成宮が投げたのは真ん中低めからボールゾーンへと落ちるフォー  
ク。

クリスさんはこれを見逃してカウントはワンボール、ワンストライク。

ワンアウト、三塁のチャンス。

スクイズでもサヨナラの場面。

でも、監督はそのままクリスさんを見守っている。

打席を外したクリスさんはそんな監督を見て微笑む。

カッコいいぜ、クリスさん！

バットを一振りしてからクリスさんが打席に戻る。

成宮が三度振りかぶる。

3球目。

成宮が投げたのは1球目と同じバックドアのスライダー。

クリスさんはこのボールを見送る。

だけど…。

「ストライクツー！」

主審の判定はストライク。

これでカウントはワンボール、ツーストライク。

季節は秋なのに球場の雰囲気はまるで夏の様だ。

そんな雰囲気の中で成宮が振りかぶる。

4球目。

成宮が投げたのはインハイへのフォーシーム。

プレートの左側に立って投げ込まれたその1球は、所謂クロスファア  
イアと呼ばれるものだ。

硬球がクリスさんの顔付近を目掛けて迫っていく。

だけど、クリスさんは臆せずに踏み込んだ。

そして…。

キンッ！

金属バットの音が球場に響き渡る。

打球はレフトの頭上を高く越えていく。

バッターボックス中でクリスさんが右手を高く突き上げる。

ボールはそのままスタンドの中に。

クリスさんのサヨナラツーランホームランだ！

こうして俺達、丸亀シニアは城南シニアとの試合に2-0で勝利したのだった。

## 第40話

俺達丸亀シニアは城南シニアに劇的なサヨナラ勝利をした。

そして、試合が終わって帰り仕度をしていた時…。

ピロン♪

頭の中で機械音が鳴った。

「うえい？」

俺は反射的に能力を使った。

※一定条件を満たしたので『ノビ4』が『ノビ5』に成長しました。

※『ノビ5』を取得した事で現カテゴリーにおける最高球速の限界を

『140km』に修正しました。

『ノビ5』とな？

俺は『ノビ5』の詳細を試してみる。

『ノビ5』

- ・フォーシームのノビがとても良くなる特殊能力である。
- ・『ノビ4』よりも体感速度が上がる効果がある。
- ・この能力は金特殊能力である『怪物』の取得条件の1つである。

へ〜、良くわかんないけどフォーシームの質が成長したって事ね。

「パワプロ！」

俺が能力画面を見てボンヤリしていると、成宮が声を掛けてきた。

「次は俺が勝つからな！」

「おう！俺も負けないぜ！」

よく見ると成宮の目元が赤い。

俺の目線に気づいたのか、成宮はプイツと顔を逸らしてから俺に向けて舌を出してきた。

そして、成宮は走って戻っていった。

また投げ合おうぜ、成宮！

◆ 秋の大会の四回戦も順調に勝った丸亀シニアは、松方シニアとの決勝戦に挑む。

でも、その決勝戦で先発する予定の俺は絶不調だった。

あ、体調とかが悪いわけじゃないぞ。

俺が絶不調の理由はフォーシームを上手くコントロール出来なくなっただ事だ。

◆ 大会期間中に『ノビ5』を取得した事で、フォーシームを投げる時の

感覚が変わってしまったのだ。

試合前の投球練習の時、フォーシームを投げたらクリスさんがビツクリした程だからな。

フォーシームを上手くコントロール出来なくなった事をクリスさんに謝ると、

クリスさんは微笑みながら「気にするな」と言ってくれた。

まあ、カーブとチェンジアップはしっかりとコントロール出来るから

そう言ってくれたのかもしれない。

そう言えば投球練習を見ていた一也が、何故か俺のフォーシームを

受けたいと

クリスさんをお願いしていたな。

断られてたけど。

一也？試合前だぞ？

◆ 大会が終わったら練習の時に投げてやるから。  
おう！約束だ！

秋のシニアリーグ選抜大会の東京地区決勝戦。

丸亀シニアと松方シニアの試合は中盤となる四回を迎えていた。

先攻の松方シニアの一番打者が緊張を感じさせる顔で打席に入る。強豪の松方シニアの打者が何故そんな顔で打席に入るのか…。

それはマウンドに立つパウプロが原因だった。

一回から三回までのアウトを全て三振で取っていたからだ。

そう、ここまで九者連続三振なのである。

では、何故松方シニアの打者が九者連続三振をしてしまったのか…。

それはパウプロのフォーシームを打てないからだ。

三回戦で城南シニア相手に見せたピンポイントのコントロールでは無い。

ハッキリ言ってこの試合のパウプロのフォーシームは甘い所ばかりに投げ込まれる。

そして、シニアリーグで考えればパウプロのフォーシームの球速は決して速いものではない。

だが、そんなフォーシームに強豪である松方シニアの打者のバットが掠りもしないのだ。

マウンドのパウプロが投球モーションに入る。

松方シニアの一番打者が狙うのはフォーシーム。

狙い通りのフォーシームが投げ込まれてきた。

松方シニアの打者がバットを振る。

だが、ボールにバットが当たらない。

「ストライク！」

松方シニアの打者がタイムを取って打席を外す。

その打者を横目で見ながらクリスがマスクの奥で微笑む。

「たった一試合の経験で化ける事があると親父に聞いた事があるが…まさかこの目で見る事になるとはな。」

クリスはパウプロのフォーシームを受けた感覚を思い出す様に、ミットの中の手を動かす。

「まだコントロール出来ない様だが…この球質なら十分武器になる。」

打席に松方シニアの一番打者が戻る。

「小細工は抜きだ。力押しで行くぞ。」

マスクの奥でそう呟いたクリスは、パウプロにフォーシームのサインを出したのだった。



秋のシニアリーグ選抜大会の東京地区決勝戦。

パウプロは松方シニアを相手にシニアリーグで2度目のノーヒットノーランを達成する。

その内容は21個のアウトの内、15個の三振を奪うというものだった。

## 第41話

秋の大会を優勝した俺達丸亀シニアは、春の選抜大会の全国決勝トーナメントに挑む事になる。

俺は秋の大会で得たポイントで能力を少しづつ成長させていった。練習だけでなく、クリスマスやら初詣やらを貴子ちゃんと一緒に楽しんだぞ！

クリスマスの時に貴子ちゃんにケーキをアッンされたり、初詣の賑わいの中で

はぐれない様に貴子ちゃんが腕を組んできたりしたな。

うん、何故か最近は貴子ちゃんとの距離が物理的に近い事が多いのだ。

俺はメツチャ嬉しいんだけど、貴子ちゃんは大丈夫なのかな？

ほら、貴子ちゃんは友達とかに誘われたりしてたじゃん。

え？大丈夫？

まあ、貴子ちゃんが大丈夫だって言うならいいか！

そんなこんながあつて冬が過ぎていき、春の大会の日がやってきた。

でも、その春の大会で丸亀シニアにアクシデントが起きた。

なんと、クリスマスさんがインフルエンザで大会に出場出来なくなったのだ。

そこで急遽、一也が正捕手となって春の大会に挑む事に。

そして、春の大会の一回戦：ここでも問題が起きた。

一也の動きが明らかに固いんだよね。

監督曰く、初めての全国の舞台だから緊張しているんだろうとの事。

監督の言葉通りに、緊張しているからなのか一也のミスが目立った。

セーフティバントを処理して1塁に送球する時に悪送球したり、練習の時では見ない様な

捕球ミスをしたりといった感じだ。



監督は一也の成長の為にしばらく付き合っただけでやってくれと言ってきた。

それは構わない。

でもこのままだと、一也は調子を取り戻さないまま試合が終わっちゃうんじゃないかな？

それだと一也はこの試合を楽しめないまま終わる事になる。

それはもったいない。

よし！ここは俺が一肌脱いでやろうじゃないか！



「はあ…。」

春の大会の一回戦、試合は三回の表の丸亀シニアの守備が終わった所。

俺はこの試合、何度もエラーをした。

そのせいで相手チームに先制点を取られてしまった。

身体がフワフワして、いつもの自分じゃないのはわかっている。

だけど、どうしたらいいかわからない。

もう、パウプロのボールを受ける壁役に徹した方が…。

ベンチに戻ってそんな事を考えながら頭にタオルを被ると、パウプロが俺の所にやってきた。

「おっす、一也！」

パウプロがそう言うってくるけど、正直合わせる顔が無い。

「ほらほら、顔を上げてこれでも飲みなって。」

そう言うってパウプロは手に持っていた魔法瓶から紙コップに何かを注いだ。

俺はため息を吐きながら紙コップを受け取る。

「熱いから気をつけろよ。」

パウプロにそう言われたので俺は少し息を吹いて冷ましてから口にする。

「…甘い？」

「おう！うまいだろ！」

そう言ってパウプロは親指を立てる。

「パウプロ、なんだこれ？」

「アツプルティーだよ。」

そう言いながらパウプロもアツプルティーを飲む。

「あちち！」

舌を出して熱がるパウプロの仕草に俺は笑ってしまう。

「ぶっ！」

「お？やっとな。」

そう言ってパウプロはニツと笑顔を見せた。

俺はアツプルティーをもう一口飲む。

「…うまい。」

「だろ？それに、暖まるから落ちつくんだよな。」

うん、パウプロの言う通りだ。

フワフワとした感じが無くなった。

「ありがとな、パウプロ。」

「気にすんなって！それより、試合を楽しもうぜ！」

「おう！」

この後、俺はシニアで初めてホームランを打った。

そのホームランが逆転の一発となり、試合は3-1で俺達が勝ったのだった。

## 第42話

春の大会の一回戦を無事に勝った丸亀シニアは、その勢いのままに決勝戦まで勝ち進んだ。

二回戦からの一也は本来の動きに戻って、クリスさんにも劣らないだろう活躍をしていた。

そう言えば、一也は二回戦からアップルティーを持参してくる様になった。

気に入ったのかな？

そんな感じで決勝戦に挑んだ丸亀シニアだったが、決勝戦では惜しくも負けてしまった。

俺の投球内容は七回を被安打4、失点1、奪三振9だった。

決勝戦は七回では決着がつかずに延長戦にもつれ込んだ。

そして、延長戦での点の取り合いの末に負けてしまったのだ。

夏の大会でリベンジするぜ！



春の大会が終わり、俺は中学2年生、貴子ちゃんは中学3年生になった。

そして夏の大会に向けて、丸亀シニアは恒例のレギュラーを決める紅白戦を行った。

春の大会に出場出来なかったからなのか、クリスさんが凄い活躍をして

レギュラーの座を勝ち取った。

一也も春の大会で経験を積んだからなのか、クリスさんに負けないぐらいの結果で

監督にアピールしたんだけど、レギュラーには選ばれなかった。

一也はこの結果に悔しそうだったけど、どこか楽しそうだった。

そして一也はクリスさんと笑顔で握手した後、不意に俺に質問をしてきたのだった。

◆  
「なあ、パワプロ。なんで俺はレギュラーに選ばれなかったと思う?」  
紅白戦が終わって整理運動をしていた時、一也が首を傾げながら俺にそう聞いてきた。

「バッティングはクリスさんの方が上だけど、キャッチャーとしては負けてない自信がある。」

やっぱりバッティングがクリスさんが選ばれた理由だと思うか?」  
一也が言う通りにバッティングはクリスさんの方が上だと思う。

でも、一也もチャンスの場面ならクリスさんに負けられないだけのバッティングが出来るんだよな。」

「うくん:俺の考えは違うなあ。」

「お?じゃあ、何が原因だと思う?」

そう言つて一也は食い付く様に身を乗り出してきた。

「あくまでも俺の考えだぞ。」

「おう!」

「一也には悪いけど、ハッキリ言えばクリスさんの方が投げやすいんだよね。」

俺の言葉に一也は不服そうに眉を寄せる。

「どういう事だ?」

「うくん:何て言えればいいのかなあ?キャッチングの仕方かなあ?」

俺と一也がそんな風に話していると、俺達の所にクリスさんがやって来た。

「その話、俺も興味あるな。」

「あ、クリスさん。」

クリスさんが俺と一也と一緒に整理運動を始めた。

「パワプロ、俺とクリスさんのキャッチングはどう違うんだ?俺はしっかりと」

音を出して取ってるぞ?」

「言っておくけど、あくまでも俺の感覚だからな?」

俺の言葉に一也が頷いたので続きを話す。

「一也もそうなんだけど、キャッチャーの人ってピッチャーが投球モーションに入ると、

一回ミットを下げるだろ？」

「ああ、ピッチャーの投球モーションに合わせてリズムを取ってるな。」

「だろ？でもさ、それって一瞬だけど投げ込む目標が無くなっちゃうんだよね。」

そうすると俺としては少し投げにくかったりするんだ。」

俺の言葉に一也は「へ〜」と言いながら左手の動きを確認している。

俺達の周りで整理運動をしていた投手の人達の何人かが、俺の言葉に同意する様に頷いてる。

「それでクリスさんなんだけど、クリスさんはずっとミットの面をピッチャーに

見せてくれるんだ。そうしてくれると、投げ込んだ時にボールの軌道がわかりやすい様な

気がするんだよね。だから、クリスさんの方が投げやすいって感じてるんだと思う。」

思うとか感覚的で曖昧な表現ばかりだけど、俺としてはそう感じるんだから仕方ない。

でも、周りにいた投手の人達の何人かは何度も頷いていた。

「へ〜…クリスさん、タイミング取らないと捕りにくくないですか？」

「俺もタイミングは取っているぞ。手首じゃなくて肘でな。」

「肘…。」

クリスさんの返答に一也は左腕を前後に動かしながら確認をしている。

周りに目を向けると、聞き耳を立てていた捕手の人達も腕を前後に動かしている。

「へ〜、肘かあ…クリスさん、秋まで残ってくださいよ。そうしたらクリスさんからレギュラーを奪いますから。」

一也が笑いながらそう言う。

「御幸、キャッチングもそうだが、お前はチャンス以外でも打てるようにならないとな。」

「たはっ！それは言わないでくださいよ。」

クリスさんと一也のやり取りに皆が笑う。

こうして俺達は良い雰囲気の中で夏の大会に挑むのだった。

## 第43話☆

シニアリーグの夏の大会が始まろうとしている。  
俺はいつもの様に能力を確認していた。

基礎能力

最高球速：130km（※140km）

制球：S

スタミナ：B

変化球：カーブ5（※5）

変化球2：チェンジアップ3（※5）

投手能力はいい感じに成長出来たと思う。

この調子で行けば、中学卒業前に現カテゴリーで成長させられる限界までいけそうだ。

続けて野手能力を確認していく。

基礎能力2

弾道：2

ミート：E

パワー：D

走力：C

肩力：B

守備：C

捕球：C

投手能力を優先していたので野手能力はそこまで成長していない。

そして、野手能力は守備を優先していたから、打撃はまだまだの状態だ。

今度は特殊能力の確認だ。

特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『ノビ5』

『キレ◎』

新しく『キレ◎』を取得した。  
能力の詳細はこんな感じだ。

『キレ◎』

- ・変化球のキレがとても良くなる特殊能力である。
- ・『キレ○』よりも変化球が打者よりで変化する様になる。
- ・金特殊能力である『驚異のキレ』の取得条件の1つである。

『キレ◎』の詳細はこんな感じだ。

これを取得したら、カーブとチェンジアップの制球に慣れるのに少し時間が掛かったな。

でも、ブルペンの投げ込みでクリスさんが後逸する程のキレを見せたので嬉しかったぜ！

こんな感じの能力で夏の大会を戦っていく。

やってやるぜ！



丸亀シニアは夏の大会を順調に勝ち進んでいった。

俺は一回戦を被安打1、奪三振11で完封。

三回戦の松方シニアを被安打2、奪三振14で完封した。

そして、迎える決勝戦の相手は成宮がいる城南シニアだ。

成宮、勝負だ！





夏のシニアリーグ選手権大会の東京地区決勝戦。

丸亀シニアと城南シニアの試合が行われる球場には、多くの人達が観戦に訪れていた。

「やっぱり東京地区で一番の投手は、城南の成宮だろう。」

観戦に訪れていた野球好きの1人がそう言うと、隣の人が反論する。

「いやいや、丸亀シニアの葉輪だって！中学生であるコントロールはありえねえだろ!？」

その反論を皮切りに2人の会話が弾んでいく。

「でもよお、成宮は最近流行りのスライダーとフォークを武器にするんだぜ？」

「やっぱり成宮の方が上だよ。」

「葉輪はカーブとチェンジアップが持ち球だけど、あのノビのあるフォーシームとの

コンビネーションはエグイってもんじゃないぞ。だから葉輪が上だって。」

「成宮はバッティングもいいんだぞ！投手なのに打順は三番だからな！」

「うっ、それを言われると困る…。」

そんな会話に手帳を見ながら微笑む女性がいた。

丸亀シニアに何度も足を運んでいる高島 礼である。

「あんな会話がされる程に葉輪君はシニアの中心人物になったのね。」  
そう言いながら高島は手帳を閉じて球場を見渡す。

「市大三高だけじゃないわ：他の高校のスカウトも見に来ているわね。」

高島は何度も足を運んで丸亀シニアの選手であるクリス、御幸、葉輪と話をしている。

クリスからは既に色好い返事を貰えている。

この夏の大会が終わったら青道高校を見学する約束を取り付けているのだ。

後は御幸と葉輪の2人だが、彼らはまだ中学2年生である。

この2人に貴重な特待生枠を使うべきか、監督である片岡 鉄心と話し合わなければならない。

「御幸君と葉輪君には、それだけの価値があると思っているのだけだね。」

高島がそう呟いた時、球場がざわつき始めた。

いよいよ、丸亀シニアと城南シニアによる夏の大会の東京地区決勝戦が始まる。

「さて、スカウトの役得として今は試合を楽しみましょうか。」

## 第44話

丸亀シニアと城南シニアの試合は成宮の三者連続三振から始まった。

成宮、凄いな！

俺も負けないぜ！

そう意気込んで俺はマウンドに向かう。

そして1回の裏。

一番のカルロスをショートゴロ、二番を三振に抑える。

そして迎える三番バッターはピッチャーの成宮。

ピッチャーなのに三番バッターとか、成宮は本当に凄いな！

そんな成宮と投げ合えるのは本当に楽しい。

マウンドでの笑顔が止まらない。

クリスさんのサインに頷いて投球モーションに入る。

2球で成宮を追い込むと、俺は成宮をチェンジアップで三振に抑えたのだった。



「くっそー！」

パウプロに三振に抑えられた成宮が悔しそうにしながらベンチに戻っていく。

「なんだよ、あのチェンジアップ！ゆるいボールだから楽勝だと思っただのに、ボールが

ぜんぜん来ねえじゃん！」

成宮は文句を言いながらもグローブを手に取る。

「チェンジアップか…あのゆるい変化球を覚えたら、俺って無敵じゃね？」

成宮は何かイタズラを思い付いた子供の様な笑みを浮かべる。

「大会が終わったらサクツと覚えてみつかない！」

そう言ながら成宮は走ってマウンドに向かうのだった。

◆  
丸亀シニアと城南シニアの試合が行われている球場に観戦に訪れた人達は、成宮とパワプロの

1回の投球内容から投手戦となる事を予想した。

だが、その予想は裏切られる事になった。

その原因は丸亀シニアの四番バッターであるクリスのせいである。

2回の表、クリスは成宮が投じたインローのフォークをレフトスターンドに叩き込んだ。

これで1-0。

投手戦となると予想した試合の均衡が早くも崩れる。

だが、成宮は後続のバッターにはヒットを許さずに抑えていく。

そして迎えた4回の表ツーアウトの場面で丸亀シニアのバッターはクリス。

この試合、2度目の対戦。

クリスは成宮のバックドアのスライダーを、右中間に運ぶツーベースヒット。

この結果に成宮のコントロールが乱れ始める。

だが成宮は踏ん張り、クリス以外のバッターにヒットを許さない。

回は進み、最終回となる7回の表ワンアウトの場面。

丸亀シニアのバッターはクリス。

この試合、3度目となる成宮とクリスの対戦。

成宮はアウトローへフォーシームを投げ込む。

軍配は…三度クリスへと上がった。

◆  
クリスさんが右手を突き上げながらベースを回っていく。  
クリスさんはこの試合、2本目のホームランを打ったのだ。  
丸亀シニアのベンチは凄い盛り上がりだ。

俺も一緒に盛り上がるぜ！

ウオ——！

ふとマウンドに目を向けると、成宮がガツクリと項垂れている。成宮の調子は悪くなかった。

でも、今日の試合はクリスさんが凄過ぎるんだよな。

そんな事を考えているとクリスさんがベンチに戻ってきた。

俺は出迎えのハイタッチをする。

イエーイ♪

「葉輪、これで2点差だが、最後まで気を引き締めていくぞ。」

「はい！最後まで楽しんで行きましょう！」

俺の答えにクリスさんは微笑みながら胸を軽く小突いてきた。

その後、7回の裏を三人で抑えて、俺達丸亀シニアが城南シニアに2-0で勝った。

俺の投球内容は被安打2、奪三振12の完封だった。



夏のシニアリーグ選手権大会の全国決勝トーナメント。

俺達、丸亀シニアは勝ち抜いて全国優勝をした。

大会終了後の表彰式でクリスさんがMVPに選ばれた。

流石クリスさんだぜ！

そしてクリスさんはシニアMVPの肩書きと共に、丸亀シニアを卒業していったのだった。

## 第45話

夏の大会が終わり、クリスさんを含めた中学3年生が丸亀シニアを卒業していった。

貴子ちゃんも青道高校の受験の為に丸亀シニアを卒業していった。3年生が抜けて新チームのスタメンを決める紅白戦をしていた時、礼ちゃんが

丸亀シニアの紅白戦の見学にやって来た。

どうやら青道高校の見学をしたクリスさんが、青道高校への進学を決めたらしい。

そして、クリスさんは学力でも問題ない為に特待生として青道高校に行くようだ。

流石クリスさんだぜ！

礼ちゃん！俺も青道に行くから！

え？貴子ちゃんから聞いてる？

いつの間に仲良くなったのん？

まあ、そんな感じで時間が過ぎて行って秋の大会が始まった。

俺はエースとして一回戦と三回戦に投げて完封したぜ！

でも、残念な事に丸亀シニアは四回戦で松方シニアに負けてしまった。

松方シニアの投手は一年生だった。

確か…東条？だったかな？

球速が速い訳でもなく、大きな変化球もない。

それでも、低めに丁寧に投げ続けていって、うちの打線をなんとか抑えていったのだ。

試合が終わってみれば4-6で負けていた。

監督曰く、成宮以外に注意を払ってなかった油断が敗因との事だ。

四回戦で俺達に勝った松方シニアは決勝戦で城南シニアと戦う事になる。

俺は松方シニアと城南シニアの試合を一也と、そして受験勉強の息抜きに

誘った貴子ちゃんの3人で見に行つたのだった。



カキーン！

金属バットの音と共にボールが左中間へと飛んでいく。  
マウンドにいる成宮が目を見開いている。

「また打たれた。」

「うん、今度も真ん中の甘いボールだったわ。」

俺は右隣に座る貴子ちゃんとそう話す。

「一也、なんで打たれたのかわかったか？」

「いや、ハッキリとはわかんねえ。」

俺は左隣に座る一也に話を振ってみるが、一也も成宮の不調の原因はわからない様だ。

「鳴の奴…なんか新しい変化球でも試してるのか？」

「鳴？」

「ああ、鳴と俺の家って近くてさ、自主練で走り込みをしている時にバツタリ会つたんだ。」

その時に『秋の大会でビックリさせてやる！』って言ってたんだ。」  
俺と貴子ちゃんは「ふくん」と言いながらマウンドの上にいる成宮を見る。

現在試合は四回の松方シニアの攻撃中でスコアは5―2で松方シニアが勝っている。

球場にいる人達は成宮が打たれる度にざわついている。

カキーン！

また成宮が打たれた。

これで松方シニアに6点目が入る。

あ、城南シニアの監督が出てきた。

「流石に鳴は交代だろうな。」

一也の言葉に俺と貴子ちゃんは頷く。

そして、一也の言葉通りに成宮は交代となった。

「さて、俺はそろそろ行くわ。パワプロと藤原先輩は…そのままデートかな？」

一也が笑いながらそう言うと、貴子ちゃんは顔を真っ赤にした。

「貴子ちゃんとのデートなら俺は大歓迎だ！」

「たはっ！ご馳走さまです…っつと。」

一也はそう言いながら立ち上がると、手をヒラヒラと振りながら帰っていった。



「あれで2人は付き合っていないっていうんだから、わかんねえよなあ。」

球場からの帰り道、御幸はそう言いながら苦笑いをする。

「さて、帰りにバッティングセンターにでも寄っていくか。」

御幸はそう言いながらショルダーバッグに入っているミットをポーンと叩く。

「来年の夏の大会ではしっかりとアピールして、礼ちゃんから特待生の枠を」

貰わないといけないからな。」

そう言うと御幸はショルダーバッグから魔法瓶を取り出して、熱いアップルティーを飲む。

春の大会以来、御幸には欠かせない飲み物となったのだ。

「よし、行くか！」

そう言うと、御幸は笑顔でバッティングセンターに向かって走り出した。



秋のシニアリーグ選抜大会の東京地区予選。

多くの人達の予想を覆して松方シニアが優勝した。

番狂わせと言える勢いを得た松方シニアが春の全国大会でも暴れ



るのかと思われたが、

残念ながら松方シニアは春の全国大会の二回戦で敗れてしまった。

こうして春が終わり、季節は夏へと移り行く。

そして、葉輪 風路のシニアリーグ最後の大会が始まるのだった。

## 第46話☆

春が過ぎて俺は中学3年、貴子ちゃんは高校1年生になった。

貴子ちゃんは無事に青道高校に入学して野球部のマネージャーになった。

真摯にマネージャーの仕事をして、野球の知識もあり、スコアブックもつける事が出来る

貴子ちゃんは、高校1年生ながら早くも片岡監督の信頼を勝ち取りつつあるみたいだ。

流石、貴子ちゃんだぜ！

俺の自慢の幼馴染みさ！

そして、丸亀シニアの練習の見学に来た礼ちゃんから、クリスさんが1年生ながら

正捕手の座を勝ち取ったと聞いた。

ただ、シニアMVPの肩書きに野球部のOBの人達から過度に期待されているらしい。

責任感の強いクリスさんが、練習をし過ぎてオーバーワークにならないか心配の様だ。

礼ちゃん！クリスさんに楽しんで野球をしようって伝えて！

え？クリスさんが予想した通りの言葉だった？

まさか、クリスさんには予知能力が!?

そんな感じでビツクリしている俺を見た一也と礼ちゃんは、顔を見合わせた後に笑っていた。

そして迎えた俺にとってシニアリーグで最後の大会。

夏のシニアリーグ選手権大会が始まるうとしていた。

一回戦の相手は松方シニアだ。

秋のリベンジだ！

やってやるぜ！



松方シニアとの試合の前に、俺は能力を確認していた。

基礎能力

最高球速：140km（※140km）

制球：S

スタミナ：A

変化球：カーブ5（※5）

変化球2：チェンジアップ5（※5）

投手能力はスタミナ以外を、現カテゴリーでの限界まで成長させる事が出来た。

去年の秋の大会で優勝して、春の大会にも出場していれば、スタミナも限界まで

成長させる事が出来たと思うけど、負けてしまったものは仕方ない。

秋の大会で監督に言われた様に、油断はしない様にしないと。もつとも、俺に出来るのは楽しんで投げる事だけなんだけどな！次に野手能力を見ていく。

基礎能力2

弾道：2

ミート：D

パワー：D

走力：B

肩力：A

守備：A

捕球：A

打撃能力以外はいい感じに成長出来たと思う。

むしろ、当たり前前の様に打撃も出来る成宮が凄いだけなんだよなあ…。

順当に行けば、成宮がいる城南シニアとは東京地区の決勝戦で戦う事になる。

今から楽しみだぜ！

おっと、今は松方シニアとの試合を楽しまないとな。

特殊能力については特に変わらないから省略だ。

こんな感じの能力で、俺はシニアリーグで最後の大会に挑む。

やってやるぜ！



一回の表、松方シニアの先発投手は、去年の秋の大会で俺達に勝った東条という2年生だ。

東条はフォーシームとチェンジアップを中心に、低めに丁寧に投げていく。

でも、丸亀シニアの一番バッターの白河が、打球を綺麗にライト前に流して出塁する。

二番バッターは打ち取られてしまったけど、三番バッターがセンター前にヒットを打つ。

これでワンアウト、1、2塁のチャンス。

そして、東条が迎えるのは四番バッターの一也だ。

カキーン！

一也がアウトローのチェンジアップを左中間に打つ。

走者一掃のタイムリーツーベースヒットだ！

ナイスバッティング、一也！

その後、一也がホームに帰って追加点が入り、一回の表で東条から3点を奪った。

そして一回の裏。

俺は三者三振で松方シニアの打線を抑えた。

その後、東条は二回、三回と失点して、三回の表のワンアウトの状況で交代した。

そして試合は進んでいき7-0で丸亀シニアの勝利だ！

俺の投球内容は七回を被安打2、奪三振14の完封という結果だった。



「葉輪さん！」

松方シニアとの試合が終わって帰り支度をしていた時、東条が俺の所にやって来た。

「今日の試合、ありがとうございます！」

そう言って東条は頭を下げてくる。

「こつちこそありがとう…えっと、東条でいいんだよね？」

「はい！」

東条が元気に返事をしながら頭を上げた。

「葉輪さん、1つ聞いてもいいですか？」

「ん？何を？」

「俺、速いボールを投げられるわけじゃないし、大きな変化をする変化球を」

投げられるわけでもないんです…。」

そこまで言うと、東条は俯いてしまった。

「今日の試合が終わって、俺はこのまま投手をやっているのになって…。」

「東条、投手好きじゃないの？」

俺の言葉に東条は慌てた様に顔を上げた。

「いえ、好きです！でも、これからも投手を続けていく自信が無くて…。」

投手が好きなら答えは1つだ。

「投手が好きなら続けていこうぜ！」

「いや、でも、俺は葉輪さんみたいに速いボールも、カーブも無いし…。」

「今は無いだけだろう？」

俺の言葉に東条が目を見開いた。

「東条が野球を楽しめるんなら野手への転向もいいと思うよ。でもさ、そうじゃないんなら

俺はもつたいたいと思うな。」

「野球を楽しむ…。」

そう呟いた後、東条は笑顔になった。

「葉輪さん！ありがとうございます！俺、バッティングも好きですけど、もう少し投手を

続けてみようと思います！」

そう言つて東条は笑顔で帰っていったのだった。



夏のシニアリーグ選手権大会の東京地区予選。

松方シニアに勝った丸亀シニアは勢いに乗って決勝戦まで勝ち進む。

そして迎えた東京地区予選の決勝戦。

地区予選とは思えない多くの人達が球場に訪れて見守る中で、丸亀シニアと

城南シニアの試合が始まるのだった。

## 第47話

夏のシニアリーグ選手権大会の東京地区決勝戦。  
俺と成宮のシニアで最後の投げ合いが始まった。

一回の表。

俺は先発のマウンドに笑顔で立っていた。

「今日は父さんと母さんも見に来ているし、良いところを見せたいな。」

投球練習が終わって主審が試合開始を告げた。

「よっしゃー！行きますかー！」

俺は一也のサインに頷く。

そして、楽しみながらボールを投げ込んでいくのだった。



一回の表。

パウプロは三者連続三振の完璧な立ち上がりを見せる。

対する成宮は先頭打者の白河を歩かせてしまうものの、二番、三番  
バッターを

連続三振に抑える。

そして、迎えたのは丸亀シニアの四番バッターである御幸。

成宮は御幸を二球でツーストライクに追い込む。

追い込んだ状況で、成宮はアウトローにゆるいボールを投げ込んで

だ。  
そのボールを想定していなかったのか、御幸は空振り三振をしてしま

まう。  
一回の攻防は両チーム共にノーヒットで終えたのだった。



「たはっ、鳴の奴…去年の秋に投げようとしていたのはあれだったの

か。」

そう言いながら、一也がベンチに戻ってきた。

「一也、成宮は何を投げて来たんだ？」

「チェンジアップだろうな。」

「チェンジアップ？」

「ああ、比較的速い変化球のスライダーとフォークに加えて、あのゆるいチェンジアップだ。」

今日の鳴を攻略するのはちよつと難しそうだな。」

難しいというわりには、一也は笑顔を浮かべながら防具をつけている。

「よしー行こうぜ、パウプロー！」

「おうー！」

俺と一也は、去年の秋から更なる成長を見せる成宮との勝負を楽しんでいくのだった。



二回からは両チームのエースによる三振ショーが繰り広げられた。

パウプロが緩急を使って、ストライクゾーンに自在にボールをコントロールしていく。

対する成宮は左右を幅広く使っていく、丸亀シニアの打線を封じていく。

パウプロと成宮のハイレベルな投げ合いに、球場に観戦に訪れた野球好きな人達は酔いしれた。

パウプロと成宮の投げ合いは、両者共に二桁奪三振を達成して七回を終える。

そして、タイブレークとなる延長戦になるが、パウプロと成宮の投げ合いは続いた。

八回も両者共にノーヒットで終えた。

成宮はここまで四個の四球を出しながらもノーヒットピッチング。

そして、パウプロは四球を一つも出さないパーフェクトピッチング



をしていた。

中学生とは思えない投手戦に各高校のスカウト陣が唸る。ストライクカウント1つで球場が沸き上がる程に盛り上がっている状況で迎えた九回。

パワプロは一回と変わらぬ球威で三者連続三振で抑える。

球場に爆発した様な歓声が響き渡っていく。

そして、九回裏。

成宮も二者連続三振で抑える。

そして九回裏、ツーアウト、1、2塁の状況で迎えたバッターは丸亀シニアの

四番バッターである御幸。

球場は沸騰しそうな程に熱い空気に包まれたのだった。



「一也！ヒーローになるチャンスだぞー！」

丸亀シニアのベンチからパワプロが声援を送っている。

御幸はその声援に笑顔で応えてバッターボックスに向かった。

「九回裏、ツーアウト、1、2塁の状況…ワンヒットでサヨナラのチャンス…。」

御幸はバッターボックスに入る前に、自分に言い聞かせる様に呟いていく。

「ここまでの配球、今の状況で鳴が選ぶ決め球は？」

御幸は1つ大きく息を吐いてからバッターボックスに入った。

夏の熱気とここまでの投球による疲労で汗をかいている成宮が、

アンダーシャツで汗を拭っていく。

御幸の胸がドキドキと音を立てている。

だがその鼓動を、御幸は不快に思っていないかった。

「二打でヒーローのチャンス…燃えないわけがないよな。」

バッターボックスの中でスパイクで足場を作りながら、御幸がそう呟く。

御幸は歯を見せて笑うと、マウンドの成宮を見据える。成宮がセツトポジションからボールを投げ込んでくる。

一球目はインローにフォーク。

御幸はこれを見送る。

主審の判定はボール。

この主審の判定に、成宮を鼻根にしている観客からヤジが飛んでくる。

このヤジがハッキリと聞こえた御幸は苦笑いをする。

ロージンバグを手にしてから、成宮がプレートに足を掛ける。

二球目。

成宮が投じたのはインハイへのフォーシーム。

御幸は僅かに避ける様に身体を動かして見送る。

主審の判定はストライク。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

御幸がタイムを取って打席を外す。

一度素振りをしてから御幸はバッターボックスに戻る。

三球目。

成宮が投じたのはインローへのスライダー。

プレートを横一杯に使って角度をつけられたスライダーが、御幸の背中側から変化してくる。

御幸は三度見送る。

主審の判定は…ストライク！

これでカウントはワンボール、ツーストライク。

御幸は追い込まれた。

球場が成宮のピッチングに盛り上がる。

だが、バッターボックスの中の御幸は冷静だった。

(鳴の左右のコントロールドールが甘くなってる…。)

そう考えながら、御幸はロージンバグを手取る成宮を観察していく。

(インコースに3つ続けている…カウントには余裕がある…一球外に外すか?)

成宮がロージンバッグを置いて、プレートに足を掛けた。

（今の鳴のコントロールなら、外の球が甘くなる可能性は高い…それを狙う！）

御幸がそう狙いを定めた四球目。

成宮が投じたのは外のチェンジアップ。

だが、そのチェンジアップのコースは、御幸の読み通りに甘く、真ん中付近に浮いてしまった。

この試合、成宮が投じた唯一の失投。

読み通りに甘く来たその失投を、御幸は強く叩く。

カキーン！

金属バットの快音が球場に響き渡る。

打球はセンターの上を越えていく。

打席の御幸は会心の手応えに拳を突き上げる。

そして、打球の行方を見送った成宮は、顔を見られない様に深く帽子を被り直したのだった。

## 第48話

延長戦までもつれ込んだ激闘の末、俺達丸亀シニアは城南シニアとの試合に勝った。

両チーム合わせてヒットは一本。

俺は成宮との投げ合いを制して、シニアリーグでは初めてとなる完全試合を達成した。

そんな試合だったせいか、試合の後に俺は色んな高校のスカウトの人に声をかけられた。

だけど、スカウトの人達にハッキリと「俺、青道に行きます！」というと、ほとんどの

スカウトの人達がいなくなった。

残ったスカウトの人は礼ちゃんだけだった。

あ、礼ちゃん。

見に来てたんだ。

え？スカウトとして両親に挨拶？

父さんと母さんならあそこにいるよ。

俺が指差す方を礼ちゃんが見ると、そこには揃って頭を下げている両親がいた。

ん？何で父さんは母さんに背中をつねられてるんだ？

礼ちゃんは「全国大会も見に行くわ」というと、俺の両親の元へ歩いていった。

「パワプロ！」

礼ちゃんを見送ると、成宮が俺に声を掛けてきた。

「高校野球だ！勝負の続きは高校野球でやるぞ！」

成宮が俺を指差しながらそう言うってくる。

…いいね！

「おう！高校野球でも、また投げ合おうぜ！」

俺が笑顔で成宮に応えると、成宮は鼻を1つ鳴らしてから走り去っていった。



夏のシニアリーグ選手権大会の全国決勝トーナメント。  
俺達、丸亀シニアは順調に勝ち進んでいった。  
俺は一回戦、三回戦共に完封して二桁奪三振を達成したぜ。  
そして迎えた決勝戦。  
順調にスコアボードに0を積み重ねていく。  
そして、俺は七回の裏のマウンドに向かうのだった。



全国大会の決勝戦のマウンドに立つ俺の耳に、観客の人達のざわめきが聞こえている。  
「みんな、ざわめいてるねえ。」  
「まあ、全国大会の決勝戦でノーヒットノーラン目前だからな。」  
俺の言葉に一也がそう切り返してくる。  
そう、一也の言う通りにノーヒットノーラン達成まであと一人に迫っているのだ。  
「一也、最後まで楽しんでいこうぜ！」  
「おう！」  
俺と一也はマウンドの上でグローブとミットを笑顔で合わせる。  
一也がキャッチャーボックスに戻っていき、プレイが再開される。  
バッターボックスには唇を固く結んだ打者がいる。  
「行くぜ、一也！」  
俺は一也のサインに頷くと投球モーションに入る。  
そして俺が投げたボールは、一也が構えるミットに吸い込まれる様にして入っていくのだった。



夏のシニアリーグ選手権全国大会の決勝戦。

俺はノーヒットノーランを達成した。

そして、表彰式で今大会のMVPに選ばれた。

ひゃっほい♪

ちなみに丸亀シニアからは、一也と白河がベストナインに選ばれていた。

こうして俺の中学生最後の夏は、最高の結果で終わりを迎えたのだった。

## 第49話

夏の全国大会が終わって直ぐの丸亀シニアの練習日。  
チームを卒業する3年生の壮行会を兼ねた紅白戦が行われた。  
そして、その紅白戦が終わった後、俺と一也、そして白河が監督に  
呼び止められたのだった。



「東京選抜ですか？」

「そうだ、東京選抜だ。」

監督が言うには、海外の中学生を招いて練習試合をするのだが、秋の大会まで時間が無いから、

チームを卒業する3年生を集めてチームを作るらしい。

ちなみに去年、丸亀シニアからはクリスさんが参加したようだ。

「来週の土曜日と日曜日に練習試合をするんだが…参加するか？」

「参加しますー！」

俺が元気よく返事をする、監督が一也と白河に目を向ける。

「どうやら一也と白河も参加するようだ。」

「監督、他のチームメンバーは大丈夫なんですか？」

「俺達が全国大会で戦っている間に、メンバーは集めてあるみたいだから心配するな。」

一也の疑問に監督がそう答えた。

「それじゃ、これに色々と書いてあるから持って帰って確認してくれ。」

「当日はしっかりと楽しむんだぞ！」

「はいー！」

こうして俺は海外の中学生と試合をする機会を得たのだった。

今から楽しみだぜ！



海外のチームとの練習試合当日。

東京選抜のメンバーは顔見知りが多かった。

もつとも、名前を知っているのは成宮とカルロスだけなんだけども！

「はい！こっちに注目してくれ！」

今回、東京選抜を率いるのは丸亀シニアの我らが監督である。

「今日の相手はアメリカ！明日の相手は台湾の中学生だ！練習試合だから交代制限は無い！」

そこまで言うと言監督は東京選抜の皆の顔を見渡す。

「だから、野手は皆に出てもらうぞ！」

監督がそう言うのと、野手の皆が歓声を上げた。

「でも！投手は連投させるわけにはいかないから、今日か明日のどちらかだけだ！」

アメリカを相手に投げるか、台湾を相手に投げるか…悩むなあ。

監督！どっちも投げたいよ！

「それじゃ、今日投げたい奴は拳手！」

「はい！」

監督の言葉に俺と成宮が同時に手を上げた。

「練習試合とは言っても、俺はどっちも勝つつもりだからな。だから、パワプロと成宮には

投げる日をわけてもらおうぞ。」

なんですと!?

俺と成宮の目が合う。

「そう言うわけで、パワプロと成宮！ジャンケンだ！」

絶対に負けられない戦いがここにある…。

俺と成宮は、得点圏にランナーを置いたピッチャーの如く、気合を入れて

ジャンケンをしたのだった。





東京シニア選抜チームとアメリカ中学生選抜チームの練習試合。先発のマウンドには成宮が立っていた。

そう、俺はジャンケンに負けてしまったのだ。

ちくしょ——！

「パワプロく。ちゃんと応援しろよ。」

「はい！」

そして、東京シニア選抜チームとアメリカの中学生選抜チームとの練習試合が始まった。

先手を取ったのは東京シニア選抜チームだった。

一回の表、成宮はアメリカチームを3人で抑える。

そして一回の裏、一番バッターのカルロスは四球で出塁すると、盗塁を決めた。

二番バッターの白河は、セーフティバントをした。

白河はアウトになったものの、カルロスは進塁してワンアウト、三塁のチャンス。

三番バッターは、インコースのボールを打ち上げて内野フライ。

これでツーアウト、三塁。

そして、次は四番バッターの一也だ。

一也は右中間へとタイムリーツーベースヒットを放った。

俺達、東京選抜チームが先制点を取ったぜ！

一回の裏はこの1点で攻撃が終わった。

そして、二回、三回と試合が進んでいくが、アメリカチームは成宮を中々攻略出来なかった。

だけど、打者二巡目となる四回の裏。

ついにアメリカチームが成宮に牙を剥いた。

四回の裏の先頭打者が成宮からソロホームランを放つと、試合の流れは

アメリカチームへと渡る。

2人目、3人目と成宮は連続でヒットを打たれてしまった。

そして、ノーアウト、1、3塁の場面で迎えるのはアメリカチームの四番バッター。

成宮は勝負を選択。

結果は：スリーランホームランだった。

低めのフォークボールを態勢を崩しながら拾い上げる様な形で打ったボールは、

俺達の予想を超えて伸びていったのだ。

この結果に、成宮は打球の行方を見たまま呆然としていた。

ここで監督が出て行って投手交代。

その後、東京選抜チームは継投をしてアメリカチームの打線を抑えていった。

試合はなんとか同点に追い付いて七回を終了。

練習試合の為、延長戦は無しである。

俺達、東京選抜チームとアメリカチームの練習試合は、引き分けの結果に終わったのだった。

## 第50話

アメリカの中学生選抜チームとの練習試合を終えた翌日、俺達東京シニア選抜チームは、

台湾の中学生選抜チームとの練習試合をするのだった。

「なあ、パワプロ。チェンジアップをコントロールするコツとかがあってあるのか？」

俺が試合前のアップとして一也とキャッチボールをしていると、成宮が俺に話し掛けてきた。

「どうしたんだ、成宮？」

「昨日のアメリカ選抜チームとの練習試合、俺は打ち崩されちゃった。」

そう言いながら成宮は悔しそうに俯く。

「スライダーとフォークの変化、それとフォーシームの力勝負で勝てると思ってたんだ。」

少なくとも、成宮はそのスタイルでシニアリーグで多くの三振を積み重ねて勝ってきた。

「でも、四回の先頭打者には軽く当てられた様な打撃で、簡単に外野にまで飛ばされた…」

だから、緩急としてチェンジアップを使ったんだけど、高目に浮いて連打された…。」

昨日の事を思い出しながら、成宮が悔しそうに歯噛みをしている。

「その後にフォークをホームランされた事には言い訳出来ねえけど、チェンジアップを低めに」

コントロール出来ていればと思ってるんだ。」

そう言っただけで成宮は顔を上げて、俺を見据えてくる。

うーん、教えてやりたいんだけど、俺も感覚的な事しかわかんないんだよなあ。

「成宮、チェンジアップはどんな握りなんだ？」

「こんな感じ。」

そう言うのと、成宮はボールをチェンジアップの握りで持つ。

人差し指と親指で輪を作るタイプの握りだ。

「それじゃあ、違う握りを試してみたら？」

「チェンジアップに違う握りがあるのか？」

「うん、フォークを投げる成宮ならこっちの握りの方が、いい感覚になるんじゃないかな。」

そう言っただけは、人差し指と薬指でボールを挟むようにボールを持った。

「この2本の指でフォークみたいに挟んで、後は親指と小指をフィット感の良いところに。」

「中指は？」

「力が入らないように添えるか、浮かしておけばいいんじゃないかな？」

成宮が俺の握りを見ながら真似をする。

「後は自分にとっていい感じのリリースを探せばいいと思うよ。」

「おうー！」

そう言うと、成宮は一也にボールを軽く投げた。

いや、成宮？一也は俺とアップをしてるんだけど？

俺と一也は苦笑いをするしかない。

その後、成宮は監督に首根っこを掴まれてベンチに引き摺られていき、

練習の見学をさせられるのだった。



東京シニア選抜チームと台湾の中学生選抜チームの試合が始まった。

先攻は俺達、東京シニア選抜チームだ。

一番バッターのカルロスが、台湾チームの眼鏡を掛けたピッチャーのボールに首を傾げている。

「どうしたんだろう？」

「うーん…多分だけど、手元で動いてるんじゃないかな？」

俺の疑問に一也がそう答えた。

「手で動く？」

「カットボールとかツーシームを投げるムービング使いなのかもな。」  
カルロスはバットを振っていくのだが、あの眼鏡のピッチャーのボールを、中々前に

飛ばすことが出来なかった。

カウント、ワンボール、ツーストライクから投げられた六球目。

カルロスは高めのフォーシームに空振りをした。

「へえ、カルロスを三振にするなんて、やるじゃん。」

ベンチのど真ん中にドツカリと座っている成宮が、台湾のピッチャーを称賛する。

「パワプロ！あんなのに負けんじやねえぞ！」

「鳴は昨日打たれたけどな。」

「うっせえよ、一也！次は絶対に抑えるし！」

成宮と一也のやり取りにベンチでは笑いが起こる。

その後、粘り強く投げる台湾のピッチャーに、一回の表は三人で抑えられた。

そして、一回の裏。

練習試合とはいえ初めての国際試合に、俺は笑顔でマウンドに向かうのだった。

## 第51話

東京シニア選抜チームと台湾の中学生選抜チームの試合。

台湾側のベンチに、一回の裏のマウンドに上がるパワプロをじっと見ている選手がいた。

「素晴らしい投手だ…。」

パワプロを見ている選手の名は楊 舜臣。

彼は台湾の中学生選抜チームのエースで、打順は五番を任されている。

そんな楊はパワプロの投球から、貪欲に技術を盗もうと観察しているのだ。

「球速、変化球の変化の大きさ、各種持ち球のキレ、どれも素晴らしいが…彼の最大の武器は

間違いなくあのコントロールだ。」

楊がそう呟くと、台湾チームの一番バッターがアウトローのフォーシームで見逃し三振していた。

「どうやってあのコントロールを身に付けたのか…話をしてみたいな。」

楊自身も低目へのコントロールを間違えない自信はある。

だが、ここぞという場面であのピンポイントのコントロールが出来るかと言われれば、

首を横に振らざるをえないのが現状だ。

二番、三番バッターも連続三振に抑えられ、一回の裏が終わった。「確かに素晴らしい投手だ…だが、練習試合とはいえ負けるつもりはない。」

そう言いながら、楊は闘志を胸に秘めてマウンドに向かうのだった。



二回の表の東京シニア選抜チームの攻撃は、一回の表と同じく楊に

三人で抑えられた。

そして二回の裏、ワンアウト、ランナー無しの状況。

台湾の中学生選抜チームの打者として楊が打席に入った。

(この投手の球に全て対応しようと思ったら、間違いない打てない…。)

楊はそう考えながら、横目でチラリと御幸を見る。

(ならば、捕手のリードを読んで狙い打ちするしかない!)

御幸のサインに頷いたパウプロが、独特なノーワインドアップの投球モーションに入る。

パウプロが投じたのはインローのフォーシーム。

(いきなりインコースか…強気なリードをする捕手なのか?)

楊はまたチラリと横目で御幸を見る。

すると、楊と目が合った御幸は僅かに目を見開くのだった。



(こいつ…今、ミットの位置じゃなくて、俺を見ていた。)

楊と目が合った御幸はその事に驚いていた。

(際どいボールの時、ミットの位置を見て主審のストライクゾーンを確認するバッターは多い。)

そこまで考えると、御幸はチラリと楊の横顔を見る。

(でも、捕手を見る相手は少ない…俺の経験だと、クリスさんぐらいだ。)

御幸の脳裏に、クリスとのリードの読み合いの勝負が思い浮かんでくる。

(一球外してこいつの反応を確認したい…でも…。)

数瞬、御幸は考えてからサインを出す。

パウプロがサインに頷き、ボールを投げる。

右打者の楊に対して、バックドアとなるアウトローへのカーブがピンポイントで来た。

御幸は横目でチラリと楊を見る。

すると二度、楊と目が合ったのだった。

確信を得た御幸はマスクの中で歯を見せて笑顔になる。

それを見た楊も、唇を軽く引き上げて笑みを見せた。

「たはっー」

思わぬ所で見つけた好敵手に、御幸は笑ってしまった。

御幸はマスクの中で笑みを浮かべたまま、パウプロにサインを出す。

パウプロがサインに頷き、三球目を投げる。

カーブがインコースの低め一杯に変化していく。

「ストライク！バッターアウト！」

主審のコールはストライク、そして三振だった。

三球目も見逃した楊と御幸の目が合う。

すると…。

「次は打つ。」

流暢な日本語でそう言った楊はゆっくりとベンチに戻っていった。

「…たはっー」

日本語で言われた事に一瞬驚いた御幸だったが、直ぐに笑顔になった。

練習試合である事もあって、御幸は公式戦に比べて幾分か気を抜いている所があった。

これが、御幸にムラツ気があると言われる理由なのだが…。

「打たせねえよ。」

御幸は好敵手と感じた楊の宣戦布告に、一気に集中力を高めたのだった。



## 第52話

パワプロと楊による投手戦となった東京シニア選抜チームと、台湾の中学生選抜チームの

試合は四回が終了するまで進んでいた。

「おーい、パワプロ。どうする?」

四回の裏を投げ終えてベンチに戻ってきたパワプロに、監督がそう問い掛けた。

「どうするって、何がですか?」

「昨日のアメリカの中学生選抜チームとの試合で、パワプロ以外は皆投げたからな。」

「このまま投げたければ投げてもいいぞ。」

「監督さん!俺が投げる!」

「成宮は昨日、先発だったからダメ。」

監督の言葉に成宮は反応したが、成宮以外の投手は反応しなかった。

先日のアメリカの中学生選抜チームとの試合で、1イニングだけだが、成宮が打ち崩された

打線を抑えた感覚を忘れたくないのだ。

逆に成宮は、試合前に覚えた新しい握りのチェンジアップを試したくて仕方がない。

「投げます!」

「よおーし、それじゃ七回まで頼んだぞ!」

「はい!」

パワプロが元気に返事をしたその横で、成宮はヘソを曲げるのであった。



五回の表。

パワプロが続投するかどうかをベンチで話していた頃、グラウンド

では御幸と

楊の勝負が行われていた。

楊が投じた一球目は高めのフォーシーム。

120kmに届かない球速ながら、ここまで多くの打者がこの球に釣られて

バットを振ってしまっていた。

だが、御幸はタイミングを取るだけで、バットを振らずに見送った。このフォーシームは高めに外れてワンボール。

楊が捕手からの返球を受け取りつつ、御幸を観察していく。

そして、御幸も同じ様に楊を観察していた。

2人の視線が交差する中で、楊が2球目を投じる。

楊が選択したボールはインローへのツーシーム。

御幸はこのボールを打ちに行く。

カキーン！

金属バットの音が球場に響き渡るが、打球は三塁線を切れてファール。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

楊の胸中は狙い通り、御幸の胸中は打たされたという思いが巡る。

楊のペースになりつつある勝負に、御幸はタイムを取って打席を外す。

だが、楊は落ち着いてロージンバグを手取る。

堂々としたその様子に御幸は苦笑いを浮かべる。

対して、楊は1つ大きく息を吐いて集中力を高めていく。

三球目。

楊が投じたのはアウトハイへのフォーシーム。

御幸のバットがピクリと反応するが、スイングはしない。

三球目は外れてツーボール、ワンストライク。

御幸がフーツと細く息を吐く。

楊は捕手の返球を受け取りながら、御幸を見据える。

四球目。

楊が選択したのは、アウトローへのツーシーム。

御幸のバットが振られる。

そして…。

カキーン！

金属バットの音が球場に鳴り響く。

打球は楊の右横を抜けようとするが、楊が鋭く反応する。

バシッ！

楊は一度打球を弾いてしまいが、落ち着いて処理をして一塁に送球する。

御幸も一塁に向けて全力で走るが、間に合わない。

五回の表の楊と御幸の勝負は、楊に軍配が上がったのだった。

## 第53話

御幸を打ち取った後の楊は、残りのバッターも打ち取り、五回の表までノーヒットで抑える。

そして、迎えた五回の裏。

ワンアウト、ランナー無しの場面で、台湾の中学生選抜チームのバッターは楊 舜臣。

この試合、2度目の打席に立った。

(左手に少しシビレが残っている…。)

五回の表の御幸との勝負で、御幸を打ち取ったのはいいのだが、その打球を止めた際に

楊は左手がシビレてしまっていた。

現在、御幸との勝負を終えた時に比べれば左手のシビレはマシになっっていたが、それでも

バットを握る際の違和感が残ってしまった。

(今の状況でストレートを狙うと力負けするかもしれない…。なら、狙いは変化球だ！)

そう意識を定めて構えると、楊は無意識に左手を握り直したのだ。た。



キャッチャーボックスに座る御幸は違和感を感じていた。

(なんだ、この違和感?)

五回の表で楊に打ち取られた事で、さらに集中力を高めた御幸は、楊を観察していて

違和感を感じたのだ。

御幸は違和感の答えが出ないままにパウプロにサインを出す。要求したのはアウトローへのフォーシーム。

パウプロが投じたボールは要求通りにアウトローへ。

カウントはワンストライク。

ボールを捕球した御幸は楊に目を向ける。

視線が交差する中で、御幸はまた違和感を感じた。

(バットを握り直した?)

御幸はパウプロに返球しながら違和感の原因を考えていく。

(バットを握り直した事に、なんで違和感を感じたんだ?)

御幸は考えながらも右拳でミットを鳴らす。

すると、ミットを持つ左手の感覚から、ある光景が頭を過った。

それは、五回の表の御幸の打球を楊が止めた時の光景だ。

(もしかして…手がシビレてるのか?)

ある種の閃きに似た感覚が、御幸の思考を埋めていく。

御幸は確認を取る為にサインを出す。

パウプロに要求したのはアウトコースのボールゾーンへのチェンジアップ。

パウプロがサインに頷き、独特なノーワインドアップの投球モーションに入る。

そして、パウプロが投じたボールに楊が反応する。

楊はバッターボックス一杯に踏み込み、バットを振る。

キンツ!

金属バットの音が鳴るが、打球は一塁線を切れてファール。

この結果に御幸は確信した。

楊の左手はまだシビレが残っていると…。

御幸は確信を持ってパウプロにサインを出す。

パウプロがサインに頷き、投球モーションに入る。

御幸が要求したのは、インハイへのフォーシーム。

パウプロが投じたボールが楊の顔付近に目掛けて進んでいく。

そして…。

バシツ!

「ストライクスリー…バッターアウト!」

主審のコールで東京シニア選抜チームのベンチが沸き上がる。

御幸と目を合わせた楊は、鬨志溢れる目で御幸を見据えてからベンチに戻っていったのだった。

◆  
楊は打たせて取るピッチングで、東京シニア選抜チームの打線を抑えていく。

対してパワプロはキレのあるボールで、台湾の中学生選抜チームの打線を

多くの三振で抑えていった。

そして試合は進んでいき、六回まで両チーム共にノーヒットだった。

だが、七回の表についてヒットが出る。

七回の表の東京シニア選抜チームの先頭打者であったカルロスが、三遊間の深い所に

ゴロを転がすと、持ち前の足の速さを活かして内野安打をもぎ取った。

続く二番バッターの白河がキッチリと送りバントを決めて、東京シニア選抜チームは

ワンアウト、二塁のチャンスを作る。

三番バッターはセカンドフライに打ち取られてしまったが、ツーアウト、二塁のチャンスで

迎えたバッターは四番の御幸。

楊は一つ大きく息を吐いてから投球を始めた。

楊と御幸の勝負は進んでいき、カウントはツーボール、ツーストライク。

楊が勝負球に選んだのはインローへのツーシーム。

楊が投じたボールが御幸のバットを搔い潜ろうとしていく。

御幸は腕を畳むようにしてスイングをしていく。

そして…。

キンッ!

金属バットの音が球場に鳴り響く。

打球はセンター前に落ちた。

カルロスが加速しながら三塁を蹴ってホームに向かう。

通常よりも前掛かり目な守備位置にいた台湾チームのセンターが、素早くボールをキャッチャーへ返球する。

ホームベース上でスライディングするカルロスと、台湾チームのキャッチャーのミットが交差する。

一瞬の静寂が球場を包み込む。

主審の判定は…。

「アウト！スリーアウト！チェンジ！」

ファーストベース上の御幸が天を仰ぐ。

抑えきった場は、雄叫びを上げながらベンチに戻っていったのだった。

## 第54話

俺達、東京シニア選抜チームと台湾の中学生選抜チームの試合は、  
両チーム無得点の

引き分けという結果に終わった。

ちなみに、俺は参考記録だけど完全試合を達成したぜ！

ひゃっほい♪

試合が終わって両チームが帰り仕度をしていると、台湾の中学生選  
抜チームの投手が

俺に話し掛けてきた。

「ちよつと、いいだろうか？」

「ん？」

えくつと…誰だっけ？

「えつと…？」

「俺の名前は楊 舜臣だ。」

「そっか、俺は葉輪 風路！パワプロって呼んでくれ！」

楊の自己紹介に俺はサムズアップしながら応えた。

しかし、綺麗な日本語で喋るなあ。

「パワプロ、1つ質問があるのだが、いいか？」

「おう！」

「パワプロ、ピッチャーにとって一番大事なモノは何だと考えている  
？」

ピッチャーにとって一番大事なモノ？

「あくまで俺の考えだけど、それでいいか？」

俺の言葉に楊が頷く。

「俺はコントロールが一番大事かなあ。」

「理由は？」

楊にそう言われたので、俺は少し考えながら答えていく。

「うん…俺の経験なんだけど、失投を打たれるのって、すっげえ悔し  
いんだよね。」

楊は俺の言葉に理解を示す様に頷く。



「リトル時代の話なんだけど、失投をホームランにされた時、試合が終わっても

なんか胸にモヤモヤしたものが残っちゃっていたんだよね。」

俺はあの時の感覚を思い出しながら話していく。

「でもさ、しつかり投げたボールを打たれた時は、失投を打たれた時に比べて自分を

納得させやすいと思うんだ。」

「納得させやすい?」

静かに俺の話聞いていた楊が、疑問の声を上げた。

「もちろん、いいボールを投げて打たれた時も悔しいけど、なんというか…相手を

認めやすいと言えはいいのかな?」

うくん、自分の感覚を言葉にするのって難しいなあ…。

「なるほど、何となくだが理解した。」

「お?」

「先程の試合、七回の表の先頭打者の内野安打は彼にうまく運ばれてしまったものだが、

四番に打たれたセンター前ヒットは、ツーシームをインローの低めにボール球にする

筈だったものが、ストライクゾーン内に入ってしまったのを打たれてしまったんだ。」

腕を組んで、思い出すように目を瞑りながら、楊が話していく。

「結果的に無失点で切り抜ける事が出来たが、あの四番との勝負はまだ胸に残っている。」

そこまで話すと、楊がふと笑みを見せた。

「パワプロ、君との投げ合いはとても楽しかった。」

「おう!俺も楽しかったぜ、楊!」

俺と楊は笑顔で握手をしたのだった。



時は少し戻り、パウプロと楊が話を始めた頃、御幸は話をしているパウプロと楊の姿を

見つけて、自分も会話に入ろうと近付いていった。だが、そんな御幸に声を掛けた者がいたのだった。

「一也！」

御幸が振り向くと、そこには成宮がいた。

「どうした、鳴？」

「一也、高校はどこに行くのか決めたのか？」

御幸は成宮の言葉に首を傾げながらも答える。

「青道から話をもらってるな。」

「一也、俺と稲実に行こうぜ！」

御幸は成宮の誘いに目を見開く。

「一也、俺は俺達の世代で最強のチームを作るつもりだ。」

「鳴の後ろにいるカルロスと白河はそういう事か…。」

御幸が成宮の後ろにいる2人を見てそう言うと、成宮は肯定する様に頷いた。

「2人だけじゃないぞ、他の奴にも声を掛けた。パウプロに勝つ為にな！」

御幸は成宮の言葉にまた目を見開いた。

「そうか。」

「一也、お前は俺が見た同い年の連中の中で一番のキャッチャーだ。だから、俺と一緒に

パウプロに勝って甲子園に行こうぜ！」

御幸は成宮の言葉に悩まずに、直ぐに答えを返した。

「悪いな、鳴。俺は青道に行く。」

「なんでだよ、一也！」

「鳴、キャッチャーなんて誰でもいいよ。」

御幸の返事に噛みついた成宮に、白河がそう言う。

白河の言葉に、御幸はにこやかに微笑みながらもコメカミに青筋を浮かべた。

「おいおい、白河。俺のおかげで今日の試合、パウプロは完全試合を

やったんだぜ？」

「それを言うなら、昨日のアメリカとの試合で、鳴が打たれたのは御幸のせいじゃん。」

売り言葉に買い言葉とでも言うのか、御幸と白河は笑顔でお互いに毒を吐いていく。

御幸は1つ息を吐いて気持ちを落ち着けてから、成宮に言葉を掛けた。

「鳴、俺は青道に行く。」

「後悔するぞ、一也！」

成宮はそう言うのと、肩を怒らせながらベンチに荷物を取りにいった。

「後悔なんてしねえよ、鳴。」

御幸はそう言うのと、楊と話をしているパワプロに目を向ける。

「俺はあいつと野球がしたいんだ。」

御幸がそう呟くと、パワプロは話が終わったのか、楊と握手をしていた。

「それに、クリスさんに負けたままで終われないからな。」

そう言うのと、御幸はとびっきりの笑顔になる。

「首を洗って待っていてくださいよ、クリスさん！」

パワプロと合流した御幸は、楊と何を話していたのか聞き出そうとパワプロと肩を組む。

そして、パワプロと御幸は今日の試合の事を楽しそうに話しながら、家に帰っていくのだった。

## 第55話

台湾の中学生選抜チームとの練習試合を終えた翌週、俺と一也は礼ちゃんとの約束通りに

青道高校の見学に行くのだった。

「あら、2人共早いわね。」

青道高校の校門前で一也と2人で待っていると、礼ちゃんがやって来た。

「俺は今日の学校見学を楽しみにしてたよ、礼ちゃん！」

「葉輪くん、学校内では先生って呼んでね。」

「まあまあ、礼ちゃん。そう言わずにさあ。」

俺の言葉に、礼ちゃんがやんわりと釘を刺すのだが、一也が茶化す様に言葉を続けた。

そんな俺達に礼ちゃんは軽くため息を吐く。

でも、礼ちゃんは顔を上げると、笑顔で俺達にこう言ったのだった。

「葉輪くん、御幸くん、ようこそ青道高校へ。」

礼ちゃんの笑顔につられて、俺と一也も笑顔になる。

うんうん、礼ちゃんは笑っても美人だねえ。

貴子ちゃんも負けてないけどな！



礼ちゃんの歓迎の言葉の後は、礼ちゃんの案内で野球部を中心に見学をしていった。

「ここが、屋内練習場よ。」

「へー。」

流石は強豪と言われる青道高校。

施設の充実っぷりに、俺と一也は驚きの言葉しか出てこない。

「どうかしら、2人共？」

「例え一般入試でも！俺は青道高校に入るよ、礼ちゃん！」

「高島先生よ、葉輪くん。」

俺の意気込みに、礼ちゃんは苦笑いしながら訂正を入れてくる。

「ねえ、礼ちゃん。先輩方の練習を見学したいんだけど。」

「御幸くん、高島先生よ。」

一也の申し出に、礼ちゃんはため息を吐きながら訂正を入れる。

「今は秋の大会前だから、レギュラー争奪の為に皆、追い込みに入っている所ね。」

そう言うと、礼ちゃんが先導として歩き始めた。

俺と一也は礼ちゃんの後をついていく。

「もう一本！お願いします！」

グラウンドの近くに来ると、大きな声が聞こえてきた。

「あの子は結城くんね。」

礼ちゃんは手にしていた資料を確認しながら話始めた。

「結城くんは2人の1つ上の先輩よ。入部当時の結城くんの守備は、同学年でも

下から数えた方が早いぐらいの実力だったの。」

礼ちゃんはそう言うのだが、ノックを受けている姿を見ると、そうは思えない。

ちなみに、ノッカーをしているのは俺の憧れの人である、片岡 鉄心さんだった。

ウオ——！片岡さ——ん！！

「結城くんは、クリスくんと同じぐらい練習熱心で、誰よりも早くグラウンドに来て走っているの。」

礼ちゃんにそう言われて結城先輩の動きを見ると、基本の動きを黙々と繰り返している。

そして、誰よりも率先して声出しをしているのだ。

「夏の大会ではベンチにも入れなかったけど、これからに期待出来る選手ね。」

礼ちゃんの言葉に、俺と一也は納得した様に頷いた。

「来いやオラア！」

結城先輩がノックを終えると、外野の先輩からそんな声が聞こえてきた。

「あの子は伊佐敷くんね。結城くんと同じ、貴方達の1つ上の先輩よ。」

伊佐敷という先輩は、威勢の良い声を上げているのだが、外野のノックを

受ける姿はどこかぎこちない。

「伊佐敷くんは元々投手志望の子なのよ。」

「投手志望?」

俺の疑問に礼ちゃんが答えていく。

「伊佐敷くんは肩も強くて投手として期待されていたのだけど、

コントロールがちよつとね…。」

礼ちゃんは俺に苦笑いを見せながらそう言う。

「夏の大会前の練習試合に伊佐敷くんが登板したのだけど、三連続与四球の後に、

置きにいったボールをホームランにされてしまったの。」

礼ちゃんの話聞きながら伊佐敷先輩のノックを見ると、また伊佐敷先輩の

威勢の良い声がグラウンドに響いた。

「その練習試合の後に、伊佐敷くんはコントロールの改善に取り組んだのだけど、

うまく行かなかつたのよ。それで、今は外野へのコンバートを試みている所ね。」

伊佐敷先輩は真剣な表情で打球を追っていつている。

でも…。

「もつたいないなあ…。」

「葉輪くん、どういうことかしら?」

俺の言葉に礼ちゃんと一也が顔を向けてくる。

「礼ちゃん、知ってる?俺もリトル時代の最初の方はコントロールが良くなかつたんだよ?」

「あら、そうなの?シニアの試合を見た限りでは信じられないわね。」

「俺も礼ちゃんに一票。パワプロ、俺とリトルで初めて対戦した時から」

コントローラー良かったじゃん。」

俺は一也の言葉に笑いながら答える。

「あの日はたまたま調子が良かったただだよ、一也。」

「マジかよ。」

「後でクリスさんに聞いてみたら、わかると思うぞ。」

俺の言葉に一也は頭を掻きながらため息を吐いた。

「葉輪くん、伊佐敷くんのコントローラーは改善出来るかしら？」

「少しぐらいならアドバイス出来るけど、俺にはクリスさん程の知識はないよ、礼ちゃん。」

俺の返答に、礼ちゃんは何かを考え始めた。

「2人共、ここで少し待っていてくれるかしら？」

「どうしたの、礼ちゃん？」

「片岡監督に許可を貰って、伊佐敷くんを呼んでくるわ。」

そう言うと、礼ちゃんはノッカーをしている片岡さんの元に向かったのだった。

## 第56話

礼ちゃんが片岡さんの元に行ってから少し待つと、礼ちゃんと一緒に伊佐敷先輩と、

何故か一緒に片岡さんが俺と一也の所にやって来たのだった。

「葉輪くん、御幸くん、この人が青道高校野球部の監督、片岡 鉄心先生よ。」

礼ちゃんの紹介に俺は背筋を伸ばして挨拶をする。

「来年から青道でお世話になる葉輪 風路です！片岡さんに憧れて野球を始めました！」

握手してください！」

そう言つて俺が手を差し出すと、片岡さんが握手をしてくれた。

ひゃっほい♪

「同じく来年からお世話になる御幸 一也です！今日はよろしく願いします！」

そう言つて一也が片岡さんに頭を下げる。

片岡さんは一也の挨拶に1つ頷くと、俺に目を向けてきた。

「高島先生から話は聞いた。伊佐敷にアドバイスをくれるそうだな？」

「いやあ、大した知識はないですよ？」

俺の返答に片岡さんは首を横に振る。

「シニアMVP投手のアドバイスだ。伊佐敷を成長させてくれる可能性が

あるなら聞く価値はある。」

そう言つと片岡さんは、後ろに控えていた伊佐敷先輩に目を向けて、伊佐敷先輩を

促す様に1つ頷いた。

「俺は伊佐敷 純だ！よろしくな、後輩！」

「はい！パワプロって呼んでください！伊佐敷さん！」

「おう！俺も純でいいぜ、パワプロ！」

俺がサムズアップしながら愛称呼びを提案すると、純さんはノリ良



く応えてくれた。

「俺もよろしくお願いしますね、純さん。」

「おう！御幸だったな？よろしくな！」

色々と威勢の良い純さんだが、面倒見が良さそうだと感じる。

「葉輪、さっそくだがブルペンに向かうぞ。」

片岡さんにそう言われたので、俺は敬礼を1つしてついていった。

…なんで礼ちゃんと一也は苦笑いしてるんだ？



ブルペンに向かう途中、貴子ちゃんを発見したので手を振った。

おーい、貴子ちゃん。

お？気づいてくれた。

貴子ちゃんは俺に手を振り返してくれた。

うんうん、流石自慢の幼馴染。

可愛いぜ、貴子ちゃん！

あ、貴子ちゃんが一緒に雑用をしている女子にからかわれて顔を赤くしてる。

その女子！ナイスだぜ！

そんな風にしながら片岡さんについて行ってブルペンに到着すると、

ブルペンから大声が聞こえて来たのだった。

「コラー！何やっとなねん、丹波あ！」

うえい？

大声のするブルペンに目を向けると、縦横に大きい人と、その人に怒られている投手の人、

そしてキャッチャーをしているクリスさんの姿があった。

「クリスが構えとるのはインコースやろうが！何をビビって真ん中に放つとるんや！」

「すいません、東さん！」

「アホかあ！謝る相手はオレやなくてクリスやろうが！」

そんな感じのやり取りを見ていると、礼ちゃんが補足するように話し始めた。

「投手の子は丹波くんね。伊佐敷くんと同じで貴方達の1つ上の先輩よ。」

ペラリと礼ちゃんが資料を捲る音が耳に聞こえてくる。

「丹波くんは120km台の真っ直ぐと大きなカーブを投げるわ。身長も174cmあるから、

その将来性も含めてエース候補の1人ね。」

「おお！俺のライバルだね、礼ちゃん！」

「でも、1つだけ問題があるのよ。」

俺が首を傾げると、礼ちゃんは苦笑いしながら答えた。

「丹波くんはノミの心臓なの。」

そう言うと、礼ちゃんはため息を1つ吐いてから話を続けた。

「夏の大会は、大会前の合宿中に足を捻挫したから出場しなかったのだけど、練習試合で

相手チームに打たれた一本のヒットからボロボロに崩れてしまったの。」

礼ちゃんという言葉を確認する様に、俺は丹波さんを見る。

うくん、ノミの心臓ねえ…？

俺は一也と顔を見合わせると、2人で肩を竦めた。

「クリスくんは2人共知っているから省くわね。それで、丹波くんを怒っているのは東くんよ。」

貴方達の2つ上の先輩ね。」

礼ちゃんが資料を捲る音がまた聞こえてくる。

「東くんは青道高校で、クリスくと1、2を争う強打者よ。来年のドラフト候補の

1人として高校野球界では注目されているわ。」

俺は東さんを見る。

うん、確かにあの身体はパワーがありそうだ。

俺と一也は納得した様に頷いた。

そして、東さんの説教が一段落した頃、片岡さんが前に進み出た。

「片岡監督!？」

片岡さんに気づいた東さんが帽子を取って頭を下げると、同じ様に丹波さんと

クリスさんも頭を下げた。

「丹波、少しクリスを借りるぞ。」

「え？あ、はい！」

丹波さんの返事に片岡さんは1つ頷くと、クリスさんへと顔を向けた。

「クリス、伊佐敷の投球を受けてくれ。」

「伊佐敷のですか？」

片岡さんはクリスさんの言葉を肯定する様に頷く。

「ああ、伊佐敷の投球に葉輪がアドバイスをくれるそうだ。」

片岡さんがそう言うと、先輩方の注目が俺に集まる。

そんな俺を見て、一也は面白そうにニヤニヤと笑っていたのだった。

性格悪いぞ、一也！

## 第57話

「よっしゃー！行くぞ、クリス！」

肩を作った純さんが、マウンドの上で威勢の良い声を上げている。

「オラア！」

純さんがセットポジションからボールを投げる。

だけど、ボールは大きく高めに外れてしまった。

「くっそー！クリス！もう一球だ！」

純さんがクリスさんに投げている間に、礼ちゃんが補足してくれた。

「伊佐敷くんの速球は130km台と丹波くんよりも速いんだけど、見ての通りに

高めに外れる事が多いのよ。」

礼ちゃんの言う通りに、純さんが投げるボールのほとんどは高めに外れてしまっていた。

「葉輪、何かあるか？」

片岡さんの言葉に俺は首を傾げながら考えていく。

純さんの投球フォームにはこれといって変な所は無いと思う。

「問題があるとすればリリースですかね？」

俺の言葉に片岡さんが頷く。

「葉輪の言う通りだろう。だが、リリースの感覚は投手それぞれのものだ。」

片岡さんの言う通りで、リリースの感覚を言葉にするのは凄く難しいんだよね。

となると…。

「純さん！」

「なんだ、パワプロ！」

「ワンバウンドのボールを投げましょう！」

「ワンバウンド？何でだ？」

純さんの疑問に俺は考えながら話していく。

「ランナーがいる時に、上に外れてボールが後ろにいったら進塁され

「ちやいますよね?」

「…そうだな。」

「ですよ。なので、上に外しちゃうくらいならワンバウンドのボールを投げちゃいませうよ。」

俺の言葉に純さんが首を傾げる。

「クリスさんなら、ワンバウンドでも止めてくれるから大丈夫ですつて!」

「おう!それもそうだな!」

俺がサムズアップしながら言うと、純さんもサムズアップしながら応えてくれた。

「という事で、ホームベースに思いっきり叩きつけちゃってください!」

「おう!任せとけ!」

俺と純さんのやり取りを、礼ちゃんが苦笑いしながら見ていた。「行くぞ、クリス!」

威勢良く声を上げながら、純さんが投球モーションに入る。

「オラァ!」

気合いの声と共に純さんがフォーシームを投げる。すると…。

パァン!

クリスさんのミットが大きな音を鳴らした。

コースは…真ん中低め一杯。

この結果にブルペンに少しの間、静寂が訪れる。

そして…。

「おお?おお…おおおおおおっしやあああああ!!」

静寂を切り裂く様に、純さんの雄叫びが響き渡った。

「クリス!早くボールを超越せ!今の感覚を忘れねえ内に!」

純さんが要求した事で、クリスさんがボールを返球した。

ボールを受け取った純さんは、笑顔で握りを確かめている。

握りを確かめた純さんがプレートに足を掛けて、またフォーシームを投げる。

パァン!

コースは横にずれたが、低めにしつかりとコントロールされている。

この結果に、純さんがまた雄叫びを上げる。

「伊佐敷!」

投球に夢中になっている純さんに、片岡さんが声を掛ける。

「リリースの感覚はどうだ?」

「えつと、こう、ホームベースに叩きつける為に、ボールを上から抑える様に」

してみたらいい感じになりました!」

純さんの言葉に、片岡さんが頷く。

「今は左右のコントロールを気にするな。その低めへのリリースの感覚をモノにしろ!」

「はい!」

純さんは片岡さんの言葉に返事をする、マウンドで笑顔になった。

「たった一言でここまで変わるのね…。」

礼ちゃんは驚きながら純さんの投げ込みを見ている。

「葉輪くん、伊佐敷くんに代わってお礼を言わせてもらおうわ。ありがとう。」

俺は礼ちゃんのお礼の言葉にサムズアップをする。

「葉輪、俺からも礼を言わせてもらおう。」

「いえいえ、来年からは同じチームの仲間ですし、エースの座を争うライバルですから!」

俺は片岡さんの言葉にもサムズアップしながら答える。

「ふっ、待っているぞ。」

「はい!」

その後、しばらく純さんの投げ込みを見学していると、不意に一也が声を掛けてきた。

「なあ、パワプロ?」

「どうした、一也?」

俺が一也の方に振り向くと、一也は何やら難しい顔をしていた。

「クリスさんなんだけど、何か変じゃないか？」

一也の言葉で俺はクリスさんに目を向ける。

すると、一也の言う通りにクリスさんの姿に違和感を感じたのだった。

## 第58話

一也の一言でクリスさんを見てみると、確かに違和感を感じた。

「ほんとだ。何か変だな。」

「だろ?」

うくん、何が変なんだろう?

「どうしたのかしら?」

「礼ちゃん、クリスさんが何か変なんだ。」

「クリスくんが?」

礼ちゃんの言葉に答えながら、俺と一也はクリスさんを見ていく。

クリスさんは純さんのボールを受けると、『横から投げて』返球した。

ん?横から?

「一也?」

「わかったか、パワプロ?」

「多分だけど、クリスさんが横から投げてる。」

俺の言葉を確かめる様に、一也はクリスさんを見ていく。

そして、クリスさんの返球の仕方を見た一也は、目を見開いた。

「パワプロ、クリスさんって上から投げてたよな?」

「うん。」

俺と一也は顔を見合わせると1つ頷いた。

「クリスさん!」

俺が上げた声に、ブルペンにいる人達の注目が集まる。

「どうした、葉輪?」

クリスさんがマスクを外しながらそう言う。

「クリスさん、シニアでは上から投げてましたけど、返球の仕方を変えたんですか?」

俺の言葉にブルペンにいる皆の注目が、クリスさんに集まる。

「クリス。」

片岡さんが厳しい視線をクリスさんに送る。

「すみません…少し前から肩に違和感があります。」



「クリス！何で言わんのや！ボール受けてる場合ちやうやろう！」  
クリスさんの言葉に東さんが怒る。

「すみません…。」

クリスさんが俯きながらそう呟く。

「高島先生、太田部長に連絡してクリスを病院に連れて行ってください。」

「はい。」

片岡さんの指示で礼ちゃん動き出した。

「クリス、大会前の大事な時期でも、これからは怪我を隠す様な事をするな。」

「はい、すみませんでした。片岡監督。」

そう言つてクリスさんは片岡さんに頭を下げた。

その後、クリスさんは太田部長(?)という人と一緒に病院に向かった。

ブルペンに残された俺達の間には、気まずい雰囲気の流れていた。  
このままじゃ練習に身が入らないだろうなあ…。

よし！

「片岡さん、キャッチャー用の防具つて借りられますか?」

「どういう事だ、葉輪?」

俺と片岡さんのやり取りに注目が集まる。

「クリスさんの代わりに、一也にボールを受けてもらおうかなって思っています。」

俺の言葉に片岡さんは一也に目を向けた。

「葉輪はこう言っているが、御幸、お前はどうする?」

急に話しを振られた一也は吃驚している。

「おい、パワプロ?」

「クリスさんの事は残念だけどさ、それで練習に身が入らなかったって聞いたら、

クリスさんは責任を感じると思うんだよね。」

俺の言葉に納得したのか、一也が頷く。

「というわけで、ここはクリスさんの後輩である俺達が一肌脱ごうと

いうわけだ。」

「いや、一肌脱ぐ事になるのは俺だけじゃん。」

一也が苦笑いしながらそう言うが、どうやらボールを受ける気になつたようだ。

「いやいや、要望があれば俺もバッティングピッチャーをやるぞ?」

「という事らしいですよ、先輩方!」

「おお!? 嵌めやがったな、一也! 性格悪いぞ!」

「キャッチャーにとつては誉め言葉だな。」

俺達のやり取りに、東さんが大笑いする。

「はっはっはっ! クリスはええ後輩を持つとるやないか!」

東さんの言葉で、ブルペンに在る皆の雰囲気是和らいた。

「丹波、伊佐敷。葉輪は年下だが得られるものがある筈だ。しっかりと学べ。」

「はい!」

こうして俺と一也は急遽、青道の練習に参加する事になった。

クリスさんがどの程度の怪我をしているのかはわからないけど、クリスさんなら

戻つてくると信じている。

だから…頑張ってください、クリスさん!

## 第59話

「葉輪、少しいいか？」

一也が防具を借りて純さんのボールを受け始めた時、俺は丹波さんに声を掛けられた。

「何ですか、丹波さん？」

「葉輪、ピンチの時はどうしている？」

ピンチの時？

俺が首を傾げると、丹波さんが続きを話し始めた。

「高島先生に聞いたかもしれないが、俺はピンチに弱い…だから、葉輪が

ピンチの時にどうしているのか聞いてみたくな。」「なるほどね。」

「丹波さん。」

そう言っつて、俺は丹波さんの質問に笑顔で答える。

「ピンチはヒーローになるチャンスですよ！」

俺がサムズアップしながらそう言っつと、丹波さんは目を見開きながら驚いていた。

「は、葉輪、打たれたらチームが負けるかもしれないんだぞ？」

「一打サヨナラの場面ならそうでしょうけど、それ以外なら逆転の可能性はありますよね？」

俺がそう答えると、丹波さんは言葉に詰まってしまった。

「丹波さん、憧れのヒーローっていますか？」

「あ？あぁ、いるが…それがどうした？」

「ヒーローってカッコいいですよね？」

俺の言葉に丹波さんが頷く。

「ピンチは憧れのヒーローみたいにカッコ良くなれるチャンス…そう考えたら

楽しくありませんか？」

俺が笑顔でそう言っつと、丹波さんはまた目を見開いた。

「まあ、ピンチにならないのが一番なんでしょうけどね。」

そう言って笑ったのだが、丹波さんは何かを考えている様で反応が無い。

「葉輪！そろそろ、バッティングピッチャーを頼むわ！」

「はい！わかりました！」

東さんのその一言で、俺達は打撃練習をする為に、グラウンドへ移動するのだった。



パウプロ達が去ったブルペンには、まだ丹波が残っていた。

「丹波。」

そんな丹波に、片岡が話し掛ける。

「片岡監督…。」

「来年から、葉輪とエース争いをする覚悟はあるか？」

「正直、わかりません…。」

片岡は丹波を急かさずに、言葉を待つ。

「葉輪が言っていたんです。ピンチはヒーローになるチャンスだと…そんな事、

考えた事ありませんでした。」

そう言うと、丹波は拳を握り締めた。

「俺はピンチになると、どうしたらいいのかわかんなくなって自滅していました。」

それなのに、葉輪はそんな状況を楽しめる凄い奴でした。」

そこまで言うと、丹波は顔を上げて片岡の目を見た。

「葉輪みたいにピンチを楽しめる様になれるかはわかりません…でも、俺もヒーローになりたいです！」

片岡は丹波の言葉に頷いた。

「なら、早く行け。葉輪のピッチングが見れなくなるぞ。」

「はい！失礼します！」

そう言うと、丹波は走ってブルペンを出ていった。

1人ブルペンに残った片岡は笑みを浮かべる。  
そして…。

「一皮剥けたな、丹波。」

そう一言呟くと、片岡もブルペンを後にするのだった。



「だあ——！えぐいボールを投げるやないか！」

グラウンドに移動した俺は、グローブとスパイクを借りて、東さんを相手に

実戦を想定した打撃練習の投手をやっていた。

キャッチャーは先輩達を押し退けて一也がやっている。

一也は『例えクリスさんでも、パワプロのボールを受ける役は譲らねえよ』と言ってた。

そして、青道野球部の先輩達は練習を止めて、俺達の練習を見学している。

礼ちゃん曰く、シニアMVPの投球を見るのは勉強になるからこの事だ。

ちなみに、貴子ちゃんも俺達の練習を雑用の合間に見てくれている。

おかげで俺のモチベーションは有頂天だ！

しかし、結城さんの熱視線が凄いな…。

結城さんも一緒に練習したいのかな？

俺は一也のサインに頷いて投球モーションに入る。

一也の要求は、バックドアのカーブだ。

前の一球でインハイのフォーシームを投げたからなのか、東さんは見送ってしまう。

審判をしている先輩の判定は…ストライク！

「葉輪！少しは先輩に花を持たせんかい！」

そう言いながら、東さんは打席を外してバットを振っている。

「東さん！その注文は一也に言ってください！」

「冗談や！・冗談！」

東さんは打席に戻ると、笑みを浮かべながらバットを構えた。

…いいね！

マウンドで感じる東さんの威圧感に、俺も笑顔になる。

こうして俺は、強打者である東さんを相手に投げのを楽しんでいくのだった。

## 第60話

「葉輪くん、そろそろ切り上げましょうか。」

東さんのバッティングピッチャーをしていると、礼ちゃんからその声を掛けられた。

「忘れてるかもしれないけど、今日は学校見学なのよ？」

あ…完全に忘れてた。

「高島先生！ちよつと待ってもろうてええですか!？」

東さんの申し入れに礼ちゃんが頷く。

すると、東さんはバットで俺を指し示しながら声を上げた。

「葉輪！最後に1打席勝負や！」

東さんの言葉に、俺は笑顔になる。

「東さん！3打席勝負にしましょう！」

「試合での打席数と同じ条件でっちゅうことやな？」

「はい！」

俺の申し入れに、東さんが笑みを浮かべる。

「よっしゃ！俺はそれで構へんで！」

そう言うと、東さんはバットを振り始めた。

礼ちゃんは額に片手を当てて、ため息を吐いている。

そして、俺は東さんとの3打席勝負を楽しんだのだった。

3打席勝負の結果は、3三振で東さんを抑えたぜ！

俺は一也とハイタッチした。

イエーイ♪



「すげえな…。」

パウプロの投球を見ていた伊佐敷が、呟く様に話す。

「ああ、やっぱりアイツは凄い。」

そして、丹波が伊佐敷に相づちを打つのだが、その顔はどこか晴れやかだった。

そんな丹波の顔を見た伊佐敷は、目を見開いた。

「丹波、お前…変わったな。」

「そうか？」

「おう、少し前はいつも切羽詰まってる感じだったからな。」

伊佐敷の言葉に、丹波は苦笑いする。

「まあ、今のお前なら、俺もエース争いのしがいあるってもんだ！」

伊佐敷はそう言うと、笑顔になる。

対して、丹波も伊佐敷に笑みを返す。

「負けねえぞ、丹波！」

「ああ、俺も負けるつもりは無い…伊佐敷！」

そう言うと、2人は拳を合わせてから練習に戻るのだった。

◆  
パウプロと御幸が青道高校の学校見学を終えて帰った後も、青道高校野球部の練習は続いた。

そして練習が終わった後も、1人バットを振り続けている男がいた。

「全然足りんやないか！…こんなんじゃ俺はプロに行くつもりやったんかい！」

そのバットを振っている男は、東 清国だった。

「もっと走るんや、もっとバットを振るんや！」

東はパウプロとの3打席勝負で完敗した事で、ドラフト候補として持ち上げられて、

浮かれていた自分に気づいたのだ。

「浮かれている場合やないぞ…東 清国！」

◆  
その後も東は、真剣な表情でバットを振り、多くの汗を流していく。そんな東に影響されたのか、多くの青道高校野球部の者達が、練習後にも汗を流していくのだった。



青道高校の学校見学を終えてから数日経った頃、礼ちゃんが家に来て話し合いをした。

俺を特待生として青道高校に迎える事、そして入寮するかどうかを両親を交えて話し合ったのだ。

特待生の件に関しては直ぐに終わった。

これで来年からは青道高校の一員だぜ！

しかし、入寮に関してはかなりの時間、話し合いが続いたのだった。問題の1つは、青道高校が歩いて通える範囲にある事。

そして、もう1つが食事に関する事だった。

身体作りに食事は欠かせない。

なので野球選手を志したあの時から、母さんの協力の元、食事には気をつけている。

まあ、大会で優勝したご褒美等で、美味しいものを食べたりするのはご愛嬌だ。

ちなみにシニアが上がってから、大会の時に食べる弁当は貴子ちゃんを作ってくれていた。

葉輪、藤原両家の母親監修の元、貴子ちゃんは日々、料理の練習をしているみたいだ。

どうやら将来の為の練習らしい。

俺としては、これからも貴子ちゃんの手料理を食べたい。

その事を素直に伝えたら、貴子ちゃんは顔を真っ赤にしながら頷いてくれた。

やったぜ！ひゃっほい♪

その事を聞いていた両家の母親が、何やら微笑ましそうに見ていたので首を傾げたら、

何故か貴子ちゃんに両頬を引っ張られてしまったんだよな。

解せぬ…。

おっと、いかん。

今は寮に入るかどうかの話し合い中だった。

「なるほど…確かに、この食事内容でしたら問題ありませんね。」

礼ちゃんは母さんが書いた、俺の日々の食事内容を見て頷いていた。

「では、風路は家から通わせるといふ事でよろしいですか？」

「はい、それで結構です。」

お？どうやら話が纏まった様だ。

「それと、私の方からも藤原さんに協力をお願いしておきますね。」

「あらあら、いいのかしら？」

「教師としては問題なのかもしれませんが、1人の女としては応援していますから。」

礼ちゃんがそう言うと、何故か母さんと礼ちゃんは笑うのだった。

まあ、こんな感じで俺は、来年から青道高校に通う事になった。

そして、秋が終わり、冬が過ぎて、待ちかねた春が来る。

いよいよ、俺が青道高校野球部の一員になる日がやって来たのだった。

## 幕間：とある女性教諭のスカウトメモ

- ・ 葉輪 風路（はわ ふうろ）
- ・ 所属：丸亀シニア
- ・ ポジション：投手
- ・ 利き腕、打席：左投げ、左打ち
- ・ 球速：140km
- ・ 変化球：◎
- ・ 制球：◎
- ・ スタミナ：◎
- ・ 守備：◎
- ・ 打撃：△
- ・ 寸評：持ち球のキレ、コントロール共に抜群の本格派左腕であり、シニアMVP投手。
- ・ フィールディングも良く、牽制やクイックも十分に及第点であり、投手として高いレベルで纏まっている。
- ・ 唯一の欠点は打撃だが、スタミナ温存の為に捨てていた打席もあるので、評価はしにくい。
- ・ リトル時代から全国大会等の大きな舞台を経験しており、マウンドでは  
笑顔絶やさない強心臓の持ち主。
- ・ 間違いなく世代を代表する選手であるので要注目！



- ・ 御幸 一也（みゆき かずや）
- ・ 所属：丸亀シニア
- ・ ポジション：捕手
- ・ 利き腕、打席：右投げ、左打ち
- ・ 打撃：○
- ・ 守備：◎

・走塁：○

・寸評：強肩、強打の要注目捕手。シニアベストナイン。

・中学1年生時は当校のクリスくん影に隠れてしまっていたが、2年生の秋からはスタメンに定着した実力者。

・打撃にムラがあったが、徐々に改善されていつている傾向有り。

・前述した葉輪くんとコンビで完全試合を達成しており、バッテリーとしての相性は◎

・当校のクリスくんをライバルと公言しており、切磋琢磨しての成長に期待出来る。

◆

・白河 勝之（しらかわ かつゆき）

・所属：丸亀シニア

・ポジション：遊撃手

・利き腕、打席：右投げ、右打ち

・打撃：○

・守備：◎

・走塁：○

・寸評：打撃では小技に長けた、非常に器用な遊撃手。シニアベストナイン。

・打撃においてパワーに難があるが、成宮くんから四球で出塁するなど、粘り強い打撃をする。

・バントなどの小技にも長けており、パワーの無さに不安を感じさせない優秀な選手である。

・堅実な守備も評価されて、シニアでベストナインに選ばれる程の実力者。

◆

・成宮 鳴（なるみや めい）

- ・所属：城南シニア
- ・ポジション：投手
- ・利き腕、打席：左投げ、左打ち
- ・球速：137 km
- ・制球：○
- ・スタミナ：◎
- ・変化球：◎
- ・守備：○
- ・打撃：○
- ・寸評：シニア公式戦の優勝経験こそないが、間違いなく東京地区を代表する投手である。
- ・打撃も含めた総合力では、前述した葉輪くんをも上回る評価をする者有り。
- ・投手としては小柄な体格だが、左右の幅を広く使って投じるクロスファイヤーは◎
- ・欠点としては、球数が増えていくと、変化球が高めに抜ける傾向がある。
- ・上記欠点は、徐々に改善傾向にあるので要注目！



- ・神谷・カルロス・俊樹（かみや・かるろす・としき）
- ・所属：城南シニア
- ・ポジション：外野手（中堅手）
- ・利き腕、打席：右投げ、右打ち
- ・打撃：○
- ・守備：◎
- ・走塁：◎
- ・寸評：シニアトップクラスの走力を持つ外野手。
- ・その足の速さで、シニアトップクラスの守備範囲を持つ。
- ・選球眼が良く、シニアでの出塁率は4割を超える。

◆  
・ 左投手が苦手な傾向有り(?)

・ 東条 秀明(とうじょう ひであき)

・ 所属：松方シニア

・ ポジション：投手

・ 利き腕、打席：右投げ、右打ち

・ 球速：114km

・ 制球：○

・ スタミナ：○

・ 変化球：△

・ 守備：○

・ 打撃：○

・ 寸評：来年度のスカウト候補。要注目選手。

・ 球速、変化球の変化量共に物足りないが、低めへの制球力に光る

モノ有り。

・ 投手としては打撃が良く、成長に期待が持てる選手である。

◆  
・ 沢村 栄純(さわむら えいじゆん)

・ 所属：長野県の中学生軟式野球

・ ポジション：投手

・ 利き腕、打席：左投げ、左打ち

・ 球速：?

・ 制球：?

・ スタミナ：?

・ 変化球：?

・ 守備：?

・ 打撃：?

- ・寸評：長野県の中学生野球の大会で見つけた、来年度のスカウト候補の1人。
- ・今後の観察、評価次第。

## 高校野球編

### 第61話

さあ！待ちに待った青道高校野球部の練習初日だぜ！

「お待たせ、フークン。」

家の前で貴子ちゃんと合流して、いよいよ青道高校へ向けて出発だ。

貴子ちゃんが、自然に俺と手を繋いでくる。

去年のクリスマスと今年の初詣以来、貴子ちゃんはこうして、幼稚園の頃のように

手を繋いでくる様になった。

小学生になってからは自然と手を繋がなくなり、中学生では少しずつ繋ぐ様になって行って、

今では当たり前のように手を繋いでくる。

貴子ちゃんに、どういった心境の変化があったんだろうな？

まあ、俺は嬉しいからいいんだけどな！

それと、貴子ちゃんは礼ちゃんに、俺に関する事で協力を頼まれたらしい。

その協力内容を聞いてみたのだが、貴子ちゃんはウイנקをしながら、

「秘密だよ、フークン♪」と言ってきたのだ。

気になるが、可愛い貴子ちゃんの姿が見れたので満足しておいた。

さて、青道高校に向かっている途中だが、一也にモーニングコールをしないとな。

少し前に、「寮に入って環境が変わったら、起きられるかわかんねえから、起こしてくれ」

といった感じで一也に頼まれたのだ。

一也に携帯電話を使ってモーニングコールを掛けて少し経つと…。

『…も…も…』

一也、すっごい眠そうな声だな。



「おっす！朝だぞ、一也！」

『は？…げっ!?サンキュー、パワプロ!』

そう言っつて、一也は慌てた様子で電話を切った。

「フーくん、御幸くん起きてた?」

「今起きたっぽいよ、貴子ちゃん。」

俺がそう答えると、貴子ちゃんはクスクスと笑った。

「フーくん、去年も中々起きられなかった人が多かったんだよ?」

「へへ、そうなんだ」

「うん、初日から早く来て練習していたのはクリスくんとか結城くんぐらいね。」

結城さんも早く来ていたのか、そして、流石クリスさんだぜ!

そんな感じで貴子ちゃんと手を繋いで、話しをしながら青道高校に向かったのだった。



青道高校に辿り着くと、寝癖がついたままの一也が待っていた。

「おっす、さつきはありがとな、パワプロ。」

俺はショルダーバッグから、プロテイン入りのゼリー飲料を取り出して、一也に投げ渡す。

「その寝癖を見ると、何も口にしてないだろ、一也?」

「おう、ありがたくいただくぜ。」

そう言っつて、一也は早速ゼリー飲料を飲み始める。

「それじゃ、駄賃を受け取った一也には部室まで案内してもらおうかな?」

一也がゼリー飲料のパックをくわえたまま頷く。

「それじゃ、また後でね、フーくん。」

「うん、またね、貴子ちゃん。」

貴子ちゃんは手を振りながら走っていった。

「よっし!チャージ完了!行くぞ、パワプロ!」

「おう!」

一也に案内された部室で着替えると、一也と一緒に準備運動をするのだった。



準備運動をして身体が暖まった頃、片岡さんがやって来て整列をする事になった。

集まった皆で片岡さんに挨拶をすると、新入部員の自己紹介が始まった。

それぞれが挨拶をしていって、いよいよ俺の番だ！

「おはようございます！丸亀シニア出身の葉輪 風路です！ポジションはピッチャーです！」

片岡さんに甲子園の優勝旗をプレゼントします！エース争いでは遠慮しないので、

お互いに切磋琢磨して頑張りましょう！よろしくお願いします！」俺の挨拶が終わると、周りが少しざわついた。

片岡さんが一睨みすると、ざわつきは収まった。

俺の次に自己紹介した一也は、クリスさんからマスクを奪うと宣言していた。

先輩方の列に並んでいるクリスさんが、一也の宣言に笑みを浮かべていた。

そして、新入部員の挨拶が終わろうとした頃、数人の寝坊した新入部員達がやって来た。

片岡さんは寝坊して来た新入部員達を一瞥すると…。

「お前達は、練習が終わるまで走っている。」

と、鋭い視線を送りながら言ったのだった。

寝坊した新入部員達が走り始めると、片岡さんが今日の練習の事を話し始める。

いよいよ、憧れの片岡さんの元で野球が出来る日が来たんだ！

俺の胸はドキドキが止まらない。

よっしゃ！やってやるぜ！

## 第62話☆

俺が青道高校野球部に入っただけの練習初日、入学式がまだ行われていない為、一般入部の

新入部員達がいなくて練習が行われている。

全体練習として基礎を行った後、俺はブルペンへと向かった。

「おう！待ってたぜ、パワプロ！」

そう言っただけ、ブルペンで俺を迎えてくれたのは純さんだ。

ブルペンには他に、丹波さん、クリスさん、そして見知らぬ先輩が

1人いた。

「今日から、よろしくお願いします！」

「パワプロ！エースの座は譲らねえからな！」

「望むところですよ、純さん！」

俺と純さんがそんなやり取りをした後、少し遅れて一也がブルペンにやって来た。

「遅くなりました！」

「おう！御幸、待ってたぜ！」

「よろしくお願いしますね、純さん。」

そう言っただけ、一也は純さんと握手をした。

「丹波さん、身長…伸びました？」

「ああ、180cmを超えたな。」

そう答える丹波さんは、去年の学校見学の時に比べて、一回り大きくなっていた。

「葉輪、丹波は秋の大会が終わった辺りから成長痛になってな、走り込みなどが

出来なかつた代わりに、体幹を中心に鍛えたんだ。」

「へ〜…あ、クリスさんお久しぶりです！」

そう言っただけ、俺はクリスさんと握手した。

「クリスさん、怪我は大丈夫ですか？」

「ああ、リハビリも終わった。これから復帰して、レギュラーの座を取り戻すさ。」

「おお！復帰おめでとうございます！」

去年の学校見学の際に、怪我が発覚したクリスさんは、手術する事になった。

怪我の方は早期発見だった事もあり、こうして半年程で復帰出来たらしい。

ただ、長い間野球をしなかった事で、感覚を一から作り直さないといけないようだ。

「それじゃ、パワプロ達も来たことだし、投げ込みを始めるか！」

「パワプロ、一緒にやろうぜ！」

純さんの号令で投げ込みを始める事になった時、一也が早く俺を誘って来た。

だが、クリスさんがそれに待ったを掛ける。

「御幸、まずは伊佐敷や丹波の球を受けたらどうだ？」

「いやいや、練習初日ですから、まずは慣れているパワプロの球を受けますよ。」

「現在のエース候補は丹波と伊佐敷だ。スタメンのマスクを被るつもりなら、2人の球を

受けるべきだと思うがな。」

「復帰祝いにお譲りしますよ、クリスさん。」

クリスさんと一也のやり取りに、なんかデジャヴを感じる。

丹波さんと純さんは、そんな2人のやり取りに苦笑いをしている。

そして、俺のボールを受ける為のジャンケンが、宮内さんという先輩も

参加して行われたのだった。



「宮内さん、フォーシーム行きます！」

ジャンケンの結果は、宮内さんの勝利だった。

なので、俺は宮内さんにボールを受けてもらい、投げ込みをする事になった。

ちなみに、丹波さんのボールはクリスさん、純さんのボールを一也が受けている。

まずは軽めにフォーシームを投げる。  
パンツ！

クリスさんや一也程ではないが、宮内さんはいい音を出して捕球してくれた。

「ナイスボール！」

そう言って、宮内さんが返球してくる。

だが、狙いが少しずれてしまったので、俺は首を傾げながらボールを受け取った。

その時…。

ピロン♪

頭の中で、機械音が聞こえた。

俺は握りを確かめる振りをしながら、能力を使う。

基礎能力

最高球速：140km（※160km）

制球：A

スタミナ：D

変化球：カーブ5（※7）

変化球2：チェンジアップ5（※7）

※現所属カテゴリーを参照して、能力の表示を変更しました。

※上記に伴い、能力の成長限界を一部解放しました。

※身長の変化に伴い、制球のランクが変化しました。

スタミナのランクがかなり下がっている以外は、大きな変化は無いな。

投手能力を成長させる前に、野手能力を確認しておこう。

基礎能力2

弾道：2  
ミット：F  
パワー：E  
走力：D  
肩力：B  
守備：D  
捕球：C

肩力以外がかなり下がってる…。

流星は高校野球ってところだな！

とりあえずは、制球をSに、変化球2つを6に成長させる。

そして、球速を145kmまで成長させた。

まだポイントはあるが、これ以上は体調不良になりかねないので、成長した能力に慣れるまで後回しだ。

よし！投げ込み再開だ！

「フォーシーム行きますー！」

感覚の変化を確認しながらボールを投げる。

俺が投げたボールは、狙い変わらず宮内さんのミットに吸い込まれていった。

だが、宮内さんは捕球しきれずにボールを落としてしまった。

「すまん！だが、ナイスボールだ、葉輪！」

そう言って、宮内さんはユニフォームでボールを拭いてから返球してきた。

その後、数球程フォーシームを投げて感覚を確認していく。

フォーシームの感覚を掴んだところで、今度はカーブを投げる。

「宮内さん、カーブ行きますー！」

俺の宣言に、宮内さんはミットを叩いて応える。

何やら視線を感じて目を向けると、他の2組が俺の投球を見ていた。

そんなに注目されたら、テンションが上がるじゃないか！

俺は笑顔でカーブを投げる。

ボールは狙い通りのコースに行っただと思っただが、予想よりボールが大きく変化した事で

ワンバウンドしてしまった。

そのワンバウンドしたボールを、宮内さんは後逸してしまう。

「宮内さん、いつでも代わりますよ！」

「宮内、遠慮しないでいいぞ。」

宮内さんの後逸を見た一也とクリスさんが、宮内さんにそう言っただけを掛ける。

：…発破を掛けたんだよな？本当に交代したいわけじゃないよな？

宮内さんは、そんな2人の言葉を「ンフー！」と荒い鼻息で退けた。

「オラア！御幸！俺のボールに不満でもあるのか!？」

「よし！次行きましょうか、純さん！」

「誤魔化すんじゃないよ！」

純さんと一也がそんなやり取りをしながら、投げ込みを再開した。

2人に続く様に、丹波さんとクリスさんも投げ込みを再開する。

純さんと丹波さんの投げ込みを見ると、去年の学校見学の時よりも

成長しているのがわかる。

それが嬉しくて、笑顔になってしまう。

この2人とエース争いをして、切磋琢磨出来るのが嬉しくて堪らない。

俺は一球、一球を楽しみながら、宮内さんと投げ込みをしていくのだった。

## 第63話

俺の青道高校野球部部員としての初日の練習が終わり、入学式の日がやって来た。

これで、俺は正式に青道高校の生徒になった。クラス分けでは一也と同じクラスになったぞ。

一也の話では、俺達以外にも野球部の部員がいるらしい。

学校行事等で、班分けとかをしやすい様にといった、学校側の都合でこうなったみたいだ。

さて、入学式が終わり、一般入部の人達も野球部にやって来た事で、俺や一也といった

一般入部の人達よりも先に野球部に入った者達を含めて能力テストをする事になった。

50m走、遠投といった具合に能力テストが行われていく。最初に行われた50m走では、めっちゃ足の速い奴がいた。

記録員をしていた貴子ちゃんに聞いてみると、ボーイズリーグ出身の倉持という選手らしい。

ポジションは遊撃手で、スイッチヒッターの様だ。

他には目につく様な選手はいなかったが、能力テストをしている皆は、レギュラーの座を

奪うべく真剣に取り組んでいる。

いいね！俺も負けないぜ！

50m走が終わり、遠投が始まった。

今の所、一番目立ったのは一也だな。

遠投では、外野フェンス直撃の100mを記録した様だ。

流星はシニアでベストナインに選ばれるキャッチャーだぜ！

俺と一也はハイタッチをした。

イエーイ♪

遠投はドンドン行われていき、いよいよ俺の番が来た。

俺がボールを持つと、周囲の注目がめっちゃ集まってきた。

記録員をしている貴子ちゃんは、軽くガッツポーズをして俺を応援



してくれた。

見ててくれよ、貴子ちゃん！

俺はワンステップしてボールを投げる。

ボールは低い弾道で進んでいって、外野フェンスに直撃した。

俺の遠投の記録は一也と同じ、100mとなった。

能力テストを受けている同級生達のざわめきが、貴子ちゃんと同じ様に

記録員をしていた先輩の声で収まる。

どうやら、これからはポジション毎にわかれて能力テストをしていくみたいだ。

というわけで、投手である俺は、他の投手希望の同級生達とブルペンに移動するのだった。



ブルペンには、投手希望の者達のボールを受ける為に、クリスさんと宮内さんがいた。

それと、何故か片岡さんも投手の能力テストを見るらしい。

憧れの片岡さんの前で能力テストか：気合いが入るぜ！

投手の能力テストの記録員をするのは礼ちゃんのようなだ。

礼ちゃんが名前を呼ぶ順番で、投手の能力テストが行われていく。

投手の能力テストの内容なのだが、持ち球をキャッチャーに数球投げ込んでいくだけだ。

それで、球速、制球、変化やキレといったモノを見ていくらしい。投手の能力テストをしていく人達の表情は、あまり良いものではない。

見ていると、コントロールが定まらないみたいだ。

片岡さんが見ているから、緊張しているのかな？

「次、川上くん。」

「はー。」

礼ちゃんに名前を呼ばれた人が、肩慣らしをしていく。

その投げ方に俺は驚いた。

なんと、この人はサイドスローだったのだ。

この人の前までは、オーバースローとスリークウオーターの人達だけだったから、

俺は驚いたのだ。

えっと、礼ちゃんは：川上って言ってたっけ？

川上がサイドスローから投じるボールは、宮内さんが構えるミットにしっかりと納まっていく。

ピンポイントのコントロールでは無いが、川上が投げる前の人達と比べれば、コントロールの

良さが際立って見える。

川上は数球程フォーシームを投げると、今度はスライダーを投げ始めた。

このスライダーもコントロールが良い。

そして、サイドスローから投じられるからなのか、横の変化が大きいのが特徴だ。

川上の投球を見ている礼ちゃんが、頷いているのが見える。

「川上、他に変化球はあるか？」

「あります。でも、まだ練習中で…。」

「構わん。投げてみる。」

これまで黙ってテストを見守っていた片岡さんが話した事で、能力テストを受けている

同級生達がざわめいた。

「シンカーいきますー！」

川上のシンカー宣言に、ボールを受けている宮内さんが、ミットを叩いて応える。

川上がサイドスローでボールを投げた。

ボールは利き腕方向に変化しながら沈んでいく。

だが、スライダー程コントロールが良くないのか、ワンバウンドしてしまう。

宮内さんはボールをしっかりとブロッキングして、前に落とす。

「すいません！」

川上が宮内さんに謝るが、宮内さんは荒い鼻息を一つしてから「気にするな」と言った。

その後も川上はシンカーを投げていくが、やはり練習中な為か、フォーシームや

スライダーの様にコントロールは定まらないままだった。

「はい、川上くん。そこまですよ。」

礼ちゃんの言葉で川上の能力テストが終わった。

「それじゃ、最後に…葉輪くん。」

「はい！」

いよいよ俺の番だ。

やってやるぜ！

## 第64話

いよいよ、俺の投手能力テストの番がやって来た。捕手は宮内さんからクリスさんに代わるみたいだ。

俺はクリスさんとキャッチボールをして肩慣らしをする。

クリスさんの返球の姿を見ているが、去年の学校見学の時の様な違和感はない。

うん、クリスさんの怪我はちゃんと治ったみたいだ。

「監督、葉輪の投球を見学してもいいですか？」

クリスさんとのキャッチボールで肩慣らしが終わった頃、そんな言葉が聞こえてきたので

振り向くと、丹波さんと純さんの姿があった。

「構わん。」

「ありがとうございます。」

どうやら、丹波さんと純さんが俺の投球を見るらしい。

俺の青道高校での練習初日に、ブルペンと一緒に練習した時に、俺の投球を

ある程度見ている筈なんだけどな。

まあ、いいか。

俺は気にしない事にして、投手能力のテストを始める。

といつても、いつもの投げ込みと変わらないんだけどな。

「クリスさん、フォーシーム行きますー！」

クリスさんが頷いて、ミットを右打者のアウトローの位置に構える。

ノーwindアップで足を上げてから、ゆっくりと下ろしていく。

そして、前に滑るように踏み込む。

踏み込んだ足を、突っ張る様にして股関節を使う。

一連の動作の力をリリースで解放。

俺が投げたフォーシームは、狙い違わずにクリスさんのミットに納まった。

「ナイスボール！」

俺はクリスさんの返球を受けながら笑顔になる。  
うん、いい感じだ。

成長させた球速の感覚に、だいぶ馴染めたな。

これなら、そろそろ3球種目の変化球を覚えても大丈夫そうだ。  
そんな事を考えていると、クリスさんがミットを構える。

今度のコースは：さっきのコースのボール半分外か。

俺はクリスさんの要求するコースにフォーシームを投げ込む。

狙いはバツチリ！ボールはしっかりと、クリスさんの構えるミットに納まった。

その後も、クリスさんはインローやインハイ一杯に構えたり、ボール1つ分外したりと、

色々なコースを要求してきた。

俺はクリスさんが要求してくるコースに、フォーシームを投げ込んでいく。

そんな感じで10球程、フォーシームを投げ込むと、礼ちゃんからそろそろ変化球と言われた。

なので、今度はカーブを投げ込んでいく。

クリスさんが時折、わざとワンバウンドを要求してきたりする。

俺はその要求に応えて、カーブを投げ込んでいく。

なんか、丹波さんが食い入る様に見てきているな。

そして、カーブをある程度投げ込んでいくと、また礼ちゃんから違う変化球と言われた。

なので、今度はチェンジアップを投げ込んでいく。

チェンジアップを投げ始めると、今度は純さんが食い入る様に見てきた。

丹波さんはカーブが持ち球だからわかるけど、純さんってチェンジアップ投げてたっけ？

そんな風に考えながらもチェンジアップを投げ込んでいくと、いつの間にか

テストが終わってしまった。

うくん、もつと投げたい。

「葉輪、他に球種はあるか？」

「ありません。でも、覚えようと思っっているのはありますね。」

片岡さんは1つ頷いて俺に話しの続きを促してきた。

「覚えようと思っっているのはスライダーです。」

「そうか。」

片岡さんが俺の言葉に1つ頷く。

「投げ込み過ぎて肩を痛めない様に気をつけろ。」

「はい！」

こうして、今年の新入部員の実力テストは終わったのだった。



翌日、新入部員が集められると、能力テストの結果を片岡さんが発表した。

俺は一軍に合流する事が決まった。

ひゃっほい♪

他に新入部員で一軍に合流する事になったのは、一也、川上、倉持、そして白州という奴だった。

他の新入部員は、残念ながら二軍以下からのスタートだ。

でも、青道高校は実力主義なので、学年を問わずに一軍、スタメンの可能性があると。の事。

だから、一軍に選ばれたからといって油断をしない様にと言われた。

そして、選ばれなかった者は這い上がって来い！待っっているぞ！と言われた事で

新入部員の皆は燃え上がっていた。

いいね！俺も熱くなってきた！

エースの座を勝ち取ってやるぜ！

## 第65話

能力テストが終わって数日、春季大会の日が迫ってきていた。

春季大会は、夏の高校野球選手権大会の試金石とも言える大会なので、一軍メンバーは

レギュラーの座を勝ち取るべく、練習に熱が入っている。

そして、俺は今、一軍の1年生、2年生の投手、捕手メンバーと一緒に

ブルペンで投げ込みをしている。

ちなみに、3年生の投手と捕手の人は、グラウンドでシートバッティングだ。

「二也！次、カーブ行くぞー！」

俺の言葉に一也がミットを叩いて応える。

俺が投げたカーブは、狙い変わらずに一也のミットに納まった。

一也の返球を受けながら、俺はチラリと他の人の投げ込みを見ていく。

丹波さんは、新しい球種としてフォークを練習している。

フォークシームとカーブのコンビネーションで、緩急を活かして打ち取るのが、

丹波さんのピッチングスタイルだ。

そこに、カーブに比べて球速の速いフォークを加える事で、ピッチングの幅を拡げたいらしい。

丹波さんがフォークを選んだ理由は、カーブと同じく、リリースの際に『抜く』系統の

変化球だからと言っていた。

そして、フォークは腕の振りがフォークシームと同じなので、カーブとは別の形で

フォークシームを活かす事が目的の様だ。

ちなみに、丹波さんのボールを受けているのは、クリスさんだ。

俺は丹波さんのピッチングから、純さんへと目を移す。

純さんが練習しているのはチェンジアップだ。

去年の秋の大会で、純さんはフォーシームとツーシームの2球種で挑んだらしい。

純さんは色々と球種を試した結果、抜く系統の変化球が苦手だと言っていた。

その為、フォーシームと同じ様に投げられるツーシームを持ち球としていたのだが、

エースの座を勝ち取る為に球種を増やす決断をしたとの事。

そこで選んだのが、フォーシームやツーシームに比べて、球速の遅いチェンジアップだ。

ただ、純さんは『抜く』リリースの感覚が苦手なので、チェンジアップを投げる際は、

中指と薬指でフォーシームを投げるような形でやっている。

その為なのか、純さんのチェンジアップは『落ちる』のではなく、『来ない』チェンジアップになった。

そんな感じで、純さんのチェンジアップは変化球として形になったのだが、

現在は高めに浮いてしまうのが課題となっている。

純さんのボールを受けているのは、一年生の捕手である、小野という奴だ。

小野は本来は二軍なんだけど、ブルペンで受ける捕手の数が足りないので、

一時的に一軍に合流している状態だ。

小野はこの機会を活かそうと、真剣な表情で純さんのボールを受けている。

俺は目をノリのピッチングに移す。

川上 憲史。

数日前の投手の能力テストで、俺と一緒に一軍に選ばれた同級生だ。

ノリとは能力テストの後に、ピッチングの事を話して仲良くなった。

その際にお互いを、愛称で呼び合う様になったのだ。



ノリは能力テストの時に練習中だと言っていた、シンカーの練習をしている。

右打者の膝元に投げ込みたいけど、投げきれないのが課題の様だ。そんなノリは、ボールを受けてもらっている宮内さんと、相談しながら投げ込みをしている。

「パワプロ・そろそろスライダーを投げてくれ！」

おっと、俺も練習に集中しないとな。

一也の要求通りにボールの握りを、『ツーシーム』にする。

そう、このツーシームの握りが、今現在のスライダーの握りだ。

能力テストの翌日からスライダーの練習を始めたのだが、その時はフオーシームの握りから、

縫い目をずらした様な握りだった。

だがその握りでは、俺の中の感覚でカーブと区別がつかなくて、なんかしっくり来なかったんだよね。

そこで今朝、練習が始まる前にクリスさんに相談したら、この握りを教えてもらったのだ。

クリスさん曰く、プロ野球でガラスのエースと呼ばれた、伝説の投手の握りらしい。

伝説の投手の握りと聞いて、テンションが上がって小躍りしてしまった。

その時の姿は貴子ちゃんに見られてしまった。

そして一言、「フーくん、可愛い」と言われてしまった。

俺は頭を抱えながら、身を振って悶えたぜ。

ちくしよう！今度はカツコイイ姿を見せてやる！

そんな俺の決意に、クリスさんは呆れた様のため息を吐いていたな。

閑話休題。

さて、新しい握りでスライダーを投げてみるか！

俺はクリスさんにももらったアドバイスに従って、リリースの際に人差し指で、

横に弾く様に意識してスライダーを投げる。

俺のスライダーの変化量は、ステータス画面上では1なので、小さな変化しかない。

しかも、この握りで初めて投げたせいか、俺が投げたスライダーは、一也が構えているミットから大きくずれてしまった。

一也がポロリと、ボールを落としてしまう。

「ごめん、一也！」

俺は一也に一言謝る。

一也はボールを手で捏ねてから返球してきた。すると…。

ピロン♪

頭の中に機械音が響いた。

なんだ？

俺は能力を使つて確認してみる。

※スライダーが高速スライダーに変化しました。

ふあっ!?

なんかよくわからないけど、新しい握りで投げるスライダーは、高速スライダーらしい。

へー、こんな風に能力が変わる事もあるのか。

まあ、いいか！

練習を続けよう！

その後、俺は高速スライダーのリリースの感覚に慣れようと、投げ込みをしていくのだった。



(くそっ！捕りにくい！)

パウプロのボールを受けている御幸は、高速スライダーの捕球に苦戦していた。

御幸の返球を受け取ったパウプロが、笑顔で投球モーションに入

る。

御幸は息を吐きながら、集中力を高めていく。

パウプロが独特な投球モーションから高速スライダーを投げる。

(ボールの軌道はフォーシームに見える。でも、ここから…横に滑る！)

御幸は高速スライダーを捕球しようとするが、予測していた場所と違った為、

型付けしてあるミットのポケットで捕球出来ずに、手首に近い位置でボールを受けてしまった。

(…いってえ——!!)

御幸はマスクの奥で目を見開きながら、手の痛みに耐える。

「ごめん、一也！また、ずれた！」

パウプロは新しい握りのスライダーに挑戦している為、他の球種のように

コントロール出来ないのは仕方ない。

だが、ここまで連続でちゃんと捕球出来ない事は、御幸にとって初めてだった。

御幸はマスクの奥で笑みを浮かべる。

相棒の止まらない進化が、堪らなく嬉しいのだ。

「譲りませんよ、クリスさん。絶対にレギュラーの座を勝ち取ってやる！」

その後も、御幸は苦戦しながらパウプロのボールを受けていく。

そして御幸は練習後に、真っ赤になった手をアイシングするのだった。

## 第66話

春季大会が2日後に迫った日、先日のブルペン組みは、青道の一軍打線を相手に

シートバッティングをする事になった。

ちなみに、3年生の投手と捕手の方々はブルペンである。

青道の一軍打線は春季大会で結果を残して、夏の大会でレギュラーになろうと気合い十分だ。

そんな青道打線に最初に挑む事になったのは、丹波さんだ。

そして、丹波さんのボールを受けるのは、宮内さんである。

1年でありながら、倉持が一番バッターで登場する。

丹波さんは、カーブで倉持を打ち取ると、続いて二番バッターの小湊さんと対戦する。

小湊さんは8球程粘って四球で出塁した。

続く三番バッターで登場したのは、クリスさんだ。

丹波さんは、クリスさんにフォーシームをホームランにされてしまう。

少しの間、マウンドで茫然としていた丹波さんは、四番バッターの東さんが打席に入ると、

大きく息を吐きながら、帽子を被り直す。

打席に入った東さんは、去年会った時に比べて身体が引き締まっております、強打者としての

風格が漂って見える様だ。

丹波さんは東さんにフォークを投げたのだが、東さんはボールを膝元まで

呼び込んで、右方向に弾き返した。

東さんが打ったボールはグングン伸びていき、ホームランになった。

二者連続ホームランで3失点。

丹波さんはマウンドで、また大きく息を吐きながら帽子を被り直している。

5人目の打者として、結城さんが打席に入る。

丹波さんは、結城さんに左中間へのツーベースヒットを打たれた。これで3連打だ。

だが、丹波さんの様子は、クリスさんにホームランを打たれた時に比べて、

落ち着いてきた様に見える。

その後の打者に、丹波さんは結城さんをホームに返されてしまったが、

1つずつアウトを重ねていった。

丹波さんのシートバッティングは、打者1巡で4失点の結果だった。

だが、マウンドを降りる時の丹波さんは、何かを掴んだのか、控えめに右手を握り締めていた。

丹波さんの次にマウンドに上がったのは、純さんだ。

純さんのボールを受けるのは、一也だ。

そして、クリスさんの代わりに、宮内さんが打線に入った。

純さんはフォーシームとツーシームを中心に、青道打線と勝負していく。

一番バッターの倉持が、ツーシームを三遊間に転がすと、内野安打で出塁した。

二番バッターの小湊さんが打席に入ると、バントの構えをして、純さんを揺さぶっていく。

純さんは、セツトポジションから投球をするのだが、クイックは苦手と言っていた。

そんな純さんから、倉持は1球目で走る。

純さんのボールを受けた一也が、2塁に投げるが、倉持は余裕を持って2塁に滑り込んだ。

倉持の足、めっちゃ速い。

何あれ？カルロスと同じぐらい速いんじゃないか？

盗塁に成功した倉持を、小湊さんが3塁にバントで送る。

ワンアウト、3塁の場面ではあるが、純さんは落ち着いて三番バッ

ターをツーシームで

内野ゴロに打ち取った。

だが、その内野ゴロの間に倉持はホームに帰ってきた。

倉持はほんとに足速いなあ。

その後、純さんは東さんにツーベースヒットを打たれたり、結城さんにヒットを

打たれたりしたが、青道打線の1巡を2失点で抑えた。

そんな純さんは「オラア！」と威勢良く吠えながらマウンドを降りた。

さて、いよいよ俺の番だ。

キャッチャーは一也からクリスさんに代わり、宮内さんの代わりに一也が打線に入った。

一番バッターの倉持との対戦。

俺は倉持をカーブで空振り三振に打ち取ったのだが、クリスさんが珍しく、

ボールを後逸してしまった。

この後逸の間に、倉持は振り逃げで出塁した。

二番バッターの小湊さんが打席に入ると、クリスさんから牽制のサインが出る。

なので、1塁に牽制！

惜しい！

残念ながら牽制で倉持をアウトに出来なかったが、倉持のリードを縮める事には成功した。

それでも、走る気満々に見えるなあ。

まあ、いつか。

クリスさんのサインはフォーシーム。

俺は頷いて投げる。

倉持が走った！

小湊さんが、倉持の盗塁を助ける為に空振りをする。

クリスさんはボールを捕球すると、素早く2塁へ送球！

だけど、クリスさんの送球は上に逸れてしまい、センター前に行っ

てしまう。

うおっ!?

クリスさんが送球ミス!?

俺が驚いている間に、倉持は素早く3塁に進塁していた。これで、いきなりノーアウト、3塁のピンチである。

だが、ピンチはヒーローになるチャンスだ!

俺は笑顔でマウンドに立つ。

外野フライでも1点の場面。

俺はクリスさんのサインに頷いて、ボールを投げ込んでいく。そして、小湊さんを空振り三振に抑える。

続く三番バッターは、一也だ。

チャンスに強い一也との勝負：燃えるぜ!

俺はクリスさんのサインに頷いてフォーシームを投げる。すると…。

キンッ!

金属バットの音が響き、打球はレフトへと飛んでいく。

定位置のレフトがボールを捕球すると、直ぐにボールをキャッチチャーへ投げる。

倉持はタッチアップしてホームを目指す!

クロスプレーになるが、判定は…セーフ!

見事に一也に犠牲フライを打たれてしまった。

一也は倉持とハイタッチした後、俺にサムズアップしてきた。

へんっ!次は抑えてやるからな!

ツーアウト、ランナー無しの場面で迎えるのは、四番バッターの東さんだ。

クリスさんのサインに頷いて投げていき、2球でツーストライクに追い込んだ。

そして、クリスさんの要求に従って投げた3球目のチェンジアップは…。

カキンッ!

東さんにセンター方向へのホームランにされてしまった。

「どうや！これで去年の借りは返したで！」

東さんが悠々とベースを回りながら、俺を指差して吠える。

そんな東さんに、俺は舌を出して返事をした。

「可愛いげの無い奴や！少しはへこまんかい！」

だが断る。

その後、結城さんにツーベースヒットを打たれて、またピンチの場面になったが、

後続は抑えて2失点でマウンドを降りた。

俺自身の投球感覚は悪いものではなかったが、どうもクリスさんの動きが

ピリツとしていない様に感じて、少しモヤモヤとした気分が残ったのだった。

あ、ちなみにノリのシートバッティングの結果は、1失点だったぜ。

やるな、ノリ！



## 第67話

パウプロ達がシートバッティングをした日の練習後、片岡はクリスを監督室に呼び出していた。

「失礼します。」

ドアをノックをして、そう言った後にクリスが入室すると、監督室には片岡と高島、

そして太田が待っていた。

「クリス、肩はどうだ？」

「問題ありません。」

片岡はクリスの返事に1つ頷く。

「呼び出した理由はわかるか？」

「…シートバッティングでのミスの事だと思えます。」

片岡はクリスの返事にまた1つ頷く。

「原因はわかっているか？」

「身体を動かす際の感覚のずれ、そして、試合勘が無くなった事だと思えます。」

そう答えるクリスだが、その表情に悲壮感は無く、しっかりと片岡の目を見ていた。

「春季大会と、夏の大会前の練習試合で様子を見る。その結果次第で、夏の大会では外す。」

「はい！ チャンスを頂き、ありがとうございます！」

そう言いながらクリスは頭を下げると、監督室を退室していった。

「大丈夫でしょうか、片岡先生。」

太田が心配そうに声を上げる。

「元プロの、クリスくんのお父さんがトレーナーについてリハビリを  
していった事で、

クリスくんの身体は、怪我前に比べて一回り大きくなりました。それが身体の

感覚のずれに繋がったのでしょうか。」

高島が資料を見ながらそう言うと、片岡は肯定する様に頷いた。

「高島先生の言う通りでしょう。」

「なら、公式戦ではなく、練習試合や紅白戦でじっくり戻した方がいいのでは？」

「太田部長の意見もわかります。ですが、厳しいリハビリを終えたクリスに

チャンスを与えてやりたいのです。」

そう答える片岡の言葉に、太田部長はため息を吐きそうになって堪えた。

「責任は私がとります。今はクリスを含めた、あいつらの成長を見守ってやってください。」

強い意思を見せる片岡の目に、高島と太田は信頼を見せるように頷いたのだった。



いよいよ春季大会が明日へと迫った日の練習後、片岡さんから春季大会のレギュラーが発表された。

春季大会の東京地区予選では、基本的に1年生の出番は無いらしい。

理由としては、夏の大会前に西東京地区の高校に情報を与えない為のようだ。

でも、俺は丹波さんと2人で先発をされると言われた。

やったぜ！

丹波さんが先発をする時は、3年生の捕手の人と組むらしい。

そして、俺はクリスさんとバッテリーを組む様だ。

頑張りましょうね、クリスさん！

俺がそう言うと、クリスさんは「葉輪、迷惑を掛ける」と言ってきた。

俺がクリスさんの言葉に首を傾げると、クリスさんは苦笑いをしたのだった。



「ブーくん、明日から春季大会だね。」

「うん、待ち遠しいよ、貴子ちゃん。」

片岡さんの話しの後、いつも通りに貴子ちゃんと2人で手を繋いで帰っているんだけど、

貴子ちゃんの顔は少し赤くなっている。

原因は帰る前に、マネージャー仲間にからかわれたせいだろうな。

貴子ちゃんをからかったのは、俺と同級生の…えっと、夏川と梅本…だったかな？

その2人にからかわれたので、貴子ちゃんは顔を赤くしているのである。

顔を赤くしながら、少し恥ずかしがっている貴子ちゃんは凄く可愛い。

夏川、梅本…グツジョブ！

「貴子ちゃん、マネージャーの先輩の事、残念だったね。」

「うん。でも、後を任せられたんだから、頑張らないとね。」

先日、1人だけいた3年生のマネージャーの人が、大学の受験勉強に

専念する為に退部していった。

貴子ちゃんの話では、その人は元々2年生までで辞めると家族と約束していたのだが、

貴子ちゃんに色々引き継ぎをする為に残っていたそうだ。

そういった事があり、春季大会からは貴子ちゃんが、マネージャーとして

ベンチに入る事になったのだ。

「お互いに頑張ろうね、貴子ちゃん。」

「うん。」

貴子ちゃんは、そう返事をしながら笑顔になる。

貴子ちゃんの笑顔…可愛いぜ！

その後は、いつも通りに貴子ちゃんと話しながら、家へと帰って

いったのだった。

## 第68話

いよいよ春季大会の東京地区予選が始まった。

青道高校はシードだったので2回戦からだ。

青道高校の初戦となる東京地区予選の2回戦、先発は丹波さんだ。

丹波さんが1回の表を3人で抑えると、1回の裏の青道打線が先制点を取った。

試合は進んでいき、4回の裏が終わると、5―0で青道高校が勝ち越している。

だけど、5回の表。

相手打線の先頭打者が、センター前のヒットで出塁すると、丹波さんは相手打線に

連打を浴びたのだった。



カキンッ!

金属バットの音が球場に響いて、打球が外野へと飛んでいく。

打球は左中間を抜けて、ツーベースヒット。

2塁ランナーがホームに帰って1失点。

このヒットで、丹波は相手打線に3連打されていた。

現在の状況は5回の表、ノーアウト、ランナー2、3塁。

丹波の心臓は早鐘の様に鳴り響いていた。

汗を冷たく感じている丹波は、マウンドで大きく息を吐きながら、帽子を被り直す。

帽子を被り直す際に、丹波は帽子の鏢に目を向ける。

そこには『ピンチはチャンス』と書かれていた。

去年、パワプロが学校見学の時に言った『ピンチはヒーローになるチャンス』を聞いて、

丹波が帽子に書いた言葉だ。

この言葉を聞いてから、丹波は1つ個人的な欲を持つようになった

た。

ヒーローになりたい。

単純な思いだが、これが丹波に開き直りに近い心境を与える様になった。

もつとも、元々はノミの心臓の丹波である。

そう簡単に気持ち切り替える事は出来ない。

だが、丹波は少しずつだが、ピンチの状況で自身をコントロールする経験を

積み上げていつているのだ。

帽子を被り直した丹波が、キャッチャーのサインを見る。

サインに頷き、丹波は投球モーションに入った。

丹波が投じたのはフォーシーム。

コースはインハイ。

やや甘めのコースのフォーシームを、右打席に立つ相手打者が弾き返す。

打球はレフト方向へ。

レフトが打球の落下点に入って構える。

レフトは打球を捕ると、素早く中継のショートへボールを投げる。

3塁ランナーはタッチアップして、相手チームが1点追加。

これで5―2。

だが、連打を浴びていた丹波が取ったワンアウトに、ナインが声を上げて盛り上げていく。

そのナインの声に、丹波は冷たく感じていた汗を感じなくなるぐらいに、

身体が熱くなるのだった。



5回の表に相手チームに連打を浴びた丹波さんだったが、3失点で切り抜けると、

雄叫びを上げながらベンチに戻ってきた。

そして5回の裏。

丹波さんの雄叫びに答える様に、東さんがホームランを打った。亮さんが塁に出ていたので2点追加だ。

あ、亮さんというのは小湊さんの事だ。

シートバッティングをした日の練習後に、少し話をして仲良くなったんだよね。

ちなみに、その時に結城さんとも話をして、哲さんと呼ぶようになった。

2人は俺の事をパワプロって呼んでくれるぞ！

さて、東さんがホームランを打った後に、哲さんもツーベースヒットを打ったりして、

青道は3点を追加した。

これで8―3だ。

6回の表に、また丹波さんが連打を浴びたが、6回の表は2失点で切り抜けた。

8―5と相手チームに詰め寄られたが、東さんが笑顔で丹波さんの背中を叩いたりして、

青道ベンチの雰囲気は明るい。

「よっしゃあー後は任せろ、丹波！」

そう言った純さんが、7回の表から登板。

純さんは、7回、8回を1失点で抑えて降板。

最終回は3年生の人が登板して、無失点で抑えた。

2回戦は10―6で青道高校の勝利だ！

続く3回戦は俺が先発する事になっている。

3回戦の相手は稲城実業…白河やカルロス、そして成宮が行った高校だ。

試合をするのが楽しみだぜ！

## 第69話

今日は春季大会の東京地区予選の、第3回戦だ。  
いよいよ俺の高校野球デビューの日がやって来たぜ！

しかも、相手は成宮達がいる稲城実業なのだから、俺のモチベーションは

非常に高くなっている。

高くなっているのだが：稲実のベンチを見ても、成宮のあの特徴的な髪色が見当たらない…。

「どうした、葉輪？」

試合前の肩作りをしながら、稲実のベンチをチラチラと見ている俺に、

肩作りの相手をしてきているクリスさんが声を掛けてきた。

「クリスさん、成宮達の姿が見当たらないなあと思ひまして。」

俺がそう言うと、クリスさんは苦笑いをした。

「葉輪、高校野球に限らずシニアとかでも、この時期の新生は身体作りが基本だ」

「そうなんですか？」

俺はクリスさんの言葉に首を傾げながら返事をする。

「それと、春季大会前に片岡監督が言っていた様に、夏の大会前に、同地区の高校には

あまり情報を与えたくないという事情もあるだろうな。」

「なるほど。」

つまり、成宮達は秘密兵器という事か。

カッコいいじゃないか！

「納得したなら、アップを続けるぞ。」

「はい！」

そう返事をした後、俺は球場の雰囲気を楽しみながらアップをしていくのだった。





「ほらーやっぱりパウプロは試合に出るじゃん！」

春季大会の東京地区予選の第3回戦となる、青道と稲実の試合が行われる球場のスタンド。

そこには、試合を見学する稲実の1年生達の姿があった。

そして今声を上げたのは、パウプロが稲実のベンチに目を向けて探していた成宮である。

「鳴の勘が当たったな。」

肩作りをしているパウプロを見ながら、成宮にそう返事をするのはカルロスだ。

「青道は打撃では有名だけど、投手はそうでもないからね。だから、パウプロに

投げさせるんじゃない？まあ、パウプロなら夏の大会前に、ある程度情報を取られても

大丈夫とか思っているのかもしれないけどね。」

成宮達と並んで見学をしている白河が、言葉に少し皮肉を込めてそう言うのと、

成宮が噛みつく様に声を上げた。

「俺だって情報を取られても大丈夫だし！」

そう言いながら成宮は、カルロスと白河に顔を向けるのだが、2人はパウプロの動きを

集中して見ているので、成宮が見ている事に気づかない。

そんな2人の様子に、成宮は面白く無さそうに鼻を鳴らすと、

自分もパウプロの観察を始めたのだった。

「先に高校野球デビューするのは譲ってやるよ。でも、甲子園には俺が行くからな！」



さあ、いよいよ稲実との試合開始だ！

だけど、試合開始の挨拶に向かう前に、俺は片岡さんにある制限を

言われるのだった。

「葉輪、この大会、カーブ以外の変化球を使うな。」

カーブ以外の変化球禁止？

「よくわからないけど、わかりました！」

俺が片岡さんに敬礼しながら返事をする、片岡さんの後ろにいた太田部長が

オロオロとしている姿が目に入った。

太田部長はどうしたんだ？

トイレにでも行きたいのかな？

そんな事を考えながら首を傾げていると、ベンチでスコアブックを手に行っている

貴子ちゃんと目が合う。

貴子ちゃんは両手をキュツとして俺を応援してくれた。

行ってくるぜ、貴子ちゃん！

俺は貴子ちゃんの応援にサムズアップで応える。

「葉輪！整列や！」

おっと、東さんが呼んでるから急ごう。

こうして、俺の高校野球デビュー戦が始まるのだった。

お願いします！

## 第70話

春季大会の東京地区予選の第3回戦。

青道と稲実の試合が始まった。

1回の表、青道の攻撃。

1番バッターの亮さんが粘って、相手投手の球種や球筋を後続に見せていくが、

7球目を引っかけた、内野ゴロに打ち取られた。

続く2番バッターも凡退し、3番バッターのクリスさんが打席に入る。

カキンッ！

金属バットの快音が響き、打球は左中間へと飛んでいき、ツーベースヒット。

これでツーアウトながら2塁のチャンス。

次のバッターは4番の東さんだ。

カウントは進んでツーストライクと追い込まれたが、打席の東さんに焦りの様子は見えない。

そして、稲実の投手が投げた3球目に東さんのバットが反応した。

キンッ！

打球は右中間方向に高く上がると、そのまま飛んでいく。

打球を追っていた、稲実のセンターとライトが足を止めた。

東さんは2回戦に続いて、3回戦でもホームランを打った！

東さんスゲー！

5番バッターの哲さんはライトフライに倒れて、1回の表が終わった。

さあ！いよいよ俺の出番だぜ！

俺は意気揚々とマウンドに向かう。

俺がマウンドに立つと、スタンドが少しざわざわとなり始めた。

そのざわつきに目を向けると、スタンドに特徴的な白髪を発見。

あ、成宮だ。

成宮の近くにカルロスと白河もいるな。

そんな事を考えながら、ロージンバグを手につけて、投球練習を始める。

カーブ以外の変化球禁止かあ……クリスさんはどういうリードをするんだろ？

リトル以来の球種で試合に挑むので、俺は少しドキドキしている。投球練習が終わり、主審のコールで1回の裏が始まったのだった。



「パワプロの球速、速くなってないか？」

スタンドで見学をしているカルロスがそう言うと、成宮と白河が頷く。

「問題ねえよ。俺だって140km投げられる様になったし。」

「練習中の新変化球も夏までに完成したらいいんだけどね。」

成宮の言葉に、白河が言葉を続けると、成宮はキツと目を白河に向けた。

「あれが無くて、俺はパワプロに投げ勝つ！」

「でも、あれがあった方が球数を抑えられるからって、原田さんに言われて納得したじゃん。」

白河にそう言われると、成宮は言葉を続けられなかった。

原田 雅功。

原田は成宮達の1つ上の先輩で、2年生ながら稲実の正捕手の座を掴んだ実力者だ。

その原田とバッテリーを組んだ成宮は、普段の投げ込みから、アレコレと

原田と意見を交換するようになったのだ。

「パワプロ、カーブの変化量も上がってないか？」

カルロスの指摘に、成宮と白河は目をグラウンドに戻した。

「カルロスの言う通りかもね。スタンドじゃなくて、ベンチから見たかったなあ。」

白河の言葉にカルロスが頷く。

その後、成宮達は静かに試合を見守ったが、1回の裏の稲実の攻撃は、

3者凡退に終わったのだった。



1回の裏を3者凡退で抑えると、青道は流れを掴んだのか、順調に得点を重ねていく。

6回の表の攻撃が終わると、青道打線は稲実投手陣から7点を奪っていた。

対して俺は、稲実打線にヒットは打たれているものの、得点は許さずに0点に抑えてきた。

しかし、6回の裏。

ランナーが2人いる状況で、稲実のキャッチャーの人にホームランを打たれてしまった。

これでスコアは7ー3。

右手を上げてベースを回っているキャッチャーの人に、稲実ベンチは

大きな声で称賛を送っている。

稲実のキャッチャーの人がホームインすると、クリスさんがタイムを取って、

マウンドにやって来た。

「葉輪、すまん。今のホームランは俺のミスだ。」

うえい？クリスさん、ホームランを打たれたのは俺ですよ？

そんな事を思いながら首を傾げると、クリスさんは苦笑いした。

「さっきのは俺のリードが読まれた結果、打たれたホームランなんだ。」

へく、相変わらずキャッチャーは、俺にはわからない駆け引きをしているんだなあ。

「同じ失敗を繰り返すつもりはない。だから、頼んだぞ。」

「はいー」

俺が返事をする、クリスさんはミットで軽く俺の胸を叩いてから戻っていったのだった。

その後、俺は7回まで投げて降板した。

俺の投球結果は、8三振、被安打7、3失点だ。

試合は8―5で俺達の勝利だ！

高校野球デビューを勝利で飾ったぜ！

ひゃっほい♪

## 第71話

春季大会の東京地区予選の第3回戦に勝った青道高校は、順調に勝ち上がった。いったい。

第4回戦で先発した丹波さんは、打線の援護に恵まれた事もあり、7回まで投げ抜いた。

結果として4失点してしまったが、降板した時の丹波さんの表情は悪いものではなかった。

8回から登板した純さんは、2回を6人でキッチリと抑えた。

試合後に純さんは、「いつでも先発と代わるぞ、丹波！」と言っていた。

そんな純さんと丹波さんは、不敵に笑いあつて拳を合わせていた。

うん、いいライバル関係だ！

俺も交ぜて欲しいぜ！

さて、第5回戦で先発した俺は、8回を投げて4失点だった。

第3回戦の時の様にホームランを打たれたわけでは無いんだけど、バント等をからめられて、

相手チームに着実に点を取られてしまったんだよね。

でも、その点を取られた時にクリスさんが、また自分のミスだと言ってきてビックリした。

クリスさんが言うには、守備のシフトとかの対応を間違えたらしい。

うーん、キャッチャーって大変なんだなあ…。

そんな感じで俺は8回を投げきって、3年生の投手と交代したわけだ。

3年生の投手の人はランナーを1人出したものの、0点に抑えたぜ！

こうして第5回戦まで勝った青道高校は今日、第6回戦となる東京地区予選の決勝戦に挑む。

相手チームは東東京地区の黒土館高校だ。

俺は第5回戦で先発したので、ベンチで見学である。

そんな俺は、第5回戦の事をクリスさんと話しながら歩いていると、

球場に入る前に黒土館高校の人に声を掛けられて、足を止めたのだった。



「クリス！」

そんな声に俺とクリスさんが振り向くと、そこには黒土館高校の人がいた。

「財前か、膝の調子はどうか？」

「おう、リハビリも順調だぜ！その件ではサンキューな、クリス！」

ん？どういうこと？

俺が首を傾げていると、クリスさんが説明をしてくれた。

「葉輪、去年の学校見学の時の事を覚えているだろう？俺が太田部長に病院に

連れて行ってもらった時に、財前も病院にいたんだ。」

クリスさんの話しを聞きながら、俺は財前という人を見る。

うーん、どっかで会った事があるような？

「その様子だと、財前の事は覚えていないか。」

「はい！会った事がある気はしますが、思い出せません！」

俺がハッキリと答えると、財前という人は頭を抱えて、クリスさんは苦笑いした。

「すまん、財前。」

「いや、気にするな。俺は葉輪や成宮程、シニアでは有名じゃ無かったからな。」

すいません、名前とか覚えるの苦手なんです。

「話を戻すぞ？病院にいた財前なんだが、財前は去年の夏の大会で起こったアクシデントで、

膝の靭帯を断裂してしまっただ。」

靭帯断裂?!大怪我じゃないか!



「財前さん、大丈夫なんですか？」

「ああ、靱帯断裂って聞いて病院でへこんでいた俺に、クリスの怪我を聞いてすっ飛んできた

クリスの親父さんが、俺の手術費用も出してくれて、手術を受ける事が出来たからな。」

おお！さすが元プロ！太っ腹だな！

「クリス、改めて礼を言わせてくれ。ありがとう。」

そう言うのと、財前さんはクリスさんに深く頭を下げた。

「財前、礼は親父に言ってくれ。」

「いや、あの時、アニマルさんを説得してくれたのはクリスだ。もちろんアニマルさんにも

感謝してる。でも、俺の恩人は間違いなくクリスだ。」

そう言いながら、財前さんはクリスさんに頭を下げ続けている。

「わかった。財前、礼の言葉は受け取らせてもらう。だが、借りはしっかりと

復帰してからプレイで返してくれ。」

「ああ、重ねてありがとな、クリス！」

財前さんは顔を上げると、ニツと笑顔を見せた。

「それで、復帰はいつ頃になりそうなんだ？」

「今年の夏には間に合わねえが、秋には大丈夫だぜ。」

財前さんの言葉に、クリスさんが笑みを浮かべる。

「そうか。」

「ああ、投球フォームなんかも、1から作り直しているからな。焦らずにいくさ。」

そう言うのと、財前さんは手を差し出して、クリスさんと握手した。

「今日はスタンドから見学だが、必ずマウンドに戻る。」

「ああ、待っているぞ。財前。」

財前さんは、笑顔で手を振りながら歩いていった。

その後、青道と黒土館の決勝戦は、丹波さんの奮闘に応える様に打線が爆発した、

青道高校が勝利したのだった。

これで、青道高校は春季大会の関東大会への出場が決まったぜ！  
関東大会も楽しみましようね、クリスさん！

## 第72話

「優、気が散っている様だが、どうした?」

春季大会の関東大会出場を決めた青道高校は、関東大会が始まるまでの僅かの間も、

練習に励んでいた。

そんな青道高校のメンバーの1人であるクリスだが、肩の怪我から復帰したものの、

万全を期すために現在でもリハビリのメニューを続けているのだ。そんなクリスの様子を見て、トレーナーをしているクリスの父である

アニマルが声を掛けたのだ。

「親父:。」

「集中を欠いている状態では怪我に繋がる、少し休憩をしよう。」  
そう言つて、アニマルはクリスにタオルとドリンクを渡した。

「それで、何を悩んでいるんだ、優?」

「やっぱり、親父にはバレるか。」

「当たり前だ、私は父親だぞ。」

アニマルの返事に、クリスは観念した様に話始めた。

「親父: 感覚が戻らないんだ。」

クリスの悩みに、アニマルは笑みを浮かべながら答えた。

「優、感覚を戻すのではなく、作り直すんだ。」

「作り直す?」

「そうだ。これは、財前くんにもしたアドバイスだな。」

アニマルは掛けていたサングラスを外すと、クリスの目を見て話し始めた。

「プロの世界でも、色々な理由でシーズン中に感覚が崩れたり、相手に崩される事がある。」

その結果、自分のピッチングやバッティングを見失って引退してしまう選手もいる程だ。」

クリスはアニマルの言葉に、プロの世界の厳しさを感じたのか、唾

を飲み込む。

「だからこそ、かつての自分に戻るのではなく、今の自分に適応していかなくってはならない。」

「今の自分に適応……」

そう呟くと、クリスの目に力が戻った。

「優、焦らなくていい。1つずつ適応していくんだ。」

「ああ、ありがとう、親父。」

クリスのお礼の言葉に、アニマルはサムズアップで応えた。

「さあ、メニューはまだ残っている。そろそろ、再開するぞ。」

「ああ。」

クリスは立ち上がって、リハビリの続きを始めた。

「親父、何から適応していくべきだと思う?」

「私なら、試合勘だな。勝負所を見誤ると、勝てる試合も勝てなくなる。」

アニマルの言葉に、クリスはリハビリのメニューをこなしながら頷く。

「優、いつその事、リードは投手に任せてみたらどうだ?」

「リードを?」

「そうだ。1試合通してリードを考えていくだけでも、相当に負担がかかる。ならば、

投手が投げたい球種を投げさせて、自分はコースだけを指示しているのも1つの手だ。」

首を傾げるクリスに、アニマルは言葉を続けていく。

「葉輪くんのボールを信じられないか?」

「…わかったよ、親父。」

観念した様にクリスがため息を吐くと、アニマルは悪戯が成功した子供の様な

笑顔になったのだった。



いよいよ、春季大会の関東大会が始まった。

その関東大会の1回戦、青道高校は丹波さんが先発した。

東京地区予選で手応えを掴んだのか、丹波さんは6回を3失点で抑えて降板した。

6回終了時点で6―3と3点リードしていたからか、7回の裏に中継ぎとしてノリが登板した。

だが、ノリは相手打線に捕まって、1イニングを投げきる事が出来ずに3失点してしまい、

同点に追い付かれてしまった。

急遽登板した純さんが後続を抑えて、打線の援護に期待する。

すると、8回の表のチャンスの場面。

8番バッターの代打に一也が送られた。

この起用に一也は見事に応えて、タイムリーツーベースヒットを打った。

続くチャンスに、投手の純さんがタイムリーヒットを打って、2点勝ち越した。

9回の裏は、3年生が抑えとして登板して、見事に相手打線をシャットアウト。

関東大会の第1回戦は8―6で青道高校が勝ち進んだ。

そして、関東大会の第2回戦。

先発する俺は、クリスさんとアップをしていたんだけど、その時に言われた

クリスさんの提案に、俺は心の底から驚いたのだった。

## 第73話

「え？投げる球種を俺が決めるんですか？」

関東大会の第2回戦、クリスさんとアップをしていた俺は、その時に言われた

クリスさんの提案にビックリした。

「ああ、そうだ。だが、コースは俺の方で決めるぞ。」

「え？いや、でも…いいんですか？」

「正直な話、今の俺にはリードにまで気を回す余裕がないんでな。」

うくん、クリスさんがそういう程に、キャッチャーは大変なんだろうなあ。

「クリスさん、球種つてどう決めればいいんですか？」

「その時の気分、もしくは握りのフィット感で決めればいい。」

え？…そんなのでいいの？

「これまで、リードを考えた事は無いだろう？」

「はい！ありません！」

「なら、そう難しく考えるな。お前のボールなら、十分に相手を抑えられる。」

クリスさんはそう言うと、俺の胸をミットで軽く叩いてベンチに戻っていった。

残された俺は、これまでとは違うワクワクとした気持ちが沸いてきて、

試合が始まるのが待ち遠しかった。

ウオ——！早く投げてえ——！！



「クリスさん。」

ベンチに戻ったクリスに、御幸がドリンクを渡しながら話し掛けた。

「片岡監督に聞きましたけど、今日のリードはパワプロに任せるって

本当ですか？」

「ああ、本当だ。」

クリスの返事に、御幸は不満気な表情を見せる。

「反対か？」

「正直に言えば反対ですね。でも、パウプロが変わるかもしれないからじゃないですよ。」

パウプロが成長する時に、受けるキャッチャーが俺じゃないのが不満なんです。」

御幸のその言葉に、クリスは吹き出してしまった。

「あー!?俺の素直な気持ちを笑うなんて、性格悪いですよ、クリスさん！」

「すまん、御幸。だが、キャッチャーにとつては誉め言葉だ。」

そう言つて2人は目を合わせると、どちらともなく笑い出すのだった。



関東大会の第2回戦が始まると、俺は1回表のマウンドで、バッターが打席に入るのを

ワクワクしながら待っていた。

早く、早く!

1球目は何を投げるのか決めてるんだから、早く!

バッターが打席に入ると、俺は待ちきれないとばかりにクリスさんのサインを見る。

クリスさん、それです!それが投げたかったんです!

俺はサインに頷いて投球モーションに入る。

俺が投げた1球目はフォーシーム。

モチベーションが高いからなのか、リリースの瞬間の感覚がピシッと嵌まる。

ボールは相手の膝元に構えているクリスさんのミットに、吸い込まれる様にして納まる。

「ストライイクー！」

クリスさんの返球を受けると、グローブの中で左手で持ったボールを転がす。

次はどうしよっかな？

左手の中で握りがピタッと決まると、俺は自然に笑顔になってしまふ。

クリスさんのサインを見ると、俺は首を横に振る。

違います！…そう、それです！

出し直されたサインに頷いて、投球モーションに入る。

2球目に選んだのは、1球目と同じフォーシーム。

リリースの感覚がビシツと嵌まると、ボールは寸分違わぬ同じコースへ投げ込めた。

「ストライイクツー！」

主審のコールに、バッターが主審の方を振り向いた。

うん、よくわからんが今日は絶好調だ！

制球をSまで成長させても、ボール半分ぐらいは狙いがずれる事が多い。

だけど、今日は狙った所に投げ込める。

それに、フィット感の良い握りを選んでいるからなのか、ボールによく指が掛かってくれる

感覚があるんだよね。

うん、やっぱりピッチャーってすっげえ楽しい！

クリスさんからの返球を捕ると、俺はまたグローブの中でボールを転がす。

よし！次のボールも決めた！

俺はクリスさんのサインに、また首を横に振る。

あれ？そういえば、自分から首を横に振るのって初めてだな。

そう考えると、なんか可笑しくて笑顔になってしまふ。

出し直されたサインに頷いてボールを投げ込む。

俺が投げ込んだボールは、インハイへのフォーシーム！  
パァン！



クリスさんのミットの音が、しっかりと俺の耳に聞こえた。

主審の判定は…？

「ストライクスリー！バッターアウト！」

主審のコールに、俺はマウンドの上で雄叫びを上げたのだった。

## 第74話

関東大会の第2回戦、先発したパウプロは5回の表終了時点で10三振を奪った。

相手打線にヒットを1本も打たせないその投球は、まさに圧巻。球場に試合を見にきた観客、そして試合をしている両チームが驚いていた。

だが、6回の表に相手チームが打ったショートゴロを、青道の3年生の遊撃手が

ショートバウンドの送球をしてしまい、そのショートバウンドを一塁手の結城が捕球出来ず、

相手チームに出塁を許してしまった。

相手チームのベンチは、完全試合を逃れた事で安堵のため息を吐いた。

だが、この出塁の記録はエラーである。

完全試合は逃したものの、パウプロはノーヒットノーランを継続して

6回の表を終えたのだった。



「クリスさん、今日のパウプロのボール、キレてますね。」

6回の裏の青道高校の攻撃の時、青道ベンチで御幸がクリスに話し掛けていた。

「ああ、それにコントロールも、ボール半分もズレない完璧な投球だ。」

「かあく、そんなボールを受けられるなんて羨ましいですね。」

クリスさん、交代しませんか？」

「悪いが、機会を譲るつもりはないぞ、御幸。」

クリスの返答に御幸は頭をガシガシと掻いて悔しがる。

「おそらく、今日のパウプロはこのままノーノーをやるだろうな。」

「それは捕手としての勘ですか？」

「あいにく、まだ試合勘は戻っていない。これは葉輪への信頼だな。」  
クリスの信頼という言葉に、御幸は口笛を吹いて笑顔になる。

「クリスさん、やっぱり交代しましょうよ。」

「さつきも言ったが、譲る気は無い。この試合も、これからの試合もな。」

そう言うと、クリスは強い意思を宿した目で御幸を睨む。

その視線を受けた御幸は、望む所と言わんばかりに笑みを浮かべたのだった。



6回の裏、先頭打者のパウプロはあっけなく三振してしまったが、後続の青道打者達が

そのバットでパウプロを盛り立てていく。

5点のリードを貰ったパウプロは7回の表のマウンドでも躍動した。

ヒット1本を狙う相手打線を、フォーシームとカーブの2球種だけで抑えていく。

その姿は左右の違いはあれど、かつて高校野球で伝説となった、あの投手を思い起こさせた。

『怪物』

球場の誰が言ったのかわからないが、次第にその言葉が拡がっていき、

球場の人々はパウプロの投球に沸き上がっていった。

7回、8回とノーヒットで抑えたパウプロが9回の表のマウンドに笑顔で上がると、

球場には爆発した様な歓声が響き渡るのだった。



「お、凄い声援だなあ。」

9回の表、ツーアウトまで辿り着くと、球場の人達から「あと1人！」コールがされてる。

確かにあと1人だけど…なんでこんなに盛り上がってるんだ？

俺がマウンドで首を傾げていると、クリスさんがタイムを取ってマウンドまでやって来た。

「どうした、葉輪？」

「なんでこんなに盛り上がってるのかなあって思いました。」

俺がそう言うと、クリスさんは苦笑いをした。

「葉輪、気づいてないのか？」

「何をですか？」

「スコアボードを見てみる。」

俺はクリスさんの言う通りに、バックスクリーンに目を向ける。

「あれ？ノーヒット？」

「そうだ。」

ノーヒット？

…ノーヒットノーランじゃねえか!?

「ノーヒットノーラン目前なんですか!？」

「やっと気づいたか。」

「はい！よっしゃあ！絶対に達成してやりますよ！」

そう気合いを入れると、クリスさんがポンツとミットで俺の胸を叩いてから戻っていった。

リトルとシニアでもノーヒットノーランを達成した事はあるけど、

やっぱリドキドキして、

ワクワクが止まらないんだな！

「行きますよ、クリスさん！」

俺はクリスさんのサインに首を横に振る。

出し直されたサインに笑顔で頷いて、投球モーションに入る。

そして、最後の打者を三振で抑えると、俺は青道の皆に揉みくちやにされたのだった。

## 第75話

「ブーくん、今日の試合もカッコ良かったよ。」

「ありがとう、貴子ちゃん。」

関東大会の第2回戦が終わり、青道高校に戻った後にミーティングをしたんだけど、

それも終わった今は、貴子ちゃんと一緒に家に帰っていた。

寮で生活しているメンバーは、まだ寮に帰らずにグラウンドで練習をしている。

俺も残って練習したかったんだけど、今日の試合は1人で投げ抜いたから休めと、

片岡さんに言われてしまったので大人しく家に帰っているのだ。

そういえば、貴子ちゃんと一緒に帰る前に、礼ちゃんが貴子ちゃんに何かを

耳打ちしていたんだけど、何を言っていたんだろうな？

「家に帰ったら、マッサージをしてあげるからね♪」

そう言って貴子ちゃんは、繋いでいた手を離して、腕を組んできた。

おうふ…右腕に幸せな感触が…。

非常に嬉しいんだけど、いいのかな、これ？

貴子ちゃんを見ると、なんか嬉しそうに笑っている。

うん、貴子ちゃんがよければ、このままでいいか！

その後は今日の試合の事とかを、貴子ちゃんと楽しく話しながら家に帰ったのだった。



パウプロが家に帰っている一方で、青道高校の野球部グラウンドでは多くの者が汗を流していた。

今日の試合で見せた、パウプロの圧倒的なパフォーマンスが、青道高校野球部に所属する、

多くの部員の心に火をつけたのだ。

パワプロと同じ1年生の投手の中には、監督の片岡に守備位置のコンバートを相談する者も

いるが、多くの者は夏の大会のレギュラーの座を勝ち取るべく、汗を流している。

そんな青道高校野球部部員の中で、部室でスコアブックを見ながら、

厳しい表情をしている者がいた。

「今日の試合で葉輪に首を横に振られたのは、およそ5割か…。」

スコアブックを見ながら、そう言うのはクリスだった。

「今日の試合の葉輪のボールがキレていたのは、あいつが投げたいボールを投げたからという

可能性が高い…。もし、今まで通りに俺のリードで投げさせていたら、

半分はボールのキレを活かせなかったかもしれないのか…。」

そうクリスが言うと、部室に誰かが入ってきた。

「あれ？クリスさん、それって今日のスコアブックですか？」

その言葉にクリスが顔を上げると、そこには御幸がタオルで汗を拭きながら立っていた。

「それで、クリスさんは何を悩んでたんですか？」

御幸の言葉に、クリスは無言でスコアブックを渡した。

「相変わらず、藤原先輩の書いたスコアブックは見やすいですね。」

そう言いながら、御幸はスコアブックに目を通していく。

「御幸、もし今日の試合でお前がリードしていた場合、葉輪はどれだけ首を横に振った？」

「ちよつと待ってくださいいね。えくと…?」

クリスの質問に、御幸はスコアブックを見ながら考えていく。

「ざつと2割つてとこですね」

「2割か…」

「はい。もっとも、フォーシームとカーブの2球種だけの話ですから、球種が増えたらもっと

増えるかもしれないですけどね。」

御幸はそう言うが、内心では然程変わらないと思っている。対してクリスは、パワプロが首を横に振る回数が増えると思っていた。

これは、クリスの試合勘の欠如が、リードの際の情報処理能力を下げているのが原因なのだ。

「…かなり苦戦しているみたいですね。」

「ああ。だが、手応えはある。」

御幸はスコアブックを見て、クリスのサインとパワプロの投げたいボールの

ズレを認識しながらそう言うが、クリスは意外にもこの状況を前向きに捉えていた。

そんなクリスの様子に、御幸は面白そうに笑みを浮かべる。

「どうやら、大丈夫そうですね。」

「なんだ？心配していたのか？」

「1時間も1人で部屋に籠っていたら、心配の1つもしますって。」

御幸が苦笑いしながらそう言うと、クリスも苦笑いを返した。

「それはすまなかつたな、御幸。」

「いえいえ、出来た後輩でしよう？」

「自分で言うな。」

クリスがそう言うと、御幸は大きな声で笑った。

「さて、御幸。少し話に付き合ってもらおうぞ。俺の認識と動きが、どれだけズレているのか知りたいからな。」

「いや、練習してきたんで喉が渴いたなあ？」

御幸の要求に、クリスはプツと吹き出してしまう。

「性格が悪いぞ、御幸。」

「キャッチャーにとつては誉め言葉ですね。」

その後、クリスと御幸はスコアブックを見ながら、日が暮れるまで話し合いを続けたのだった。

## 第76話

関東大会の第3回戦、先発は丹波さんなのだが、この試合の丹波さんのカーブは、

いつもよりもキレていた。

決め球、カウント球にも使える事で、初回は三者三振で抑えた。

勢いに乗った丹波さんは、6回を8三振、2失点で降板。

今日の丹波さんの調子なら、完投もいけるんじゃないかなと思ったんだけど、

6回終了時点での球数が100球に達していた事もあり、ここで降板した。

7回のマウンドには6-2と4点差があつたのでノリが登板した。

ランナーが1人いる状況で、真ん中に抜けたシンカーをホームランにされてしまい、

2点差に詰め寄られたが、今日のノリは1イニングをしつかりと投げ抜いた。

8回は3年生の投手の人が0で抑えて、純さんが抑えて登板。

純さんはカットボールを、フェンス直撃のツーベースヒットにされてしまったものの、

失点はせずに9回を抑えて、青道高校は3回戦を勝ち進んだ。

続く4回戦、先発した俺は8回を2失点、7三振、被安打7で降板した。

この試合はいつも通りにクリスさんのサインに頷いて投げたんだけど、

試合前にクリスさんに、俺の考えで首を横に振ってもいいって言われたんだよね。

正直な話、投げたいボールを投げようか、クリスさんのサイン通りに投げようか、

マウンドで凄く迷った。

迷ったせいなのか、4回戦では2回戦の様にビシッと嵌まる感覚が無く、



初回にいきなり2失点してしまったのだ。

その後もヒットは許したものの、追加点は許さず、しつかりと抑えられたのは良かったと思う。

精神的に疲れた様に感じた試合だけど、これはこれで面白い試合だったな。

そんな感じで4回戦は7―2の結果で青道高校の勝ちだ。

そして、迎えた準決勝となる第5回戦。

相手は何度も春、夏の甲子園に出場している茨城県の強豪高校だ。

この関東大会でも優勝候補として注目されているらしい。

そんな相手との試合、青道打線は1回の表を無得点で終わってしまう。

そして、先発の丹波さんは初回から失点してしまったものの、粘り強く投げていった。

だけど、流石は優勝候補といったところなのか、丹波さんは4回で6失点してしまう。

球数は70球程なので、まだ体力的に余裕があっても良さそうなのだが、

4回を終えてベンチに戻ってきた丹波さんは、多くの汗を流しながら肩で息をしている。

ここで片岡さんが丹波さんに問い掛けた。

「丹波、まだ行けるか？」

丹波さんは汗を拭いてから立ち上がると、大きな声で「はい！」と返事をした。

「あと1回、全力で行け！」

「はい！」

5回裏のマウンドに上がった丹波さんは、ランナーを背負ったものの、

この回を無失点で切り抜けた。

5回終了時点で5―6。

1点を追い掛ける状況の6回裏、マウンドに上がったのは3年生の投手だ。

6回、7回と1失点ずつ相手に奪われてしまいが、青道打線も得点を重ねて

相手に食らいついていく。

7回終了時点で7ー8。

1点差が遠く感じる様な状況の8回裏、マウンドには純さんが上がる。

純さんが8回の裏を3人で抑えると、9回の表の打席に立った東さんが、

値千金の同点ホームランを打った。

青道ベンチは大盛り上がりだが、相手チームの継投策の前に、東さんのホームランによる

1点だけに抑えられてしまった。

そして、9回の裏。

マウンドの純さんは、悔しさのあまりに大きな声で吠えたのだ。た。



「うおおおおおおおー！」

純さんの声がグラウンドに響き渡る。

純さんからホームランを打った相手バッターは、拳を突き上げながらベースを回っていた。

グラウンドの皆だけじゃなく、ベンチの皆も俯いている。

「お前達、顔を上げろ。」

片岡さんの声で、ベンチの皆が顔を上げる。

「夏に、甲子園でリベンジするぞ。」

片岡さんの言葉に、皆が歯を食い縛る。

そして…。

「はーはーはー」

青道高校の皆の誓いの声と共に、俺達の春季大会は終わりを迎えたのだ。

## 第77話☆

春季大会が終わると、青道高校野球部の皆は、夏の高校野球選手権大会の

レギュラーの座を勝ち取ろうと練習に励んでいる。

俺はブルペンで投げ込みをしているメンバーに目を向けた。

3年生が3人に、2年生の丹波さんと純さん、そして俺が現在の1軍投手陣だ。

そう、残念ながらノリは春季大会終了と共に2軍に落ちてしまった。

ノリ自身、色々と足りないと自覚していたようで、俺に必ず1軍に戻ってくるかと約束して、

2軍の練習に合流していった。

野手の方で1軍に残った1年生は一也だけだ。

一也は春季大会において、チャンスの場面でしたっきりと結果を残したのが評価されたみたい。

そんな一也は、ブルペンで俺のボールを受けている。

「パワプロー・スライダーを頼むー!」

おっと、一也からリクエストが来たので、スライダーを投げるか。

俺はツーシームの握りから、スライダーを投げる。

ボスツ!

俺のスライダーを捕った一也のミットの音は、鈍い音がした。

「ナイスボール! もう1球頼む!」

俺は一也の返球を受けながら、今の自分の能力を確認した。

基礎能力

最高球速：145km (※160km)

制球：S

スタミナ：C

変化球：カーブ6 (※7)

変化球2：チェンジアップ6 (※7)

変化球3：高速スライダー2（※7）

春季大会終了後に、スタミナと高速スライダーのランクを1つ上げた。  
次に野手能力を確認する。

基礎能力2

弾道：3

ミート：E

パワー：D

走力：D

肩力：B

守備：D

捕球：C

野手能力は弾道とミート、そしてパワー等の打撃能力を1ランク上げた。

春季大会の関東大会準決勝での東さんのホームランがカッコ良く、  
て、

俺も打ちたいと思ったんだよね。

まあ、今のパワーだとインコースを思いっきり引っ張らないと、  
ホームランを打てないけどな！

さて、最後に特殊能力を確認だ。

特殊能力

『鉄腕』

『鉄人』

『身長高い』

『リリース○』

『ノビ5』

『キレ◎』

『牽制○』

『バント○』

特殊能力は新しく『牽制○』と『バント○』を取得した。

『牽制○』を選んだ理由は、シートバッティングの時に、ランナーをしていた倉持に

走られまくったからだ。

本当は『クイック○』と『牽制○』で悩んだんだけど、クリスさんと一也に相談したら、

「倉持の足でも、後半歩リードを狭く出来れば刺せる」って言ったんだよね。

他にもクイックを速くする過程でフォームを崩すのが怖いとかないとか…。

だから、クイックに関しては及第点レベルで出来ているから、焦らずにじっくりと

やっていこうと、2人との話し合いで決めたのだ。

『バント○』は現在バッティングがあまり上手くない俺が、攻撃面で少しでも貢献する為だな。

「パワプロ、どうした？」

おっと、能力画面を見ていたらボーツとしていると思われたのか、

一也に声を掛けられてしまった。

「何でもないー！」

俺はそう言ってから、投球フォームに入る。

ボスッ！

うくん、高速スライダーもかなり狙った所に投げられる様になったんだけど、

一也のミットはいい音が鳴らないなあ…。

近々、1軍と2軍、そして3軍で紅白戦をするって片岡さんが言っていたから、

それまでに高速スライダーを仕上げておきたいぜ！

その後、俺は気合いを入れて投げ込みをしてみた。

でも、今日の投げ込みではスライダーで一度もいい音をさせる事が出来なかった…。

うくん、残念！



「いってえく…。」

パウプロが投げ込みを終えた後、御幸は赤く腫れてしまった左手を氷で冷やしていた。

そんな御幸の所に、片岡がやって来た。

「御幸、クリスから報告を受けているが、葉輪のスライダーはどうだ？」

「捕球しきれなくて、ご覧の有り様ですね。」

御幸は冷やしていた左手を、片岡に見せながら苦笑いする。

「夏には使えそうか？」

「キャッチャーが捕れるかを別にすれば、間違いなく使えます。」

御幸の言葉に、片岡は頷く。

「そうか。最悪、カーブとチェンジアップで行くことを想定しておけ。」

「はい！」

御幸の返事を聞くと、片岡はその場を後にした。

だが、残っている御幸は真剣な目で、自身の左手を見詰めていた。

「監督にはああ言ったけど…俺にも捕手としての意地があるんだよな。」

御幸はニツと笑うと、宣言をする様に思いを言葉にする。

「絶対にパウプロのスライダーを捕れる様になってやる！」

そう言う御幸は、まだ赤いままの左手を握り締めたのだった。

## 第78話

青道高校野球部の1軍、2軍、3軍による紅白戦が始まった。まずは、今年入部した1年生と3軍の先輩方による紅白戦だ。

この紅白戦で実力を見て、1年と3軍のメンバーから選抜したメンバーと、

2軍の人達で紅白戦をやるらしい。

さて、1年生と3軍の人達の紅白戦は、3軍の先輩方の圧勝だった。俺は同じ1年生として残念だと思ったが、先輩方も這い上がろうと必死なんだから、

この結果も仕方ないんだろうな。

3軍選抜メンバーと2軍の紅白戦は、これまた順当な結果というべきなのか、

2軍メンバーの勝利だった。

だけど、数人の人が3軍から2軍へと昇格したので喜んでいたな。

そして、いよいよ俺の出番となる暫定1軍チームと、2軍選抜チームの紅白戦が始まった。

ちなみにこの紅白戦、レギュラー当確である東さんと他数名の3年生は参加しない。

暫定1軍チームの先発投手は丹波さんだ。

丹波さんは先発のマウンドに上がると、2軍選抜チームの打線を抑えていった。

3回を投げて、被安打3、奪三振4、失点0という結果だった。

マウンドを降りてきた丹波さんは、俺と純さんとハイタッチをした。

イエーイ♪

4回からは純さんがマウンドに上がった。

これに伴い、丹波さんのボールを受けていたクリスさんから、3年生の捕手に交代。

純さんはマウンドの上で「行くぞオラア!」と威勢の良い声を上げている。

そんな純さんは3回を被安打1、奪三振2、失点0で抑えた。被安打1という結果だったけど、2本程ヒット性の当たりを、亮さんがファインプレーでアウトにしたんだよね。

亮さんは純さんに「アピールの機会をくれてありがとう」って言ったらしい。

純さんはマウンドからベンチに戻ってくる間、そんな亮さんを威嚇していた。

でもベンチに戻ってくると、俺と丹波さんとハイタッチをしたぜ！

イエーイ♪

さあ、7回からは俺の出番だ！

やってやるぜ！



「葉輪、今日の紅白戦、チェンジアップ以外の変化球は禁止だ。」

7回のマウンドに上がる前、主審をしている片岡さんにそう指示された。

うーん、スライダーの感覚を確かめたかったんだけどなあ…。

「この紅白戦、葉輪の力を見るだけじゃない。お前のボールを受ける御幸のリードも見る。」

そう言いながら、片岡さんは俺と一也の顔を交互に見る。

「相手が先輩だからと遠慮をするな！1軍の座を勝ち取れ！」

「はい！」

片岡さんは俺達の言葉に頷くと、2軍チームのベンチへと向かった。

選手交代でもするのかな？

「パワプロ、今日は投げたいボールのサインに頷いて、他は首を横に振っていいぞ。」

マウンドで投球練習をしようと思ったら、一也がマウンドまでやって来て、そう言った。

「いいのか？片岡さんが言ってたけど、お前のリードも見られるんだ



ぞ?」

「投手のワガママに応えるのもキャッチャーの仕事だからな。俺の事は気にせずに、

お前は気持ち良くボールを投げてくれ。」

そう言うと、一也は俺の胸をミットで軽く叩いてから、キャッチャーボックスに戻った。

『お前は気持ち良くボールを投げてくれ』か…。

俺はいつだって楽しんで投げてるぞ、一也。

でも、ああ言われると、いいボールを投げたくなるよな。

投球練習が終わり、2軍チームのバッターが打席に入る。

「行くぞ、一也!」

この日の俺の調子はバツチりだったぜ!

紅白戦は被安打0、奪三振7、失点0の結果だった。

そして、試合後に片岡さんから、俺と一也は1軍残留を言い渡されたのだった。

夏の大会前の暫定的なものだけど、俺は素直に喜んだぜ!

俺は一也とハイタッチをした。

イエーイ♪

## 第79話

紅白戦が終わり、部員達の所属が暫定すると、夏の大会を目標とした合宿が始まった。

合宿の終わりには他校との練習試合があるらしい。

その練習試合の結果で、夏の大会の1軍メンバーが正式に決まる事もあって、

この合宿では、部員達はギラギラとした目で練習に励んでいる。

特に最後の大会となる3年生達は、文字通りにグラウンドの砂にまみれながら練習している。

そして、その3年生の気迫に引き上げられる様に、2年生、1年生も合宿で頑張っているのだ。

もつとも1年生のほとんどは、初めての青道高校野球部の合宿の厳しさに、

毎日筋肉痛に悩まされてしまっている。

まあ、俺は特殊能力の『鉄人』のおかげで筋肉痛にはならないんだけどな！

「いって…：パワプロ、もつとゆっくり押ししてくれ。」

「あ？悪い、一也。」

そんな合宿が始まって数日、今は練習が始まる前に少しでも筋肉痛を和らげようと、

入念にストレッチをしている所だ。

「しかし、シニアの頃も思ったけど、パワプロって筋肉痛で痛がった事ってないよな？」

「疲れてても、ちゃんとマッサージやストレッチをしてから寝てるからなあ。」

本当は特殊能力のおかげだけだね。

「わかってるつもりなんだけど、いつの間にか寝ちまうんだよなあ。」  
「俺もリトルの頃はそうだったよ、一也。」

「へ〜。」

そんな会話をしながらストレッチをしていると、程よく身体がほぐ

れて準備が整った。

「うし！大分楽になった！…ふあく。」

「眠そうだな、一也。」

「ああ。やっぱり、疲れが残ってるんだろうな。」

大きな欠伸をしながら一也が身体を伸ばしていく。

「そろそろ監督も来るだろうし、整列しとこうぜ、パウプロ。」

「おうー！」

そんな感じで進んでいく合宿の日々は、慣れている筈の3年生達も疲れ果てて、

グラウンドに倒れ込む程にきついものだった。



今日の合宿の練習が終わり、食堂で食事を終えた東は1人でゆっくりと歩いていった。

「アカン。今年の合宿は、間違いなく去年よりもキツツイで。」

そんな事を言いながら、疲労で重くなっている身体を引き摺る様にして、

東は寮の自室に戻っていく。

東の感じている合宿の厳しさは間違いでは無い。

合宿の目的の1つに、夏の大会の日程の中で、疲労していても常と同じ様に

動けるようにしようという思いがあるのだが、翌日のパウプロがケロツとしているので、

片岡が意図的に厳しくしている面があるのだ。

「やけど、葉輪の奴は筋肉痛の様子も見せんとケロツとしとる…俺も踏ん張らなアカンな。」

そう言う東だが、東とパウプロと御幸、そしてクリス以外は、疲労で食事が受け付けずに食堂で死屍累々となっている。

そんな中でも、いつも以上に食事を取ることが出来ている東の胃腸の強さは、

間違いなくアスリートとして貴重な才能といえるだろう。

「葉輪はなんかケアのコツでも知つとるんか？」

寮の自室に辿り着いた東は、バットを手に取って外に出る。

「明日辺り、葉輪に聞くとするかあ。」

そう言うのと、東は疲労での眠気に負けずに、日課である素振りを始めたのだった。

後日、パワプロに聞いたケアの方法は、後の東のプロ野球人生に活きていく事になる。

そして、合宿の日々は過ぎていき、いよいよ練習試合の日が訪れたのだった。

## 第80話

夏の大会前の合宿も遂に終盤に突入して、練習試合の日がやって来た。

今年の練習試合は2日間で3試合行われるらしい。

1日目は2試合のダブルヘッダー。

2日目が1試合という形で練習試合をしていくそうだ。

さて、1日目の1試合目の先発は純さんが選ばれた。

ここまで、中々先発の機会に恵まれなかった純さんは、疲労なんて吹っ飛んだ様に

気合い十分な様子でマウンドに上がった。

そんな純さんのボールを受けるのはクリスさんだ。

ただ、身体は正直な様でボールにはいつものキレが無い。

純さんは、ツーシームを中心に打たせてとるピッチングをしていった。

時折、打球が守備の間を抜けていってしまうが、抑えをしてきた経験からなのか、

マウンドの純さんは慌てる事なく、しっかりバッターと向き合ってピッチングをしていく。

そして純さんは、6回を被安打9、奪三振1、失点3の結果でマウンドを降りた。

純さんの後は、3年生の先輩方が登板、継投して行って、相手打線を抑えていった。

青道打線は疲労がある中でも、東さんを中心に打点を重ねていき、5ー4で勝利した。

ダブルヘッダーとなる2試合目は、丹波さんが先発のマウンドに上がる。

丹波さんのボールを受けるのは、3年生の捕手の人だな。

相手チームは、春季大会でも戦った東東京地区の黒土館高校だ。

その黒土館高校との練習試合の前、財前さんが俺とクリスさんの所にやって来たのだった。

◆ 「よう！クリス、葉輪！」

呼ばれた声に振り向くと、そこには黒土館高校の財前さんがいた。

「春季大会以来だな、財前。」

「お久しぶりです、財前さん。」

「おう！今日はよろしくな！」

財前さんはニツと笑顔で手を差し出して来たので、俺とクリスさんは握手した。

「今日は試合に出るのか、財前？」

「ああ、夏の大会には出られねえが、2、3イニング投げる予定だ。」

「おお?!財前さん、復活の予兆か!？」

「そうか。良かったな、財前。」

「まあ、膝の調子を見ながらだから、全力で投げられねえけどな。」

「そう言いながら、財前さんは苦笑いするけど、その様子は嬉しそうだ。」

「それで、今日は葉輪が投げるのか？」

「いや、今日の先発は丹波だ。」

「そうか。まあ、丹波のカーブはやっかいだし、うちのチームのいい経験になるか。」

財前さんは1人納得した様に何度も頷いている。

「そんじゃ、俺もアップしなきゃいけねえから、もう行くぜ！」

「ああ。」

クリスさんの返事に、財前さんは軽く手を上げて去っていった。



青道高校と黒土館高校の練習試合、先発の丹波さんはカーブと新変化球のフォークを使って、

黒土館打線と勝負していった。

だけど疲労からか、丹波さんのフォーシームは甘いコースに行ってしまう、

痛打されて何度もピンチの場面を背負ってしまっていた。

それでも、丹波さんは大崩れする事なく、黒土館高校と堂々と渡り合っていた。

丹波さんは6回を、被安打11、奪三振6、失点3の結果だった。対する黒土館高校は、6回の裏で逆転を狙う青道打線に財前さんをぶつけてきた。

6回裏のマウンドに上がった財前さんは、ツーシームやカットボールといった、

ムービング系のボールを使って、球数を抑えながらピッチングをしていく。

そんな財前さんのピッチングに、青道打線はゴロの打球を量産してしまい、

6、7、8回の攻撃を0点に抑えられてしまった。

財前さんが降板して迎えた9回の裏の青道高校の攻撃。

2―6で青道は4点差を追いかける状況だ。

合宿による疲労と、ダブルヘッダーによる体力の消耗で、青道の皆の動きにはキレが無い。

それでも青道の皆は、誰一人として逆転を諦めていなかった。

その執念が実ったのか、9回の裏の攻撃で、6―6の同点に追い付いた。

だけど、青道の追撃もここまでだった。

黒土館高校との練習試合は6―6の引き分けで終わった。

これで1日目の練習試合は終了！

明日は俺が先発予定で、相手は大阪桐生高校という、去年の夏に甲子園に出場した

強豪高校との事だ。

よっしゃ！やってやるぜ！

## 第81話

「久し振りやな、片岡さん。」

「お久し振りです、松本監督。」

練習試合の2日目、片岡は遠征してきた大阪桐生高校野球部監督の松本 隆広と話をしていた。

「うちは館に投げさせるつもりやけど、青道さんは誰の予定ですか？」

「葉輪に胸を貸して貰おうと思っっています。」

松本は片岡の言葉に、面白そうに笑みを浮かべた。

「噂の怪物君のピッチングを見れるんなら、うちも館の尻を叩かないけませんなあ。」

そう言うと松本は、恰幅の良い顎を撫でながらニコニコとした笑みを片岡に向けた。

そんな笑みを向けられた片岡だが、表情は変わらずに松本の目を見ている。

片岡の目に秘められた闘志は、現役時代のものと遜色無いものだった。

「改めて、我々青道高校野球部一同、胸を貸していただきます。」

「おう、今日はよろしく頼むで、片岡さん。」

深々と頭を下げた片岡は、踵を返して胸を張って去っていった。

そんな片岡の背中を見ながら、松本はポツリと呟く。

「やれやれ、相も変わらなず熱い目をしとるなあ、片岡さん。」

そう言いながら、松本は頬をポリポリと搔いている。

やがて、松本はフツと笑みを浮かべると、その大きな身体を揺すりながら、

楽しそうな様子で教え子達の所に歩いていくのだった。



「葉輪、今日の練習試合、スライダーは禁止だ。」

大阪桐生高校との練習試合が始まろうとした頃、俺は一也と一緒に



片岡さんに呼び出されていた。

「大阪桐生高校は甲子園常連の強豪だ。夏の大会で勝ち進めば戦う可能性は高い。」

高速スライダーを投げた時の、バッターの反応を見てみたかったんだけど、

ぶつつけ本番になっちゃったな。

まあ、仕方ないか。

「大阪桐生の先発は、甲子園経験者の2年生のエース、館 広美だ。

胸を借りるつもりで全力で行け！」

「はい！」

そして始まった大阪桐生高校との練習試合、俺は1回の表を三者三振で抑えたのだった。



回は進んで2回の表、大阪桐生打線は4番に座るエースの館を含めて、

パウプロに6連続三振をされた。

「葉輪君はまだ1年なのに、可愛げの無いボールを投げよるなあ。

流星は『怪物』といったところやな。」

松本は恰幅の良い顎を撫でながら、苦笑いをしている。

「けど、うちの館も負けてないで、青道さん。」

2回の裏のマウンドに上がった大阪桐生のエース館 広美も、決め

玉のスライダーを使って、

青道打線を抑えていく。

館は2回の裏までに5三振を奪い、パウプロとの投手戦を演出していた。

「さて、3回からは少し動いてみよか。葉輪君には1年生らしい、可愛げを見せてもらいたいもんや。」

松本は3回の表の先頭打者である、7番バッターにサインを送る。

7番バッターはサインに頷いて打席に入る。

そして、パウプロがボールを投げ込むと、セーフティバントの構えをした。

パウプロは反応良く前に詰めたが、バッターはバットを引いて見逃す。

「うんうん、葉輪君は守備もええみたいやな。だからこそ、引つ掛かるんやけどな。」

そう言いながら、松本はまたバッターにサインを送る。

打席を外していたバッターは、サインをしつかりと見てから打席に入る。

パウプロが投じた2球目。

バッターは二度セーフティバントの構えをする。

パウプロはまたも反応良く前に詰めていく。

そして、バッターが構えるバットの角度を見たパウプロは、3塁方向へと一歩踏み出す。

だが…。

コツンツ!

セーフティバントされたボールは、1塁方向へ転がった。

これには、青道内野陣が驚愕した。

1塁手の結城が慌ててボールへと向かう。

そして、ボールを捕って振り向いた結城は、二度驚愕する事になる。

なんと、本来なら1塁のベースカバーに入っている筈の、パウプロの姿が無かったのだ。

何故なら、パウプロは3塁方向へと動いてしまっていたために、ベースカバーに入れなかったのだ。

この事に気付いた2塁手の小湊が、急いで1塁ベースカバーに向かったのだが間に合わず、

大阪桐生のバッターは1塁を走り抜けていた。

「ははは、素直に表情に出し過ぎやで、葉輪君。」

驚いた顔をしながら首を傾げるパウプロを見て、松本は思わず笑ってしまった。

「さて、気持ち良く三振を取っていた状態から、セットポジションに変

わっつたら、

「どうなるんやろうな？」

「そう言いながら、松本はサインを送る。」

サインを見たランナーがリードを取り、バッターはバントの構えを見せる。

そんな状況で、パウプロは1つ牽制を入れる。

1塁ランナーが滑り込んで戻る。

判定は…セーフ！

パウプロの牽制を見たランナーは、一歩リードを広げる。

「そうや、しっかりと揺さぶつたれ。」

自ら考えて行動する教え子の姿に、松本は何度も頷く。

だが…。

「アウト！」

パウプロの二度目の牽制は、先程の牽制よりも鋭く、速かった。

その結果、1塁ランナーの帰塁は間に合わず、パウプロの牽制でアウトになってしまった。

「かあく、可愛げが無い。ほんまに1年生の投手なんか？」

帽子を取って頭を掻きながら、松本がそうボヤク。

「まあ、手の内を1つ見せてもろたと思えば安いもんやな。」

その後、大阪桐生の後続のバッターは三振に抑えられて3回の表が終わった。

「ええ子が入りましたなあ、片岡さん。」

御幸とハイタッチしながらベンチに戻るパウプロの姿を見て、松本は微笑む。

「さて、本番は夏の大会や。後はうちの子達に任せて、儂はゆっくりと勉強させてもらおかあ。」

そう言うと松本は、恰幅の良いお腹を揺らす様にして、ドツカリとベンチに座ったのだった。

## 第82話

大阪桐生高校との練習試合は0-0の引き分けに終わった。

疲労のピークに達していた青道打線は、大阪桐生のエースの館さんを攻略しきれなかった。

館さんからヒットを打ったのは、今日のメンバーの中では比較的元気だった東さんと、

試合後に読みが当たったと言っていた一也、そして俺の3人による4本だけだった。

ちなみに、2本は一也で俺と東さんはヒット1本だけだった。

リトルの頃クリスさんに、『葉輪は投手だからデッドボールに気をつける』って言われてから

インコースだけを意識している。だからアウトコースに投げられたら全く打てないんだよね。

もつとも、インコースでも打てないんだけどな！

ちなみに俺は3回の表のセーフティバントと、館さんに打たれたヒットの2本だけで完封した。

そんなこんなで練習試合が終わって日が進み、遂に合宿は最終日となった。

そして、片岡さんから夏の高校野球選手権大会の1軍メンバーが発表されたのだった。



「背番号11、葉輪！」

「はー！」

俺の名前が呼ばれた！

やったぜ！

片岡さんから背番号を受けとると、俺は1軍に選ばれたメンバーに目を向ける。

背番号1は丹波さんだ。

残念ながらエースナンバーは奪えなかったな。

丹波さん！秋には俺が1番を貰いますよ！

正捕手にはクリスさん、控え捕手には一也が選ばれた。

一也が言うには、バッティングが正捕手を奪えなかった理由みたいだな。

1 墨手には哲さん、2 墨手には亮さん、3 墨手には東さんが選ばれた。

後、名前と顔が一致しているのは、抑えに選ばれた純さんだけだな。他のメンバーは東さん以外の3年生だ。

「このメンバーで夏の大会を戦っていく！以上、解散！選ばれなかった3年は残れ。」

片岡さんの号令で合宿は終わりとなり、青道の1軍メンバーは夏の大会に向けて、

それぞれ疲労を抜いたりと準備をしていくのだった。



合宿終了後、青道の1軍メンバーが疲労を抜こうと休んでいる中で、丹波は1人、

黙々とシャドウピッチングをしていた。

「ハア、ハア、後、30！」

大汗を流して自主練習を続けている丹波の元に、風呂上がり姿の東がやって来た。

「何やっとなるんや、丹波？」

「東さん…。」

声を掛けた東の目には、丹波の姿が、まるで9回の裏のサヨナラの場面を背負う投手に見えた。

「合宿は終わったのに疲労を抜かんでどうすんねん。そんなんやと、大会前にぶっ倒れるで。」

東の言葉に、丹波はシャドウピッチングに使っていたタオルを、ギュツと握り締める。

「東さん、俺がエースナンバーを背負っていいんでしょうか？」  
「なんや、そんな事を悩んどったんかい。」

ため息混じりに言う東の言葉に、丹波は顔を上げる。

「正直に言おうと、実力なら間違いなく葉輪がエースやろうな。」

「はい、俺もそれはわかっています。だから…。」

「丹波、お前はまだ1年の葉輪に重荷を背負わせるんか？」

丹波は驚き、目を見開く。

「お前がそんだけプレッシャーに感じとるもんを、後輩の葉輪に

背負わせるなんてカツコ悪いやんか。」

「カツコ悪い…。」

「そうや。それに、夏の大会に出たい奴なんてぎょうさんおんのやで？ そんな連中を

押し退けてお前は選ばれたんや。胸を張らんかい、丹波！」

先程までどこか頼りなかった丹波の背中が、東の言葉でピンツと伸びた。

「よっしゃーそしたら、さつさと風呂に入ってこいや。サツパリすれば、

気分転換にもなるやろうからな。」

「はいー。」

丹波は東に深々と頭を下げると、走って去っていった。

「まったく…世話の掛かる後輩やで。」

東は頭をガシガシと掻きながらため息を吐く。

「やけど、ノミの心臓だった丹波も、ええ目をするようになったやないか。」

そう言うと、東は走り去っていった丹波の方へチラリと目を向ける。

「面と向かつては言えへんけど…頼りにしとるで、丹波。」

東はニツと笑みを浮かべると、機嫌の良い足取りで寮の自室へと歩いていったのだった。

## 第83話

遂に始まった夏の高校野球選手権大会。

青道高校はシードなので第2回戦からの出場だ。

その第2回戦の先発は丹波さんだ。

緊張でもしているのか、動きの固い丹波さんは立ち上がりでコントロールに苦しんだものの、

クリスさんの声掛けと打線の援護もあってなんとか試合を作っていく。

丹波さんは6回を6失点で降板。

マウンドを降りる丹波さんの表情は苦虫を噛み潰したかの様だった。

7、8回を3年生の投手の人が0点で抑えて、9回のマウンドには純さんが上がる。

7回の猛攻で逆転していた事もあって、純さんはノビノビと投げて試合を締め括った。

そんな感じで第2回戦は9―6で俺達の勝利だ！

そして迎えた第3回戦の相手は明川学園。

明川学園との試合の日に球場入りしようとしたその時、俺はシニア以来の

懐かしい声を耳にしたのだった。



「葉輪。」

どこか聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはシニア時代に一度だけ投げ合った事のある、

楊 舜臣の姿があった。

「あれ？楊か？」

「ああ、そうだ。」

「そのユニフォームは…今日の試合相手の明川学園の？」

「日本の高校野球をする為に、語学留学を名目にして、俺は明川学園に留学したんだ。」

へえ、行動力のある奴だなあ。

「そっか、それじゃ楊とは、これから3年間は高校野球で勝負出来るんだな。」

「いや、高野連のルールで、俺は2年の秋までしか高校野球の公式戦に出れないんだ。」

そう言っつて残念そうに首を横に振るけど、楊の眼鏡の奥の眼光は、

片岡さんの様に熱いものだった。

「明川学園の皆は、留学してチームに入ったばかりの俺にチャンスをくれた。」

その思いに応える為にも、俺はお前に投げ勝つ！」

鋭い視線で睨んでくる楊に、俺は笑顔を返す。

「おう！俺も負けないぜ！」

俺の返事にフツと笑みを浮かべた楊は、サツと踵を返して明川学園の人達の元に歩いていった。

「パワプロ、今の奴つて…シニア時代にやった、台湾の楊か？」

「お？一也か。そう、その楊だよ。」

後ろから声を掛けてきた一也に振り向くと、そこにはアップルティーを飲んでいる一也がいた。

「パワプロ、今日の試合は投手戦になりそうだな。」

「それはキャッチャーとしての勘か？」

「ああ、あいつがシニア時代からどこまで成長したかわかんねえけど、苦戦すると思う。」

「ふくん。」

俺としては投げ合い大歓迎だぜ！

その後、先発として投げる為にしっかりとアップすると、

いよいよ明川学園との試合が始まったのだった。





青道高校と明川学園の試合が行われる球場に足を運んだ人達の多くは、

青道高校を応援に来ていた。

青道高校は『打の青道』として西東京地区では有名で、毎年優勝候補と呼ばれる強豪高校だ。

そんな青道が軸となる投手としてパウプロを有した事もあり、多くの高校野球ファンは、

今日の試合でどれだけ力を青道高校が見せるのか期待して応援に来たのだった。

だが、その多くの高校野球ファンの期待は裏切られる事になる。

それは1回の表のマウンドに上がった楊 舜臣が原因だった。

楊は立ち上がりから、丁寧なボールを投げ込んでいく。

ツーシーム、カーブ、フォークと多彩な球種で、

青道打線にゴロの打球を量産させていった。

楊のフォーシームは120km台後半と決して速くないが、時折高めに投げて

三振を奪う事で、青道打線に的を絞らせない。

楊のこのピッチングに、青道高校は3回の表終了まで、

ランナーを1人も出すことが出来ずにいた。

対して1回の裏のマウンドに上がったパウプロは、ノビのあるフォーシームとカーブ、

そしてチェンジアップのコンビネーションで三振を量産していった。

そして、パウプロも3回の裏までランナーを1人も出さないパーフェクトピッチングだった。

打たせてとる楊と、三振を奪うパウプロのピッチングに、

球場の多くの野球ファンは魅了されていった。

回は進んでいき5回の表。

ここでも楊が青道打線をノーヒットで抑えると、球場内の雰囲気が一変していった。

強豪とダークホースの好ゲームに球場内のファンは、

ジャイアントキリングを期待し始めたのだ。

そんな高校野球ファンの1人が、5回の裏の主審の判定に野次を飛ばした。

パワプロがコーナーギリギリに投げ込んだ素晴らしいボールだったのだが、

その野次は強豪を鼻負すなど言ったのだ。

この野次は伝播していき、球場内の雰囲気をも明川学園一色に変えてしまった。

主審は野球審判の資格を持つ優秀な人物だ。

故に判定は公正にしている自負がある。

だが人間である為、間違いが起きる可能性は0では無い。

球場の雰囲気にも飲まれてしまうのは選手だけではないのだ。

そんな事が5回の裏に起きてしまった。

それまでストライクと判定されていた右打者のアウトコース低め一杯を、

ボールと判定されたのだ。

パワプロのボールを受けているクリスがマスクの奥で目を見開く。

ワンボール、ツーストライクに追い込む予定が、

ツーボール、ワンストライクになってしまった。

パワプロのコントロールなら、コースをボール1つ分内に寄せる事は出来るだろう。

だが、今のコースの判定が誤審なのか、ストライクゾーンが変わったのか判断がつかない。

クリスは迷った。

今のパワプロは楊と共に完全試合ペースを継続中だ。

ランナーを1人出すリスクを負って、主審の判定を確認するべきか否か…。

マウンドのパワプロにクリスは目を向ける。

そこには主審の判定に、不満を欠片も見せていない笑顔のパワプロの姿があった。

そのパワプロの姿を見たクリスはフツとマスクの奥で笑うと、パワ

プロにサインを出した。

そしてパワプロは四球でランナーを出すものの、依然としてノーヒットピッチングを続けて、

5回の裏を終えたのだった。

## 第84話

青道高校と明川学園の試合の6回の表、楊がこの回も青道打線を3人で抑えると、

球場内は多くの高校野球ファンの歓声に包まれた。

そして6回の裏のマウンドにパウプロが上がると、心無い野次が飛んでくる。

それは明川学園の打線を応援するものではなく、パウプロ個人を貶めるものだった。

そんな野次からパウプロを守ろうと、青道高校の応援が明川学園の応援を、

上回る勢いで声を張り上げている。

だが、マウンドのパウプロはどこ吹く風と言わんばかりに、笑顔で投球をしていく。

6回の裏の明川学園の先頭打者は三塁線へのボテボテのゴロを打った。

そのボテボテのゴロに、東が猛チャージをかけて捌く。

明川学園の打者が懸命にヘッドスライディングをするが、判定はアウト。

この判定に球場内の観客の一部からブーイングが飛ぶ。

ゴロを捌いた勢いでかなり前に出ていた東が、守備位置に戻る前にマウンドのパウプロに声を掛けた。

「葉輪、明川のピッチャーのボールは必ず打つから、この野次を気にするんやないで！」

東にそう声を掛けられたパウプロは首を傾げながら耳を澄ます。

そこで、パウプロは初めて野次に気付いた様に驚いた表情を見せた。

「へえ、なんか色々言われてたんですね。」

「なんや、気付いてへんかったんか？」

「はい。楊との投げ合いが楽しくて夢中になってました。」

なんとも頼もしい後輩の言葉に、東はニヤリと笑みを浮かべる。

「ならついでに、お前のピッチングでこの野次を黙らせたれ。」

「俺に出来るのは楽しんで投げるだけなので、その注文はクリスさんに言ってください。」

東はパワプロとグローブでタッチをすると、守備位置に戻っていった。

「しかし、なんでこんなに野次られてるんだ？」

パワプロはファーストの結城からボールを受け取りながら、そう考えた。

「まあ、考えてもわかんないし、楊との投げ合いを楽しもつと。」

そして、パワプロが6回の裏もノーヒットで抑えると、

楊とパワプロの投げ合いは続くのだった。



7回も両チーム共にノーヒットで終わったが、8回の表で試合が動いた。

8回の表の先頭打者である東が、レフトスタンドに豪快にホームランを叩き込んだのだ。

これで試合は1-0で青道高校が一步リード。

明川学園は、楊が実戦を想定した投球をしたいという要望を受け入れて、

練習の多くはシートバッティングをしている。

その為、チーム全体で守備が上手い。

だが、バッティングは守備のレベルに追い付いておらず、守り勝つ野球をしてきたのだ。

その明川学園が追う1点は遠い。

相手は『怪物』と噂されるパワプロなのだ。

グラウンドの明川学園ナインの足が重くなる。

この状況に気付いたクリスは、軽打を心掛けて打席に入った。

楊は折れそうになっている心を奮い立たせてボールを投げ込む。

これまで通りに打ち取った打球が、2塁方向に転がっていく。

だが、明川学園のセカンドの一步目は遅れてしまい、ボールは外野へと転がっていく。

ここで楊は自身の失敗に気付いた。

東のホームランで傷付いていたのは自分だけではなかったのだと…。

しかし、楊が気付いたのは遅かった。

東のホームランに続く、このクリスのヒットが明川学園の選手達の緊張感を、

完全に奪ってしまったのだ。

試合の流れは、一気に青道高校側に傾く。

青道高校は8回の表だけで4点を奪うと、8回の裏のマウンドに上がったパウプロが、

三者三振で反撃の糸口すら掴ませない。

そして9回の裏。

明川学園のベンチから選手達は必死に声援を送るが、最後の打者が見逃し三振に抑えられるとガツクリと項垂れた。

青道高校と明川学園の試合は4ー0で青道高校が勝利した。

そしてパウプロは、高校野球で2度目となるノーヒットノーランを達成したのだった。

## 第85話

「4―0で青道高校の勝ちです！礼！」

「「ありがとうございます！」」

試合後の挨拶も終わって帰り支度をしていると、俺の所に楊がやって来た。

「葉輪、今日は俺の完敗だ。」

そう言って楊が手を差し出してきたので握手をする。

「今日の俺は、そちらの4番にホームランを打たれた後、仲間を気遣う余裕が無かった。」

あの不用意な投球が無ければ、まだ勝負はつかなかったと思うと後悔しかない…。

4番のホームランよりも、その後のヒットの方が悔しく感じている。」

楊は一息ついてから話を続けた。

「今日の反省を活かして、ピッチングだけでなく、バッティングも磨いてくる。」

秋の大会で試合をする事になったら、また投げ合いたいな。」

「おう！また投げ合おうぜ！」

俺がサムズアップして楊の言葉に応えると、楊は笑みを浮かべてから戻っていった。



明川学園に勝って迎えた4回戦。

先発した丹波さんは、2回戦とは別人の様な投球を見せた。

4回まで1人のランナーも出さずに相手打線を抑える、見事なピッチングを披露した。

だけど、5回に高めに抜けたフォークを外野まで運ばれると、

丹波さんのピッチングのリズムが狂ってしまい連打を浴びた。

5回だけで3失点した丹波さんだったが、その後は抑えて7回3失

点で降板した。

その後は9回に登板した純さんが、ソロホームランを浴びたりしたが、

試合は8―4で青道の勝利だ！

そして準決勝で戦うのは成宮がいる稲城実業のようだ。

成宮！勝負だ！

◆

「パワプロ！」

試合をする球場のグラウンドでアップをしていると、俺と一也の所に成宮がやって来た。

「今日は俺が勝って甲子園に行くからな！」

成宮が俺を指差して宣言をしてくる。

「おう！俺も負けないぜ！」

成宮はフンツ！と鼻を鳴らすと、チームメイトの元へ戻っていった。

「パワプロ、今日は勝負所でスライダーを使う。」

俺は驚いて一也の顔を見ると、楽しみで笑顔になる。

「遂に解禁か!？」

「ああ、片岡監督の許可も取ってある。パワプロ、甲子園に行こうぜ。」

「おう！」

俺と一也はハイタッチをすると、アップを終えた皆が待つベンチに戻って行くのだった。

◆

「今日の試合、マスクは御幸に被ってもらおう。クリス、お前はベンチだ。」

今日の試合のスタメン発表で告げられた片岡さんの言葉に、クリスさんが表情を曇らせた。



「甲子園を勝ち抜いていくのは長丁場になる。その中で疲労が溜まっていけば」

プレーの質は下がり、怪我にも繋がっていく。」

甲子園の言葉に、青道の皆の表情が引き締まった様に見える。

「特に、夏の暑い時期に防具を着用してプレーするキャッチャーは、自身を感じる以上に

疲労が溜まっていく筈だ。甲子園に乗り込む前に、控え選手にも大会の雰囲気を経験させて

いつでも代われる様にしておく必要がある。これはクリスマスだけに限った事では無い。」

そこまで言うのと、片岡さんは皆の顔を見渡した。

「たとえ代えられても、レギュラーの者達は気持ちを切らすな！そして、チャンスを

与えられた者は全力で掴み取って見せろ！」

「はい！」

皆が大きな声で片岡さんに返事をした。

うん。曇っていたクリスさんの表情も晴れているな。

「葉輪、今日の試合はお前1人で投げきるつもりで行け。」

あれ？ いいの？

「中継ぎや抑えの者を休ませる事が出来るのは大きい。その価値は大会を勝ち進めば、

より大きくなるだろう。成宮との投げ合いに勝って見せろ！」

「はい！」

片岡さんは1つ頷くと、皆の顔を見渡してから話を続けた。

「稲城実業に勝てば、おそらく決勝の相手は市大三高だろう。西東京地区を代表する

強豪と連戦になるが、勝ちきって甲子園に行くぞ！」

「はい！」

片岡さんの檄に皆が応えると、稲城実業との試合が始まるのだ。た。

よっしゃ！ やってやるぜ！

## 第86話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の準決勝。

青道高校と稲城実業の試合が始まった。

この試合、奇しくも両チームの先発は1年生である。

まだ高校生になって半年も経たない者が、甲子園行きを賭けた試合のマウンドに立つ。

それも強豪である青道と稲城の双方がだ。

この事実は話題となり、まだ地区大会でありながら球場が満員と なっていた。

そんな球場に葉輪、藤原両家の両親が応援に来ていた。

「頑張れよお、風路！」

「負けるな！風路くん！」

両家の父親は、兼ねてからの計画通りに会社から休みをもぎ取って 来た。

もちろん、その際に上司との睨み合いをしてきたのは言うまでもな い。

「風路くんは本当に楽しそうに投げるわねえ、葉輪さん。」

「フーくんが子供なだけですよ、藤原さん。私としては早く貴子ちゃん と、

恋人になって欲しいんですけどねえ…。」

試合前から早くも熱狂して応援している父親2人とは違い、両家の 母親は

子供達の恋愛について話していた。

「貴子はこの前、風路くんと腕を組んで帰って来たって言うてました けど、

風路くんにはあまり効果が無かったんでしょうか？」

「いえ、その日のフーくんは嬉しそうでしたから、ちゃんと効果はあり ましたよ。」

両家の母親だけでなく、青道高校野球部の副部長である高島を含め た、

パウプロ、貴子の包囲網が形成されているのだが、大人の女性達が期待する程の

2人の仲の進展はまだ無い状態だ。

「これ以上を求めるとなると、やっぱりキスをさせるしかないでしょうか?」

「そうですね。確か、貴子は風路くんに甲子園に連れていってもらって約束しているので、

それを出しにしてキスさせちゃいませうか。」

「あらあら、幼馴染みとの約束を果たしてキスだなんて、ロマンチックでいいですねえ。」

「ふふ、帰ったら貴子を焚き付けておきますね。」

「よろしくお願いしますね、藤原さん。」



「…つくしゅん!」

「ん?藤原君、風邪かね?」

「い、いいえ、大丈夫です、太田部長。」

球場の観客席で葉輪、藤原両家の母親が子供達の恋愛話に興じていた頃、

その話の当人である貴子は、青道ベンチでくしゃみをしていた。

「この時期は風邪だけでなく、暑さで体調を崩す事も多いからね。気を付けなさい。」

「はい、ありがとうございます。」

太田は貴子の返事に頷くと、試合前の挨拶を終えてマウンドで投球練習を始めた、

パウプロに目を向けた。

「はあ…試合前なのに胃がキュツとしてきたよ。」

太田の言葉に貴子はクスクスと笑うと、膝に置いていたスコアブックを手に取り、

マウンドで投球練習をしているパウプロの姿を見詰めるのだった。



1回の表、パウプロは稲城打線を三者凡退の二三振に抑えた。

順調な滑り出しのパウプロのピッチングに、1回の裏のマウンドに上がった成宮は、

青道ベンチにいるパウプロに挑戦的な視線を送っていた。

「ふんっ！お前が二三振なら、俺は二三振で抑えてやるよ！」

成宮は左手で弄んでいたロージンバッグをポイツとマウンド横に捨てると、

手に余分についた滑り止めを、フーツと息を吹き掛けて飛ばす。

そして成宮は、打席に入った青道の1番バッターの小湊をマウンドから見下ろすと、

ゆっくりと投球モーションに入る。

成宮が1球目を選んだのはスライダー。

そのスライダーを、左打者の小湊の膝元に投げ込む。

背中からくるような角度に、小湊はボールが身体に向かってくる様に錯覚した。

フロントドアのスライダーに、小湊は僅かに避ける様に身を振る。

だが…。

「ストライク！」

主審の判定はストライク。

この判定に、小湊は冷や汗を流す。

「はい、いっちょ上がりつてね。」

原田からの返球を受ける成宮の頭には、既に小湊を二三振で抑える映像が見えていた。

成宮は思い描いた通りにボールを投げ込んでいく。

青道の1番打者の小湊は、1球もバットがボールにかすらずに、

三球三振に抑えられてしまった。

「せめて、クリスさんレベルのバッターになってから出直してきなよ。」

そう言いながら舌を出した成宮は、1回の裏の青道打線を三者三振で抑えたのだった。

## 第87話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の準決勝。

青道と稲実の試合は、2回の表に進んでいた。

2回の表の先頭打者は、稲実の4番である原田。

春季大会で、パワプロからホームランを打った強打者である。

そんな原田を迎えるにあたって、今日の試合でマスクを被っている

御幸は、

マウンドのパワプロに声を掛けた。

「パワプロ、1回の裏に鳴が三者三振をやった勢いを断つ為に、原田さんを三振にするぞ。」

「おお!?いよいよスライダーのお披露目か!?!」

「それはちよつと様子を見てからだな。」

早くスライダーを投げたいパワプロの様子に、御幸が苦笑いをする。

「出来れば終盤の勝負所で使いたいから、使わずに抑える様に組み立てるつもりだ。」

「ふうん。まあ、リードは一也に任せて、俺は原田さんとの勝負を楽しむよ。」

そう言うパワプロの言葉に、御幸はパワプロの胸をミットで軽く叩いてから、

キャッチャーボックスに戻った。

御幸はキャッチャーボックスに座ると、入念にバットを振ってから、

バッターボックスに入る原田の様子を横目で探っていく。

(さて、1球目はどうするかな?)

御幸がサインを出すと、パワプロが頷いて投球モーションに入る。

1球目。

御幸が要求したのはインハイへのフォーシーム。

原田が反応してバットを振る。

ガキッ!

「ファール！」

原田が打った打球は、後ろにそれてファール。

これでワンストライク。

御幸は今の原田のバッティングの意味を考える。

(原田さんが狙っているのは真っ直ぐか?)

御幸は確認する為に、アウトローにボール一つ分外したフォーシームを要求した。

パウプロが投じたフォーシームが、要求通りのコースに投げ込まれる。

ガキッ!

「ファール！」

アウトローのフォーシームを踏み込んで打った原田の打球は、1塁線を切れてファール。

これでノーボール、ツーストライク。

原田を追い込んだ状況だが、御幸は原田の狙いに確信が持てなかった。

(どうする? 1球外すか?)

横目で原田の様子を見ながら御幸は決断をする。

御幸がサインを出してミットを構える。

パウプロが独特な投球モーションでボールを投げ込む。

バシッ!

「ストライクスリー! バッターアウト！」

アウトローにバックドアとなるカーブがピンポイントで投げ込まれると、

主審が力強くストライクコールをした。

見逃し三振に倒れた原田は、御幸を一瞥すると黙してベンチに戻っていくのだった。



2回の表。

パウプロは原田を三球三振で抑えると、その勢いのままに三者三振で抑える。

そして迎えた2回の裏。

マウンドに上がった成宮は、打席に入った東をふてぶてしく見下ろしていた。

「あくあ。折角クリスさん対策で新変化球を覚えて来たのになあ。」

そう言いながらマウンド横のロージンバッグに軽く指を付けると、フツと息を吹いて余分な滑り止めを飛ばした。

「まあ、この人も右打者だしちょうどいいか。」

成宮は左手で帽子の鏝に触ると、原田のサインを見る。

そしてサインに頷いた成宮はゆっくりと投球モーションに入っていく。

1球目。

成宮が選択したのはアウトローのフォーシーム。

そのボールに東のバットが反応する。

キンツ!

東の打った打球は外野フェンスに直撃したが、ライト線を切れていてファール。

「うわあ、馬鹿力。でも、フェアゾーンに入んなきゃ意味無いし。」

主審が投げたボールを受け取りながら、成宮はマウンドから東を見下ろしていく。

原田のサインに頷いて成宮がボールを投げる。

2球目。

成宮が投げたのは、インローのストライクゾーンからボール球になるフォーク。

東はこれを見逃す。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

「今のを見送るとか、面倒だなあ。」

ワンバウンドしたボールに付いた砂を、原田はユニフォームで拭き取ってから、

成宮にボールを返球する。



ボールを受け取ってサインを見た成宮は首を横に振る。原田はため息を1つ吐いてからサインを出し直す。

「そうそう、それだよマサさん。」

サインに頷いた成宮が、ゆっくりと投球モーションに入りボールを投げる。

成宮が投げたボールはインコースのベルト付近に入っていく。甘いコースに投げ込まれたボールに、東はバットを振り抜く。だが…。

ガキッ!

東の打球は3塁線のボテボテのゴロになってしまった。

打球を見た東が1塁へと駆け出す。

3塁線上を転がる打球を、稲実の3塁手が処理して1塁へ送球。タイミングは確実にアウトだが…。

「ファール!」

3塁の塁審は打球が切れたと判断して、判定はファールとなった。駆け足で打席に戻っていく東を見ながら、成宮は不満気に言葉を溢す。

「サード、一歩目が遅すぎ。」

成宮がそう愚痴るのだが、これは稲実の3塁手の怠慢では無い。

成宮が東に投げたのは、クリス対策として覚えた新変化球『カッツボール』である。

東は得意なコースに来たボールを、フォーシームと認識してフルスイングしていた。

それ故に稲実の3塁手は強い打球を想定したのだ。

だが、実際はボテボテのゴロだった為、稲実の3塁手の一歩目が遅れてしまい、

打球は3塁線を切れてファールとなってしまうのだ。

「まあ、いいけどね。どうせ三振で抑えるから。」

マウンドの成宮は原田のサインに自信を持って頷く。

成宮が決め球に選んだのはチェンジアップ。

シニア時代の海外チームとの練習試合の後に、パウプロの助言で握

りを変えたものだ。

以前の握りではチェンジアップの制球に苦しんだ成宮だったが、今の握りにしてからは

しっかりと低めに制球出来る様になっていた。

そして、握りを変えた事で制球以外の副産物として緩急だけでなく、フォークの様な落差が

成宮のチェンジアップに持たらされていた。

成宮はそのチェンジアップをアウトローに投げ込む。

そして…。

ブンッ！

東のバットは空を切り、成宮は東を三振に抑えたのだった。

「はっ、チョロいね。」

## 第88話

東を三振に抑えた後の成宮は、続く青道打者達にも見下ろしながらボールを投げていった。

「まったく、生意気な白髪の小僧やな…。」

ベンチに戻った東は、そんな成宮の投球を食い入る様に見ている。「やけど、あの小僧の放るボールは本物や。今日の試合は1点勝負になりそうやな。」

成宮は東に続く青道の5番打者も三振に抑えると、マウンドの上で軽く舌を出していた。

「俺がフォーシームと思って振ったあのボールはなんや？カットボールか？」

東が首を捻りながら6番打者の結城と成宮の対戦を見ていると、成宮はチェンジアップで

結城を三振に抑えていた。

「それに加えてあのチェンジアップや。あれはアカン。ボールが来ないだけやない、

エグ過ぎる程に落ちよるわ。」

東が頭をガシガシと搔いていると、結城がベンチに戻って来た。

「去年までの俺だったら間違いなく打てんかったな。バット振ってきて良かったで。」

東はそう言いながらグローブを手に取ると、3塁手の守備位置へと向かう。

「高校通算50本まで後8本やったな…。今日で7本以下にさせてもらうで、白髪の小僧。」

3塁手の守備位置についた東は、青道の誰よりも声を出していくのだった。



2回の裏も三者三振に成宮が抑えると、多くの者達が予想した通り

に試合は投手戦となった。

3回の表までにパウプロは稲実打線から7三振を奪う好投を見せる。

対する成宮は8番バッターの御幸に連続三振を止められてしまったが、

パーフェクトは継続して8三振を奪っていた。

4回は双方共に三振を1つずつ奪って迎えた5回。

本日2度目となる4番バッターとの対決。

パウプロは原田をカーブで三振に抑えたが、成宮は東に甘く入ったカットボールを

三遊間に運ばれるヒットを打たれた。

だが、成宮は後続を抑えて追撃を許さない。

試合は進んでいき7回の裏。

3度目となる成宮と東との対決。

ワンボール、ツーストライクに追い込まれた東は、7球連続でファールを打つ粘りを見せた。

だが、7球目のファールとなったフォーシームとの緩急を活かしたチェンジアップに、

東のバットは空を切ってしまった。

パウプロと違い4回でノーヒットが終わった成宮だったが、ドラフト候補と噂される

東を抑える力投が球場に歓声を引き起こさせる。

東は悔しさのあまり、金属バットでヘルメットを被る自身の頭を叩いていた。

球場の雰囲気稲実に流れて迎えた8回の表。

青道のマスクを被る御幸は、マウンドのパウプロの元へと向かったのだった。



「パウプロ、大丈夫か？」

「ん？まだまだ行けるぜ！成宮との投げ合いは楽しいからな！」  
パワプロの言葉を御幸は素直に頼もしく思う。

そんなパワプロを信じて、御幸は勝負を掛ける事を決断した。

「パワプロ、この回はスライダーを使うぞ。」

「おお!?ようやくか！待ちくたびれたぜ！」

パワプロの笑顔を見た御幸は勝ちたい、パワプロを勝たせたいと強く思った。

「パワプロ、俺達で流れを引き寄せろぞ！」

「おう！」

御幸はミットをパワプロのグローブと合わせると、キャッチャーボックスに戻る。

（俺にあのスライダーが捕れるのか？）

もしパスボールをしたりすれば、青道の皆の緊張感が無くなってしまいかもしれない。

（捕れるかどうかじゃない…、捕るんだ！）

御幸は打席に入った原田を一瞥すると、球場内に響く歓声が聞こえなくなるほど集中するのだった。

## 第89話

夏の高校野球選手権の西東京地区大会準決勝。

青道と稲実の試合は8回の表を迎えようとしていた。

その8回の表の先頭打者となる稲実の4番バッターの原田は、

打席に入る前に大きく息を吐いた。

（春季大会でも思ったが、やはり葉輪は凄い投手だ。だが、うちの成宮も負けていない！）

原田はマウンドで何かを話しているパウプロと御幸に目を向ける。

（葉輪を相手に連打は望めない。ならば最低でも2塁に到達出来る長打が必要だ。）

そう考えると、原田はバットを目の前に持ち上げて両手でグリップを引き絞る。

（葉輪のカーブとチェンジアップは引っ掛けてゴロになる可能性が高い。）

狙うは真っ直ぐ1つだ！

原田はそう心を定めると、キャッチャーボックスに戻ってきた御幸に合わせて打席に入る。

本日3度目となるパウプロと原田の対決。

1球目。

パウプロはアウトローにバックドアとなるカーブを投げ込んだ。

原田はしっかりとタイミングを取っていたが、このカーブを見送る。

「ストライク！」

主審の判定はストライク。

これでカウントはノーボール、ワンストライク。

（8回でも衰えぬ抜群のコントロール…。見事なものだ。）

原田は1つ息を吐いてからバットを構える。

マウンドのパウプロはサインに頷くと、独特なノーワインドアップの投球モーションに入る。

2球目。

ストライクゾーンに入っているアウトコースのボールに原田が反応して踏み込む。

だが…。

(真っ直ぐ…!?いや、チェンジアップか！)

パウプロが投げたボールは、原田の目には途中までフォーシームに見えていた。

その為、原田はスイングを始動していたのだが、原田は身体が開かない様に懸命に堪える。

(態勢を崩すな！中途半端なスイングでは狙いを悟られるぞ！バットを振り切れ！)

ガキツ！

原田が打った打球は1塁側のファールゾーンに転がっていった。

「ファール！」

これでカウントはノーボール、ツーストライク。

追い込まれた状況だが、原田は内心で胸を撫で下ろしていた。

(助かった。あと1球チャンスがある。そして、2球外に遅いボールが続いたこの状況…、

内に速いボールが来る可能性が高い！)

原田の狙い球はパウプロのフォーシーム。

それが強く叩けるインコースに来る可能性が高い状況に、原田の心は昂る。

原田はタイムを取ると、打席を外して素振りをする。

(落ち着け、原田 雅功！緩急差に惑わされずにしっかりと振り抜け！)

原田は何度か軽く素振りをした後、最後に強くバットを振ってから打席に入る。

原田が大きく息を吐いてからバットを構えると、マウンドのパウプロはサインに頷く。

3球目。

パウプロが投げたボールは間違いなくインコースに来ている。

だが、そのコースはこれまでのものと違って甘いコースだった。

(絶好球!もらった!)

原田はパウプロが投げたボールをフォーシームと認識してスイングする。

だが…。

(バットに感触が無い!?ボールは何処だ!?)

原田は捉えた筈のボールの感触が無い事に混乱していた。

そんな原田に声が届く。

「走れ、原田!」

野球人の本能なのか、原田は混乱したまま1塁へと走る。

そして原田が1塁を走り抜けると同時に、青道の1塁手の結城のミットの音が鳴る。

「セーフ!」

1塁塁審の判定はセーフ。

原田は何が起こったのか確認したくて、御幸がいる方に振り向く。御幸がいる位置はキャッチャーボックスの後方、バックネット付近。

(あのコースでワイルドピッチ?いや、パスボールか!)

そう思った原田の頭には新たな疑問がわきあがる。

(俺が真っ直ぐと思ってバットを振ったあのボールは…なんだ!?)

原田は1塁コーチャーボックスにいる仲間に声を掛けられるまで、1塁の塁上で呆然と立ち尽くすのだった。



## 第90話

「悪い、パワプロ。」

スライダーを後ろに逸らしちゃった一也が、マウンドまで謝りに来た。

「気にすんなよ、一也。」

俺がそう言っても、マスクの奥の一也の表情は厳しいままだ。

「狙った所に投げられたと思ったんだけど、俺が思ったよりもスライダーが

曲がったからしょうがないって。」

「悪い、パワプロ。」

まだ試合に負けたわけじゃないし、そこまで気にする必要は無いと思うけどなあ。

「じゃあ一也、試合が終わったらジュース奢ってくれよ。それでさっきのはチャラな。」

俺がそう言うで一也は目を見開いてから、プツと笑い出した。

「わかったよ、パワプロ。奢るのはアップルティーでいいか?」

「一也って熱いアップルティーしか飲まないじゃん。夏にそれはキツくね?」

「いやいや、冷たいのは邪道だろ?」

俺達はそんな事をグローブで笑い顔を隠しながら話す。

「あ、パワプロ。俺が決勝点を打ったら奢りチャラな。」

「おう!期待してるぜ!」

俺の返事を聞くと、一也は笑顔でキャッチャーボックスに戻っていった。



パワプロと御幸がマウンドで話をしていた頃、ベンチのクリスは強く拳を握り締めていた。

(あのスライダー…、俺なら止められた。)

怪我をしてからのクリスは、感覚を新たに作る事で精一杯だった。それ故に、この試合のマスクを御幸に取られた自分の感情に、今気付いたのだ。

(これがスタメンを奪われた時に感じる感情か…、悔しいな。)

クリスは素直に自分の感情と向き合っていく。

それが成長する為に必要だと本能的に感じたからだ。

(認めよう。御幸、お前は俺のライバルだ！)

クリスはこれまでの野球人生で、試合ではマスクを被り続けてきた。

そんな日々の中でクリスは、いつしか無意識の内に自分は挑まれる立場だと思っていたのだ。

クリスは元プロ野球選手の父親に、初めて野球を教えてもらった時の事を思い出していた。

(あの時は上手くないかない事が当たり前だった。そして、出来る様になるのが嬉しくて、

親父に誉めて貰えるのが嬉しくて、野球が好きになっていったんだ。)

クリスは一度目を瞑ると、笑みを浮かべてマウンドの2人を見詰めた。

「御幸、マスクを被るのは俺だ。お前が成長するのなら、俺はそれ以上成長してみせる。」

クリスのこの言葉が聞こえた控えのメンバーは、驚いてクリスの方に振り向く。

そしてクリスの言葉が聞こえていた片岡は帽子を深く被り直すと、教え子達の成長を喜ぶ様に笑みを浮かべたのだった。



8回の表に稲実の原田が振り逃げで出塁した事で、パワプロの完全試合は崩れてしまった。

稲実ベンチは5番バッターにバントを指示して原田を2塁に送る。

この試合、両チームを通じて初めて得点圏にランナーが進んだ。そんな状況に球場の観客達が歓声を上げて両チームを応援している。

パウプロはその雰囲気を楽しむ様に笑顔で投球をすると、原田を2塁に釘付けにして

8回の表の稲実打線を抑えた。

回は変わって8回の裏、ようやく巡って来たチャンスの場面を活かせずに落ち込む

稲実メンバーを鼓舞する様に、成宮はこの試合で一番の力投を見せた。

青道の5番バッターをフォーシームのみで三振に抑えると、続く6番バッターの結城も

チェンジアップで三振で抑える。

この成宮の力投に心が奮い起った稲実メンバーは、グラウンドを埋め尽くす様に

声を張り上げていく。

そんなメンバーの様子を見て、成宮は世話が焼けるとばかりに鼻を鳴らすと、

青道の7番バッターをカットボールでショートゴロに打ち取った。

8回の裏を終えると、成宮はパウプロの14三振を超えて、

青道打線から17三振を奪っていた。

ノーヒットを継続するパウプロと、圧倒的な奪三振能力を見せる成宮の投げ合いに、

球場に駆け付けた高校野球ファンは声が枯れる程に声援を送る。

そんな2人の投げ合いも大詰めとなる9回を迎える。

9回の表はパウプロがリズム良く3人で抑える。

そして9回の裏の先頭打者である御幸は、打席に向かう前に熱いアップルティーを口にするのだった。

## 第91話

青道と稲実の試合は0-0のまま9回の裏を迎えた。

今年から導入されたルールにより高校野球の公式戦では、全国大会の決勝戦以外の延長は

タイブレークルールとなっている。

タイブレークルールはノーアウト、1、2塁の状況から始まるので非常に点が入りやすい。

なので多くの者達は、如何にパワプロや成宮でもそう何度も抑えられないと思っっている。

故に、可能ならばここで決着をつけたい。

そんな気持ちを持つ者達によりグラウンドには張り詰めた緊張感が漂っているのだが、

御幸は9回の裏の先頭打者でありながらゆっくりとアップルティーを飲んでいた。

「あー…、うまい。」

ヘルメットやエルボーガードはつけているので直ぐに打席に向かえるのだが、

御幸はマイペースにアップルティーを飲む。

「お〜い、一也。主審さんが睨んでるぞ〜。」

ネクストバッタールのパワプロに声を掛けられた御幸は、グイッとアップルティーを飲み干すと、

ゆっくりと打席に向かっていく。

(身体は熱いのに、頭は妙に冴えてる…。なんだこれ?)

打席に入る前に軽く素振りをする御幸は、常と違う感覚に内心で首を傾げていた。

(まあ、いいか。)

御幸は打席に入るとゆっくりと足場を作っていく。

(さて、どのボールを狙おうかな?)

足場を作り終えてバットを自然に構えた御幸は、緊張感が漂う今の状況を

楽しむ様に笑顔を浮かべたのだった。



(成宮の球数は110前後…。延長を考えれば、この回は出来るだけ球数を節約したい。)

キャッチャーボックスに座る原田は、チラリと左打席の御幸に目を向ける。

(幸いな事にこの回は左バッターが3人続く。抑えるのはそう難しくは無い。)

原田が出したサインに成宮が頷くと、原田は気合いを入れる様にミットに拳を叩きつける。

(来い、成宮！)

1球目。

成宮が投じたフォーシームは、アウトローに構える原田のミットに吸い込まれていく。

バシッ！

「ストライク！」

主審のコールに原田はマスクの奥で笑みを浮かべる。

(手応えは十分！成宮のボールはまだ走っている！)

1球目を見送った御幸に、原田が目を向ける。

(御幸が狙っているボールは何だ？)

迷いながらも原田は決断する。

(球数を節約する為に早いカウントで引っ掛けさせたい。ならば…。)

原田が出したサインに成宮が頷く。

2球目。

成宮が投じたボールは、1球目と同じアウトローに向かう。だが、ボールは原田が捕球をする前に外へ僅かに変化する。

アウトローのストライクゾーンからボールゾーンへと変化するカットボールだ。

バシッ！

「ボール！」

主審の判定はボール。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

(今のも見送った？それとも手が出なかったのか？)

原田はチラリと御幸に目を向けて反応を見る。

(カウントはワンボール、ワンストライク。ボールを先行させたくない。)

原田はボールを手で捏ねてから成宮に投げ返す。

(アウトコースのボールが目に焼き付いていれば、インコースを捌くのは難しいだろう。)

ならば、フロントドアのスライダーでストライクを取る！)

そう決断をすると、原田は球種のサインを出す。

成宮は原田のサインに頷くと、ゆっくりと投球モーションに入っていく。

3球目。

フロントドアのスライダーが、インローギリギリに投げ込まれる。

そのボールはコースもキレも、この試合で原田が見た中では完璧なボールだった。

だが…。

カキンッ！

原田が捕球をしようとした刹那、原田の耳に金属バットの打球音が響き渡った。

原田はキャッチャーマスクを外して立ち上がり、打球の行く末を目で追う。

打球はライト線付近を高々と飛んでいく。

(バカな…。今のコースがなぜ打てる!?)

高々と飛んでいく打球が右翼手の右横を超えていく。

(大丈夫だ。ボールはライト線を切れてファールになる…、ファールになる筈だ!)

原田は目を見開いてボールの行く末を見守る。

「切れる！」

グラウンドに原田の音が響き渡ると…。

カーン！

打球はライトのポールと衝突し、妙に通る音を球場に響かせた。

一瞬の静寂の後、球場は割れんばかりの歓声に包まれた。

その歓声によりホームランを認識した原田は、手にしていたキャッチャーマスクを

地面に落としたのだった。

## 第92話

夏の高校野球選手権の西東京地区大会の準決勝。

青道高校と稲城実業の試合の9回の裏。

俺と成宮の投げ合いは無失点で来ていたんだけど、一也がサヨナラホームランを打った。

ホームベース付近で青道の皆が、一也を祝福するべく待ち構えている。

一也がホームインすると、皆が一也に祝福の紅葉を作り始めた。

「御幸！余計な事をしておってからに！俺がサヨナラホームランを打つ予定やったんやぞー！」

そう言いながらも東さんは、笑顔で一也の頭を脇に抱え込んでいる。

「いや、すいません東さん。狙っていたんですけど打てちゃいました。」

そんな感じで一也を祝福していたんだけど、主審さんに促されたので終わりの挨拶をする。

「1-0で青道高校の勝利です！礼！」

「「ありがとうございます！」」

挨拶が終わって帰り仕度をしていると…。

ピロンッ♪

頭の中に機械音が響いた。

俺は能力を確認する。

※金特殊能力の『怪物』を取得しました。

※上記能力を取得した事で、最高球速の成長限界が155kmに変えられました。

※上記能力を取得した影響で、制球がSからAに下がりました。

※上記能力を取得した事でボーナスポイントを獲得しました。

※上記能力を取得した事で一部特殊能力が取得不可になりました。



うおっ!?

金特殊能力を取得!?

俺は能力画面を何度も見直す。

『怪物』

・フォーシームのノビがもの凄く良くなる特殊能力である。

・『ノビ5』よりも体感速度が上がる効果がある。

・『怪物』取得後は『重い球』の最上位能力である『剛腕』は取得出来ない。

(最高球速の成長限界が下がるのは、今までの『ノビ』系統の能力取得時の

特徴だからわかるけど、制球が下がったのはキツイなあ…。)

俺は変化した感覚を確認してみる為に、いつもショルダーバッグに入れてある

硬式球を左手に持ってみる。

(うわっ!?!ボールを持ってみただけで感覚が全然違う! 全国大会が始まるまでに、

この感覚に慣れられるか?)

決勝戦の相手である市大三高に勝たないと甲子園には行けないのだが、

なんか丹波さんがいつも以上に気合いが入ってるんだよね。

だから、決勝戦の事はあまり心配していないのだ。

そんな事を考えながら左手でボールを弄っていると、一也が俺に声を掛けてきた。

「パワプロ、約束通りにジュースの奢りは無しな。」

一也が笑顔でそう言いながらも右手を上げる。

なので俺は右手で一也とハイタッチをした。

イエーイ♪

「ところで、ボールを持ってどうしたんだ?」

「ん?なんか試合が終わってから感覚が違うなあって思ってたね。」

俺がそう言うのと、一也は真剣な表情で俺を見てくる。

「ケガでもしたのか？」

「いや、どこも痛い所は無いよ。」

俺がそう返事をして、一也は真剣な表情のままだ。

「どうした、葉輪、御幸。」

俺と一也が話をしている所に、片岡さんがやって来た。

「監督、パワプロの奴が感覚が違うって言っています。念のためにケガをしていないか、

病院で検査を受けさせた方がいいと思います。」

一也がそう言うのと、片岡さんもジッと俺の事を見てくる。

「いやいや、俺はケガしてないよ！」

「高島先生に話をしておく。御幸、葉輪の荷物を纏めておけ。」

片岡さんはそう言うのと、足早に去っていった。

え？ホントにケガしてないよ？

まさかの事態に俺は軽く混乱してしまう。

俺が軽く混乱している中で、一也が手際良く俺の荷物を纏めていく。

そして、一也が俺の荷物を纏め終わった頃…。

「フーくん、大丈夫？」

貴子ちゃんが心配そうな表情で俺達の所にやって来た。

「高島先生が車を準備してくれているから一緒に行こう。御幸くん、

フーくんの荷物は私が預かるわね。」

「お願いします、藤原先輩。」

あれよあれよと事態が進んでいき、俺は貴子ちゃんに連れられて礼ちゃんの車に乗り込むのだった。



「すまない、成宮。」

パワプロが病院に連行されていた頃、稻城の原田は成宮に謝罪をしていた。

「どうしたの、マサさん？」

「最後のホームランは、俺が御幸を左バッターだからと甘く見たせいだ。」

それに、俺は4番バッターでありながら葉輪から一本も打つ事が出来なかった。」

頭を下げている原田を見た成宮は、頭を掻きながらため息を吐いた。

「最後のホームランはマサさんのせいじゃなくて俺のせいだよ。」

「いや、あれは俺が…。」

「チームの勝敗を背負う。それがエースってモンでしょ？」

成宮の言葉に、原田は顔を上げて目を見開く。

「パワプロと投げ合えば1点勝負になるのはわかった。」

だから負けたのは一也に打たれた俺のせいだよ、マサさん。」

「成宮…。」

「それに、次は俺が投げ勝つから気にしないでいいよ。」

最後に成宮は茶化す様に言うと言顔をさせる。

原田は数秒程目を閉じて黙想をすると、強い意思を込めて目を開いた。

「秋は俺達が勝つ。」

「うん、俺がマサさんを甲子園に連れて行ってあげるよ。」

原田は成宮と握手をすると、成宮にフツと微笑んでから去っていった。

「ほんと…、世話が焼けるよ。」

原田が去った後、成宮はため息を吐く。

「まあ、これもエースの役割ってね。」

そう言う成宮は上を向く。

そして帽子で顔を隠すと涙を流したのだった。

## 第93話

「フーくん、リンゴ剥けたわよ。」

病室でリンゴを剥いていた母さんが声を掛けてくる。

俺は先日の稲城との試合の後、病院に連行されて検査入院中である。

「フーくん、ホントにどこも痛い所は無いの？」

「どこも痛い所は無いよ、母さん。」

俺はホントにどこもケガをしていない。

何度そう言っても、皆はしっかりと検査をしろとの一点張りだ。

早くキャッチボールをして感覚に馴染みたかったんだけどなあ…。

「明日には検査結果が出るから、たまにはゆっくりとしなさい。」

「は〜い。」

肩肘の検査だけなら直ぐに終わったんだけど、この際だから精密な検査をとなり、

こうして検査入院をしている。

ああ…、早く野球をしたいなあ…。

そんな事を考えながら俺は軽いため息を吐くと、母さんが剥いてくれた

リンゴに手を伸ばすのだった。



市大三高との決勝戦で先発をする事が決まった丹波は、ノミの心臓である自分が

それ程緊張していない事を不思議に感じていた。

(いつもは思いつきり汗をかいてからじゃないと落ち着かなかったのに、

今日はいい感じに集中出来ている。)

青道高校のグラウンドで丹波はクリスとキャッチボールをしながら、ゆっくりと調整していく。

そして調整していきながら、丹波は憧れの幼馴染みである市大三高のエース、

真中 要の背中を思い浮かべる。

(カツちゃん…。俺、ここまで来たよ。)

憧れの存在に手の届く所まで来た丹波は、緊張とは違う胸の高鳴りを感じていたのだった。



検査入院の結果は、どこも異常無しだった。

まあ、当然だよな。

でも、医者の人が1つ驚いていた事があった。

それは、俺の利き腕の靭帯に全く損傷が見られなかった事だ。

医者の人が言うには、日常生活などでも靭帯は自然治癒する範囲で軽く損傷したりするらしい。

でも、俺は1試合投げきった後でもその損傷が全く見受けられなかったので驚いたそうだ。

医者の方は、『健康で丈夫な身体に産んでくれたご両親に感謝しなさい』と言ってた。

言われるまでもなく、父さんと母さんには野球に専念させてもらってるんだから、

いつも感謝の気持ちを持っているぜ！

だけど折角の機会だから、改めて言葉にして両親に感謝しておく。

父さん、母さん、ありがとう！

あ、貴子ちゃんもありがとう！いつもマッサージをしてくれて！

え？お礼はデートで？

貴子ちゃんとのデートなら大歓迎だぜ！

でも、デートは夏の大会が終わってからね。

そんな感じで無事に退院した俺は、片岡さんに退院の報告をする為

貴子ちゃんと一緒に青道高校に向かうのだった。



フーくんは無事に退院すると片岡監督に報告に行くと言うので、私も一緒に青道高校に行く事にした。

「フーくん、ケガが無くてよかったね。」

「うん。ありがとう、貴子ちゃん。」

お礼を言ってくるフーくんの笑顔に、私の顔が熱くなる。

「貴子ちゃん、デートはどこに行きたい？」

「フーくんと一緒ならどこでもいいわ。」

「どこでもいいって答えが一番困るんだよなあ…。」

私の返事にフーくんが苦笑いをしている。

フーくんを困らせるつもりはなかったんだけど、この答えが私の本当の

気持ちなのだから仕方ないわよね？

「うくん…。休日にも練習があるからあまり遠くには行けないし…。どうしよう?。」

ちゃんと私とのデートを考えてくれるフーくんの気持ちが嬉しい。

でも、フーくんには野球を最優先にしてもらいたいから、

デートの行き先は私が決めよう。

「フーくん、夏の大会が終わったら一緒にご飯を食べにいこう?。」

「貴子ちゃんがそれでいいなら、俺もそれでいいよ。」

そう言って笑ってくれるフーくんに応えるように、私はフーくんと繋いでいる左手を離して腕を組む。

青道高校まで後少しだからあまり腕を組む時間は無い。

だけど、少しだけゆっくり歩いてもいいよね？

私が少しだけ歩くのを遅くすると、それに気付いたフーくんが私に合わせて

ゆっくりと歩いてくれたのだった。

## 第94話

検査入院から退院して検査結果を片岡さんに報告した翌日、片岡さんは今日の練習前に

青道高校野球部の部員全員を集めて1つの通達を出した。

それは、ケガを隠さない様にといったものだった。

野球に限らずスポーツにケガは付き物だが、それを素人判断でケガを隠して練習や

試合でのプレーを続行すれば、取り返しのつかない結果になる事もある。

ケガをしないように事前のケア等も大事だが、ケガをした後の速やかな治療が

クリスさんの様に早期の復帰に繋がると、片岡さんは話した。

強豪と言われる青道高校に来た以上、野球部の皆は本気で野球をしに来ている。

その中で熾烈なポジション争いをしていけば、多かれ少なかれケガは避けられないものだ。

だが、ケガを含めての体調管理も野球人として大事な事であるので、

それを自覚して行動しろとの事。

皆は大きな声で片岡さんに返事をする、片岡さんは1つ頷く。

そして片岡さんの号令で2日後に迫る、夏の高校野球選手権の西東京地区大会決勝戦に向けて、

最終調整となる練習が始まるのだった。



ケガをしたり疲れを残さない様に、普段に比べて軽いメニューの全体練習をした後、

俺はブルペンで一也を相手に投げ込み前のキャッチボールをしていた。

ちなみにクリスさんは、決勝戦で先発をする丹波さんの相手をして  
いる。

キャッチボールである程度肩が暖まった所で、俺は一也を立たせた  
まま

軽くフォーシームを投げる。

パァン！

一也のミットはいい音を出したけど、俺は首を傾げる。

(うーん、狙った所よりも高めに行っちゃうな…。)

俺は一也からの返球を受けると、少し握りの感触を確かめていく。  
(リリースの感覚は凄くいいんだけど、制球のランクが変わったせい  
なのか

細かいコントロールも出来ないんだよなあ…。)

そんな事を考えながら俺はもう一度フォーシームを投げる。

俺が投げたフォーシームは、以前のモノに比べてボール1つ分高め  
に一也に届く。

(一也を座らせて本格的に投げ込んだら、もっと高めに行っちゃうの  
かな?)

俺は左手の親指で、左手の人指し指と中指の感触を確かめる様に軽  
く擦る。

(早くこの感覚に慣れないとなあ…。)

その後の俺は1球1球の感触を確かめながら、ゆっくりとボールを  
投げていくのだった。



(何だこれ？見たこと無い軌道でボールが来るぞ…。)

パウプロのキャッチボールの相手をしている御幸は、パウプロの  
フォーシームの質に目を見開く。

(キャッチボールだからパウプロは軽く投げてるけど、本格的に投げ  
込んで来たら

どんな軌道でボールが来るんだ?)



首を傾げながら左手の指を擦り合わせて指先の感触を確かめているパウプロの姿に、

御幸は検査入院前のパウプロの言葉を思い出した。

(あの時、パウプロは感触が違うって言っていたけど…もしかして、このボールを投げる感覚を掴んだのか?)

御幸自身、先日の試合で成宮からサヨナラホームランを打ったあの時から、

バッティングに確かな手応えを掴んでいる。

だが、その手応えはまだ自分の物に出来たとは言えない状態だ。

(今は声を掛けて邪魔をしない方がいいな…。)

言葉に出来ない自分の中の感覚にもどかしい気持ちを抱くのは、今の御幸自身が実感しているのだ。

「いいぜ、俺はパウプロの相棒だからな。幾らでも付き合うさ。」

御幸はそう呟くと、ミットに軽く拳を叩き付ける。

そして御幸はパウプロのフォーシームを捕球すると、ニヤリと笑みを浮かべるのだった。

## 第95話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦が始まった。相手は西東京地区の強豪校の1つである市大三高である。決勝戦の先攻は青道高校だ。

1回の表、市大三高の先発マウンドに上がるのは2年生エースの真中 要という人だ。

真中さんは高速スライダーが決め球らしい。そんな真中さんが投げる1回の表、真中さんは立ち上がり安定せず、

青道高校の1番バッターである亮さんを四球で出塁させてしまった。

2番バッターの3年生の先輩はバントで亮さんを2塁に送った。

1回の表から早くも得点のチャンスが訪れたぜ！

だけど3番バッターの3年生の先輩は、真中さんの高速スライダーで

三振に抑えられてしまった。

そして続くチャンスの場面で登場するのは、青道の4番バッターである東さんだ。

東さんは1球目を見送ると、2球目の高速スライダーを左中間方向にフェンス直撃となる、

タイムリーツーベースヒットを打った。

ツーアウトながらも続くチャンスの場面。

次のバッターは5番のクリスさんだ。

真中さんはまだコントロールが安定しないのか、ツーボール、ノーストライクと

ボールカウントが先行してしまう。

そして、真中さんが投げた3球目…。

カキンッ！

金属バットの快音を残して打球はセンター方向に高々と飛んでいく。

クリスさんはストライクを取りにきた甘いコースのフォーシームを逃さずに、

しっかりとバットを振り抜いていた。

1塁に走るクリスさんは確信があるのか、右手で軽くガッツポーズをしている。

そのクリスさんの確信通りに、打球はセンターフェンスを超えてホームランとなった。

これで1回の表で3点のリードだ！

ランナーがいなくなった事で余裕が出来たのか、真中さんは6番バッターの哲さんを

高速スライダーで三振に抑えて1回の表を終えたのだった。



1回の裏、青道高校の先発である丹波はマウンドで右手を左胸に当てていた。

(3点のリードを貰っている…。無理に抑えに行く必要は無い。)

丹波は大きく息を吐き出すと、ロージンバッグを手に取る。

(真っ直ぐ、カーブ、フオーク、しっかりと腕を振れ！)

マウンドの横にロージンバッグを置くと、丹波はまた大きく息を吐き出す。

(カッチちゃん…。俺の憧れのヒーロー…。)

憧れのヒーローの背中が手の届く所まで来ている。

その事が丹波の心を高揚させていた。

(落ち着け、俺には葉輪の様に楽しめる度胸は無い…。)

丹波は額の汗を腕で拭って帽子を被り直す。

「だけど、俺も少しぐらいはカッコつけたい。」

そう呟くと丹波は打席に入ってくる市大三高の1番バッターを見据える。

(行くよ、カッチちゃん。俺は今日、カッチちゃんを超える！)

そう心の中で決意した丹波はクリスの出したサインに頷き、

しっかりと腕を振ってボールを投げ込むのだった。

## 第96話

青道高校と市大三高の試合の1回の裏、丹波は市大打線を三人で抑えた。

2回の表の真中はまだ制球が安定しないのか、先頭の7番バッターを四球で

出塁させてしまったが、得点を許さずに無失点で切り抜けた。

2回の裏の丹波は市大の4番バッターに長打を浴びると、続く5番バッターに

シングルヒットを打たれてノーアウト、1、3塁のピンチの場面を迎える。

だが、この試合の丹波はピンチの場面でも堂々としていた。

6番バッターに犠牲フライを打たれて1失点をしてしまったものの、

続く7番バッターをフォークでセカンドゴロゲッツーで抑えて、

2回の裏を1失点で切り抜けた。

3回の表の真中は制球が安定して、青道の2番、3番バッターを決め球の

高速スライダーで連続三振に抑えた。

だが続く4番バッターの東にソロホームランを浴びると、また制球が乱れる。

真中は5番のクリスを四球で歩かせると、市大三高ベンチはエースの真中を落ち着かせる為に

真中を左翼手の守備につかせた。

ツーアウトの場面で登板した市大三高の投手は、青道の6番バッターである結城に

右中間へのツーベースヒットを打たれた。

この結城のツーベースヒットはクリスの好走塁もありタイムリーヒットとなる。

続く7番バッターが凡打に倒れた事で3回の表は終わりとなったが、

これで5―1と青道高校が4点をリードした。

4点リードで迎えた3回の裏、丹波は市大三高の先頭打者をカーブで三振に抑える。

そして、ワンアウト、ランナー無しで打席に向かう真中は、堂々とマウンドに立つ丹波へと目を向けるのだった。



真中は打席に入る前の素振りをしながら、マウンドの丹波にチラリと目を向ける。

(変わったな、光一郎。いや、成長したのか。)

真中と丹波は同じ中学校の幼馴染みである。

(いつも俺の後ろをついてきていたお前が、今では強豪の青道高校の背番号1を

背負う様になったのか…。)

真中は打席でしつかりと足場を作ると、1つ息を吐いてからバットを構える。

マウンドの丹波はクリスのサインに頷くと、しつかりと腕を振ってボールを投げ込む。

丹波が投げ込んだのはフロントドアとなるカーブ。

ボールは真中の肩の高さからストライクゾーンへ向かって変化していく。

「ボール！」

主審の判定はボールで、カウントはワンボール、ノーストライク。(立ち上がり乱れた俺と違って、光一郎はしつかりと試合を作っている…。)

何がお前をそんなに成長させたんだ？)

クリスからの返球を受け取った丹波は、プレートを外してロージンバッグを手に取る。

(投げ急ぐ事もなく、自分で間合いを調整している…。本当にあの光一郎か?)

ロージンバグをマウンドの横に置いた丹波は、帽子の鏢に手をやってからサインを見る。

(光一郎、お前の成長は認めよう。…だが!)

サインに頷いた丹波は、しっかりと腕を振ってアウトローにフォーシームを投げ込む。

しかし…。

カキンッ!

(この試合、勝つのは俺達だ!)

真中が打った打球は、ライナーで右中間へと飛ぶツーベースヒットとなる。

セカンドベースに滑り込んだ真中は、マウンドの丹波を鋭い視線で見据える。

(光一郎、お前に甲子園はまだ早い!)

スコアリングポジションにランナーを背負った丹波は帽子の鏢に目を向けると、

マウンドで大きく息を吐き出したのだった。



3回の裏、真中のツーベースヒットがキツカケで丹波は2失点をしってしまうと、

市大三高に2点差まで追い上げられてしまう。

しかし丹波は粘り強く投げて3回の裏を切り抜けると、かつてノミの心臓だったとは

思えない大きな声を上げてベンチに戻っていった。

準決勝の投手戦と違い、打撃戦となった青道高校と市大三高の決勝戦。

両校の戦いは2点差で中盤戦へと突入するのだった。

## 第97話

青道高校と市大三高の試合は中盤となる4回に突入した。

4回の表の青道高校の攻撃は8番バッターから始まったが、市大三高の投手に

2人連続で打ち取られてしまった。

だが、青道高校はツーアウトから1番バッターの小湊がヒットで出塁すると、

続く2番バッターもヒットを打って、ツーアウト、1、3塁のチャンスを迎えた。

ここで市大三高はレフトの守備についていた、エースの真中 要をマウンドに呼び戻した。

真中はベンチの期待に応えてこのピンチの場면을三振で切り抜けた。

4回の裏、マウンドに上がった丹波は市大三高の先頭打者である

5番バッターにヒットを打たれてしまう。

ノーアウトでランナーを出した市大三高はバントでランナーをスコアリングポジションに送ってチャンスの場面を作る。

このランナーをホームベースに帰されてしまい丹波は失点をして1点差に

追いつかれてしまうが、丹波は落ち着いて1つずつアウトを重ねていき追撃を許さなかった。

1点差に追いつかれた5回の表の青道高校の攻撃。

先頭打者は4番バッターの東からだ。

東は真中からフェンス直撃となるセンターオーバーのヒットを打ったが、予め深めに

守備位置を取っていた中堅手に、打球を素早く捌かれてシングルヒットにされてしまった。

続く5番バッターのクリスは、調子の上だった真中の高速スライダーで打ち取られてしまう。

5回の表、ワンアウト、1塁で青道高校が1点リードの状況。



ここで打席に立った6番バッターの結城がホームランを打った。これでスコアは7ー4と青道高校が3点リードした。

マウンドでガツクリと項垂れた真中は、次の7番バッターを四球で歩かせてしまった。

市大三高ベンチはここでタイムを取り、真中とレフトの選手の守備位置を交換した。

青道打線に打ち崩されても真中は市大三高のエースである。

市大三高の監督は、真中にグラウンドで仲間を鼓舞し続ける事を望んだのだ。

試合が再開されると真中に代わってマウンドに上がった選手は、

青道高校の8番バッターと、続く9番バッターの丹波を打ち取って5回の裏の反撃を待つ。

5回の裏の市大三高の攻撃は1番バッターからの好打順。

だが、ここで丹波は相手打線を三者凡退に抑えてみせた。

大声で吠えながらベンチに戻る丹波は、丹波のボールを受けるクリスとハイタッチをした。

この丹波の姿に、青道メンバー以上に奮起したのは真中だった。

真中は監督に直談判すると再びマウンドに上がった。

市大三高を応援している野球部OBは不安な気持ちで一杯だったが、

真中はそんな思いを吹き飛ばす力投を見せた。

6回の表、真中は1番バッターから始まる青道高校の攻撃を三者三振で抑えたのだ。

このエースの力投に市大三高の打線が奮い立った。

6回の裏の市大三高の先頭打者である4番バッターは、丹波から10球粘って四球で出塁した。

この結果に市大三高ベンチと球場の応援している者達は一気に盛り上がる。

対してマウンドの丹波はいつも以上に冷静だった。

丹波は自分の球数が100球を超えた事を考えると、マウンドの上で深く息を吐いた。

(6回で100球、俺はこの回までだな…。)

丹波はチラリとベンチに目を向けると、肩を作り始めている3年生の姿が目に入った。

(この試合、余計なボール球は何球あった？不用意なストライクは？) 帽子の鏢に目を向けた丹波は、プレートを外してロージンバッグを手に取る。

(反省は試合が終わってからだ。残りアウト3つ、しっかりと腕を振っていくぞ！)

ロージンバッグをマウンドの横に置いた丹波はクリスのサインに頷くと、

しっかりと腕を振ってボールを投げ込んでいったのだった。



6回の裏、青道高校は1点差の7-6に追い付かれてしまったが、

7回の表に東とクリスが続けてホームランを打って3点差に突き放した。

そして、7回の裏からは継投をしていき市大三高打線を抑えていくと、

9回の裏のマウンドには伊佐敷が上がりしっかりと3人で抑えた。

試合は9-6で青道高校の勝利。

青道高校は5年ぶりの甲子園出場を決めたのだった。

## 第98話

「よっしやあああああああ！」

市大三高の最後のバッターを打ち取った純さんが、マウンドの上で吠えている。

グラウンドにいる青道の皆は、マウンドに集まって手を高々と上げて人差し指を立てている。

俺達は夏の高校野球選手権西東京地区大会を優勝したんだ！

ウオ——！

グラウンドの皆の喜びは主審の人に整列を促されるまで続いた。

東さんを含めた3年生は挨拶をしながらも全員号泣している。

あ、太田部長もつられて泣いている。

整列をして挨拶が終わると、今度は球場に応援に来てくれた人達に挨拶に向かった。

なんせ5年振りの甲子園出場とあって、青道を応援してくれていた人達の盛り上がりは

実際に勝ち上がった俺達にも負けない程なのだ。

しっかりと頭を下げると、祝福の拍手と声が雨の様に降り注いできた。

リトルやシニアの時にも経験したけど、この瞬間は何度味わっても堪らない瞬間だ。

挨拶を終えて球場を出ると、球場の外には片岡さんの教え子だった青道高校野球部OBの人達が待っていた。

OBの人達はそれぞれが片岡さんに祝福の声を送っている。

「こうして甲子園にいけるのは、俺が監督になってからの青道の基礎を

作っていつてくれたお前達のおかげだ。…ありがとう！」

片岡さんは帽子を取ってからOBの人達に頭を下げると、そう言つて涙を流した。

OBの人達も片岡さんの涙につられて泣いている。

そして誰が言ったのかわからないが、皆で片岡さんを胴上げする事

になった。

ビツクリして固まっている片岡さんを皆で取り囲む。

ふふふ、逃がしませんよ。

胴上げが避けられない事がわかると、片岡さんは照れ臭そうに微笑む。

東さんが代表して胴上げの声掛けをする。

「行くでえー！せーのー！」

イエーイ♪

何度も宙を舞う片岡さんを中心に、改めて勝利の気持ちを固めた俺達は、

意気揚々と甲子園に乗り込むのだった。



東京の地方新聞には青道高校が5年振りに甲子園出場を決めたと大きく掲載された。

だが、高校野球界では優勝候補として西の大阪桐生高校と、

北の巨摩大藤巻高校に注目が集まっていた。

そんな中で始まった夏の高校野球選手権全国大会で、青道高校のメンバーは躍動した。

1回戦、既にドラフト候補として注目されている東がホームランを2本打ったのを中心に、

青道打線は二桁得点となる11点を叩き出し、打の青道の名を甲子園に広めた。

投げては先発の丹波がクリスのリードに導かれて3失点の完投をしてみせた。

出番の無かった伊佐敷は不満気に丹波を睨んだが、憎まれ口と共に丹波とハイタッチをした。

だが、1回戦の青道メンバーの活躍を霞ませる程の出来事が2回戦で起きた。

青道高校の2回戦、先発をしたパウプロが御幸とのコンビで完全試

合を達成したのだ。

相手チームは高校生としては異質なノビをみせるパウプロのフォーシームに、

打球を前に飛ばす事が出来なかったのだ。

パウプロが打者一巡を全て三振で抑えると、球場にはざわつきが広がっていった。

相手チームがパウプロのフォーシームに食らいつく為に、バットを短く持って

タイミングを合わせようとすると、それを嘲笑うかの様に大きな変化のカーブや、

チェンジアップで打者のタイミングを外していったのだ。

日本の高校野球はレベルが高い。

そのレベルの高さは世界でもトップクラスである。

今の高校野球では150kmの真っ直ぐを投げる投手は珍しく無いのだ。

それ故に1年生ながら145kmのフォーシームを投げるパウプロは、

目の肥えた高校野球ファンにとっては『1年生にしては速いボールを投げる投手』、

程度の認識でしかなかったのだ。

だが真っ直ぐ、変化球の球質が共に一級品であり、なおかつコントロールも

いい投手となると、滅多に見れるものではない。

その滅多にが現れると人々はこう呼ぶのだ。  
怪物。

マウンドで躍動するパウプロの姿はかつて甲子園を賑わせ、プロの世界でも

色褪せる事の無い輝きを放った名投手達の姿を思い起こさせる。

甲子園球場に訪れた高校野球ファンの人々は、新たなヒーローの誕生を目撃し、

その躍動する姿に酔いしれるのだった。

## 第99話★

パウプロが完全試合を達成した翌日、とあるネット掲示板でちよつとしたお祭り騒ぎが起こっていた。



【本物?】葉輪 風路は怪物【確変?】

1:ワイは本物やと思うで。

5:150km出てへんから確変やろ。

8:葉輪って誰やの?

10:今年の夏の高校野球で完全試合とかノーノーを何回もやつてる変態高校生。

15:10<ファツ!?

21:ワイは本人のピッチング見たんやけど、あれって2段モーションやないんか?

23:今年からプロでも実質解禁されとるから問題無いんやろ。

34:誰か動画貼ってクレメンス。

39:つ『春季大会ノーノー』『夏の地区大会ノーノー』

41:39<サンガツ。

45:21の言う通りに変則モーションやなあ。

48：45<せやろ？

51：48<やけど、モーションで止まっている所は無いから2段やないね。

55：お前らw投球モーションの事ばかりじゃなくてボールの事も話せやw。

61：カットボールもツーシームも投げてないやん。こんなんバツト合わせられたら

スコーンと内野の頭を越されるやろ。

63：そのバットが当たらんのや！

66：なんでや!?

67：阪関無。

70：67<テンプレ乙。

72：バットが当たらないのはボールのキレがいいんちゃうの？

77：ほんま綺麗な真っ直ぐを投げるなあ…。ワイは好きやで。

84：今動画見たけど、ほんまに真っ直ぐやなw重力仕事しろやw。

91：150km出てない真っ直ぐになんでこんなにバットがクルクル回るんや？

95：せやからキレやろ。

97:95<キレもそうやけど、それ以上にコントロールや！動画見たらビタビタの

コントロールにビビるで。

100:インローの真っ直ぐで見逃し三振好きやわ。

102:ワイはアウトローが好みやな。

107:お前ら真っ直ぐの事ばかりいうけど、カーブもえぐいで！

112:なんやこの変態カーブ…。

118:ええ…。

126:この変態カーブをバックドアとか無理w。

133:バックドアよりフロントドアやろ。こんな左バッターはノーチャンスや！

143:チェンジアップの方がエグいってワイじゃなくちや見逃してまうで！

147:143<カーブは見逃しが多いけど、チェンジアップは空振りが多いんやね。

150:なんでこんなにチェンジアップを空振りしとるんや？

155:真っ直ぐに見えとるんやない？知らんけど。

158:真っ直ぐ見せられた後にこれは無理w。



162：ほんまにコントロールを間違えへんな。羨ましいで。

167：イツチの言う通りに怪物でええんやないか？

170：いや、150km出てないから確変やろ。

174：170▽球速信者乙w。

177：青道が勝ち上がれば4回戦で優勝候補の大阪桐生とやるんやから、その結果次第やろ。

181：4回戦で葉輪が投げるとは限らんやん。背番号1は他の奴やで。

183：葉輪はまだ1年生やからプレッシャーを与えない為に背番号1を

背負わせてへんのやない？実力で言えば間違いなくエースやで。

189：183▽実力wただの確変やないかw。

192：189▽嫉妬乙。

195：183▽葉輪の課題はマウンド度胸なんか？

202：195▽葉輪はリトル時代から全国を経験しとるから問題無いと思うで。

211：202▽詳しいなw。

2 1 6 : 2 1 1 < 東京民やからリトル時代から追っかけとるんや。

2 2 3 : 2 1 6 < リトル時代の葉輪はどうやったんや？

2 2 8 : 2 2 3 < その頃からノーノーとかパーフェクトを普通にやっつたで。

2 3 4 : 2 2 8 < ひえゝw。

2 4 5 : 2 2 8 の言う通りならイチの言う通りに葉輪はほんまの怪物やな。

2 5 4 : 2 4 5 < せやけど今の時代にカットもツーシームも投げへん

オールドスタイルはキツイやろ。

2 5 7 : 2 5 4 < ワイはこのままオールドスタイルを貫いて欲しいなあ。

2 6 7 : どつちにしても確変かどうかは次の葉輪のピッチング次第やな。

2 7 6 : その前に青道は3回戦を勝てるんか？



甲子園の舞台上で完全試合を達成したパワプロの名は、全国の高校野球ファンの

知るところとなった。

それに伴い青道高校は、多くの高校野球ファンやライバル校から注目を浴びる。

その注目により発生する目に見えないプレッシャーが甲子園の魔物へと姿を変えて、

全国の舞台の経験の無い青道メンバーに襲い掛かっていくのだった。

## 第100話

夏の高校野球選手権全国大会の3回戦。

試合は進んで3回の表の青道高校の守備を迎えていた。

だが、守備につく青道メンバーの表情は固い。

その理由はスコアボードを見ればハッキリするだろう。

スコアボードにある青道のエラーの所には、まだ3回の表でありながら

4の数字が記録されているのだ。

キンツ!

丹波が投げたボールを相手チームの打者が打ち返す。

打球は遊撃手の方向に飛んでいく。

だが…。

『あーっとー青道高校の先発、丹波選手が打ち取ったと思われた打球が

センター前に抜けて行きました!』

『3回になっても青道のメンバーは動きが固いですねえ…。一歩目が遅れてますよ。』

実況と解説が話す通りに、青道高校のメンバーは緊張で動きが固くなっていた。

『青道は2回にも続いてノーアウトでランナーを出してしまいましたね、解説の——さん。』

『ええ、そんな状況の中でも先発の丹波くんは腐らずによく投げていると思います。』

解説の言う通りに、青道メンバーの多くが動けない中で頑張っているのが丹波である。

元々丹波はノミの心臓と言われる程に緊張に弱い男だった。

だがそうであるが故に、他の誰よりも多く緊張と向き合う機会があったのだ。

これまでの丹波は緊張でダメになる自分を克服しようと誰よりも努力をしてきた。

その努力の中で、丹波は仲間にも何度も救われて来た。

丹波は今こそ自分が踏ん張る時だと、マウンドに立ち続けているのだ。

『ノーアウト、ランナー1塁の状況！——高校のバッターはバントの構えを見せています。』

『1-4で3点をリードしていますが、——高校は打の青道と言われる青道打線の爆発力を

警戒して、動きの固い今の内に1点でも多くとっておこうとしているのでしよう。』

解説の考えた通りなのか、相手チームはランナーを進めようとバントをした。

だが…。

『サードの東選手が猛チャージ！素早く2塁に送球！判定は…アウト！アウトです！』

『ワンアウト、ランナー2塁がワンアウト、ランナー1塁になりました。』

これは丹波くんを救うファインプレーですね。』

青道メンバーの多くが緊張で動きが固い中、丹波以外にも動いている者がいる。

その1人が東である。

東はドラフト候補として以前から注目を浴びていた事もあり、注目を浴びるのは慣れていた。

そしてもう1人、いつも通りに動いている者がいる。

『解説の——さん。東選手のプレーは思いきりが良かったですね。』

『東くんのチャージも見事でしたが、状況をよく見ていたキャッチャーのクリスくんの

コーチングも見事でしたね。』

もう1人の動いている者とはクリスの事だ。

クリスは元プロ野球選手のアニマルが父親である事もあり、幼少時から注目を浴びて来た。

さらに、パワプロと共に何度も全国の舞台を経験しているクリス

は、

大舞台でも物怖じしないパワプロに負けないように努力を重ねてここまでやって来たのだ。

『さあ、青道高校のメンバーから声が出てきましたよ！』

『今のワンプレーが空気を変えましたね。東くんとクリスくんのファインプレーです。』

このワンプレーで緊張を乗り越えた青道メンバーは、激戦区である西東京地区を

勝ち抜いた力を発揮していった。

その後、5回の裏に逆転をした青道高校は10ー7で3回戦を勝ち上がった。

そして迎えた4回戦、多くの高校野球ファンが予想した通りに大坂桐生高校と戦う事になった。

多くの高校野球ファンやライバル校の注目が集まる中で、パワプロは笑顔で

甲子園のマウンドに上がるのだった。

## 第101話

夏の高校野球選手権全国大会の第4回戦。

青道高校と大坂桐生高校の試合は8回の裏まで進んでいた。

「ようやくたで、館。おかげでノーノーは阻止できたわ。」

大坂桐生の監督の松本は、ベンチで大きく息を吐いた。

「若い子はふとしたキツカケで急成長したりするもんやが、あれはアカンやろ。」

そう言っつて松本はマウンドのパワプロに目を向ける。

「なんやねんあの真っ直ぐは、若い時に見たあの怪物を思い出したで。」

そう言いながら松本は帽子を取って頭をガシガシと搔く。

そして帽子を被り直した松本はスコアボードへと目を向けた。

「0-5…、並みの相手なら十分に逆転の圏内なんやけど、葉輪君相手やとキツツイなあ。」

ボヤク様に呟くと、松本は1塁の塁上にいる館に目を向ける。

「しかし、館もよう打ったで。まあ、まだ1年の御幸君が色気付いてリードが

単調になつとつたのもあるやろうが、それでも館の勝ちや。」

そこまで言くと、松本は自身の頬を平手でピシッと叩く。

「何を言うとんのや。監督の儂が試合に負けとるのに、笑ってる場合やないで。」

松本は気を引き締めると、マウンドのパワプロに目を向ける。

「試合終盤まで来てノーノーが崩れてもなんの影響も無さそうやな。」

ホンマに可愛気が無い。」

松本は恰幅の良い顎を擦りながら苦笑いをする。

「今回は素直に脱帽やな。せやけど、次はこうはいかへんで。」



夏の高校野球選手権全国大会の4回戦。

青道高校と大坂桐生高校の試合は、青道高校が5―0で勝ち上がった。

先発したパウプロは被安打1、奪三振16、球数109の完封だった。

続く5回戦、丹波が体調を崩した事で先発のマウンドには伊佐敷が上がった。

甲子園での先発のマウンドに、伊佐敷は緊張を見せずに笑みを見せる。

伊佐敷はクリスのリードに導かれて、相手打線を真つ直ぐとツーシームの

コンビネーションで打ち取っていくピッチングをしていく。

そして、時折投げるチェンジアップが相手打線のバットに空を切らせていった。

だが、高校野球の公式戦で初めて上がった先発のマウンドに舞い上がった伊佐敷は、

ペース配分が出来ずに5回で完全に息が切れてしまっていた。

4回まで軽快に抑えてきたピッチングが嘘のように、伊佐敷は5回だけで

5失点と完全に打ち崩されてしまった。

5回までに打線の援護で7点を貰っていた事もあり、5回をなんとか投げきった伊佐敷だが、

交代を告げられた後、トイレで1人涙を流した。

その後の試合は3年生の投手が継投をしていき、11―8で青道高校が逃げ切った。

そして迎えた夏の高校野球選手権全国大会の決勝戦。

相手は優勝候補である北の強豪、巨摩大藤巻高校だ。

この試合、先発のマウンドに上がったのはパウプロだ。

パウプロは甲子園の舞台では初めてバッテリーを組んだクリスのリードに導かれて、

巨摩大藤巻高校の打線を圧倒していく。

そして、夏の高校野球選手権全国大会の決勝戦の大舞台で、



パワプロはノーヒットノーランを達成したのだった。

## 第102話

甲子園で行われた夏の高校野球選手権全国大会決勝戦に勝利した事で、

青道高校は全国制覇を成し遂げた。

表彰式も終わって東京に帰ってくると、青道高校全体でお祝いムードになっていた。

チームの皆を率いた片岡さんを始めとして、大会のメンバーに選ばれた全員が

全校生徒の前で理事長等に祝われた。

そんな感じで皆に祝われた後、3年生の先輩方が引退をしていた。

大学に進学を目指す先輩もいれば、野球部のある企業に就職を希望する先輩がいたり様々だ。

そんな中で東さんはプロ志望届けを出した。

だから東さんは青道高校野球部を引退しながらも、俺達と一緒にグラウンドで汗を流しながら

秋のドラフト会議を待っている。

3年生の先輩方が引退した後、俺と一也は青道高校の応接室である雑誌の取材を受けていた。

月刊『野球王国』

それが取材を受けている雑誌の名前だ。

記者の人はシニア時代から付き合いのある峰 富士夫さんと、大和田 秋子ちゃんだ。

「久しぶりだね、葉輪くん、御幸くん。」

「峰さん、クリスさんとか東さんの取材はいいんですか？」

「もちろんその2人も取材をさせてもらいたいけど、上司に葉輪くんと御幸くんの2人を先にとって言われてるんだ。」

俺の言葉に峰さんが苦笑いをしながら応える。

秋子ちゃんはニコニコとした笑顔で一也を見ているな。

コンコンコンと応接室の扉がノックされる。

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

そう言つて応接室に礼ちゃんが入つてきた。

礼ちゃんは青道高校の理事長の娘であり、さらに野球部の副部長でもあるので、

俺と一也の取材の立会人として今回は参加するとの事だ。

「高島先生も来られたので取材を始めさせていただきます。まずは夏の大会の

全国大会制覇おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

秋子ちゃんが手帳とペンを持ちながらそう言つてきたので、俺と一也はお礼の言葉を返す。

「甲子園での第2回戦で完全試合を達成しましたが…。」

そんな感じで取材を受けた後日、俺は約束通りに貴子ちゃんとデートをしたのだった。



「御飯美味しかったね、フーくん。」

「うん。美味しかったね、貴子ちゃん。」

夏の大会が終わつて秋の大会に向けてチームが動き始めた頃、私とフーくんはデートをした。

「皆は残つて練習をしているのにごめんね、フーくん。」

「気にしないでいいよ、貴子ちゃん。それに、俺は貴子ちゃんとのデートは大歓迎だから。」

そう言つて笑顔になるフーくんの姿に、私の顔が熱くなる。

胸のドキドキが止まらない。

ああ…やっぱりフーくんはカッコいいなあ…。

甲子園で優勝した事もあつて、青道高校の女子の間でもフーくんは大人気になっている。

まだ誰もフーくんに直接告白した事は無いけれど、それでもフーくんは

手紙を一杯貰う様になった。

その事を考えると、胸がモヤモヤとする。

「どうしたの、貴子ちゃん？」

「何でもないよ、フーくん。」

私の事を気にしてくれるフーくんの気持ちが嬉しい。

その事だけで私の胸のモヤモヤは直ぐにドキドキへと変わる。

我ながら単純だと思うけど、私はそれだけフーくんの事が好きなんだから仕方ないわよね？

フーくと手を繋いで夏の大会の事とか、今日のデートの事を話していると、

あつという間に家まで帰りついてしまった。

「今日も楽しかったよ、貴子ちゃん。」

そう言うフーくんの笑顔に、私はお母さん達に言われていた事を実行する為の覚悟を決めた。

「フーくん、約束を果たしてくれてありがとう。」

「今日のデートの事？」

「違うわ、私を甲子園に連れていってくれた事だよ。」

私がそう言うのと、フーくんは苦笑いをした。

「背番号1は丹波さんだったし、皆に打って貰えたから勝ってたんだけどね。」

「それでもフーくんが一番カッコ良かったよ。」

私がそう言うのと、フーくんは照れ臭そうに笑った。

うん、覚悟を決める必要なんてなかったわ。

だって、今の私は心からそうしたいと思っているんだから…。

「フーくん、約束を果たしてくれたご褒美をあげるね。」

「ご褒美？」

「うん、今用意するから目を瞑ってくれる？」

「おお!?!何だろう?楽しみだな!」

フーくんはニコニコとした笑顔で目を瞑った。

音が聞こえる程に胸がドキドキしてる。

もし他の女子が知ったらどう思うかな？

羨ましがるかしら？

それでも、誰にも譲るつもりはないわ。

だって、私はフーくんが好きなんだから。

幼稚園の頃からずっと好きだったんだから。

私はフーくんの正面に回って一歩近づく。

フーくん、大きくなったなあ…。

180cmを超える長身のフーくんの顔を見上げると、私の顔がまた熱くなる。

私は両手をフーくんの頬に添えて軽く引き寄せる。

すると、少し前屈みになったフーくんは驚いた様に目を開けた。

フーくんの目と私の目が合う。

私はフーくんに微笑むと、つま先立ちをして唇を重ねたのだった。

## 第103話

「ご褒美として貴子ちゃんにキスをされた。

…ええ？

「フーくん、また明日ね。」

そう言って貴子ちゃんは真っ赤な顔で家に入ってしまった。

えっと、その…ええ!?

ど、ど、ど…どういうことだっただけよ!?

た、貴子ちゃんとデートをして、約束を果たしたからご褒美をくれるって言って…。

そ、そして、キスをされて…。

ウオ——!!

自宅前で頭を抱えて悶えてしまう。

えっと、貴子ちゃんとは幼馴染みであって…こ、恋人じゃないよな？

え？キスしちゃったよ？いいの？

えっと、今までも手を繋いだり、腕を組んだりしてきたけど…それは幼稚園の頃から

やって来たことだし…俺と貴子ちゃんにとっては自然な事だったし…。

ピロン♪

俺は混乱したままだったが、突如脳内に響いた機械音に反射的にステータス画面を開いた。

※おめでとうございます。大人の階段を一步登りました。

※お祝いとしてボーナスポイントをお贈り致します。

なんでやねん!

女神様が覗き見でもしとんのか!?

心の中でエセ関西弁でツツコミを入れてしまう。

だけどそのおかげで冷静になれた俺は、ため息を吐きながら頭をガ

シガシと搔く。

「明日、どんな顔をして貴子ちゃんと会えばいいんだ？」

考えが纏まらないままだった、とりあえず家に入る事にした。

そしてご飯の時間になると、ニコニコとした笑顔の母さんが赤飯を用意していたのだった。



翌日、いつも通りに貴子ちゃんと朝練に向かう為に顔を合わせる  
と、

お互いに中々目を合わせる事が出来ずに顔が赤いままだった。

俺は甲子園の決勝のマウンド以上に緊張している。

それでも、俺は勇気を振り絞って貴子ちゃんに昨日の事を聞いてみ  
た。

「貴子ちゃん、昨日の事なんだけど…。」

「えつとね、フーくん。昨日の事はね、その…。」

貴子ちゃんが言うには、母さん達に煽られた事が理由でもあるんだ  
けど、

幼稚園の頃から俺の事が好きだったからキスをしたらしい。

「フーくん、いきなりキスをしてゴメンね。」

「確かにいきなりで凄い混乱したけど、それ以上に凄い嬉しかったよ、  
貴子ちゃん。」

「本当？」

「うん、本当だよ。」

俺がそう言うと、貴子ちゃんは花開いた様な笑顔になった。

可愛い。

今までも可愛いと思ってたけど、今日の貴子ちゃんは今まで以上に  
可愛いと思う。

「それでね、フーくん。」

「えつと、貴子ちゃん。」

俺と貴子ちゃんの言葉が重なる。

「フーくん、先にいいよ。」

「うん、ありがとう。」

貴子ちゃんとは幼稚園からの付き合いだから、何を言おうとしていたのか何となくわかる。

「だけど、それを言うのは俺からだ。」

「なんせ13年も貴子ちゃんを待たせたんだからな！」

「貴子ちゃん、13年前の夏の大会のテレビ中継を覚えてる？」

「片岡監督が甲子園の決勝の舞台で投げたやつだよ？もちろん覚えてるよ。」

「私達が野球を好きになったキツカケだからね。」

「そう言うと、貴子ちゃんはニッコリと微笑む。」

「あの時にフーくんは野球選手になるって言ったよね。」

「うん、今もその気持ちは変わってないよ。」

「ふふ、マウンドのフーくんは誰よりも楽しそうに笑ってるもんね。」

貴子ちゃんの言う通りに、俺は本気で野球をやっているし、本気で野球を楽しんでいる。

「だからこそ俺は最高の舞台で野球をしたい。」

「貴子ちゃん。俺、青道を卒業したらメジャーに行くよ。」

「うん、フーくんならそう言うと思ってた。」

「流石は貴子ちゃん！」

「俺の自慢の幼馴染みだぜ！」

「貴子ちゃん、俺と恋人になってください。そして、一緒にアメリカに行こう。」

俺がそう言うと、貴子ちゃんは目に涙を浮かべた。

それでも貴子ちゃんは嬉しそうに微笑んでいる。

「そして…。」

「うん、喜んで。」

「そうやって貴子ちゃんは俺に抱きつくつと、俺の胸に顔を埋めた。」

俺が貴子ちゃんを軽く抱き締め返すと、貴子ちゃんは顔を上げてそっと目を閉じる。

そして昨日とは違い、今度は俺から貴子ちゃんに唇を重ねたのだっ



た。  
ピロン♪  
ほっとけや！

## 第104話☆

貴子ちゃんと恋人になった後、俺達は手を繋いで走って青道高校に向かった。

まあ、朝練の前だった事を忘れて告白をしたから何だけどな！

2人で青道高校に辿り着くと、マスコミ対応等でいつもより早く来ていた礼ちゃんと会った。

礼ちゃんは貴子ちゃんの顔を見ると、何かを察した様にニツコリと笑った。

流石は礼ちゃん。出来る女である。

その後の貴子ちゃんは顔を赤くしながらマネージャー仲間に行き連れていった。

礼ちゃんも早く仕事を終わらせて合流する気満々の様である。

うん、程々にしてあげてね。

俺にとってはそんな感じで秋の大会に向けて新チームのレギュラー争いが始まった頃、

青道野球部の練習を見学に来るおっちゃんの姿を見かける様になった。

「俺の事は気にせずに練習を続けてくれ。」

おっちゃんの事が気になったので礼ちゃんに聞いてみたら、あのおっちゃんは

落合 博光という人との事だ。

神奈川の強豪校である紅海大相良でコーチを務めていたらしい。

礼ちゃんと言うには、青道が甲子園で優勝した事で来年の野球部への入部希望者が

増える事を想定してコーチの依頼を出したんだってさ。

青道野球部は3軍まである程に部員数が多い。

その為、片岡さん1人では部員全員に目を配る事は難しいのが正直なところだ。

まあ、その対処として片岡さんに相談する為のノートがあったりするんだけどね。

そういった訳で俺は落合さんが見学している中で、ブルペンで投げ込みをしているのだ。

「クリスさん！スライダー行きます！」

俺の言葉に返事をする様に、クリスさんが拳でミットを鳴らしてから構える。

構えられたミットを見るだけで笑顔になってしまう。

うん、やっぱり投げるのって楽しいな。

そんな事を考えながらクリスさんのミットを目掛けてボールを投げ込む。

パァン！

クリスさんのミットが鳴らす音で、俺はさらに笑顔になってしまう。

（うん、成長させたコントロールと変化量にも慣れてきたな。）

俺はそう考えながらクリスさんの返球を受けるとステータス画面を確認した。

基礎能力

球速：147 km（※155 km）

制球：S

スタミナ：C

変化球：カーブ7（※7）

変化球2：チェンジアップ6（※7）

変化球3：高速スライダー3（※7）

基礎能力2

弾道：3

ミット：E

パワー：D

走力：D

肩力：B

守備：D

捕球：C

特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『キレ◎』

『牽制○』

『バント○』

球速を2km、Aに下がった制球をSに、そしてカーブとスライダーを1ランク成長させた。

夏の大会で得たり、先日のお祝いで貰ったりしたおかげでポイントは大量にあるんだけど、

秋の大会が近いのでこのぐらいの成長に抑えておいた。

成長させた感覚に慣れるのに時間が掛かるんだよね。

手の中でボールを転がしながらステータス画面の確認を終えると、投げ込みを再開する。

「クリスさん！カーブ行きますー！」

クリスさんは返事の代わりにまたミットを鳴らす。

俺は落合さんが見学をしている事を忘れて投げ込みを楽しんでいくのだった。



（葉輪はモノが違うな。正直に言って手を加える必要が無い。強いてあげれば

クイックぐらいか…。これでまだ1年なのだから先が楽しみな選手だ。）

落合はブルペンで各投手の投げ込みを見学しながらパウプロをそう評する。

(片岡さんも葉輪の扱いには悩んだろうな。まあ、指導者としては嬉しい悩みだがな。)

落合は髭を扱きながら他の投手へと目を移す。

(事前の情報では丹波はノミの心臓って聞いていたが、堂々とピッチングを

してるじゃないか。)

落合は丹波のピッチングを見ながら片目を瞑ると、丹波を分析していく。

(丹波の課題は真っ直ぐの質とコントロールの向上だな。あとはもう1種類変化球が

欲しいところだが、それはオフシーズンにじっくりと取り組んでいけばいい。)

落合は最後に伊佐敷へと目を向ける。

(伊佐敷はノーコンだったって話だが、しっかりと腕を振って低めにコントロール出来てるじゃないか。)

落合は感心した様に笑みを浮かべる。

(だが甲子園での事を考えると、細かい力の調整は苦手といったところか？俺が見た感じでは

伊佐敷の適正は中継ぎか抑えなんだが、本人は先発を諦めていない様だな。)

落合は伊佐敷のピッチングを見ながら腕を組む。

(たしか、以前に外野へのコンバートを試していたって話があったな？打球に対する勘と

バッティング次第だが、俺なら外野と投手の併用を考えるがね。)

そこまで考えた落合は何かに気付いた様にハツとすると苦笑いを

した。

(やれやれ、見学だけのつもりだったが、どうやら俺はコーチを引き受ける気になっているらしい。)

頬を軽く搔いた落合は1軍のブルペンに背を向けた。

「青道の課題は投手不足。なら、2軍と3軍も見えて見えそうな奴を探すとしようかな。」

そう言って落合は1軍のブルペンを後にすると、2軍で見付けた自分好みの

選手に笑みを浮かべたのだった。

## 第105話★

時間は少し遡って夏の高校野球選手権全国大会の決勝戦終了後、とあるネット掲示板では大騒ぎになっていた。



【本物?】葉輪 風路は怪物3 【確変?】

211：キタ——!!

222：ノーノー! 甲子園の決勝の舞台でノーノー!

227：スゲ——!

233：なんやこいつ…

238：ええ…

242：これは怪物ですわ

245：ノーノーも凄いけど夏の大会で初めてのパーフェクトもやってるんだよなあ…

261：確変w誰や確変言った奴は!?

274：アンチ息してる? w

277：ワイは初めから本物やって信じてたで!

280：ワイもや!

2 8 3 : ワイも!

2 8 9 : 手の平クルックルやな! w

2 9 3 : やめて! みんなの手首のライフは0よ! w

3 1 5 : 【悲報】 甲子園に怪物現れる

3 2 6 : ほんまに凄かったな

3 3 4 : カーブとチェンジアップだけでこんなに抑えられるもんなんか?

3 3 7 : 実際に抑えとるやんか

3 5 1 : カーブでバッターの目線を変えて、チェンジアップでタイミングを外せるんやない?

3 6 2 : カーブもチェンジアップもえぐいけど、あの真っ直ぐあつてのものやろ

4 1 3 : ところで葉輪の持ち球ってカーブとチェンジアップだけなんか?

4 1 7 : 4 1 3 < 他に投げてないやん

4 2 5 : 4 1 7 < 決勝戦で1球だけ投げとるで

4 3 2 : 4 2 5 < まじで?



4 3 6 : 4 2 5 < 動画ハラデー

4 4 1 : 4 3 6 < ちよつと待つてや…ほれ! つ【なんやこれ?】

4 4 7 : 4 4 1 < 動画のタイトルwww

4 6 3 : 4 4 7 < いや、ほんまになんやこれやで…

4 7 6 : 4 6 3 < そんなことあるわけwww…なんやこれ?

4 8 8 : 誰か変化球の握りわかんのおらんのか?

4 9 4 : 握りはツーシームやね

5 1 3 : 4 9 4 < でもツーシームとは逆方向の変化やで?

5 1 5 : たぶんこれスライダーやで

5 2 0 : 5 1 5 < k w s k

5 2 3 : ツーシームの握りで投げるスライダーがあるんよ

5 2 9 : 5 2 3 < へゝ

5 3 3 : 5 2 3 < プロ野球で活躍した伝説のガラスのエアースも同じ握りで

スライダーを投げとつたな

5 4 2 : 5 3 3 < せやで

5 4 8 : ワイ草野球でピッチャーやつとんのやけど同じ握りで投げ

ても

ツーシームにしかならんのやが？

555・548∨ 大学野球でピッチャーやってる後輩も同じ事を言う  
うとったわw

563・実際のところツーシームの握りでスライダーを投げられるん  
か？

566・563∨ 葉輪は投げれてるやんw

571・563∨ プロでも何人かはその握りでスライダーを投げて  
たはずやで

577・571∨ つまり葉輪はプロクラスの可能性が微レ存？

580・577∨ プロクラスww無いわww

584・580∨ 嫉妬乙w

590・なんでみんなスライダーに騒いでるんや？カーブと比べた  
ら全然曲がってないやん

597・590∨ ええ…

603・590∨ 空振りした後のバッターの反応を見たらわかるで

612・603∨ びっくりしてキャッチャーガン見してるww

615・612∨ ワイも真っ直ぐ待っててフォークを空振った時は  
同じ反応するで

624：615〈なんでこんな反応するんや？

631：624〈バット振る時には真っ直ぐに見えるんや！ほんまにびっくりするで！

633：631〈ワイもフォークで同じ経験あるわw

639：633〈ワイもやw

652：639〈最近流行ってるカットやツーシームよりもやっかないなんか？

657：652〈個人的な感想やけどカットやツーシームはやっかないやなくてややこしいやね

663：657〈ん？どう違うんや？

671：663〈ムービング系は真っ直ぐと思ってバット振ると詰まらされるんよ。

せやけどフォークとかチェンジアップは空振りさせられそうになるんや

678：671〈へ

680：野球未経験者のワイ低見の見物

703：ところで秋の大会の青道はどうなんや？

710：青道は慢性的な投手不足やから厳しいんやない？

7 1 6 : 7 1 0 < 葉輪が全試合先発完封すれば解決

7 2 2 : 7 1 6 < 甲子園優勝投手を潰す気がw

7 2 9 : 夏の大会では背番号1は別の奴やったやろ? あいつはどう  
なんや?

7 3 3 : 7 2 9 < 丹波って選手やね

7 3 7 : 7 3 3 < 詳しいなw

7 4 0 : 7 3 7 < 西東京地区予選から青道の試合を追っかけとるか  
らな

7 4 6 : ワイは葉輪よりも丹波って奴の方が好みやな。魂で投げ  
るって感じがするんや

7 5 1 : 7 4 6 < 葉輪はマウンドで笑つとるからなw 真面目にやれ  
やw

7 5 3 : 7 5 1 < せやろか? 楽しそうに野球をしてるのがわかって  
いいやん

7 5 7 : 7 5 3 < 勝負の場でなに笑ってんねん

7 6 1 : 7 5 7 < ワイは素直に羨ましいと思うで。ワイが現役の頃  
にグラウンドで笑つとつたら

監督にしこたま怒られたからな

7 6 6 : 7 6 1 < ワイも同じ経験あるわw 初ヒット打って喜んでた  
ら

なに笑ってんねんって怒られたわw

771:766<そうそうwその体育会系の空気があわんくて部活やめてもうたんやw

今は草野球で気の合う奴等と楽しんで野球しとるんやけどね

777:771<草野球www負け犬乙www

781:777<草野球なめんな!甲子園目指せる大会があるんやで!

785:781<え?

787:781<え?

791:781<そこもつとkws k

794:791<ワイが今やつとるのは軟式の草野球なんやけど、調べたら甲子園で

試合をやる大会があったんや!

800:794<:ファツ!?

803:794<えつと、つまり、どういうことだつてばよ!?

806:803<オッサンになつても甲子園を目指せるつてことや!

807:ちよつとグローブ磨いてくる

809：ちよつとバット振ってくる

812：ワイ10年野球やってないんやけど…それでもまた野球を始めてもええんやろか？

817：812◇大歓迎やで！一緒に軟式野球を盛り上げようや！



パワプロがマウンドで楽しむ姿がキツカケとなり、多くの野球人達が野球熱を再燃させていく。

日本に多くのプロスポーツが出来た事で野球人口は減りつつあったが、

かつての様に河川敷で野球をする人々の姿が少しずつ増えていくのだった。

## 第106話

秋の高校野球選抜東京地区大会に向けてのレギュラー争いが始まった。

3年生が引退した事で多くのポジションのレギュラーの座が空いたので、

青道高校野球部の皆の目はギラギラとしている。

先ずは休日を丸1日使って部員全員の体力測定が行われた。

春にも一度行われているのだが、部員達の成長を改めて確認するのだ。

元2軍、3軍の者達にとっては片岡さんに直接アピール出来る機会でもあるので

非常に張りきっている。

体力測定は順調に進んで暫定的な所属が決まると、シートバッティングや紅白戦が行われた。

あ、ちなみに俺と丹波さん、そして純さんは1軍が確定しているのだ

紅白戦には出場せずに手伝いをする事になっている。

他の夏の大会に出た2年生と一也はシートバッティングや紅白戦でレギュラー争いをする様だ。

シートバッティングや紅白戦で結果を出していったのは、やはり2年生が多かった。

1年生も青道に来てからしつかりと身体作りをしてきたのだが、ほとんどの1年生は2年生との差を覆す事が出来なかったのだ。

そんな中でも今回1軍に選ばれた1年生が数人いた。

ノリ、倉持、前園、白洲、そして一也の5人だ。

この5人と俺を合わせた6人の1年生が、秋の大会の1軍20人に入る事になる。

秋の大会が始まるまで後1ヶ月程だ。

今から楽しみだぜ！



1軍メンバーが決まった翌日、以前に練習を見学に来ていたおつちゃん：落合さんがまた来た。

礼ちゃんの話では落合さんとの正式な契約は秋の大会が終わってからだそうだ。

だけど落合さんは自発的にコーチに来てくれているらしい。

そんな落合さんは投手陣を中心にコーチをしてくれるそうだ。

落合さんは丹波さん、純さん、そしてノリと話をしていく。

それぞれの課題を明確にしていく為だそうだ。

ところで…。

「落合さん、俺は？」

「葉輪には特に言うことは無い。そもそも、お前のボールをキャッチャーが

捕れなければ話にならないだろう。だから、暇だったら御幸やクリスにスライダーの

キャッチングを練習させてやれ。」

そういうわけで俺は一也を相手にスライダーを投げ込む事になった。

「一也、行くぞ！」

「おう！」

一也の返事を受けて俺はスライダーを投げ込む。

ボスツ！

一也はスライダーをあまり後ろに逸らさない様になったが、

その表情は眉を寄せて納得がいつていない様だ。

「御幸、手だけで捕りにいくな。しっかりとコースに身体を寄せていけ。

手だけで行くとワンバンした時に後ろに逸らすぞ。」

「はい！」

一也のキャッチングを横で見学しているクリスさんがアドバイスを送る。



一也が数球スライダーを受けた後、クリスさんと交代する。

「右打者のインコースに左投げのピッチャーのスライダーを要求する時、

俺はサインを出したら直ぐに左足を横に出す。」

「左足ですか？」

「ああ、ピッチャーが投球モーションに入ると同時に身体を寄せるためだ。」

クリスさんのアドバイスを一也は軽く身体を動かして確認している。

「それと、スライダーを要求した時には左脇を閉める事だな。」

「左脇をですか？」

「御幸、意識しているかはわからないが、お前はミットを横の動きで使っているだろうか？」

クリスさんの言葉を受けて一也は少し身体を動かすと、納得した様に頷く。

「ミットを横に使っている時、左脇が開いていないか？」

「はい、開いてますね。」

「左脇が開いていると、ワンバンに対応する為にミットを上に向けようとしても

一瞬遅れてしまうんだ。だが、左脇を閉じておけば対応しやすくなる。」

一也はクリスさんのアドバイスを確認する様にミットを動かすと目を輝かせた。

「いいですね、これ。」

「球界の頭脳と言われた名捕手の動きだそうだ。俺も夏の大会前はこのアドバイスを

親父からもらったんだ。」

「流石は元プロ。技術や知識の引き出しが違いますね。」

へへ、アニマルさんはそんな事を言ってたんだ。

「クリスさん、よかったんですか？俺にこれを教えて。」

「これも親父が言っていたんだが、技術や知識を誰かに教えるのは自

身の感覚を

明確に出来て、スランプやケガ等で感覚を忘れた時に新しく感覚を作り直すのに

役立つそうだな。まあ、わかりやすく言えば自分の成長に繋がるという事だな。」

クリスさん自身一度感覚を失っているからなのか、その言葉には実感が込められていた。

「御幸、そう言うわけだから遠慮せずに盗め。」

「…負けませんよ、クリスさん。」

そう言つて一也は挑戦的な笑みを浮かべた。

その後、投げ込みを再開すると一也は俺のスライダーをいい音をさせて

キャッチングする事が出来る様になった。

そして時が経ち、いよいよ秋の高校野球選抜東京地区大会が始まるのだった。

## 第107話

片岡さんから秋の高校野球選抜東京地区大会のメンバーが発表された。

「背番号1、葉輪！」

「はー！」

俺は大きな声で返事をして片岡さんから背番号を受け取る。

その後も片岡さんからメンバーの発表が続いていった。

正捕手にクリスさん。

1 塁手に哲さん。

2 塁手に亮さん。

遊撃手に俺と同じ1年生の倉持。

3 塁手に2年生の増子さん。

右翼手に2年生の門田さん。

中堅手に1年生の白州。

左翼手に2年生の坂井さん。

これが秋の大会の基本的な野手のスターティングメンバーだ。

他の1軍メンバーも片岡さんから発表されていく。

投手は第2先発に丹波さん、中継ぎにノリ、抑えに純さんだ。

控え捕手には一也が選ばれた。

他のメンバーは1塁手控えに同じ1年生の前園が選ばれた以外は、顔と名前が一致しないので割愛する。

以上のメンバーで秋の大会を戦っていく事になったぜ！

「夏の大会に優勝した事で多くのチームからマークされているだろう。だが、お前達も」

引退した3年に負けないだけの練習をしてきた筈だ！全力で勝ちにいくぞ！」

「はー！」

片岡さんの激に大声で返事をした俺達は、新しくキャプテンに任命された

哲さんを中心に円陣を組むと、青道高校野球部伝統の掛け声をして

いく。

そして…。

「戦う準備は出来ているか!？」

「「オオ——!!」」

青道の皆の心が1つになり秋の大会を戦う準備が整った。

よっしゃ!

やってやるぜ!



秋の大会で青道高校が勝ち上がっていく為の1つの懸念が投手不足だ。

青道は4人の投手で秋の大会を戦っていかなくてはならない。

そこで1人1人の投手の負担を軽くする為に継投を前提に戦っていく事になった。

俺か丹波さんが6回、もしくは7回を投げた後にノリが中継ぎとして投げて、

最後に純さんが抑えるというのが今大会の青道の投手の基本起用だ。

延長のタイブレークの際には先発しなかった時の俺か丹波さんが投げる予定である。

1回戦はシードだったので青道の試合は無し。

これは投手人数が少ない青道には好材料だとクリスさんが言っていた。

俺達は2回戦で戦う事になるだろう相手の試合をスタンドで見学している。

「どうやら財前は間に合った様だな。」

俺の左隣で試合を見学しているクリスさんがそう言う。

俺達が見学している試合、黒土館高校の先発のマウンドに立っているのは財前さんだ。

「藤原先輩、財前さんの球数は?」

「5回で37球よ、御幸くん。」

クリスさんの左隣に座る一也が、俺の右隣に座る貴子ちゃんにそう聞いている。

「少ないな。」

「はい、まさに打たせて取るピッチングの見本ですね。」

クリスさんと一也が財前さんのピッチングをそう評価する。

「使っている球種はツーシームにカットボール、そしてスライダーといった所か。」

「クリスさん、財前さんはシニア時代も今みたいなピッチングだったんですか?」

俺の疑問の声にクリスさんが首を横に振る。

「いや、シニア時代の財前はフォーシームとスライダーでカウントを整えて、

スプリットで三振を奪うピッチングスタイルだった。」

クリスさんの答えに俺と一也は、5回の表を無失点に抑えてベンチに笑顔で戻る

財前さんに目を向ける。

貴子ちゃんはスコアブックを書きながらクリスさんの言葉をメモしていつている。

貴子ちゃん、流石だぜ!

「クリスさん、財前さんがピッチングスタイルを変えたのはケガの影響ですかね?」

「それもあるだろうが、おそらくはピッチングに対する意識が変わったんだらうな。」

「ピッチングに対する意識?」

一也の疑問の声にクリスさんは頷いてから答える。

「俺も経験したが、ケガをした後は感覚が変わった。」

「はい。」

「親父のアドバイスで感覚を1から作り直したが、財前も親父からアドバイスをもらって感覚を

1から作り直した筈だ。その時にピッチングスタイルを変える何

かがあつたんだろう。」

一也はクリスさんの言葉に納得した様に頷く。

打たせて取るか…。

俺自身は三振を奪うのが一番カッコいいと思っている。

でも、財前さんのピッチングも三振を奪うピッチングとは違うカッコ良さがあると思う。

「クリスさん、俺にも打たせて取るピッチングって出来ると思いますか？」

俺の言葉にクリスさんと一也が驚いた様に見開いた。

「パワプロ、ピッチングスタイルを変えるのか？」

「いや、そのつもりは無いよ。でも、財前さんのピッチングもカッコいいなと思つてさ。」

一也の問いに俺がそう答えると一也は苦笑いをする。

クリスさんと貴子ちゃんは何故か笑つてるな。

「フーくんらしいね。」

貴子ちゃんの一言に同意する様にクリスさんと一也が頷いた。

「葉輪、変えるのも貫くのもお前次第だ。だが、変えるつもりが無くてもまああいつた

ピッチングがあるということは覚えておけ。」

「はいー」

俺が敬礼をしながら返事をする、貴子ちゃんはクスクスと笑つた。

その後、試合は財前さんが自ら2打点を叩き出し、9-1球という少ない球数で完投して

黒土館高校が勝利した。

これで青道の相手は黒土館に決まった。

試合で俺が投げるかはまだわからないけど、もし財前さんと投げ合う時は全力で楽しむぜ！

## 第108話

青道高校と黒土館高校の試合当日、試合が行われる球場でアップをしていた

パウプロの所に財前がやって来た。

「よう、葉輪！」

「あ、財前さん。」

ストレッチをしていたパウプロは立ち上がって帽子を取り、財前に頭を下げる。

「今日は誰が先発するんだ？」

「俺の予定ですよ、財前さん。」

パウプロの返答に財前はニヤリと好戦的な笑みを浮かべる。

「そうか、そいつは楽しみだ。」

そう言うのと財前はパウプロに軽く手を振ってチームメイトの所に戻っていった。



秋の高校野球選抜東京地区大会の2回戦、1回の表のマウンドにパウプロが上がると、

球場には割れんばかりの歓声が起こった。

夏の大会で多くの高校野球ファンはパウプロの事を知り、一目見ようと球場に足を運んだ。

その為、地区予選の2回戦とは思えない程の人数が球場に押し寄せていた。

黒土館高校の応援の音が響き渡る中でパウプロが1番バッターにボールを投げる。

初球のアウトローへのフォーシームを見送った黒土館の1番バッターは

手振りで球種をベンチに伝える。

その様子を青道のキャッチャーのクリスはマスク越しに見ていた。

(球筋を見ていたな…。様子見か?)

クリスは2球目のサインをパウプロに出す。

パウプロはサインに頷くと投球モーションに入る。

2球目、1球目と同じコースにフォーシームが投げ込まれる。

黒土館の1番バッターはこれも見送る。

主審の判定はストライク。

これでノーボール、ツーストライクと追い込んだ。

クリスはチラリと横目でバッターを見る。

(1球外すか? いや、押してみるか。)

クリスは内角高めにフォーシームを要求する。

パウプロは笑顔でサインに頷くと、投球モーションに入る。

3球目。

クリスの要求通りに内角高めにフォーシームが投げ込まれた。

黒土館の1番バッターのバットが空を切る。

「ストライク! バッターアウト!」

三振をした黒土館の1番バッターがベンチに戻る前に2番バッターに耳打ちをする。

(やはり葉輪へのマークが厳しいな。他の高校も偵察に来ている可能性を考えると、

この試合で使う球種を限定すべきか?)

そう考えながらクリスは打席に入る黒土館の2番バッターを観察していく。

(失点を気にしなければ球種を限定しても問題無い。だが、その為には先制点が必要だな。)

クリスはパウプロにサインを出すと、ミットをインローに構えた。

サインに頷いたパウプロはクリスが要求するコースにフォーシームを投げ込む。

バシッ!

「ストライク!」

主審のストライクコールに、黒土館の2番バッターは振り返ってミットの位置を確認する。



黒士館の2番バッターは驚いて目を見開いていたが、ヘルメットを被り直すと

バットを短く持ったのだった。



「いいぞお！風路！」

「頑張れえ！風路くん！」

青道と黒士館の試合が行われている球場のスタンドで、葉輪、藤原両家の

両親が声援を送っていた。

「これから末長くよろしくお願ひしますね、藤原さん。」

「ええ、これからもよろしくお願ひします、葉輪さん。」

両家の父親が熱心に応援している時、両家の母親は恋人になったパウプロと

貴子の事を話していた。

「それにしても、フーくんはアメリカに行くつもりだったなんて…孫の顔が見れないわ。」

「そうですねえ…オフシーズンになれば会えるんでしょうけど…。」

両家の母親は顔を見合わせるため息を吐いた。

ちなみに、パウプロと貴子が恋人になった事はその当日に両家に伝わっている。

その時には両家と一緒に祝いの酒盛りをした。

その酒盛りの時にパウプロは、両親に高校卒業後にアメリカに行くことを伝えたのだ。

パウプロが貴子と一緒にアメリカに行くことを伝えると、両家の母親はパウプロと

貴子に孫の顔を求めた。

恋人になったばかりの健全な学生に対して無茶な要求である。

「風路くんはアメリカのどこに行くんでしようか？」

「それは私もまだ聞いてないですね。早く孫の顔を見たいので今度聞

いておきますね。」

この母親達、海外にまで孫の顔を見に行く気満々である。

その後、両家の両親は一緒にパワプロの応援をしていたのだった。

## 第109話

青道と黒士館の試合の1回の表、パウプロは三者三振の完璧なスタートを切った。

1回の裏のマウンドに上がった財前は青道の1番バッターの小湊をセカンドゴロ、

2番バッターの坂井をショートゴロ、3番バッターの結城をレフトフライの三者凡退に抑える

順調な立ち上がりを見せた。

2回の表、黒士館の4番バッターである財前が先頭打者として打席に入ると、

キャッチャーボックスに座るクリスはチラリと財前に目を向けた。

(シニア時代、財前のバッティングは悪くなかった。だが、リハビリ明けの今はどうだ?)

クリスは様子見でアウトローにフォーシームを要求する。

パウプロはサインに頷くと、クリスの要求通りにアウトローにフォーシームを投げ込んだ。

「ストライク!」

主審がストライクコールをすると、財前はタイムを要求して2、3度素振りをする。

その財前の様子をクリスはパウプロに返球しながらマスク越しに観察していく。

(シニア時代の財前は真っ直ぐに強かった。続けるのは危険か?)

「財前!大丈夫!ボール見えてるよ!」

黒士館の1塁コーチチャーの声がクリスの耳に入る。

(今日は妙に相手コーチチャーの音が耳に入る…。何故だ?)

財前が打席に戻ると、クリスは疑問に思いながらも2球目のサインを出す。

パウプロはサインに頷くと、投球モーションに入る。

2球目。

今度はインローにフォーシームが投げ込まれる。

ガキッ!

財前が打った打球はキャッチャーボックス後方のファールゾーンに上がる。

クリスは反応良くマスクを外して打球を追うが、打球はバックネットに当たってファール。

これでカウントはノーボール、ツーストライクと追い込んだ。

(2球でタイミングを合わせてきたか…。流石だな、財前。)

クリスはマスクを拾いながら心の中で財前を称賛する。

(だが、真っ直ぐを待っていたらこれは打てないぞ、財前!)

クリスはパウプロにスライダーのサインを出す。

パウプロがサインに頷いて投球モーションに入ると、クリスは無意識にミットに

右手を押し付けてインコースに寄った。

すると…。

「行け!財前!」

パウプロが投球する直前に黒土館の1塁コーチチャーの掛け声がグラウンドに響く。

財前が踏み込むと、クリスの脳裏には財前を打ち取った映像が浮かんでいた。

だが…。

バシッ!

「ボール!」

主審の判定にクリスはマスクの奥で目を見開いた。

(何故今のスライダーを見逃せる…?)

動揺したクリスは少しの間、キャッチングした態勢のまま固まるのだった。



(あつぶねえ!コーチチャーの掛け声がないや、間違いなく真っ直ぐと思っ振ってたぜ。)

パウプロのスライダーを見逃した財前は、内心で心臓がバクバクしていた。

(葉輪の奴、とんでもねえボールを投げやがって…。わかっていてもあのスライダーは打てねえと思っちゃった。)

そう思いながら財前は、ヘルメットの鏝に手をやりながら足場を作り直している。

(それにクリスも流石だな。あのスライダーをあっさりキャッチングするんだからよ。)

財前は内心でそう称賛するがニヤリと笑みを浮かべる。

(でもよ、来るってわかってりや振らないぐらいは出来るんだぜ?)

財前はチラリとクリスに目を向けると、クリスがボールを返球している姿が目に入る。

(流石のクリスも動揺してるみたいだな。いつもの見透かす様な視線がねえんだからよ。)

足場を作り終えた財前はパウプロに目を向ける。

すると、パウプロがサインに頷いて投球モーションに入る。

そして…。

「行け！財前！」

踏み込んで振ろうとしていたバットを、財前は歯を食い縛って止める。

財前がバットを止めると、パウプロが投げ込んだボールは鋭く内角の

ボールゾーンに食い込んで来た。

「ボール！」

主審の判定に二度クリスが目を見開く。

財前がチラリと目をクリスへと向けると、財前とクリスの視線が交差する。

財前は素知らぬ振りをして視線を外した。

(俺もケガをしたからわかる。ケガをする前以上に成長したお前はすげえよ。けどよ…！)

パウプロがサインに頷いて投球モーションに入る。

財前は集中しながらも耳を澄ませる。

1 塁コーチャーの掛け声は：無し！

財前はパワプロの真っ直ぐを狙い済ましてバットを振り抜く。  
カキンッ！

(新しく出来た癖を消すだけの余裕は無かったみたいだな！)

財前が打った打球は快音を残して左中間へと飛んでいく。

クリスはマスクを外すと目を見開いて打球の行方を追った。

左中間の外野フェンスに打球が直撃すると、財前はスタンディングで悠々と2 塁に辿り着く。

「クリス、恩人のお前には悪いが狙わせてもらうぜ。」

財前の呟きは長打を称える歓声に飲まれて消えていく。

外野からボールが戻ってきてても、クリスは呆然と立ち続けたのだっ  
た。

## 第110話

青道と黒土館の試合の2回の表。

ノーアウト、ランナー2塁のチャンスを手にした黒土館は、ランナーの財前を3塁に送ろうとバントを試みた。だが…。

「キャッチャー！」

パウプロが上を指差し、ボールの行き先を指し示す。

キャッチャーのクリスは反応良くボールの落下点に滑り込んだ。

「アウト！」

送りバントに失敗したバッターが悔しそうに天を仰ぐのを見たランナーの財前は苦笑いをする。

「まあ、葉輪のノビてくる真っ直ぐを転がすのは難しいよな。」

財前の呟きを聞いた遊撃手の倉敷がチラリと財前を見るが、直ぐに守備に集中した。

（クリスを引っかけ回すのに先制点が欲しかったが、葉輪は崩れそうにねえな。）

そんな事を考えながら財前は頬をポリポリと掻いた。

「まあ、まだ試合は2回だ。じっくりと行くとするか。」

その後ワンアウト、ランナー2塁の状況になったが、パウプロは笑顔で連続三振をして

ピンチの場面を切り抜けたのだった。



「お疲れ様です、クリスさん。」

2回の裏の先頭打者であるクリスが打席に向かうために防具を外している。

御幸がバットとヘルメットを持ってきてクリスに話し掛けた。

「ああ、すまん、御幸。」

「いえいえ、どうぞ致しまして。」

笑顔でそう言った御幸だが、不意に真面目な表情になる。

「財前さんはスライダーを振りませんでしたね。」

「…ああ。」

御幸の言葉にクリスは眉を寄せながら答える。

「御幸、ベンチからはどう見えた？」

「俺には真つ直ぐを待っている様に見えましたね。あの長打を打たれたのは、確認する為に」

「真つ直ぐを要求したからですよね？」

「ああ、そうだ。」

お互いに試合を組み立てるキャッチャーとして会話を続けたいたいが、

クリスは先頭打者であるので準備を終えると立ち上がる。

「御幸、俺に変な所があれば直ぐに教えてくれ。」

「…癖がバレていると思っっているんですか？」

「財前とは付き合いが長いからな。その可能性はある。」

「わかりました、注意しておきますね。」

御幸は打席に向かうクリスの背中を見送ると、頭をガシガシと掻く。

「…パワプロにも伝えておかないとな。」

そう呟いた御幸は、貴子からドリンクを受け取って笑顔になっている。

パワプロの所に向かうのだった。



「え？クリスさんの癖がバレてるの？」

「いや、今のところはその可能性があるってだけだ。」

「へえ〜。」

貴子ちゃんからドリンクを受け取って飲んでいたら一也がやって来て、

クリスさんの癖がバレているかもしれないと言ってきた。



「財前さんはパウプロのスライダーにバットを振らなかっただろ？」  
「うん、そうだな。」

「だろ？だから癖がバレているかもってクリスさんは考えたんだ。」  
一也にそう言われて俺は首を傾げる。

「どうした、パウプロ？」

「いや、変化球を見逃すのって当たり前だと思ってさ。」

俺がそう言うと一也は頭を抱えてため息を吐いた。

…どうしたんだ、一也？

「パウプロ、ハッキリ言ってお前のスライダーは特別なんだ。」

「そうなの？」

「そうなんだよ。まったく、俺が捕れるようになるのにどれだけ苦労したと…。」

そこまで言うと一也はまた頭を抱えてため息を吐いた。

その様子を見ていた貴子ちゃんはクスクスと笑っている。

「取り合えず、パウプロのスライダーは特別って事で話を続けるぞ。」

「おう！」

「お前のスライダーの軌道とキレは、お前のフォーシームを待っていたら手を出しても

おかしくないんだ。俺とクリスさんは、財前さんはフォーシームを待っていると考えた。

だけど、財前さんはスライダーに全く手を出さなかったんだ。」

一也がそう言ったところで、俺はまた首を傾げる。

「一也、単純に財前さんがフォーシームを待っていないなかったって事は無いの？」

「カウントによって狙いを変えるのは当然だな。」

「だろ？」

「でも、それだとパウプロのフォーシームを強振出来た事の説明がつかないんだ。」

うん？…そうなの？

「一也、財前さんがフォーシームを反応で打ったって不思議じゃないだろ？」

「パワプロ、財前さんはピッチャーだぞ？それにリハビリ明けという事を考えれば、

反応でバットを振れるまでバットを振り込む余裕があつたとは思えないんだ。」

一也が真剣な表情でそう言ってくる。

クリスさんも一也もよく考えてるなあ。

カキーン！

金属バットの快音に俺と一也は振り向く。

どうやらクリスさんがツーベースヒットを打つたみたいだ。

「そう言うことだから、パワプロも一応注意しておいてくれ。」

「注意って、何を注意しておけばいいんだ？」

「クリスさんの動きに気になる何かがあるとかだな。」

クリスさんの動き？

シニア時代とは少し違うところもあるけど、それとは違うのかな？

「うーん、よくわかんないけどわかった。」

「よし、何でもいから気付いたら言えよ。」

「あ、一也。それなら1つあるんだけどさ…。」

俺からその1つを聞いた一也は驚いて目を見開いた。

その後、一也はそれに注意して見ておくと言うと、俺と一緒に皆の応援に戻つたのだった。

## 第111話

(財前か。今の流行りを上手く取り入れたいピッチングをするじゃないか。)

青道と黒土館の試合をスタンドから見学している落合がそう評する。

落合がそう評していると、財前は5番バッターの増子をショートゴロに打ち取った。

(クリスには上手く外野まで運ばれたが、ストライクを先行させていって、

際どい所で勝負出来るカウントを作っている…。相手から逃げがちな川上に

見習わせたいピッチングだな。)

落合は監督の片岡に進言して川上を1軍に引き上げていた。

片岡は川上にはもう少し身体作りに専念させたかったのだが、青道の投手事情もあつて

落合の進言を受け入れる形で川上を1軍に昇格させたのだ。

その後、財前は6番バッターの門田をセカンドゴロに、7番の白州を

レフトフライに打ち取った。

(新チームだから仕方ないところもあるが打線に繋がりが欠けるな。

特に4番のクリス以降のバッター達に…)。

落合は財前に抑えられた増子と門田を見ながら頬を掻いた。

「俺なら増子の代わりに白州を5番に置くがね。」

そう呟くと落合は白州に目を向けた。

(目立った長所は無いが器用で俺好みの選手だ。このまましっかりと身体作りをしていけば、

来年の夏には青道に欠かせない選手になれるだけの素質が十分にある。)

川上と同じ様に白州も落合の進言で1軍入りした選手である。

実力主義の青道であるが、その実力に大きな差が無い場合は選手を

選考する

片岡の心象で選ばれる事になってしまう。

そして選考する時に1年生と2年生を比べた場合には、どうしても心情的に

長く一緒にいる2年生を選びたくなるのが人情というものだ。

これは片岡の監督としての才覚に問題があるわけではなく、

落合との人生経験の差であると言えるだろう。

(さて、2回の表の財前のバッティングで気になる所があったが…、

葉輪やクリスは気付いているかな?)

落合は片目を瞑って3回の表のマウンドに上がるパウプロの姿を観察する。

(秋の大会まで時間が無かったから指摘しなかったが、俺の他にもクリスの癖に

気付いている奴がいるだろうからな。)

そう考えながら落合はクリスへと目を移す。

「このままじゃクリスは御幸にマスクを譲る事になるが、果たしてどうなる事やら…。」

そう呟いた落合は頬杖をついてじつくりと試合を見学していくのだった。



3回の表の黒士館の攻撃は8番の下位打線からだったが、クリスはリードに

苦戦を強いられていた。

(なぜ葉輪の変化球にバットを振らない…。)

クリスは動揺しながらもパウプロにサインを出す。

サインに頷いたパウプロが投球モーションに入る。

「行け…」

黒士館のコーチャーから掛け声が飛ぶと、8番バッターはバットを振らずに見送った。

(ストライクは取れた。だが、スライダーだけじゃなくチェンジアツプも見逃された…)。

クリスはボールをパウプロに返球しながら考察していく。

(葉輪に何か癖があるのか? いや、葉輪に癖は見当たらない…。やはり俺に球種が

読まれる癖があるんだろうな…)。

クリスは歯を噛み締めながらパウプロにサインを出す。

サインに頷いたパウプロが投球モーションに入る。

アウトローに投げ込まれたフォーシームに、黒土館の8番バッターが反応する。

ガキツ!

「ショート!」

フラフラツと上がった打球を指差してパウプロが声を掛ける。

高校野球で初スタメンの倉持が基本通りにしっかりと捕球してワンアウト。

疑念が確信に変わったクリスは内心で動揺してしまう。

クリスは動揺を隠す様にマスクを被り直した。

(俺の癖は試合中に修正出来るものなのか? もしくは利用出来るものなのか?)

そう考えながらクリスがキャッチャーボックスに座ると、9番バッターが打席に入る。

(葉輪のボールのコントロールと球威で押せる内に、癖を見つけ出して修正出来るか?)

クリスは悩みながらもパウプロのリズムを崩すまいとサインを出す。

「行け!」

パウプロが右打者のインローにスライダーを投げ込むと、黒土館の9番バッターは見逃した。

この結果にクリスはマスクの奥で歯噛みをする。

(…片岡監督に俺と御幸を交代してもらおう事も考えないとな。)

悔しさに震える身体を覚られない様に、クリスは内野陣に向けて声

を出していく。

3回の表をなんとか無失点で切り抜けたクリスは、拳を強く握り締めてベンチに戻るのだった。

## 第112話

「見てたか!?俺、葉輪の真っ直ぐにバットが当たったぜ!」

「くっそ——!俺は当たらなかつた!」

「はっはっはっ!将来自慢してやるぜ!」

時間は少し戻って青道と黒士館の試合の3回の表の途中、黒士館側のベンチでは

そんな会話で盛り上がっていた。

「財前、どうするんだ?まだ続けるのか?」

黒士館のメンバーの1人が財前にそう話し掛ける。

「:当たり前だろう。弱点をとことん攻めないでどうするんだよ。」

「財前、悪ぶるのはよせよ。」

黒士館の選手は苦笑いをしながら財前にそう言う。

「俺達、知ってるんだぜ?青道のクリスは財前の恩人なんだろう?」

だからこんな形でクリスに癖があるって教えてるんだろ?」

財前は仲間の言葉にバツが悪そうに顔を背ける。

「財前はケガをした後、ラフプレーとかこういった反則とかスゲエ嫌ってたじゃん。」

あの様子だともう気付いているみたいだし、もういいだろ?」

「:付き合わせてすまねえ。」

「気にすんなよ。俺達、仲間だろ?」

財前は仲間のその言葉に目を見開く。

「お前、言つてて恥ずかしくねえか?」

「うるせえよ!ほっとけ!」

そう言つて笑いあう仲間達の姿に、財前は帽子を深く被り表情を隠した。

「あれ?財前泣いてる?」

「うっせえ!泣いてねえよ!」

財前は帽子を被り直しながらアンダーシャツで目元を拭う。

その様子を見ていた黒士館のメンバーは皆笑顔だ。

「アウト!スリーアウト!チェンジ!」

3回の表の3人目のバッターである1番バッターがアウトになってベンチに戻ってきた。

「よっしゃあーここからはガチンコだ！気合い入れてくぞー！」

「「オオ——！！」」

財前の言葉に黒土館の選手達は大声で応えようと、気合い十分な表情で

グラウンドに駆け出したのだった。



「お疲れ様です、クリスさん。」

3回の表が終了してベンチに戻ってきたクリスの元に、御幸がドリンクを持ってやって来た。

「御幸、どうだった？」

「変化球のサインを出した時に、クリスさんは右手をミットに押し付けていますね。」

「右手を？」

「はい。多分ですけど、パウプロの変化球はどれも凄いのばかりなので、無意識にミットの

フィット感を上げる為にしている動きじゃないですか？」

御幸の言葉に思い当たる事があるのか、クリスは何度も頷いた。

「それで、対策出来そうですか？」

「その必要は無い。」

御幸とクリスの会話に片岡が割り込むと、2人は驚いて目を見開いた。

「グラウンドにいる黒土館のメンバーの表情を見る。」

片岡の言葉で御幸とクリスはグラウンドに目を向ける。

そこには気合い十分の黒土館ナインの姿があった。

「あの様子だと、もうクリスの癖の伝達は無いだろう。」

「監督：気付いていたんですか？」

「これでもお前達よりは長く野球と関わってきているんでな。」



不敵な笑みを浮かべる片岡の姿に御幸は苦笑いを浮かべ、クリスは頭を下げた。

「黙っていてすいませんでした。」

「クリス、気にするな。俺もわかっただけで主審に申告しなかったし、お前を交代させなかつたからな。」

ガキッ!

詰まらされた金属バットの音に片岡達がグラウンドに振り返る。

「2回までに比べて球威が増している様だな。」

片岡の言葉に同意する様に御幸とクリスが頷く。

打ち取られた3回の裏の先頭打者である倉持が悔しそうな表情でベンチに戻ってきた。

「クリス、御幸、反省は試合の後だ。まずは財前を攻略するぞ!」

「はい!」

その後、青道と黒土館の試合は投手戦となりスコアボードには0が並んでいく。

そして試合は0-0のまま終盤戦となる7回に突入するのだった。

## 第113話

青道と黒土館の試合の7回の表、黒土館の攻撃は2番バッターからの好打順だったが、

4番の財前も含めてパワプロに三者三振で抑えられてしまった。

これでパワプロはこの試合でも2桁奪三振を達成した。

7回の裏の青道の攻撃は1番バッターの小湊からだ。

小湊は財前のムービング系のボールをカットしていき、スライダ―を一二塁間に運ぶ

ライト前ヒットで出塁した。

続く2番バッターの坂井は送りバントで小湊を2塁に送る。

これでワンアウト、2塁のチャンスの状況でバッターは3番の結城だ。

財前は左右を広く使って結城を追い込むが、ワンボール、ツーストライクのカウントで

投げ込んだ5球目のアウトローのカットボールをライト前に運ばれてしまった。

だが、打球に勢いがあった為に2塁の小湊はホームベースに帰れずに3塁で止まった。

ワンアウト、1、3塁の状況で迎えるは4番バッターのクリス。

マウンドの財前は帽子を被り直しながら大きく息を吐いたのだった。



(ふう…きついで…)

マウンドの財前は帽子を被り直す際に、アンダーシャツで額の汗を拭う。

財前は打たせて取るピッチングで青道打線を抑えてきたので球数は少ない。

だが、打の青道の異名を持つ青道打線を打たせて取るのは財前の予

想以上に

プレッシャーとなり、財前に精神的な疲労を蓄積させてきたのだ。  
(あと2回と3分の2、球数は問題ねえ…気合いを入れ直せ!)

財前はグローブにボールを叩きつけて気合いを入れると、打席に入ったクリスを見る。

(クリスのバッティングに穴は見当たらねえ…どう攻める?)

財前はキャッチャーのサインに首を横に振る。

数度目のサイン交換で頷くと、財前はセットポジションから投球モーションに入った。

財前が選択した1球目はアウトローにバックドアとなるツーシューム。

ストライクゾーンに切れ込んでくるボールにクリスのバットが反応する。

カキンツ!

打球はライト方向に飛びフェンスに直撃したが、ライト線を切れてファール。

(なんでそのコースを流してそんなに飛ばせるんだよ!?)

財前は心の中でクリスに文句を言うが、その表情は好戦的な笑みを浮かべている。

(とりあえずワンストライク…次のボールはどうする?)

これまで以上の集中力で財前の脳がフル回転する。

サイン交換で財前はまた首を横に振る。

(ダメだ、それじゃクリスに持つてかれる。)

何度も首を横に振ってからようやくサインに頷く。

2球目。

財前が選択したのはアウトローのストライクゾーンからボールゾーンに逃げるカットボール。

クリスのバットが反応するが、バットは途中で止まる。

ボールを捕球したキャッチャーが塁審にハーフスイングの確認をする。

判定は…振ってない。

これでワンボール、ワンストライク。

(今のを振って引つ掛けないのかよ！)

終盤の同点の場面で3塁にランナーがいることを考えれば内野ゴロもリスキーだが、

積極的にゲッツーを狙いにいった1球だったのだ。

(外野フライを打たれてもダメ：理想はゲッツー。)

ここで財前はプレートを外してランナー2人に牽制する振りをして間を取った。

(クリスにどれだけ効果があるかわかんねえけど、少しは打ち気を逸らさねえとな。)

ロージンバグを手にして落ち着いて間を取った財前は、ゆっくりとサイン交換をする。

(アウトローを2球続けている。胸元について身体を起こすぞ！)

3球目。

財前はインハイのフォーシームを選択した。

クリスは踏み込むがバットを振らずに見送る。

判定は…ボール！

これでカウントはツーボール、ワンストライク。

(次はアウトロー…球種はどうする？カットか？スライダーか？)

決断をした財前がキャッチャーのサインに頷く。

4球目。

財前が選択したのはアウトローへのスライダー。

そのスライダーはボールと判定されてもおかしくないギリギリのコースに投げ込まれた。

クリスはこのボールを見逃した。

主審の判定は…？

「…ストライクツー！」

この会心の1球に黒土館ベンチから歓声上がる。

「財前！ ナイスピッチング！」

キャッチャーからの返球を捕った財前はロージンバグを手にとった。

(問題は次の1球だ。これを間違えたら意味がねえ。)

財前は気合いを入れる為に間を取ってからサインを見た。そしてサインに頷くとセットポジションから投球モーションに入る。

5球目。

財前が選択したボールはインローへのツーシーム。

ツーシームはインローのストライクゾーンから、ボールゾーンへボール1つ分

外れるコースに投げ込まれた。

クリスが踏み込んでスイングを始めた瞬間に、財前はこの勝負の勝利を確信した。

だが…。

カキンッ!

金属バットの快音と共に打球は勢いよくレフトスタンドへと飛んでいった。

「…つたく、少しはバッティングにも隙を見せろつてんだ。」

グローブを外した財前は腰に手を当ててベースを回るクリスに目を向ける。

目が合った財前とクリスは、お互いを認め合う様に笑みを浮かべたのだった。

## 第114話

青道と黒土館の試合。7回の表終了時点まで0-0だったが、7回の裏にクリスが

スリーランホームランを打った事で3-0と青道がリードした。

財前は後続の増子と門田を打ち取って追撃を許さなかったが、球場にいる観客達には

試合が決まった様に見えていた。

残り2回でパワプロを相手に3点差。

黒土館のメンバーは諦めた表情をしていないが、それでも観客達は残り2回でパワプロが

どれだけ三振を積み上げるのかを期待していた。

だが、観客達の期待通りにはならなかった。

何故なら…。

「川上、行けるな？」

「は、はい！」

青道の監督である片岡が継投を選択したからだ。

片岡が主審に投手交代を告げると、球場にはざわめきが広がった。

被安打1に抑えているエースを何故代える？

ケガか？次戦を見据えて温存か？

そんな会話があちこちで飛び交った。

だが、それらの憶測はどれも正解では無い。

元々青道は今大会は継投で挑む事を決めていたのだが、これには夏の大会で青道が

全国制覇した事が大きく関係している。

夏の大会の活躍でパワプロは注目を浴びる事になったが、これを片岡は危惧したのだ。

既にパワプロには多くの取材申し込みがあったりと、周囲の期待が集まっている。

その期待による重圧で潰されるパワプロでは無いと片岡は思っているが、

周囲の期待による投げ過ぎでケガをする可能性を考えているのだ。もちろん今大会の継投策はパウプロの為だけでは無い。

他の選手達の成長の為でもあるのだ。

監督をしている以上勝利を求められるのは当然だが、片岡は教育者として

教え子達の成長も望んでいるのだ。

若かりし頃の片岡は悪童として有名だった。

その片岡を成長させてくれたのが、かつての恩師であり野球である。

だからこそ片岡は昔に受けた恩を返そうとしてプロには行かずに、母校である青道に教育者として戻ったのだ。

もちろん、この継投策で青道が負けるような事があれば、片岡は多くの批判を浴びるだろう。

だが片岡は批判を浴びる覚悟を決め、教え子達が野球を通じて成長する事を望んだのだ。



場面は交代を告げられた川上がマウンドに上がったところに移る。

マウンドの川上が緊張でやや顔を青くしていると、クリスが川上に声を掛けた。

「川上、点差は3点ある。後には伊佐敷もいるから気楽にいけ。」

「は、はいー」

言葉に詰まりながら返事をする川上の姿に、クリスはノミの心臓と  
言われていた頃の

丹波の姿を思い出した。

(この試合、もう一波乱あるかもしれないな…。)

クリスがそう予感をした青道と黒土館の試合の8回の表。

黒土館の先頭打者である5番バッターが右打席に入ると、川上は緊張しながら

クリスのサインを覗き込んだ。

クリスのサインに頷いた川上は、サイドスロー独特の角度がついた真っ直ぐとスライダーを

アウトコースに投げ分けてカウントを稼いでいく。

5番バッターを3球でワンボール、ツーストライクに追い込むと、クリスはアウトローに

バックドアとなるシンカーを要求した。

だが、川上はこのサインに首を横に振った。

(どうした、川上？今はインコースの難しいボールはいらないぞ。)

マスクを被るクリスは、川上の緊張を解す為には先ずは無理にインコースを攻めない形で

ワンアウトを取ろうとした。

しかし、川上はそれを拒否してしまった。

それは大会前にした落合との話し合いが原因である。

(俺の課題は右打者のインコースにボールを投げ込むこと…！)

そう考える川上にクリスはアウトコースの真っ直ぐやスライダーのサインを出す。

だが、川上はこれらのサインに首を横に振ってしまう。

ノーアウトでランナーが1人出る事を覚悟したクリスは、インローにシンカーを要求する。

このサインに頷いた川上が投球モーションに入った。

だが…。

「テッドボール！」

インコースに厳しく投げ込み過ぎたシンカーが相手の足に当たってしまった。

これでノーアウト、1塁。

黒土館ベンチから歓声が沸き起こる。

マウンドに上がった頃より顔を青くした川上の元に、クリスがタイムを取ってやって来た。

「川上、気にするな。さっきの1球の攻める気持ちは間違いじゃない。」

「は、はい…。」



この試合、黒土館はパウプロ対策の1つとして右打者を多く揃えていた。

それが今になって流れを呼び込む形となる。

続く6番バッターも右打席に入ると、川上はもう一度インローにシンカーを投げ込む。

すると…。

「デッドボール！」

2者続けてデッドボール。

これでノーアウト、1、2塁。

球場のざわめきをかきけす歓声が黒土館ベンチから沸き起こる。

二度タイムを取ったクリスがマウンドに行つて川上に声を掛けるが、

顔を真っ青にした川上は心ここに在らずで生返事をする。

クリスはベンチに顔を向けると首を横に振った。

それを見た片岡は伊佐敷に準備を急がせるが、青道の不運は続く。

黒土館の7番バッターも右打席に入ると、またしても川上が打者にボールをぶつけてしまったのだ。

ノーアウト、満塁の状況にマウンドの川上は完全にパニックに陥つてしまった。

伊佐敷の肩が出来るまでの時間を稼ごうとクリスがタイムを取るが、

間に合わずに黒土館の8番打者との勝負を迎えてしまう。

クリスはせめて1球1球の間をゆつくりと取ろうとしたが、

ここで驚愕の出来事が起こる。

なんと、川上がサインを見ずに投球モーションに入ったのだ。

これに驚いたクリスはマスクの奥で目を見開く。

そしてパニックに陥つた川上はストライクゾーンにボールを置きにいつてしまった。

その置きにいったボールに反応した黒土館の8番バッターがバットを振り抜く。

カキンッ！

金属バットの快音を残して、打球はセンターの白州の頭を越えてフェンスに直撃した。

黒土館のランナー達が全力でダイヤモンドを駆けていく。

3塁、2塁にいたランナーがホームベースを駆け抜ける。

そして、1塁にいたランナーが3塁も蹴ってホームベースに突っ込んでいくと、

センターからボールが戻ってきた。

滑り込むランナーとボールを捕球したクリスのミットが交差する。

主審の判定は…？

「…セーフ！」

この判定に球場の観客から悲鳴と歓声が爆発した様に沸き起った。

8回の表に黒土館は3ー3の同点に追い付いたのだ。

そして、なおもノーアウトでランナー2塁のチャンス。

黒土館のメンバーが歓喜のハイタッチをしていく。

川上はマウンドの上で只々呆然とするのだった。

## 第115話

試合の8回の表。

黒士館は3―3の同点に追い付き歓喜の声を上げていた。

その黒士館のメンバーが何故喜んでいいのか認識出来ずに、

川上はマウンドの上で呆然としていた。

そんな川上の肩をクリスがポンツと叩く。

「川上、交代だ。」

「…え？」

川上が疑問の声を上げながらクリスを見ると、クリスは促す様に青道ベンチに顔を向けた。

つられる様に川上も顔を向けると、青道ベンチから伊佐敷がマウンドに

向かって走って来ていた。

「え？…あつ。」

伊佐敷の姿を目にした川上の思考が再起動する。

川上はゆっくりとスコアボードの方に振り向くと、次第に今の状況を認識していった。

「あ…。」

1つもアウトを取れずに同点に追い付かれた事を認識した川上は表情を真っ青にする。

「あ、あの…す、すいま…。」

「川上、謝るのはまだ早い。」

マウンドに集まっていた内野陣の1人、新キャプテンの結城が川上の言葉を遮った。

「試合はまだ同点だ。負けたわけじゃない。」

「あ…う…。」

川上は表情を真っ青にしながら目尻に涙を貯めていく。

そんな川上の肩をマウンドにやって来た伊佐敷がポンツと軽く叩く。

そして…。

「川上、後は先輩の俺に任せとけ。」

川上は言葉を発する事が出来ずに、震える手で伊佐敷にボールを渡した。

そして、覚束無い足取りで青道ベンチへと戻っていった。

「伊佐敷、肩は出来ているか?」

「悪い、もう数球は投げとおきてえ。」

伊佐敷の返事にクリスは少し考えてから話し出す。

「伊佐敷、次のバッターは敬遠する。それで肩は出来るか?」

「ああ、問題ねえ。」

伊佐敷の返事に頷いたクリスは集まっている内野陣に目を向ける。

「聞いてた通りだ、次のバッターは敬遠する。伊佐敷の肩が出来てから勝負に行くぞ。」

クリスの言葉に青道内野陣が力強く頷く。

そして円陣を組むと、結城の掛け声で気持ちを高めたのだった。



伊佐敷さんと交代したノリがベンチにフラフラとした足取りで戻ってきた。

「川上。」

片岡さんに声を掛けられたノリはビクツとして立ち止まった。

「は、はい!」

震える声で返事をしたノリは顔を上げて片岡さんの目を見る。

片岡さんはノリと目を合わせると、少し間を置いてから話し出した。

「最後の1球以外は攻める気持ちを持ったいいピッチングだった。

その時の気持ちを忘れるな。」

ノリは片岡さんの言葉に涙を堪える様に歯を食い縛っている。

「ご苦労だった。次の機会の為にしっかりとケアをしておけ。」

「…っ!はい!」

片岡さんはノリの返事に頷くと、他のベンチのメンバーへと目を向

けた。

ノリは肩肘をアイシングすると、タオルで顔を隠して涙を流したのだった。



「丹波！」

「はい！」

川上との話を終えた片岡は丹波を呼び出した。

「8回の裏の伊佐敷の打順で代打を出す可能性がある。肩を作っておけ。」

「はい！」

丹波は大きな声で返事をする、バッグからグローブを取り出して肩を作りに向かった。

その丹波の後ろ姿は、かつてノミの心臓と言われていたとは信じられない程に

堂々としたものだった。

そんな丹波の様子に少し笑みを浮かべた片岡は、次に御幸を呼び出した。

「御幸。8回の裏、白州か倉持が塁に出たら伊佐敷の所で行くぞ。準備をしておけ。」

「はい！」

終盤のシビレる場面での出番のチャンスに御幸は笑顔になる。

そんな御幸の様子に片岡は丹波の時と同じ様に笑みを浮かべると、グラウンドへと目を向ける。

グラウンドでは9番バッターを敬遠している状況だったが、

片岡は教え子達を信じて静かに見守るのだった。

## 第116話

「どうですか？青道の調子は？」

「ん？東か。」

伊佐敷が川上と交代してマウンドに上がった頃、スタンドでは東が落合に声を掛けていた。

「8回の表に3点差を同点に追い付かれて、なおもノーアウト、2塁のピンチ。」

勢いは完全に黒土館の方にあるな。」

「8回に伊佐敷が投げとるところを見ると、川上が打たれたみたいですね。」

何やってんねん、ホンマに。」

東は頭をガシガシと掻きながらも、後輩達の戦いを見守っていく。けして口は良くないが、なんだかんだと後輩の面倒見がいい東に、落合はニヤリと笑う。

「ところで東、お前の方は大丈夫なのか？」

「ここに来る前にたつぷりとバットを振ってきましたわ。あいつらに手伝ってもらわな

守備練は効率悪いですから。」

プロ志望届けを出した東は青道メンバーと一緒に練習をしながらドラフト会議を待っている。

もつとも、東は引退した身なので一緒に練習をしているのは2軍メンバーであるのだが、

プロ注目選手の東と一緒に練習する事で2軍以下のメンバーにいい刺激となっている。

「そうか。左でもバットを振っておけよ。腰痛の予防にもなるからな。」

「ホンマですか？試合を見終わったら左でも振っておきますわ。」

落合と東がそんな会話をしていると、伊佐敷が黒土館の9番バッターを敬遠して歩かせた。

「ゲッツー狙いでもするつもりやろか？」

「それもあるだろうが、俺は伊佐敷の肩がまだ出来てなかったからだと思いますがね。」

そんな風に会話をしながら東と落合は青道の試合を見守っていたのだった。



(うしー肩が出来たぜ！)

クリスからの返球を受けた伊佐敷は、右肩を軽く回しながらスコアボードに目を向けた。

(状況は8回の表、ノーアウト、ランナー1、2塁で3ー3の同点…シビれる場面だな。)

伊佐敷はエースになる事も、先発として試合に出る事も諦めたわけではない。

だが、試合終盤に頼られる抑えの役割にやりがいを感じる様になっていた。

(俺の後輩を随分と可愛がってくれやがって…、礼はたつぷりとさせてもらうぜ！)

プレートに足を掛けた伊佐敷はクリスのサインを覗き込む。

サインに頷いた伊佐敷がセットポジションから投球モーションに入る。

その瞬間、黒土館の1番バッターがバントの構えを見せる。

伊佐敷がリリースしたボールは高めに外れた。

(おっと、高めに浮いちゃった。しっかりとボールを叩きつけねえとな。)

伊佐敷はクリスからの返球を受け取りながら、右手の親指で人指し指と中指を擦る。

サインに頷いた伊佐敷が、ランナーを威圧する様に見てからセットポジションに入る。

黒土館の1番バッターは二度バントの構えを見せる。

しかし伊佐敷は揺さぶられることなく、しっかりとボールを投げ込

んだ。

カツンツ！

転がされたボールに伊佐敷が詰める。

「ファースト！」

クリスのコーチングに従い、伊佐敷はボールを1塁に送球してワンアウトを取る。

これでワンアウト、ランナー2、3塁。

スクイズも考えられる場面だ。

タイムを取ったクリスがマウンドに向かう。

「伊佐敷、次のバッターはスクイズが考えられる。意識に入れておけ。」

「おう！リードは任せませー！」

クリスがキャッチャーボックスに戻っていくと、伊佐敷はロージンバッグを手に取った。

ロージンバッグをマウンド横に置いた伊佐敷は、前足に体重を掛ける様な前傾姿勢で

サインを覗いてからセットポジションに入る。

そして投球モーションを始めると、伊佐敷の視界の端にランナーが走る姿が映った。

伊佐敷は咄嗟にリリースでボールを叩きつけずに高めに外した。

カツツ！

咄嗟に高めに外した伊佐敷の執念が実ったのか、黒土館の2番バッ

ターは

バントでボールを上に向けてしまった。

一早く反応してマスクを外したクリスがボールの落下点に飛び込む。

「アウト！」

上体を素早く起こしたクリスはスナップスローでボールを3塁に送球する。

上体だけで投げたとは思えない強いボールが、3塁に入った増子のグローブに飛び込んだ。



「アウト！スリーアウト！チェンジ！」  
審判のコールに拳を握った伊佐敷は、マウンドの上で咆哮を上げたのだった。

## 第117話

黒土館との試合は8回の表が終わり、8回の裏を迎えていた。

8回の裏の青道の攻撃、先頭打者の白州が凡退すると、次の打者である倉持が

左打席に入る前に大きく息を吐いていた。

(ちくしょう、変化球を打つイメージが出来ねえ。)

倉持は打撃において変化球が苦手であり、それが足枷となって夏の大会で

1軍に入る事が出来なかった。

(とにかく、塁に出なきゃ話にならねえ…。)

シートバッティング等の練習で倉持の走塁は多くの者に称賛されていた。

だが、その走塁を活かすには先ずは塁に出なければならぬ。

(綺麗なヒットはいらねえ…。左方向に転がしたら全力で走る!)

そう意識して打席に入った倉持に対して、財前は探りを入れる様にアウトコースにツーシームを投げ込んだ。

倉持はおつつける様にしてバットを振るが、ボールが外に変化した事で

バットの先に当たってしまい、打球はファールとなった。

この1打で倉持の狙いを察した財前はインコースを中心に倉持に投げ込んでいく。

ワンボール、ツーストライクと追い込まれた倉持はここで決断をする。

(セーフティ、行くぜ!)

財前が投げ込んできたインコースに切れ込んでくる膝元のカットボールを、

食らい付く様にして倉持は何とか3塁方向に転がした。

反応よく財前がボールに詰めて捕球するが、黒土館の捕手は財前が1塁に送球するのを止めた。

何故なら、倉持が俊足を活かして既に1塁に到達しようとしていた

からだ。

ワンアウトながら倉持が塁に出た事で、伊佐敷の代わりに御幸が打席に入る。

塁上の倉持は貪欲に2塁を狙う。

だが、先程のセーフティバントで倉持の足を警戒した財前が執拗に牽制を入れてくる。

その牽制を受ける中で倉持はタイミングを計っていた。

(パワプロの牽制に比べればぬるい。あと一歩出れる。)

スツと一歩大きくリードを取った倉持は集中力を高める。

ボーイズリーグ時代から何百、何千と練習で繰り返してきたその動作は、

打席の時と違い自信に満ちていた。

初球。

財前のクイツクに反応する様に倉持がスタートをきった。

アウトコースの高めに外したボールを捕球した黒土館の捕手が素早く2塁に送球する。

だが、倉持は余裕を持って2塁に滑り込んでいた。

この倉持の足に球場のスタンドから歓声が沸き上がる。

財前が睨む様に盗塁した倉持を見るが、倉持は気にせず集中を保っている。

(御幸、でかいのはいらねえ。内野を抜ければホームに帰ってやる！)

まるで獲物を狙う野性動物の様な倉持の姿に、マウンドの財前の頬を汗が流れ落ちる。

冷静に状況を観察していた打席の御幸は既に狙い球を決めていた。

次の1球、財前はアウトローのツーシームを選択した。

御幸は狙い通りのボールにバットを振る。

カキンッ!

打球は三遊間を抜けるとレフト前へと転がっていった。

青道の三塁コーチャーは判断を躊躇するが、倉持は迷わずにホームに突っ込んだ。

打球を捕球した黒土館の左翼手が素早く中継の遊撃手にボールを

送る。

ボールを受け取った遊撃手も素早くホームへ送球。

倉持が捕手を避ける様に滑り込むと、ホームベース上でクロスプレーになる。

判定は…？

「セーフ！」

新チームで1軍の座を掴んだ1年生2人が、価千金の勝ち越し点をもぎ取った。

この結果に青道ベンチから雄叫びが上がる。

これで集中力が切れたのか、その後の黒土館の野手にエラーが出始めた事で、

青道は8回の裏で7ー3と点差を拡げる事に成功した。

そして9回の表のマウンドに上がった丹波が3人でしっかりと抑えて、

青道は3回戦へと駒を進めたのだった。

## 第118話★

【怪物】パワプロを応援するスレ3

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレがあるのでそちらへ移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が立てるように

407：勝った——！

411：最後は地力の差が出たな

415：なんでアソコで継投すんねん！パワプロに最後まで投げさせろや！

417：415〓お、温存やから…（震え声

423：415〓ホンマく〇采配やったな

433：423〓そこまで言うほどやろか？

436：433〓満塁で一発出れば逆転の可能性がある場面で1年を使うとかなりえんやろ

439：436〓パワプロかて1年やで？

442：439〓怪物と一緒にすんなやw

445：あの中継ぎは結果として炎上しよったけど、どんなもんなんや？

453：445<サイドで120km台の真っ直ぐを投げられる  
しかも真っ直ぐとスライダーでストライクを取れてまだ1  
年ならエース候補やな

457：453<なお同年にパワプロがいるのでエースにはなれ  
ない模様w

464：457<それは言わんお約束やw

467：期待の1年やったのに初登板で炎上か：潰れへんやろか？

471：467<1回の炎上程度で潰れるんやったらその程度やっ  
たってことやろ

473：471<それは厳し過ぎるやろ。あの場面で使った監督が  
く〇やっただけやん

477：473<登板のチャンス貰つといて何をいつてんねん。投  
げたくても

投げられへん奴はいつぱいおんのやで！

485：477<その投げられへん奴の前であの起用はどうなんや  
？問題あるやろ

491：あの1年は間違いなく2軍落ちやろな

498：491<1回の炎上でそれは厳しくないか？もう1回ぐらい  
チャンスやつてもええやん

509：498<負けたら終わりのトーナメントやぞ？何を温いこ  
と言つてんねん

515:509<勝利至上主義乙w

523:お前らwwwスレタイ見てこいwww

540:ワイ今きたんやけど今日のパワプロのピッチングはどう  
やったんや?

543:540<7回を82球11奪三振の被安打1やな

547:543<被安打1って事はパワプロのボールを打ったのが  
おったんやな

551:547<せやで

555:547<2回でノーノーが無くなってアンチスレがお祭り  
騒ぎやったぞw

562:555<それなw

567:アンチスレ覗いてきたんやけど、パワプロの変化球が見逃  
されてたのも騒いでたで

573:567<キレが無いとかで盛り上がってたなw

580:実際のところなんでパワプロの変化球は見逃されたんや?

586:580<中盤からは普通に空振りしてたから球筋を見とっ  
ただけやろ

589:580<それなんやけどワイのトツモが球種を伝えてたん

やないかって言うてたで

592 : 589 < ファツ!?

601 : 589 < k w s k

605 : 601 < ワイのトツモが球場に試合を見に行つてたんやけど、キャッチャーの動きで

球種がわかつたらしいで。せやから黒土館の連中が球種を伝えてたかもやつて

612 : 605 < それつてありなん？

615 : 612 < ダメやで

618 : 伝えてたかもやる？じゃあ騒ぐ必要ないやん

623 : 618 < 悪いことしたらあかんつて教わらんかつたんか？

631 : 623 < 疑惑があるだけやんか。冤罪やつたらどうすんねん

637 : 631 < バレへんかつたらやつてもええいうんか？

644 : 637 < そんなこというてへんぞ

677 : お前らもちつけ



某ネット掲示板にて起きた疑惑が世間で話題になるが、あくまでも



疑惑であつたので

黒土館に大きな罰則は与えられなかった。

しかし騒動のキツカケとなつた事から、秋の大会終了後に3ヶ月間の対外試合の

自粛を言い渡されたのであつた。

## 第119話

黒土館との試合後、財前さんが青道ベンチに頭を下げにきた。なんでも財前さんが主導して球種を伝えていたらしい。

反則をやった財前さんに対して青道メンバーの表情は決していいものではない。

だけど…。

「君がやった事は教育者として誉められたものではない。

だが、素直に謝罪をした事は受け入れよう。」

片岡さんがそう言うと、青道メンバーはため息を吐いてから財前さんに笑顔を見せたのだった。



2回戦に勝った青道は3回戦も順調に突破した。

3回戦は丹波さんが先発をして、7回を1失点に抑えた。

8回には6点差があったこともあり、ノリが中継ぎとして登板した。

この試合のノリはシンカーを封印してピッチングをしていた。

どうも2回戦での連続デッドボールを気にしているらしい。

ノリは8回の登板だけで2失点してしまった。

今回の失点はノリがワンアウトを取った時にホッとして気を抜いてしまったからだ。

ノリの課題はメンタルコントロールの様だ。

そんなノリは3回戦が終わった後に丹波さんと話をしていた。

丹波さんがノリに声を掛けてメンタルコントロールのアドバイスをしているみたいだ。

頑張れよ、ノリ!



3回戦を勝利した青道は4回戦で市大三高と戦う事になった。なんとこの市大三高との試合、丹波さんが片岡さんに先発を志願した。

3回戦から4回戦までの日程に余裕があった事もあり、片岡さんは丹波さんを

先発させる事を決めた。

うくん、俺も真中さんと投げ合いたかったなあ…。

市大三高との試合は丹波さんと真中さんの我慢比べになった。

毎回の様に丹波さんと真中さんはランナーを背負うが、なんとか踏ん張り

味方の援護を待ち続けたのだ。

試合が動いたのは6回の表。

3番バッターに入っていた哲さんが真中さんからソロホームランを打った。

これで真中さんの集中力が一時的に切れてしまったのか、続く4番のクリスさんにも

ソロホームランを打たれてしまった。

真中さんはこの後の青道打線を抑えたけど、この試合は6回の表の2失点が

市大三高の致命傷となった。

丹波さんは8回までを無失点で抑えると、最終回の9回を純さんが3人でピシッと抑えた。

市大三高との4回戦は2-0で俺達の勝利だ。

そして迎えた5回戦。

青道は楊を有する明川学園との戦いに挑むのだった。



「ふう。」

楊が息を吐きながら右肩と右肘に貼っていた湿布を剥がす。

ケガをしているわけでは無い。

秋の大会を一人で投げ抜いていた事もあり、しっかりとケアをしているのだ。

「楊、大丈夫か?」

そんな楊に明川学園の仲間が声を掛ける。

「ああ、問題無い。ベストコンディションだ。」

そう言つて不敵に笑う楊の姿に、明川学園の仲間達が笑顔を見せる。

「俺達、どんな打球にも食らいつくから。楊も頼んだぞ。」

「ああ、勝負は延長のタイブレークからだ。」

楊の言葉に明川学園の仲間達が力強く頷く。

一度円陣を組んだ明川学園は掛け声を出してからアップの為にグラウンドに散つていった。

「葉輪、今日こそは俺が…俺達が勝たせてもらう。」

そう呟いた楊は青道ベンチに強い視線を送ったのだった。

## 第120話

秋の高校野球選抜東京地区大会の第5回戦。

青道高校は先発にパウプロを、明川学園は先発に楊を送ってきた。そんな青道高校と明川学園の試合は楊の三者凡退の見事なピッチングから始まった。

その楊のピッチングに応える様にパウプロも三者三振の完璧な立ち上がりを見せる。

だが、明川学園の打者達には動揺がまったく見られない。自分達のエースである楊が抑えてくれると信じているからだ。

楊は仲間達の信頼に応えようと2回の表も丁寧にピッチングをしていく。

青道高校の4番であるクリスには、ボール球でも構わないと厳しいコースに投げ込んでいった。

結果は四球でクリスを歩かせてしまったが、後続の増子達をキツリと抑えて得点を許さない。

対するパウプロは明川学園の5番バッターである楊を含めてまたしても三者三振で抑える。

これで6者連続三振だ。スタンドにいる幾人かが熱心にパウプロのピッチングをメモしている。

偵察、記者、スカウトといった者達がパウプロのピッチングに注目しているのだ。

インングは進んで7回の表。

楊はここまでランナーを出しても2塁は踏ませない見事なピッチングを続けてきた。

そんな楊にこの試合最大のピンチが訪れる。

先頭打者の小湊がヒットで出塁すると、続く坂井が送りバントで小湊を2塁に送った。

ワンアウト、ランナー2塁の状況で青道のバッターは3番の結城。スタンドの観客の間に楊もここまでかという空気が流れるが、ここ

で楊は勝負に出た。

なんと、3番の結城と4番のクリスを連続で敬遠したのだ。

この満塁策にスタンドからはどよめきが起こった。

この連続敬遠を見ていた青道の5番バッターである増子の頭は熱くなってしまう。

ここで勝負は決まってしまった。

楊は増子にインコースのツーシームを引っ掛けさせるとショートゴロのゲッツーに打ち取った。

拳を握ってベンチに戻る楊にスタンドの観客達から惜しみ無い拍手が送られる。

そして、夏の大会の様にジャイアントキリングを期待する空気が球場を占めていった。

そんな空気の中で7回の裏のマウンドに上がったパウプロは、いつもと変わらない笑顔でピッチングをしていく。

パウプロが当たり前の様に三者凡退で明川打線を抑えると、スタンドからは

明らかな落胆の声が上がった。

だが、明川学園のメンバーには動揺は見られない。

彼等が見据えるのはタイブレークとなる延長だからだ。

パウプロ相手に連打は望めない。

ならばと、ワンヒットで得点の可能性のあるタイブレークの延長戦に

最初から照準を絞っているのだ。

その後8回、9回と両チームが三者凡退に終わると、青道と明川の試合は

タイブレークとなる延長戦に突入するのだった。



(ここまでは辿り着いた。)

10回の表のマウンドに立つ楊は、アンダーシャツで額の汗を拭い

ながら

打席に入る結城を見据える。

(この3番を抑えられるかどうかでこの試合に勝てるかが決まる。)

楊は次のバッターであるクリスとの勝負は分が悪いと感じている。なので楊は延長戦ではクリスを歩かせる事を前提としていた。

ピッチャーとしての楊はクリスと勝負をしたいと思っっているが、今の楊はチームの皆から受けた恩を返そうと貪欲にチームの勝利を求めているのだ。

ノーアウト、ランナー1、2塁の状況でバッターは3番の結城。

状況をしっかりと認識した楊がセットポジションからサインを覗き込む。

何度か首を横に振ってから頷くと、楊は投球モーションに入る。

1球目。

楊がアウトコースにカーブを投げ込むと結城は見逃した。

判定は…？

「ボール！」

際どいコースだったが判定はボールでワンボール、ノーストライク。

楊は微塵も動揺せずキャッチャーの返球を受け取る。

二度セットポジションからサインを覗き、頷いた楊が投球モーションに入る。

2球目。

楊はインローのボールゾーンにフォークを落とす。

結城のバットが空を切る。

「ストライク！」

これでワンボール、ワンストライク。

平行カウントに戻した。

だが、マウンドの楊は空振りをした結城のスイングに冷や汗を流す。

(青道の打者は4番のクリスに注目が集まりがちだが、この3番もいいバッターだ。)

楊は乱れた気持ちを立て直すために牽制などを入れて間を取る。

(臆せば持つていかれる。退けば後悔が残る。勝負に行け、楊 舜臣！)

気持ちを奮い立たせた楊が打席の結城を睨む様に見据えた。

その楊の視線に勝負に來ると感じた結城は気を引き締める。

そんな状況で投げられた3球目。

楊はインローにボール1つ外れるツーシームを選択した。

リリースの瞬間にベストボールと分かる感触だった。

スイングを始動した結城の姿が楊の目に映る。

ガキッ！

詰まった打球音が楊の耳に響いたが、結城がフルスイングした打球は三遊間を抜けて

レフト前に転がっていった。

楊は祈る様な気持ちでキャッチャーのカバーリングに入る。

レフトが打球を素早く処理してバックホームの返球をすると、

2塁ランナーだった小湊は3塁で止まった。

これでノーアウト満塁の状況で4番のクリスと勝負をする事になった。

楊の心に僅かな絶望が過る。

そして、打席に入ったクリスの姿に威圧感を感じた楊は背中に震えが走る。

楊は右手で心臓を叩く様にして己を奮い立たせる。

(相手は同じ高校生…。抑えられない相手じゃない！)

気持ちを強く持った楊がしっかりと腕を振ってボールを投げ込む。

だが…。

カキンッ！

クリスが打った打球は無情にも遊撃手の頭を超えて、左中間に深く転がっていったのだった。



## 第121話★

青道高校と明川学園の試合は3-0で青道が勝利した。

ちなみに俺は延長10回まで投げきってノーヒットノーランを達成したぜ！

10回裏のツーアウトまでは完全試合だったんだけど、球数が110球を超えた辺りから

スタミナ切れで細かいコントロールが乱れて、最後の打者を歩かせちゃったんだよね。

その結果10回の裏、ツーアウト、満塁、そして一発が出れば逆転サヨナラの状況で

相手の打者は4番バッターという熱い状況になってしまった。

まあ、その熱い状況のおかげでモチベーションが上がって疲れを忘れられたから

ノーヒットノーランを達成出来ただけだね。

そうじゃなかったら甘いコースに投げて打たれてただろうなあ…。

「葉輪。」

声を掛けられたので振り向くと、そこには楊がいた。

「夏よりも更に成長していたな。」

「楊こそな。」

「いや、最後の最後にプレッシャーに負けた俺はまだまだだ。」

そう言っただけで楊は苦笑いをしたが、その表情はどこか嬉しそうだった。

「今日の様な試合が出来るのなら、本当に日本に来たかいたが思ったと思う。また投げ合おう。」

そう言うので楊は軽く右手を上げて去っていった。



青道高校と明川学園の試合が終わった頃、某掲示板ではまたもやお祭り騒ぎになっていた。



【怪物】 パワプロを応援するスレ9 【若者の人間離れ】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします。

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

624：ノーノーキタ——！

627：惜しい！あと1人でパーフェクトだったのに！

631：まあ最後は明らかにスタミナ切れだったしノーノーでも十分やろ

635：むしろ歩かせた後にスイッチ入ってなかったか？

637：635∨ボールキレツキレやったなw

642：なんであの場面であんなボールを放れんねん！心臓どうなってるんや！

646：642∨あの場面ワイやったら吐く自信あるわw

651：やっぱり継投なんかせんで最後までパワプロに放らせたらええねん

653：651∨いつの時代の人間だよw投手の分業が当たり前の時代に何言ってるんのww

657：653〈せやけど先発完投はロマンがあるやん

663：657〈それで何人の才能が潰されてきたと思ってるねん

670：663〈まあもちつけ

688：しっかしパワプロはこれで何回目のノーノーなんや？

695：ホンマに何を食ったらあのガタイとボールが手に入るんや？

707：695〈プロテイン：ですかねえ？

713：そーういや決勝の相手はどこやの？

718：713〈稲城実業つてところやな

722：718〈強いんか？

725：722〈成宮っていう左のエースがいる強いチームやで

730：アンチスレでは成宮はパワプロ以上やって盛り上がったる  
なあ

733：730〈パワプロ以上wwwないわwww

739：733〈夏の西東京地区決勝戦でパワプロと互角に投げ  
合ってたで

744：739〈ホンマか？

747：誰か成宮の動画貼ってクレメンス

750：747〈つ【成宮は主人公】

753：750〈ちょwww

758：750〈動画のタイトルwww

761：758〈動画見たら納得するで

763：どれどれ？

770：投手としては低身長で白髪でイケメンのサウスポー…主人  
公属性満載やな

782：770〈主人公なのに真っ直ぐ一本じゃないやん。やり直  
し

785：770〈主人公なのにジャイロボールを投げてない。やり  
直し

789：782、785〈お前らwww

800：成宮ええボールを放るやん。あ、次スレ建ててくるで

803：800〈スレ建て乙

808：こんな小さいガタイでもこんだけのボールを放れるんや  
な。やっぱり才能やろか？

810：ワイはパワプロのファンやけど成宮を応援したくなってき

たわ

8 1 2 : 8 1 0 < その気持ちわかるわ w w w

8 1 5 : 8 1 0、8 1 2 < 裏切者め！

8 1 9 : 確かに成宮は主人公属性やな

8 2 3 : イケメン爆発しろ！

8 2 7 : 8 2 3 < パワプロもイケメンやで

8 3 4 : 成宮が主人公やとパワプロは何なんや？

8 4 1 : 8 3 4 < ラスボス

8 4 8 : 8 4 1 < ラスボス w w w

8 5 3 : 8 4 1 < 確かにラスボスやわ w 誰がパワプロを打ち崩せん  
ねんって話やからな w

8 5 6 : ところでなんで葉輪はパワプロなんや？

8 6 2 : 8 5 6 < 過去スレ見てこい



パワプロに敗れてしまった楊だが、パワプロと互角に投げ合った事  
で

少しずつ注目を集めていくようになった。

球場に訪れた者の中にはパワプロよりも楊のピッチングを熱心に

見ていた者もいる。

楊 舜臣

台湾より来たりし若き野球人の名が、日本に知れ渡る日も近いのか  
もしれない…。

## 第122話

秋の選抜東京地区大会もいよいよ大詰めとなる決勝戦が始まろうとしていた。

決勝戦の組み合わせは青道高校と稲城実業だ。

両校共に絶対的なエースを有する東京地区の強豪校だ。

試合が始まる前から球場は満員となり、多くの者達がパウプロと成宮の投げ合いに

大きな期待を寄せていた。

そんな空気の中で一度汗をかいた成宮は、稲城側のベンチで一人頭から

タオルを被って集中をしていた。

(気をつけるのは4番のクリスさんだけ…あとはチヨロイ。)

集中をしながらも成宮は、青道打線をどうやって抑えるのかを考えていた。

(ヒットは打たれてもどうでもいい。ランナーをホームに帰させなければいいだけだし。)

そう考えた成宮はタオルを外して立ち上がった。

そして…。

「全員振じ伏せる。そして、今日こそはパウプロに勝つ！」

そう宣言をした成宮に、周囲にいた稲城のメンバーは同意する様に頷いたのだった。



秋の大会の決勝戦。青道と稲城との試合は多くの者が予想した通りに

パウプロと成宮の投げ合いになった。

パウプロは5回戦である準決勝からの連投だが、準決勝と決勝の試合には日程に

余裕があったこともあり、片岡はパウプロの先発を決めた。

1回の攻防はパワプロの三者三振のスタートに応える様に、成宮も三者三振に抑える

完璧な立ち上がりを見せた。

2回の表は稲城の4番である原田がセカンドゴロを打ったが、残りの打者はパワプロに三振で抑えられてしまった。

2回の裏は先頭打者である4番のクリスにヒットを打たれた成宮だが、

後続の青道メンバーは全て三振に抑える力投を見せる。

そんな2人の投げ合いは球場にいる多くの者達に延長戦での決着を予想させた。

だが、終盤に突入する7回の表に試合が動いた。

稲城の先頭打者であるカルロスが打席に入った時にそれは起こったのだった…。



(打てない…。何でだ?)

青道の三塁手である増子は思い悩んでいた。

それは3回戦で打ったヒット1本以外は全て凡退していたからだ。

打の青道の5番を任せられる自分が大会で打ったヒットが1本のみ。

この事実が増子に守備の意識を欠けさせる要因になってしまっていたのだ。

(いっそのこと御幸のように完全に狙い球を絞った方がいいんだろうか?)

増子が目を地面に向けて思い悩んでいた事で、球場に潜む魔物が青道に牙を向いた。

ガキッ!

打ち取った打撃音がグラウンドに響くが、思い悩む増子の耳には届かない。

「サードー!」

クリスのコーチングが耳に届いた事で漸く増子の意識はグラウンド



に戻った。

普段であればなんてことはない平凡なゴロ捕球の処理だった。

だが集中力に欠け、一步目の始動が遅れた増子はその平凡なゴロ捕球を弾いてしまう。

増子は慌てた。

ボールを弾いてしまった事で早く送球しなくてはと意識が1塁へと向いてしまう。

増子が伸ばした右手は空を切りボールを掴む事が出来なかった。

そうこうしている内に、カルロスは1塁を駆け抜けていた。

相手のエラーでの出塁であるが、パワプロからの出塁に稲城ベンチが活気づく。

増子は顔を青くした。

自身がやらかしてしまった失態に気付いてしまったからだ。

青道の監督である片岡は積極的なプレーでのミスは咎めない。

だが…。

『青道高校、選手の交代をお知らせします。増子に代わりまして、サード、前園。背番号…。』

球場アナウンスが耳に入った増子は青道ベンチに顔を向ける。

そこには怒りを持った視線で増子を睨む片岡がいた。

「増子さん、ドンマイです！」

選手交代によるプレー中断の間に、マウンドのパワプロが増子の元に戻って来て声を掛けた。

だが、その一言が増子の心に重くのし掛かった。

成宮との勝負は間違いなく1点勝負になる。

その勝負に水を差す様な自身の怠慢なプレーが、チームにピンチを招こうとしていた。

増子は自身の顔を思いつき殴りたい衝動にかられていた。

だが、それをすれば目の前のエースの心を乱してしまうかもしれない。

だから、増子はただ一言。

「すまない、パワプロちゃん。」

た。そうやって増子は、前園と交代してベンチに下がっていったのだっ

## 第123話

秋の選抜東京地区大会の決勝戦である青道と稲城の試合。

終盤となる7回の表に稲城はパウプロからノーアウトでランナーが出塁する事に成功した。

この出塁は青道の三塁手である増子のエラーによるものだが、

ここまでパーフェクトに抑えられていた事もあり、稲城ベンチからは歓声が上がった。

そして、1塁に出塁したカルロスはこの歓声が聞こえない程に塁上で集中していた。

(パウプロは牽制は上手いがクイックはそれほどでもない……。スタートを間違えなければ、

クリスさんの肩でも間に合う。)

カルロスはシニア時代から走塁には定評があり、優秀な選手だった。

だが、シニア時代は丸亀シニアに阻まれて一度も全国大会の経験が無い。

(鳴なら青道を抑えてくれる。パウプロ相手にノーアウトでランナーに出れる

チャンスなんてもう無い。絶対に盗塁を成功させる！)

カルロスがリードを取ると、クリスのサインでパウプロが牽制を入れる。

牽制の速さとタッチに適した位置に投げ込まれるコントロールが、安全に帰塁出来るリードを取っていたカルロスに冷や汗を流させる。

立ち上がったカルロスはユニフォームの汚れも気にせず二度リードを取る。

そしてパウプロが投球モーションに入った瞬間、カルロスはスタートを切った。

会心のスタート。

カルロスは走塁中にセーフを確信した。

だが、盗塁を予測していたクリスはパウプロに高めのフォーシームを要求していた。

立ち上がりながら捕球をしたクリスが素早く2塁に送球する。

一度手術をしたとは思えない矢の様なボールがあつという間に2塁へと到達する。

ベースカバーに入った倉持が捕球をして滑り込むカルロスにタッチをする。

判定は…？

「セーフ！」

間一髪でセーフ！

この会心の盗塁にカルロスは2塁の塁上で吠えた。

パウプロを相手にノーアウトで得点圏にランナーが進んだ状況に、稲城ベンチだけでなくスタンドからも歓声が上がった。

この歓声は稲城を応援しているからだけでは無い。

カルロスの全力プレーが見ている者達を魅了したからだ。

このワンプレーが球場の空気を稲城側に呼び込む。

打席の白河は既にバントの構えだ。

稲城の狙いはワンアウト、3塁の状況を作る事だ。

パウプロ相手に連打は望めない。

ならば外野フライ、もしくは単打でも確実に一点を取れる状況にしたいのだ。

白河はパウプロが投げ込んだボールを1塁方向に転がした。

これでワンアウト、3塁の状況で稲城は3番バッターを迎えた。

外野フライ、スクイズと色々と考えられる状況に稲城を応援している者達の

得点への期待が高まっていく。

そんな状況にクリスは大胆なシフトを取った。

外野を極端な前進守備位置に置き、内野もスクイズをさせない様に前進守備にしたのだ。

スタンドから青道の守備位置を見ると、全員で内野の守備をする様に見えた。

スタンドの観客達はざわめいた。

それこそ外野の定位置まで打球が飛ばば確実にヒットになりかねないシフトなのだ。

この極端なシフトに、打席に入った稲城の3番バッターは力んでしまった。

三度バットを振るも、バットはパワプロのボールに当たることは無かった。

これでツーアウト、ランナー3塁。

わずか一本のヒットが果てしなく遠い。

稲城を応援している者達の間には落胆の気持ちが始まった中で、稲城の4番バッターである原田が打席に向かうのであった。

## 第124話

秋の選抜東京地区大会の決勝戦。

青道と稲城の試合は7回の表の稲城の攻撃、ツーアウト、ランナー3塁の状況。

打順は4番バッターの原田である。

原田は動画で何度も見返したパワプロのボールをイメージして素振りをする。

（長打はいらない。内野を抜けさえすればカルロスはホームに帰れる。）

原田は恵体であり、その長打力は東京地区でも上位に入る。

その原田がバットのグリップを余して打席に入った。

（1点でいい、1点でいいんだ。1点あれば今日の成宮なら勝てる。）

今日の成宮は秋の大会を通じて1番の出来だと原田は感じている。

それもその筈で、成宮は今日のパワプロとの投げ合いだけを見越して調整を重ねてきた。

今日という日にしっかりと仕上げてきた成宮の執念も見事だが、

その成宮をも上回る怪物が原田達の前にいる。

（葉輪 風路…。こいつと同時代にプレー出来る事を喜ぶべきか、嘆くべきか…。）

マウンドに笑顔で立つパワプロの姿に原田は威圧感を感じてしまう。

原田はそれを振り払う様に顔を両手で張った。

（試合に集中しろ！夏の悔しさを思い出せ！）

打席に入った原田は念入りに足場を作っていく。

（綺麗なヒットはいらない。だが、バットは振り切れ！迷えば飲み込まれるぞ！）

己を奮い立たせた原田は、ただひたすらに打席に集中するのだった。



原田が打席に入って足場を作っていた頃、急遽試合に出場する事になった青道の前園は、

三塁の守備につきながら早鐘の様に鳴る自身の心臓の音を自覚していた。

(なんやねん、これは。なんでこんなに緊張すんのや！)

前園は何度も深呼吸を繰り返す。

しかし、その緊張は解れない。

(あかん、膝が震える…。折角のチャンスやのに。)

前園は同じ1年生である倉持とパワプロに目を向ける。

(倉持、パワプロ、お前らは緊張せえへんのか?)

倉持はどんなボールでも捕ると言わんばかりに鋭い視線で打者を見ている。

パワプロはいつもと変わらずにマウンドで笑顔だ。

(なんでこの状況で笑えるんや? どうやったたらそんな風に笑えるんや?)

夏の大会ではスタンドで何度も見てきたマウンドのパワプロの笑顔。

それが、今の前園にはグラウンドの誰よりも輝いて見えた。

(なんやビビっとるのが阿呆らしくなってきたわ。)

ため息を1つ吐いた前園の身体からいい感じに力が抜けた。

前園はグローブをパンツと叩く。

「パワプロ！ 打たせてええで！ 全部さばいたるわ！」

その前園の声キツカケとなり、他の青道メンバーも声を出していく。

声を出していく青道メンバーはパワプロにつられる様に笑顔になつていった。

(なんや、俺も笑えるやないか。)

気付けば他の青道メンバーと同じ様に笑顔になつていた前園は、膝の震えも止まっていたのだった。



球場に声が枯れるのも気にしない両校の応援が響き渡る中で、パワプロと原田の勝負が始まった。

1球目。

クリスのサインに頷いたパワプロは原田の打ち気を外す様にアウトローにカーブを投げ込んだ。

原田は態勢を崩されながらもバットを振りきるが、バットは空を切った。

これでノーボール、ワンストライク。

1球牽制を挟んでからの2球目。

パワプロはインハイにフォーシームを投げ込んだ。

先程のカーブが目には焼き付いていたのか、原田はボールの下を振ってしてしまう。

これでノーボール、ツーストライク。

簡単に2球で追い込まれた原田はタイムを取って1度打席を外す。何度かしっかりとバットを振りきる素振りを見ると、原田は打席に

戻る。

そして3球目。

パワプロはインローにスライダーを投げ込んだ。

夏の大会で打ち取られたスライダーをイメージしていた原田が待っていたボールである。

原田はボールの軌道をイメージしてバットを振りきる。

だが…。

ガキッ!

鈍い打撃音がグラウンドに響いた。

原田は夏の大会で空振りをしたパワプロのスライダーを想定して、この秋の大会までバットを振り続けてきた。

だが、パワプロのスライダーは原田の想定を超えて成長していたのだ。

完全に打ち取った打球が三塁線に転がっていく。



いや、打ち取り過ぎた打球だった。

打球は三塁と本塁のちょうど中間辺りに止まりそうな弱々しい勢いで転がっている。

この打球に前園は猛チャージをかけていく。

だが、前園の一步目は遅れていた。

三塁手の守備機会において右打者の時は引っ張りの強い打球がくる事が多い。

そして右打者の原田がバットを振りきった事で、前園は一瞬強い打球を想定したのだ。

しかし、原田は完全に打ち取られたボテボテのゴロを打った。

そして原田は手に打感を感じた瞬間に打球の行方を見ずに、一塁に全力で走り出していた。

打球に猛チャージをかけながら前園の身体に直感が走る。

(グローブで取ってたら間に合わん！)

弱々しく転がる打球を素手で掴んだ前園が、ランニングスローで一塁の結城に送球した。

だが、握りが不十分であった前園の送球は高く浮いてしまった。

青道の一塁手である結城が飛び上がり、前園の送球を捕球をしようとする。

そして、結城が飛び上がった瞬間…。

「ウオオオオオオオオオ!!」

原田が雄叫びを上げながら一塁にヘッドスライディングで飛び込んだ。

結城の着地と原田のヘッドスライディングが重なる。

一瞬の静寂が球場を包み込む。

判定は…？

「…セーフ！」

一塁の塁審の手が大きく横に拡げられると、球場全体から歓声と悲鳴が沸き起こる。

そしてそれらの声で待望の1点を得た事を認識した原田は、片手を天に突き上げて雄叫びを上げたのだった。

## 第125話

稲城の原田が片手を天に突き上げて雄叫びを上げていた時、青道の前園は

悔しさのあまりに両手を膝について歯を食い縛っていた。

そんな前園の元にタイムを取ってプレーを一度中断したパウプロがやってきた。

「ゾノ、ナイスプレー！」

親指を立てながらそう言うパウプロに前園は顔を上げる事が出来なかった。

「すまん、パウプロ。」

「なんで謝るのさ、積極的ないいプレーだったじゃん。」

パウプロがそう言うが、前園はまだ気落ちしたままだ。

その理由は送球ミスをしなければアウトに出来たという確信が前園にあるからだ。

前園の確信を後押しするようにスコアボードにはEのランプが光っている。

「ゾノ、そんな落ち込む必要ないって。メジャーリーガーみたいな

プレーでカツコ良かったぞ。」

「はあ？」

パウプロの言葉に前園は呆けた様な声を出してしまう。

「カツコ良かったかはともかく、増子よりはいいプレーだったんじゃないかな？」

「ヒヤハ、いいチャージだったぜ、ゾノ！」

青道の二遊間コンビがそう言うと言っていると前園は目を丸くした。

「まだ試合は終わったわけじゃない。前園、反省するのは試合が終わってからだ。」

「哲さん……。」

結城の言葉で前園の身体に熱が戻ってくる。

前園が顔を上げて見渡すと内野の皆は諦めた表情ではなく、逆転を見据えて

ギラギラと輝いていた。

「この回はあと一人だ。しっかりと守って反撃するぞ！」

「オオ———！」

結城の檄に青道メンバーが応えると、強い意思を持った目で守備に戻ったのだった。



稲城の5番バッターをパワプロが三振で抑えると、青道メンバーは成宮を攻略しようとして

円陣を組んで気合いを入れた。

だが、青道打線のバットからは快音が響かなかった。

なぜなら、延長を見据えて打たせて取るピッチングでスタミナを温存してきた成宮が、

振じ伏せるピッチングに切り換えて全力で青道打線を抑えにかかったからだ。

青道打線は左右を幅広く使い、緩急を活かす成宮のボールを中々捉える事が出来ない。

唯一クリスがフェンス直撃となるツーベースヒットを打ったが、

後続が続かずに得点にはならなかった。

ここまでクリスが2安打、結城が1安打しているが、青道打線全体で考えれば

成宮に完全に抑え込まれてしまっている。

試合はそのまま0-1で進んでいき9回の裏。

声を枯らしながらの青道の応援が球場に響く中でマウンドに上がった成宮は、

マウンドの上から堂々と青道打線を見下ろしていた。



(あと1回、抑えればパワプロに勝てる。)

9回の裏の投球練習を終えた成宮は、ロージンバグを手にしながらそう考える。

成宮はロージンバグをマウンド横に置くと、打席に入ったクリスを睨み付ける。

（今日こそパワプロに勝つんだ。邪魔すんなよ、クリスさん！）

原田のサインに頷いた成宮が、クリスに立ち向かう様にボールを投げ込んでいく。

ワンボール、ワンストライクの後の3球目。

成宮は決め球のチェンジアップをクリスに左中間に運ばれてしまった。

これでノーアウト、2塁のピンチ。

気持ちを切り換えるために成宮はマウンドの上で大きく息を吐く。（クリスさんを塁に出すのはオツケー。ホームランじゃなけりや俺の勝ち。）

打たれて乱れた気持ちを飲み込んだ成宮は、次のバッターに集中する。

成宮は5番バッターの前園に強い打球を三遊間に打たれたが、白河のファインプレーに

助けられてワンアウトにした。

そして続く6番バッターの門田は三振に抑えてツーアウトにまで辿り着いた。

最後のバッターは7番の白州。

だが、青道の監督である片岡はここで御幸を打席に送った。

御幸の勝負強さは東京地区では既に定評となっている。

その御幸が打席に送られてきた事で原田はタイムを取ると、稲城の内野陣をマウンドに集めた。

「雅さん、一也を歩かせてもいいよ。」

成宮の一言に稲城のメンバーは驚いて目を見開いた。

「成宮…。」

「一也を歩かせれば次は楽勝な相手だからね。パワプロに勝つんならその方が確実だし。」

そう言う成宮を原田は睨む様に見据える。

「成宮、それでお前は葉輪に勝ったと胸を張れるのか？」

「……めん、雅さん。俺らしくなかった。」

成宮は気恥ずかしさを隠すように目を逸らす。

そんな成宮の様子に、稲城の内野陣は笑顔を見せた。

「正直、御幸との勝負は打球がどこに飛ぶかわからない。皆、集中してくれ！」

「二応ー」

原田の言葉に返事をした稲城の内野陣は声を出しながら守備位置に戻っていく。

（一也、いいチームだろ？俺達と一緒に来なかった事を後悔させてやるよ！）

不敵に笑った成宮は原田のサインに頷くと投球モーションに入る。

1球目。

成宮はアウトローへのカットボールを投げ込む。

高さは甘かったが、アウトコース一杯に投げ込まれたカットボールを御幸は見逃した。

主審の判定は……？

「ストライク！」

主審の判定を当然と言わんばかりの表情で原田からの返球を受けた成宮は、

マウンドから御幸を見下ろしていく。

（夏の様には打たせねえよ、一也！）

原田のサインに頷いた成宮がボールを投げ込む。

2球目。

成宮はインハイのボールゾーンにフォーシームを投げ込んだ。

御幸はこのボールにバットが出そうになった様子でスイングを止める。

主審の判定はボール。

ワンボール、ワンストライクの平行カウント。

3球目。

原田のサインに迷わず頷いた成宮はアウトローにスライダーを投げ込んだ。

背中から出てくる様な軌道のボールに、御幸のバットが反応する。カキッ！

詰まった様な打撃音を残した打球は、3塁線を切れてファール。これでワンボール、ツーストライクと御幸を追い込んだ。

そして勝負の4球目。

成宮は原田のサインに迷わず頷いてボールを投げ込む。

成宮が決め球に選んだのはチェンジアップだ。

シニア時代にパワプロの助言で握りを変えた成宮のチェンジアップは、

フォーシームと同じ腕の振りでありながらボールが来ない。

それだけでなくフォークの様な落差も持つこのチェンジアップに、成宮は絶対の自信を持っていた。

クリスには上手く左中間に運ばれたが、それでも成宮は変わらずに自身の決め球を信じていた。

そんな成宮のチェンジアップを御幸は待っていた。

そして…。

カキンッ！

金属バットの快音を残して打球はセンター方向に飛んでいく。

成宮が即座に打球方向に振り向くと、その視線の先には目を切つて全力で

打球を追うカルロスの姿があった。

カルロスがその俊足で必死に打球を追う。

打球は外野の選手にとって最も難しい真後ろの方向だった。

打球にはあまり角度は無いが、勢いは衰えずに飛んでいく。

そしてフェンス際、カルロスは衝突を恐れずに飛び付いた。

ドガッ！

外野フェンスに衝突したカルロスが弾かれた様にグラウンドに転がる。

ボールの行方は…？

球場を静寂が包む中で、カルロスのグローブがゆっくりと上に掲げられた。

「アウト！ゲームセット！」

カルロスのファインプレーに球場が歓声と悲鳴に包まれる。

そして稲城のメンバーが集まっていくマウンドの上で、

成宮は人目を忘れて涙を流したのだった。

## 第126話★

秋の選抜東京地区大会の決勝戦である青道と稲城の試合が決着した直後、

某ネット掲示板ではいつも以上に大騒ぎになっていた。



【怪物】パワプロを応援するスレ14 【若者の人間離れ】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が立てるように

256：ギャ——!!!

259：負けた——!!!

265：ノーヒットで負けるとか高校野球って怖いわあ…

268：7回表の先頭打者の時のエラーで完全に流れが稲城にいつたな

272：なんやねんあのか○サード！2軍からやりなおしてこいや!!!

275：青道は3軍まであるから3軍からやり直しやな

278：あのか○サードもそうやけど交代したサードもあかんやろ

289：278∨交代したサードのプレーはしようがないと思うで



293:289<なんでや!あいつが送球ミスせなんだら無失点やぞ!

296:293<ワイはサード経験者なんやけど右打者の時って必然的に引つ張りの打球が

くるんよ。それで強い打球が多いんやけどあのボテボテのゴロやろ?

稲城のガタイのいい4番があんだけバットを振ったらそら強い打球がくると思つて

一歩目が遅れるわ。その後のチャージは良かったし素手でボールを捕つたのも

ワイからしたらナイスプレーやな。送球ミスはあかんけど総じて見れば積極的に

アウトを取りにいったナイスプレーや!  
長文すまん

301:296<熱く語るやんか...いいぞもつとやれ!

304:296<なんで送球ミスしたんやろ?

307:304<内野手はスピード勝負なところがあるからボールの握りかえがまともに

出来ん時があるんよ。せやからボールの抑えが効かなくて浮いてもうたんやろね

310:307<詳しいなwww

315:310<ワイは軟式やけど全国大会優勝の経験があるんやで

3 2 2 : 3 1 5 < ほえ >

3 2 6 : 3 1 5 < 硬式はやらへんの？

3 2 9 : 3 2 6 < 元々は硬式やったんやけどデッドボールで腕の骨にヒビ入ってから

怖くて打席に立てんよ

3 3 4 : 3 2 9 < ヘタレ w w w

3 3 7 : 3 3 4 < それは言い過ぎやろ！硬球ってホンマに硬くて痛いんやぞ！

3 4 3 : 3 3 4 < せや！冬場のバッティング練習で鬼詰まった時の痛みが

お前にわかるんか?!

3 4 8 : 3 4 3 < あれはホンマにキツイんよね…

3 5 4 : 3 4 3 < 雪国のワイ高みの見物

3 9 6 : ワイ仕事で見れへんかったんやけどどうなったんや？

4 0 1 : 3 9 6 < 過去レス見たらわかるやろ？

4 0 5 : パワプロが9回を105球18奪三振の被安打0で1失点して負けやな

4 0 9 : 4 0 5 < すまん意味がわからん

4 1 3 : 4 0 9 < ノーヒットピッチングをして味方のエラーでの失

点で負けたんや！

4 1 6 : 無援護!...: 圧倒的無援護!

4 2 0 : これはもうパウプロが自援護するしかないわな W W W

4 2 6 : 4 2 0 < そういうけどパウプロのバッティングはどうなんや?  
や?

4 3 2 : 4 2 6 < インコースを捌くのは上手いんやけどアウトコースはあかんな

4 3 5 : なんでアウトコースを打てんのや?

4 3 8 : 4 3 5 < ワイはピッチャー経験者なんやけど打席ではまず  
当てられへん様に

気をつけるからやろな

4 4 4 : パウプロはピッチャーに専念した方がええやろ

4 4 9 : エースで4番ってカッコいいやん

4 5 2 : 4 4 9 < 今の時代にそれは厳しくないか?

4 5 6 : ワイはパウプロのピッチングが見ればどうでもええわ

5 2 2 : しかしこれで春の選抜でパウプロのピッチングが見れへん  
ようになったんやな

5 2 7 : 5 2 2 < そうとは限らんぞ

532:527<ん?どういうことや?

535:532<秋の選抜東京地区大会に優勝した高校は秋の神宮大会に出れるんやけど

秋の神宮大会で優勝した高校が所属する地区は春の選抜の  
出場枠が1つ増えるんよ。それで出場する高校は抽選やけどな

542:535<つまり...どういうことだっばよ?

546:542<稲城が秋の神宮大会で優勝すれば青道が春の選抜に

出れる可能性があるってことや!

551:ちよつと稲城を応援するスレを建ててくる!



パワプロとの投げ合いを制したことが話題となり、  
成宮は高校野球界で大きく評価される様になった。  
青道が敗れた事で秋の神宮大会には稲城が出場する事になったが、  
そこでの成宮のピッチングに多くの期待が集まるのだった...

## 第127話

「片岡先生、貴方は青道高校野球部を数年ぶりの甲子園に導き、更に優勝もしました。」

OB会からの突き上げの声は大きいですが、秋の大会の結果だけで辞任の答えを

出すのは早いでしょう。」

秋の大会の決勝に敗れてから翌日、片岡は青道高校野球部の監督を辞任する形で責任を取ろうとした。

これは片岡の采配などに青道高校野球部のOB会から突き上げがあつた事も理由の1つだ。

しかし、青道高校の校長は片岡が元は青道高校の生徒であつたことや、

現在も教員として青道高校の生徒を導いている事で片岡を引き止めたのだ。

そんな校長に片岡は頭を下げる。

「ご厚意、感謝します。」

「マスコミやOB会には此方で対応しておきます。今は敗れて傷心の生徒達を

今一度立ち上がるために導いて上げてください。」

片岡はもう一度頭を下げると校長室を退室した。



片岡が辞任の意を校長に伝えた一件の後、グラウンドに姿を見せた片岡に、

高島が片岡に來客がいると伝えてきた。

「久しぶりだな、鉄心。」

「榊監督!?!」

榊 英二郎

青道高校前監督であり、片岡の青道高校野球部時代の恩師である。

その榊が青道高校野球部のグラウンドに片岡を訪ねてきたのだ。

「秋の大会、見させてもらったぜ。」

「…己の未熟を恥じるばかりです。」

神妙な表情を浮かべる片岡に対して、榊は面白いものを見るように笑みを浮かべている。

「勝ちに徹すれば教育の一環が云々言われ、教え子に機会を与えれば勝ちが云々…。」

監督つてのは難しいもんだよな。」

榊の言葉に片岡は返事を返さずに頭を下げたまま黙している。

「だけどよ、教え子が成長した瞬間や、勝って心の底から喜んでる笑顔を見ちまったら、

もう止められんねえよなあ。」

「榊監督…。」

頭を上げて目を見開いている片岡の表情をみた榊は不敵な表情を浮かべた。

そして…。

「逃げんなよ、鉄心。」

そう言つて片岡の肩に手を置いた榊は、踵を返して去つていった。片岡は榊の姿が見えなくなるまで頭を下げ続けたのだった…。



秋の大会の翌日、落合さんが正式に青道野球部のコーチになるという事で挨拶があつた。

その挨拶の後はオフシーズンという事もあつて各自の課題を自覚させるといった感じで、

落合さんは皆に考えさせていった。

そんな感じで皆が各々の課題を考えて少し経つと、来客があつて遅れていた

片岡さんがグラウンドにやってきた。

なんか片岡さんの眉間の皺が和らいでいるな。

なにかあったのかな？

哲さんの号令で挨拶をすると、片岡さんの話が始まった。

秋の大会は決勝で負けたが春の選抜が絶望になったわけではない。  
なので心の準備を怠らぬ様にとの事だ。

俺達が返事をする、次に増子さんに2軍行きが言い渡された。

これは俺以外の皆が予想していたようで特に動揺は見られなかった。

増子さん本人も納得して受け入れていた。

それとレギュラーメンバーの白紙も言い渡された。

夏に甲子園で優勝した事でどこか気が緩んでいた所があるかもしれないそうだ。

なので今一度気を引き締めるためにレギュラー争いをしてお互いに切磋琢磨するようにとの事。

よっしゃ！エース争いは望むところだぜ！

え？俺は1軍当確？

解せぬ…。

まあそんな感じでレギュラー争いに皆が燃える中で練習が始まったのだが、

そんな中で俺と純さんは落合さんに呼び出されたのだった。

## 第128話

パウプロと伊佐敷が呼び出された場所に到着すると、そこに待っていた落合が話を始めた。

「葉輪、伊佐敷、外野守備をやってみないか？」

「外野守備？」

パウプロと伊佐敷は異口同音で声を上げる。

「ああ、勘違いするなよ、ピッチャーを止めろっていうわけじゃない。」

落合のその言葉にパウプロと伊佐敷はどこか安堵した様な笑みを浮かべる。

「青道の投手事情はお前達もわかっていると思うが、葉輪と丹波の先発2枚と

川上と伊佐敷のリリーフ2枚って感じだ。」

落合は確認をする様にパウプロと伊佐敷に目を向けると、2人は揃って頷く。

「黒土館との試合で経験したと思うが、継投をした時にリリーフが崩れると、

現状の投手起用では対応しきれなくなる時がある。そこで、お前達が投げない時に

外野を守る様になっていれば、ベンチに下げずにいつでもマウンドに送れる様になる。」

落合は一端言葉を区切るとパウプロと伊佐敷の反応を伺う。

伊佐敷の反応は悪くない。

だが、パウプロの方は良くない。

「わかりやすく言えば、市大三高の真中の様な感じで起用出来る様になるんだが…。」

「どうだ？外野守備をやってみないか？」

「はい！俺はやりませう！」

伊佐敷は直ぐに返事をしたが、パウプロは腕を組んで悩んでいた。

「なんだ、パウプロはやんねえのか？」

「純さん、俺は投手練習の時間が減るんならやりたくないですね。」



そう言うパワプロに落合は「ほう。」と息を吐く。

(練習嫌いの奴は腐る程見てきたが、練習が減るのを嫌がるのは珍しい。)

落合はパワプロに感心しながらも話し出す。

「葉輪、練習は減らないぞ。外野守備練習が増えるだけだ。」

「そうなんですか？ならやります！投げるのが一番好きですけど、他にも好きですから！」

そう答えるパワプロの姿に落合は頭を掻きながら考える。

(葉輪は練習のし過ぎに注意しなければならんな。疲労蓄積で怪我とかシャレにもならん。)

余談ではあるがパワプロは特殊能力があるので、どれだけ練習しても怪我はしない。

間違いなく多くのスポーツマンが羨む能力であろう。

こうしてパワプロと伊佐敷の練習メニューに外野守備練習が追加された。

そして、青道野球部の外野陣はポジションを奪われない様に更に練習に励んでいくのだった。



パワプロ達が落合と話をしていた頃、稲城実業の野球部の部室で成宮が愚痴を言っていた。

「雅さん、大丈夫だよ。練習出来るって。」

「成宮、お前は秋の大会を一人で投げ抜いたんだ。秋の神宮大会も控えている。」

「しっかりと疲労を抜かなければ投げさせん。」

「ちえつ。」

秋の選抜東京地区大会に優勝した瞬間に成宮が泣いた事は稲城野球部の皆知っている。

それ故に成宮は燃え尽きたりしないかと考える者が少なくなかったのだが、

当の成宮はやる気に満ちていた。

「成宮、葉輪に勝つても満足してないのか？」

原田の問いに成宮は不満気に眉を寄せる。

「雅さん、青道には勝ったけどパワプロには勝ってないよ。」

成宮の言葉に原田は驚くが、同時に納得も感じていた。

「あいつはノーヒットだったのに俺は4本ヒットを打たれた。

どう見ても投げ勝ってないじゃん。」

「ただ試合に勝つだけじゃ満足出来ないか？」

「当たり前じゃん！俺の方がパワプロよりも上だって証明出来ないし！」

成宮の負けず嫌いに原田は笑ってしまいそうになるのを堪える。

「その割には青道に勝った瞬間に泣いていたみたいだがな？」

「あれは！その…、ちよつと砂が目に入ったただけだって！」

成宮のその言い訳に原田は堪えきれずに笑ってしまった。

「あ——！？雅さんヒデエ！」

「ぷっ！クク…すまん、成宮。」

原田は笑いながらも安堵する。

俺達のエースは大丈夫だと…。

「雅さん、神宮でも優勝するよ。」

成宮の宣言に原田は頷く。

「大会に出るからには当然だ。」

「うん。優勝して、春の選抜に青道を引っ張り出す。そして、甲子園でパワプロに投げ勝って

俺の方が上だって証明してやる！」

そう宣言する成宮に原田は拳を差し出す。

そして拳を合わせた2人は、気合い十分な表情で練習に向かうのだった。

「成宮、お前は見学だ。」

「くっそ——！！」

## 第129話☆

俺と純さんが外野守備練習を始めてから十日程の時間が経った。純さんは以前に外野へのコンバートを考えていた事もあって、かなり順応が早いと思う。

俺は外野守備の為に特殊能力を取得してその感覚に慣れているところだな。

今日の練習前のアップをしている時に、俺はステータス画面を開いて能力を確認する。

### 基礎能力

最高球速：149 km (※155 km)

制球：S

スタミナ：B

変化球1：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー4 (※7)

投手能力は球速を2 km、スタミナとチェンジアップ、そして高速スライダーを

1ランクずつ成長させた。

ポイントはまだまだあるんだけど、球速を成長させる時の身体の負担が以前よりも

大きくなっているんだよね。

まあ、それだけ150 km近い球速のボールを投げるといっことは凄いいことなんだろうな。

野手能力はまだ成長させていない。

オフシーズンは長いからじっくりと感覚を慣らしながら成長させていくつもりだ。

最後に特殊能力を確認する。

## 特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『キレ◎』

『牽制○』

『バント○』

『クイック○』

『サブポジ：外○』

特殊能力は新しく『クイック○』と『サブポジ：外○』を取得した。  
能力の詳細はこんな感じだ。

『クイック○』

- ・クイックが上手くなる特殊能力である。
- ・クイック○はクイック投法時に球威が落ちにくくなる効果がある。
- ・上位能力である『クイック◎』はクイック投法時の早さが上がる効果がある。
- ・金特殊能力として『スーパークイック』が存在する。

『サブポジ：外○』

- ・サブポジションである外野守備全般が上手くなる特殊能力である。
- ・フライ及びライナーの打球に対する落下地点を察しやすくなる。
- ・上位能力である『サブポジ：外◎』は打撃音で打球方向を察知出来る様になる。

といった感じの特殊能力だ。

『クイック○』は感覚に慣れ次第、上位の『クイック◎』に成長させるつもりだ。

これで倉持やカルロスみたいな足が早い奴にも盗塁させないぜ！

『サブポジ：外○』に関しては様子見かな。

俺はあくまで投手である事に拘りたい。

何故なら俺が憧れたのは投手をしていた片岡さんだからだ。

それに、やっぱりマウンドで投げる方が楽しいんだよね。

よし！アツプ完了！

さあ、練習頑張るぜ！

そして全体練習を終えて各ポジションの練習に移ろうとしていた時に、

俺の所に東さんがやって来たのだった。



「葉輪、ちよつとええか？」

「なんですか、東さん？」

東さんに声を掛けられたので立ち止まって返事をする。

「これから投げ込みするんか？せやったら俺の打撃投手をやってくれへんか？」

「あゝ、残念ですけどこれから外野ノックを受けるんですよ。」

秋の選抜地区大会前なら次の練習は投げ込みだったんだけど、外野守備練習をする様に

なつてからは投球練習前に外野守備練習をする様になったのだ。

理由は楽しみは後にとつておきたいからである。

「そうか…邪魔してすまんかったな。」

「いえいえ、外野ノックが終わってからでよければ打撃投手をやりますよ。」

「お？せやったら頼むわ。バットを振って待ってるで。」

そう言つて東さんは笑顔になった。

「そうだ。東さん、俺が行くまでノリの相手をしてくれませんか？」  
「川上の？構へんで。あいつは秋の大会では不甲斐ない姿を見せとつたからな。」

葉輪が来るまでしつかりとしごいといたるわ。」

「ははは、お手柔らかにお願いしますね。」

東さんが手を振りながら去った後、俺は外野ノックが行われる練習場所に向かうのだった。

## 第130話

パウプロが外野ノックを受け始めた頃、青道高校正門前に2人の中学生が姿を見せた。

「東条くん、沢村くん、ようこそ青道高校へ。」

正門前で2人の中学生を出迎えたのは高島である。

この東条と沢村は高島がスカウトの声を掛けて今日の学校見学に誘ったのだ。

「えっと、今日はお誘いいただきありがとうございます！」

「へ？あ、っと、ありがとうございます！」

少しぎこちない挨拶をした東条に続いて沢村も高島に頭を下げた。

高島はそんな初々しい2人にニコリと微笑む。

去年の今頃はパウプロと御幸が青道の学校見学をしたのだが、

その際に2人は高島を礼ちゃんと呼んで教員扱いしなかったのだ。

もつとも、礼ちゃん呼びは今も変わらないのだが…。

「それじゃ案内するわ。2人共、気になる事があつたら遠慮せずに聞いてね。」

東条と沢村は高島の案内で青道高校内を歩き始める。

そして校舎内や野球部専用の練習場等を見回っていく。

その見学の途中、金属バットの音が響き渡るグラウンドに着いたところで、

沢村がふと言葉を溢した。

「これだけ設備を揃えて全国から選手を集めたら、強いなんて当たり前前だろ。」

「は？沢村、何を言ってるんだ？」

沢村の言葉が理解出来ずに東条が疑問の声を上げる。

「こんな勝ちだけを目指す野球が面白いのかよ！野球ってそうじゃねえだろ！」

大声でそう言った沢村はグラウンドで汗を流している青道野球部の者達を指差す。

「東条見ろよ！誰も笑顔じゃねえ！こんな野球が楽しいのかよ！」

「レギュラーの座を勝ち取ろうと真剣に練習してるんだから、笑顔じゃなくても当たり前じゃねえか。」

東条は沢村の言葉に呆れた様にため息を吐く。

東京に在を置く強豪の松方シニアでレギュラー争いをしてきた東条は、都内でも屈指の

強豪である青道野球部の状況に一定の理解を示している。

対して沢村は中学の軟式野球で友人達と楽しく笑顔で野球をやつて来た。

その環境の差が2人の反応の違いに現れていると言えるだろう。

その後、沢村の一言がキツカケで東条と沢村の言い争いが始まってしまふ。

少しの間2人のやり取りを見守っていた高島がそろそろ止めようと口を開こうとしたその時…。

「コラア！何やってんねん、川上イ！」

グラウンドに響き渡る怒声で東条と沢村の言い争いは止まったのだった。



「インコースに投げきらんのは仕方ない！せやけど真ん中にボールを置きにいつてどうすんねん！しっかりと腕を振らんかい！」

「はい！すいません、東さん！」

パウプロに頼まれて川上を打撃投手に指名した東は、頭が痛い思いを堪えて川上を叱る。

東が思ったよりも川上の状態が酷いと感じたからだ。

投球の始めはアウトコースにいいボールを投げ込んだ川上だったのだが、

東がインコースにシンカーを要求すると途端に腕が縮こまってしまった。

「もう一球！インコースや！」

「は、はい！」



東の要求で川上が投球モーションに入る。

すると明らかにアウトコースに投げ込んだ時と比べて力の無いシンカーが、

真ん中付近の甘いコースに放り込まれてきた。

カキンッ！

その甘いボールを東が痛烈に弾き返した。

「あっ…。」

「何が『あっ』や！あんな甘いボール、打たれて当然やろうが！やる気あるんか?!」

「は、はい！！すいません！」

東はため息を吐きたい気持ちを堪えて続きを促す。

「次！アウトコースや！」

「は、はい！」

東の要求で川上が投球モーションに入りシンカーを投げ込む。

すると、サイドスロー独特の横の角度を持つ見事なボールが、

バックドアとなつてストライクゾーンギリギリに入り込んだ。

「しっかりと投げ込めるやないか！なんでそれをインコースに放れんねん！」

「はい！！すいません！」

帽子を取つて頭を下げる川上の姿に東は鼻を鳴らす。

（川上の奴…！アップスにでもなつてもうたんか？オフの間に解消出来ればええんやが…。）

実際の所、川上は元々はノミの心臓であつた丹波に何度も相談したことで、

秋の大会での失敗にある程度の折り合いをつけられるようになっていた。

だが東が放つ強打者としての重圧とドラフト候補をケガさせてはいけないという思いが、

川上にインコースヘシンカーを投げさせるのを躊躇させてしまつているのだ。

そうとは知らずに後輩の現状を心配する東はヘルメットを取つて

頭を搔く。

そんな東に対して…。

「ピッチャーに投げてもらってるのにその態度はねえだろ！」

学校見学に訪れていた沢村が、東に抗議の声を上げたのだった。

## 第131話

沢村が東に抗議の声を上げた頃、外野ノックを終えたパウプロが姿を見せた。

「…何、この状況？」

一見すれば、初めて見る男が東に噛みついてしている様な状況だ。

なんでこうなっているのかわからないパウプロは腕を組んで首を傾げていた。

「よっ、来たなパウプロ。」

そんなパウプロに、少し前から川上と東の練習を見ていた御幸が声を掛けた。

「一也、これってどういう状況なの？」

「ノリにダメ出しをしていた東さんにあいつが噛みついた。」

沢村の行動を理解出来ないパウプロがまた首を傾げる。

「葉輪くん、来たわね。」

「あ、礼ちゃん。」

高島が東条を伴ってパウプロに声を掛けると、東条は背筋を正してパウプロに頭を下げた。

「えっと、東条だったよね？久し振り。」

「はい！来年からよろしくお願いします、葉輪さん！」

東条の挨拶に高島の眼鏡の奥で目が光る。

投手を1人確保したと…。

「それで、あいつは誰なの、礼ちゃん？」

「高島先生よ、葉輪くん。」

1年経っても変わらない呼び方に高島はため息を吐きたい気持ちになる。

高島は資料を捲りながら考える。

(藤原さんに矯正をお願いしようかしら？)

パウプロと貴子が付き合っているのは青道野球部では公然の事実となっている。

故に、パウプロと接点が少ない者が打撃投手を頼んだりするとき

貴子に頼む者も多いのだ。

「彼は沢村 栄純くん。左投げ左打ちのピッチャーよ。」

「沢村？聞いたことないな。」

高島の言葉に御幸が疑問の声を上げる。

「知らなくても仕方ないわね。沢村くんは軟式出身だから。」

御幸は高島の言葉に納得した様に頷いた。

月刊野球王国を愛読している御幸は高校野球やシニアの情報にも目を通してている。

その自分が全く知らない無名の選手を高島がスカウトしてきた事に興味を持った。

そんな御幸につられるようにパウプロも頷いた。

もつともパウプロは同じ部内のメンバーの名前と顔が今も一致しないのだが…。

パウプロ達は今も東に噛みついていて沢村に目を向ける。  
すると…。

「それで、お前はどうしたいんや？」

「俺と1打席勝負しろ！それで、俺が勝ったらあの人に謝れ！」

東と沢村のやり取りをパウプロと御幸は面白そうに見ているが、高島はどうしてこうなったとばかりにため息を吐いたのだった。



時間は沢村が東に噛みついたところにパウプロがやってきた時まで遡る。

(えっ…こいつ、何を言ってるの?)

急に東に噛みついてきた沢村に川上は驚愕している。

川上は正直なところ、沢村が何を言っているのかわからなかった。「打撃練習は1人じゃ出来ねえだろ！投げてもらってるのになんだよそれ！」

東を指差して物申す沢村の姿に川上は目を見開く。

(いやいや！俺が投げさせてもらってるんだって！)

ドラフトで上位指名確実と言われているプロ注目選手である東に投げる機会など

そうあるものではない。

間違いなく川上は貴重な経験をさせてもらっているのだ。

それに、東は言葉はきついが誉める時にはキチンと誉めてくれる。

アウトコースに投げ込んだ時のその一言は確実に川上の自信になっただけなのだ。

川上は恐る恐る東へと目を向ける。

意外にも東は怒っていない。

むしろ沢村の言葉を受け止め余裕すら感じさせている。

(すげえ……。これがプロに行く人の貫禄かあ……。)

川上は東に尊敬の念を抱く。

そして、今日の経験を糧にしようと心に誓った。

そんな川上を差し置いて沢村はヒートアップして東に物申ししている。

そして気が付けば……。

「そんで、お前はどうしたいんや？」

「俺と一打席勝負しろ！それで、俺が勝ったらあの人に謝れ！」

どうしてこうなった……。

川上は貴重な練習機会を奪われた事に頭を抱えたのだった。

## 第132話

「俺と1打席勝負しろ！それで、俺が勝ったらあの人に謝れ！」

「おう、受けたる。誰か、キャッチャー頼むわ！」

沢村が指差しながら言い放った言葉を東はあつさりと了承した。

「東さん、俺が受けますよ。」

ニヤニヤと面白そうに笑いながら御幸が立候補する。

「任せるわ。それと手を抜いたら、葉輪のボールはクリスに受けさせるで。」

「うへ、それは勘弁してくださいよ。せっかく丹波さんと純さんの相手を」

クリスさんと宮内さんに押し付けて来たんですから。」

「なにやっとなねんお前。」

御幸の言葉に東は呆れた様にジト目を向ける。

そんな東の視線を軽く受け流しながら御幸は防具を着用していた。

「それじゃ、あいつに肩を作らせてきますね。」

「おう、素振りでもして待つとるわ。」

東は御幸を見送ると、自身の言葉通りに素振りを始めたのだった。



「おおい、ノリ！こつちこつち！」

パウプロに呼ばれた川上がゆつくりとバッティングゲージの裏にやって来た。

「パウプロ、あいつ誰なんだ？」

「詳しくは礼ちゃんに聞いてくれ。」

パウプロが目を向けた先には高島と東条がいた。

「川上くん、まずはこの子を紹介するわね。」

高島に促された東条が、一歩進み出て背筋を正す。

「松方シニアの東条です！来年から青道でお世話になります！よろし

くお願いします！」

「俺は川上、よろしくね東条。」

ニツと笑った川上に東条も笑顔を返した。

「それじゃ、あつちで御幸くんとキャッチボールをしている子を紹介するわね。」

あの子は長野の中学校で軟式野球をやっていた沢村くんよ。」

「軟式？」

高島の言葉に川上は首を傾げる。

「実績では強豪の松方シニアにいた東条くんの足元にも及ばないわね。」

でも、彼は面白いボールを投げるわよ。」

この高島の言葉に興味を引かれたパウプロ達は、御幸とキャッチボールをしている

沢村へと目を向けたのだった。



「肩は出来たか？」

「おう！もう十分だ！」

「俺、先輩なんだけどなあ…。」

沢村の返事に御幸は苦笑いをする。

「それで、お前の持ち球は何があるんだ？」

「男なら真つ向勝負！」

「…つまり真つ直ぐしかないわけね。」

御幸はこれでよく東に勝負を吹っ掛けたものだと思いに感心した。

「それじゃコースだけ指定するから、信じて投げてこい。」

沢村の肩を軽く叩いた御幸は駆け足でバッティングゲージに向かった。

(キャッチボールの時のあいつのボール、1球ごとに回転が違ったな。

真つ直ぐしかないって言ってたのに…。)

そう考えた御幸は薄く微笑む。

「なんや御幸、あの小僧になんぞ面白いことでもあったんか？」

「敵に情報は与えませんよ、東さん。」

「かく、性格の悪い後輩や。」

「キャッチャーにとつては誉め言葉ですね。」

打席に入った東が足場を作つてバットを構えると、御幸にも感じ取れる程の威圧感を放った。

（流石はプロ注目選手ですね、東さん。）

心の中で称賛を送つた御幸は直ぐに意識を切り替える。

「さて、初球はどうしようかなつと…。」

この程度の囁きで集中を乱せる相手ではないと知りつつも御幸は東の反応を伺う。

御幸は初球をインコースのベルト付近に要求した。

御幸が構えたミットを見た沢村がウィンドアップの投球モーシヨンに入る。

大きく足を上げて踏み込んだ沢村がその左腕を振るう。

そしてリリースの瞬間…。

ゾクリ！

悪寒を感じた沢村はボールを地面に叩きつけたのだった。



## 第133話

東さんと沢村ってやつの一打席勝負が始まった。

その初球、沢村のボールはホームベースに到達する前にワンバウンドした。

一也は東さんにタイムを要求すると、ボールを手で揉みながらマウンドに向かった。

「ボールが引つ掛かったのかしら？」

礼ちゃんがボールペンを顎に当てながら首を傾げている。

「多分だけど、無理矢理引つ掛けたんだと思うよ、礼ちゃん。」

俺の言葉に礼ちゃんだけじゃなくて、ノリと東条も俺の方を見る。

「どういうことかしら、葉輪くん？」

「たまにあるんだけど、ランナーがスタートをきった時とかに、リリースの瞬間に

ボールにわざと指を引つ掛けてコースを変える事があるんだよね。」

礼ちゃんは感心の声を上げながらボールペンでメモ帳に何かを書いている。

「川上さん、葉輪さんが言ったこと出来ますか？」

「いや、無理無理。」

東条の質問に、ノリは顔の前で手を横に振って否定した。

そんなに難しいことかな？

「それで葉輪くんは、沢村くんがわざと指を引つ掛けてワンバウンドを

投げたと思っているのね？」

「多分だけどね。」

俺が肩を竦めながらそう言うと、一也がマウンドからゆつくりと戻って来ていた。

「パワプロ、御幸が要求したコースって東さんの好きなコースだったけど、

お前ならさっきの1球どうしてた？」

「ん？一也のミット目掛けて投げ込んだよ。」

ノリは俺の返事に首を傾げる。

「本当に？俺なら怖くて首を横に振ってると思うけど…、抑える自信があるのか？」

「うーん、抑える自信というよりは一也への信頼かなあ？」

俺の返事に礼ちゃん達は興味を引かれた様に俺をジッと見てくる。

「葉輪さん、バッターの好きなコースに投げたら打たれると思わないんですか？」

「その打たれるかもしれない1球にも、一也ならしつかりと意味を持たせているって俺は信じてるよ。」

俺のその言葉にノリと東条は感心の言葉を上げ、礼ちゃんは柔らかく微笑んだのだった。



「東さん、タイムをお願いします。」

「おう。」

沢村のワンバウンドのボールを捕球した御幸は、東にタイムを要求してマウンドに向かった。

御幸がマウンドに向かう途中、沢村は腕で顔の汗を拭っていた。

「沢村、さっきの1球、わざとか？」

「…ああ。」

半ば確信を持って聞いてみた御幸だが、沢村の返事に僅かに驚いた。

「なんでワンバウンドにしたんだ？」

「あの1球、投げる瞬間に嫌な予感がした。」

この沢村の返答に御幸はまた驚いた。

そして…。

(へえ、いい勘してるじゃん。)

そう思いながら御幸は笑みを浮かべた。

「沢村、実はあのコース、東さんの得意なコースなんだ。」

「はあ!?!」

見事な沢村の反応に御幸は笑ってしまう。

「お前も敵かあ!?!これがアウエーの洗礼ってやつか!?!」

「ははは!・悪い悪い。でも、緊張は解れただろ?」

「へ?」

御幸の言葉に沢村は身体力が抜けたのを自覚した。

「次の1球からはキチンとリードするから、しっかりと腕を振って投げ込んでこいよ。」

御幸がそう言いながら沢村の肩を軽く叩くと、沢村はニツと笑顔を見せた。

マウンドからキャッチャーボックスに戻る間に御幸は思考を巡らせる。

(さて、どうするかな?)

御幸はわざとゆっくりと戻りながら東の素振りを観察する。

(本当なら、さっきの1球で東さんの打ち損じを狙いたかったんだけどな...。)

キャッチャーボックスにまで戻った御幸はマスクを被りながら座る。

(正直、沢村の球質を見られたら東さんとの勝負は厳しいんだけど...。)

悩む御幸の耳に声が聞こえてくる。

「その打たれるかもしれない1球にも、一也ならしっかりと意味を持たせているって俺は信じてるよ。」

このパワプロの言葉に、御幸はマスクの奥で口角をつりあげる。(やれやれ、それじゃ相棒の信頼に応えるとしますかね!)

ミットに拳を叩きつけて気合いを入れた御幸は、キャッチャーボックスの中で

大きくミットを構えるのだった。

## 第134話

青道高校の学校見学に訪れた沢村と、後輩の指導をしていた東の1打席勝負。

カウントはワンボール、ノーストライクの状況。

沢村のボールを受ける御幸はアウトコースにミットを構えた。

(沢村の制球力がどの程度かわからないからな…。とりあえず、アウトコースで

しっかりと腕を振らせて様子見だな。)

御幸が構えたコースに投げ込むべく沢村が振り被る。

そして右足を胸元まで大きく上げ、爪先立ちになった左足に体重を乗せると、

しっかりと踏み込んで左腕を振った。

バシンツ!

沢村のボールを捕球した御幸のミットが心地好い音を響かせる。

(あれ?俺のボール、走ってる?)

御幸のミットが鳴らした音に、沢村の気持ちが高揚して口角がっぴりあがる。

「入つとるか?」

「入ってますね、東さん。」

「そうか。これでワンボール、ワンストライクやな。」

ボールを受けた御幸の判定を冷静に受け入れた東の様子に、御幸は複雑な心境になる。

(このワンストライクは予定通り。でも、しっかりと球質を見られたな…。)

次の1球に思い悩む御幸の耳に沢村の声が届く。

「わはははは!絶好調!ボールを!早くボールを!」

左腕をグルグルと回すりアクションをしながらボールを要求する沢村の姿に、

御幸はマスクの奥で苦笑いをした。

(つたく、その元気が頼もしくてなによりだよ。)

ボールを返球した御幸は、横目で東を観察しながら次の1球を決断するのだった。

◆ (生意気な小僧やが、ええ投げっぷりやないか。)

沢村の2球目を見逃した東は、沢村が投げ込んだ1球をそう評価する。

投球モーションに入った沢村にタイミングを合わせた東は、アウトコースに投げ込まれた3球目のボールに対してバットをフルスイングする。

カキンッ!

金属バットの快音が鳴り響いてボールはライト方向へと飛んでいく。

沢村が打球の行方に勢いよく振り向くと…。

「安心せえーファールや!」

東の言葉通りに、打球は切れていってファールとなった。

だが東が打った打球の飛距離は、球場ならば間違いなくスタンドインする程の大飛球だった。

「うおお!ゴリラだ!ゴリラがいる!」

「アホか!力だけで逆方向に飛ばせるわけないやろ!」

沢村の言葉にツツコミを入れつつ東は打席を外して素振りをする。

(2球目はカット、3球目はツーシームの様な変化をしようた…。)

中々ややこしいボールを放るやんか。)

素振りを終えた東は打席に入るとニヤリと不敵に笑う。

「やる気出てきたわ。大人気ないかもしれんけど、本気でやらせてもらうで。」

◆ そう言ってバットを構えた東は、実戦の如く集中を高めたのだった。

カウントがワンボール、ツーストライクとなった沢村と東の勝負は、

そこからファールの連続となった。

沢村の球質を活かそうと御幸が左右に巧みにコースを散らしているが、

東はその全てをバットに当ててみせた。

一見すると紙一重の勝負に見えるが、東は余裕を持って沢村のボールをカットし続けていた。

夏の大会が終わって青道高校野球部を引退した東は、引退した後も青道高校野球部で練習を続けている。

そして機会さえあればパウプロに打撃投手を頼んで、自らの打撃技術を磨き続けているのだ。

そんな東のパウプロとの勝負成績は良くない。

いや、ハッキリ言えば悪い。

打率で言えば2割を下回ってしまっているのだ。

パウプロのボールは東から見ても全てが一級品である。

そんなパウプロのボール全てに対応しようと思っても中々バットは快音を鳴らさない。

そこで東はバッティングにおけるカットの技術を磨く様になった。

東の信条であるフルスイングを変えずにカットの技術を覚える。

これはドラフト上位指名確実と言われている東をして至難の業だった。

一時期はパウプロとの勝負における打率が1割を下回ったことすらある。

だが東は飽くなき向上心でバットを振り続けた。

そして先日、遂にパウプロからホームラン級の打球を打つ事が出来たのだ。

東が沢村のボールをカットし続けていく中で沢村も負けじとボールを投げ込んでいく。

だが次第にボール球が増えていき、カウントはスリーボール、ツー

ストライクの

フルカウントまで進んだ。

もう後が無い状況。

ここで御幸はこの対決で初めてインハイにボールを要求した。

この御幸のリードに沢村は今日一番の心の高揚を感じる。

その心の高揚のままに沢村が大きく振り被る。

そして大きな投球モーションでボールを投げ込んだ。

沢村が投げ込んだボールは御幸が要求したインハイに伸びていく。

投手の本能なのか、沢村が投げ込んだこの1球は今日初めて投げる

フォーシームだった。

今日初めて投げるコースに初めての球種。

偶然が重なった結果かもしれないが、勝算は十分なはずだった。

だが…。

カキンッ!

東が迷わずフルスイングをして放った打球は、綺麗な放物線を描い

て

高々と飛んでいったのだった。

## 第135話

「おう、120mは飛んだかな？」

「いや、130mは飛んでると思うけど…。」

沢村が投げ込んだインハイのボールを弾き返した東さんの打球は、間違いなくホームランといえる程に飛んでいった。

その飛距離に東条は口があんぐりと開いたままになっている。

「残念だったね、ノリ。東さんに頭を下げてもらえなくて。」

「もし下げられたらって考えたら吐きそうだったよ。」

「ハッハッハッ！」

苦笑いしながら胃を押さえるノリの姿に俺は笑ってしまう。

「東条くん、貴方も東くんと1打席勝負してみる？」

礼ちゃんが微笑みながらそう言うのと、東条は腕を組んで悩みだした。

「東さん程の打者と勝負出来るのはやりがいがあるんですけど…」

俺、葉輪さんのピッチングも見たいんですけどねえ。」

東条の言葉を聞いた礼ちゃんが俺の方を見てきた。

「葉輪くん、大丈夫かしら？」

「俺は大丈夫だけど、時間は大丈夫なの？」

「ええ、問題ないわ。元々、東条くんと沢村くんには葉輪くんのピッチングを見てもらおうと」

思って、学校見学の時間に余裕を持たせていたのよ。」

おお！流石は礼ちゃん！出来る女性だぜ！

礼ちゃんの言葉で東条は俺のピッチングを見る事に決めたので、

俺は一也に声を掛けて肩を作り始めたのだった。



東にホームラン級の当たりを打たれた沢村は、今もまだ打球の方向を呆然と見続けていた。

「小僧。」



そんな沢村に東が声を掛けると、沢村はハツとした様に勢いよく東の方に振り向いた。

「勝負は俺の勝ちやな。」

腕を組んで不敵に笑う東の姿に、沢村はぐぬぬとリアクションを見せる。

「もう1回!もう1回勝負!」

「俺はそれでもよかったんやが、お前以上に勝負したい相手が準備をしとるからな。」

泣きの1回は無しや。」

東は顎でパワプロの方を示すと、それにつられて沢村もパワプロを見る。

「…誰?」

沢村のその一言に、東は膝が抜けてしまった。

「葉輪を知らんのかい!?世間知らずが過ぎるやろ!」

「あー!?田舎者だからってバカにするな!」

「しとらんわ!アホか!」

沢村のオーバリアクションに東は血が疼いてついついツツコミを入れてしまう。

頭をガシガシと搔いた東は改めて沢村に目を向ける。

「なんだ?!もう1回勝負するなら受けて立つぞ!」

「やらんわ!」

東の返事に沢村はブーイングをする。

(つたく、なんとも憎めん奴や。)

そう考えながら東は苦笑いをした。

「小僧、たしか沢村やったな?」

「おう!」

「最後のインハイ、あれは良かったで。」

東がそう言うのと、沢村は満面の笑みを見せる。

「だよな!あの1球は最高に手応えがよかった!」

「まあ、俺は打ったんやけどな。」

「くっそ——!!」

沢村は両手で頭を抱えて身を振る。

そんな沢村の反応に東は大笑いをした。

「やっぱりもう一回！もう一回勝負！」

「やらへん言うてるやろう。」

苦笑いをしながらそう言う東に、沢村はまたしてもぐぬぬと悔しがる。

「沢村、お前もピッチャーならよう見とけ。」

東のその言葉に沢村はキョトンとする。

「あいつは葉輪 風路。今の高校野球界で間違いなく日本一のピッチャーや。」

「日本一？」

東のパワプロに対する評価に、沢村は懐疑の目を向ける。

「俺でもどこまで葉輪に食い下がれるかわからへん。せやけど、お前にホンマものに」

怪物のピッチングを見せられる様に頑張ったるわ。」

沢村は息を飲んだ。

沢村は東との1打席勝負で、東は間違いなく自分が今まで対戦したバッターの中で

一番の強打者だと確信している。

その東をして、どこまでやれるかわからないというパワプロのピッチングが

全く想像出来ないのだ。

沢村は御幸とキャッチボールをして肩を作っているパワプロを見る。

すると、沢村はキャッチボールをしているパワプロのボールを見ただけで

ゾクリと寒気のようなを感じたのだった。

## 第136話

御幸とキャッチボールをして肩が出来上がったパウプロは、御幸を座らせて

各種ボールの感覚を確かめていく。

「二也、フォーシーム！」

「おうー！」

ミットを叩いて応えた御幸に、パウプロが独特な投球モーションでボールを投げ込む。

パァン！

御幸のミットが心地好い捕球音を出すと、バッティングケージの後ろで川上達と一緒に

パウプロの投球を見学する沢村の全身に鳥肌が立った。

（なんだよ、今のボールは…？）

パウプロが投げ込んだフォーシームは沢村にとって見たことが無いボールだった。

いや、正確にはフォーシームならば沢村も多く見てきている。

だが、パウプロのボールは同じフォーシームだと認識出来ない程のノビを見せたのだ。

2球、3球とフォーシームを投げ込むパウプロの姿を沢村は瞬きを忘れて凝視する。

（どうすれば…どうすれば俺もあれを投げられる？）

羨望、憧れと入り雑じりながらも沢村はパウプロから目を逸らさない。

「二也、カーブ！」

パウプロは簡単なジエスチャーと一緒に球種を宣言するとカーブを投げ込んだ。

（高めに抜けた？）

沢村がそう勘違いする程にパウプロのカーブは高めへと…そここそバッターが立っていれば、

その頭を超えるのではと思う高さへと向かっていく。

だが、パワプロが投げ込んだそのボールはそこから急激な変化を見せて、

真ん中に構える御幸のミットに納まった。

「はあ!?なんだ?!今の変化!?!」

思わずといった感じで沢村が声を出してしまう。

何でもない事のように続けてカーブを投げ込むパワプロの姿に、

沢村は興奮した様子で東条に声を掛けた。

「な、なあ東条!今のボールは何だ!?!」

「何だって、葉輪さんはカーブって言ってただろ。」

東条は夏の高校野球選手権大会や秋の高校野球選抜大会のパワプロの

ピッチングを動画で見ている。

なので目の前でパワプロのピッチングを見ても沢村程の動揺はなかった。

もちろん、東条もパワプロのピッチングを見て興奮はしているのだが、

自分以上に興奮している沢村を見て逆に冷静になったのだ。

「だから、カーブってどうやって投げるんだよ!?!」

「…いや、お前もピッチャーなんだよな?」

沢村の言葉に東条は呆れた様に言葉を返す。

「一也、次チェンジアップ!」

2、3球投げて感覚を掴んだパワプロが次の球種を投げ込む。

だが、沢村はフォーシームやカーブ程の驚きは感じなかった。

「ん?何だあれ?すっぱ抜けたのか?」

沢村のその言葉に東条と川上の膝がカクツと抜けた。

「おい、沢村あ!」

思わずといった感じで東条が沢村にツッコミを入れると、沢村はチェンジアップを

投げ込んでいるパワプロを指差して話す。

「でもよ東条、あんな緩いボールなら俺でも打てるぞ。」

その沢村の物言いに東条は両手で頭をガシガシと搔く。

「まあ、チェンジアップの凄さは実際に打席に立ってみないとわかりにくいから。」

そう言つて川上が沢村をフォローする。後輩になるかもしれない沢村を気遣ういい先輩である。

尊敬するパウプロの凄さを沢村がいまいち理解していないと思つている東条は、

首を傾げている沢村に小一時間は話をしてやりたいと感じていた。

「一也、最後にスライダー!」

チェンジアップを2、3球投げて感覚を掴んだパウプロが最後にスライダーを投げ込む。

パウプロがボールを投げ込んだ瞬間、沢村はそのボールを右打者のアウトコースに

外れる真つ直ぐだと認識した。

だが、そのボールは圧倒的なキレで変化して真ん中に構える御幸のミットに納まった。

「…え?」

沢村はパウプロのスライダーの変化を理解出来ずに呆然としてしまふ。

そしてパウプロが2球目のスライダーを投げ込むと、興奮した沢村が

東条の肩を掴んで揺さぶつた。

「お、おい東条!今の!今のは何だ?!」

「ゆ、揺するな沢村あ!」

「だって!こう、真つ直ぐだったボールがギユンって!ギユンって変化したんだぞ!」

大きな手振りを加えて話す沢村の反応に、バッティングケージの後ろにいた皆が苦笑いをする。

「沢村くん、あれは葉輪くんのスライダーよ。」

「スライダー?」

「葉輪くんのスライダーはちよつと特殊な握りで、ツーシームと同じ握りなのよ。」

「へ〜で、ツーシームって何だ東条？」

「そこからかよ!？」

東条のツツコミに川上と高島がクスクスと笑ってしまう。

「沢村、それと…東条やったな？」

「は、はい！」

バッティングケージ内でパワプロのボールを見ていた東が沢村と東条に声を掛けた。

「お前らが来年青道に来るんやったらよう見とけ。お前らが争う青道の

エースのピッチングをな。」

「エース…。」

エースの言葉に沢村は唾を飲み込む。

「今の青道は秋の大会に負けた事でレギュラー争いが激しくなってる。その中で唯一、

1軍のレギュラーが確定しとるのがあの男や。」

東が目を向けた事につられて沢村と東条もパワプロに目を向ける。

「もし仲間とワイワイ楽しい野球をやりたいんなら他の高校に行つた方がええ。」

せやけど、本気でうまなりたいんなら葉輪と争うのをすすめるで。」

そう言つて東は振り向くと沢村と東条に不敵な笑みを見せる。

「葉輪は俺達が1つ成長する間に2つも3つも成長する奴や。ホンマに

追い掛けがいがある男やで。」

東のこの言葉に沢村と東条はパワプロにまた目を向ける。

そして本当に楽しんで投げているパワプロの姿に、沢村と東条は身を震わせたのだった。

## 第137話

肩を作り終えたパウプロが投げ込みを始めようとしていた。打席には東が入り、打撃練習も兼ねている。

パウプロは夏の大会以後に東を相手によくこの練習をやっているのだが、

この練習には1つだけルールがある。

それは基本的に3打席勝負で一区切りという事だ。

3打席勝負を終えたらそこでお互いに勝負の感想を言い合ったりする。

例えば、これが良かった、あれをやられて嫌だったといった感じにだ。

他にもキャッチャーを交えて配球の意図を話し合ったりもして技術向上の糧にしているのだ。

「東さん！始めます！」

「おう！」

沢村と東条がバッティングケージの後ろで見守る中で始まったパウプロのピッチング。

その初球はインハイへのフォーシームだった。

パン！

フルスイングする東のバットの上を超えたパウプロのフォーシームが、

御幸のミットに吸い込まれる様にして納まる。

この1球に沢村は目を見開いた。

先程、自分が打たれたコースに投げ込んで東から空振り奪ったからだ。

東が振り向いて睨むようにして御幸を見る。

「さっきのお返しやろ？性格の悪い奴や。」

そんな東の一言に御幸はマスクを被ったまま歯を見せて笑っている。

「先日、クリスさんが受けていた時にパウプロからデカイのを打った

んですよね？

なら、俺は東さんにデカイのを打たせませんよ。」

「おう、望むところや。」

1打席目はパワプロが東を三振に抑え2打席目の勝負が始まった頃、パワプロのボールの

キレや変化量にばかり注目していた沢村がある事に気付く。

(あれ？さっきから全然ミットが動いてないよな？)

パワプロはフォーシーム、カーブ、チェンジアップ、スライダーを次々と御幸が構える

ミットに寸分変わらずに投げ込んでいく。

(…嘘だろ？)

沢村もピッチャーであるのでパワプロがやっている事の凄さを理解してしまった。

驚愕する沢村の前で、パワプロは3打席連続で東を三振に抑えるだけでなく、

全球を御幸の要求通りに投げ込んでみせた。

(何球連続でピンポイントで投げ込むんだよ!?)

3打席勝負が終わって一区切りとなりパワプロと東、そして御幸が話し合いを始めると、

沢村はプハァーと息を吐く。

「すげえ…。」

そう呟いた沢村は、手が震えているのに気付いた。

そして震えている手を見詰める沢村の脳裏に東の言葉が甦る。

『追い掛けがいがあある男やで。』

沢村は震えを止める様に拳を握り締めると、東の言葉を振り払う様に頭を振るのだった。



東さんと勝負を続けていると、いつの間にか東条と…えっと、沢…田？だったっけ？



とにかく、学校見学に来ていた2人が帰っていた。

そして三度目の3打席勝負が終わったところでノリも交じえて話し合いをしていた。

「さっきの打席のヒットやけど、あれは無しやな。」

「え？東さん、なんでですか？」

東さんの言葉に俺が疑問の声を上げると、東さんは腕を組んで話始めた。

「俺もスライダーを上手く運べたと思つとるが、あれは金属バットだったからや。」

あんだだけ根っこで打つとつたら、木製バットやつたら間違ひなく折れとる。

そしたら打球には勢いが無くて内野の間を抜けへんやろう。」

既にプロでの打撃を考えている東さんの姿に、ノリが目を

輝かせながら拍手を送っている。

「なら、今日の勝負はパワプロの完封ですね。」

そう言う一也に東さんは呆れた様な目を向ける。

「よし、後で先日リードして打たれたクリスマスさんに今日の結果を自慢しよう。」

「性格が悪すぎるわ！」

東さんのツッコミで皆が笑った。

そして笑いが収まると、ふと東さんが思い出した様に話し始めた。

「おもしろい奴やったな。」

「誰がですか？」

「沢村や。」

沢村？

俺が首を傾げると東さんが苦笑いをしながら教えてくれた。

「俺と1打席勝負をした奴や。」

ああ、あいつは沢村っていうのか。

俺の反応を見た東さんが呆れた様にため息を吐く。

「相変わらず人の名前を覚えられん奴やな。」

なぜか昔から人の名前を覚えるの苦手なんだよね。

俺が頭を搔くと一也とノリが笑った。

「それで、東さんは沢村をどう思いました？」

「今ところポテンシャルだけで野球をやつとるな。せやけど、負けん気と

投げっぷりはいい奴やった。」

一也の質問に東さんはそう答えた。

「沢村が来年、青道に来るのかはわからんけど、来たらおもしろいやろうな。」

川上、うかうかしてられへんぞ。」

「はい！」

ノリがすっかりと返事をするると東さんは大きな声で笑った。

「それじゃ休憩は終わりや。川上、肩はまだ冷えてへんか？」

「はい、大丈夫です！」

「せやったら次は川上に相手を頼むわ。サイドスロー相手の経験も積んでおきたいんや。」

東さんの指名を受けたノリは笑顔になる。

そしてノリは東さん相手に1球1球を丁寧に投げ込んでいったのだった。

## 第138話

青道高校の学校見学を終えて長野に帰った沢村は、心此処に在らずといった感じで日々を過ごしていた。

そんな沢村の頭に過るのはもちろん青道高校の学校見学をした時の事だ。

地元の仲間達と野球をしていた時には聞いた事が無い心地好い捕球音。

打席に立つだけで圧力を感じて膝が笑いそうになりそうな強打者との勝負。

そして…。

(葉輪 風路…あんな凄いピッチャー、見たことなかった…。)

フォーシーム、カーブ、スライダー、どれを見てもプロの投げているボール

なんじゃないかと沢村は感じた。

残念ながらチェンジアップの凄さは理解出来なかったが、それでも東が空振りをしたのを見て、

あの遅いボールにも意味はあるんだとなんとなく感じていた。

(青道に行けば、あんなに凄い奴等と競いあえる…でも…。)

沢村の頭にこれまで一緒に野球をしてきた友人や幼馴染みの姿が浮かぶ。

(あいつらを裏切れねえよ…!)

頭を抱えた沢村は歯を食い縛って苦悩し続けたのだった。



東条や沢村が学校見学に来てから数日後、片岡さんから秋の神宮大会に合わせて

紅白戦や練習試合を組んだと発表された。

先ずは紅白戦で暫定の1軍や2軍等を決めて、練習試合を戦っているらしい。

練習試合をする相手は主に東京都地区の高校の様だ。

この発表に青道野球部の皆のモチベーションは一気に高まった。現在1軍メンバーは白紙の状態だ。

レギュラーの座を掴み取ろうと目をギラギラとさせている。

いいね！俺もモチベーションが上がって来たぜ！

え？俺は紅白戦は見学ですか？

なんてこつたい！

俺が頭を抱えて身を振ると、それを見ていた貴子ちゃんが俺を可愛いと

言って微笑んだのだった。



パァン！

青道高校野球部の施設の1つであるブルペンにミットの音が響き渡る。

「丹波、ナイスボール！」

丹波が投げ込んだボールを受けた宮内が声を大にして称賛する。

その1球に手応えを感じたのか、丹波も自然と笑顔になる。

「どうだ丹波、ナックルカーブの調子は？」

顎髭を扱きながらブルペンを見ていた落合が、アンダーシャツで額の汗を

拭う丹波に声を掛けた。

「コントロールはまだまだです。ですが、手応えは悪くありません。」

「今はコントロールを気にするな。今まで投げていたカーブと球速差をつけられる様に

しっかりと腕を振って投げ込め。」

「はいー。」

夏の大会が終わってから丹波は新しい変化球を模索していた。

丹波の持ち球はフォーシーム、カーブ、フォークである。

基本的な丹波のピッチングはフォーシームとカーブでカウントを

整えて

勝負といった感じである。

しかし、丹波は今のピッチングに限界を感じてきていた。

それは、狙ってカウントを取れる球種が無いことだった。

丹波のフォーシームはパウプロは別として伊佐敷程のキレはなく、それだけで勝負が出来る様なボールではない。

フォークは低めに落として空振りを奪う事を目的としたボールなので

カウントを奪うのにはむかない。

いや、正確には低めのストライクゾーンに投げ込むコントロールが無いというのが現状だ。

そのため、これまでは決め球であるカーブをカウントを整えるボールとしても

使ってきたのだが、パウプロ程のコントロールが無いので少し甘いコースに行ってしまう、

それを上手く合わされてヒットにされることが増えてきていたのだ。

そんな時に丹波は落合に相談すると、球速の速い変化球をすすめられた。

ツーシーム、カットボール、スライダーとカーブよりも球速の速い変化球を教えられたが、

どれも丹波の感覚にはしっくりとこなかった。

そこで落合は球速の速いカーブを丹波に教えた。

これに丹波は驚いた。

丹波もそうだったカーブがあるのは知っていたが、丹波の認識としてカーブは球速が遅く、

緩急を活かすものという決め付けに近いものがあつたからだ。

自分が初めて覚えた変化球が新たに自分の戦力になる。

この事に丹波の気持ちは高揚した。

それから丹波は落合に主に2種類のカーブの握りを教わった。

1つはパワーカーブというものだったが、これは残念ながらしつ

りところなかった。

次に教わったのは現在練習をしているナツクルカーブだ。

握りは極単純なもので、これまで投げていたカーブの握りの人指し指を曲げるだけだった。

この新たな握りに丹波の感覚はビシツと嵌まった。

最初の1球こそ引っかけてワンバウンドさせてしまったが、次の1球はこれまで投げていた

カーブに比べて間違いなく速いカーブを投げる事が出来たのだ。

「意識は前に投げる力がメインだ。極論だが、フォーシームに比べて最後の1伸びが

無いだけでも、バッターを打ち取る武器として使えるんだからな。」

「はいー！」

元気に返事をしてナツクルカーブを投げ込む丹波を、落合は片目を瞑って観察する。

（ナツクルカーブがものになれば丹波は1つ上のレベルに行けるが…。

さて、春までにものになるかな？）

そう疑問に思いながらも笑みを浮かべた落合は、ブルペンの奥で新たな変化球に挑戦している

伊佐敷の元に歩いて行ったのだった。

## 第139話

パアン！

「おっしやあー！」

青道高校のブルペンにて威勢の良い声を上げるのは、新しい変化球に

挑戦をしている伊佐敷である。

「伊佐敷、身体を開いて曲げようとするな。シュートとナチュラルシュートは別物だぞ。」

「はー！」

落合の指摘を改善しようと伊佐敷は少し身体を動かしながら確認する。

（伊佐敷の持ち球を考えれば利き腕とは逆方向の変化球が欲しかったんだが、

これはこれでありだな。）

顎を上げて片手で髭を扱きながら伊佐敷を観察する落合は、伊佐敷の現状をそう評価する。

先程落合は伊佐敷の新変化球をシュートと言ったが、正確にはツーシームである。

ツーシームの握りの指を一本外して横方向の変化を大きくしたツーシームが、

伊佐敷の新変化球なのだが、同じ名称で紛らわしいと伊佐敷が言った事で、

クリスが提案して便宜上シュートと呼称しようとなったのである。

セットポジションから投げ込んだ伊佐敷のシュートが、真ん中付近から一気に

右打者の内角に食い込む様に変化する。

パアン！

伊佐敷のボールを受けるクリスも、伊佐敷のシュートのキレにマスの奥で笑みを浮かべる。

「どうだあ、クリス！」

「贅沢を言えば変化をもう少し打者よりにしたいな。」

「あん？どうすればいいんだ？」

「曲げようとする力よりも前に投げる…いや、伊佐敷の場合は叩き付ける力を」

メインにするべきだな。」

「おっしやあ！任せとけ！」

クリスの助言に従って伊佐敷がリリースのイメージを変えてシュートを投げ込む。

すると、伊佐敷のシュートは変化がより打者に近寄ってから始まり、

落合をも驚かせるキレを見せた。

（いやはや…。単純と言えば言葉が悪いが、助言を素直に受け入れるこの向上心の高さは

葉輪に勝るとも劣らないな。）

落合の頭の中に青道の投手陣のデータが浮かび上がる。

（伊佐敷の適正は抑えだと思っていたが、丹波と第2先発の座を競わせてみるのもありだな。）

後日に行われる紅白戦での起用に頭を悩ませる落合は、頭をガシガシと掻きながら

ブルペンを後にしたのだった。



成長の兆しを見せる者がいれば逆に伸び悩む者もいる。

その1人が青道高校野球部キャプテンの結城 哲也だった。

「哲さん、行きますよー！」

紅白戦に出れない分、打撃投手をする事にしたパウプロが打席に立つ結城に声を掛けた。

「ああ、頼むー！」

バットを構えた結城にパウプロが独特な投球モーションからボールを投げ込む。



すると…。

「…くっ！」

上体が突っ込んだ形で中途半端にスイングした結城が、パワプロのチェンジアップを

空振りしてしまった。

「葉輪！もう一球頼む！」

結城の要求でパワプロがチェンジアップを投げ込むと、結城はまたしても

空振りをしてしまった。

そう、結城が伸び悩んでいる原因はチェンジアップを打てない事だ。

現代の魔球と言われるチェンジアップの厄介なところは、一般的に速球と

腕の振りが同じところだと言われている。

だが、結城にとってそれ以上に厄介なところはチェンジアップの軌道であった。

変化球の中には一度、投手のリリースポイントから浮き上がる様な軌道から変化を始めるものがある。

それと比較すると、チェンジアップはリリースポイントから途中まで、

速球と軌道が変わらないのである。

速球と同じ軌道で来ていたボールが途中から急に来なくなる。

この感覚に結城は苦戦を強いられていた。

そして夏や秋の大会で成宮のチェンジアップに翻弄された結城は、次こそは打つと闘志を燃やしているのだ。

「御幸、お前はどうか対処している？」

打席で思い悩む結城はパワプロのボールを受けている御幸に問い掛けた。

「そうですねえ、グリップが残っていれば何とかかりますよ。」

「グリップか…。」

御幸の助言を実行する様に結城は打撃フォームを確認する。

「哲、待ってるんだから早くしてよね。」

そう言うのは常に微笑みを絶さない表情でバッティングケージの裏で見ている小湊である。

小湊はどちらかと言うと伸び悩む者ではなく、成長途上の者である。

元々バッティングにおけるカットが得意であった小湊だが、東のフルスイングによるカットに

刺激を受けて新たな境地に挑戦しているところなのだ。

「すまない、小湊。」

そう言いながらも結城は打席でバットを構える。

それを見た小湊は肩を竦めた。

「御幸、もつと厳しいコースを要求してよ。哲がバットを振りたくなくなるぐらいにさ。」

「望むところだ。」

そんな先輩達のやり取りに御幸はマスクの奥で苦笑いをする。

だが、先輩達の向上心に負けていられないと思った御幸は、

気合いを入れ直してミットを構えたのだった。

## 第140話

練習試合のメンバーを選定するための紅白戦が始まった。

俺は残念ながら不参加だけどね。

先ずは暫定3軍同士での紅白戦だ。

2年生が中心に活躍していったけど、1年生も必死に食らい付く様にして

力を発揮していった様に見えた。

同じ日に暫定2軍同士による紅白戦も行われた。

暫定2軍同士の紅白戦では増子さんが目立った活躍をしていた。

秋の大会での失敗からは立ち直ったみたいなんだけど、あの日から増子さんは練習以外では

声を出さないという戒めを自分に課している。

授業とかどうしてるんだろうな？

増子さんは紅白戦で大活躍したんだけど、残念ながらそのまま2軍残留となった。

そして後日、いよいよ青道高校野球部の1軍メンバーを選抜する為の紅白戦が始まるのだった。



1軍メンバーを選抜する為の紅白戦が行われる当日、俺は墨審等をして手伝おうと

思ったんだけど、何故か貴子ちゃんと一緒に落合さんと紅白戦を見学する事になった。

「葉輪、外野守備はどうだ？」

俺の左側に座る落合さんが髭を扱きながらそう聞いてくる。

「楽しいですよ、落合さん。」

「そういうことじゃないんだがな…。」

俺の返事に落合さんは頭を掻いてため息を吐く。

俺の右側に座る貴子ちゃんは、そんな落合さんの反応を見てクスク

スと笑っている。

「葉輪は今日の紅白戦をどう見る？」

「うーん、難しいですねえ…。両チームのキャッチャー次第だと思いますけど。」

「クリスと御幸か。」

白チームは丹波さんと一也、赤チームは純さんとクリスさんのバッテリーで試合が行われる。

今回の紅白戦は先発投手は5回までで終わりなんだけど、その少ないイニングで打者はどこまで

投手を攻略出来るのか、という対応力を見るのも目的だと落合さんが言っていた。

「さて、どちらに軍配が上がるかな？」

「リトル時代からのライバルですからね、楽しみですよ。」



「丹波さん、ナックルカーブを要求した時はコントロールを気にしないで、

腕をしっかりと振る意識をお願いします。」

「すまん、御幸。」

「いえいえ、選択肢が1つ増えるのは凄いですから。」

後攻の白チームである丹波と御幸は試合前の打ち合わせをしていた。

「赤チームの打線の中心はクリスさんと哲さんです。この2人をどう抑えるかが鍵ですね。」

「状況次第では敬遠を視野に入れよう。」

「…いいんですか？」

「俺は葉輪の様に力で抑えられる投手じゃない。でも、チームを勝たせる事が

出来る投手になりたいと思っている。」

そんな丹波の言葉に、御幸は丹波が本当に頼もしい投手になったと

感じた。

「御幸、俺は伊佐敷に先発の座を譲るつもりはない。」

「丹波さん、俺もクリスさんに勝つつもりですよ。」

2人は同時に笑みを浮かべると、コツンツと軽く拳を合わせたのだった。



「伊佐敷、御幸の前にランナーを出したくない。初回から飛ばしてもらうぞ。」

「ああ、任せろー！」

丹波と御幸が打ち合わせをしている一方で、伊佐敷とクリスも打ち合わせをしていた。

「シユートは主に左打者相手にフロントドアとして使っていく。今のコントロールでは

右打者のインコースを狙うのはリスクが高い。」

「そこら辺は任せる。信頼してるぜ、クリス。」

ニツと笑う伊佐敷にクリスはフツと微笑みを返した。

「勝つぞ。」

「おう！丹波から先発の座を奪ってやるぜ！」

2人は高々と左手を上げると、力強くハイタッチをしたのだった。

## 第141話

青道高校の1軍候補メンバーによる紅白戦が始まった。

1回の表のマウンドに上がったのは白チームの先発である丹波だ。先頭打者は幸先良くアウトにした丹波だったが、続く2番打者の白州にフォーシームを

上手く打たれて出塁されてしまう。

これでワンアウト、1塁。

迎える赤チームのバッターは3番打者の結城。

御幸はタイムを取ってマウンドに向かった。

「丹波さん、哲さん相手にゲッツー狙いとか贅沢は言いません。歩かせる事を覚悟して

コースギリギリを要求しますが、ボールを置きに行かずにしっかりと腕を振ってください。」

御幸の言葉に丹波は力強く頷く。

そして御幸がキャッチャーボックスに戻ると、丹波は試合終盤かのような集中を見せる。

(臆すな、腕を振れ！胸を張れ！俺に出来るのはそれだけだ！)

御幸のサインに頷いた丹波がセットポジションからチラリと1塁の白州に目を向ける。

そして、クイックモーションからしっかりと腕を振ったボールが御幸のミット目掛けて投げ込まれた。

丹波が投げ込んだボールは右打席の結城の肩口に向かっていて、そこから鋭くインローへと変化をしていく。

僅かに身体を引く様な動作をしながら結城がボールを見送る。

主審をしている片岡の判定は…？

「ストライク！」

フロントドアのカーブがインローに決まってノーボール、ワンストライク。

御幸はマスクの奥で微笑みながら丹波に返球する。

(初球にストライクを取れたのは大きい。これで主導権は確保出来

た。)

2球目、サインを出した御幸が外のコースに寄る。

頷いた丹波がセットポジションからしっかりと腕を振ってボールを投げ込んだ。

アウトローに丹波が投げ込んだフォーシームが向かう。

パァン!

ミットの快音がグラウンドに響き渡る。

だが…。

「ボール!」

主審の片岡の判定はボール。

(たはっ、監督…、その判定は厳しいですよ。)

マスクの奥で苦笑いをしながら御幸はボールを丹波に返す。

(今のはボール半分外に外れてたけど、ピッチャー出身の片岡監督ならストライクを

取ってくれてもおかしくなかったんだけどな…。)

2球目の判定を受けて御幸がリードを組み立て直す。

(カウントはワンボール、ワンストライク…、丹波さんにはああ言ったけど、

出来るならゲッツーを狙いたい。)

横目でチラリと結城を見てから御幸がサインを出す。

サインに頷いた丹波は、1塁に緩く牽制を入れた。

この牽制の白州の反応から盗塁は無いと直感した御幸は、結城との勝負に集中する。

3球目。

丹波と御幸のバッテリーが選択したボールは2球目と同じアウトローへのフォーシーム。

だが丹波のコントロールミスなのか、ボールは2つつ分程内に寄るやや甘いコースに投げ込まれた。

カキッ!

結城のバットが丹波のボールを捉えたが、1球目のボールの残像がまだ残っていたのか、

スイングは差し込まれた様な形になり、打球はライト線を切れてファールとなった。

これでカウントはワンボール、ツーストライク。

4球目。

御幸はミットで地面を軽く叩くジェスチャーを入れて、ワンバウンドのフォークを要求した。

丹波はセットポジションからしっかりと腕を振ってボールを投げ込む。

左右のコースは真ん中と甘くなってしまったが、高さは低めのストライクゾーンから

ワンバウンドとなるボールゾーンへと落ちる素晴らしい変化を見せた。

結城のバットが反応するが、スイングは途中で止まった。

御幸は塁審を指差して判定を要求する。

判定は：ノースイング。

これでカウントはツーボール、ツーストライク。

このカウントで御幸は勝負に出た。

サインに頷いた丹波がセットポジションからしっかりと腕を振ってボールを投げ込む。

勝負の5球目。

御幸が勝負球に選んだのは丹波の新変化球であるナックルカーブだ。

インコースの甘い所からボールは真ん中へと変化していく。

コースだけを見れば失投と言えるボールだった。

だが、御幸のリードが結城のスイングに狂いを生じさせた。

ガキッ！

ボールの上っ面を叩いた打球が白チームの遊撃手である倉持の正面に転がっていく。

倉持は素早く正確にボールを捌いて2塁に入った小湊に送球すると、小湊も素早い動作で

白チームの1塁手である前園に送球した。



「アウト！スリーアウト！チェンジ！」

結城をゲツツーに抑える最高の結果に、丹波は右手をグツと握り締めると、

雄叫びを上げながらマウンドを下りるのだった。

## 第142話

「ほう、結城を打ち取ったか…。」

青道高校の1軍選抜の紅白戦を見学している落合が髭を扱きながらそう呟く。

(御幸のリードもあってのことだろうが、これは悪くない収穫だ。)

そう考えながら落合は横目でパウプロを見る。

「葉輪、丹波のピッチングはどうだった?」

「4球目のフォークを振らせたいところでしたね。まあ、結果的に最後のナックルカーブで

哲さんを打ち取れたのでよかったですけどね。」

落合はパウプロの言葉が予想外だったのか、僅かに目を見開く。

「ナックルカーブを真ん中に投げたのは問題ないのか?」

「置きにいったんじゃなくて、しっかりと投げ込んでましたからね。」

それで打ち取れたなら問題ないと思いますよ。」

片目を瞑った落合が更に話を続ける。

「コントロールのいいお前なら、もっと違う答えがくると思ってたがな。」

「俺は俺、丹波さんは丹波さんですよ、落合さん。だから俺とは違うピッチングが出来る」

丹波さんや純さんは俺のライバルなんです。あ、もちろんノリもライバルですよ。」

パウプロの飽くなき向上心に触れた落合は手で口元を覆って微笑む。

そんなパウプロの言葉を聞いていた貴子は、微かに頬を赤く染めて微笑むのだった。



「結城、最後の1球はナックルカーブか?」

防具を着けながら話すクリスに結城が頷く。

「コースは甘かったが、予想以上の球速に詰まらされた。次は打つ。」  
そう答えた結城はファーストミットを持ってグラウンドに走っていった。

（1年前からは想像出来ない程に成長したな、丹波。）

防具を着け終えたクリスがグラウンドに向かいながらそう考える。

「だが、成長しているのはお前だけじゃない。」

そう呟いてキャッチャーボックスに座ったクリスは、伊佐敷のボールを

受けながら微笑むのだった。



1回の裏、白チームの先頭打者である倉持は左打席に入る。

倉持に対する初球。

伊佐敷はアウトローにフォーシームを投げ込んだ。

少し甘いコースだったが、伸びのあるフォーシームが低めに決まってワンストライク。

続く2球目も伊佐敷はアウトローにボールを投げ込んだ。

だが、2球目は初球と違い僅かに外へと変化していく。

カッ！

倉持はスイングをするがバットの先に当てるのが精一杯で、打球は

3塁線を切れてファール。

2球で追い込んでからの3球目。

伊佐敷は一転してインコースにボールを投げ込んだ。

ボールが身体に当たると判断した倉持は身を振って死球に備える。

だが、ボールはそこから鋭くストライクゾーンへと変化をしていった。

バシッ！

「ストライクスリー！バッターアウト！」

伊佐敷の新変化球であるシュートが見事なフロントドアでインコース一杯に決まった。

3球であっさりとアウトにされた倉持は悔しそうに天を仰いで打席を後にする。

白チームの2人目の打者である小湊が左打席に入る。小湊に対する初球。

伊佐敷はフロントドアのシュートを投げ込んだ。

小湊は僅かに身体を引いたが、ボールはストライクゾーンに入る。この1球に小湊は冷や汗をかいた。

「やっかいなボールだね。まあ、味方なら頼もしいけど。」

そう呟く小湊をクリスが横目でチラリと見る。

2球目。

クリスはアウトローにツーシームを要求した。

だが、真ん中付近に甘く入ってしまったツーシームを小湊に上手く左中間に弾き返されてしまう。

これでワンアウト、ランナー2塁。

伊佐敷は1回の裏からピンチの場面を背負ってしまった。

続く3番バッターは送りバントで2塁の小湊を3塁に送った。

これでツーアウト、ランナー3塁。

迎えるのは白チームの4番バッターである御幸だ。

クリスはタイムを取ってマウンドに向かう。

「クリス、すまねえ。小湊に甘いコースに投げちまった。」

「気にするな、後続を抑えればいい。」

伊佐敷とクリスは素振りをする御幸に目を向ける。

「伊佐敷、御幸は歩かせるぞ。」

「シュートが完成してりや勝負出来たんだがなあ…。」

苦笑いをしながらそう言う伊佐敷に、クリスはミットで軽く胸を叩いてから

キャッチャーボックスに戻った。

そして、クリスはキャッチャーボックスに座らずに伊佐敷にボールを要求した。

「クリスさん、まだ初回ですよ？勝負しましょうよ。」

「御幸、お前なら同じ場面で4番を迎えた時、勝負するか？」

「次のバッター次第ですが、歩かせますね。」  
「そういう事だ。」

その後、御幸を歩かせた伊佐敷とクリスのバッテリーは、続く白  
チームの5番バッターの

前園をサードゴロに打ち取ってピンチを凌いだのだった。

## 第143話

青道高校野球部の1軍の座を巡る紅白戦は2回の表に入った。

赤チームの先頭打者は4番バッターのクリスだ。

白チームの先発である丹波はロージンバッグをマウンドの横に置くと、

プレートに足を掛けて御幸のサインを見る。

サインに頷いた丹波はフーツと息を吐いてから投球モーションに入った。

「ふしっ！」

丹波独特の投球時の掛け声と共にボールが投げ込まれる。

初球。

白チームのバッテリーが選択したのはナックルカーブだった。

アウトコースの甘い所に投げ込まれたが、クリスはこの初球を見送った。

この1球はストライクとなった。

(先ずは予定通りにワンストライク。)

横目でチラリとクリスの反応を見る御幸だが、クリスの狙いが読みきれない。

(クリスさん相手ならホームランさえ打たれなければ合格点だけど、レギュラーの座を奪う為にも抑えたい。)

2球目。

御幸が出したサインに丹波が首を横に振る。

(丹波さんはピッチャーの本能で危険を感じ取ったのか?)

御幸は直ぐに頭の中でリードを組み立て直してサインを出す。

だが、丹波は首を横に振り続ける。

(まさか…?)

御幸が半信半疑でサインを出すと、丹波は力強く頷いた。

(マジか…たはっ！丹波さん、とんでもない度胸ですね！)

マスクの奥でニツと笑いながら御幸がミットを構えると、丹波が投球モーションに入る。

丹波が投じた2球目。

丹波が選択したのは初球と同じナツクルカーブだった。

この1球にクリスが反応した様にバットを振るう。

クリスは差し込まれながらもバットを振りきったが、打球はライト線を切れてファール。

これでカウントはノーボール、ツーストライクと追い込んだ。

丹波は3球目のサインにも何度も首を横に振る。

そして漸く首を縦に振って投げ込まれたボールは、またしてもナツクルカーブだった。

ストライクゾーンに投げ込まれたナツクルカーブをクリスがカットする。

その後4球目、5球目も同じ様にナツクルカーブが投げ込まれた。

4球目は低めに外れてワンボール、ツーストライクになったが、

それでも丹波はクリスに対してナツクルカーブのみを投げ込み続けた。

そして6球目。

丹波はまたしても同じ様に首を何度も横に振る。

そして漸く首を縦に振って投球モーションに入った。

「ふしっ！」

丹波独特の掛け声と共にボールが投げ込まれる。

赤チームのメンバーの誰もがまたナツクルカーブを投げ込むと思っていた。

だが、丹波はここでフォーシームを投げ込んだ。

この1球の為に丹波はリスクを背負い、ナツクルカーブを投げ続けたのだ。

丹波が投げ込んだフォーシームが御幸がミットを構えるインローへと向かう。

そして…。

パァン！

御幸のミットが心地好い捕球音を鳴らすと、丹波は確信を持って右手を握り締める。

「ストライクスリー！バッターアウト！」

そして主審の片岡の判定を聞いた丹波は、マウンドで雄叫びを上げたのだった。



「丹波さん！ナイスピッチング！」

パウプロの声を聞きながら、落合は驚きに目を見開いていた。

（いやはや…クリスを相手にあんなピッチングが出来るのか…。どうやらノミの心臓は

完全に克服したようだな。）

落合は丹波のピッチングで活気づくメンバーを見ながら髭を触る。

（今の丹波なら強豪と言われる高校でも間違いなくエースになれる。だが、青道には

本物の怪物がいる以上、丹波がエースになる事は無いだろう。）

落合は横目でパウプロをチラリと見てから目を丹波に戻す。

（しかし、丹波は今の追いかける状況を楽しめる様になってきている。

いや、間違いなく楽しむ様になった。）

片目を瞑った落合は頭を搔きながらため息を吐く。

（やれやれ、紅白戦が終わったらどんな相談をされることやら…。

まあ、コーチ冥利に尽きるがね。）

そう考えた落合は、顎を擦りながらニヤリと笑うのだった。



## 第144話

クリスを見逃し三振に抑えた後、丹波は後続の打者に甘いコースに行ってしまったボールを

ヒットにされてしまったものの、2回の表を無失点で終えた。

対する伊佐敷もヒットは打たれたものの、2回の裏を無失点で抑えた。

そして3回でも両チームにヒットが出たが、ここでも得点には至らない。

そんな紅白戦のスコアが動いたのは4回の表だった。

2回には仕止める事が出来なかった丹波のナツクルカーブを、クリスがソロホームランにしたのだ。

これで赤チームが1点リード。

4回の表はクリスのホームランによる1点に止まったが、徐々に赤チームに

ヒットが増えていった。

そして4回の裏、今度は1塁ランナーに倉持を置いた状態で御幸がタイムリーツーベースヒットを打って同点に追い付いた。

その後、伊佐敷は前園にもレフト前ヒットを打たれたのだが、打球が強かったので

御幸がホームに帰れず、その後の打者を抑えて4回の裏は1失点に抑えた。

5回は両チーム共に無得点に終わり、丹波と伊佐敷は両者共に5回を1失点という結果だった。

そして6回の表からは他の投手候補が登板をしていくが、ここからは乱打戦となった。

5回まで両チーム合わせて2点という試合展開が一気に加速していった。

7回終了時には赤チーム7点、白チーム6点の1点差に変わっていた。

そんな乱打戦となった8回の表、出番を待ち焦がれていた川上がマ

ウンドに上がるのだった。



「ノリ、無失点で抑えて流れを呼び込むぞ。」

「うん、リード頼んだよ、御幸。」

御幸はミットを川上のグローブと合わせると、キャッチャーボックスに戻っていく。

その後ろ姿を見送った川上はマウンドの上で大きく息を吐く。

（今の俺には右打者のインコースにシンカーを投げきるコントロールは無い。）

でも、東さんのおかげでバックドアにシンカーを投げ込む事は出来る様になった。）

川上は沢村達が学校見学に来た日に東のバッティングピッチャーをしたのだが、

その時に東からアドバイスをもらっていたのだ。

（本当はスライダーとシンカーを同じ所から変化させて内と外を投げ分けたいんだけど、

スライダーをフロントドアに、シンカーをバックドアに投げるピッチングも面白い。）

川上はあの日の東の言葉を思い出す。

『追い掛けがいがある男やで。』

（結果が欲しい…。俺もパワプロを追い掛けて成長したい！）

川上が打席に目を向けると、そこには赤チームの先頭打席である一番バッターの姿があった。

（俺に与えられたチャンスは2イニング。相手は1番からだけど、抑えたら大きい。）

プレートに足を掛けた川上が御幸のサインを見た。

（絶対に抑える！抑えて、1軍でプレーをするんだ！）



8回の表、川上は1番、2番バッターを連続で抑えたのだが、3番の結城にソロホームラン、

4番のクリスにツーベースヒットを打たれてしまった。

その他のバッターは9回も合わせて抑えた事で紅白戦は白チームが逆転勝利となったが、

1失点の結果に川上は悔しそうに歯を噛み締めた。

紅白戦が終わった後日、片岡から1軍メンバーが発表された。

捕手としてクリスと御幸の名が呼ばれた。

片岡は練習試合の結果で正捕手を決めると二人に告げた。

この片岡の言葉に御幸とクリスは大きな声で片岡に返事をした。

1軍メンバーの発表が再開されると、丹波と伊佐敷の名が呼ばれた。

片岡は丹波と伊佐敷の二人にも、後日に行われる他校との練習試合の結果で

第2先発を決めると告げた。

伊佐敷と丹波はお互いに負けない、譲らないとばかりに目線で火花を散らした。

その後の1軍メンバー発表は結城や小湊等の秋の選抜大会で1軍だった者達か

順当に選ばれたり、新たなメンバーが加わったりしていった。

だが、川上の名前は中々呼ばれない。

18人目、19人目と1軍メンバーが発表されてもまだ呼ばれない。

そして、最後の1人となる20人目…。

「20人目！」

川上は祈るような気持ちで片岡の言葉の続きを待つ。

「…川上！」

「は、はい！」

少し言葉につまりながらも大きな声で返事をした川上は笑顔で片岡から背番号を受け取った。

そして1軍メンバーの列に並ぶ際に、手を差し出してきたパウプロ  
と  
力強くタッチをしたのだった。

## 第145話

紅白戦が終わって1週間、練習試合の日がやって来た。

練習試合は基本的に秋の神宮大会の日程に合わせて組まれてるんだけど、

1軍が5試合、2軍と3軍はそれぞれ3試合組まれてるそうさ。

2軍と3軍は監督代行として落合さんが指揮を取り、太田部長が補佐するとの事。

太田部長は紅白戦が終わってからは落合さんの補佐をするために、毎日資料とにらめっこしていたらしい。

頑張れ、太田部長！

さて練習試合なんだけど、俺は基本的に外野での出場となった。

これは丹波さんと純さんが第2先発の座を争う事が関係している。

二人がそれぞれ2試合で先発を担当して、その結果で判断するらしい。

まあ、展開次第で抑えとして1イニングだけ投げさせてくれる場合もあるとの事だが、

俺の投手としての出番は基本的に最後の5試合目だけだったさ。

うーん、残念。

そんな感じで俺は8番レフトで1試合目の練習試合に出場する事になった。

投手として投げられないのは残念だけど、試合を楽しむぜ！



「おい見ろよ、葉輪がレフトにいるぜ。」

青道高校で行われる練習試合を見学に来た野球部OBの一人がそう話す。

「本当だ、ケガでもしたのか？」

「エースを外野守備に回して温存って感じだろう？」

練習試合を見学に来た野球部OB三人組は口々に憶測を話す。

「はあ…葉輪のピッチングが見たかったなあ。」

「でもよ、丹波も悪くねえだろ？あいつも普通ならエースって言われなくても不思議じゃないぜ。」

「まあ、葉輪がいるからエースにはなれねえだろうな。」

「ついてないよな、丹波も。」

三人組が話していると、対戦相手の高校がグラウンドにやって来た。

「お？対戦相手が来たぜ。えつと…あのユニフォームはどこのだ？」

「えつと…鵜久森？たしか東京都地区の高校だったよな？」

「うわ、なんだあれ？リーゼントがバッチリ決まってるじゃん。」

「ヤンキーかよ…大丈夫か？」

青道野球部OB三人組が心配する中で、鵜久森の者達は準備を始めたのだった。



「ちつ、葉輪の野郎が先発じゃねえのかよ。」

「仕方ないよ、梅宮。青道さんにも事情があるんだから。」

愚痴を溢したりリーゼントが特徴的な男は鵜久森高校のエース、梅宮聖一である。

そして梅宮を諷めた車椅子に乗っている青年は、鵜久森高校で実質的に

監督をしているマネージャーの松原 南朋だ。

「梅宮、大丈夫だよな？」

「ああ、今度は絶対に折れねえ。」

梅宮はリトル時代にパウプロが所属していた丸亀リトルと対戦した事があるのだが、

その時に梅宮はパウプロの投球に心が折れてしまい、一時期野球から離れてグレていた。

だが、リトル時代に知り合った松原が交通事故にあっても、野球と関わるのを

諦めないのを見て、梅宮の野球熱が再燃したのだ。

「前座の奴等はさっさとボコボコにして葉輪を引きずりだす。そうだろう、南朋？」

「うん、期待しているよ、梅宮。」

松原は膝の上に乗せているノートに手を置いて、梅宮に微笑む。

「みんな、集まって。」

「おう！みんな集合だ！」

松原の代行として梅宮が鶉久森のメンバーに集合をかけた。

「みんな、甲子園で優勝した青道と練習試合を出来る機会はそんなに無い。」

でも、胸を借りるつもりじゃダメだ。勝ちに行くよ。」

「「応!!」」

松原の檄に応えた鶉久森高校のメンバーは、大きな声を出しながら試合前の練習を始めたのだった。

## 第146話

「ドラー！」

練習試合前の練習で鵜久森のリーゼント君は随分と気合いが入っているなあ。

「礼ちゃん、鵜久森ってあまり聞かない高校だけど、よく練習試合を組んだね。」

俺がリーゼント君の練習を見ていると、横で一也が礼ちゃんにそう聞いている。

「確かに鵜久森は激戦区の東京では有名ではないわね。でも、夏前の練習試合で明川学園と引き分けたり、秋の選抜大会の3回戦で稲城と2-3の接戦をしたりしたのよ。」

「へえ、楊や鳴を相手にそれだけやれるぐらい強いんだ。」

「強い…というよりは勢いのあるチームってところかしら。」

礼ちゃんのその言葉に俺と一也は揃って首を傾げる。

「鵜久森はとにかく失敗を怖れずに積極的に仕掛けてくるチームなの。そういったチームだからなのか、勢いに乗った時は本当にやっかいなチームなのよ。」

「それが他の強豪との練習試合よりも優先した理由？」

「半分はそうね。もう半分はあそこにいるマネージャーの松原君の熱意に負けたってところね。」

礼ちゃんの視線を追うと、そこには車椅子に乗った青年がいた。

「あれ？どこかで見えたことがあるような？」

「パワプロ、あいつとはシニアで試合をした事があるぞ。」

「そうだった？」

一也の言葉で記憶を掘り返そうとするが、ぜんぜん思い出せない。俺が腕を組んで思い出そうとしていると、一也はため息を吐き、そんなやり取りを貴子ちゃんはニコニコと見ていたのだった。





練習試合が始まった。

青道は後攻なので、俺はレフトの守備位置に向かう。

何やら多くの視線を感じたので振り向くと、そこには鵜久森の人達  
がいた。

ピッチャーの俺がレフトを守るのはそんなに変かな？

試合が始まると、鵜久森の1番バッターは丹波さんのボールを初球  
から積極的に振っていった。

丹波さんは1番、2番は打ち取ったんだけど、3番バッターには上  
手くレフト前ヒットを打たれてしまった。

早速の守備機会を俺はすっかりとこなしたぜ！

そして鵜久森の4番バッターとしてあのリーゼント君が打席に  
入ったんだけど、ここで驚くことが起こった。

なんと、塁に出た3番の人が初球に盗塁を仕掛けたのだ。

盗塁の結果はアウトだったんだけど鵜久森ベンチの表情は明るく、  
盗塁失敗を少しも気にしている様子は無い。

「惜しい惜しい！次は盗めるよお！」

そんな声が鵜久森ベンチから聞こえてくる。

敵チームながら野球を楽しんでいる様に見えて、凄く雰囲気の良い  
チームだな。

盗塁失敗でスリーアウトになったので1回の表が終わり、今度は青  
道の攻撃だ。

鵜久森のピッチャーは4番として打席に入ったあのリーゼント君  
だ。

エースで4番とは凄いな。

俺も野手能力を成長させてクリーンナップを狙ってみようかな？

青道の1番バッターとして打席に入った倉持は、リーゼント君の  
ボールをじっくりと見ていつている。

リーゼント君の持ち球はフォーシームとスローカーブってところ  
かな？

この緩急差で倉持はボテボテのショートゴロに打ち取られたんだ  
けど、快速を活かして内野安打をもぎ取った。

続く2番バッターは亮さんだ。

鵜久森は内野安打をもぎ取った倉持の足を警戒しているのか、何度も牽制をしてきた。

だけど、リーゼント君が投げる初球で倉持はスタートを切った。

亮さんは倉持の盗塁を助ける為に空振りをする。

すると鵜久森のキャッチャーは2塁に投げられずに、倉持の盗塁は成功してノーアウト、2塁の状況になった。

続く2球目、亮さんと倉持はヒットエンドランを仕掛けた。

鵜久森のお株を奪う積極的な仕掛けだったけど、この一打はヒットにはならず内野ゴロで進塁打となった。

これでワンアウト、3塁のチャンスでバッターは3番の哲さんだ。

リーゼント君は緩急差を活かしてカウントを稼いでいく。

そしてツーボール、ツーストライクのカウントでリーゼント君は勝負に出た。

リーゼント君がこの練習試合で初めて投げる変化球に哲さんのバットが空を切った。

空振り三振に抑えられた哲さんは、次打者のクリスさんに耳打ちしてからベンチに戻ってくる。

そんな哲さんに俺は声を掛けた。

「哲さん、最後のボールは何だったんですか？」

「パワプロか、残念だが球種まではわからない。」

「そうなんですか？」

「ああ。縦のスライダーかと思ったんだが、少し独特な軌道だったかな。」

「へ〜。」

俺が哲さんと話していると、クリスさんはリーゼント君に哲さんを打ち取ったのと同じボールで内野ゴロに打ち取られてしまった。

リーゼント君は俺に向けてグローブを突き出すと、ニツと笑みを浮かべて鵜久森側のベンチに戻っていったのだった。

## 第147話

鵜久森との練習試合の2回の表、鵜久森の先頭打者は4番のリーゼント君だ。

リーゼント君も鵜久森の他の打者と同じく初球から積極的にバットを振っていった。

そしてワンボール、ワンストライクからの3球目、リーゼント君は丹波さんのカーブを引つ張ってレフト前に運んできた。

ヒットを打ったリーゼント君は1塁の塁上で「ドラー！」って叫んでる。

そして続く5番打者に対する初球、リーゼント君は迷わずにスタートを切った。

クリスさんはこれを読んでいたのか、アウトコースの高目に要求していて、2塁に矢の様な送球をしてリーゼント君の盗塁を刺した。

リーゼント君は悔しそうに頭を抱えると、クリスさんを一睨みしてからベンチに戻っていった。

2回の攻防はこのリーゼント君以外の動きは特に無く終わる。

3回の表にも丹波さんはヒットを打たれたけど、得点は許さずにしつかりと抑えた。

そして3回の裏、野手として初めて俺の打席が回ってきたのだった。



3回の裏の先頭打者として、8番のパワプロが打席に向かっていく。

そのパワプロの姿を梅宮はロージンバッグを手にしながら見ていた。

(リトルで葉輪の投球を見て挫折してから3年、南朋のおかげでまた野球を始められた。俺と同じ様に挫折した奴等が鵜久森には集まっている。だからこそ、葉輪は絶対に抑えてえ。)

ロージンバッグを置いた梅宮はフツと余分な滑り止めを吹き飛ばす。

(そして、青道のピッチャーを攻略して葉輪をマウンドに引き摺りだして勝負する！もう逃げねえぞ！絶対に食らいついてやる！)

打席に入ったパウプロを睨み付ける様にして梅宮が投球モーションに入る。

パウプロに対する初球、梅宮はアウトコースのスローカーブを選択した。

緩いボールがスツと変化してアウトコースのストライクゾーンに入り込んでいく。

パシッ！

「ストライク！」

これでカウントはノーボール、ワンストライク。

(バットは振らなかったが、しっかりとタイミングは取ってやがった。葉輪の本職はピッチャーだが油断ならねえ。)

リトル時代にパウプロはホームランを打った事があるが、そのホームランを打った時の投手は梅宮だった。

ノビのフォーシームとキレのあるカーブ、それらを自在に操るコントロールにホームランをも打つ打撃力を見せ付けられたリトル時代の梅宮は、一度ポツキリと心が折れてしまった。

そして荒れた中学時代を過ごした梅宮だったが、事故で選手として野球が出来なくなっても野球と関わる事を諦めない松原の姿を見て、失っていた野球に対する情熱を取り戻したのだ。

(俺達はもう一度野球を好きにさせてくれた南朋を甲子園に連れていく。葉輪に土を付ける役は成宮に取られちゃったが、あれ以上の形で勝ちや文句ねえだろ。)

二ツと好戦的な笑みを浮かべた梅宮が2球目を投げ込む。

梅宮が投げ込んだのはアウトハイのフォーシーム。

この1球にパウプロがバットを振るが、差し込まれた形でキャッチャー後方に飛ぶファールとなった。

これでカウントはノーボール、ツーストライクと追い込んだ。

3球目、梅宮は1球目と同じスローカーブをアウトコースに投げ込んだ。

ただし、今度はボールゾーンを狙ってだ。

この1球にパウプロが反応をするが、スイングは途中で止まった。

梅宮とキャッチャーが塁審に判定を要求する。

判定は…ノースイング！

「惜しい惜しい！梅ちゃん！ボールキレてるよ！」

梅宮の耳に仲間達の声援が届く。

（わかってるよ、今日の俺のボールは間違いなくキレてる。特に真っ直ぐがな。）

プレートを外した梅宮がロージンバッグを手にする。

（だからこそ、今の1球は次の為の布石なんだ。真っ直ぐを活かす為の緩急と、内外の距離感の違いを利用した最高の真っ直ぐを投げる為のな。）

余分な滑り止めを吹き飛ばした梅宮は気合いを入れる為に帽子を被り直す。

（葉輪への決め球はインハイの真っ直ぐ！試合前からそう決めてたんだ！）

プレートに足を掛けた梅宮がキャッチャーのサインに頷いて投球モーションに入る。

リリースの瞬間、最高の手応えを感じた梅宮はアウトを確信した。だが…。

カキンッ！

金属バットの快音を残した打球は、ライトの頭上を高々と超えていった。

会心の一球をホームランにされた梅宮はパウプロがホームインするまで、打球が飛んでいった方向を見詰め続けたのだった。

## 第148話

鵜久森との練習試合の3回の裏、俺はソロホームランを打った。練習ではそこそこ打っているんだけど、試合形式では青道に入ってから初めてじゃないかな？

ダイヤモンドを一周してホームベースに戻ってくると、次打者の丹波さんが手を上げていたのでハイタッチをした。

イエーイ♪

ベンチに戻っても皆とハイタッチをさせたぜ！

「葉輪、何を打ったかわかるか？」

「はい！インハイのフォーシームです！俺にはあの縦変化のボールは投げてきませんでした！」

俺の言葉を聞いた片岡さんは頷いてからベンチの皆に振り返る。

「鵜久森は勢いに乗ったら稲城と互角に渡り合えるチームだ。一点取ったからといって緩めずにこのまま攻め続けるぞ！」

「はい！」



「梅ちゃん…。」

パウプロがホームインをした後、鵜久森のキャッチャーはマウンドに向かった。

梅宮がパウプロが打った打球の方向を見たまま動かなかつたからだ。

「…ああ、こうでなきやな。」

「え？」

パウプロがホームインしてから俯いていた梅宮が両手を腰に当てて話し出す。

「リトルの時、俺は葉輪のプレーを見て心が折れちゃった。今の一発でなんか戻ってきたんだなって実感してよ。なんか、嬉しくなっちゃったんだ。」

「梅ちゃん…。」

俯いていた梅宮が顔を上げる。

「やっぱ葉輪の野郎は怪物だ。でもよ、やりがいがあるよな。」

そう言うのと梅宮は笑顔になった。

「心配かけて悪かった。もう大丈夫だからよ。」

「はは、最初から心配なんてしてないよ、梅ちゃん。」

「おう…ここからはパワーカーブをガンガン使っていくからな！後ろに逸らすなよ！」

梅宮のグローブとミットを合わせた鵜久森のキャッチャーがキャッチャーボックスに戻っていく。

「ふう、やられっぱなしじゃカッコつかねえよなあ…。」

そう呟いた梅宮は青道ベンチにいるパワプロに目を向ける。

「ぜってえに引き摺りだしてやる。首を洗って待ってやがれ！」

ドンツと胸を叩いて気合いを入れた梅宮は、後続のバッターをしつかりと抑えたのだった。



4回の表、鵜久森の攻撃は4番の梅宮から始まった。

丹波は新変化球のナックルカーブを使ってカウントを整えて勝負にいったが、梅宮に上手く右中間に運ばれるツーベースヒットを打たれてしまった。

ノーアウトで得点圏にランナーを置くと、鵜久森ベンチから歓声が上がる。

続く鵜久森の5番バッターに対する初球、クリスは様子見で一球外すが、この一球を見ていた松原が動いた。

松原のサインに頷いた鵜久森の5番バッターが、バットを指一本分短く持って構える。

丹波が2球目を投じようと動いたその瞬間、ランナーの梅宮がスタートを切った。

鵜久森の5番バッターは短く持ったバットでボールを叩きつける

ようにしてスイングをする。

松原が出したサインはエンドランだったのだ。

梅宮がスタートを切ったのを見た青道のサードを守る前園が3塁に入った事で、三遊間に大きな隙間が出来てしまった。

鵜久森の5番バッターはその隙間を狙って打球を転がした。

バットを短く持ちつつも鵜久森の5番バッターがバットを振り切った事で、球足の速いゴロがレフト前へと抜けていく。

エンドランでスタートを切っていた梅宮は迷わずに3塁ベースを蹴ってホームに向かった。

(これで…同点！)

梅宮はホームに向かって全力で走りながら得点を確信する。

だが…。

「回りこめえ！」

その声が聞こえた瞬間、梅宮の目にボールを捕球したクリスの姿が映った。

反応良く前に詰めていたパワプロが迷わずにバックホームをしたのだ。

梅宮はクリスのタッチを掻い潜ろうと回りこむ様にして滑る。

結果は…。

「アウト！」

ホームのクロスプレーはアウトになったがプレーはここで終わらない。

鵜久森の5番バッターがパワプロが直接ホームに返球したのを見て2塁を狙ったからだ。

梅宮にタッチをしたクリスは素早く立ち上がると2塁へ矢の様な送球をする。

そして…。

「アウト！」

ノーアウト、ランナー2塁のチャンスは変則的なダブルプレーでツーアウト、ランナー無しになってしまった。

梅宮は立ち上がるとレフトのパワプロを見る。



左腕を高々と上げるパワプロを見た梅宮は、苦笑いしながらベンチに戻っていったのだった。

## 第149話

鵜久森との練習試合の4回の表、変則的なダブルプレーでピンチを脱すると丹波は続くバッターを三振で抑えた。

4回の裏の青道の攻撃、先頭打者のクリスが4回の表のお返しとばかりにツーベースヒットを打って、ノーアウトでチャンスを作り出した。

梅宮は5番バッターを打ち取ったがこれが進塁打となり状況はワンアウト、ランナー3塁、そしてバッターは6番の前園だ。

前園の本職は1塁手なのだが、春季大会でのパワプロの活躍を見たことで出場機会を求めて別ポジションに挑戦し、現在は1塁と3塁の守備練習をするようになった。

増子の2軍落ちというハプニングでの1軍選出ではあったが、前園はこの機会に1軍定着をものにしようと意気込んでいる。

いや、意気込み過ぎていたのかもしれない。

彼は本来ならプルヒッター……つまり、引つ張る打撃を得意とする選手なのだが、1軍で試合に出場する様になってからは逆方向への打撃を意識し過ぎているのだ。

(ワンアウト、3塁のチャンス……外野フライでも1点や。無理に引つ張らんで、逆方向に……)

この意識が前園のバッティングに狂いを生じさせる。

彼が得意とする引つ張る打撃のタイミングを取らない事で、彼本来の力強いスイングでは無くなってしまったのだ。

その結果、彼は1軍で試合に出場する様になってからヒットを打っていない。

守備で貢献出来てはいるものの、このままではという焦りも加わって前園の心は追い込まれ始めていた。

(逆方向、逆方向や……)

初球、梅宮は打ち気を逸らす様にスローカーブを投げ込む。

前園は身体に染み付いた引つ張る打撃のタイミングで踏み込んでしまう。

緩やかなスローカーブで態勢を崩された前園は弱々しいスイングでバットを当てにくい。

コッソリ。

打球は確かに逆方向に行ったが、弱々しい勢いで梅宮の左横に転がった。

素早く打球を捕球した梅宮は3塁ランナーのクリスを目線で牽制してから1塁に送球する。

「アウト！」

懸命に1塁に走った前園だったが、余裕を持ってアウトにされてしまったのだった。



4回の裏、ノーアウトでチャンスとなった青道だったが、残念ながら無得点で終わってしまった。

「かあく、惜しい！あとワンヒットだったのに！」

練習試合の見学に来ている青道野球部OBの一人が悔しそうに頭を抱える。

「どうも打線が噛み合って無いイメージだな。やっぱり1年にはまだ荷が重いのか？」

「いや、東京地区の投手のレベルが上がってるから仕方ないんじゃないか？」

「それでも、打の青道の1軍なら犠牲フライぐらいは打って欲しいだろ。」

5回の表が始まる前の攻守交代の時間に、OB三人は口々に話をしていく。

「しかし、葉輪のホームランは痛快だったな。流星は怪物つてところか。」

「あの一発は最初から内角を狙ってたのか？迷いのないスイングだったな。」

「俺も現役の時にあれだけ振れば1軍になれたんだろうけどなあ

…。」

「はっはっはっ！」

OBの二人が笑った頃、5回の表が始まった。

「頼むぜえ、勝って俺に旨いビールを飲ませてくれよお。」

「お前は飲み過ぎだ。最近、腹が出てきたぞ。」

「ほっとけ！仕事でストレスが溜まってんだよ！」

そう言ったOBの一人に、他のOB二人はわかるというように頷く。

「なあ、お前も週末に草野球をやらないか？うちのチーム、一人転勤でいなくなったからメンバーを募集してるんだよ。」

「マジか？でもよ、最近の草野球ってノンプロとかも参加してレベル高いんだろ？俺で大丈夫か？」

「うちのチームは今年出来たばかりだから、まだ所属地区の下部なんだよ。復帰して身体慣らしするぐらいの余裕はあると思うぞ。」

「そうか、練習試合を見てたら身体がウズウズしてたんだ。後で連絡をくれよ。」

「俺もいいか？運動不足で腹がヤバイんだ。このままじゃ彼女に腹をつつかれて笑われる。」

「お前、彼女いるのかよ!?!」

OBの三人が和やかな会話をしている間も練習試合は進んでいく。

5回の表に鵜久森が同点に追い付くと、試合は練習試合とは思えない程に両チームの緊張感が高まっていったのだった。

## 第150話

「すまない、クリス。」

「丹波、気にするな。」

鵜久森との練習試合の5回の表、4回の表と同じノーアウト1、3塁の状況を作られた丹波は、鵜久森のバッターに犠牲フライを打たれて同点に追い付かれてしまった。

「あそこで俺がナックルカーブのサインに首を横に振らなければ抑えられていたかもしれない。」

「それは結果論だ。今は後続を抑える事を考えろ。」

「ああ。」

力強く頷いた丹波の様子に大丈夫だと確信したクリスは、丹波に先程の一球の真意を問う。

「丹波、気にするなといっておいてなんだが、なぜさつきは首を横に振った？」

「…正直に言えば、葉輪のプレーにあてられて真っ直ぐで力勝負をしたくなった。」

「葉輪のプレーに？」

驚くクリスに丹波は決まりが悪そうに頬を搔く。

「おかしいか？」

「いや、丹波がピッチャーらしい欲求を持つようになって安心した。」

そう言っただけでクリスはミットで丹波の胸をポンツと叩く。

「残りアウト2つ、頼むぞ。」

「ああ。」

キャッチャーボックスに戻るクリスを見送った丹波は大きく息を吐きながら帽子を被り直す。

（ピッチャーらしい欲求か…俺自身、こんな気持ちを持つようになった自分に驚いている。）

丹波はスパイクで足場を均すともう一度大きく息を吐く。

（葉輪、まだお前の様に笑うことは出来ないが、俺も少しずつ、投げるのを楽しめる様になってきたぞ。）

プレートに足を掛けた丹波はクリスのサインに頷くと、同点に追い付かれた影響を感じさせずにしっかりと投げ込んでいくのだった。

◆ 5回の表に同点に追い付かれた青道だったが、5回の裏に直ぐに2点を追加して3―1と鵜久森を突き放す。

だが、6回の表に鵜久森が再び同点に追い付く粘りを見せた。

6回の裏ではツアアウトながら四球で出塁した倉持がすかさず盗塁を決めると、バッターの小湊がライト前に落ちるタイムリーヒットを打って4―3と三度勝ち越した。

続く青道のバッターである結城を梅宮が気合いの投球で抑えると、7回の表の鵜久森はセーフティバント等を用いて積極的に仕掛けてチャンスの場面を作り、梅宮の一打で4―4の同点に三度追いつく。

7回の裏、先頭打者のクリスがヒットで出塁すると、5番バッターも続けてヒットを打ってノーアウト、1、2塁のチャンスを作ったのだが、6番バッターの前園がゲッツーに打ち取られてツアアウト、ランナー3塁となってしまった。

続く青道の7番バッターが四球で塁に出ると、鵜久森バッテリーは8番のパワプロを敬遠した。

そして満塁で投手の丹波と勝負という場面で、青道の監督である片岡は御幸を代打に送った。

御幸はここでタイムリーヒットの結果を出して、青道は2点を追加し6―4と鵜久森を四度突き放す。

御幸の次打者である倉持が凡退した事で7回の裏の攻撃は2点を追加して終わってしまったが、8回の表に鵜久森ベンチと見学している青道OBがざわめく出来事が起こる。

それはレフトに向かうはずのパワプロがマウンドに立ったからだった。



「葉輪、残り2回、お前に任せる。」

「はいー」

練習試合の1戦目から出番が来たことで俺のテンションが上がる。

出番が無くなったノリは少し悔しそうに苦笑いしているな。

ノリ、すまん。

「レフトは白州、クリスは御幸と交代だ。残りの練習試合でも起用を色々試していく。ベンチの者達も気を抜かずにしつかりと準備をしておけ。」

「はいー」

片岡さんの話が終わって貴子ちゃんから投手用のグローブを受け取ってマウンドに向かうと、一也がマウンドにやって来て俺に話しかけてきた。

「パワプロ、残りアウト6つ、ランナーを一人も出さずに全部三振を狙うぞ。」

「お？いいねー！望むところだぜ、一也ー！」

俺は一也と笑顔でグローブとミットを合わせると、初めてののリリーフのマウンドを楽しんでいったのだった。

## 第151話

青道と鵜久森の練習試合の8回の表、青道のピッチャーは丹波からパウプロに代わった。

パウプロがマウンドに上がったのを見た鵜久森のマネージャーである松原は、拍手を1つ打ってチームの皆の注目を集める。

「さあ、ここからが本番だよ。僕達は秋の大会で稲城の成宮から得点を奪う事が出来たんだ。だから、葉輪からだって奪えても不思議じゃない。今まで通りに積極的にいこう。」

「応ー」

松原の檄に応えた鵜久森のメンバーがベンチから大きな声を出していく。

(とは言ったものの、葉輪の投手としての能力は成宮よりも一枚上だからね。2イニングで攻略するのは難しいだろうな。)

そう考えながら松原は車椅子をベンチの最前列に移動させてノートを開く。

(勝負は来年からと考えていたけど、それでも目の前の試合に負けるつもりは無い。皆、頼んだよ。)

松原はパウプロの投球練習のボールを一球一球余さずに観察してノートにメモしていく。

そしてメモを終えると、切なそうに自身の足に手を添えるのだった。



パウプロは投球練習を終えて御幸が2塁に送球したのを見送ると、マウンドをスパイクで均していく。

(なんかリリーフって不思議な感覚だな。試合終盤で気持ちは高まっているのに、肩を作ったばかりだから身体が軽い。いつも8回辺りは少し疲れてるんだけどなあ。)

ボール回しが終わって戻ってきたボールを受け取ると、パウプロは



マウンドで笑顔になる。

「まあ、俺に出来るのは楽しんで投げる事だけだし、いつも通りに行こうか！」

そう言うとパウプロは、御幸のサインに頷いて笑顔でボールを投げ込んでいくのだった。



8回の表、鵜久森の攻撃は8番バッターからだ。

鵜久森の8番バッターは右打席に入ると、足場を作ってから気合いの声を上げる。

初球、鵜久森のバッターはパウプロが投げ込んだインハイのフォーシームを空振りしてしまう。

明らかに振り遅れたのを感じたバッターはバットを短く持ち直す。

それを横目で観察していた御幸が次の一球のサインを出すと、頷いたパウプロが独特な投球モーションに入る。

2球目、パウプロはインローにチェンジアップを投げ込んだ。

ややシュート方向に変化するパウプロのチェンジアップが、右打席にいる鵜久森の打者に対してフロントドア気味に変化していく。

パウプロのフォーシームに対応しようとしていた鵜久森の8番バッターは完全にタイミングを外されてしまい、手を出すことが出来ずにボールを見送った。

「ストライクツー！」

2球であっさり追い込まれた鵜久森の8番バッターは慌ててタイムを取って打席を外す。

積極的に仕掛けてパウプロのペースを乱そうとしていたのに、いつの間にかパウプロの投球に飲まれていた事に気が付いたからだ。

二度、三度と素振りをする鵜久森のバッターを横目で観察する御幸は、既に三振を奪える事を確信していた。

鵜久森のバッターが打席に戻ると、御幸は直ぐにサインを出す。

パウプロがサインに頷いたのを見た鵜久森のバッターは慌ててタ

イミングを計る。

3球目、パウプロは初球と同じインハイのフォーシームを投げ込む。

そして…。

パン!

御幸のミットが快音を鳴らすと、主審が力強くアウトをコールした。

手を出せずに三球三振で抑えられた仲間を見た松原は、ノートにメモを取る手を止めて頬を流れる冷や汗を拭いたのだった。



8回の表、パウプロは鵜久森打線を三者連続で三球三振に抑える快投を見せた。

8回の裏、梅宮が鵜久森に流れを呼び込もうと力投を見せるが、青道打線に1点奪われてしまい、7-4と点差を拡げられてしまった。

そして9回の表、鵜久森打線の先頭打者である2番バッターと、続く3番バッターも三球三振に抑えられてしまう。

8回の表から五人連続で三球三振。

そして9回の表、ツーアウトでランナー無し。

それでも鵜久森ベンチは諦めずに、4番の梅宮に声援を送っている。

梅宮が打席に入ると、パウプロはサインに頷いて投球モーションに入る。

初球、パウプロは右打席の梅宮にバックドアとなる高速スライダーを投げ込んだ。

積極的なバッティングをする梅宮だが、この初球には手が出ずに見送ってしまった。

判定はストライク。

梅宮はタイムを取って打席を外すと素振りをしていく。

(つたく、なんで俺は中学の三年間を無駄にしちまったんだろうな

…)

素振りを終えた梅宮が打席に戻ると、パウプロは直ぐにサインに頷いて投球モーションに入る。

2球目、パウプロはインコースのやや甘い所にボールを投げ込んだ。

このボールに反応した梅宮がバットを振るが、ボールは抜群のキレでインコースのボールゾーンへと変化し、梅宮のバットを掻い潜る。

2球続けての高速スライダーであっさりと追い込まれた梅宮は打席で大きく息を吐く。

(いや、あの挫折がなけりや、俺は今程本気で練習をしてねえな。リトルの時の俺は、チームの誰より上手いのを鼻にかけて天狗になつてたしな。)

3球目、パウプロはアウトローにピンポイントでフォーシームを投げ込む。

梅宮はスイングをするが、先程の高速スライダーが頭を過り振り遅れてしまう。

バシッ!

御幸のミットが快音を鳴らすと、主審が試合終了をコールする。

(葉輪、感謝するぜ。俺は今、本気で野球をやれてる。あの頃よりもずっと楽しんでな。)

梅宮までもが三球三振に倒れた鵜久森だったが、試合終了の挨拶に並んだ時には、チームの誰もが笑顔で挨拶をしたのだった。

## 第152話

鵜久森との練習試合は7―4で青道が勝利した。

俺は5打数1安打1本塁打と2回を投げて6三振の成績だったぜ！

打撃成績が少し…いや、かなり不満だな。

残りの練習試合4回が終わったら野手能力を成長させる事も考えてみようかな？

そんな事を考えていたら鵜久森のリーゼント君が俺の所にやって来た。

「葉輪！来年の夏に甲子園でリベンジしてやる！首を洗って待ってやがれ！」

リーゼント君は宣戦布告をして車椅子の人の所に戻って行って、彼と一緒に帰っていった。

よくわからないけど…また試合をしようぜ、リーゼント君！



2試合目の練習試合では先発のマウンドに純さんが上がった。

相手は秋季関東大会に出ていない関東の強豪校との事だ。

2試合目の練習試合は青道が先攻で、俺はまたレフトでスタメン出場だ。

鵜久森との試合と違って2試合目は1回の表から乱打戦となった。

1回の表の青道の攻撃で2点を先制すれば、相手の強豪高も負けじと点を返してくる。

6回が終わった時には5―6と負け越していた。

7回の裏から俺が投げて相手打線を抑えていったんだけど、青道打線も相手の継投策の前にチャンスは作れても得点には至らず、5―6で2試合目は負けてしまった。

純さんは新変化球のシュートが甘く入ったところを狙われたのが悔しかったのか、練習試合が終わった後に誰よりも居残って走り込み

をしていた。

3試合目の練習試合は前回に続いて純さんが先発した。

この試合は投打が噛み合って6回終了時に5―1と勝ち越していた。

ここで純さんは降板して7回のマウンドにはノリが上がった。

ノリは東さんとの練習の経験を活かして右打者にバツクドアとなるシンカーと、フロントドアとなるスライダーのコンビネーションで相手打者を抑えていった。

時折、甘く入ったシンカーをセンター前に弾き返される場面もあったけど、ノリは3回のロングリリーフを1失点で投げ抜いた。

そういうわけで、3試合目は残念ながら俺の投手としての出番は無かったぜ…。

4試合目の練習試合の先発は丹波さんだ。

丹波さんは1回にソロホームランを打たれたが、その後も慌てずにしつかりとボールを投げ込んでいった。

4試合目の丹波さんは7回を投げて2失点の成績だった。

試合は2―2の同点の状況で、8回からは俺が登板した。

9回の裏、ツーアウトまで同点だったんだけど、最後のバッターの代打に出た一也がサヨナラホームランを打って3―2で勝利した。

一也って本当に勝負強いよな。

そして最後の5試合目の練習試合は予定通りに俺が先発のマウンドに上がったのだった。



5試合目の練習試合は9回の表まで進んでいた。

青道と対戦している相手チームベンチから何とか一点と声が出ている。

そんな声が聞こえているのかいないのか、パワプロはスコアボードに目を向けた。

「7回の表のヒット1本が無ければ完全試合も行けたのになあ…。

まあ、フォーシームとカーブだけしか投げちゃダメって片岡さんに言われたからしょうがないか。」

パウプロは完全試合を逃した事を残念がっているが、僅か2球種のみで関東の強豪校をヒット1本に抑えるという凄い事をやっているのだ。

「この試合はヒット2本打てたし、後は最後まで投げるのを楽しもうか。」

この試合、パウプロは9回を投げて被安打1、奪三振17の投手成績に、5打数2安打、1打点の打撃成績を残し、秋の選抜大会で敗れても怪物の異名に偽り無しと示したのだった。

## 第153話

予定されていた練習試合が終わった翌日、秋季神宮大会で稲城が優勝したという報せがあった。

これで青道が春の選抜甲子園大会に出場出来る可能性が高くなっただぜ！

後は推薦される事を祈るのみだ。

少し日数が経ったとある日、この日だけは青道野球部の皆が練習を軽めに切り上げてミーティングルームに集まっていた。

皆はミーティングルームに用意されているモニターを食い入る様に見詰めている。

その理由は…。

『第〇回ドラフト会議を始めます。』

そう、今日はドラフト会議が行われる日なのだ。

『福岡イエローファルコン…。』

今年日本一になったパ・リーグのチームから指名選手が発表されていく。

青道でプロ志望を出したのは東さんだけだけど、皆はまるで自分の事の様に真剣にモニターを見詰めている。

社会人野球で活躍して即戦力と噂されている選手の名前や、大学野球で活躍して有名と言われている選手の名前が次々と呼ばれていたが、プロ野球のペナントで上位になったチームの指名が終わっても東さんの名前は呼ばれなかった。

流星に一位指名は無いかなと皆の空気が緩み始めたその時…。

『神奈川シースターズ…東 清国、内野手、青道高校。』

今！東さんの名前が呼ばれた！

皆が一斉に立ち上がって歓声を上げる。

最前列に座ってドラフト会議を見ていた東さんは、ニヤケそうになる顔を必死に引き締めている様に見えるな。

もつと素直に喜ぼうぜ、東さん！

そんな感じで皆が東さんの指名を喜んでいと…。

『大阪ブルーブルズ：東 清国、内野手、青道高校。』

うお!? 競合だ! 2 球団競合だ!

皆が再度歓声を上げると…。

「うおおおおおおお!!」

東さんも立ち上がって雄叫びを上げて皆で一緒に喜んだのだった。



あの後、競合の結果として東さんとの交渉権は神奈川シースターズが勝ち取った。

校舎に用意されていた会見場に東さんが座ると、記者さん達が一斉にフラッシュを焚く。

東さんの記者会見はこんな感じだった。

『僕にはとんでもない後輩がいます。その後輩の先輩として恥じない様、プロとして日々精進を重ねていこうと思っています。』

とんでもない後輩っていうのはクリスさんの事だろうな。

流星はクリスさんだぜ!

俺がクリスさんに流星ですねと言いながらサムズアップをすると、クリスさんはなぜか大きなため息を吐いた。

解せぬ…。



「はい、青道高校野球部監督の片岡です。」

ドラフト会議の翌週、青道高校に一本の電話が届いていた。

「はい、はい、失礼します。」

片岡が受話器を置くと、それを見守っていた太田部長が唾を飲み、高島が眼鏡をかけ直す。

「それで片岡監督、どうなりましたか?」

そう声を上げたのは青道高校野球部のコーチを務める落合だ。

落合は強豪校でコーチをしていた経験があるため、こういう事には



慣れているのだ。

片岡が強面のその顔を上げると、ニヤリと笑みを浮かべる。

「春の甲子園…出場決定です！」

片岡の言葉にそれぞれが喜びを表現する。

「今年の冬は忙しくなりそうですね。」

落合の言葉に片岡、高島、太田が神妙な表情で頷く。

「太田部長、部員の資料の用意をお願いします。後で落合コーチと練習計画を建てますので。」

「わかりました！」

片岡に返事をした太田が大きな身体を揺らしながら笑顔で動き出す。

「高島先生は部員全員に集合を教えてください。春の出場が決まった事を発表します。」

「はい。」

高島は見惚れる様な笑みを浮かべると、足早に部屋を後にする。

太田と高島が去つたのを確認した落合が口を開く。

「片岡監督、少しいいですか？」

「なんででしょう、落合コーチ？」

片岡の返事を聞いた落合が顎髭を扱きながら話し出す。

「これは年長者としての忠告なのですが、あまり周囲の声は気にしない事です。」

僅かに目を見開く反応を示した片岡を見ながら落合が話を続ける。

「どこにでも他人の粗を探して声高に叫ぶのが好きな輩はいるものですからな。そういうった声に惑わされてやるべき事を見失わない様に。」

「…忠告、感謝します。」

「いやいや、私も若い頃に通つた道ですからね。少しでも役に立てば幸いですな。」

そう言って笑い声を上げた落合に、片岡は深々と頭を下げたのだった。

## 第154話

片岡さんから春の選抜大会への出場が決定した事が発表された。

秋の選抜東京地区大会のリベンジに燃える皆の表情が一気に引き締まったぜ！

その日からの練習は皆気合いが入っていた。

まあ、いつも気合いが入った練習をしているんだけどね。

季節は冬となり11月末に差し掛かった頃、俺を含めた1軍投手陣は屋内練習場で投げ込みをするようになった。

秋以降の寒い季節は野球ではオフシーズンと呼ばれており、投手にとっては肩が冷えやすくして無理な投げ込みは控えるべき時期である。

その為、この季節は外での投げ込みは極力やらない様になっているので、こうして屋内練習場で投げ込みをするようになったわけなのだ。

そういうわけで屋内練習場で投げ込みをするために移動をして肩を作っているのだが、その時に丹波さんが俺に話し掛けてきたのだ。



「葉輪、ちよつといいか？」

「何ですか、丹波さん？」

俺が返事をする、丹波さんはボールを片手に近寄ってきた。

「俺にフォーシームの握りを教えてくれないか？」

「フォーシームの握りですか？」

「練習試合でも実感したんだが、俺はフォーシームを痛打される確率が高い。今まではピッチングに幅を作る為に変化球を磨いてきたんだが、この冬は基本に立ち返ってフォーシームを磨こうと思ったんだ。」

へえ、色々と考えているんだなあ。

「いいですよ、丹波さん。」

「そうか、じゃあ見せてくれ。」

丹波さんが差し出してきたボールを受けとると、同じ屋内練習場で肩を作っていた純さんとノリ、そして俺達のボールを受けてくれるキャッチャーの人達までもが俺の所に集まってきた。

「これが俺のフォーシームの握りです。」

俺のフォーシームの握りを見た丹波さん、純さん、ノリの三人が驚きの表情を見せる。

「葉輪は指をくっ付けているのか…。」

「パワプロ、これでボールをコントロール出来るの?」

「川上、パワプロは実際にピンポイントのコントロールをしてるじゃねえか。」

丹波さん、ノリ、純さんが俺のフォーシームの握りを見て口々に話し出す。

丹波さんのフォーシームの握りは指二本ぐらい間隔を空けていて、純さんは指一本ぐらい間隔を空けている。ノリは丹波さんと同じぐらい間隔を空けているみたいだ。

「葉輪、この握りはいつからやっているんだ?」

「リトルの時にクリスさんに教えてもらってからですね。」

「クリスに?」

俺の言葉で俺を除いた皆がクリスさんの方を向いた。

「指を閉じればキレが、開けばコントロールが良くなるって聞いた事がありますけど、どうしてクリスさんはリトルの時にパワプロにこの握りを教えたんですか?」

一也がクリスさんにそう聞くと、クリスさんは腕を組んで話し始めた。

「当時の葉輪はフォーシームすら知らない素人だったんだ。そこでコントロールに期待出来ないと思った俺はキレを優先してその握りを教えたんだ。」

「それが今となってはピンポイントのコントロールと抜群のキレを両立したあのフォーシームに成長したわけですか。」

クリスさんと一也が話している間も投手陣は握りの感触を確かめている。

「確かにこの握りはボールを強く叩けそうだが…コントロール出来るのか？」

「とりあえず、やってみねえとわかんねえだろ。」

「今の握りと投げわけが出来れば武器にならないですかね？」

この後の投げ込みはフォーシームを中心に行われた。

その結果、丹波さんとノリはフォーシームの握りを指一本ぐらいの間隔に変えたことで、以前に比べてフォーシームが伸びる様になった。

そして純さんは指の間隔を微調整した事で、フォーシームのノビはそのままにコントロールの向上に成功したのだった。

## 第155話

丹波達がフォーシームの握りをパウプロに教えてもらってから一ヶ月、世間は所謂クリスマスと呼ばれるイベントで賑わっていた。だが、高校球児にとっては冬休み真っ只中のオフシーズンである。この時期にどれだけ身体をいじめぬき、レベルアップ出来るのかに、春にレギュラーの座を奪取出来るか、レギュラーの座を守れるかが掛かっているのだ。

そして強豪と呼ばれる青道高校でもそれは変わらない。いや、より厳しい練習をしているかもしれない。

青道高校野球部の冬休みの練習は午前は部活動としての練習だが、午後は部員個人に考えさせる自主練習となっている。

自主練習であるため残る必要はないのだが、部員の誰もが練習に励んでいた。

これはオーバーワークにならぬ様に片岡や落合が一軍、二軍など関係なく巡回しており、彼等にアピールする機会でもあるからだ。

その為、青道高校野球部の皆はクリスマスである今日も、世のカップル達に中指を立てて練習に励んでいるのである。

だが、そんな青道高校野球部の一員でありながら今日この日に限っては午後の自主練習に参加しない者がいた。

それは…。

「貴子ちゃん、お待たせ！」

パウプロこと葉輪 風路である。

パウプロは現在、幼馴染みである藤原 貴子と恋人として順調に交際をしており、クリスマスの今日は恋人の貴子とデートをする予定なのだ。

そんなパウプロに同じ青道野球部の一年生達が心のこもった言葉を送っていく。

「チクショー！絶対に一軍になってやる！」

「爆発しろお！」

「打撃投手の時にはピッチャー返しに気をつけろよゴラァ！」

皆が眉を吊り上げながら中指を立ててパウプロを祝福していく心暖まる青春の光景である。

その光景を見て貴子が苦笑いをするが、パウプロと手を繋ぐと頬を朱に染めて喜ぶ。

青道野球部の一年生達の大ブーイングの中、パウプロと貴子は仲良く帰路につくのだった。



一度帰宅したパウプロと貴子はシャワーを浴びて着替えてから街中へと手を繋いで歩き出す。

クリスマスの日ばかりは野球漬けの日々を忘れて二人きりでデートを楽しむのだ。

パウプロと貴子は先ず、予約していたレストランで昼食を取る。

周囲もカップルが多く、中には指輪を恋人にプレゼントして皆に祝福の拍手を送られている組もあつたりした。

昼食を終えた二人は街中でウインドウショッピングを楽しんでいく。

カップルの二人なのだから洋服等を見ていくと思いきや、スポーツ用品店でグローブやらスパイクやらを見ていく何とも色気の無いデートである。

野球バカのパウプロにエスコートされているのだから仕方ないのだが、貴子も野球が大好きなので欠片も不満を持っていない。

それどころかパウプロとのデートを心の底から楽しんでいた。

次に二人が向かったのはバッティングセンターだった。

二人が何度か交互に打撃を楽しんだ後、貴子はパウプロに九分割の的当てをお願いした。

貴子はパウプロの投げる姿が誰よりもカッコいいと思っており、今日だけはパウプロに自分の為に投げてもらいたいと思ったからだ。

パウプロは貴子の願いを笑顔で受け入れた。

パウプロは貴子のリクエスト通りの番号の的を抜いていく。

フォーシームだけでなくカーブや高速スライダーも使つて的を抜いていくと、初めはカップルで来たパワプロに舌打ちをした者達が、パワプロのピッチングを見る観客へと変わっていった。

2ゲーム、3ゲームと連続で貴子のリクエスト通りの番号を抜いてパーフェクトを達成していくと、バッティングセンターはお祭り騒ぎとなつていった。

4ゲーム目もパーフェクトを達成して二人がバッティングセンターを後にしようとする時、バッティングセンターにいた人達が二人を拍手で送り出したのだった。



貴子ちゃんとのクリスマスデートも終わり、二人で家にまで帰りついた。

「貴子ちゃん、今日は俺ばかり楽しんでゴメンね。」

「私も楽しかったよ、フークくん。」

そう言ってくれる貴子ちゃんは本当に最高の恋人だと思う。

名残惜しいけど、貴子ちゃんとのデートはこれで終わりだ。

「それじゃ貴子ちゃん、また明日！」

そう言つて踵を返すと、不意に貴子ちゃんに袖を掴まれた。

驚きながら振り向くと、貴子ちゃんは顔を真っ赤にしながら俯いている。

「どうしたの、貴子ちゃん？」

「あ、あのね、フークくん。今日、お父さんとお母さんがいないの…。」

実は藤原家だけでなく、我が家の両親も今日はプチ旅行に行つているので家にいない。

「俺の両親と一緒に一泊二日のプチ旅行に行くつて言つてたね。」

「うん、だからね、その…。」

貴子ちゃんは一度言葉を切つてからキュツと唇を結ぶと、意を決した様に顔を上げた。

「今日はずっと、私と一緒にいてほしいの！」

…はい？

貴子ちゃんという言葉を何度も頭の中で繰り返す。

えっと、その…どういことだっばよ!?

「その…ね？お母さんからこういった物を…もらってるの…。」

そう言つて貴子ちゃんはバッグからとある箱を取り出す。

それは…大人のエチケツトアイテムが入った箱だった。

「…ええ!？」

俺は本当に何度もその箱を見直してしまふ。

そんな俺に貴子ちゃんは近付いて来て、正面から俺の腰に手を回し抱き付いてきた。

身体に感じる貴子ちゃんの柔らかな感触で俺の背筋がピンツと伸びる。

「フリーくん…大好き。」

俺は夏の甲子園の決勝でも感じたこと無い大きな緊張で、心臓がバクバクと鳴り続けたのだった。



ピロン♪

『おめでとうございます！大人の階段を登った事を祝福してボーナスポイントを贈呈します！』

『おめでとうございます！大人の階段を登った事で弾道が1成長しました！』



## 第156話

貴子ちゃんとのクリスマスを過ごした翌日、俺は朝早くに先日から準備をしておいた冬合宿のための泊まり込み用の荷物を背負って『藤原家』の玄関に立つ。

「ブーくん、お待たせ。」

優しく微笑む貴子ちゃんの様子はいつも通りの筈なのに、昨日よりもずっと魅力的に見える。

一緒に大人の階段を登ったからだろうか？

顔がニヤケそうになるのを頬をピシヤツと叩いて引き締める。

「行こうか、貴子ちゃん。」

「うん。」

俺が差し出した手を貴子ちゃんは自然に取ってくる。

そして澄み渡る冬空の下を俺達は手を繋いで歩き出すのだった。



かなり時間に余裕を持って青道高校に辿り着いた俺達なんだけど、校門前に何故か夏川と梅本、そして礼ちゃんが待っていた。

三人が何かを問うように視線を貴子ちゃんに向けると、貴子ちゃんは微笑んで応えた。

すると、三人から小さな歓声が上がった。

：：：こういうとき、男ってどうしたらいいんだ？

俺は夏川と梅本の二人と笑顔で話しながら歩いていく貴子ちゃんの背中を呆然と見送った。

そんな俺に礼ちゃんが話し掛けてきた。

「葉輪くん、おめでどうって言った方がいいのかしら？」

「いや、礼ちゃん、それは教師としてどうなの？」

「教師として対応してほしいのなら、ちゃんと先生って呼んでね。」

俺は礼ちゃんの返事に苦笑いを返す。

「教師としては節度を持ってお付き合いを…と言わなければいけない

んでしようけど、私個人としては二人の事を応援しているから。」  
「うん、ありがとう、礼ちゃん。」

俺が笑顔でお礼を言うと、礼ちゃんがため息を吐いた。

「一時間後には冬合宿が始まるから、葉輪くんも早く準備をしない。」

礼ちゃんの言葉に返事をする、俺は寮に向かって歩き出すのだった。



青道高校恒例の冬合宿が始まった。

例年通りならクリスマスから年末までが冬合宿の期間なんだけど、今年はずいぶん早くて、クリスマスが終わってから元旦の休みを挟んで、三日までが冬合宿となる。

これは落合コーチとの合宿メニューの相談に時間が掛かったから、だそう、来年は今年の冬合宿の様子を見て日程を戻すかどうか判断するそうだ。

そんなわけで始まった冬合宿は身体作りが中心だった。

午前中はダッシュやサーキットトレーニング等をしていて、午後からは主にフリーバッティングやシートバッティングが中心だった。

俺達投手陣は寒い時期という事もあって過度の投げ込みは禁止されている。

なので軽めの投球でバッティングピッチャーをしていく。

しかし、俺が投げる時には妙にセンター返しを狙おうとする人が多いんだけど…気のせいかな？

「もっと引き付けてコンパクトに！」

「惜しい惜しい！タイミングは合って来てるよ！」

「あの日の涙を忘れるな！せめて一本だけでも弾き返せ！」

軽めの投球ということでフォーシームの球速を140km前後に抑えているんだけど、皆のやる気が空回りしているからなのか、打球が中々に飛ばないみたいだ。

「バットを短く持つてるのに当たらねえ！」

「諦めるな！あの日に涙を流した多くの俺達のためにも諦めるな！」

「リア充ノ発展ニハ俺達ノ犠牲ガ付キ物デース…。」

そんな感じでやる気に満ちた冬合宿はあつという間に過ぎていき、完全休養となる元旦の日がやって来たのだった。



「それじゃ俺は貴子ちゃんと初詣に行ってくるけど、一也はどうするんだ？」

「ん？筋肉痛で動けないからストレッチで解してからゆっくり寝正月を過ごす。」

そう言いながら一也は熱いアップルティーを一口飲む。

俺は特殊能力のおかげで筋肉痛にならないんだけど、他の部員の皆は残らず筋肉痛になってるんだよね。

「パワプロ、門限に遅れるなよ。」

ニヤニヤと笑いながら一也に見送られて、俺は貴子ちゃんと一緒に初詣に向かったのだった。



「フーくん、何をお願いするの？」

私服姿の貴子ちゃんが俺と手を繋ぎながらそう聞いてくる。

「お願いする事はないかな。貴子ちゃんとは恋人になれているし、野球に関しては自分で叶えたいからね。だから、今日は神様に感謝しようと思うんだ。」

「それじゃ、私もフーちゃんと恋人になれた事を感謝するね。」

そう言っつて貴子ちゃんは笑顔になった。

可愛い。

貴子ちゃんと恋人になれた事を全力で女神様に感謝しよう。

俺はお賽銭を入れて女神様に感謝の念を捧げる。

すると…。

ピロン♪

頭の中にいつもの機械音が流れた。

絶対に女神様は俺の事を見てるだろ…。

そう思いながら通知を確認する。

『明けましておめでとうございます。ささやかですがお年玉としてボーナスポイントを贈ります。』

え？感謝しただけで1試合分もポイントをくれるの？

今までのポイントもまだ使いきれないんだけど？

…まあ、貰えるものは貰っておくか。

俺はもう一度女神様に感謝を捧げると、貴子ちゃんと手を繋いで初詣の混雑の中を歩き出すのだった。



初詣を終えた後は少しデートをしてから早めの昼食を取った。

まだ冬合宿中という事もあって今回のデートはこれで終わりだ。

そんなわけで貴子ちゃんを家にまで送っていくのだった。



「フーくん、今日はありがとう。楽しかったよ。」

家の前まで辿り着くと貴子ちゃんがお礼を言ってきた。

「うん、俺も楽しかったよ、貴子ちゃん。」

心の底からそう思う。

まだ時間は早いけど、冬合宿中だしもう戻ろう。

「それじゃ、俺は寮に戻るね。」

そう言っただけを返した俺の袖を貴子ちゃんが掴む。

あれ？なんかデジャヴ。

「あのね、まだ時間は大丈夫だよね？」

「うん。」

「今日、お父さん達、お祖母ちゃんの家に行ってるからいないの…。」  
我が家も同じ状況である。

…謀ったな!?!母さん!

貴子ちゃんに抱き付かれた俺は胸がドキドキとしながらも抱き締め返す。

そして門限ギリギリに寮に戻る俺の脳内に、また機械音が鳴り響いたのだった。

## 第157話

青道高校野球部の冬合宿も最終日となった。

最終日の今日は3軍と2軍、そして2軍と1軍の紅白戦が行われる。

俺は2軍と1軍の紅白戦の時に2軍側で先発する事になった。

それを聞いた1軍の人達はかなり気合いが入った表情をしていたな。

今回の紅白戦で俺は同じ1年の小野と初めてバッテリーを組む事になった。

小野は残念ながら俺のスライダーを捕れないのでスライダーは封印となった。

まあ、ケガ防止の為に投手陣は全力で投げたらダメらしいのでちようどいいか。

落合さん曰く、打たれても動揺しない様にする練習と考えるとの事。

あとは勝負所の試合終盤に力を発揮出来る様にするペース配分の練習にもなるらしい。

ベストなのは要所要所でギアを上げられる様になればとの事だ。

うん、頑張ってみよう。

そんな感じで始まった冬合宿の締めめの紅白戦、投手陣は制限があるものの打者陣には制限が無いので攻撃戦になると思っただけけど、意外にもそうではなかった。

1軍側の先発は丹波さんなんだけど、力を抜いて投げているからなのかいつもよりもボールの制球がよく、ノビる様になったフォーシームがいい感じに四隅に決まっていた。

そのおかげで2軍チームは丹波さんから中々ヒットを打てなかった。

対して2軍チームの先発である俺なんだけど、三振は中々奪えないけど打たせて抑えていく事が出来た。

それでも流星は1軍メンバーといったところなのか、試合中盤になると何本もヒットを打たれてしまった。

でも、1軍打者陣が合宿の疲労で動きが鈍っていたからなのか失点まではしなかったけどね。

1軍チームは丹波さんが3回まで投げると、4回からは純さんが投げた。

純さんも力を抜いて投げているからなのか、いつもよりも制球が良かった。

いや、純さんは制球だけでなくボールのキレも良くなっている様に感じた。

いつもの力投って感じの投球フォームよりも、今日の脱力する投球フォームの方が純さんに合っているのかな？

純さん自身も驚いているけど、今の感覚を確かめる様に1球1球丁寧に投げ込んでいった。

そして6回まで純さんが投げて、7回からはノリが登板した。ちなみにこの時に1軍のキャッチャーがクリスさんから一也に交代している。

ノリは2軍チームに何本もヒットを打たれたけど、3イニング投げて1失点にまとめた。

この1失点は2軍チームにいる増子さんに奪われたものだ。

紅白戦の試合結果は俺が6回を投げきって降板した後の7回から2軍チームの投手達が大量失点をしてしまい、1ー7で1軍チームの勝ちで終わった。

紅白戦に負けてしまったのは残念だけど、紅白戦の後に特殊能力の『尻上がり』のコツを入手出来たぜ！

ちなみに『尻上がり』の詳細はこんな感じだ。

『尻上がり』

・試合後半になるとギアが自然に上がる特殊能力である。  
・各種ボールのキレが上がり、最高球速で無理なく投げられるようになる。

・『尻上がり』が発動してギアが上がっても投球に必要なスタミナ消費は変わらない。

うん、めっちゃいい特殊能力だ。

後でゲットしておこう。

まあこんな感じで紅白戦が終わって冬合宿も終わりとなると、青道高校野球部の皆は疲労で地面に倒れながらも笑顔になっていたのだった。



冬合宿が終わると時間はあつという間に過ぎていった。

春の高校野球選抜大会で稲城にリベンジするために集中して日々の練習をしていたせいかな？

俺個人としては『尻上がり』の特殊能力をゲットしたり、投手と野手の基礎能力をアップしたりしていったぐらいで、他には特に変わった事はなかったな。

あるとすればプライベートで2月半ばのイベントの時に脳内に機械音が鳴らなかつたぐらいだ。

まあ、毎回機械音が鳴ってもどうかと思うので良かったと思おう。ボーナスポイントはちよつと惜しいけどね。

そう言えば2月半ばのイベントの時に、一也は菓子代が浮いたって喜んでいたな。

もちろん一也にお返しを贈る気持ちなんて欠片も無い。

性格悪いぞ、一也！

そんなこんなで時は流れて3月。

いよいよ、春の高校野球選抜大会が始まるのだった。



## 第158話☆★

いよいよ春の高校野球選抜全国大会が甲子園を舞台にして始まった。

青道はシードではなかったので1回戦からの出場だ。

相手は打撃で有名なチームらしい。

俺はこのチームとの試合で先発する事を片岡さんから告げられた。

ちなみに第2先発は丹波さん、正捕手はクリスさんに決まった。

もつとも、今大会が終わったらまたレギュラーは白紙に戻るらしいんだけどね。

さて、今はクリスさんと一緒にキャッチボールをして肩を温めている所だ。

俺はクリスさんからの返球を受け取った所で能力を確認する。

まずは投手能力からだ。

基礎能力

最高球速：152 km (※155 km)

制球：S

スタミナ：A

変化球：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー5 (※7)

冬の間には最高球速を3 km、スタミナを1ランク、高速スライダーを1ランク成長させた。

ポイントはまだ余っているんだけど、球速が150 kmを超えてからは成長による感覚の変化に身体が慣れるまでさらに時間が掛かる様になったんだよね。

さて、次は野手能力の確認だ。

基礎能力2

弾道：4  
ミート：C  
パワー：C  
走力：C  
肩力：A  
守備：C  
捕球：B

ミートを2ランク、他を1ランクずつ成長させた。  
ちなみに弾道はクリスマスの際に自然に成長している。  
さて、最後に特殊能力だ。

#### 特殊能力

『鉄人』  
『鉄腕』  
『身長高い』  
『怪物』  
『リリース○』  
『キレ◎』  
『牽制◎』  
『クイック◎』  
『バント○』  
『サブポジ：外野◎』  
『尻上がり』

新しく覚えたのは冬合宿でコツを手に入れた『尻上がり』だ。

他には『クイック○』や『牽制○』、『サブポジ：外野○』を1ランク成長させたぐらいかな。

こんな感じの能力で春の選抜大会を戦っていくぜ！



この日、とある某ネット掲示板はオフシーズンから待ち焦がれていた多くの者達で賑わっていた。



【怪物】パワプロを応援するスレ31【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動するようにお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てるように

225：春の甲子園の開幕だ！長かったぜオフシーズン！

231：この日の為に有給をとってきたぜ！

235：231ㄨワイも部長との睨み合いに勝ってきたで！

244：青道の相手はどこや？

251：244ㄨ四国の強豪校やね

255：青道の相手って強いんか？

260：打撃で有名なチームやな

せやからアンチスレではパワプロが打ち崩されるのを期待して全裸待機してるで

264：アンチスレ住民www風邪ひくからパンツ履けwww

270：スタメン発表きたで！

273 : 先発パワプロキタ——!!!

277 : 打撃で有名なチーム相手やからな

エースに任せるのが妥当やな

280 : 277< 秋は采配がひどかったからなwww

283 : 青道は先攻かあ…

288 : 相手チーム！早くアウト3つとらんかい！何初回からランナーを出しとんねん！

ワイは早くパワプロのピッチングが見たいんや！

290 : 288< お前はどっちの味方だwww

300 : 青道はチャンスを作りながらも得点ならずかあ…

303 : 流れが相手にいかなければいいんやがな

306 : しかし青道の先頭打者の足、くっそ速いな

311 : 倉持やつけ？誰か情報持つとらんの？

314 : 311< たしかボーイズリーグ出身の選手やったと思う

317 : 314< へ<

322 : さあパワプロのピッチングや！

324 : 初球は…151km!?

327：ええ…

331：パワプロアンチの球速信者逝った——！www

334：331∨アンチスレ覗いて来たけどスピードガン盛ってるって騒いでたでwww

338：先頭打者を真っ直ぐ3つで三球三振！

342：流石怪物！

345：打撃で有名な相手チームがバットを一拳分余して持つてるwww

349：345∨しゃーないって。あのインハイ真っ直ぐに対応するためや

353：それを見てビツタビタのアウトローに真っ直ぐを3つ放り込んだ模様www

355：ええ…

358：これにはK氏もニツコリ

362：結局1回の裏は真っ直ぐだけで三者連続三球三振に抑えおったwww

366：アンチスレ住民息してるー？www

370：2回の表の青道の攻撃は6番からやな…1人出れば9番の

パウプロまで回るで！

372：370∨パウプロって打撃はどうなの？

375：正直なところ秋の大会ではパツとせんかったな

392：ワンアウト、2、3塁でパウプロに回ったで！

400：これは流石にスクイズやろうな

411：キタ——!!!

415：え？ピッチャーが甲子園でホームランを打てるもんやの？

418：まさかのスリーランホームランwww誰やスクイズとか  
言ったのはwww

423：ワイは初めからパウプロが打つって信じてたで！

427：ワイも打つって信じてたで！

430：手のひらクルクルやなwww

434：ダイヤモンドを片手を上げて回るあの背中はまさにラスボ  
スやな



春の高校野球選抜全国大会の1回戦、青道はパウプロが投打に渡つて活躍し、6回終了時点で8-0と大差で勝っていたのでパウプロをレフトに回して川上に登板させた。

得点差がある事でのびのびと投げた川上は8回まで失点0に抑えて降板、そして最終回には伊佐敷がマウンドに上がり完封リレーを決めて1回戦を勝利したのだった。

## 第159話

春の高校野球選抜全国大会の1回戦を勝った青道は順調に勝ち上がっていった。

2回戦で先発した丹波は7回2失点の好投を見せてマウンドを降りた。

5点差の8回のマウンドに上がった川上は1イニングで2失点してしまっただが、8回からクリスと交代した御幸に何度も声を掛けられた事で、落ち着いて1つずつアウトを重ねていった。

9回には伊佐敷がマウンドに上がって3人でピシヤリと抑えて7-4で2回戦を勝ち上がった。

3回戦は夏の甲子園の決勝で戦った巨摩大との試合で、この試合にはパウプロが先発した。

青道打線は巨摩大の継投策の前に中々得点を奪う事が出来なかったが、パウプロがノーヒットノーランの快投を見せて2-0で3回戦を勝ち上がった。

そして準決勝となる4回戦は伊佐敷がマウンドに上がった。試合前の練習中に丹波が指のマメを潰してしまったからだ。

突然のチャンスであったが、伊佐敷は甲子園での先発のマウンドで躍動する。

新たに身に付けた脱力する投球フォームで相手チーム打線に凡打を量産させていったのだ。

6回を投げて1失点の好投を見せた伊佐敷がマウンドを降りると、6点差を貰った7回のマウンドに川上が上がった。

川上は7回は三者凡退に抑えたのだが、8回にスリーランホームランを打たれてしまい、悔しそうに表情を歪めた。

スリーランホームラン被弾後、ツーアウトながらランナーを2人出してしまった川上はここでお役御免となってしまった。

一発出れば同点の場面でマウンドに上がったのはレフトの守備についていたパウプロだ。

パウプロがマウンドに上がると、相手チームは悲壮な表情を見せ



た。

必死に食らいつこうとする相手チームの打者をパワプロがあっさりと三振に抑えると、ここで相手チームは完全に力尽きてしまいゲームセット。

準決勝は9回の表に青道が追加点を加えた事で8-4のスコアで青道が決勝戦へと進んだ。

そして午前中に行われた準決勝第1試合を勝ち上がった青道の皆は、午後から行われる準決勝第2試合の稲城と大阪桐生の試合を見学するのだった。



稲城と大阪桐生の試合は9回まで進んでいた。

「まさかここまで纏れるとは思わなかったな…。」

御幸の言葉にパワプロと貴子が頷きながらスコアボードに目を向ける。

状況は9回裏の大阪桐生の攻撃で2-2の同点、ツーアウト、ランナー3塁、バッターは4番の館。

「まあ、鳴の球威も落ちてるし、敬遠だろうな。」

御幸の言葉にまたパワプロと貴子が頷く。

今大会、稲城の成宮は1人で投げ抜いて来た。

そして準決勝であるこの試合で、大阪桐生は成宮に球数を投げさせるべく待球作戦を用いた。

成宮の息が上がった後半に勝負と決めていた大阪桐生は試合の前半は0-2で稲城に負けていた。

しかし、エースで4番の館が力投を見せてそれ以上の失点は重ねなかつた。

そして7回、肩で息をする様になった成宮の姿を見て大阪桐生は反撃に出た。

だが、成宮も秋の大会で青道に勝った事で成長しており、逆転は許さずに同点で踏ん張った。

そして9回裏の今の状況となる。

稲城のキャッチャーである原田がマウンドからキャッチャーボックスに戻ると、座らずに立ったままボールを要求した。

誰の目にわかる敬遠の合図だった。

大阪桐生の応援団からブーイングが上がる。

成宮は大きく肩で息をしながら1球、2球と敬遠のボールを投げていく。

しかし、3球目のボールで悲劇が起きた。

「あつ?」

誰かの悲鳴の様な声上がる。

なんと、成宮が暴投してしまったのだ。

準決勝まで1人で投げ抜いて蓄積した疲労と、この試合での体的、精神的な疲労が重なり、成宮は気力だけで投げていた状況だった。

その状況で敬遠を選択した事で、成宮の集中力は完全に途切れてしまった。

大きな疲労と集中力の欠如、この失投に繋がる土壌は出来上がっていたのだ。

大阪桐生の3塁ランナーが全力で走り出す。

成宮は本能的にホームカバーに入ろうとするが、足が纏れて転んでしまう。

そして顔を上げた成宮の目に、ホームベース上で拳を突き上げた大阪桐生のランナーの姿が映ったのだった。

## 第160話★

春の高校野球選抜全国大会の準決勝第2試合で、成宮が敬遠球を暴投してサヨナラ負けした直後、某ネット掲示板では大騒ぎになっていた。



【怪物】パワプロを応援するスレ44 【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てる様に

71：主人公逝った——！wwww

73：マジか!?!この場面で暴投!?

76：いくら主人公でもこの試練はキツ過ぎやろ…

78：敬遠ってそんなに難しいんか?キャッチボールと変わらんやろ?  
ろ?

80：78お前、あんな大観衆に見られてド緊張する場面でも普段通りに動けるんか?

83：これはマジ物のイップス案件やなあ…

89：それでも!それでも主人公なら立ち上がってくる!

92：なおラスボスは一発出たら同点の場面でリリースをして笑顔

で三振を奪った模様w

95：あのラスボスは緊張って言葉を知ってるんやろか？

101：ラスボスと主人公の勝負を楽しみにしてたんやけどなあ：

103：101∨しやあないやろ。これが一発勝負のトーナメントの怖さや

105：せやで！アンチの住民は早くも大阪桐生に鞍替えしとるわ  
！www

107：尻の軽い奴等めww

110：アンチの住民は大阪桐生に鞍替えしたみたいやけど勝てるんか？

今大会の青道って隙があらへんぞ

112：稻城の時みたいに待球作戦してパワプロの体力を削っても  
レフトで回復して戻って来るからなww

116：112∨ラスボスが回復とかいい加減にしろ！

119：112∨やめろお！俺のトラウマを抉るなあ！

123：こうなるとパワプロのレフト起用は名采配やな

127：123∨ワイは初めから青道の監督が名将やと信じてたで！

130：123∨ワイも信じてたで！

133：127、130〓お前らwww

138：秋の大会の時にはメチャメチャ叩いてたやないかwww：  
ワイも信じてたで！

142：【朗報】片岡名将説

147：さて、ワイは決勝戦の日に有給をとらなアカンからこれで  
失礼するで

151：ワイも失礼するで！

155：部長首を洗って待ってろや！今度こそ有給を勝ち取つたる  
で！



稲城がサヨナラ負けをしたのを見届けた青道野球部のメンバーは、  
旅館に戻りミーティングを開いていた。

「我々の手で稲城にリベンジ出来なかったのは残念だが、気持ちを切り替えて後日の決勝戦、勝ちに行くぞ！」

「はいー！」

一同を見渡してから片岡は口を開く。

「では、決勝戦のメンバーを発表する。先発は葉輪！」

「はいー！」

笑顔で返事をするパウプロに青道メンバーの皆が目を向ける。

そして青道メンバーの脳裏には秋の大会の光景が浮かび上がった。  
青道メンバーのそれぞれが強く思っていく。

もう足を引っ張らない、このエースに置いていかれたくない、パウプロの後ろで守るのは俺だと。

「キャッチャー、御幸！」

「は、はい！」

御幸の名前が呼ばれた事に、当人を含めて多くの者が驚きの表情を見せた。

「疑問に思っている者もいるだろう。今から説明する。」

片岡は言葉を区切り、皆を見渡してから話し出す。

「準決勝の試合の後、クリスが肩の違和感を俺に報告した。」

片岡の言葉に、皆は一斉にクリスの方を向く。

「またケガをしたわけじゃない。ただ、寒い時期になると、たまに肩の筋が張っている様な違和感が出る時があるんだ。」

骨折等の大きなケガをした後、雨が降った時や寒い時期等にケガをした箇所にかかしの違和感や軽い痛みのようなものを感じるという現象が発生する事がある。

その現象がクリスに起こっているのだ。

「正直に言えばプレーには支障無い。だが、今無理をして後悔をしたくないんだ。」

野球選手に限らずアスリートは多かれ少なかれ何かしらのケガを抱えているものである。

これは競技者の宿命と言っても過言では無いだろう。

故にケガとの付き合い方は人それぞれだが、クリスは手術とリハビリをした経験から無理をしない事を選択したのだ。

「御幸、先発のマスクは譲るが、不甲斐ないプレーをしたらいつでも代わるからな。」

「次の大会の時は実力で奪ってみせますよ、クリスさん。」

クリスと御幸が火花を散らすと、それに触発された様に青道メンバー達は燃え上がるのだった。

## 第161話

春の高校野球選抜全国大会の決勝戦が始まろうとしていた。

青道と戦う大阪桐生の監督である松本は、その大きな身体を揺らす様にして大きなため息を吐いていた。

「どうにか準決勝は勝てたんやが、葉輪君相手にあんなおこぼれは願えないやろうなあ…。」

松本の脳裏に浮かんでいるのは成宮の敬遠暴投である。

どこかで成宮の気持ち切れるのを狙って待球作戦を仕掛けたのだが、万全の状態のパワプロ相手には意味が無いだろうと考えていた。

「そうなるともう完全に決め打ちしかあらへんやんか。相手はまだ高校1年生やで？なんやねんそれ。」

松本は帽子を外すと頭をガシガシと掻きながら肩を作っているパワプロに目を向けた。

（去年の夏に比べて身体の厚みが増しとる。それに、背も伸びたんやないか？まるで高校生の中に一人だけプロがおるような気がするで…。）

パワプロがキャッチボールしている姿を見ていた松本は、パワプロが縦縞のユニフォームを着ている姿を幻視した。

松本は片手でピシヤリと自身の頬を張る。

（アホか！現実逃避してる場合ちゃうぞ！気を引き締めんかい！）

マネージャーに頼み水を貰った松本は、それを頭から被って気を引き締めたのだった。



（うーん、今日は調子がいいなあ。）

御幸と肩を作っているパワプロは、一球一球の感触に手応えを感じていた。

そしてその調子の良さを感じているのはパワプロだけでなく、ボー

ルを受けている御幸も感じ取っていた。

(去年以来だな、後逸するかもつて思うのは。)

そう考えた御幸は苦笑いをする。

(ほんと、受けていてこんな面白いピッチャーはお前以外にいねえよ、パウプロ。)

パウプロが投げってくる一球一球を御幸は笑みを浮かべながら受けていくのだった。



春の高校野球選抜全国大会の決勝戦が始まった。

先攻は大阪桐生。

1回の表、大阪桐生打線はセーフテイバントの構えを見せたり、バスターの構えを見せたりしてパウプロを揺さぶっていかうとした。

だが、パウプロの投球は逆に大阪桐生打線を飲み込んでいった。

初球、パウプロの152kmのフォーシームがインハイに決まると、大阪桐生の先頭打者はバントの構えのまま硬直してしまった。

パウプロのフォーシームに満員の甲子園が静かになる。

そんな空気など知らないとはかりに御幸がパウプロに返球すると、今度は歓声が甲子園球場を包み込んだ。

これを見た松本は直ぐに大阪桐生のメンバーに指示を出す。

「1打席は捨てても構へん。葉輪君のボールの軌道を目に焼き付けてくるんや！」

歓声に飲まれぬ様に松本が声を張り上げると、大阪桐生のメンバーも声を張り上げた。

まるでそうしなければ何も出来ずに負けると感じたかのように。

続けて松本はエースの館に指示を出す。

「館、後を考えんでもええ、最初から全開で飛ばすんや！」

「はいー」

松本が出した指示はパウプロ攻略の為のものではない。

先ずはパウプロの投球に飲まれずに勝負出来る状況を作らなければ



ばならない。

こんな経験は松本の長い監督経験の中でも久しぶりのことだった。(思い出すで…昔、怪物と騒がれたあの投手を攻略しようとした頃のようやないか。)

松本はその細い目を見開いてマウンドにいるパワプロを見詰める。「久しぶりや。勝つためやのうて挑む為に采配を振るうのはな。さぶいぼが立って来たで。」

そう言いながらも松本は不敵に笑みを浮かべたのだった。



春の高校野球選抜全国大会の決勝戦は中盤戦となる4回に突入した。

パワプロの投げる球筋を見る為に1打席を捨てた大阪桐生打線はここまで九連続三振されていた。

対する青道打線は大阪桐生のエースである館の全開投球の前に、ランナーは出すものの得点にまでは至らない状況が続いていた。

そんな状況から続く4回の表の大阪桐生の攻撃。

大阪桐生の先頭打者である1番バッターは、パワプロがここまで一番投じているフォーシームに狙いを絞って打席に入った。

初球、狙い通りのフォーシームが投じられたが、バットはかすりもなかった。

この一振りで狙いを察した御幸はパワプロに変化球を要求して10連続目の三振を奪った。

続く2番打者も初球のフォーシームに決め打ちをしてピッチャーフライを打ち上げると、御幸は大阪桐生の狙いを察した。

(1球種に絞っての狙い打ちか…。少し球数が増えるけど、誘い球を使っていくか。)

ここで御幸は初球に高速スライダーを要求した。

大阪桐生の3番打者はこの1球を見送る。

(狙いは一番見せて来たフォーシームっばいな…。まあ、今日のパワ

プロのボールは狙われてても打たれる気がしないけどな。）

御幸は2球目にカーブを要求して緩急を作ると、3球目に高めに外れるフォーシームを要求した。

このつり球に大阪桐生の3番打者は手を出してしまい、1-1個目の三振を献上してしまったのだった。

## 第162話

春の高校野球選抜全国大会の決勝戦は4回の裏を迎えていた。

大阪桐生のエースである館は青道打線に全力投球で立ち向かっていく。

青道はチャンスを作るものの、あと1本が出ずに4回の裏も無得点に抑えられてしまった。

5回の表の大阪桐生の攻撃は4番でエースの館からだ。

パウプロのピッチングの前に沈黙している打線に火をつける為にもここは1本打っておきたいところ。

だが、館のバツティングでもパウプロのボールを前に運ぶ事は出来ず、キャッチャーフライに倒れてしまった。

後続の5番、6番バッターは連続三振に抑えられ、パウプロが奪った三振は5回で13個となった。

青道の攻撃となる5回の裏、ここで大阪桐生の監督である松本が動いた。

エースの館をレフトに送ったのだ。

松本は先日の成宮の一件を目の前で見ていた事もあり、まだ館に余裕があるうちに温存し、ここぞの場面で力を発揮出来る様にと考えたのだ。

この松本の策は当たり、5回の裏の青道打線は三者凡退に終わった。

6回の表の大阪桐生の攻撃、大阪桐生打線は5回の裏の三者凡退から流れを掴みたいところだが、ここでパウプロのピッチングのギアが上がった。

6回の表の先頭打者である大阪桐生の7番バッターに対する初球、御幸は要求した高速スライダーを捕球しきれずに弾いてしまった。

左投手が投じる右打者に対するインローのスライダーは、打者が影となつて捕球しにくいものだが、それを含めてもパウプロの高速スライダーのキレはこの大会で一番のものだった。

形容するならばスライダーの変化量を持つカットボールといった

ところだろう。

今までパワプロのボールを数えきれない程に受けてきた御幸でも見たことの無いキレだった。

大阪桐生のバッターはパワプロのスライダーをフォーシームと認識してスイングしたが、バットを振りきったまま固まっている。

文字通りにボールが消えた様に見えたからだ。

御幸は主審にボール交換をしてもらってからタイムを要求してマウンドに向かう。

「パワプロ、今のは？」

「ん？なんか調子がいんだよね。こう、頭はスッキリしてるのに身体の内側からグワツと熱くなってくる様な感じで。」

パワプロは特殊能力の『尻上がり』によるギアチェンジの感覚をそう表現する。

すると、御幸はパワプロの言葉に笑みを浮かべた。

「その感覚、去年の夏の西東京地区決勝戦で俺も感じたぜ。」

「へー、そうなんだ。」

暢気に答えるパワプロに御幸は苦笑いをしてから表情を引き締める。

「次はちゃんと捕る。」

「おう！信じてるぜ、一也！」

パワプロが差し出したグローブにミットを合わせた御幸は、キャッチャーボックスへ戻っていったのだった。



特殊能力の『尻上がり』によりギアチェンジをした後のパワプロのピッチングは圧巻だった。

春の高校野球選抜全国大会の決勝戦まで勝ち上がってきた大阪桐生打線のバットが掠りもしなかったのだ。

このパワプロのピッチングをデジカメを片手に観察していた幾人かの男達が一斉に立ち上がる。

その数は12人。

12人の男達はまるで競う様に足早に甲子園球場の外に向かうと、それぞれが携帯電話を片手に熱弁を始めた。

この男達はライバル関係にあるのだが、そのライバルの耳があってもお構い無しにだ。

そんな男達とは違い、サングラスの奥で目を輝かせながら観察を続けている男がいる。

この男、どうやら海外の人物の様だ。

男は隣にいる通訳に熱心に語りかけながらもパワプロのピッチングの観察を止めなかったのだった。



春の高校野球選抜全国大会の決勝戦、青道と大阪桐生の試合は9回裏まで進んでいた。

スコアは両チーム共に0。

だが、その内容はまるで違っていた。

何故なら、大阪桐生はここまで1人のランナーも出すことが出来ていないからだ。

しかし、野球はどれだけランナーを出そうとも失点をしなければ負けは無い。

それだけを支えに、大阪桐生は9回まで青道に食らい付いて来た。

だが、大阪桐生は9回の裏にこの試合で最大のピンチを迎えていた。

状況はツーアウトながら満塁。

大阪桐生の監督である松本はこの場面をエースの館に託した。

そして、青道の監督である片岡もある男にこの場面を託す。

「代打、クリス！」

片岡が主審に代打を告げると、青道の応援団から大歓声上がる。

その大歓声の中、バッターボックスに向かうクリスの耳にパワプロの声が届く。

「クリスさん！楽しんで行きましょう！」

クリスはパウプロに笑みを向けると、自然体でバッターボックスに立つ。

マウンドの館は独特な笑顔をしながら投球モーションに入る。

初球、クリスはアウトローのフォーシームを見送る。

主審がストライクをコールすると、大阪桐生の応援団から青道の応援団に負けない程の大歓声上がる。

（大阪桐生は成宮の暴投を間近で見ている。ならば、決め球は悔いを残さない為に得意球を選ぶ筈だ。）

2球、3球と館が投じてくるボールをクリスは見送り、カウントはツーボール、ツーストライクまで進んだ。

（押し出しサヨナラのリスクを背負わない為にも、次の1球で来る……！）

クリスが細く息を吐き出すと、館が頷いて投球モーションに入った。

投じたボールは…館の決め球である高速スライダーだ。

クリスは迷いなくバットを振りきった。

カキンツッ！

金属バットの快音を残し打球がセンターの頭上を高々と超えていくと、クリスはゆっくりと1塁ベースに向かって走り出したのだった。

## 第163話

代打サヨナラ満塁ホームランを打ったクリスがゆっくりと1塁に向かって走り出した頃、スタンドで見学をしていた稲城の原田が席を立ち上がった。

「さあ、表彰式だ。行くぞ、鳴。」

秋の大会以降名前を呼ぶようになった成宮に、原田は声を掛ける。だが、成宮は俯いたまま顔を上げない。

それを見た原田は近くにいた稲城の仲間達に目を向ける。

「皆、すまんが先に行ってくれ。」

稲城の皆が行ったのを確認した原田は成宮の隣に腰を下ろす。

「…本当なら、俺がパワプロと投げ合う筈だった。」

「ああ。」

「…俺ならクリスさんを抑えられた。」

「ああ。」

ポツリポツリと溢す成宮の言葉に原田は返事をしていく。

「…ゴメン、雅さん。」

「何を謝る必要がある。あそこで俺が敬遠を選択しなければ、お前の集中が途切れる事は無かった。」

「…ゴメン。」

あの敗戦以降、それまでの勝ち気な性格が嘘だった様に成宮は肩を落とし続けている。

原田はそんな成宮の左肩にそつと手を置いた。

「お前のこの肩が、俺達をこの甲子園に連れて来てくれた。それは間違い無い事実だ。」

返事を返さない成宮に原田は言葉を続ける。

「お前は後一年半、高校野球で葉輪に挑戦が出来る。いや、お前ならさらにその先の大学やプロでも葉輪に挑戦出来る…ここで腐らなければな。」

原田は成宮の左肩を軽くポンツと叩くと席を立ち上がる。

そして…。

「待つてるぞ、お前が自分の足で立ち上がるのを。」  
そう言う在原田は去っていった。

成宮は原田が去った後も俯いて肩を落とし続けたのだった。

◆  
表彰式が終わって今は帰りの新幹線の中だ。

記者の人やテレビの取材で危うく新幹線に乗り遅れるところだったぜ。

そう言えば成宮が表彰式にいなかったんだけど、どうしたんだろうな？

「フーくん、どうしたの？」

隣の席に座っている貴子ちゃんが声を掛けてきた。

「ん？表彰式に成宮がいなかったなああって思ってた。」

「暴投でサヨナラ負けしちゃったから、まだ落ち込んでるんじゃないかな？」

うーん、貴子ちゃんの言う通りかな？

疑問が解けたら眠気が出てきて欠伸びが出てしまった。

「フーくん、寝ていいよ。」

「うん、おやすみ、貴子ちゃん。」

俺は貴子ちゃん言葉に甘えて目を閉じたのだった。

◆  
寝息を立て始めたフーくんの肩が冷えない様にタオルを掛ける。

(やっぱり、フーくんの寝顔は可愛いなあ…。)

フーくと初めて出会った幼稚園の頃から、私はずっとフーくんを見続けて来た。

そんな私は今、フーくと恋人関係になって順調に交際を重ねている。

去年のクリスマスからは恋人として…その…そういうこともする



様になったし、フーくんの寝顔は何度も見ているんだけど、何度見ても飽きる事は無い。

フーくんの恋人である事で、学校ではそれなりに嫌がらせの様な事をしてくる人もいるけれど、そういう事があった時には高島先生が直ぐに対処してくれるから問題無い。

フーくんが有名になってから近寄って来る様な人達に譲るつもりは欠片もないわ。

だって、私はずっとフーくんが好きだったんだから。

私はもう一度フーくんの寝顔を見る。

…恋人だし、いいよね？

私は周囲を確認すると、静かに寝息を立てるフーくと唇を重ねたのだった。

## 第164話★

時間は少し遡ってクリスがサヨナラホームランを打った後の頃、某ネット掲示板は物凄い勢いでコメントが書き込まれていった。



【怪物】パワプロを応援するスレ48 【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てる様に

526：スゲ——！！

528：マジか!?この場面でホームランを打つのか!?

531：確か青道の正捕手の人やろ?持つてるわあくwワイの鼻屑に欲しいで

535：彼からは虎の魂を感じる…

537：535<クリスは西東京育ちやぞ!せやから西東京ペンギンズに決まってるやんか!

540：ところで何で正捕手やのにスタメンやなかつたんや?

543：540<ケガでもしてたんやないか?

545：543<ケガ人にあの大事な場面を任せるか?

あのバッティングなら任せるかもしれんだけどw

5 4 8 : 代打サヨナラ満塁完全試合決定ホームランやからな。M V  
P は決定やろ

5 5 1 : なにを調子に乗ってホームランなんか打ってるんだよ  
ヒットでいいのにバ○じゃないか？

5 5 3 : 5 5 1 < アンチ乙 w w w

5 5 6 : 5 5 1 < アンチは別スレやぞ

5 5 9 : 5 5 6 < アンチスレはお通夜状態やからな w 出張してくる  
のもしやあないやろ w w w

5 6 3 : 結局パワプロは何個三振を奪ったんや？

5 6 7 : 5 6 3 < 2 1 個やね

5 7 0 : 5 6 7 < ええ…

5 7 2 : 何でそんなに三振を奪えるんや？ 1 5 0 k m なんて今時珍  
しくないやろ？

5 7 5 : 5 7 2 < 問題はキレよ

5 7 7 : 5 7 2 < 問題はコクよ

5 7 9 : 5 7 2 < 問題はのどごしよ

5 8 3 : 5 7 5、 5 7 7、 5 7 9 < お前ら w w w

588：いっても左ピッチャーで150kmオーバーなんてプロでも珍しいで

591：588〈しかもビタビタのコントロールにキレツキレの変化球もあるからなw

他にこんなピッチャーがいるんなら連れてこいや！www

594：591〈銀やん

597：594〈おじいちゃん、ご飯はもう食べたでしょ

600：594〈せめてスピードガンがある時代のピッチャーを出せwww

611：主人公くんはどうや？確か最速で147kmやろ？

614：611〈悪くはないけどなあ…身長が低いからのびしろがどんだけ残ってるかやな

618：主人公くんに比べればラスボスは恵体やからな。190cmぐらいあるんちゃうか？

620：しかも主人公くんもラスボスもイケメンやからな…爆発しろ！

623：皆忘れとるかもしれんけど主人公くんもラスボスもまだ1年生なんやで…

626：623〈なん…だと…!?

630：623〈ひえっ…

635：スカウト仕事しろよ！…絶対にしるよ！

639：2年後のドラフトが楽しみや！



春の高校野球選抜全国大会終了から1週間後、パワプロは御幸と共に月刊野球王国の取材を受けていた。

「はい、これで取材は終わりになります。ありがとうございました。」  
「ありがとうございます。」

月刊野球王国の記者である大和田が取材の終わりを告げると、パワプロと御幸は挨拶をして取材を受けていた青道高校の来賓室から出ていった。

それを見送ってから記者の峰が口を開く。

「高島先生、葉輪君のこのコメント…使ってもいいのですか？」

「本人も構わないと言っていたので。」

「しかし、これらを読めると色々と問題が出てくる可能性が…。」

「我々としては生徒の自主性を重んじ、全力で守っていくだけです。」

ニコリと微笑みながら答える高島の姿に峰は頬を掻きながらため息を吐いた。

「念の為、見本が刷り上がったからお持ちします。そこでもう一度判断をお願いします。」

「わかりました。お心遣い、ありがとうございます。」

パワプロと御幸の二人と付き合いが長い二人の記者に、高島は深々と頭を下げたのだった。

## 原作開始・高校野球2年編 第165話

「頑張れよ、エーちゃん！俺達、エーちゃんを応援してるからな！」  
「おう！」

春の高校野球選抜大会が終わってからしばらく経った後、世は新入生達が続々と新たな道へと進み始める時期となっていた。

そんな中の一人である沢村 栄純は生まれ育った故郷の長野を離れ、西東京にある青道高校に入学する事が決まっており、青道高校の寮へ入る為に出発しようとしていた。

寮に入る理由はもちろん野球である。

去年の学校見学の際に大きなショックを受けた沢村だが、仲間達や幼馴染みに背中を押されて青道に行くことを決意したのだ。

仲間達との話が終わった沢村に、幼馴染みの美少女である若菜が話し掛ける。

「行つてらっしゃい、栄純。直ぐに逃げ帰ってきたらただじゃおかないわよ。」

「誰が逃げるか！俺はあの人を超えてエースになるんだ！」

「本当かしら？一緒に春の甲子園をテレビで見た時は、葉輪さんのピッチングに見惚れて呆然としてたくせに。」

「うっ！」

若菜の指摘に沢村が呻く。

そんな二人の会話に仲間達が様々な反応をする。

「あれ？エーちゃんは若菜と春の甲子園を見てたんだ。」

「なんだ、俺達が誘つても来なかったのはそういう理由だったんだ。」

「あれ？皆知らないのか？去年のクリスマス、エーちゃんは若菜と二人で飯を食ったんだぜ。」

「なんでそんなことを知ってるんだ？」

「母ちゃんが言つてた。」

そんな仲間達の会話に沢村と若菜は顔を赤くする。

奥様ネットワーク、恐るべし。

こんな感じで仲間達が驚いているが、沢村と若菜はまだ付き合っていない。

だが、二人の距離は確実に縮まってきているのだ。

「へく。」

「な、なんだ！お前ら?!」

「べつつに〜?」

ニヤニヤとした視線を向けてくる仲間達に思わず反応してしまつた沢村だが、そんな沢村を見て満更でもなさそうだと察した仲間達は沢村に暖かい目を向ける。

見事なチームワークである。

沢村は単純な性格で野球バカな男だ。

故にこれまでの沢村は幼馴染みである若菜の異性としての好意に全く気付いてなかった。

その事にやきもきしていた若菜だったが、その状況を変えるキツカケとなった出来事があつた。

それは、去年の沢村の学校見学の後に高島が再度長野に訪れた事である。

高島は沢村が色々としょっくを受け葛藤しているであろう事を察して、スカウトを兼ねてケアをしに来たのだが、その時に若菜は高島と話をしたのだ。

若菜は沢村の返事が遅れて申し訳ない、もう少し待ってあげて欲しいと高島に話をした。

この若菜の行動で高島は若菜の沢村に対する思いを察した。

沢村のスカウトの事を話終えた高島は、若菜に1つのアドバイスを送った。

それは、恋は戦争である…だ。

この言葉を聞いた若菜はキョトンとしてしまうが、意味を察すると慌てて否定した。

だが、大人の女性である高島はそんな若菜にパワプロと貴子の事を語って聞かせた。

曰く、パワプロも沢村と同じ野球バカである。

曰く、パワプロも沢村と同じく美少女の幼馴染みがいる。

曰く、パワプロは貴子がそれとなくモーションを掛けても野球に夢中で効果が薄かった。

こういった事を高島が語ると、若菜は思い当たる事があるのか何度も頷いた。

この若菜の反応を見た高島は誘い球を投じる。

その誘い球はパワプロと貴子が現在は恋人として交際しているというものだった。

この誘い球に若菜は食い付いた。

思わず反応したというものではない。

迷いのないフルスイングだった。

その後、キラリと眼鏡を光らせた高島が色々と若菜にアドバイスをした結果、若菜から沢村を食事に誘ったりといった事が増えていき、現在のかなり恋人側に寄った友達以上恋人未満の関係となっているのだ。

仲間達のからかいに照れている沢村を見て若菜が微笑んでいると、

沢村は誤魔化す様に仲間達の話をつたぎる。

そんな沢村の姿が面白かったのか、仲間の一人が笑い声を上げると

沢村や若菜も笑い声を上げる。

やがて笑い声が収まると、いよいよ沢村の出発の時がやって来た。

「「エーちゃん！行ってらっしゃい！」」

「おう！行ってくる！」

仲間達に返事をした沢村は若菜の方に振り向く。

「ちゃんと連絡しなさいよ。グチでもなんでも聞いてあげるから。」

「ああ、行ってくるぜ、若菜！」

沢村は若菜とハイタッチをすると電車に乗り込む。

そして電車が出発して皆の姿が見えなくなると、沢村は一人で涙を流したのだった。



## 第166話

「貴子ちゃん、お待たせ。それじゃ、一緒に行こう。」  
「うん。」

春の高校野球選抜全国大会が終わってから少し経った頃、パワプロは高校2年に、貴子は3年生に進級した。

そして先日、青道高校野球部には一般入学の生徒に先駆けて、推薦入学や特待生の生徒が入寮していた。

今日はその推薦入学や特待生として先駆けて入寮した新1年生が初めて野球部の練習に参加する日なのだが、パワプロと貴子はいつも通りに二人で朝練に向かつていく。

「貴子ちゃん、ちよつと一也にモーニングコールをするね。」

そう言うのとパワプロは利き手である左手で携帯電話を操作している。

空いている右手は貴子の左手と繋がれていた。

先日の春の甲子園で優勝した事もあって、現在のパワプロは以前よりも多くのマスコミ取材を申し込まれる様になっていた。

もちろんその中にはパワプロのゴシップネタを狙う輩もいるのだが、パワプロと貴子の二人は以前と変わらずに交際を続けている。

これは両家の両親と高島による連携のおかげである。

両家の父親達は既に勤めている会社の顧問弁護士に色々話を通しており、何かがあった場合には直ぐに動いてもらえる様にしている。

対して高島の方はというと…。

「誠実なひととなりと野球に対する理解を持った藤原さんとの交際が葉輪くんにとって最適です。」

このような事を言っただけで父親である青道高校理事長を説得して二人の関係を全面的に応援する態勢を作り上げていた。

ここで不純異性交遊を問題として理事長が上げたが、パワプロの知名度から多くの異性が寄ってくることは明白である。

ならば献身的にパワプロを支えたとわかっている貴子が最適であ

ると結論をだし、二人の関係を応援していくと決めさせたのだ。

貴子が携帯電話で御幸に電話を掛けているパウプロの横顔を見ると、どうやら御幸が電話に出た様だ。

『…もしもし?』

電話越しの御幸の声はとても眠そうである。

パウプロがモーニングコールをしなければ確実に朝練に寝坊していただろう。

その事がわかったパウプロと貴子は揃って苦笑いをする。

「おはよう、朝練の時間だぞ、一也。」

『うえっ!?サンキュー、パウプロ!』

慌てた様子で御幸が電話を切ると、パウプロと貴子は顔を見合わせ、肩を竦めたのだった。



「おい!起きろ、沢村!朝練の時間だぞ!」

パウプロからのモーニングコールで目覚めた御幸は、大きな声でまだ寝ている同室の者を起こす。

「ん?朝練?」

寝惚けた様子で身体を起こしたのは高島のスカウトで青道に入学した新1年生の沢村だ。

昨日、故郷の長野から上京して入寮した沢村なのだが、昨夜は御幸を質問攻めしたのと、慣れない環境のために少々寝不足になっていた。

「…あっ!」

「飯を食ってる時間は無いぞ!顔を洗って目を覚ましてこい!俺は目覚ましの飲み物を淹れておくから!」

「おう!」

慌ただしく沢村が洗面所に駆けていくのを見送った御幸に、もう一人の同室の者が声を上げる。

「まったく、朝から騒がしいな。」

「すいません、丹波さん。」

青道野球部の寮は1年、2年、3年を合わせて部屋が割り振られている。

なので沢村、御幸、丹波が同室になっているのだ。

「御幸、初日ぐらいいは沢村を遅刻させてもよかったんじゃないか？」

「きついつすねえ、丹波さん。」

「冗談だ。昨日はお前達に付き合わされて俺も少し寝不足だからな。嫌味の一つぐらい言わせてくれ。」

昨日、入寮するなり御幸と丹波に沢村はパウプロ超えを宣言したのだが、丹波は沢村のその前向きな性格を評価していた。

沢村が高島にスカウトされた事は知っていたので、沢村にはそれなりに才能があるのだらうと認識していたが、それ以上に投手向きな性格がスカウトされた理由かもしれないとも考えていた。

「御幸、葉輪を超えと言った沢村をどう思う？」

「無理とは言いませんよ。俺もクリスさんに挑んでいる立場ですからね。」

「そうか。まあ、俺や伊佐敷も葉輪を追いかけているからどうこうは言えないか。」

丹波にとつてパウプロは憧れのヒーローに近い存在だ。

そんなパウプロの背中を追うことは丹波にとつてこの上なく楽しい事であり、成長を自覚出来る事であるのだ。

「それじゃ、俺は先に行くぞ。」

「はい。」

既に着替えを終えていた丹波が部屋から出ていくと、入れかわる様に沢村が戻ってくる。

御幸は電気ケトルで沸かしていたお湯でアップルティーを淹れると、沢村にもアップルティーを差し出しながら寝起きで渴いている喉を潤していくのだった。

## 第167話

青道高校野球部に新1年生が加わっての初めての練習が始まろうとしていた。

今は新1年生が挨拶をしているところだ。

「小湊 春市です！ポジションはセカンドです！」

あの1年生はどうやら亮さんの弟くんみたいだな。

亮さん曰く、弟くんは自分よりもセンスがいいそうだ。

亮さんの弟くんの次は東条が挨拶をした。

ピッチャーとして頑張るらしい。

そして次は…。

「長野から来ました沢村 栄純です！ポジションはピッチャーです！  
葉輪先輩を超えてエースになります！」

おお！ライバル宣言がきた！

いいね！俺と切磋琢磨しようぜ！

沢村がなんか「ガルル！」とか言って威嚇してきたので、俺はサムズアップで応えたのだった。



1年生は初日という事もあって今日の朝練は軽めだったんだけど、ほとんどの1年生は軽めの練習でもかなり疲れた様子を見せていた。

そんな1年生の中でも亮さんの弟くんは地面にへたりこんでいたので、あまり体力が無いようだ。

疲れた様子を見せながらも元気に声を張っていたのは沢村だった。

うん、元気なのはいいけど、ちゃんと整理体操はやろうな。

1年生達の中でも若干の余裕を見せていたのは東条と…金子？金丸？とかいう奴だった。

2人は強豪の松方シニア出身って事もあって、このぐらいの練習なら大丈夫なようだな。

後日に野球部の体力測定があるから無理して疲れは残すなよ。

まあ、こんな感じで1年生を加えた初日の朝練が終わったのだった。

◆ 推薦組みと特待生組みの1年生を加えての練習が終わった後日、入学式が終わったら一般入学の野球部入部希望者達がやって来た。

その人数は礼ちゃん曰く、例年よりも多いそうだ。

どうも春夏の甲子園連覇が要因らしい。

皆で頑張ったかいがあったぜ！

それと、マネージャー志望の女の子が2人やってきた。

1人は吉川 春乃って名前の子のようだ。

貴子ちゃん曰く、ちよつとドジっ子らしい。

そしてもう1人が蒼月 若菜って子だ。

「え!? 若菜!?!」

なんか沢村がビツクリしているけど、どうやら沢村の幼馴染みらしい。

貴子ちゃんから聞いたんだけど、なんでも沢村に内緒で青道高校の一般入試を受けたそうだ。

それで東京の親戚の家に下宿する形で青道にやって来たとの事。

彼女は同じクラスになったのに気付かなかった沢村にご立腹のようだ。

あ、沢村が頬を引っ張られてる。

仲がいいねえ。

俺と貴子ちゃんはもつと仲がいいけどな!

まあ、そんな感じで多くの1年生達が青道野球部に入部してきて活気付く中で、いよいよ今年の体力測定が始まるのだった。

◆ 今年の体力測定は人数が多い事から2日に分けられる事になった。

1日目は1年生達の体力測定が行われていく。  
アップを終えた1年生達が50mダッシュを始めた。  
うん、流石に倉持みたいに飛び抜けて足が速いのはいないみたい  
だ。

その後も体力測定が続いていつて遠投が始まった。

遠投では1人凄いのがいた。

北海道から来たとかいう降谷って奴だ。

記録は：120m？

強肩だなあ。

貴子ちゃんに降谷の事を聞いたら、どうやら彼はピッチャー志望らしい。

いいね！新たなライバルの出現だぜ！

それで降谷なんだけど、なんか一也をチラチラと見ているんだよね。

なんだ？一也がサボっているのか？

俺が一也の方を向くと、なんか遠投を終えた沢村を指差しながら腹を抱えて笑っていた。

何があっただ？

俺が疑問に思っって首を傾げていると1年生全員の遠投が終わり、ポジション別のテストが始まるのだった。

## 第168話

青道野球部に入部した1年生達の体力測定はポジション毎に分かれた。

俺はお手伝いとしてブルペンに移動して、1年生投手達のピッチングを記録していく。

ブルペンには去年と同じく片岡さんと礼ちゃんが来た。

野手の方は落合さんと太田部長が見ていくらしい。

ちなみにブルペンキャッチャーは3年生の宮内さんだ。

肩を作り終わった1年生達が礼ちゃんに名前を呼ばれてピッチングをしていく。

1人、2人とピッチングが終わると、遠投で120mを投げた1年生の番になった。

遠投で120mを投げる1年生のその初球…。

パァン！

キャッチャーをしている宮内さんが立ち上がる程の高めに外れるボール球だった。

でも、球速は140km台は出ている様に見えた。

コントロールはあれだったけどいいボールを投げるなあ。

そんな風に思いながらブルペンのマウンドに立つ…えっと、降谷だっけ？

まあ、そいつの方を見ると、なんか驚いていた。

ん？どうしたんだ？

宮内さんからの返球を受けた降谷が投球モーションに入る。

2球目もまた高めに外れた。

しかも今度は宮内さんがジャンプする程の高めだ。

宮内さん、ナイスキャッチ！

コントロールがあまり良くないのかなと思って降谷の方を見ると、また驚いていた。

緊張してボールを上手くコントロール出来ないのを驚いているのかな？

その後も降谷はピッチングを続けていったんだけど、降谷は変化球の持ち球が1つもなく、しかもストライクゾーンに投げ込めたフォーシームは10球中2球だけだった。

うーん、変化球の習得よりもコントロールの改善が先かな。

そんな事を思いながら記録を書き込んでいると、片岡さんが口を開いた。

「葉輪、降谷のピッチングを見て何かあるか？」

え？俺に聞くの？

俺、クリスさんみたいに専門的な知識はありませんよ？

そう言ってみたものの、片岡さんに思うところを言ってみると言われてしまった。

まあ、いいか。

「えっと、降谷だよね？」

「はい。」

「青道に来る前はどんな練習をしてたの？」

「1人での当てをやっていました。」

1人での当て？

俺は貴子ちゃんに行ったバッティングセンターの9分割された的当てを思い浮かべる。

…もしかして？

「その的当てってマウンドはあった？」

「無いです。」

「そっか。」

うん、多分だけどコントロールが悪い原因はリトル時代の俺と同じかな。

「降谷、足下を見てみな。」

「足下？」

降谷は俺の言葉に素直に従って足下を見る。

「何がある？」

「マウンドです。」

「うん、それじゃキャッチャーの方を見て、今まで練習をしてきた感じ



での思い浮かべてみて。」

降谷が宮内さんの方をジッと見る。

「的はどこにある?」

「キャッチャーの人の頭の上…。」

「うん、降谷は的当てを一杯練習したから、マウンドに立つても宮内さんの上にある的に投げちやうんだらうね。」

俺がそう言うのと降谷はどこかボーッとした表情から驚いた表情になった。

「どうすれば?」

「いっそのことホームベースに叩き付ける感じでワンバウンドを投げようか。」

「ワンバウンド?」

これは俺が青道の学校見学をした時に純さんにしたアドバイスと同じだ。

でも、目的は少し違う。

「うん、まずはコントロールを気にしないで、マウンドから投げ下ろす感覚を身に付けないとね。」

「投げ下ろす…。」

降谷は右手の中で少しボールを回すと、プレートに足を掛けた。

それを見ていた宮内さんが直ぐにミットを構えると、降谷が投球モーションに入る。

降谷が胸を張る様にしてリリースしたボールは、ストライクゾーンの真ん中付近に投げ込まれた。

「あつ…ワンバウンドにならなかつた…。」

え? ストライクゾーンに投げ込めたのを喜ばないの?

もしかして降谷って天然さん?

その後、降谷は10球程投げ込んだんだけど、ストライクゾーンに投げ込めたのは真ん中付近に投げた1球だけだった。

そして、他の1年生が待っているからという事でマウンドを下ろされると、降谷は目に見えてわかる程に落ち込んだのだった。

## 第169話

「次、沢村くん。」

「ワハハハ！待ってました！」

降谷の投球テストの次は沢村の投球テストみたいだな。

うん、相変わらず騒がしい。

「ボスー！見ていて下さいー！葉輪先輩を超えてエースの座を掴み取って見せますから！」

「始めろ。」

沢村の宣言に対して片岡さんは冷静に言葉を返す。

流石片岡さん、大人である。

沢村はマウンドに立つと、去年の学校見学の時に見せた足を大きく上げる投球フォームでボールを投げ込む。

うん、沢村のボールはやっぱり微妙に動いているな。

宮内さんも捕りにくそうだ。

「沢村くん、他に何かあるかしら？」

「ウツスー！真っ直ぐ行きます！」

そう言うとき沢村はフォーシームを投げ込んだ。

うん、ムービングボールを見た後だからか、フォーシームがより伸びている様に見える。

球速は…130km台ってところかな？

コントロールもストライクを投げ込めるぐらいはあるみたいだし、ムービングボールの変化を制御出来る様になったら面白いだろうなあ。

そんな事を考えながら沢村のピッチングを記録していると…。

「葉輪、沢村のピッチングで何かあるか？」

降谷の時と同じように片岡さんにそう聞かれた。

「さあー遠慮せずにアドバイスを！」

沢村は『come on!』とでもいうように両手で招くジェスチャーをしている。

まあ、気になるところはあったんだけどね。

「それじゃ、1つだけ。沢村、投げる時に身体が開くのが早いように見えるよ。」

「身体が開くのが早い?」

そう言いながら沢村は腕を組んで首を傾げた。

「多分だけど、降谷のボールを見て、自分も速いのをって意識したんじゃない?」

「うっ!なぜそれを!?葉輪先輩はエスパーだったのか!」

いや、エスパーじゃないよ。

転生者ではあるけどね。

「それで、どうすればいいんですか!」

「ん?投げるときに身体を開かない様にすればいいと思うけど?」

「そのやり方を!」

それを教えると投球フォームをいじる事になると思うんだけど…  
いいのかな?

「イメージとしては右手で壁を作るかな。」

「右手で?」

「そう、こんな感じで。」

俺が軽く実演して見せると、沢村が同じような動きを始める。

ん?周りを見ると他の1年生も左右は違っても同じ動きをしてるな。

暇なのかな?

「右手の使い方でコントロールが良くなったり、ボールのキレが良くなったりもするから、色々と試してみたらいいと思うよ。」

「オッス!」

元氣よく返事をした沢村が少し動きを確認した後にプレートに足を掛ける。

足を大きく上げた沢村が踏み込んだ後、右手のグローブを潰す様にして身体に溜めを作る。

そしてその溜めを一気に解放すると、腕をしならせてボールをリリースした。

パァン!

沢村のボールを捕球した宮内さんが驚いて目を見開いている。

宮内さんの目には沢村の投球フォームはどう見えてたのかな？

「おお…おおおおおおお!?」

今の一球を投げ込んだ沢村は自分の左手を見ながら声を上げてる。  
いい感触だったのかな？

「キャッチャー！早くボールを！今の感触を忘れない内にボールを！」

沢村の要求で捕球姿勢のまま固まっていた宮内さんが返球した。

戻ってきたボールを左手に持った沢村は、ボールを見ながら笑みを浮かべている。

投げるのって楽しいよな。

その後、沢村は新しい投球フォームで2、3球投げ込んだんだけど、ストライクゾーンに投げ込む事は出来なかった。

どうやら新しい投球フォームはコントロールが課題のようだな。

それを見ていた片岡さんは、沢村に明日からタイヤを牽いて走れと指示を出した。

先ずはピッチングの基本となる足腰を作れだっせ。

指示を受けた沢村は「了解です、ボス！」って言いながら敬礼をしている。

元気だねえ。

片岡さんはその指示を出した後、沢村の投球テストの終わりを告げた。

沢村はもつと投げ込みたかつたみたいだけど、まだ東条の投球テストが残っているからな。

やる気十分なのに投げられない沢村は頭を抱えて悶絶し、沢村のピッチングを見ていた降谷が対抗心を燃やす様に右肩をグルグルと回したのだった。

## 第170話

沢村の投球テストが終わって、最後に東条の投球テストが始まった。

東条はフォーシーム、チェンジアップ、ツーシーム、スライダーをコントロール良く投げ込んでいく。

コントロールの精度はノリと同じぐらいかな？

フォーシームの球速は：130km近い？

うん、いいピッチャーだ。

でも、なんか投げ込む姿に違和感というか物足りなさがあるんだよなあ…。

なんというか…ボールを置きに行っている感じ？

そんな事を考えながら東条の投球テストを記録していると、三度片岡さんに話を振られた。

東条が期待の眼差しで俺を見てくる。

俺は苦笑いをしながら東条に話掛けた。

「東条、あくまで俺が感じたものだけどいい？」

「はい…葉輪さん、お願いします！」

そう言うと東条は綺麗な姿勢で頭を下げた。

そこまで畏まらなくてもいいんだけどなあ。

「東条、なんというか…ボールを置きに行っていないかな？」

「ボールを置きにですか？」

「うん、コントロールはいいんだけど、なんかしつかりと腕を振っていないというか、リリースの時に強く叩かずに優しく押し出しているというか…はつきり言えばボールに今一つキレが無いって感じかな。」

俺は上手く言葉に出来なくて頭を搔く。

俺の言葉を聞いた東条は肩を落としてるな。

「取り合えず、次はコントロールを気にしないで、強いボールを投げる意識を試してみたらどうかかな？」

「は、はい…やってみます！」

肩を落としていた東条がバツと顔を上げて返事をした。

少し動きを確認した東条がプレートに足を掛ける。

そして投げ込んだ東条のフォーシームはさっきまでより質が良くなっているように見えた。

「うん、リリースでしつかりと叩けてたと思う。次はフォロースルも意識して腕をしつかりと振りきってみようか。」

「はい！」

返事をした東条がまた少し動きを確認してからプレートに足を掛ける。

そして東条がフォーシームを投げ込んだ。

すると…。

パァン！

宮内さんのミットは投球テストをしていた時よりもいい音を出した。

手応えが良かったのか、東条は目を輝かせているように見える。

「片岡監督！もう一球いいですか!？」

片岡さんは東条の申し出に腕を組みながら首を縦に振る。

「アウトローに行きます！」

東条がグローブでコースを指し示しながらそう言うと、宮内さんはコースに寄ってミットを構える。

一度息を吐いてから投球モーションに入った東条がフォーシームを投げ込む。

コースはボールゾーンに外れたけど、ノビのあるいいフォーシームだ。

「ありがとうございます！」

東条は帽子を取って宮内さんや片岡さんに頭を下げる。

そして最後に俺に頭を下げた後、顔を上げた東条は満面の笑顔になっっていたのだった。



1年生の体力測定が終わった後日、俺達2年生と3年生の体力測定

が始まった。

去年よりもいい成績を出して笑顔になっている人もいれば、あまり変化がなくて落ち込んでいる人もいる。

俺は能力で成長が目に見えるから、他の人よりも強く成長を実感出来るのがいいな。

おかげで練習が楽しくて仕方がない。

もつとも、野球そのものが好きだから練習は楽しいんだけどね。そんな事を思いながら50m走や遠投に打撃テストを行い最後の投球テストが終わった時に、俺の脳内に例の機械音が鳴り響いたのだった。



ピロン♪

体力測定最後の投球テストが終わったその時、俺の脳内にいつもの機械音が鳴り響いた。

俺は能力を使って通知を確認する。

『一定年齢への成長と一定以上のポイント使用を確認しました。成長限界の一部を解放します。』

成長限界の解放とな？

今までは所属カテゴリー毎に決まっていたと思ったんだけどな。

俺は通知の詳細を確認していく。

『球速の成長限界が160kmまで解放されました。』

『変化球の第4球種目の取得が解放されました。』

おお!?160kmまでいけるのか!

それに第4球種目の変化球の取得も出来るのは本当に嬉しい!

これで余ると思っていたポイントを使いきる事が出来そうだ。

いや、150kmを超えてからの成長に必要な使用ポイントは跳ね上がっているから足りないかもしれない。

それに第4球種目の変化球でも凄いポイントを使うだろうしな。

まあ、これからも練習や試合でポイントは手に入るからなんとかするか。

俺はこれからの能力成長をどうしていこうかと考えると、自然に笑顔になったのだった。



## 第171話★

沢村達新1年生が青道高校野球部に入部した当月、その月に販売された月刊野球王国という雑誌に載っていたとある高校球児のインタビューが話題となり、某ネット掲示板ではコメントが加速していた。



【怪物】パワプロを応援するスレ51【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

82：大変だ大変だ！

83：これハ〇ベエ

86：82◇どしたんや？春の神宮大会の情報がなんか入ったんか？

90：お前ら今月の月刊野球王国買ったか？それに載ってるインタビューの事や！

93：学生時代に本気でプロを目指してた時は買ったけど、今は買ってへんな

97：90◇で？誰のインタビューが載ってたんや？

101：今月の月刊野球王国にパワプロのインタビューが載ってた

んや!

1 0 3 : 1 0 1 < : : ふあっ!?

1 0 5 : 1 0 1 < なん : だと : !?

1 0 9 : ちよつと月刊野球王国買いに行ってくる

1 1 3 : 1 0 1 < それでどんなインタビューが載ってたんや?

1 1 6 : 1 1 3 < 一言で言えば : : パワプロ、高校卒業したらアメリカ

カ行かつてよ!

1 1 8 : 1 1 6 < : : ふあっ!?

1 2 0 : 1 1 6 < なん : だと : !?

1 2 3 : 1 1 8、 1 2 0 < お前らwそれ好きだなwww

1 2 5 : 高校卒業と同時にメジャーって行けたっけ?

1 2 8 : 1 2 5 < 無理やで

1 3 1 : 1 2 8 < なんでや!?

1 3 3 : 1 2 8 < 阪関無

1 3 7 : 1 3 1、 1 3 3 < ここまでテンプレ

1 4 0 : なんで高校卒業と同時にメジャーに行けんのや?

142：140〈話すと長くなるで？

144：142〈いいで！

146：142〈私は一向に構わん！

150：146〈格闘スレは別スレやぞwww

155：メジャーに行くにはプロ志望届けを出さなあかんのやけど、日本人がプロ志望届けを

出したらプロ野球に優先権利があるんや。せやから実質的に高校卒業と同時にメジャーに行くのは不可能なんよ。

157：155〈それってドラフトの話やろ？トライアウトを受けたらいいやん

160：157〈トライアウトに合格してもいきなりメジャー契約は無理やろうな

現地のドラフト指名選手が優先されるやろうし、プロ実績の無いパウプロは  
良くてもマイナー契約やな

163：160〈えつと、つまり…どういことだつてばよ!?

167：163〈せやから、パウプロが高卒でメジャーに行くのは不可能つて事やな

181：パウプロがメジャーに行く抜け道はないんか？

183：高3になる前に高校中退すれば行けるんちゃうか？

190：183〈パワプロは高校卒業したらって言ってるやん

196：そこいらの話もインタビューでしとってパワプロがちゃんと答えを出してるで

200：196〈答えをはよ！

204：196〈答えあくしろよ

208：じゃあ答えを言うで！ドラフト会議が終わったら交渉期間があるやろ？

それが終わったらトライアウトが解禁されるんやけど、そこで受けに行くみたいや！

212：208〈それって大丈夫なんか？パワプロならドラフトで確実に指名されるやろ？

それを断ってアメリカに行くって何か問題がないんか？

215：212〈ドラフトはあくまで選手との交渉権を得るためのものやで！

断るのは選手の自由や！まあ断ったらプロ野球関係とマス

コミから

総スカンくらうやろうけどな！

220：215〈パワプロはそれを承知で高校卒業したらアメリカに行くって

インタビューに答えてるで

225：220〈ホンマに!?ドラフト指名を断ってまで夢を追うやなんて男やないか！

230：パワプロの裏切者め！

233：幻滅しました。パワプロさんのファンやめますね

237：230、233∨アンチは別スレにどうぞ

240：パワプロはアメリカに強行かあ…なんか問題が起きそうやなあ…

243：240∨フラグやめえや！www



このパワプロのインタビューはプロ野球界でも物議を呼ぶ事となり、秋のドラフト会議以降に行われた各球団代表者による会議で、プロ野球のプロ契約に関する事が話し合われる事になる。

これは後に『葉輪ルール』と通称される事になるのだが、そうとは知らぬ当人は今日も元気に笑顔で野球の練習を楽しんでいたのだった。

## 第172話

月刊野球王国にパワプロのインタビュアーが載った翌日、青道高校には多くの問い合わせの電話が掛かってきていた。

曰く、人材の損失云々。

曰く、あの貴重な才能は日本で育てるべし。

そう言った日本野球を憂いた言葉ならまだしも、中には罵詈雑言に等しい電話もあった。

無謀、恩知らず、裏切者といった電話は青道高校だけでなく、パワプロの家にも掛かってきた。

だが、事前にこれらの事を想定していた葉輪家と青道高校の対応は早く、青道高校野球部の練習には大きな支障は出なかった。

ゴシップ狙いの記者が無断で青道高校敷地内に入り込んだので、それが問題になった程度だ。

後はパワプロの練習の帰り道に張っていた記者連中が、不審者として貴子に通報されたぐらいだろうか。

そんなこんなで少しばかり周囲が騒がしくなったパワプロだが、両親や恋人、そして恩師達の連携によって、以前と大きく変わらない日々を過ごしていった。

まあ、一部の後輩がパワプロのアメリカ行きに大きく反応していたのだが…。



「パワプロ先輩！アメリカに行くって本当ですか!？」

朝練前のストレッチをしている最中に大きな声でパワプロに問い掛けるのは沢村である。

彼は青道高校野球部に入部したその日に、パワプロからエースを奪うというライバル宣言をしたのだが、投球テストの一件から色々なものを吸収しようとパワプロに積極的に話し掛ける様になった。

そんな沢村はいつの間にか『葉輪先輩』から『パワプロ先輩』と呼

び方が変わっていた。

「うん、本当だよ。」

「マジですか!? くそくそ…負けねえぞ!」

そう言っただけでストレッチを切り上げた沢村は用具室に向かって駆けていく。

彼愛用のタイヤを取りにいったのだ。

沢村がタイヤを牽いてランニングする光景は体力測定の日から見られる様になったのだが、沢村がタイヤを引いて走るその光景を誰かが『タイヤのエース』と呼んだ。

そんな沢村は今は2軍で必死に練習をしているが、あのタイヤを牽き慣れた頃には1軍に昇格するかもしれないと、落合コーチがその才能と練習熱心な様子を認めていた。

「葉輪さん、月刊野球王国には高校を卒業したらアメリカのトライアウトを受けに行くって載ってましたけど…。」

「それも本当のことだよ、東条。」

沢村だけでなく、パウプロと一緒に練習前のストレッチをしているのが東条である。

他にも降谷と御幸と一緒にストレッチをしているのだが、彼等はマイペースにストレッチをしていた。

「ドラフトで指名されても断るんですか?」

「うん、断るよ。」

「うわあ…もし俺なら二つ返事でOKするのに…。」

もし自分ならと考えた東条は、プロ野球の誘いを断れる気がしなかった。

もつとも、東条はパウプロならマイナーリーグからメジャーまで駆け上がるだろうと、目の前の先輩を信頼していた。

そして、そんなパウプロの姿を見てみたいと思った。

「葉輪さん、俺は応援しますよ!」

「ありがとう、東条。」

パウプロのアメリカ行きの話が一段落した時、マイペースにストレッチをしていた降谷がパウプロに話し掛けた。

「葉輪先輩、スタミナロールをつけるにはどうすればいいですか？」  
「スタミナロール？」

「あ、スタミナとコントロールです。」

降谷の言葉に、パウプロはやっぱり降谷は天然さんだと思った。  
「どっちも急に身に付くものでもないし、基礎練習を続けるしかないかな。」

「そうですね…。」

そうやって肩を落とした降谷にパウプロは苦笑いをする。

降谷はフォーシームの球速は速いのだが、コントロールが無い。

そして1年生の中でも1、2を争う程にスタミナが無かった。

その為、落合コーチが野球部の練習とは別に、降谷のトレーニングメニューを考えただが、その多くは地味な基礎練習ばかりで、降谷の投げたいという欲求を満たせていないのだ。

「降谷、疲れて投球フォームが崩れたらケガに繋がるって落合コーチに言われただろ？」

「…はい。」

肩を落とす降谷を諭す様に話したのは御幸である。

御幸がパウプロの近くに居るのは、パウプロのボールを受ける機会を1つも逃さない様にといい見事なまでの自分本位な理由である。

例えばクリスが相手だろうとパウプロのボールを受ける機会を譲る気は微塵も無い。

こういった図々しさもアスリートに必要な才能の1つと言えるだろう。

「お前、練習前はともかく、練習後のケアはしてないだろ？」

「…。」

御幸の指摘に降谷はプイツと顔を背ける。

「そういうケアの意識も出来ないし、パウプロを超える事は出来ないぞ。パウプロはリトル時代からずっと続けてきてるんだからな。」

御幸がそう言うのと降谷だけでなく、東条も驚いた表情でパウプロを見た。

「葉輪さん、本当ですか？」



「うん、本当だよ。俺の父さんは野球経験者だったから、そこら辺はずっと言われてきたね。」

そう答えながらもパワプロは立ち上がる。

どうやら朝練前のストレッチが終わったようだ。

「よし・今日も楽しんで練習を頑張ろう！」

そう言いながら笑顔になったパワプロに続く様に、御幸や東条、そして降谷も立ち上がったのだった。

## 第173話

月刊野球王国の記事でパウプロの周囲が少し騒がしくなってきた日経ち、1軍を決める為の紅白戦も終わって春の東京神宮大会まで後一週間となった頃、パウプロは青道高校野球部の室内練習場にあるブルペンで頭を悩ませていた。



「うくん。」

「パウプロ、どうした？」

悩むパウプロに、今日のパウプロのボールを受ける為のジャンケンに勝利した御幸が声を掛ける。

このジャンケンは三回勝負で行われ、その勝率はクリスが五割、御幸が三割、宮内と小野が一割という成績だった。

そして、どうやら今日は御幸が勝利したようだ。

「ん？一也か。いや、新しい変化球をどうしようかなって思ってたさ。」  
「新しい変化球？」

パウプロが新しい変化球と言った事で、室内練習場のブルペンにいる1軍メンバーが集まって来た。

「葉輪が新しい変化球か。」

「まだ成長するってか？望むところだ！」

「パウプロの新しい変化球かあ…何がいいんでしょうかね？」

丹波、伊佐敷、川上がそれぞれの思いを口にするのにつられる様に捕手陣も会話をしていく。

「インフー、葉輪の持ち球を考えると速い縦変化のボールか、利き腕方向に変化するボールだな。」

「候補としてはフォーク、SFF、シンカー、シュートってところですね。」

「どれも捕球が難しそうなボールだな…。」

宮内、御幸、小野がそう会話をしていくと、クリスがパウプロに声

を掛ける。

「葉輪、悩んでいると言っていたが、候補は決まっているんじゃないか？」

「あ、はい。候補は決まっているんですけど、握りをどうしようか悩んでました。」

クリスの指摘に会話をしていた皆が驚きの表情を浮かべる。

「クリス、どうしてわかったんだ？」

「葉輪はカットボールやツーシームなどのムービング系は好みじゃない、フォーク系の抜く感覚は苦手だ。それを考えれば、葉輪も球種にはあまり悩まないだろうと思ってな。」

リトル時代からバッテリーを組んできたクリスの見解に、ブルペンにいる皆が感心の声を上げる。

御幸だけは少し悔しそうに苦笑いをしているが…。

「ンフー！クリスは葉輪の新しい変化球を何だと予想してるんだ？」

「おそらくは縦のスライダーだろう…葉輪、違うか？」

「合ってます。流石クリスさんですね！」

笑顔でサムズアップするパウプロの姿にクリスは苦笑いをする。

「それで、パウプロは縦のスライダーの握りに悩んでいるってことだけど、どういうことだ？」

「ん？今のスライダーの握りで縦に落とせないかなって悩んでいるんだよ、一也。」

パウプロの言葉にブルペンにいる投手陣が話し始める。

「葉輪のスライダーの握りはツーシームと同じ筈だが…これで縦に落とせるのか？」

「そもそもその握りでスライダーになるのがおかしいと思うぜ。俺はツーシームにしかならねえ。」

「同じ握りで変化の方向を変えるかあ…俺もやってみようかな？」

丹波、伊佐敷、川上がそれぞれボールを手にしながら話をしていく。

そんな三人を横目でチラリと見てからクリスがパウプロに話し掛ける。

「あまり悩んではかりいても解決しないだろう。とりあえず投げてみ

ろ。」

「はい！」

元気よく返事をして動き出すパウプロに続こうとするクリスの肩を掴む者がいる。

それは…。

「クリスさん、今日は俺の番ですよ。」

今日のジャンケンに勝った御幸だった。

「今の話の流れなら俺が受けるべきだろう？細かいぞ、御幸。」

「金の事とパウプロのボールを受取る事ならいくらでも細かくなりま  
すよ、クリスさん。」

そう話しながらも目が笑っていない笑顔の二人は、パウプロが声を掛けるまで牽制をし合うのだった。

## 第174話☆

春の東京神宮大会の日がやって来た。

1週間前に高速スライダーと同じ握りで縦のスライダーを投げ始めたけど、まだコントロールが甘くて実戦では封印となった。

さて、1回戦の前に能力を確認しよう。

基礎能力

最高球速：154km (※160km)

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー6 (※7)

変化球4：高速縦スライダー1 (※7)

球速を2km、スタミナ、高速スライダー、高速縦スライダーをそれぞれ1ランクアップさせた。

球速を成長させるには筋力ポイントを主に使うんだけど、その筋力ポイントが球速を2km成長させただけで一気に半分まで減ってしまった。

その残った半分を使ってスタミナを成長させたせいで、筋力ポイントの残りは僅かしかない。

今大会で稼がないとな。

それと変化球を成長させるには主に変化球ポイントが必要なんだけど、高速スライダーと高速縦スライダーを1ランクずつ成長させただけで貯まっていたポイントの八割が無くなってしまった。

ポイント使用のインフレがとても激しい。

さて、投手能力はこのぐらいにして野手能力を確認しよう。

基礎能力2

弾道：4  
ミート：B  
パワー：C  
走力：C  
肩力：S  
守備：C  
捕球：B

野手能力はミートをBに成長させた。

肩力は球速を成長させたら勝手にSになった。

球速と肩力って連動してるのか？

まあ、野手能力の確認はこのぐらいにして、最後に特殊能力を確認しよう。

特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『キレ◎』

『牽制◎』

『クイック◎』

『バント○』

『サブポジ：外野◎』

『尻上がり』

特殊能力には新しく取得したものはない。

まあ、取得したいなあと思っっているものはあるんだけど、必要ポイントが凄いなだよねえ…。

こんな感じの能力で春の東京神宮大会を戦っていくぜ！



「くっそ〜、自主練をして早くエースになるつもりだったのに！」

春の東京神宮大会の1回戦の青道高校の試合が行われる予定の球場のスタンドにて、少し赤くなった耳を擦りながら文句を言うのは沢村である。

沢村は言葉通りに自主練をしようとして試合を見学するつもりは無かったのだが、幼馴染みであり、青道野球部のマネージャーでもある若菜に耳を引っ張られてつれてこられたのだ。

球場まで来てまだ文句を言う沢村に若菜は呆れた様にため息を吐く。

「栄純、見るのも勉強なのよ。」

「勉強するよりも練習をした方がいいに決まってるだろ。」

そんな沢村の言い分に若菜は頭を抱える。

「あんだ、投球テストの時に葉輪先輩に教えてもらったって言ったけど、それでも何も知らないで練習してるだけでエースになれると思ってるの?..」

「うっ!?!」

若菜の指摘に呻いた沢村は気まずそうに顔を逸らした。

「高校野球は私達がやっていた中学野球とは別物なのよ。もし、何も知らないで試合に出たら、何も出来ずに終わっても不思議じゃないわ。」

「そんなの、やってみなきゃわからねえだろ。」

沢村はそう答えるが語気が弱い。

「栄純の球質は特殊だから打者1巡は抑えられるかもしれない。でも、慣れられたら終わりよ。」

「だから練習するんだろ!」

そう言って立ち上がる沢村につられて若菜も立ち上がる。

「まだ言うの!?!本気でエースになるつもりなら練習だけじゃダメって言ってるでしょ!」

「わかってるっての！でも、練習しなきゃいつまでも追いつけないだろうが！」

お互いに唸りながら威嚇をしていると、不意に顔が凄く近くになってきた事に同時に気付いて双方共に顔を赤くする。

そしてパツと離れて日常会話をして誤魔化そうとする初々しい二人の反応を見て、近くに座っていた高島はクスリと笑ったのだった。



## 第175話

春の東京神宮大会の1回戦、1回の表の先発のマウンドにパワプロが上があると、球場に歓声とブーイングが入り雑じった声上がる。

「な、なんだこれ!?!」

歓声とブーイングが入り雑じる球場の雰囲気には驚いたのは、スタンドにいる沢村である。

そんな沢村に多少の事情を知る若菜が説明する。

「栄純、多分だけど、少し前の月刊野球王国に載った葉輪先輩のインタビューが原因だと思うわ。」

「若菜、何が載ってたんだ?」

「葉輪先輩は青道高校を卒業したらアメリカに行くって言ったのよ。」

「高卒でアメリカ?!いきなりメジャーか?!くっそ、負けねえぞお!」

少し前に沢村はパワプロにアメリカ行きの事を聞いていたが、その時に沢村はパワプロのアメリカ行きはプロ野球に行つてからと勘違いをしていた。

これは現状のメジャー行きがプロ野球で経験を積んでからというのが常識だからだ。

その常識破りなパワプロのアメリカ行き宣言に何故か対抗心を燃やす沢村の姿に、若菜は苦笑いをする。

「それで、なんでブーイングされるんだ?」

「なんでも、葉輪先輩は裏切り者なんだそうよ。」

「はあ?!なんだそれ!わけわかんねえよ!」

「私だつてわからないわよ!でも、そう思う人達がいるんだから仕方ないじゃない!」

若菜の言葉を聞いた沢村は、まるで威嚇をする様に周囲を見渡す。

「一生懸命にやつてる奴を!夢を追い掛ける奴を!なんで裏切り者なんて呼ぶんだよ!!」

そう叫ぶ沢村に周囲にいた青道野球部の者達が一度目を向けると、誰からともなくマウンドで投球練習をしているパワプロに声援を送り出す。

そんな仲間達の声援が聞こえたのか、マウンドのパワプロは笑顔で手を振ってきた。

「すげえ…こんなブーイングの中でもあの人は笑えるのかよ…。」

パワプロの大きさに感動すら覚えている沢村の背中を若菜が叩く。

「いてえ!?何すんだ、若菜!」

振り向く沢村に若菜は両手を腰に当てて答える。

「感心してるばかりじゃダメじゃない。栄純はあの人を超えるんではない?」

「うっ!?そ、その通りだ!俺は!パワプロ先輩を超えてエースになる!」

利き腕の拳を握り締めて頭上に突き上げる沢村に、若菜は笑みを浮かべる。

「見に来てよかったでしょ?」

「おう!ありがとな、若菜!」

そう言って笑顔を向けてくる沢村に、若菜は少し頬を赤くして微笑み返したのだった。



春の東京神宮大会の1回戦、青道高校の試合が始まると球場は完全にアウエーになったかの様に歓声を掻き消す大ブーイングに包まれた。

しかし、その大ブーイングはパワプロの投げた1球で静まる。

初球、パワプロが笑顔でフォーシームを投げると、神宮球場の電光掲示板に153kmの球速が表示された。

この1球で静まり返った球場に今度は青道野球部の仲間達の歓声が沸き起こる。

まるで自分達のエースを誇るかの様に、喉が壊れんばかりの大声で応援をしていた。

そんな仲間達の応援に応える様に、パワプロは1回の表を三者連続三振で抑えてみせた。

球場の所々でまだパワプロにブーイングをする者がいるが、その者達は周囲の観客に冷ややかな目を向けられる。

そして多くの観客達がパワプロを応援する様になると、球場関係者がパワプロに向けて露骨な罵詈雑言を発する観客の肩を叩く様になった。

パワプロが三者連続三振で相手チームを圧倒した後の1回の裏、青道打線はパワプロの快投に続けとばかりに爆発した。

打者一巡の猛攻で1回裏で5得点と相手チームを突き放す。

そして2回、3回も得点を重ねて9-0と点差を突き放すと、青道の監督である片岡は9者連続三振でパーフェクトを継続中であるパワプロをレフトに回し、マウンドには川上を送った。

片岡は4回の守備が始まる前にベンチで選手に檄を飛ばす。

「この試合、5回コールドで決める。どれだけ点差が開こうとも気を抜かずに全力で行け！」

「はい、はい」

この片岡の檄に応える様に、4回の表には倉持のファインプレーが飛び出して、パワプロから継続して川上もパーフェクトで4回の表を抑える。

そして、4回の裏にまたもや打者一巡の猛攻で6点を追加して15-0と点差を突き放すと、5回の表のマウンドには引き続き川上が上がる。

川上は5回の裏の先頭打者である相手チームの4番バッターにヒットを打たれてしまったものの、後続はキッチリと抑えて試合は終了了。

春の東京神宮大会の1回戦、青道高校は15-0のコールドゲームで勝ち上がったのだった。

## 第176話

「ハイ！チョットイイデスカ？」

春の東京神宮大会の1回戦の後、貴子ちゃんと一緒に家に帰っていたら片言の日本語で話し掛けられた。

俺は貴子ちゃんと一緒に振り向くと、そこにはブロンドヘアに青い瞳の大人の男性と日本人の男性が立っていた。

「ボクハデスネ…。」

「英語で良ければ少し話せますよ、ミスター。」

俺が英語で言葉を返すと、男性は驚いた表情をしながらも笑顔になった。

「綺麗な英語だね、葉輪くん。」

「俺の事を知っているんですね、ミスター。」

「おっと、これは失礼。僕はこういう者だ。」

そう言っつて男性は俺に名刺を差し出してくる。

名刺にはロス・ロジャーズのスカウトのベックと書かれていた。

「ロジャーズのスカウトですか？」

「その通りだよ、葉輪くん。」

「話には非常に興味あるんですけど、残念ながらスカウトの話をするなら学校を通してください。」

俺がそう言うのとベックはサムズアップをしながら話し出した。

「問題無いよ。大会終了後に君とのアポイントメントは取ってある。今日はその前の挨拶さ。」

「随分と準備がいいですね、ベックさん。」

「ベックで構わないよ、葉輪くん。それに、もっとフランクに話してくれていいさ。」

「じゃあ、俺もパワプロでいいよ、ベック。」

俺とベックがお互いにサムズアップをすると、同時に笑いだす。

うん、ベックはいい人だ。

実はベック以外にもプロ野球のスカウトの人が接触をしてきた事があるんだけど、ちよつと恩着せがましいというか、上から目線とい

うか、面倒な相手だったのだ。

『ところでパワプロ、そちらの女性は恋人かい？』

『うん、俺の恋人の貴子ちゃんだよ。』

『そうかい。それじゃあ、貴子も後日の僕達の話し合いに参加してもらおうか。』

ベツクの提案に俺と貴子は驚いて目を見開く。

『ベツクさん、私も参加していいんですか？』

『おや？貴子も英語を話せるのかい？』

『はい。小さい頃からフーくんと一緒に勉強してきましたから。』

『それは素晴らしいね。もつとも、一緒に来ている通訳の彼の仕事が無くなってしまったけどね、ハツハツハツ！』

貴子ちゃんの言葉通りに俺と貴子ちゃんは幼稚園の頃から英語の勉強をしてきた。

当時の俺はメジャーに行くとは考えてなかったけど、もしかしたら父さん達はそうなるって思っていたのかもしれないな。

親って凄い。

ちなみに、最近の俺と貴子ちゃんはスペイン語の勉強もしているぜ。

何故か一也も参加してな！

『それじゃパワプロ、大会での活躍を見守っているよ。スカウトとしてはもちろん、君のファンの一人としてね。』

『うん、頑張るよ、ベツク！』

俺とベツクはお互いにまたサムズアップをして別れる。

ベツクと一緒に来た男性は仕事が無くなったからなのか、ずっと苦笑いをしてたな。

『フーくん、大会が終わってからの楽しみが出来たね。』

『うん、ベツクと笑顔で話す為にも優勝しないとね。』

俺は貴子ちゃんと手を繋ぐと、笑顔で会話をしながら家に帰っていったのだった。



「一也、寮は慣れたか？」

「たまにモーニングゴルフを貰わないと起きられないくらい夜更かしをしまいうけど、それ以外では問題無いかな。」

「一番解決しなきゃならない問題が残っていると思うがな。」

ファミレスで食事をしながら御幸と会話をするのは彼の父親である。

御幸は今日の試合に途中出場をしている。

パワプロが川上と交代した際に、クリスと交代したのだ。

そこで打撃と守備での活躍をスタンドで見っていた御幸の父親が、試合終了後に食事に誘ったのだ。

「母さんも喜んでたぞ。」

「俺を誘わずに母さんを食事に誘う甲斐性ぐらい見せろよな。」

「そんな甲斐性があれば別れなかっただろうなあ…。」

御幸の家庭は父子家庭である。

その為、御幸は父親一人に育てられて来た。

しかし、御幸の両親が別れたのはお互いに仕事を優先したかったからであり、夫婦としての仲が悪かったからでは無い。

その事を御幸は幼い頃から理解していたので、父親と別れた母親に悪い感情を持っていない。

もっとも、その事に納得出来る様になったのはシニアに上がってからだった…。

「それで一也、お前は どうするつもりなんだ？」

「ん？なんのこと？」

「とぼけるな。」

そう言っ て御幸の父親は月刊野球王国のある記事のページを御幸に見せる。

「お前、葉輪くんとアメリカに行きたいって悩んでるだろ？」

御幸は父親の言葉を認める様に苦笑いをする と頭を掻く。

「父親ってすげえな。」

「いや、気付いたのは母さんだ。」

「おい、感動を返せ。」

ジト目で見てくる御幸に、父親は口笛を吹いて誤魔化する。

「親父の言う通り、俺はパワプロとアメリカに行きたいって思ってる。」

「そうか、行ってこい。」

「いや、行ってこいって…。」

「金の事は心配するな。母さんには逃げられたけど、お前が自立出来るまで何とかするぐらいの甲斐性はあるつもりだ。」

笑顔でそう言う父親に御幸は頭を下げる。

「親父…ありがとう。」

「お礼は出世払いで母さんとのアメリカデートな。それと、後で母さんにも礼を言っておけよ。」

「おう！」

笑顔で返事をした御幸はファミレスでの食事を再開する。

育ち盛りの息子の食欲を見た父親は、その姿を携帯電話で撮影して母親へと送ったのだった。

## 第177話

春の東京神宮大会の2回戦は純さんの先発で始まった。

これは丹波さんの実力負けではなく、純さんの方が調子が良かったからというのが落合さんの言葉だ。

あ、ちなみに俺は6番レフトでの試合出場だぜ！

試合が始まると純さんは初回から順調にアウトを重ねて行って打者1巡となる3回の裏までヒットを1つも出さない完璧なピッチングを披露した。

打線もしつかりと援護をして3回の表までに6点を奪い、1回戦に続いてワールド勝ちが見えてきた。

俺もタイムリーヒットを打てたぜ！

しかし、4回の表の青道高校の攻撃が無得点で終わると、相手チームの反撃が始まった。

4回の裏の先頭打者はしつかりと抑えた純さんだったが、続く打者にライト前ヒットを打たれると純さんのリズムが崩れ出した。

続くバッターに送りバントをされて2塁にランナーを背負うと、それまでの脱力した投球フォームから力んだ投球フォームに変わってしまい、純さんが投げたボールは甘いコースに行ってしまった。

相手打者はその甘いボールを見逃さずにレフトにボールを運んで来た。

よっしゃ！見せ場だぜ！

2塁ランナーが勢い良く3塁を蹴ってホームに向かったので、俺はホームに送球する。

一気にホームに向かったランナーはスライディングする前にクリスさんがボールを捕球したのを見て、何とかタッチを掻い潜ろうと回り込むんだけど、敢えなくアウトになった。

このバックホームでスリーアウトになったので4回の裏も無失点で凌いだぜ！

これでリズムを取り戻したのか、その後の純さんは6回まで無失点で抑えた。



そして7回の裏に登板したノリが3人でキッチリと抑えると、2回戦は11―0で7回コールド勝ちとなったのだった。

◆  
2回戦に続く3回戦では俺が先発で投げて、1回戦と同じ5回コールドで勝ち進んだ。

そして準々決勝となる4回戦。

予定では純さんが先発だったのだが、ここで丹波さんが片岡さんに先発を志願したのだった…。

◆  
「片岡監督、俺に先発をさせてください！」

春の東京神宮大会の準々決勝の当日、丹波さんが片岡さんに頭を下げている。

そんな丹波さんを片岡さんはジッと見詰めている。

「丹波、真中と投げ合いたいのか？」

「はい！」

「それはチームよりも優先される事なのか？」

丹波さんは片岡さんの言葉に唇を噛む。

準々決勝の相手である市大三高のエースである真中さんは丹波さんの幼馴染みだ。

その真中さんと丹波さんは投げ合いたいらしいと、一也が俺に耳打ちをしてきた。

「丹波、試合に合わせて調子を整えるのもピッチャーの仕事だ。この大会の前では伊佐敷の方がそれが出来ていたから第2先発を任せている。」

片岡さんの言葉を丹波さんは目を逸らさずに聞いている。

「この試合、先発は予定通りに伊佐敷に任せる。悔しいと感じたのなら、次の大会で挽回してみせろ！」

「はい！」

丹波さんの返事に頷いた片岡さんは皆に顔を向ける。

「これは丹波に限った事では無い。調子が良いと見えたら使つていく。準備は怠るな！」

「はい！」

「それではスタメンを発表する。1番レフト、葉輪！」

「はい！」

正直に言うのとビックリした。

だって、青道野球部1番の俊足である倉持を差し置いて俺が1番バッターなんだもん。

片岡さん曰く、俺の方が今大会の出塁率が高いからみたいだ。

まあ、ミートをBに成長させたからなのかヒットを良く打てる様になつたからなあ…。

その結果、今大会の俺の出塁率は五割を超えているって貴子ちゃんに教えてもらった。

へえ、そんなに出塁してたんだ。

そう言えば野手練習の時に、落合さんが俺によく盗塁の練習をさせる様になつたのも関係してるのかな？

まあ、おかげで特殊能力の『盗塁○』のコツをゲット出来ただけだね。

走力ポイントは余っているし、大会が終わったら取得するのもいいかもしれないな。

そんなこんなでスタメンの発表が終わると、いよいよ準々決勝前の練習が始まるのだった。

よっしゃ！今日も楽しんでいくぜ！

## 第178話

「なんだ、葉輪が先発じゃねえのか。」

春の東京神宮大会の準々決勝が行われる球場で青道高校が試合前の練習をしているのだが、それを見て文句を言ったのは市大三高の2年生である天久　光聖（あまひさ　こうせい）だ。

天久は市大三高の監督である田原が『ジーニアス』と称賛し、エースの真中でも勝てないかもしれないと言われる程の才能溢れる選手だが、去年の公式戦には一度も出場していない。

それは身体作りに専念していたからではなく、天久が野球部から逃げたからだ。

理由は練習が忙し過ぎて彼女とデートも出来ないという、球児達が聞いたら憤慨ものの理由である。

そうだった理由で去年の夏の大会前には市大三高の野球部から逃げた天久だったが、何故か去年の秋の大会前には野球部に戻って来ていた。

それは、パワプロが理由である。

夏の甲子園を制したパワプロが貴子と恋人になってデートをしていたのを、同じく彼女とデートしていた天久が目撃したのである。

そこで天久は『あいつが両立出来るのに俺に出来ないわけがねえ！』と奮起して野球部に戻ったのだ。

さて、そんなこんなで市大三高野球部に戻った天久は、言葉通りに野球部の練習と彼女との交際を見事に両立してみせた。

むしろ、逃げた前よりも熱心に練習をした事で天久の才能は開花していった。

そして天久は今大会の青道との試合で先発を任されたのだ。

「光聖。」

天久が声の方に振り向くと、そこには真中がいた。

「真中さん、どうしました?」

「光聖、油断するなよ。」

「青道で気をつける打者はクリスさんぐらいでしょ。まあ、そのクリ

スさんも打ち取るイメージは出来てるっすけどね。」

そう言つて天久はまた外野で練習をしているパウプロに目を向ける。

「俺はあいつと投げ合いたいんすよ。」

「青道は葉輪だけじゃない。そして、俺達もお前だけじゃないって事を忘れるな。」

「わかってますよ。一度逃げた俺をまた迎え入れてくれた皆には恩を感じています。」

パウプロの練習を見ていた天久は真中の目を見る。

「だから、俺が皆を甲子園につれていきますよ。」

「…俺はエースを譲るつもりはないぞ。」

「一度逃げた俺がその番号を背負うのはまだ早いつすよ。」

不敵に笑つた天久は踵を返して市大三高ベンチに戻っていく。

その天久の背中を見た真中は両手を腰に当てたため息を吐いたのだった。



試合前練習も終わり、春の東京神宮大会の準々決勝となる青道と市大三高の試合が始まった。

先攻は青道。

1番バッターであるパウプロが打席に入ると、スタンドからは声援とブーイングが沸き起こった。

（おくおく、有名人は大変だねえ。まあ、俺の方が有名人になるけどさ。）

天久はロージンバッグを手にしながら、足場を作っているパウプロを見下ろす。

（しっかし、エースが1番バッターってどうなのよ？普通はエースで4番じゃねえの？）

足場を作り終わったパウプロがバットを構えると、天久もロージンバッグを置いてプレートに足を掛ける。

(まあ、いいか。何番だろうと打たせねえからよ。)

初球、天久はアウトコースのフォーシームから投げ込んだ。

判定は…ストライク。

(次はフォークを同じ所から落として空振りでツーストライクつと。)

2球目、天久はアウトコースにフォークを投げたが、パウプロは見逃してボール。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

(めんどくせえ…一丁前に見逃してんじゃねえよ。)

3球目、天久はアウトコースにカーブを投げ込んだ。

コースは甘かったが、パウプロはこれも見逃してストライク。

カウントはワンボール、ツーストライクとなった。

(あくあ、チャンスボールを見逃しちゃ、俺の勝ちだな。)

キャッチャーからの返球を受け取った天久がプレートに足を掛ける。

(もうお前を三振で打ち取るイメージは出来てるんだよ。インロー膝元のスライダーでな。)

天久はプレートに足を掛けると投球モーションに入る。

そしてボールをリリースすると、イメージ通りの感触にパウプロの三振を確信した。

しかし…。

カキンッ!

パウプロがスイングしたバットが金属バットの快音を響かせる。

「おいおい、冗談は止せよ。」

天久のマウンド上での眩きなど構わずに、打球はライトスタンドへと飛び込んだのだった。

## 第179話

春の東京神宮大会の準々決勝、市大三高との試合で俺は先頭打者ホームランを打った。

いや、インコースにボールが来てくれてよかった。

あのままアウトコースに投げ続けられたら上手く打ってもシングルヒットだっただろうからな！

俺はベースを回りながらチラリと相手ピッチャーを見る。

どこか飄々とした印象を受ける相手だったけど、今の一発で目が覚めた感じかな？

ベースを一週してベンチに戻ると皆とハイタッチをした。

イエーイ♪

「葉輪、天久のボールはどうだ？」

おっと、1番バッターの役割として相手ピッチャーの球質とかを伝えなくちゃ。

「バックドアでアウトコースに投げられたら手が出ないと思うぐらいスライダーはキレがよかったです。他のボールもよかったですけど、カーブだけはコントロールが甘いのかなと思いました。」

片岡さんは俺の言葉に頷くと、皆を見渡す。

「天久はエースの真中に代わって先発をしてくる選手だ。甘いボールは見逃さずに叩け！」

「はいー！」

片岡さんの檄で皆は気合い十分だぜ！



（いきなりホームランとはね。パワプロは1番バッターの役割をわかってるのかな？）

左打席に入って足場を作っている青道の2番バッターの小湊 亮介は常の微笑みを浮かべたまま天久に目を向ける。

（先頭打者ホームランを打たれたのに堪えた様子が無いね。真中の代

わりに先発するだけはあるってところかな?)

スツと自然にバットを構えると、小湊は投球モーションに入った天久を観察する。

初球、天久は左バッターの小湊の膝元にスライダーを投げ込んだ。(きつきホームランにされたボールを躊躇なく投げ込む辺り、強気なピッチャーみたいだね。まあ、パワプロのスライダーに比べれば可愛気があるけど。)

初球のスライダーはストライクとなって次の2球目、アウトコースに投げ込まれたフォーシームを小湊はカットする。

(天久のフォーシームはノビがあるけど、投球モーションが素直な分だけ見やすいかな。)

今年のオフシーズンから今年の春先まで、青道打撃陣は打席を奪い合う様にしてパワプロがバッティングピッチャーをする打席に立ってきた。

その練習で著しく打撃が成長したのが小湊 亮介とキャプテンの結城である。

結城はミートポイントをメジャー選手並みに後ろに置いてパワプロのボールに対応する様になった結果、クリスも認める程の打撃力を身に付けた。

そして小湊はビタビタのコントロールを持つパワプロとの練習で、プロの一流打者並みの選球眼を手に入れていた。

この選球眼を手に入れた時の小湊は野球が変わったと口にして興奮したのだが、そんな興奮した様子的小湊を見た同級生達は例外なく驚いたものだった。

場面を打席に戻そう。

3球目、ツーストライクと追い込んだ天久は高めに釣り球となるフォーシームを投げ込む。

この1球を小湊は余裕を持って見送った。

(球速は140km台前半ってところかな? 投球モーションと同じく球筋も素直だし、長打を狙えそうだね。)

4球目、5球目とカーブとフォークの球筋を見た小湊は、フルカウ

ントから粘り始めた。

(ストライクゾーンに投げ込めるコントロールはあるみたいだね。コースは少し甘いけど。)

フォーシーム、スライダー、フォーク、カーブと天久の持ち球の全てをカットしていく小湊は、常の微笑みを崩さない。

(皆は十分に球筋を見れたかな？それじゃ、そろそろ塁に出ようか。)

この打席の11球目、アウトローのやや甘い所に投げ込まれたフォークを、小湊は逆方向に綺麗に流し打ちをしてレフト前に運んだ。

(哲、後は任せたよ。)

1塁の塁上に立った小湊はヘルメットの鍔に手を触れて、歓声に応えたのだった。



## 第180話

春の東京神宮大会の準々決勝である青道高校と市大三高の試合は、パワプロの先頭打者ホームランから始まった。

現在の状況はパワプロに続く2番バッターの小湊がレフト前ヒットで出塁してノーアウト、ランナー1塁となり、ネクストバッターサークルから3番バッターの結城が立ち上がるところである。

結城は打席に向かいながら小湊が見せてくれた天久のボールの球筋をイメージしていく。

(片岡監督からの指示は『自由に打て』か…。)

まだ初回で点差も1点である事を考えれば、最悪でもゲッツーは避けたいところである。

だが片岡は昨年の冬から今年の春先にかけてのオフシーズンで開花した結城の打撃を信頼して、この試合の全ての打席で結城には自由に打たせるつもりだった。

結城は主将に任命されてからそれまで青道で1、2を争う練習量を更に増やしていたが、それでもその打撃はクリスの影に隠れて目立つものではなかった。

しかし、昨年のオフシーズンにパワプロが打撃投手を行った打撃練習で殻を破った結城は、今大会でクリスに並ぶ程の打撃成績を残していた。

準々決勝に至るまでの3試合で打率5割、ホームラン5本と試合を見に訪れていたプロ野球関係者を驚愕させる打撃を見せた。

この活躍に青道野球部の者達は両手を上げて結城に歓声を送った。皆、結城の努力を目にして来たからだ。

そして今も主砲であるクリスを超える程の歓声がベンチから送られている。

そのメンバーの中にはパワプロの姿もあった。

(葉輪、お前には感謝する。だが感謝は言葉ではなく、打撃で示す！)

夏、春と甲子園を連覇した青道高校野球部だが、青道高校生徒の中にも妬み嫉みの声があった。

曰く、パワプロにおんぶにだっこ。

曰く、パワプロのお荷物。

これらの言葉に青道野球部のメンバーは歯を食い縛って耐えた。秋の選抜東京地区大会の決勝戦での敗退は、まさにその妬み嫉みの言葉通りだったからだ。

妬み嫉みの言葉を跳ね返すには結果を出すしかない。

胸を張ってパワプロの仲間だと言う為に…。

打席に入った結城はゆっくりと息を吐いてからバットを構える。

その構えを見た天久は1塁に1つ牽制を入れたのだった。



牽制を1つ入れた天久はロージンバグを手取る。

(雰囲気のあるバッターじゃん。思わずプレートを外したのを誤魔化するのに1塁に牽制しちゃったよ。)

ロージンバグを置いた天久はプレートに足を掛けると、セットポジションに入る前にチラリと1塁の小湊に目を向ける。

(でも残念だったな。右バッターじゃあ、俺のスライダーは打てねえよ。)

クイックモーションに入った天久はフロントドアとなるスライダーを投げ込む。

(スイングの始動が遅え。詰まってゲッツーってね。)

しかし、天久の予想は最悪の形で裏切られる事になる。

カキンッ!

天久の認識では明らかに遅かった結城のスイング始動だったが、結城がバットを振りきると、打球はレフトの守備についている市大三高のエースである真中が、一步も動けない弾丸ライナーでレフトスタンドに突き刺さった。

あまりの打球の凄さに球場が静まりかえる中で結城がゆっくりと走り出す。

すると、球場にはざわめきが起き、やがてざわめきは歓声へと変

わった。

パウプロに続いて結城にもホームランを打たれた天久は、結城がベースを回り終えるまで呆然とレフトスタンドを見続けたのだった。



この後、天久は次のバッターであるクリスにもホームランを打たれた事で、初回到1つもアウトを取れずにレフトにいる真中と守備交代をする事となる。

天久 光聖。

市大三高野球部の監督である田原に『ジーニアス』と称される彼だが、その彼の高校野球公式戦のデビューは生涯忘れられない苦い記憶となったのだった。

## 第181話

春の東京神宮大会の準々決勝の青道と市大三高の試合は1回の表で4-0と青道がリードをしていた。

ランナー無しではあるが、ノーアウトで打順は5番バッターの増子。

増子はこの大会から1軍に復帰していたが、この試合が久しぶりの公式戦スタメンだった。

(出来れば守備から始めたかったが…。)

去年の秋の選抜東京地区大会の決勝戦でエラーをした事で2軍落ちした増子は、2軍の練習でひたすら基礎練習を重ねてきた。

そして今大会前の紅白戦でついに1軍に返り咲いたのだが、あの時のエラーの記憶は今もまだ増子の記憶に色濃く残り続けている。

(気持ちをきりかえろ。あの時の二の舞になる。)

ウガッ!と気合いを入れた増子は打席に入ると、天久と代わってマウンドに立つ真中に目を向ける。

(片岡監督の指示は『自由に打て』。だが、消極的な打撃をすれば俺の夏は無くなるだろうな…。)

積極的なチャレンジでの失敗には寛容な片岡だがその反面、消極的な姿勢での失敗には厳しい対応を取る。

故に、増子はこの打席が勝負だと思っていた。

(あの時の失敗を引き摺るか、振りきる事が出来るか…。)

バットを握る増子の手に自然と力が入る。

(俺に小湊の様な器用なバッティングは無理だ。詰まってもいい、振りきれ!)

心を決めた増子に対する真中の初球。

真中は力を込めたフォーシームを投げ込んできた。

コースはアウトコース寄りだが甘い。

この1球に増子はバットを振りきる。

だが…。

ガキッ!

差し込まれた形で振りきると、打球は1塁線を切れてファールとなる。

増子は一度打席を外してバットを振る。

(差し込まれたが悪くない。迷わずにバットを振れ！)

打席に戻った増子を見た真中が投球モーションに入る。

2球目。

真中はもう一度力を込めたフォーシームを投げ込んだ。

増子がバットを迷いなく振りきると今度は打球に角度がついたが、

打球はライト線を切れてファールとなった。

これでノーボール、ツーストライク。

バットを短く持つか一瞬迷ったが、増子はグリップをそのままに打

席に立つ。

3球目。

3球連続でフォーシームを投げ込んだのだが、真中は力が入り過ぎたのかこの1球は高めに外れてワンボール、ツーストライクとなった。

そして4球目。

ここで真中は得意球の高速スライダーを投げ込んだ。

追い込まれているのもあって増子はスイングをするが、バットはしっかりと振りきった。

だが…。

ガキッ!

ボールの上つ面を叩いた打球はショートゴロとなり、市大三高に待望のワンアウトをもたらす結果になった。

1塁まで全力で走った増子は悔しそうに表情を歪めながらベンチに戻る。

そんな増子に片岡が声を掛けた。

「増子、結果は出なかったがいいスイングだった。そのスイングを続けていけ。」

この片岡の一言で増子の中で燻っていた気持ち晴れていった。

まだ完全にあの時のエラーを吹っ切ったわけではないが、これで増

子はプレーに集中出来るだろう。

増子が片岡に大きな声で返事をする、ベンチの仲間達が増子に次々と声を掛けていく。

その仲間達の声に、増子は半年振りに心からの笑みを浮かべたのだった。

## 第182話

増子を打ち取った後の真中は続けて青道打線の6番、7番バッターも打ち取って1回の表を終えた。

(グツジョブだ、真中ボーイ。厳しい展開だが、これでもまだファイト出来る。)

雄叫びを上げながらマウンドを下りてくる真中を見ながら、市大三高の監督である田原が笑みを浮かべる。

(天久ボーイには酷なエクスペリエンスとなったが、ここでチャレンジをしておかないと、彼のジーニアスな才能を持つとしても葉輪ボーイと勝負する事は出来ないだろう。)

1回の表で1つもアウトを取れずに交代した天久だが、監督である田原は天久の才能を微塵も疑っていなかった。

天久が野球部を逃げた事も、今日打ち崩された事も、全ては天久の才能を開花させる為に必要なプロセスだと田原は考えているのだ。

(頼れるエースである真中ボーイがいる夏までしか出来ないクレイジーなチャレンジだが、これで天久ボーイが目覚めるならリターンは十分だ。)

レフトから引き上げて来ながらも、どこか呆然としている天久に田原は目を向ける。

(真中ボーイは9回を投げきれないペースではないがそれでいい。その背中を1イニングでも長く天久ボーイに見せてくれ。それが、天久ボーイの心にレボリユーションを起こすキッカケとなるのだから。。。)

市大三高メンバー全員がベンチに戻ると、田原は柏手を打って注目を集める。

1回の表で4点差をつけられても、この男は微塵も諦めていなかったのだ。



1回の裏、マウンドに上がった伊佐敷は市大三高打線を三人で抑える順調なスタートを切った。

続く2回の表、先頭打者は8番の倉持だ。

倉持は右投手である真中に対して左打席に立つ前に、青道野球部のコーチである落合の言葉を思い出し出していた。

『お前の足を活かすなら左打席に専念しろ。』

倉持は埼玉のプロ野球チームにいるスウィッチヒッターでトリプルスリーを達成した偉大な遊撃手に憧れている。

それ故に倉持はスウィッチヒッターをやっているのだ。

だが、落合の言うことも理解出来る。

しかし、納得は出来ていない。

何故ならショートのポジションもスウィッチヒッターも、全ては憧れの男を目指すのが故のものだったからだ。

それを否定された倉持は大いに悩んだ。

そして、この試合でパワプロに1番バッターを奪われた事が更に倉持を悩ませている。

結果を求めて左打席に専念するか、夢を追い掛けてレギュラーを落とされる事も覚悟するか。

その答えはこの打席の前に決めていた。

(あの人が…俺のヒーローなんだよ！)

そう、倉持は憧れを追うことを決意したのだ。

右投手である真中に対してスウィッチヒッターのセオリーである左打席に立たずに右打席に立った倉持は、大きく息を吐きながらバットを構える。

(葉輪はドラフトを蹴ってでも夢を追うんだ。なら、その後ろを守る俺が逃げてどうするんだ！)

競技の世界はどれ程の努力を重ねても結果が出なければ認められない残酷な一面がある。

それ故にどこかで理想を追うことを諦め、生き残る為に現実に適応していく事もある。

だが倉持はそれを理解しつつも、理想を追うことを決意したのだ。



そんな倉持に対する真中の初球。

真中は打ち気を外す様にアウトコースの高速スライダーから入った。

この1球に倉持は身体が泳いだ中途半端なスイングで空振りをしてしまう。

これでカウントはノーボール、ワンストライク。

倉持はタイムを取ると、打席を外して素振りをする。

二度、三度と強くスイングをしてから打席に戻る。

2球目。

真中はインハイにフォーシームを投げ込んだ。

初球の残像が残る倉持はアウトコースに対応しようと踏み込んだ結果、2球目のインハイのフォーシームをぶつかると錯覚して身体を反らして避けた。

しかし、ボールはインハイ一杯に決まってストライクがコールされた。

この判定に倉持は悔しそうに歯噛みをする。

追い込まれた状況の3球目。

真中は初球と同じアウトコースの高速スライダーを投げ込んだ。

コースは甘いが一杯に投げ込んだ真中の高速スライダーは、倉持の予測を超えるキレを見せる。

ガキッ!

辛うじてバットの先っぽに当たった打球が1塁線を転がっていく。

倉持は全力で1塁に駆けた。

転がっていく打球を市大三高の1塁手が素手で捕球して、素早く真中がカバーに入る1塁に送球する。

真中がベースを踏むと同時に倉持が1塁ベースを駆け抜ける。

塁審の判定は…?

「…セーフ!」

塁審の両手が大きく横に広げられると、倉持はスタンドにいる落合に向けて拳を突き上げたのだった。

## 第183話

春の東京神宮大会の準々決勝である青道と市大三高の試合の2回の表、倉持はノーアウトで出塁すると、9番バッターである伊佐敷に対する初球に盗塁を敢行した。

「ち、チーターだ！あそこにチーターがいるぞ！」  
「何言ってるのよ。」

スタンドで倉持の足の速さに驚く沢村に若菜が冷静にツツコミを入れていますが、試合は止まらずに続いていく。

倉持の盗塁が成功してノーアウト、2塁の状況になると、片岡は伊佐敷に送りバントのサインを出した。

この送りバントは成功して状況はワンアウト、3塁へと変わり、打者は1番バッターのパウプロだ。

既に4点差がついている市大三高はこれ以上の失点は避けたい。

だが、失点を避けようとして余計に傷口を広げてしまう事もあるのが野球だ。

マウンドに集まった市大三高の内野陣に決断が迫られる。

「1点は覚悟しよう。」

エースである真中の言葉に市大三高の内野陣が頷く。

「ここで無理に葉輪を抑えても上位打線が続く。リズムを崩して抑えられる相手じゃない。」

マウンドで円陣を組んで気合いを入れてから市大三高の内野陣が守備位置につくと、パウプロと真中の勝負が始まった。

初球、真中はインローにワンバウンドとなる高速スライダーを投げ込んだ。

パウプロはしっかりとタイミングを取ったが、この1球を見逃した。

市大三高のキャッチャーはボールを捕球出来ずに弾いてしまったが、しっかりとブロックキングをしてボールを前に転がし、倉持のホーム突入を防いだ。

この1球にスタンドで試合を見ている落合が唸る。

(いいマウンド度胸だな。おそらくはアウトコースで勝負をかける為にインコースに投げ込んだらうが、後逸の可能性を考えるとそこまで投げ込む事は難しいんだが…。)

顎髭を扱きながら落合は打席にいるパウプロに目を向ける。

(葉輪は基本的にインコースしか待つていない。それを考えれば今の1球はありだ。しかし、今のペースでは中盤までしか持たないだろうな。)

落合はパウプロに向けていた目を、レフトの天久に向ける。

(彼が復活する事を想定しているのか？それとも、夏の為にこの大会は捨てたか？どちらにしろ、これから先の市大三高のキーマンは彼だな。)

片目を閉じて天久を観察していた落合は、胸ポケットから手帳を取り出してメモをするのだった。



(うーん、もう少し高ければ打てただけどなあ。)

真中が投げ込んだインローの高速スライダーを見送ったパウプロは、自然体で次の1球を待っている。

すると、パウプロの打ち気を外す為なのか、真中は3塁に牽制を入れた。

(もう1球インコースに来ないかなあ？)

そう思うパウプロがケアをしているのは常にインコースである。

これはリトル時代にクリスからデッドボールに気を付ける様にと指導を受けたのを、今も変わらずに守っているからだ。

野手の練習をする様になって打撃にも興味が出てきたパウプロだが、彼が一番好きなのはピッチングである。

その為、デッドボールでケガをするのを避けるのを優先しているのだ。

もつとも、それ故にパウプロはアウトコースを打つのを苦手としているのだが、能力でミートを成長させた事でヒットを打つぐらいなら

ばやってやれない事もない。

しかし…。

(もう一本ホームランを打ちたいなあ。)

パワプロに上手く逆方向に打とうという気持ちは欠片も無い。

それどころか繋ごうという意識すら皆無である。

そんなパワプロを落合は苦笑いをしながら生粋のピッチャーだと称していた。

だが、パワプロもベンチから指示が出れば素直にバントをする。

しかし、そうでない場合は自身が楽しむ事を最優先するのだ。

パワプロがホームランを打ちたいと考えている中で真中が投じた2球目。

真中はアウトハイのフォーシームを選択した。

コースは甘めのストライクゾーンだったが、パワプロはこの1球を見送る。

(惜しい、もう少し内側なら引つ張れたのに。)

続く3球目、真中はインコースのボールゾーンにフォーシームを投げ込む。

この1球にパワプロのバットがピクリと反応するが、パワプロはバットを振らずに見送る。

(今の打ちにいつでも良かったかなあ？打てそうな気はしたんだけど。)

パワプロの打席の立ち位置はバッターボックスの内側のラインから一足分離れている。

その為なのか、ホームベースとバッターボックスの内側のラインの中間辺りのボールゾーンは、今のパワプロにとっては打てると判断出来るボールだった。

(もう1球同じところに来たら、ボール球でも打ちにいつちやおう。)

4球目、市大三高のキャッチャーはアウトコースに寄っていたが、真中が投げ込んだボールはインコースのボールゾーンへといつてしまった。

ボールが身体に当たらないと判断したパワプロは思いつきスイ

ングをする。

カキンッ！

高々と上がった打球は飛距離十分だが、ボールゾーンのボールを打ったからなのか、ライトポール際を飛んでいきホームランかファールの判断がつかない。

両チームの選手もスタンドの人達も打球の行方を見守る。  
すると…。

カーン！

甲高い金属音と共にパウプロが打った打球はグラウンドに跳ね返ってくる。

打球がライトポールに直撃したのだ。

審判がホームランをコールすると、パウプロは笑顔でベースを回り始めたのだった。

## 第184話★

春の東京神宮大会の準々決勝の青道と市大三高の試合は2回の表にパウプロが2打席連続のホームランとなるツーランホームランを打った事で6-0の点差となっていた。

一方でその頃、某ネット掲示板ではパウプロの連続ホームランに沸き返っていたのだった。



【怪物】パウプロを応援するスレ64【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

425：2打席連続ホームランきた——！！

429：ええ：

433：打撃が弱点とは何だったのか

436：ラスボスがレベルアップとかいい加減にしろ！www

440：アンチスレは必死に裏切り者ネタで盛り上がろうとしている模様www

445：440＜ブーイングは真っ直ぐ一球で黙らされたのになwww

451：てか春の選抜の時よりもまだ真っ直ぐが速くなってると

どういうこと？

457：451✓成長期なんやろ（白目）

463：東京神宮大会でパワプロが投げた2試合はコールドで肩が温存出来てよかったと思うけど

パワプロのピッチングが長く見れないジレンマw

470：463✓それなwww

474：今大会のパワプロの成績は今の所、投球回7、被安打0、奪三振18やな

478：474✓相変わらず奪三振率が異常やなあ…

487：1回戦の青道の相手なんてパワプロのボールにバットが当たっただけで喜んでたからなw

492：あの程度のボールに当たっただけで何を喜んでんねん！やる気あるんか！

495：492✓アンチは別スレやぞ

500：492✓お前は全ての高校野球部が強制坊主で勝利至上主義だとも思ってるんか？

503：ワイの母校は万年地区予選で2回戦の弱小やったけど強制坊主やったなあ…

507：ワイは強制坊主が嫌で受験する高校を選んだでw

510：坊主で連帯感やらチームワーク云々言われるけど、坊主頭よりもそれを強制して

罵倒してくるク○監督に対する不満で連帯感が高まるよな  
www

512：510〓よくわかるわあwww

515：510〓あれ？ワイ書き込んだっけ？www

518：510〓体育会系特有の縦社会による先輩のパシリも忘れ  
たらあかんで！

523：最初は気のいい先輩に見えても後輩の方が上手くなりそう  
になったら

途端に嫌がらせしてくるからなw

526：523〓ワイの部活の先輩がそうやったわw

531：お前らあるあるネタで盛り上がるなや！全部わかるけどw  
ww

539：お前らがあるあるネタで盛り上がってる間に2回の表が終  
わったけど9-0になったで

543：これは準々決勝もコールドやろうなあ…

547：パワプロが投げとつたらコールド確定やろうけど、違うか  
らまだわからんで

551：9-0いうても市大三高も東京地区の強豪校の1つやから  
な



556：高校野球やからな！ここから反撃して追い付けそうになる  
かもしれない！

561：なお逆転しそうになったらラスボスがマウンドに登場する  
模様w

567：高校野球なのに勝ち確と思えるのが異常だよなあ…



春の東京神宮大会の準々決勝、青道高校は市大三高を相手に14-4で5回コールド勝ちを決めた。

この試合のパワプロは4打数4安打2本塁打の活躍を見せ、球場に  
来た多くの人達に打者としても非凡であると認識される様になった  
のだった。

## 第185話

「さあ、帰るぞ、光聖。」

春の東京神宮大会の準々決勝で青道との試合に5回コールド負けした市大三高のエースである真中は、まだ俯いている天久に声を掛けた。

「…なんで、そんな顔をしてるんすか?」

絞り出す様に声を出した天久は悔しそうに拳を握り締めている。

「俺達、5回コールドをくらったんすよ?なんで笑ってるんすか!」  
「そうか、今の俺は笑えているのか。」

少し恥ずかしそうに言った真中に驚いた天久は、俯いていた顔を上げる。

目を赤く腫らした天久を見て、真中は苦笑いをしながら話し出す。

「光聖、悔しくないわけないだろ。でもな、それ以上に収穫があったんだ。」

「…収穫?」

「ああ、今日の試合、俺は青道に10点取られたが、俺のベストボールは打たれなかったんだ。クリス以外にはな。」

真中はスコアラーに借りていたスコアブックを開いて天久に渡す。

天久は食い入る様にスコアブックを見た。

「…ほんとおっすね。」

「コントロールさえ間違えなければ、俺のボールは青道相手にも通用する。つまり俺にはまだ成長の余地があるんだ。それがわかって嬉しくてな。」

そう言った真中は本当に嬉しそうに笑顔になった。

天久は悔しかった。

何も出来ずに負けて不貞腐れていた自分と違い、既に次を見ていた真中の心の強さに。

(これがエースか…くそっ!俺は何をやってるんだよ!)

両手で自分の頬を思いつき張り張った天久は勢い良く立ち上がる。

そして…。

「真中さん、早く帰って練習しましょう。」

「さっきまで泣いていた奴の台詞じゃないな。」

「な、泣いてないっすよ!」

真中と天久は負けた後とは思えない明るい雰囲気で歩きだす。

そんな二人をそつと見ていた田原は、嬉しそうに笑みを浮かべたのだった。



春の東京神宮大会の準決勝が行われる日、その日の午後には試合を予定している青道高校野球部のメンバーは、午前中に行われる稲城実業と明川学園の試合を見学する事にした。

だが…。

「あれ?成宮が先発じゃないの?」

パウプロが驚いて声を上げた通りに、稲城のエースである成宮は先発ではなく、ライトの守備についていた。

これにはパウプロだけでなく、成宮を知る青道メンバー全員が驚きの表情を見せていた。

「フーくん、成宮くんはこの大会、一度も先発してないよ。」

「そうなの、貴子ちゃん?」

「うん、投げて後半の2イニングぐらいで、それ以外はライトの守備についていたの。」

「へ〜。」

パウプロと貴子の会話に御幸が加わる。

「もしかしたら、鳴はケガをしたのかもしれないな。」

「成宮がケガ?一也、なんでそう思うんだ?」

「一つはここまで一度も先発をしていない事。そして、明川学園の楊が相手でも先発しない事だな。」

明川学園の楊は今大会において準決勝までの4試合全てで先発完投し、無失点を記録してきた。

そんな楊を相手にエースの成宮が投げないのはおかしいと御幸は話した。

「何よりも、後一つ勝てばパワプロと投げ合えるのに鳴が投げないとは考えられないからな。」

「春の選抜の時みたいにはバテない様に温存してるんじゃないの？」

「その可能性もあるけど、楊が相手なら1点勝負になりかねないのに、まだ温存するのはリスクが高過ぎるだろ？まあ…ケガ以外の理由で投げられない可能性もあるけどな…。」

そう言いながら御幸が外野で守備練習をする成宮に目を向けると、それにつられる様にパワプロと貴子も成宮に目を向ける。

成宮が先発しない謎が残ったまま、稲城と明川の試合が始まるのだった。

## 第186話

春の東京神宮大会の準決勝の稲城実業と明川学園の試合が始まった。

先攻は稲城実業だ。

1回の表のマウンドに明川学園のエースである楊が上がる。楊はロージンバグを手にしながらスタンドに目を向けた。

「葉輪、あと1回勝てば、またお前と投げ合える。」

そう呟いた楊は次に稲城ベンチに目を向けた。

「成宮、お前がどんな理由で投げないかはわからないが、容赦はしない。」

成宮と目が合った楊はロージンバグを置くと、成宮から目を切つて投球練習を開始した。



「…くそっ。」

「鳴、気にするな。」

「わかってるよ、雅さん。」

楊と目が合った成宮が悔しそうに愚痴を溢すと、稲城の正捕手である原田が宥めた。

「それで、状態はどうだ?」

「…雅さん、聞かなくてもわかってるでしょ?」

そう言う成宮は原田から目を逸らした。

成宮は春の選抜の準決勝でサヨナラ暴投をしてから、1週間程立ち直る事が出来なかった。

今では立ち直ったかに見えるが問題は残っている。

それは、成宮の投球フォームが崩れてしまっているのだ。

おそらくは精神的ショックによるものと考えられているが、現在でも投球フォームの改善は完璧ではなく、投球の際に以前の様なコントロールで投げる事が出来なくなっていた。

それでも成宮が稲城のエースである事は変わらないのだが、崩れた投球フォームによるピッチングでケガをするリスクを考えて、成宮の先発は回避されているのが稲城の現状だ。

「井口を信じろ。あいつも、鳴がいないければ稲城のエースになれる力はあるんだ。」

原田はそう言うのと、成宮の肩を軽く叩いてから仲間の応援に向かう。

そして…。

「わかってるよ、雅さん。でも、俺が投げたいって気持ちだけは、これからも絶対に変わらないよ。」

成宮はそう呟くと、3番バッターとして打席の準備をするのだった。



稲城と明川の試合は中盤までお互いのスコアボードに0を刻む投手戦となった。

しかし、内容は明川のエースである楊が一枚上手であった。

楊はランナーがいない状況ではツーシームを主体に打たせて取る省エネピッチングをしているが、ランナーが出るとオフシーズンで最速142kmにまで成長したフォーシームを中心に三振を奪うピッチングで稲城打線を振り伏せていった。

対して稲城先発の井口は原田の好リードとバックのファインプレーに助けられて何とか0に抑えているといった感じで余裕が無い。そんな試合の流れは5回の表の稲城の攻撃の時に変わった。

それまでランナーがいない状況では打たせて取るピッチングをしていた楊が、ランナーがいない状況でも振り伏せるピッチングをしてきたのである。

この楊のピッチングに5回の表の稲城打線の攻撃は三者連続三振で抑えられてしまった。

これで流れが明川に行ったのか、5回の裏の明川学園はワンアウト

ト、満塁の状況を作り上げる事が出来た。

そして、打席には5番打者の楊。

稲城はタイムを取り、内野陣がマウンドに集まる。

「すまん、皆。」

「気にするな、井口。」

ピンチを招いて謝罪をする井口に原田はそう声を掛ける。

(鳴に任せたい場面だが…監督はどう判断する?)

原田がベンチに目を向けるが、稲城の監督である国友は動かなかった。

(監督は井口に続投をさせると判断したか…)

春の選抜の準決勝で満塁の状況で暴投をした成宮が、万が一この場で抑えに失敗した時、長期的なスランプやイッパスになると国友は考えた。

成宮にとっていずれは乗り越えなければならぬ試練だが、今は時期尚早と判断したのだ。

この国友の判断をなんとなくだが察した成宮は不満な態度を隠そうともしない。

そんな成宮の姿を原田はチラリと見たが、直ぐに井口に目を戻した。

「満塁だがしつかりと、いつも通りに行くぞ！」

「…応！」

原田の檄で内野陣が守備位置に戻り試合は再開される。

(バッターとしての楊は読みで打ってくる…。その楊の読みを俺が読み切れるかが勝負だ。)

初球、原田は様子見でアウトコースのボール球となるスライダーを要求した。

この1球に楊は反応を見せない。

(外してくると読まれていたか…)

満塁である状況を考えてとボールカウントを先行させたくない。

次の1球でストライクを取れるかが勝負の分かれ目だと原田は判断した。

(井口にはコースギリギリを狙って投げ込めるコントロールは無い。ならば、多少甘くても力で押し込める全力のストリートだ！)

2球目、原田は井口に全力のストレートを要求した。

このサインに井口は頷いて投球モーションに入る。

「シュツ！」

井口は口癖の掛け声と共に、目一杯腕を振ってストレートを投げ込んだ。

しかし、初球を見送った楊はこの1球を読んでいた。

楊はコンパクトなスイングで、井口が投げ込んだボールの軌道にバットを出していく。

キンツ！

打球はややライナー性でショートの前白川の頭を超えて左中間へと飛んだ。

この打球にセンターのカルロスが落下点に全力で走る。

後ろに逸らすリスクを負ってダイビングキャッチをするつもりなのだ。

カルロスの動きを見たレフトの成宮はカバーに入る。

(カルロス…頼む！)

原田がマスクを外して祈る様に見詰める中でカルロスが打球に飛び付いた。

結果は…？

「回れ——！！」

明川学園の3塁コーチャーが大声と共に腕を回して2塁ランナーもホームに向かわせる。

楊の打球は左中間へのヒットになったのだ。

カルロスが捕球出来なかったボールをカバーに入った成宮が、2点目を阻止する為に素早くバックホームをする。

しかし…。

「セーフ！」

ホームでのクロスプレーに主審はセーフの判定を出した。

この結果にマウンドに立つ井口は両手を膝について項垂れたの



だった。



その後の稲城は追加点は防ぎ、7回の裏から成宮が登板して力の投球で味方を鼓舞したものの、稲城打線は9回の表に原田が意地で打ったソロホームランによる1点しか楊から奪えなかった。

こうして稲城実業と明川学園の試合は、2―1で明川学園が勝利したのだった。

## 第187話

春の東京神宮大会の準決勝で明川学園が稲城実業に勝利した日の午後、準決勝第2試合を行った青道高校は、パウプロが先発をして7回コールドで決勝戦へと駒を進めた。

そして1週間後、春の東京神宮大会の決勝戦となる青道高校と明川学園の試合が始まるのだった。



決勝戦では俺が先発として楊と投げ合う事になった。

準決勝で成宮はリリーフしたけど、本当にケガをしたのかな？

まあ、今日の決勝戦の相手は稲城実業じゃなくて明川学園なんだから、そっちに集中しよう。

「パウプロ、いいぞー！」

おっと、一也の準備が出来たみたいだからキャッチボールをして肩を作ろう。

今日の決勝戦でマスクを被るのは一也だ。

クリスさんは今日の天気は雨のせいなのか肩に違和感を感じたらしい。

なので片岡さんに申告してスタメンを回避したそうだ。

残念そうにしていたクリスさんだけど、これから先も付き合っていないかなきゃならない事だからと、苦笑いをしながらも受け入れていた。

クリスさんは大人だなあ。

さて、キャッチボールで肩も出来てきたから少し力を入れて投げるか。

俺が力を入れて投げると、一也のミットがいい音を鳴らす。

「パウプロ、ナイスボール！」

雨がパラパラと降ってきたけど、今のところはピッチングに影響は無いな。

リリースの特殊能力を持っているからか、ボールが濡れても問題無

く投げられるからな。

まあ、マウンドで踏み込んだ時に足が滑らない様に気を付けよう。

「一也、カーブいくぞー！」

「おうー！」

そんなこんなで小雨が降ってきている中で、俺は一也と一緒に試合前の練習をしていったのだった。



「降ってきたか。」

雨が降る空を見上げて呟いた楊は、試合前の練習をしているパウプロに目を移す。

「今日の試合は、この雨の中でどれだけボールのキレとコントロールを維持出来るかの勝負になるな。」

楊は雨を吸って状態が変わり始めてきたグラウンドの土の感触をスパイクで確かめていく。

「投げ急がず、一球一球を丁寧にいこう。」

そう呟いた楊は力強くバットを振る青道の打者達を見て闘志を燃やしたのだった。



青道と明川学園による決勝戦が始まった。

先攻は俺達だ。

1回の表、1番バッターの倉持が左打席に入った。

準々決勝では俺が1番バッターだったけど、今日の俺は先発ピッチャーだからピッチングに専念するために9番バッターなんだってさ。

左打席に入った倉持なんだけど、倉持は楊のフロントドアのツーシームで見逃し三振に抑えられた。

電光掲示板には135kmって表示されている。

秋の時に比べてフォーシームだけじゃなくて、ツーシームも球速が上がつているなあ。

倉持を見逃し三振に抑えてリズムに乗ったのか、楊は1回の表を三者凡退で抑えた。

よし、俺の出番だ！

俺はグローブを手にしてベンチから出る。

「ブーくん、頑張ってるよ。」

「うん、行ってくるよ、貴子ちゃん。」

貴子ちゃんの応援で気合い満タンだ！

今日の試合も楽しんでいくぜ！



「楊 舜臣か…元々コントロールが良くいいピッチャーだったが、140km台のボールを投げられる様になって1つブレイクスルーを果たした感じがあるな。」

雨合羽を着てスタンドで試合を見ている落合は楊をそう評する。

「カーブとフォークも厄介だが、一番の問題はあのツーシームだな。あれをどうにかしないと中々点を入れることは出来ないだろうな。」

落合は顎髭を扱きながらマウンドに上がったパワプロに目を移す。

「さて、雨の日の葉輪の試合は初めて見るが、どういったピッチングをするのかな？」

青道高校は雨の日でも練習をするが、室内練習場もあるので雨の中で練習する事は、他の強豪校に比べれば少ないだろう。

その事がこの試合にどう影響するのか、落合の興味はそこにあった。

「青道のコーチで飯を食っている以上は葉輪の勝利を願うが、少しはピッチングが乱れて高校生らしい可愛気があるのを見たいというのはワガママなんだろうな。」

そう呟いた落合は自身を戒める様に片手で頬を叩くと、試合の見学に集中するのだった。

## 第188話

春の東京神宮大会の決勝戦はあいにくの雨だった。

1回の裏のマウンドに上がった俺はスパイクでマウンドの感触を確かめる。

(うん、まだ滑ったりはしなさそうだな。)

イニング間の投球練習を終えると、明川学園の1番バッターが打席に入る。

「雨の日の登板はリトルの時以来だけど、楽しんでいくぜ！」

俺は一也のサインに頷いて、思いつきり楽しみながらボールを投げ込んでいったのだった。

◆ 3回終了まで両チームとも無得点の展開が続くと、4回の始まりに雨が強くなった事で試合が中断となる。

その中断の間にパウプロはアンダーシャツを交換していた。

「パウプロ、マウンドの状態はどうだ？」

アンダーシャツを交換しているパウプロに御幸が声を掛けると、パウプロは苦笑いをしながら答えた。

「ちよつと投げにくい。踏み込んだ時に何度か滑りそうになった。」

「時間を掛けてもいいから、足場はしっかりと作れよ。」

「おう！」

パウプロと御幸が会話をしていると、アンダーシャツの交換を終えたパウプロに、貴子が上着を持ってくる。

「フーくん、肩を冷やさないようにね。」

「うん、ありがとう、貴子ちゃん。」

◆ パウプロのお礼の言葉に貴子はニッコリと微笑んだのだった。

雨の勢いが弱まって4回の表から試合が再開されると、明川学園のエースである楊は先頭打者の小湊にボール球を3つ続ける投球をした。

一見すると中断により調子を崩したかのように見えるが、楊はボール球を使つて自身の状態を確かめていたのだ。

（肩は問題ない。しかし、リリースの感覚がしっくりこないせいとか、細かいコントロールが利かないな……。一度、強く腕を振っておきたい。）  
雨天中断から再開された4回の表の最初の打者を、楊は1つもストライクを取れずに歩かせてしまったが、これは再開前に予め明川学園の仲間達に話していた事なので、守備についている明川学園のメンバーに動揺はなかった。

続く青道の3番打者は送りバントで小湊を2塁へと進めてワンアウト、ランナー2塁の状況で青道のバッターは、今日の試合で4番に入っている結城だ。

楊は迷わず結城を歩かせた。

そしてワンアウト、ランナー1、2塁の状況で5番バッターの増子が打席に入ると、楊はインコースのツーシームで2塁フォースアウトのショートゴロに抑えた。

これで状況はツーアウト、ランナー1、3塁となり、バッターは6番の御幸だ。

チャンスに強い御幸が打席に入ると、スタンドからは大きな歓声が上がった。

だが、楊は御幸を歩かせて満塁の状況にすると、次の7番バッターと勝負をして無失点で4回の表を切り抜けたのだった。



「くっそ、勝負しろよ、ピッチャー！」

スタンドで頭を抱えながらそう吠えるのは沢村である。

「栄純、敬遠だって立派な作戦なのよ。」

「でも、逃げるなんて卑怯だろ！」

「あのねえ、敬遠はルール違反じゃないの。それで卑怯なんて言ってもただのワガママじゃない。」

「うぐっ!？」

若菜の言葉に沢村が呻くと、近くにいた小湊 春市がクスリと笑う。

「ねえ、東条。5番バッターの先輩が打ち取られたボールって何？少しだけ動いた様に見えたけど。」

「スタンドからじゃよくわかんねえけど、多分ツーシームだと思う。」

「ツーシーム？」

「後で握りを教えてやるよ。」

「うん、ありがとう。」

試合を見て感じた疑問を素直に聞いた降谷に、隣にいる東条が答える。

その様子を高島は微笑みながら見ている。

（素直に聞くことが出来るのは降谷くんの美点ね。東条くんも降谷くんに教える事で、自分が持つ技術と知識の再確認をして成長出来れば最高だわ。）

高島は雨が降る空を見上げると表情を曇らせる。

（雨、試合の中断、チャンスを逃す…試合の流れを失う要素が揃っているけれど…大丈夫かしら？）

不安を感じた高島がマウンドに目を向けると、そこには笑顔でインング間の投球練習をするパウプロの姿があった。

（頑張っつてね、葉輪くん。雨にも野次にも負けない笑顔の貴方が、なによりも頼もしいわ。）

パウプロがインング間の投球練習を終えて4回の裏が始まると、雨足がまた強くなってきたのだった。

## 第189話★

「また雨が強くなってきたなあ。雨天コートになったりするのかな？」

春の東京神宮大会の決勝戦の4回の裏、俺がマウンドに上がるとまた雨が強くなってきた。

俺はインニング間の投球練習をしながらマウンドの感触を確かめる。(リリースは問題ないけど、また足元が滑りそうだなあ…。まあ、そんな状態で投げるのも楽しいけどね。)

インニング間の投球練習が終わると、明川学園の4番バッターが打席に入った。

一也のサインは：アウトハイへのボールゾーンにフォーシームか。試合が中断したのを気にしているのかな？

俺は一也の要求通りに初球を投げる。

明川学園の4番バッターはつられたのか、アウトハイのボール球に手を出して空振りをした。

ラッキー♪

2球目はつと：インローにチェンジアップね。

了解！

俺は一也のサインに頷いて投球モーションに入る。

そして右足を踏みこんでボールをリリースする瞬間…：足が滑った。うげっ!?

リリースする瞬間に足が滑った事で、ボールのコントロールが乱れた。

ボールは：真ん中やや低めの甘いコースに。

明川学園の打者は4番だ。

そんな甘いコースを見逃す筈もなく…。

カキンッ!

打球が左中間に飛んで、フェンス直撃となるツーベースヒットになった。

明川学園の4番バッターが2塁ベースの上でガッツポーズをして



る。

ノーアウト、ランナー2塁で次のバッターは楊。

うん、燃える状況だ。

楽しくなってきた。

俺は久しぶりにピンチの状況を迎えたのに、マウンドで笑顔になったのだった。



パワプロがノーアウトで2塁にランナーを背負った時、某ネット掲示板では大騒ぎになっていた。



【オールドスタイル】アンチパワプロスレ41【裏切り者】

1:このスレはパワプロこと葉輪 風路のアンチスレです

応援スレは別にありますので応援者はそちらに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

125:キタ——!!

129:ノーアウトでランナー2塁!送りバントは確実に決めろよ!

133:というか5番バッターと勝負するんか?この眼鏡つて打率いいんやろ?

138:この大会では4割近く打つとる!送りバントやなくても期待できるで!

145：足滑って失投w w wざまあw w w

w  
149：もう少しでホームランやったんやけどなw w wざまあw w

155：打たれて笑つとるなんてパワプロはやっぱり最低やな

158：へいへいピッチャー！逃げんなよ！w w w

w w w  
166：キャッチャー座ったままw w w常識もしらんのかこいつら

たでw w w  
171：キャッチャーがタイムを取って間もとらんとかw w w勝つ

173：171∨フラグやめえや！

176：眼鏡！初球から狙っていけよ！失投の後やからボールを置  
きにくるで！

184：パワプロの初球は…154km!?

188：おい！スピードガン盛るなや！

191：大丈夫や！眼鏡はインハイの真っ直ぐにつられて手を出し  
てへんぞ！

194：今のがストライクやと？審判！臍尻すんなや！

197：2球目は…えっと、バックドアのスライダー…だよな？

207：おい審判！ボール調べるや！あんなんズルしとるに決まってるやろ！

211：この審判ストライクゾーン広過ぎい！

215：眼鏡ナイスタイムや！雨でマウンドがグツチャグチャになるまで時間稼げや！

219：おいパワプロ！なにタイムを取って足場を均してんねん！卑怯やぞ！

223：3球目は：インローの真っ直ぐを空振り三振かあ…

231：何を空振りしとんねん！このグラウンド状況なら転がせば何か起きるやろ！当てにいかんかい！

235：ほんまに使えんやつや！

237：また154kmやて？スピードガン故障しとるぞ！

243：打てへんのなら送らんかい！勝つ気があるんか！

250：球場の俺ら！ブーイングはどうしたんや!?!何を黙つとんねん！

255：頼むから打ってクレメ〇ス！

260：次のバッターも154km連発で三球三振ってどうなつとんねん！

263：260▽プロテイン：ですかねえ…？

270：なんで送らんのや!?ワンヒットで確実に点を取れる状況を作るのが先やろうが！

276：せめてバントの構えだけでも見せて揺さぶらんかい！

327：ノーアウト、ランナー2塁のチャンスが三者連続三振で終わってもうた…

333：もうダメだ…おしまいだあ…



4回の裏のピンチを切り抜けた青道は、続く5回の表に楊が雨の影響で投じた失投をパウプロがソロホームランにして待望の一点を先制した。

その後、7回終了までパウプロがランナーを一人も出さずに抑える  
と雨天コールドとなり、青道高校が1-0で明川学園に勝利して春の  
東京神宮大会を制したのだった。

## 第190話

春の東京神宮大会の決勝戦は1-0の雨天コールドで俺達、青道高校が勝利して優勝したぜ！

それはそれとして見事なまでに雨がどしや降りである。

俺は特殊能力のおかげで風邪はひかないけど、貴子ちゃんや皆はそうはいかないからな。

早く帰ろう。

そんなこんなで帰りの準備をしていると、楊がこっちのベンチにやって来た。

「雨天で試合が途中で終わったのは残念だったが、今の俺に出来るベストの投球が出来た。悔いが無いと言えば嘘になるが、まだ成長出来ると実感したいいい試合だった。」

そう言う楊はずぶ濡れだ。

大丈夫か？風邪ひくぞ。

「あの失投は？」

「リリースの瞬間にボールが滑った。足元は気にしていたんだが、無意識に投げ急いだのか、ロージンバッグをあまり使わなかった俺のミスだ。」

俺みたいに足元が滑ってなかったのにすつぽ抜けたボールが来たのはそういう事だったのか。

「楊、もう一つ聞いていいかな？」

「ああ。」

「亮さんと哲さん…うちの2番バッターと4番バッターだけ妙にストライクゾーンギリギリのボールが多かった様に見えたんだけど…？」

俺がそう問い掛けると、楊はニヤリと笑った。

「あの二人はボール球は振らない。逆に言えば葉輪の様に多少ボール球でも振ってくる怖さが無いんだ。だから歩かせても構わないと割りきってギリギリを狙って投げ込めたんだ。」

楊の言う通りに、オフシーズンの時にバッティングピッチャーをやった時は、ギリギリのボール球でも亮さんと哲さんは見逃してた

なあ。

「今回は負けてしまったが、夏にリベンジさせてもらおうぞ。」

「おう！また投げ合おうぜ！」

俺がサムズアップして応えると、楊は笑顔で戻っていった。

風邪ひくなよ。

「怖さが無いか…。」

「歩かせるのを気にしない投手相手には、少しぐらいのボール球は打ちにいった方が嫌がらせになるかな？」

「だが、それでスイングを崩したら意味が無い。」

なんか哲さんと亮さんがバッティング談義を始めた。

こうなると長いんだよね。

まあ、二人共着替えているみたいだし、貴子ちゃんも待ってるから先に行こう。

お疲れ様でしたー！



時間はパワプロが足を滑らせて失投した後に三者連続三振をしたところまで遡る。

この日、雨にもかかわらずスタンドには稲城実業野球部のメンバーの姿があった。

そのメンバーの一人がパワプロが三者連続三振をすると傘を片手に球場を後にしようとする。

その人物は稲城のエースである成宮だった。

「成宮、もういいのか？」

「雅さん、あいつが失投をしても崩れないのに、俺がいつまでも投球フォームを崩してるわけにはいかないでしょ。帰って練習するよ。」

そう言って成宮が歩き出すと、その後にカルロスや白河といった成宮が声を掛けて稲城に集まったメンバーが続いていく。

そんな成宮の後ろ姿を見た原田は嬉しそうに微笑んだ。

これで俺達のエースはもう大丈夫だと。

原田は早足で成宮の横に並ぶ。

「今日は一日雨だ。肩を冷やさない様につけろよ。」

「わかってるよ。ケガをしてあいつと投げ合えないなんてバカらしいからね。」

そう答える成宮の背中は、春の甲子園の時よりも一回り成長した様に見えたのだった。

## 第191話

春の東京神宮大会が終わり、今度は春季関東大会が始まった。

青道は順調に勝ち進んでいったんだけど、残念ながら明川学園は2回戦で負けてしまった。

原因は楊が指の豆を潰してまともに投げられなかったからみたいだ。

この結果を見て貴子ちゃんや一也、そしてクリスさんまで俺にも気を付けろと言ってきた。

俺は特殊能力のおかげで問題無いんだけどね。

そんな感じの一幕があったけど、青道高校は春季関東大会を勝ち抜いて優勝する事が出来た。

それとこの大会では投打に渡って純さんが大活躍した。

第2先発の投手として、先発していない試合は3番打者で中堅手として、出場していた。

打率は3割台でホームランも一本打って落合さんが驚く活躍だったぜ！

まあ、打撃成績でいえばもっと凄い人達もいるんだけどね。

クリスさん、哲さん、亮さんは打率5割台だし、しかもクリスさんは出場した全部の試合でホームランを打ってるし：あんなに簡単にホームランって打てるものだったっけ？って感じた。

そのせいと言うわけでもないけど、最近のクリスさんは多くのスカウトに声を掛けられているようだ。

もっとも、元プロのアニマルさんが代理人を雇っているらしいから、クリスさんは練習に集中出来ているみたいだね。

哲さん、亮さんは苦笑いをしながらスカウトの人の相手をしているな。

頑張れ！哲さん、亮さん！

しかし、アメリカに行くって明言しているのに、今でも俺の所にスカウトの人が来るのはどうにかならないのだろうか？

礼ちゃんが動いてくれて、青道高校を通していないスカウトの人は



相手をしなくていい様になつてはいるんだけど、それでも関係無く飯に誘おうとするスカウトの人もいるからなあ…。

それで断れば付き合いが悪いだの年長者に対して云々つて文句を言ってくるんだから面倒である。

…。これ思春期の普通の高校生だと、精神的に色々と疲れるだろうなあ。

まあ、俺は全く気にしないけどね。

さて、そんな事よりも今日はロス・ロジャーズのスカウトのベックとの話し合いがあるんだ。

なので俺は貴子ちゃんと一緒に制服で来賓室に向かうのだった。



『パワプロ、簡潔に言えば、君をロス・ロジャーズのトライアウトに招待したい。』

英語でそう言ってくるベックは素敵なスマイルだ。

『ベック、招待ってどんな感じなの？』

『詳しいことは後で君のご両親に資料を渡すけど、航空券と滞在先のホテルの手配なんかをこちらでやらせてもらう形だね。もちろん、貴子の分も手配させてもらうよ。』

『ありがとう、ベック。』

『パスポートだけは自分達で用意してくれよ、ハッハッハッ！』

ベックの明るい笑い声が来賓室に響く。

俺と貴子ちゃんもつられるように笑顔だ。

『さて、何か質問はあるかい？』

『1つだけあるんだけどいいかな？』

『なんだい、パワプロ？』

『もう1人、トライアウトに招待する事は出来ないかな？』

俺の言葉にベックは顎に手を当てながら首を傾げる。

『僕の権限でそれは可能だけど…誰を招待してもらいたいんだい？』

「一也、御幸 一也だよ。」

「御幸？それは、あの眼鏡を掛けたキャッチャーかい？」

「うん、そうだよ。」

「ふむ、御幸と話をするのもアポイントメントは必要かな？」

ベックがそう言うのと、通訳の人がその事を礼ちゃんに話す。

礼ちゃんはベックに笑顔を向けると来賓室を出ていった。

そして十五分ぐらい経つと、一也と一緒に来賓室に戻ってきた。

「初めまして、僕はロス・ロジャーズのスカウトのベックだよ。」

「は、はい！俺は御幸 一也です！」

「おや？君も英語を話せるのかい？」

「はい！パワプロ：葉輪 風路と一緒に勉強しています！」

「それは素晴らしい！ああ、そんなに固くならずにも通りでいいよ。礼儀正しいのは日本人の美点だけど、キャッチャーの君がリードまで礼儀正しかったら困るからね。」

ベックがそう言って笑うと、一也もつられるように笑った。

「さて早速だけど、一也、君もロス・ロジャーズのトライアウトに挑戦するという事でいいかな？」

「はい！」

「それじゃあ、君とパワプロ、そして貴子を招待する。トライアウトに合格する事を祈っているよ。君達が合格すれば僕の給料もあがるからね、ハッハッハッ！」

こうして俺と一也はロス・ロジャーズのトライアウトに招待される事が決まった。

俺達はベックと握手をして来賓室を後にすると、笑顔で練習に向かうのだった。

よっしゃ！

今日も楽しんで練習をするぜ！

## 第192話

春季関東大会が終わり、青道高校は夏の大会に向けて練習を開始した。

まず行われたのは紅白戦だった。

組み合わせは1年生チーム対2、3年生混合の2軍チームだ。

1年生の先発は降谷。

対して2軍チームの先発は丹波さんだ。

丹波さんは春季大会で第2先発になれなかった事を悔しく思っていて、それで紅白戦への参加を志願したらしい。

紅白戦の先攻は2軍チームからだ。

降谷はワインドアップの投球モーションに入るとフォーシームを投げ込んだ。

すると…。

「か、片岡監督!?!大丈夫ですか!?!」

1年生チームのキャッチャーが降谷のフォーシームを捕る事が出来ず、主審をしていた片岡さんのマスクを被る顔に直撃した。

リトルの時、俺も監督の顔にぶつけたなあ…。

「降谷、明日から2軍に合流しろ。」

どうやら降谷はあの1球で2軍行きが決定したらしい。

後で落合さんに聞いた話だけど、球威は1軍でも通用するけどコントロールに課題が残るとの事。

あれでも体力測定の際に比べれば少しだけコントロールが良くなったんだけどね…。

それと、まだ身体が出来ておらず、ケアに対する意識も低い今の状況でピッチングを続けるとケガに繋がる可能性が高いそうだ。

そしてケガをした後に無理をした結果、ケガが癖になった選手を多く見てきたそうだ。

なので、降谷は2軍で身体作りを中心にじっくりと育てていくそうだ。

頑張れよ、降谷!

さて、降谷が1球で降板した事で急遽登板したのは東条である。でも、強豪の松方シニアでエースだった東条は急な登板でも落ちついていた。

「ただ…。」

「東条！後ろを信じて打たせていけー！ストライクが入ってないぞ！ボス！俺はいつでもいけますよ！」

こんな沢村の声が飛んでしまう程に、東条は2軍チームの先頭バッターに対してボール球を続けた。

沢村、多分だけど、東条はわざとボール球を投げてるぞ。

まあ、紅白戦だから肩を作る時間はもらえても、気持ちまで作る時間はなかったからな。

だから東条はマウンドで強く腕を振って色々と準備をしてるんだろうな。

俺の予想が当たったのか、東条は2番バッターからはしつかりとピッチングをしていった。

ノーアウトでランナーを出したせいにか1失点はしてしまったものの、東条は落ちついて初回をその1失点だけで切り抜けてみせた。

1回の裏の1年生チームの先頭バッターは亮さんの弟くんだ。

弟くんは初打席で丹波さんのフォーシームをファールにしてみせたけど、丹波さんのナックルカーブにはまだ対処出来ないようで空振り三振に抑えられていた。

丹波さんは弟くんを空振りに抑えた勢いのまま、初回の1年生チーム打線を三者三振に抑えた。

紅白戦は進んで3回終了時点で東条は4失点、丹波さんは無安打無失点で降板した。

「どうやら東条は明日から2軍の練習に合流するようだな。」

東条が降板して4回の表のマウンドに上がったのは沢村だ。

「わはは！待ってました！」

左肩をグルグルと回して片岡さんに好調をアピールしている。

好調をアピールしているのはいいんだけど、少しはムービングボールを制御出来る様になったのか？

そんな俺の心配をよそに、沢村は打たせて取るピッチングをして4回の表は無失点で抑えた。

4回の裏の2軍チームのマウンドには2軍の2年生が登板した。あいつは：名前なんていったつけ？

後で貴子ちゃんに聞いておこう。

2軍のピッチャーは4回の裏の先頭バッターとして打席に入った亮さんの弟くんにはヒットを打たれた。

うん、ナイスヒット。

続く1年生打者が送りバントをしようとする、主審をしている片岡さんがそのバッターに何かを言ってヒッティングをさせた。

まあ、紅白戦だしね。

もつと積極的にバットを振っていきこうって事だろうな。

片岡さんの言葉のおかげなのか、1年生の2番バッターも続けてヒットを打った。

弟くんの好走塁もあってノーアウト、ランナー1、3塁になった。2軍チームのキャッチャーをしている小野がタイムを取ってマウンドに向かった。

うん？なんか2軍ピッチャーの動きが固いな。

一緒に紅白戦を見ている一也曰く、普通はピンチの場面を迎えたらあんな風に緊張するそうさ。

そうなの？

俺が首を傾げると、一也は苦笑いをした。

小野の声掛けが良かったのか、次の3番打者はセカンドフライに抑えた。

でも、次の4番打者に入っている東条と同じ松方シニア出身の金丸に、タイムリーツーベースヒットを打たれて2失点をしてしまった。

フォーシームに躊躇なくバットを振り抜いたなあ。

ナイスバッティング！

4回の裏の2軍チームは金丸のタイムリーツーベースヒットにより2失点をしてしまうが、後続は抑えて5回の表に沢村の攻略を狙う。

沢村はムービングボールをどんどんストライクゾーンに投げ込んでいった。

不運なポテンヒットが続いて満塁になったけど、沢村は5回の表も無失点で切り抜けた。

そして紅白戦の最終回となる6回の表の沢村なんだけど、沢村は6回の表だけで3失点してしまった。

理由は打球の速さに野手が対応出来なかったからだ。

そして紅白戦は2軍チームの勝利で終わった。

1年生チームの多くの者がこの結果に項垂れたけど、沢村は元気に1年生チームの仲間に声を掛けていた。

うん、野球を楽しんでいいね！

それで沢村なんだけど、沢村も明日から2軍の練習に合流するみたいだ。

でも片岡さんは沢村にこれからも続けてタイヤを牽いて走れだつてさ。

ピッチャーの事を覚えていくのは身体が出来てからと話を聞くと、沢村は紅白戦が終わった後に元気に声を出しながらタイヤを牽いて走りだした。

その沢村につられる様に他の1年生も走り出すと、2年生や3年生も負けられないとばかりに練習時間が終わっても残って練習をしていったのだった。

ちなみに、金丸と亮さんの弟くんも2軍の練習に合流するってさ。

来週には1軍と3軍、そして1軍と2軍のダブルヘッダーでの紅白戦だ！

よっしゃ！やってやるぜ！

## 第193話

1年生と2軍の紅白戦から1週間が経って1軍と3軍、1軍と2軍の紅白戦が行われる日がやって来た。

午前中に1戦目となる1軍と3軍の紅白戦、そして午後には2戦目となる1軍と2軍の紅白戦が行われる予定だ。

俺は1戦目はレフトで、2戦目は先発投手として出場するぜ！

1戦目の1軍投手は3イニング交代で純さん、ノリ、丹波さんの順番で投げるみたいだ。

3軍との紅白戦の結果は順当……って言えばいいのかな？

1軍投手陣はヒットは打たれたものの失点はせずに完封リレーで3軍に勝利したぜ！

片岡さんや落合さんへのアピールの場って事もあって3軍チームは気合い十分だったんだけど、純さんと丹波さんも先発争いをしていて、ノリも東条や沢村に負けないうって気合いが入っていたからなあ……。

さて、2戦目の2軍との紅白戦なんだけど、この紅白戦はちよつと変則的になる。

簡単に言うとピッチャーだけ1軍と2軍で交換をして紅白戦をするのだ。

つまり、俺が2軍チームのマウンドに立って、東条、沢村、降谷が1軍チームのマウンドに立って感じだな。

この事を聞いて沢村はこのままエースに意気込んでいるし、降谷は一也が受けてくれるからと嬉しそうだ。

東条は少し緊張してるのかな？

一也、ちゃんと緊張を解してやれよ。

まあ、そんな感じで今日2試合目の紅白戦が始まるのだった。



「さて、わかっていると思うが、お前達が打ち崩さなければならぬ相手

「はあの葉輪だ。」

今回の紅白戦で1軍チームの指揮を取る落合がメンバーに声を掛けると、1軍チームのメンバーの表情が引き締まる。

「真っ直ぐが速い投手、コントロールがいい投手、変化球が凄い投手、レベルが高くなった昨今の高校野球ではそれらのどれかを持った投手ってのは珍しい事じゃない。だが、それら全てを兼ね備えた怪物投手となると話は違う。正直に言って葉輪は十年に一人の逸材だ。」

落合に言われるまでもなく青道高校野球部にいる者達はパワプロの凄さを実感している。

だからこそ、1軍メンバー達はこの紅白戦にやりがいを感じていた。

「この中には甲子園で活躍した奴もいる。だが、もしかしたら今日の紅白戦でその甲子園での活躍を忘れる程に心を折られるかもしれない。お前達にはその覚悟があるか?」

「「はー」」

まるで公式戦の様な緊張感を漂わせる1軍メンバーに、沢村は身を震わせたのだった。



1軍と2軍の紅白戦が始まった。

先攻は2軍チームだ。

1軍チームの先発マウンドには沢村が上がった。

2軍チームを指揮する片岡さん曰く、硬式野球経験の少ない沢村を後ろに回すのはリスクが高いそうだ。

降谷はそもそも試合経験自体が少ないんだけど、沢村や東条との球速差を活かすにはリリーフに回した方がいいそうだ。

まあ、降谷は天然さんだから緊張とかはしなさそうだな。

そういうわけで先発をした沢村んだけど、沢村は2軍チームの先頭バッターである亮さんの弟くんを歩かせてしまった。

弟くんが沢村のムービングボールをファールで粘ったつてのもあ



るけど、まだ体力測定の変えた新しい投球フォームで投げ慣れていないみたいだな。

あ、クリスさんがタイムを取ってマウンドに行った。  
何をアドバイスしているのかな？

なんか沢村が高笑いをしてど真ん中に投げて打たせていくからよろしくって叫んでる。

向こうのベンチにいる落合さんはそれを見て頭を抱えているな。

2軍チームの2番バッターは沢村に取らせる様にセーフテイバン  
トをした。

沢村はバント処理に慣れていないのかオールセーフになった。

マウンドで頭を抱えて叫んでる沢村に、倉持と亮さんがなんか言ってる。

3番バッターはヒッティングにいったんだけど、沢村のムービング  
ボールを引っかけてショートゴロのゲッツーに抑えられてしまった。

これでツーアウト3塁、バッターは2軍チームの4番だ。

クリスさんがタイムを取らずにそのままミットを構えると、沢村が  
笑顔になった。

うん、燃える展開だもんな。

笑顔になる気持ちはよくわかる。

沢村がムービングボールではなくフォーシームを投げ込むと、4番  
バッターは差し込まれた様な形でファーストフライに打ち取られた。

初回でいきなりのピンチを無失点で切り抜けた沢村は、1軍メン  
バー達にナイスピッチングと祝福されると笑顔でベンチに戻って  
いったのだった。

## 第194話

1軍と2軍の紅白戦は1回の裏へと進んだ。

2軍チームのマウンドにパワープロが上がると、守備についている2軍チームは安心感に、パワープロを打ち崩そうとする1軍チームは緊張感に包まれた。

1軍チームの先頭バッターである倉持が右打席に入ると、1軍チームの指揮を取る落合は目を細めた。

(左投手に対して右打席に入るのはスイッチヒッターのセオリー通りだが、倉持の打撃技術と足の速さを考えると、左に入った方が無難なんだがな…。)

一度は倉持に左打者への転向を促した落合だが、今も倉持のスイッチヒッターへの挑戦を否定しているわけではない。

倉持のスイッチヒッターへの挑戦を受け入れたからこそ、状況によつて打席を選ぶ柔軟な対応を取れる様になってもらいたいのだ。

一時期、プロとアマの間でスイッチヒッターが流行ったが、現在ではスイッチヒッターは減少の傾向にある。

これは極端な言い方だが、スイッチヒッターは他のバッターの二倍バットを振らなければならぬからだ。

もちろんレギュラーを狙うならば打撃だけでなくその他の練習も必要である。

そのためスイッチヒッターとしてやっていくのならばそれだけ多くの練習をして、その練習でケガをしない様にしっかりとケアをしていかなければならないのだ。

右打席に入った倉持に対してパワープロは初球にカーブを投げ込んだ。

コースは真ん中高め、倉持の頭を超える高さから一気にインローへと向かって変化していく。

2軍チームのキャッチャーである小野がボールをキャッチングすると、紅白戦で主審をしている青道野球部の部員がストライクをコールした。

（球種がわかっていても打てそうにないボールを投げる高校生か…見ている分には面白いが、葉輪を打ち崩さなければならぬ相手にとつては悪夢だろうな。）

顎髭を扱きながら落合が見ていると、倉持は2球目のパウプロのフォーシームに対してセーフティバントの構えをみせる。

パウプロは反応よくチャージをかけたが、倉持はバットを引いてボールを見送る。

主審の判定はストライクで、カウントはノーボール、ツーストライクとなった。

（ピッチングは文句無しの怪物で、フィールディングもよく、バッティングもいい。しかも、どんな場面でも動じない心の強さも持っている。とあっては、攻略のビジョンが全く見えんな。）

紅白戦ではあるが勝負は勝負。

落合は1軍チームを指揮する者として勝ちにいこうとしているが、パウプロが打ち崩される場面が欠片も想像出来なかった。

（正直、クリスや結城にホームランを期待するしかないんだが…。それも難しいだろうな。）

オフシーズンにパウプロが打撃投手をした時のことなのだが、力を抑えた投球のパウプロ相手から3割を超える打率を残せたのはクリスだけだった。

しかも、そのクリスでもホームランは片手で数えられる本数しか打っていない。

他には結城が2割ギリギリの打率でホームランを1本打っただけだ。

パウプロが3球目にチェンジアップを投げ込むと、2球目のフォーシームが目には焼き付いていた倉持は緩急差を我慢できずにバットを空振りしてしまった。

（東条達を葉輪と投げ合わせる事で経験を積みませようとするのは理解出来るが、対戦する1軍バッター達にはこの上ない試練になるな。潰れる可能性もあるが、それ以上に教え子達の成長を信じているという事ですか、片岡監督？）

その後、パウプロのピッチングの前に2番バッターの小湊 亮介と3番バッターの結城も連続三振に抑えられると、2回の表のマウンドに沢村が駆け足で向かうのだった。

## 第195話

1軍と2軍の紅白戦の2回の表、沢村は2軍チームの5番にヒットを打たれたものの、その後の2人をサードフライとセカンドゴロのゲッツーに抑え、2回の表も無失点で切り抜けた。

そして2回の裏、この紅白戦で初めてのパワプロとクリスの勝負にグラウンドは大きな緊張感に包まれたのだった。



「な、なんだ!?この空気!?!」

クリスが打席に向かった途端にグラウンドに漂う緊張感が変わった事に気付いた沢村が、驚いて声を上げる。

「今の高校野球界におけるナンバーワンピッチャーとナンバーワンバッターの対決だからな。公式戦の終盤の様な緊張感になるのも仕方ないだろうな。」

「ナンバーワン…。」

御幸の言葉を呟くように反芻した沢村は、クリスが醸し出す重圧をものともせずマウンドで笑顔になっているパワプロを見て唾を飲む。

「沢村、お前はそういうピッチャーにエースを奪うって宣言したんだぜ?先輩を押し退けてでも、ベンチの最前列で2人の勝負を見てこいよ。あそこにいる降谷みたいにな。」

沢村が御幸の視線を追うと、そこには悪びれもせずに最前列にいる降谷の姿があった。

「あつ!?降谷!抜け駆けをするなんて卑怯だぞ!」

「…。」

そう言いながら詰め寄ってくる沢村に対して、降谷は面倒そうに息を吐いた。

「東条、お前は行かなくていいのか?」

「この方が葉輪さんの動きだけに集中出来ますから。」

東条の返答に御幸は少し驚きながらも興味を持った。

「松方シニアで学んだのか？」

「俺が不器用なだけですよ、御幸さん。俺は勝負全体を見て、葉輪さんのピッチングを学べないだけです。」

「自分が見るべき所をわかつているだけでも上出来だろ？降谷や沢村はまだそこまで出来ないみたいだからな。」

御幸の言葉に東条は首を横に振る。

「沢村と降谷は知識も技術も無い状態で青道の2軍に上がった奴等です。そんなあいつらがこれから先、投手として必要な事を学んだらと考えたら樂觀出来ませんよ。」

「あいつらは強豪の松方シニアでエースを経験した東条でもライバルと思える相手ってことか。」

御幸の言葉に頷いた東条は表情を引き締める。

「今年の秋、俺は沢村と降谷、そして川上さん以上に結果を出して第2先発の座を狙います。そして、2年後に葉輪さんのエースナンバーを受け継ぎます。」

「パウプロを超えるつもりはないのか？」

「もちろん葉輪さんの背中を追いかけますよ。でも葉輪さんは俺の憧れだから、そう簡単に追い付けない人であり続けて欲しいって思ってるんですよね。」

苦笑いをしながらそう言う東条に御幸はニツと笑みを浮かべた。

御幸には東条の気持ちがあったからだ。

御幸もリトル時代からクリスの背中を追い続けている。

超えたい気持ちはもちろんある。

だが、それと同じくらい大きな壁であり続けて欲しいとも思っているのだ。

「東条、いつでも声を掛けるよ。パウプロが投げてない時ならいつでもボールを受けてやるからな。」

「そこは葉輪さんよりも優先するって言うてくれるところじゃないんですか？」

東条の言葉を笑って誤魔化した御幸は、パウプロとクリスの勝負を

見ることに集中したのだった。



バットを構えずに打席に入っただけのクリスさんから威圧感の様なものを感じる。

いいね！

燃えてきたぜ！

俺は小野の出したサインに首を横に振る。

なんか、打たれそうな気がしたんだよね。

小野はチラリとクリスさんを見てからサインを出し直す。

うん、それでいこう。

サインに頷いた俺は投球モーションに入る。

ノーwindアップから足を上げてゆっくりと足を下ろしていく。

そして下ろした足を滑らせる様に前に出して踏み込むと、しっかりと腕を振ってボールを投げ込んだ。

俺が初球に選んだのはインハイのフォーシーム。

クリスさんがスイングを始めたけど、バットは途中で止まった。

ハーフスイングでは無いみたいだけど、判定はストライクだ。

クリスさんの見逃しかたは上手いなあ。

スイングが始まっていても途中でスツて止まるんだよね。

まるでプロのバッターの見逃しみみたいだ。

さて2球目は、つと。

アウトローにボール1つ分外すチェンジアップね。

俺のチェンジアップは利き腕方向に変化しながら少し落ちるから、

それで引っかけさせようと思っているのかな？

でも、それは打たれそうな気がするんだよね…。

去年、東さんのバツティングピッチャーをし始めた時から、今みたいに打たれそうだって感じる様になったんだよね。

それで打たれそうだと感じながらもそれを投げると、見事に東さんにホームランを打たれた。

それ以来、俺は打たれそうだと感じた時は首を横に振る様になった。

小野はまたクリスさんをチラリと見てからサインを出し直す。

2球続けてフォーシームね。

了解！

俺はアウトローにボール1つ分外に外すフォーシームを投げ込んだ。

クリスさんはスイングを始めるけど、またしても途中でバットを止めた。

小野がハーフスイングの判定を求めたけど、判定はボールだった。

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

3球目、小野は俺に縦スライダーを要求してきた。

小野はまだ縦スライダーをしっかりと捕れない筈なんだけど…大丈夫か？

胸の前で拳を握った小野は、俺に身体で止めると訴えているようだった。

俺は笑みを深めてサインに頷く。

3球目、インローに投げ込んだ縦スライダーにクリスさんはバットを振りきる。

だけど…。

「サードー！」

ボールの上っ面に当たった打球が弱々しい勢いでサードの金丸の所に転がっていく。

金丸はクリスさんの走り出しを見て、ボールを丁寧に1塁に送球した。

アウトになったクリスさんは小野と目が合うと、微笑んでからベンチに戻っていった。

そのクリスさんの微笑みを見た小野は、右手で小さくガッツポーズを取っていたのだった。



## 第196話

クリスを打ち取った後のパウプロは続く増子と坂井を連続三振に抑えて2回の裏を終えた。

そして3回の表、沢村は2軍チームの先頭打者である8番バッターの金丸にフォーシームをセンターに運ばれると、ノーアウト、1塁の状況でパウプロとの勝負を迎えていた。



「打たせて行くんでお願いしますー！」

左手に持ったボールを高々と上げて野手陣に声を掛けると、沢村は大きく息を吐いてから打席に入ったパウプロに目を向ける。

（高校野球界ナンバーワン投手…俺も、そう呼ばれる投手になりてえ！）

まだクイックモーションが出来ない沢村は、申し訳程度にセットポジションから投球モーションに入る。

大きく足を上げてから踏み込むと、前に突き出した右手のグローブを潰して壁をイメージする。

右手で作った壁により身体にタメが出来た沢村の投球モーションは、沢村の柔軟な身体と合わさる事でリリースポイントが見えにくくなり、バッティングのタイミングを取り辛くさせる。

打席のパウプロはノーステップのバッティングフォームでバットをスイングする。

ガキッ！

打球は3塁手の増子の頭を超えたが、スライスしてファールゾーンへと切れた。

危うく長打コースとなりそうだった打球に沢村は内心で胸を撫で下ろす。

しかし、クリスはそうではなかった。

（今のでレフト前ヒットになってくれた方がよかったな…。）

パウプロは基本的にインコース待ちのホームラン狙いである。

それ故に、沢村がコントロールミスをしてボールがインコースに行つて長打にされるぐらいなら、今の1球でヒットの方がマシだと考えたのだ。

(沢村に新しい投球モーションを封印させて、古い投球モーションでコントロール重視にさせる選択もあるが…紅白戦だからな。足りない物を自覚させる為にも、このままいかせよう。)

負けたら終わりの公式戦ならば絶対にはない選択である。

しかし片岡がこの紅白戦に込めた意図を考え、クリスはあえて沢村に真つ向勝負をさせる事にした。

(腕が遅れて見える独特な投球モーションにムービングボール…2年後にエースになれる素質はあるが、それだけでは葉輪を超えられないぞ、沢村。)

2球目、沢村が投げ込んだボールはツーシームの様な変化で真ん中付近からインコースへと変化する。

すると…。

カキンッ!

パウプロが打った打球は右中間へと飛んでいき、フェンス直撃となるタイムリーツーベースヒットとなった。

クリスはツーベースヒットを打ったパウプロではなく、マウンドの沢村に目を向ける。

(俯いていないな。次の投球でボールを置きにいかずに腕を振りきれば上出来だ。)

沢村が大きな声で野手陣に声を掛けると、それに反発する様に野手陣から声上がる。

(葉輪を相手に先制点を取られたのは大きいが雰囲気は悪くない。こういうった雰囲気は自然に作れるピッチャーはそうはいない。2年後には本当に沢村がエースナンバーを背負っているかもしれない…。)



その後の沢村は小湊 春市にタイムリーヒットを打たれて1点を追加されて3回の表を終えた。

3イニングで2失点の結果だった沢村だが、悔しさよりも高いレベルでプレー出来る事に楽しさを感じ、もっと投げたい、また投げたいと強く思ったのだった。

## 第197話

1軍と2軍の紅白戦の3回の裏、パウプロは1軍打線を3者連続三振で抑える。

そして4回の表の1軍チームのマウンドには降谷が上がった。

降谷は沢村との球速差もあり、4回の表の2軍打線は3人で抑える。

4回の裏の1軍チームは1番から始まったが、1番の倉持はまたしても三振で抑えられた。

ここまでの1軍チーム打線はクリス以外の打者全員が三振という結果だった。

だが、ここで2番打者の小湊がその選球眼とバッティング技術で粘りをみせる。

小湊はノーボール、ツーストライクと追い込まれてからパウプロのフォーシーム、カーブ、チェンジアップの3種類を辛うじてファールにしていた。

(少しぐらいコントロールを間違えてボール球を投げてもいいと思うけどね。)

緩急差にバッティングフォームを崩されながらも粘る小湊は、集中を切らさない為に一度も打席を外さなかった。

(打席を外してもパウプロのリズムは崩せないからね。ほんと、頼もしいエースだよ。)

8球目、ここで2軍チームのキャッチャーである小野はパウプロに高速スライダーを要求した。

パウプロがフロントドアで高速スライダーを投げ込むと、小湊は色が落ちた視界の中で幾つもの思考が重なっていった。

(球種はスライダー。)

(身体には当たらない。)

(コースはストライク。)

(バットを振れ!)

カキンッ!

小湊がバットを振りきると、1軍打線にとって初めてバットの快音が鳴り響き、球足の速いゴロが1、2塁間に転がっていく。

2軍チームの1塁手が打球に飛びつくが届かない。

しかし、2軍チームの2塁手である小湊 春市が横っ飛びでボールを捕らえた。

左打者の小湊 亮介が1塁に全力で駆ける。

パウプロも反応早く1塁ベースカバーに向かっていた。

ボールを捕球した春市が素早く上体を起こして目線を1塁方向に向ける。

(立ち上がっていたら兄貴を刺せない!)

春市は瞬時に判断して膝立ちの状態で1塁ベースに向かっているパウプロに送球した。

亮介とパウプロがほぼ同時に1塁ベースを踏む。

塁審の判定は…?

「…アウト!」

アウトの判定を聞いた亮介は天を仰ぐと、1つ息を吐いてから弟である春市へと目を向けた。

(ナイスプレー、春市。お前なら今年の夏の大会で1軍になれるかもね。けど…。)

亮介は踵を返すと、微笑みながらベンチへと駆け足で戻っていく。そして…。

「春市、お前に1軍のレギュラーはまだ早いよ。」

この言葉が聞こえたのか膝立ちの状態のまま小さくガッツポーズを取っていた春市は、前髪に隠れた目に強い闘志を宿らせて立ち上がったのだった。



亮さんはやっぱ凄いバッターだわ。

フロントドアのスライダーをジャストミートだもんなあ。

インコースを待ってたのかな?

紅白戦が終わったら聞いてみよ。

しかし、弟くん：ナイスプレー！

位置的に見ると、予め1塁より守ってたのかな？

よくわからないけど、とにかくナイスプレー！

さて、亮さんをアウトに出来てこれでツーアウトだけど次のバッ

ターは哲さんだ。

今の亮さんの一打で哲さんが燃えている。

いいね！俺も燃えてきた！

さあ、勝負を楽しんでいくぜ！

## 第198話

1軍と2軍の紅白戦は4回の裏でツーアウト、ランナー無しの状況を迎えていた。

1軍チームのバッターは結城 哲也。

結城はパウプロが投じたフロントドアのスライダーをジャストミートした小湊 亮介のバッティングを見て、自分も負けられないと燃えていた。

(小湊は弟のファインプレーでヒットを阻まれたが、チームで最初に葉輪のボールをジャストミートした。小湊のバッティングは間違っていない。)

結城は打席に入る前に身体を解す様にゆったりとバットをスイングする。

このゆったりとしたスイングが今の結城の打席に入る前のルーティンだった。

オフシーズンに打撃投手をしたパウプロの打席に何度も立った結城だが、最初の方は散々な結果だった。

オフシーズン故に力を抜いた投球をしているパウプロのボールを前に飛ばせない。

シニア時代から打撃には定評があり、青道に入ってから一番バットを振ってきたと自負していた結城だが、その結城のバットマンとしての自信はボロボロになった。

パウプロはものが違う、クリスでも打てないんだから仕方ないと2軍、3軍のとある者達が口々に言ったが、クリスだけでなく小湊 亮介も少しずつだがパウプロのボールを捉えられる様になっていたのだ。

その状況が結城を追い込んだ。

冬に大汗を流してバットを振り続けた。

だがその先に光明は見えず、結城は2軍、3軍の投手のボールも打ち込めなくなる程のスランプに陥ってしまった。

しかし、年明けの頃に結城の意識に変化をもたらす出来事が起こっ

た。

それは冬合宿が終わり、年始の休みの日の事である。

自宅から青道高校に通う結城は、冬合宿でいじめ抜いた身体を休ませる為に、焦る気持ちを抑え込んで家でゆっくりとしていた。

その時、家のテレビには年始のスポーツ特番の番組が映されていた。

そしてその番組にはメジャーへと渡った孤高の天才打者の姿があった。

その孤高の天才打者はその番組でこう言った。

『詰まったら負けという考えは捨ててください。』

この一言に結城は衝撃を受けた。

そしてこの一言が結城の意識とスイングに変化を起こしたのだ。

休み明けの結城は誰よりも早く青道高校のグラウンドに姿を現しバットを振っていた。

そして、貴子と一緒にグラウンドにやって来たパウプロの姿を見ると、結城はパウプロに打撃投手を頼んだ。

そこで結城はスランプを脱出し、スランプに陥る前よりも成長を果たしたのだ。

(詰まる事は負けではない。)

年始のあの日から結城は己にずっと言い聞かせてきた。

詰まる事は負けではない。

その考えの元、結城はメジャーのバッター並みにミートポイントを後ろに置いたバッティングをするようになった。

だが、そのバッティングでもパウプロのボールを捉えるのは容易ではない。

だからこそパウプロのボールをジャストミートした小湊 亮介に敬意を持ち、結城は静かに燃えていた。

打席に入った結城の目に笑顔でマウンドに立つパウプロの姿が映る。

結城が小さく息を吐くと、マウンドのパウプロが頷いて投球モーションに入った。



結城はタイミングを取ると、ノーステップに近い小さなステップで踏んでパワプロが投げ込んだフォーシームを懐深くに呼び込んでバットを振る。

カキツ！

打球はキャッチャーの頭上を超えて後方へのファールとなった。  
(上手く呼び込めたが捉えきれなかったか。)

タイムを取り打席を外した結城がゆったりとバットを振ってから打席に戻る。

2球目、小野はパワプロにチェンジアップを要求した。

結城はパワプロのチェンジアップをフォーシームと判断してスイングをして空振りをしてしまった。

2球目のチェンジアップを空振りして追い込まれた結城は、もう一度タイムを取って気持ちを落ち着ける為に大きく息を吐く。

(やはりあのチェンジアップは厄介だな…。)

ミートポイントを極端に後ろに置いた結城はムービングボールを捉えられる様になったが、フォーシームと全く同じ腕の振りと同じ出所のチェンジアップを苦手としていた。

それでも成長の手応えを感じている為、結城の心は折れなかった。一層闘志を燃やして結城がバットを構えると、小野は3球目に釣り

球として真ん中高めのボールゾーンにフォーシームを要求した。

この1球を結城は手を出さずにしっかりと見送る。

以前の結城ならこの1球に手を出してファール、もしくはボールを打ち上げて打ち取られていただろう。

その事を理解している結城は打席の中でまた成長の手応えを感じていた。

4球目、パワプロがボールをリリースすると、結城が小さくステップを踏んでスイングを始めようとする。

結城のステップのタイミングはフォーシームに合わせていた。

しかし、パワプロが決め球として投げ込んだのはアウトローへのチェンジアップだった。

3球目との緩急差に結城は体勢を崩してしまう。

だが詰まる事を怖れない結城の意識が、まだグリップを後ろに残させていた。

崩された体勢をオフシーズンに鍛え抜いた身体が支えると、結城はバットを振りきった。

カキンッ！

金属バットの快音を残して打球はライナーで右中間へと飛んでいく。

結城の一振りには右中間フェンスに直撃となるヒットとなった。

しかし打球の勢いが強すぎた為に、ツーベースとならずシングルヒットになってしまった。

だが、1塁ベースに辿り着いた結城は拳を天に突き上げる。

そして…。

「ウオオオオオオオ！」

感情を爆発させた結城の雄叫びが1軍チームのベンチから歓声を沸き起こさせる。

その様子を見たマウンドのパウプロは楽しそうに笑みを深めたのだった。

## 第199話

1軍と2軍の紅白戦は4回の裏にツーアウトながら結城がパウプロからヒットを打ち、ツーアウト、ランナー1塁で打席にはクリスを迎えていた。

2軍のキャッチャーである小野はタイムを取ってマウンドに向かう。

「パウプロ、どうする?」

「勝負でしょ。」

「わかった。」

ほんの一言だけ交わしてキャッチャーボックスに戻る小野は必死に思考を巡らせていた。

(キャプテンにヒットを打たれたのは俺のミスだ。亮介さんにいい当たりをされてスライダーを狙われていると思つて要求する事を躊躇してしまった。)

小野はキャッチャーボックスに戻ると、野手陣に大声で声を掛けてから座る。

(今の俺のキャッチング技術ではパウプロのスライダーを捕るのは難しい。ランナーがいる状況で後ろに逸らすリスクはあるが、スライダー無しでクリスさんは抑えられない。怖れるな!捕れないなら身体を張って止めろ!)

初球、小野は1打席目のクリスを抑えた高速縦スライダーを要求した。

結城にヒットを打たれてから、より楽しそうに笑みを深めたパウプロがクイックモーションで高速縦スライダーを投げ込む。

試合形式でパウプロとバッテリーを組んだ経験が少ない小野は知らなかった。

笑みを深め、ギアを上げた時のパウプロのピッチングを…。

小野は必死に目を凝らしてパウプロのボールを捕球しようとする。

しかし小野が要求した球種である筈なのに、小野の視界からボールが消えた。

ガッ!

小野が捕球出来ずにミットの下面に当たったボールが小野の後方へと逸れる。

小野はマスクを外して直ぐにボールを追ったが、1塁ランナーの結城は2塁へと進んだ。

だが、事はそれだけで終わらなかった。

小野がパワプロにボールを投げ返す前に、ボールについた土を落とそうとミットを外してボールを揉もうとすると、小野は指に激痛が走って表情を歪めた。

その小野の様子に一早く気付いたパワプロが直ぐにタイムを取って片岡に目を向ける。

片岡がベンチを飛び出した。

「小野、手を見せろ。」

小野は痛みを堪えながら片岡に左手を見せる。

そこには真っ赤に腫れ上がり、爪が割れて血を流していた親指があった。

片岡は試合を止めると、小野に保健室で応急処置をしてから病院に行くように指示した。

小野は痛み以上に悔しさと涙を流す。

「小野、よく積極的にチャレンジした。しっかりとケガを治してから戻ってこい。待ってるぞ。」

「…はい。」

小野は太田部長に寄り添われてグラウンドを後にする。

紅白戦で怪我人が出た事は残念だが、野球に限らずスポーツにはケガが付き物である。

ここで紅白戦を終わらせるわけにはいかない。

しかし、2軍にはパワプロのボールを取れるキャッチャーがいらない。

そこで片岡は1軍ベンチに目を向けた。

すると、そこには既にキャッチャー防具を身に付け始めていた御幸の姿があった。

片岡は1軍ベンチに歩いていくと、既に準備を始めていた御幸にあって問い掛けた。

「御幸、いけるな？」

「俺はパウプロのボールならいつでも捕る準備は出来てますよ、片岡監督。」

不敵な笑みを浮かべて答えた御幸に頷いた片岡は1軍チームの監督をしている落合に目を向ける。

落合が頷いて了承すると、御幸が2軍チームの捕手となって試合が再開される事になった。

防具を付け終えた御幸はマウンドのパウプロの元に向かう。

「パウプロ、小野がケガをしたからって気の抜けたボールを投げるなよ。」

「二也、俺に出来るのはいつだって楽しんで投げる事だけだよ。」

互いに笑みを浮かべたパウプロと御幸がグローブとミットを掲げる。

「パウプロ、クリスさんを抑えるぞ！」

「おう！」

グローブとミットでハイタッチをした二人は、現在の高校野球界でナンバーワン打者の呼び声が高いクリスに挑んでいくのだった。

## 第200話

1軍と2軍の紅白戦は小野の負傷退場により一時中断されたが、御幸が2軍チームのキャッチャーとなつて再開された。

(クリスさんは初球の縦スライダーを見逃した。これをどう読む?)

状況はツーアウト、ランナー2塁でノーボール、ワンストライク。

御幸は途中交代の経験はあるものの、こういった形での交代の経験は無かった。

(シートバッティングとは緊張感が違うな…これがクリスさんの読み、そして俺の読みにどう影響する?)

似たような状況で勝負がスタートする練習にシートバッティングがある。

しかし紅白戦とはいえ、試合独特の緊張感はいくまで練習のシートバッティングとは違っていた。

(ストライク先行の状況はありがたいけど…さて、どうするかな?)

チラリと横目でクリスを見た御幸はパウプロにサインを出す。

しかし、パウプロは首を横に振った。

(…マジか?)

パウプロが勘で打たれると首を横に振ったのを見て、御幸はマスクの奥で目を見開く。

(キャッチャーが交代した直後で読みがピタリ…。ほんと、とんでもない人だな。)

クリスの凄さに嬉しそうに笑みを浮かべた御幸はサインを出し直す。

頷いたパウプロがクイックモーションでカーブを投げ込む。

バシッ!

クリスがバットを振らずにボールを見送ると、御幸のミットが快音を鳴らしてストライクになる。

これでカウントはノーボール、ツーストライク。

(難しいのはここからなんだよなあ…。)

長打力こそ高卒新人で既にプロ野球の1軍デビューを果たした東

に劣るものの、クリスのバッティング技術は間違いなく現在の高校野球界でナンバーワンと呼べるものだ。

選球眼は小湊 亮介に、スイングスピードは結城に匹敵する。

パウプロが怪物と呼ばれているが、パウプロがいなければクリスが怪物と呼ばれていただろう。

御幸は僅かに悩んだが決断をしてサインを出す。

3球目、パウプロはバツクドアの形でアウトローにボール1つ分外れるスライダーを投げ込んだ。

クリスが一瞬反応するが、見逃してボールとなった。

(今のを見逃せるのかよ…。)

御幸はファールを、あわよくばセカンドゴロを打たせる予定だった。

だが、クリスが見逃した事でリードに悩む。

(スライダーを待ってた?どうする…もう1球外すか?)

御幸は無意識にパウプロへと目を向けた。

そこには今の1球を見逃されて楽しそうに笑うパウプロの姿があった。

御幸は悩みを吐き出すように息を吐くと、マスクの奥で笑みを浮かべる。

(パウプロ、お前じゃなかったらこんな選択は出来なかったよ。)

御幸がサインを出すとパウプロが笑顔で頷く。

そして御幸はインコースに寄って高目一杯にミットを構えた。

パウプロと御幸のバッテリーはクリスとの力勝負を選択したのだ。

パウプロがクイックモーションでフォーシームをインハイへと投げ込む。

まるで浮き上がってくる様な錯覚をさせるキレを持ったパウプロのフォーシーム。

そのパウプロのフォーシームにクリスのバットが振り抜かれた。

カキンッ!

金属バットの快音が鳴り響いて打球はセンター方向に高々と飛んでいく。

フェンスに張り付いた2軍チームの中堅手と打球の行方をマスクを外した御幸が見守る。

高々と上がった打球はセンター深くで失速すると、フェンス際で落下を始めた。

フェンスを超えるか、否か。

打球は確かにギリギリでフェンスを超えていた。

しかし…。

2軍チームの中堅手が飛び上がると、ホームランボールを掴み捕った。

バランスを崩した2軍チームの中堅手がグラウンドに倒れ込む。

ボールは…？

スツと中堅手のグローブが上に持ち上げられた。

「アウト！スリーアウト！チェンジ！」

主審のコールに2軍チームのメンバー全員が歓声を上げた。

その歓声を聞きながら1塁ベースを踏んだクリスがベンチへと戻っていく。

そしてクリスはベンチに戻る途中の御幸とのすれ違い様に一言声を掛けた。

「いいリードだった。だが、次は完璧に捉える。」

この一言を聞いた御幸は笑顔を引き締めてクリスに返事をする。

「次は三振に抑えますよ。」

クリスは御幸の返事に振り返らずにベンチに戻っていく。

そんなクリスの背中を見送った御幸は引き締めていた表情を笑顔に戻して、マウンドを下りてきたパウプロとハイタッチをしたのだった。



## 第201話

1軍と2軍の紅白戦は4回の裏にクリスがパウプロからホームラン級の打球を打ったが、2軍の中堅手のファインプレーに寄ってホームランを阻まれてしまった。

このファインプレーにより4回の裏を無失点で切り抜けた2軍チームは、5回の表の降谷に挑んでいく。

4回の表こそ沢村との球速差で抑えた降谷だったが、5回の表の2軍打線には打ち込まれていった。

ストライクゾーンに4隅に決めれば打たれない、だが甘いコースにボールが行けばあっさりヒットを打たれていった事で、降谷はコントロールの大切さを身を持って実感していった。

降谷は紅白戦3イニングを4失点の結果でマウンドを下りた。

そんな降谷を見守った落合は、降谷の技術不足以上に経験不足を危惧した。

(ランナーが出ると明らかに力んだ投球をしていたな。どうやらコントロールの大切さを実感したようだが、今の状態ではマウンドを任せられんぞ。)

パウプロ、丹波、伊佐敷、川上と投手陣が充実しているのは夏までである。

落合は秋以降の投手事情を考えて頭を悩ませた。

(せめて後1人、1軍のマウンドを任せられる奴が欲しい。沢村と降谷はじっくりと育てるべきだが、チーム事情次第では秋の大会から1軍で投げさせざるをえんな。)

頭を搔いた落合は、1軍チームのメンバーに気付かれぬ様にため息を吐いたのだった。



5回の裏のパウプロは先頭打者の増子をゴロで抑えた後は続く2人を連続三振で抑えた。

そして6回の裏、ここで尻上がりの特殊能力によりパウプロのギアが上がった。

8番、9番を連続で三球三振に抑えると、ツーアウト、ランナー無し  
の状況で打順は1番の倉持に回った。

倉持は落合に貰った助言により左打席に立とうかと迷ったが、ス  
イッチヒッターのセオリー通りに右打席に入った。

御幸はその一瞬の迷いを見逃さなかった。

(左に立とうとした？狙いはセーフティ？)

御幸のサインに頷いたパウプロが投球モーションに入ると、倉持は  
バントの構えをみせた。

ボールを投げ込んだ直後、パウプロが素早くチャージをかけると倉  
持はバットを引いた。

判定はストライク。

(ブラフ？揺さぶってパウプロを消耗させる気か？)

2球目、御幸はインハイにフォーシームを要求した。

パウプロがボールを投げ込むと、倉持はバントの構えを戻してヒッ  
ティングにいった。

しかし倉持は明らかな振り遅れで空振りしてしまった。

追い込んだ御幸は遊び球を使わずに勝負を選択する。

3球目、パウプロはアウトローにストライクゾーンからボールゾ  
ンに落ちる高速縦スライダーを投げ込んだ。

この1球に倉持は空振りをしてしまい、6回の裏は三者連続三振に  
倒れた。

(並みのピッチャーなら今の揺さぶりで出塁も狙えただろうな…。)

御幸はベンチに戻っていく倉持の背をチラリと見ると、パウプロと  
ハイタッチをしてベンチに戻っていく。

スイッチヒッターの倉持は他者よりも多くバットを振らねばなら  
ない。

それ故に倉持はオフシーズンで多くの者が成長をやっていった中で、  
一人伸び悩みを見せていた。

(足の速さと守備力で1軍レギュラーの座を掴んでいるけど、このま

まじやバイぜ、倉持。)

御幸の危惧が当たったのか、倉持はこの紅白戦の後にバッテリーングにおいてスランプに陥ってしまったのだった。

## 第202話

青道高校野球部の1軍と2軍の紅白戦は終盤となる7回の表へと突入した。

7回の表の1軍チームのマウンドに上がった東条は大きく息を吐く。

(しっかりと腕を振ってボールを投げ込む。それが今の俺の課題。)

体力測定の際に受けたパワプロの指摘。

それが東条が己に掲げる課題である。

東条が顔を上げて前を見ると、打席には松方シニア時代のチームメイトである金丸の姿があった。

(金丸は真っ直ぐに強い。真っ直ぐは見せ球にしてツーシームとスライダーで勝負!)

東条はそう思っていたが、クリスは初球に真っ直ぐを要求してきた。

このサインに東条は一瞬首を横に振りたい衝動にかられる。

(この1球には俺には理解出来ない意図がある筈。ならビビるな!)

己の成長の為に東条は首を縦に振る。

初球、東条はしっかりと腕を振ってフォーシームを投げ込んだ。

コースはアウトコースよりだが、やや甘い所。

(打たれる…っ!?)

長打をも覚悟した東条だったが、金丸はバットを振らずにボールを見逃してストライクとなった。

(真っ直ぐに強い金丸が甘い真っ直ぐを見逃した?なんでだ?)

東条が悩んでいると、クリスはナイスボールと声を掛けながら強めの送球でボールを返球してきた。

ボールを受け取った東条は帽子の鏢に手をやりながら足場を均す。

(マウンドで悩むな。配球に疑問があるなら後で聞けばいい。)

小さく息を吐いた東条がクリスのサインを見る。

頷いた東条は投球モーションに入ってボールを投げ込む。

2球目、クリスは同じコースにツーシームを要求した。

金丸はこのツーシームを引っかけてしまい、サードゴロに打ち取られる。

強豪の松方シニアで4番バッターだった金丸を僅か2球で打ち取れた事に東条は驚く。

（金丸をこんなにあっさり？今日の俺のボールは特別にキレているわけじゃない。金丸を打ち取れたのはクリス先輩のリードのおかげだ。）

背筋にゾクリと震えが走った東条はマウンドで笑みを浮かべた。

（もつとこのレベルでプレーがしたい！）

力強く頷いた東条の顔は、次の打者であるパウプロに負けない程の笑顔なのだった。

◆  
7回の表の東条はパウプロと小湊 春市にヒットを打たれたものの、2軍チームに得点は許さず無失点で切り抜けた。

7回の裏の1軍チームの攻撃、先頭打者の小湊 亮介と続くバッターの結城は三振こそしなかったものの、ギアの上がったパウプロのボールを捉えきれずに内野ゴロと内野フライに打ち取られてしまった。

◆  
ツーアウトの状況だがここでクリスがパウプロからツーベースヒットを打って得点のチャンスを作ったが、5番バッターの増子は三振に倒れて無得点で7回の裏は終わった。

◆  
その後、東条は9回終了までの3イニングをパウプロのホームランによる1失点で終え、パウプロは1軍打線を相手に完封の結果で紅白戦を終えたのだった。

「0ー7で2軍チームの勝ち！礼！」

「「ありがとうございます！」」

紅白戦では何本かヒットを打たれたけど、1軍打線を完封で抑えたぜ！

試合終了の挨拶が終わった後に一也とハイタッチをして、俺はアイシングに向かう。

「フリーくん、お疲れ様。カッコ良かったよ。」

そう言いながら貴子ちゃんが笑顔でアイシングを手伝ってくれる。「ありがとう、貴子ちゃん。」

俺が左肩と左肘をアイシングしていると、今日投げ合った1年生投手達が俺の所にやって来た。

「パワプロ先輩！俺にコントロールの秘訣を！」

「変化球ってどうやって投げるんですか？」

「最後のホームランを打たれたボール…あれって待ってたんですか？」

沢村、降谷、東条が次々に俺に質問をしてくる。

うんうん、向上心が高くていいね！

そんな俺達の所に丹波さん、純さん、ノリに一也やクリスさんに宮内さんといったメンバーが集まって来て紅白戦の事などを話し合っていく。

「クリスさん、あのツーベースは読んでたんですか？」

「いや、あれは上手く対応出来ただけで読みではないな。」

「東条、チェンジアップの握りを教えてくれる約束だけ。」

「降谷、俺よりも葉輪さんに聞いた方がいいと思うぞ。」

「おい、沢村！お前はピッチングの時に力み過ぎだ！もつと脱力しろ！」

「オス！伊佐敷先輩！」

「丹波さん、丹波さんなら小湊先輩をどう打ち取りますか？」

「正直なところ、今の俺では打ち取れる気がしないな。シングルヒットなら上出来だろう。」

「ンフリー！ナツクルカーブの使い所が鍵になりそうだな。」

切磋琢磨している皆の様子に俺は自然に笑顔になる。

夏の大会が待ち遠しいぜ！



後日、紅白戦を負傷退場した小野の診察結果を聞いた。

不幸中の幸いで骨に異常は無く、全治2週間で復帰出来るらしい。  
良かったな、小野！

そして時が過ぎて小野が復帰してからしばらく経った頃、今年も夏合宿の時期がやって来たのだった。

## 第203話

今年の夏合宿が始まった。

青道野球部の夏合宿の練習量に1年生達は余さず筋肉痛になり、ストレッチで悲鳴を上げる様になった。

2年生、3年生も筋肉痛になっていくけど、経験から合宿時のケアはそれなりに心得ているので、1年生に比べればまだマシのようだ。そんな中で俺は特殊能力の『鉄人』のおかげで筋肉痛にならないから1人元気でいるのだが、それのおかげで他の人よりも練習量が増えているんだよね。

経験ポイントがガツツリと増えていくぜ！

そんな感じで夏合宿も半分が過ぎると、今年も他校との練習試合が始まるのだった。



「今年もよろしく頼みます、片岡はん。」

「よろしくお願いします、松本監督。」

去年と同様に青道との練習試合にやって来た大阪桐生高校のメンバーは春の甲子園のリベンジに燃えていた。

「それで、今日は葉輪君が投げしてくれるんやろか？」

「いえ、申し訳ありませんが、葉輪は明日の練習試合に投げさせる予定です。」

「なるほど、巨摩大さんにやな。」

松本は残念そうに苦笑いをしたが、今日の練習試合を去年からの青道との試合での負け癖を払拭するチャンスと捉えた。

「ほな、お互いに怪我人が出んようにいきましょ。」

「はい、失礼します。」

頭を下げた片岡が離れていくと、松本は笑みを浮かべる。

「さて、館の尻を叩かなあかな。先ずは青道打線を抑えんと、夏の甲子園も優勝を持っていかれてまうからな。」



◆  
青道の1軍が大阪桐生と練習試合を始めようとしていた頃、青道の2軍は黒士館と練習試合を始めていた。

1回の表の青道2軍チームのマウンドに上がった沢村に、ケガを完治させて合宿に参加している小野が声を掛ける。

「沢村、調子はどうだ？」

「ワハハ！絶好調ですよ！」

「無理はするなよ、筋肉痛で動きが鈍っているのはわかっているからな。」

小野の指摘に沢村はエスパーかと疑惑を抱いて後ずさるが、そんな沢村を見て小野は苦笑いをする。

「黒士館の財前さんは東京地区でトップクラスの投手だ。噂ではプロのスカウトから声を掛けられているらしいぞ。」

「プロのスカウトから!?ここで投げ勝ってボスに認めて貰えば俺も1軍になって事ですね！よっしゃ！パワプロ先輩直伝のチェンジアップでバッタバッタと打ち取ってやりますよ！」

「力んで地面に叩きつけるなよ。」

小野はミットで沢村の胸を軽く叩くと、キャッチャーボックスへと戻っていったのだった。

◆  
この日の練習試合は2軍、1軍共に青道が負けてしまった。

2軍チームの練習試合の結果は1ー5と黒士館に力負けした形だ。

もちろん合宿での疲労の影響もあったが、小湊 春市を除いて財前を打ち崩せなかった事が大きい。

1軍チームの大阪桐生との練習試合の結果は7ー8と後一步のところまで負けてしまった。

しかし、本調子でなかろうと負けは負け。

練習試合の後、片岡はあえて1軍メンバーに何も言わなかった。

1軍メンバーの誰もが理解していたからだ。

そんな1軍チームの皆が疲労で身体が重い中で、パウプロ一人がレフトで元気にプレーをしていた。

1番レフトで出場して5打数4安打2本塁打3打点の大活躍をした。

パウプロのこの成績は松本が館にこの試合の課題とある事の確認のためにインコース勝負を指示した影響も大きいが、春季大会や今回の合宿で得た経験ポイントで基礎能力を成長させたからでもある。

松本はパウプロのプレーを見て、パウプロが投手だけでなく打者としても怪物であると認識した。

そんなパウプロの活躍の裏で、倉持はセーフティバントでの出塁以外は全打席凡退と完全にスランプに陥っていた。

打順も8番へと下げられてしまい、明日の巨摩大との練習試合の結果次第ではレギュラーの座も危うい可能性がある。

それを理解している倉持は、疲労している身体に鞭を入れてバットを振り込んでいくのだった。

## 第204話

青道高校野球部の夏合宿も終盤となり、連日練習試合が行われていた。

今日の1軍の相手は北海道の強豪校である巨摩大藤巻高校。

1年前の夏の甲子園の決勝で戦って以来の因縁の相手だ。

そんな巨摩大藤巻には今年、シニアで有名な選手が入学している。

その選手の名前は本郷 正宗。

右投げ右打ちの投手であり、1年生ながら今回の遠征に参加している実力者だ。

その本郷はグラウンドに挨拶をすると、真っ直ぐにパウプロの元にやって来た。

「葉輪さん、今日はよろしくお願いします。」

「おう！今日はよろしくー！」

パウプロが頭を下げる本郷にサムズアップをすると、本郷は瞳に闘志を宿してチームの元に戻っていった。

「なあ、一也。」

「どうした、パウプロ？」

「あの子、誰？」

パウプロの言葉を聞いた御幸とクリス、そして貴子が苦笑いをする。

「パウプロ、あいつは本郷 正宗。シニアの全国大会の時に投げ合った事がある選手だぞ。」

「そうだった？」

「まあ、お前らしいと言えばらしいけどな。」

パウプロが困った様に頭を搔くと、それを見た貴子が微笑む。

ゆるい空気を引き締める様に咳払いをしたクリスがパウプロに話し掛ける。

「葉輪、今日の試合は縦のスライダーは禁止だ。」

「はい！わかりました！」

「今日の試合でマスクを被るのは御幸だ。アップをしながらいいか

ら配球の事を打ち合わせしておけよ。」

暖かい季節になって肩の調子は良くなったが、クリスは疲労している今の身体の状態を考えて今日の練習試合の出場を辞退していた。

野球に限らずスポーツは常に万全の状態で試合に挑めるわけではない。

疲労やケガなどを背負ってプレーしている選手は数えきれないほどいる。

それにより新たにケガをしたりケガが悪化するケースも少なくないが、それらのリスクと試合出場機会を天秤にかけて決断をしているのである。

その結果、クリスは先々を考えて今日の練習試合の出場を辞退したので。

「よし、パワプロ、キャッチボールを始めろぞ。」  
「おうー！」

パワプロと御幸がキャッチボールを始めると、クリスは少し残念そうに苦笑いをしてから片岡の所に歩いていったのだった。



青道高校の1軍と巨摩大藤巻の練習試合が始まった。

青道の先発はパワプロ、巨摩大の先発は3年生のエアースだ。

1回の表のマウンドにパワプロが上がると、ベンチにいる本郷は真剣な目でパワプロの投球練習を見つめている。

「本郷。」

「はい。」

巨摩大の監督である新田 幸三に呼ばれた本郷が返事をして、素早く新田の元へ行く。

「今日の紅白戦、展開に関係なく6回からお前に投げさせる。準備をしておけ。」

「…はいー！」

早くも準備を始めた本郷を横目で見た新田は、目を投球練習をして

いるパウプロに移す。

(あの怪物はまだ成長をしているのか…。)

巨摩大の選手達も大会前の追い込みの時期で疲労がある事に加え、更に遠征である。

こんな状態では間違いなくパウプロを打ち崩せないだろうと新田は予測する。

だが…。

(少しでもいいイメージを持って帰らなければ、夏の大会でリベンジする前に甲子園にすら行けなくなる…。)

巨摩大の監督の新田は『新田マジック』と称される采配を振るう名将である。

しかしそんな名将でも、たった一人の選手が攻略出来ない。

その選手とはパウプロである。

パウプロの存在が1年前の夏の甲子園から、新田の頭を悩ませ続けていた。

ビデオを見て何か突破口はないかと繰り返し見続けても結論はいつも同じ。

延長戦に持ち込んでパウプロの体力切れによる降板を待つか、まぐれ当たりの一発を守りきるかの2つだけだ。

高校野球でこんな結論が出るのは馬鹿げていると新田は頭を抱えた日々を送ってきた。

どれだけ巧みに継投をしようが、現代の高校野球のレベルで完封は難しい。

エースが必要だった。

一般的な高校野球のエースではない。

世代を代表するようなエースだ。

その渴望したエースになれる素質を持った選手が新田の元にやって来た。

それが本郷 正宗である。

新田は本郷を育てる為にこれまで以上に鬼になる事を決めた。

それからの本郷の日々は、まるで時代を逆行したかの様に過酷な練

習漬けの日々だった。

まだ身体が出来上がっていない1年生に課すような練習量ではなかった。

だが本郷は新田の期待に応え、ここまでケガをせずに練習をこなしてここに立っている。

本郷の才能は花開きつつあった。

新田の予想では本郷がパワプロと投げ合うにはまだ早い。

如何に本郷が才能豊かでもまだ1年生だ。

その1年生の本郷を起用して試合に敗れたら新田の進退にも関わ

る。

しかし新田は今年の夏から本郷を起用していく事を決めていた。

全てはパワプロが投げる青道に勝つために…。

「3年生には悪いが、今年の夏は秋以降の為の布石になるだろう…。

あの怪物に勝つために…！」

腕を組み睨む様にして新田がパワプロを見詰める中で、青道と巨摩

大の練習試合が始まるのだった。

## 第205話

青道と巨摩大の練習試合は既に7回の裏まで進み、6―0で青道が勝ち越していた。

6回の裏からマウンドに上がった本郷は7回の裏も青道打線に挑んでいく。

現在打席に入っているのは、この練習試合で4番バッターの結城である。

本郷はツーストライクと結城を追い込むと、渾身の真つ直ぐを投げ込んだ。

しかし…。

カキンッ！

本郷は打球方向に勢いよく振り向く。

ライナー性の当たりはフェンス直撃のツーベースヒットになると本郷は予測した。

しかし、打球は本郷の予測を裏切ってそのままスタンドに突き刺さってホームランとなる。

本郷は打球の行方を見たまま啞然とした。

シニアでは経験した事のない一発だったからだ。

6回の裏に登板した直後は0―3だった点差は6回の裏だけで0―6になり、そしてこの結城の一発で0―7と更に突き放されてしまった。

それでも巨摩大の監督である新田は本郷を替えない。

（高校野球の洗礼としては厳し過ぎるだろうが、これ乗り越えねば葉輪と同じ土俵には立てんぞ、本郷。）

新田はこの練習試合で本郷の心が完全に折れてしまい、野球部を辞めるのも覚悟していた。

マウンドでは天を仰いで大きく息を吐く本郷の姿がある。

そしてキャッチャーのサインを覗き込む本郷の目は…まだ折れていなかった。

その本郷の目を見た新田は一つ頷く。

(それでいい、本郷。今はただ学べ。その先に、お前が目指す男の背中がある。)

この練習試合で本郷は、疲労で動きにキレが無い青道打線相手に8失点をした。

しかし本郷は練習試合が終了した後も、練習試合前と変わらぬ闘志をその目に宿していたのだった。



予定していた全ての練習試合を終え、青道野球部の夏合宿は最終日を迎えていた。

最終日である今日の野手陣は、毎年恒例のノックを受けている。

「もう一本！お願いします！」

多くの者がグラウンドに身体を横たえる中で、気力だけで立ち上がった結城が声を上げる。

その結城の声に応えて片岡がボールを打つ。

歯を食い縛って結城が打球に飛び付くと、次は小湊 亮介が声を上げる。

肩で息をしている片岡だが、教え子達の気迫に伝えてバットを振る。

小湊も飛び付いてボールを取ると、1軍の2年生、3年生達が次々と立ち上がりボールを要求する。

そんな彼等の気迫に、今年初めて青道の合宿を経験する沢村達1年生投手陣は驚き、身を震わせた。

この人達と一緒にプレーをしたい。

必ず1軍に行く。

グラウンドに渦巻く熱気が、グラウンドに渦巻く情熱が限界に近い選手の身体を動かしていく。

そして全員がケガなく無事に合宿を乗り越えようと、夏の大会の1軍メンバーが発表されるのだった。





「背番号1ー葉輪！」

「はー！」

片岡さんに呼ばれ、背番号を受け取る為に前に出る。

背番号を受け取った俺は笑顔になる。

現役時代の片岡さんがつけていたエースナンバーをまた手に出来た事が本当に嬉しい。

俺が受け取った背番号を見て笑顔になっている間も、次々と夏の大会の1軍メンバーが発表されていく。

正捕手は一也だ。

クリスさんは肩のケガ等を考慮されて正捕手になれなかったみたいだな。

正捕手の座を奪えた一也が満面の笑みで背番号を受け取っている。

1 墨手に哲さん。

2 墨手に亮さん。

3 墨手に増子さん。

そして遊撃手は…倉持ではなく3年生の名前が呼ばれた。

続いて外野手の発表が終わって次に控えメンバーが発表される。

2 番手投手に丹波さん。

中継ぎにはノリ。

抑え兼中堅手に純さんと名前が呼ばれていく。

ちなみに俺はエース兼左翼手だ。

控え投手の次に控え野手の名前が呼ばれていく。

2 番手捕手にクリスさん。

2 墨手の控えに亮さんの弟くんの名前が呼ばれた。

そして遊撃手の控えに倉持の名前が呼ばれる。

名前が呼ばれても倉持は悔しそうな表情をしていた。

1 軍メンバーの発表が終わると、片岡さんは一度全員の顔を見渡した。

「以上のメンバーで夏の大会を戦っていく！名前を呼ばれなかった3

年は残れ！解散！」

残った3年生達は拳を握り締めて身体を震わせている。

俺達レギュラー組がその場を去ると、背後から嗚咽が聞こえ始める。

俺達は振り返らずに、前を向いて歩いていった。

夏の大会の勝利を誓って…。

## 第206話

夏合宿が終わって疲労を抜く為の休日のとある日、俺は恋人であり婚約者でもある貴子ちゃんと、とあるカップルとのダブルデートをする為に待ち合わせ場所に向かって一緒に歩いていった。

「へえ、あの二人が付き合い始めたんだ。」

「実は半年ぐらい前に一度告白してたんだよ、フーくん。」

「そうなの？」

今回ダブルデートをする相手カップルの事情を貴子ちゃんから聞いて俺は少し驚いた。

「告白したのは…一也とは思えないから夏川の方からかな？」

「正解だよ、フーくん。」

そう言っただけで貴子ちゃんが組んでいる腕を引き寄せると、俺の右腕に幸せな感触が伝わってくる。

「一度告白してたって言ったけど、その時の一也は断ったんだよね？」

「うん、そうだよ。」

俺の疑問に貴子ちゃんが答えていく。

去年の夏の大会の後に俺と貴子ちゃんが交際を始めた事をキツカケに、マネージャーの間で所謂コイバナがよく話される様になったんだってさ。

それでそのコイバナをする中で夏川と梅本の好みの相手はという話題になったのだけど、そこでなんだかんだがあって好みの相手にアタックを掛けようとなったとの事だ。

若さ故の行動力…といえる積極的な告白だったけど、夏川は見事に玉砕したらしい。

貴子ちゃんが夏川当人に聞いた話では、夏川は一也に『クリスマスに勝つまで遊んでる暇は無い。』と言われて断られたそうさ。

だけど夏川は…。

『クリスマス先輩に勝つたらしいのよね？』

と言っただけで一也に食い下がったそうさ。

夏川の押しに動揺した一也は頷いたそうさ。

そこで先日、見事にクリスさんからレギュラーの座を一也が奪った事で、二人は晴れて交際を始めたそうだ。

そういつた事情を貴子ちゃんから聞いていると、待ち合わせ場所に到着した。

一也と夏川は会話をしていたけど、俺と貴子ちゃんみたいに手を繋いだり腕を組んだりはしていなかった。

まあ、まだ二人は付き合い始めたばかりだからな。

そう思いながら二人に近付いていくと、俺達に気付いた一也が手を振ってきた。

まるで助かったという様なその笑顔に、俺と貴子ちゃんは顔を見合わせる。

「藤原先輩、おはようございます。パワプロもおはよう。」

「おはよう、唯ちゃん。」

満面の笑みで挨拶をしてくる夏川は俺と貴子ちゃんが腕を組んでいるのを見ると、意味深な視線を一也に送る。

一也はそんな夏川と目を合わせなかつたが、夏川が強引に一也と腕を組んだ。

「いや、夏川、暑いんだけど?」

「この程度で暑がってたら真夏のグラウンドで野球出来ないでしょ?」

「まあ…そうだけど…」

一也は夏川に抗議してるけど、口で言うほどに嫌がってない。後でからかいがありそうな初々しい反応ですなあ。

そんな一也と夏川を加えて俺と貴子ちゃんはダブルデートを始めた。

まあ、夏の大会前という事もあってそんなに多くの所に行くわけじゃないけどね。

俺と貴子ちゃんにとってはいつものと言えるお決まりのデートコースであるファミレス、スポーツ用品店、そしてバッテリーセンターを巡っていく。

「はあ…金無いつて言ってるのに…」

「だから出世払いでいいって言ってるじゃない。」

「それはそれでなんとというか：男としてどうかと思うじゃん？」

「ほんと、御幸ってお金の事だと細かいわよね。」

「別にそれで愛想を尽かしても構わないぞ。」

「むしろ頼もしいわよ。倉持とかみたい在先輩風吹かして後輩に奢ったりしないもの。なにあれ？なんで体育会系ってあんな伝統みたいなものがあるの？」

「バツテイングセンターに辿り着いて打席が空くのを待っていると、一也と夏川がそんな会話をしていた。」

「デートの始めの方はどこかぎこちなさがあった二人だけど、今では普通に肩を寄せあっている。」

「うんうん、仲がよろしくて素晴らしい。」

「俺と貴子ちゃん程じゃないけどな！」

「そうだ、パワプロ、今年の夏の大会は必ず優勝してよ。」

「もちろん優勝するつもりだけど：どうしてだ、夏川？」

「青道が優勝したら、私が御幸の唇を貰うからよ。」

「優勝したら唇を奪われる？」

「：なんかデジャヴ。」

「俺が一也を見ると、一也は目を逸らした。」

「ふふふ、唯ちゃん積極的ね。」

「藤原先輩達に負けてられませんか。」

「頑張ってるね。」

「はい！」

「そんな貴子ちゃんと夏川のやり取りを聞いていた俺と一也は、顔を見合わせて苦笑いをするしかなかったのだった。」

## 第207話

夏の高校野球選手権西東京地区大会が始まった。

青道高校はシードなので2回戦からだ。

俺達是对戦相手になる市大三高と薬師高校の試合を見学している。前評判は市大三高の方が高かったんだけど、5回終了時点で4ー4の同点。

そして勢いは薬師高校にあった。

「お？6回からは天久が投げるのか。」

一也の言う通りに6回の表のマウンドには天久という選手が上がった。

そして打席には薬師高校の4番バッターが入る。

薬師高校の4番は天久が投げた初球に対して、小さな身体を思いつきり使ったフルスイングをした。

空振りをしたけど、あのスイングスピードは哲さんに匹敵するかもしれない。

「藤原、薬師のデータはあるか？」

「ごめんなさい、ほとんどないの。」

クリスさんの質問に貴子ちゃんが申し訳なさそうに答える。

カキンッ！

金属バットの快音を響かせた薬師の小さな4番バッターの打球は、センター方向のスコアボードを直撃するライナー性のホームランになった。

マウンドの天久はショックを受けたのか、スコアボードを呆然と見ている。

「真中が続いて天久からもホームランを打ったか。」

「豪快な空振りをした後にジャストミートのホームランですからね。あれは立ち直るのに少し時間が掛かるんじゃないですか？」

「真中をマウンドに送るのだろうか、真中がどこまで立ち直っていて、どこまで踏ん張れるかが勝負を分けるな。」

その後、市大三高と薬師高校の試合は7ー9で薬師高校が勝利し

た。

「御幸、どう思う?」

「積極的な攻めを見せてましたけど失敗も多かったですね。仕掛けて来てもあまり気にしなくていいと思います。だけどあの4番…轟には注意が必要ですネ。」

貴子ちゃんが教えてくれた薬師の小さな4番の名前は轟 雷市。

市大三高相手に5打数4安打2本塁打の大活躍をした1年生だ。

しかしバッティングではそれだけ活躍した彼なのだが、守備ではエラーを4回記録している。

わかりやすいぐらいにバッティングに特化した選手だ。

「葉輪、予定変更だ。2回戦の先発はお前で行く。」

「はい。」

片岡さんに予定変更を告げられた。

あの轟って奴との勝負が今から楽しみだぜ!



「雷市、イメージは出来たか?」

「カハハハ!全然イメージ出来ねえ!」

市大三高に勝利した後、薬師高校の轟 雷市とその父親であり監督でもある轟 雷蔵は、薬師高校の視聴覚室で次の試合の相手である青道高校のパウプロのピッチングをビデオで見ている。

しかし、轟 雷市はビデオを見てもパウプロのボールをイメージ出来ないと言い、その事に轟 雷蔵は頭を抱えた。

(つたく、やつぱり今大会に出るのは早かったか?)

今年、薬師高校の野球部監督に就任した轟 雷蔵は元々夏の大会に出場するつもりはなかった。

しかし息子の野球人としての成長の為に、夏の大会への出場を決めたのだ。

(稲城の成宮か明川の楊とやれば恩の字と思ってたんだが…まさか本命とやれるたあな。)

轟 雷蔵は苦笑いをしながら頭を搔く。

（今のうちの連中じやあ荷が重いが、遅かれ早かれ経験する事だからな。）

ニヤリと笑った雷蔵は息子の雷市に発破を掛ける。

「雷市、葉輪からホームランを打ったら肉を食わせてやる！」

「カハハハ！肉！」

両手を突き上げて立ち上がった息子を見た雷蔵は、その息子の姿に僅かばかりの期待と財布の中身の心配をしたのだった。



## 第208話☆

夏の高校野球選手権西東京地区大会の2回戦、薬師高校との試合の日がやってきた。

俺は試合前のアップをしながら能力を確認する。

基礎能力

最高球速：155 km (※160 km)

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー7 (※7)

変化球4：高速縦スライダー2 (※7)

投手能力は最高球速を1 km、高速スライダーと高速縦スライダーを1ランクずつ成長させた。

筋力ポイントにはまだ余裕があるけど、変化球ポイントはこれですっからかんになった。

さて、次に野手能力の確認をしよう。

基礎能力2

弾道：4

ミート：A

パワー：B

走力：B

肩力：S

守備：B

捕球：A

野手能力は弾道と肩力を除いて1ランクずつ成長させている。

最後に特殊能力の確認だ。

特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『バント◎』

『キレ◎』

『クイック◎』

『牽制◎』

『サブポジ：外◎』

『尻上がり』

『打球反応○』

『盗塁○』

特殊能力は『バント○』を『バント◎』に成長させ、そして新しく『打球反応○』と『盗塁○』を取得した。

新しく取得したこの二つはコツを得ていたから取得に必要なポイントが少なくなっていたんだよね。

俺は新しく取得した能力の詳細を確認する。

『打球反応○』

- ・ 打球に対する反応速度が良くなる特殊能力である
- ・ 上位能力になると打球以外に対する反応速度も向上する
- ・ 金特殊能力として『神速のインパルス』が存在する

『打球反応○』の詳細はこんな感じだ。

ところで金特殊能力の名称ってあの女神様が考えているのかな？  
だとすると中々の中…いや、想像力だな。

続けて『盗塁○』の詳細確認だ。

『盗塁○』

- ・ 盗塁のスタート勘が良くなる特殊能力である。
- ・ 上位能力になると一步目の速さ及び加速力も向上する
- ・ 金特殊能力に『怪盗』が存在する

塁を盗むから『怪盗』なのか？

まあ、いいか。

こんな感じの能力で夏の大会を戦っていくぜ！



「おーし、お前ら、よく聞いておけよ。」

薬師高校の監督である轟 雷蔵が腕を組んでメンバーを見渡しなが  
がら声を掛ける。

「青道の先発はありがたくも、あの怪物くんだ。正直に言えば雷市で  
もまともには打てねえだろう。だがな、だからといって当てるだけの  
つまんねえバッティングはするんじゃないぞ。そんな事をしやがっ  
たら直ぐに交代させっからな！」

「「はー！」」

一同の元気な返事に頷いた雷蔵は話を続ける。

「今日の打順を見て疑問に思った奴もいんだろ？なんせ雷市が1番だ  
からな。その理由を今から説明するぞ。ぶっちゃけ、あの怪物くんか  
ら点を取るには一発狙いしかねえと思ってる。お前らには悪いが  
な。」

雷蔵は苦笑いをしながら頭を掻くが、薬師の教え子達は不満な表情  
をせずに真剣に話を聞いている。

「うちで一番のバッターは雷市だ。その雷市に一打席でも多く回す。  
その為の1番バッター起用だ。わかるな？」

「「はー！」」

教え子達の返事に頷いた雷蔵はニツと笑う。

「とまあ、情けねえ大人の言い訳はここまです。怪物くんと試合を思いつきり楽しんでこい！勝ったら焼肉を奢ってやるからな！」

「オオ——！！」

雷蔵の発破に1番バッターの雷市は肉と叫びながら打席に向かう。

（雷市、野球の怖さを知っても楽しめる様になれば、お前ならプロに行ける。∴俺と違ってな。）

雷市の背中を見送る雷蔵の目は監督としてのものではなく、親としての暖かさを秘めていたのだった。

## 第209話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の第2回戦、青道と薬師の試合は7回の表まで進んでいた。

薬師高校のベンチからは7回の表の先頭バッターである轟 雷市に必死な声援が送られている。

そんな声援の中で薬師高校の監督である轟 雷蔵はスコアボードに目を向けた。

019

7回の表の薬師の攻撃で3点取らなければコールド負け。

この事実には雷蔵はため息を堪えながら頭を掻いた。

（試合前はもう少しなんとかなると思っただが…現役を離れて俺の勝負勘も狂ったか？）

雷蔵は苦笑いをしながら打席の方に目を向ける。

（つたく、容赦ねえな。完全に雷市を潰しに来てやがる。高校生のくせに可愛気がねえ。）

そう思いながら雷蔵はキャッチャーボックスに座る御幸に目を向ける。

（1打席目も2打席目も真っ直ぐだけで雷市を三振に抑えた…。そして止めにと真ん中を3つってか？）

今度こそため息を吐いてしまった雷蔵は、無精髭を撫でながら雷市に視線を移す。

そこには特徴的な笑いをする雷市の姿はなく、日常のシャイな…素の雷市の姿があった。

（雷市、勝負ってなあ怖えだろ？でもな、その怖えのを乗り越えなきゃ、野球選手になれねえんだぜ…。）

息子の成長を信じて、雷蔵は雷市の背中を見守るのだった。



薬師高校との試合は9-0で俺達、青道高校が勝った。

俺は7回を投げて被安打0、与四死球0、奪三振19の結果だった。  
7回コールドだから参考記録だけど完全試合を達成だ。

これでポイントをガツツリとゲットだぜ！

そんな感じで喜んでいと…。

ピロン♪

俺の脳内に機械音が鳴った。

俺は反射的に能力を使ってステータス画面を開く。

※おめでとうございます。一定条件を達成したので金特殊能力の

『驚異のキレ』を取得しました

※金特殊能力を取得したのでボーナスポイントを贈ります

※一定条件の達成を確認しました。特殊能力の『パワーヒッター』  
を取得します

うおっ!?

一気に2つも取得!?

俺は取得した特殊能力の詳細を確認する。

『驚異のキレ』

- ・キレ系特殊能力の最上位特殊能力である
- ・変化球の変化開始位置が非常に打者寄りになり、変化球の変化速度が上昇する

- ・変化球の球威が上昇し、長打が打たれにくくなる

めっちゃいい特殊能力やんか！

ビックリして思わず似非関西弁が出てもうたわ！

ふう、落ち着いて『パワーヒッター』の詳細も確認しよう。

『パワーヒッター』

- ・強振した際にホームラン性の打球が出やすくなる特殊能力である
- ・打球を遠くに飛ばす感覚を得る

・最上位特殊能力に『アーチスト』が存在する

『パワーヒッター』もいい特殊能力だな。

しかし、打球を遠くに飛ばす感覚かあ…。

この2つの特殊能力の感覚に、西東京地区大会中に慣れる事が出来るかなあ？

明日は休養しなきゃいけないから、明後日から感覚に慣れるとしよう。

さて貴子ちゃんが待つてるし、急がないとな！



青道と薬師の試合が行われた球場のスタンドには、稲城のメンバーの姿があった。

「最速155kmか…また速くなってるな。」

稲城野球部の主将である原田の呟きに、見学に来ていた稲城のメンバー全員が頷く。

「雅さん、試合も終わったし帰るよ。」

成宮が立ち上がると、それに続く様に稲城のメンバー全員が立ち上がる。

「鳴、決勝で青道とやるまで例のボールは封印だぞ。」

「言われなくてもわかってるよ、雅さん。」

成宮と並んで歩く原田が釘を刺すと、成宮は両手を頭の後ろで組みながら返事をする。

「言っておかないと、お前は葉輪に対抗して投げそうだからな。」

「ひでえ！もつとエースを信じるよ、雅さん！」

原田と成宮のやり取りに、稲城のメンバーから明るい笑い声が上がったのだった。

## 第210話★

薬師高校との第2回戦を7回コールドで勝利した青道高校は、第3回戦と準々決勝となる第4回戦に丹波を先発としてマウンドに送った。

準決勝に明川学園、そして決勝では稲城実業と戦う可能性が高く、それらの試合でパウプロを先発として起用する為に丹波に少し無理をさせた形になったが、頼られた丹波は胸を張ってマウンドに立っていた。

そして優勝候補の前評判通りに順調に勝ち進んだ青道高校だが、一つ大きな問題を抱えていた。

それは、捕手達が成長したパウプロの変化球をまともに捕球出来なくなってしまう事だ…。



「いつ!?!…っ—!」

ミットの芯を外してパウプロのスライダーを捕球してしまった御幸は手が痺れてしまい、思わず声を出してしまった。

「二也、大丈夫か!?!」

ブルペンのマウンドからパウプロが声を掛けてくるが、御幸は片手を上げて返事をした。

「いやはや、なんともまあ…」

ブルペンでパウプロの投球練習を見ている落合は驚きで言葉が出てこない。

落合は強豪校でコーチをしてきた経験があり、教え子の中にはプロに行った者もいる。

だがそのプロに行った才能豊かな教え子達の中にも、高校時点でパウプロ程のボールを投げる者は一人もいなかったのだ。

青道高校のコーチである落合だが、捕球に苦戦する捕手達にどう指導しようか頭を悩ませる。



だが、どうしようもない目の前の現状に落合は頭を掻くしかなかった。

（大会期間中でなければ、投げ込みの時間を多くするなりしてまだやりようもあったんだろうがな…。）

大会期間中に練習でケガをして戦線離脱などしたら目も当てられない。

今の落合に出来る事は、痛みに呻き声を上げながらも目を輝かせてキャッチャーボックスに座っている御幸に釘を刺す事だけだ。

「御幸、あくまで調整の投げ込みだ。後10球で終わりにしとけ。」  
「…はい。」

残念そうに苦笑いをする御幸の姿に、落合は大きなため息を吐いたのだった。



パウプロが調整投球をしていた頃、高校野球シーズンを迎えて某ネット掲示板は盛り上がっていた。



【怪物】パウプロを応援するスレ81【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

70：ラスボスは参考記録ながら息をするように完全試合を達成した模様

74：またラスボスカ…壊れるなあ…

79：なお最高球速もまた成長した模様

83：左で155kmとかいい加減にしろ！

85：ワイ野球未経験者なんやけど左の155kmってそんなに凄  
いんか？

90：85▽最高球速だけで言えば日本全国を探せば他にもおるか  
もしれへんけど、ラスボスの凄いところは平均球速も150km前後  
あつてコントロールも抜群なところやね

93：85▽他にもあるで！そういつた凄い連中って無茶な練習を  
重ねて大抵は故障持ちが多いんや！せやけどラスボスは故障持ちの  
噂が欠片もあらへんやろ？せやから凄いねん！

96：ワシは平均160kmを投げた！

100：96▽はいはいおじいちゃん。オムツを交換しましょうね

107：そう言えば薬師のちっこいバッターはいいスイングしとつ  
たよな

111：パワプロに真っ直ぐだけで3三振されたけど、将来が楽し  
みな逸材やで！

115：107▽いいスイングはしとつたけど、あの守備はあかん  
やろ：何回エラーすんねん！

118：サードからコンバートするべきやないか？

122：そもそも守備の基礎が出来てへんみたいやからどこ守って

も一緒や！

125：市大三高のピッチャーを打ち崩したあのバッティングは魅  
力的やけど、あの守備じゃあプロには行けへんな

133：125へまだ1年なんやからこれからやろ

136：アンチスレではあの1年にパワプロからホームランを打つ  
のを期待しとったみたいやけど、早速手の平を返してるわwww

141：アンチスレは今日も平常運転なのであった

## 第211話★

夏の高校野球選手権の準決勝である青道高校と明川学園の試合が始まった。

両チームともエースをマウンドに送り、序盤はランナーを一人も許さない投手戦となった。

しかし4回の表に先頭打者の小湊 亮介が出塁すると、そこから流れは青道へと傾く。

2番バッターが小湊を2塁にバントで送ると、チャンスの場面でこの試合3番バッターに入っているパウプロに打席が回る。

パウプロの次のバッターは4番の結城、そしてチャンスに強い御幸と続く。

楊はパウプロを歩かせる選択をして結城との勝負に出た。

楊の狙いは結城を打ち取ってから御幸を歩かせて増子と勝負。

しかし、楊の狙いは裏目に出た。

結城は一振りで楊からタイムリーツーベースヒットを打ったのだ。

これで2-10と先制点を許してしまったが、楊は希望を捨てずに御幸を歩かせてから後続を打ち取った。

だがこの2失点が致命傷となり、試合は2-10で青道が勝利した。パウプロはスライダーを封印しカーブとチェンジアップ、そしてフォーシームの3球種だけで明川学園から24奪三振の完全試合を達成した。

準決勝で敗れてしまった楊だが、今大会で青道相手にコールド負けしなかった事で選手としての評価を上げていた。

それだけ今大会における青道の前評価は高いのだ。

そしてその青道と同じぐらいいや、パウプロと同じぐらい評価が高い者がいる。

それは稲城のエースである成宮だ。

その成宮を有する稲城も準決勝に勝利して決勝へと駒を進めた。

奇しくも去年と同じく、青道と稲城による決勝戦が始まるのだった。

◆ 『さあ、夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦がまもなく始まろうとしています。実況は私——と解説は——さんでお送りします。解説の——さん、この決勝戦をどう予想しますか?』

『間違いなく葉輪さんと成宮さんの投手戦になるでしょう。』

『両選手共に高校野球界屈指の好投手ですが、解説の——さんは両選手をどう評価しますか?』

『成宮くんは150kmに迫る直球と数種類の変化球を持ち、三振だけだけでなく打たせて取る事も出来る素晴らしい投手です。対して葉輪くんは所謂オールドスタイルの投球スタイルなので、成宮くん比べたらピッチングが危なっかしく見えますねえ。』

『なるほど、ところで葉輪選手と言えば高校卒業後はプロ野球に進まず、直接アメリカに行くという噂がありますが、解説の——さんはどう思われますか?』

『無謀ですねえ。プロの選手はシーズンに100を超える試合を戦うわけですが、そのシーズンの調整方法を知らずに海を渡っても失敗するだけです。そんな事をされたら折角先人達が築き上げたメジャーへの道が彼一人の為に閉ざされてしまいかねません。だからこそ彼もまずはプロ野球に……。』

◆  
【怪物】 パワプロを応援するスレ96 【ラスボス】

1: このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てるように

231: この解説は何をわけわからん事を言ってるんや?

235：向こうとこつちでは試合数もローテもマウンドもボールも違うのになwww

239：露骨なネガキャンで草生えるwww

242：実力も実績もラスボスの方が上やのに主人公くんを持ち上げている時点でお察し

246：こんだけ露骨なネガキャンしてもパワプロが向こうで活躍したら手の平返して取材するんやろなwww

250：アンチスレでは神解説と称賛している模様

255：250＜試合が始まったらお通夜になるまでが流れですねわかりますwww

258：ラスボスのあの変化球を打てる高校生が稲城にいるとは思えんからなwww

263：なんやのあの変態変化球…また凄くなってるんやけど？

266：263＜プロテイン…ですかねえ？

269：準決勝でスライダーを一球も投げてへんかったけどなんでや？

272：269＜キャッチャーが取れへんのやろうな

275：流石ラスボス、息をする様にキャッチャーが取れないボールを投げる！そこに痺れる（ry

279 : 稲城が勝つ可能性はあるんか？

286 : 279 < 秋みたいに味方が足を引つ張ればワンチャンある  
んやない？

291 : エラー待ちせな勝てんとか : 壊れるなあ :

## 第212話

青道と稲城の決勝戦、両チームの先発は共にエースのパワプロと成宮だ。

1回の表、青道の攻撃から始まる。

1番バッターの小湊 亮介が左打席に入ると、成宮は初球にカットボールを投げ込んだ。

アウトコース寄りのやや甘めな所に投げ込まれたが、小湊は見送つてワンストライク。

(立ち上がりは悪くなさそうかな?)

普段はややスロースターター気味な成宮だが、今日の試合の立ち上がりは良さそうだと小湊は感じた。

成宮が投じた2球目はフロントドアのスライダー。

小湊は2球目も見逃してツーストライク。

成宮に追い込まれても小湊は落ち着いていた。

(さて、他のボールも見せて欲しいから、少し粘らせてもらおうよ。)

3球目、アウトコースのフォーシームをカットしてファール。

4球目、真ん中低めのフォークを見逃してワンボール、ツーストライク。

5球目、フロントドアのスライダーをカットしてファール。

6球目、インローのチェンジアップをカットしてファール。

7球目、アウトローのカットボールを見逃してツーボール、ツーストライク。

初回から小湊が持ち前の選球眼とバッティング技術で粘り、今日の成宮のボールを丸裸にしていく。

成宮は一度プレートを外してロージンバグを手に取った。間を取られても小湊は打席を外さず、集中を切らさない。

そんな小湊を横目でチラリと見た原田は、小湊の成長に驚いていた。

(元々小技の上手い選手だったが、ここまでのバッティング技術はなかったはずだ…何があった?)



小湊から目を外して原田は成宮に目を向ける。

(だが、成長したのは鳴も同じだ。)

原田がサインを出すと、成宮は首を横に振った。

(鳴……ここを使うつもりか?)

原田がサインを出し直すと、成宮は首を縦に振った。

小さく息を吐いて原田がインコースに寄る。

8球目、成宮がボールを投げ込むと、小湊は球種をフォーシームと認識してスイングを始めた。

しかし…。

ガキッ!

バットから伝わった手応えに小湊は驚きながらも1塁へと駆け出す。

だが打球はセカンド正面の優しいゴロとなり、小湊は成宮に打ち取られてしまった。

1塁ベースを踏んでからベンチに戻る小湊はチラリと成宮を見る。

(俺が打ち損じた…わけじゃないみたいだね。)

小湊は2番打者に一言耳打ちをすると、駆け足でベンチに戻っていったのだった。



(クリスさんや一也だけじゃなくて、亮さんも面倒なバッターになったな。まあ、俺の勝ちだけだな。)

小湊を打ち取ってロージンバッグを手に取った成宮は次のバッターへと目を向ける。

(こいつは余裕。さっさと打ち取ってパワプロと勝負。)

成宮の思い通りに青道の2番打者は三球三振で抑えられてしまう。そして3番打者としてパワプロが打席に入った。

(雅さん、初球からいくよ。)

成宮が投げようとしているのは新たに習得した変化球…高速チェンジアップだ。

この高速チェンジアップを習得した経緯は怪我の巧妙と言えるものである。

春の甲子園で敬遠暴投した後の成宮は一時期、ピッチングにおいてコントロールが不安定になってしまった。

そのコントロールが不安定な時期に、特に決め球のチェンジアップのコントロールが乱れた事で成宮はチェンジアップの握りを元々の握り：中指と薬指で投げる握りに一度戻した。

元々投げていた握りでもブランクがあった為、成宮が想定した程にチェンジアップの球速が落ちなかったのだが、その一球を受けた原田は使えろと判断した。

そこから原田と成宮は試行錯誤して、現在習得した高速チェンジアップへと辿り着いたのだ。

成宮は初球から高速チェンジアップをインコースに投げ込む。

高速チェンジアップをフォーシームと認識したパワプロがバットを振る。

ガキッ！

鈍い打球音と共に、打球は2塁手の正面に転がっていく。

2塁手が打球をしっかりと処理してスリーアウト。

(どうだ、パワプロ！)

首を傾げながらベンチに戻るパワプロの背中を見た成宮は、ご機嫌な様子でマウンドを下りていったのだった。

## 第213話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦、青道と稲城の試合は成宮の三者凡退による快投から始まった。

続く1回の裏はパウプロが三者連続三振でお返しをすると、2回の表にはこの試合の注目の対決の1つである成宮と結城の勝負が始まった。

多くの者が小湊 亮介との勝負の様に長引くと予想したのだが、その予想に反して勝負は三球で決着がついた。

勝者は結城を高速チェンジアップでショートゴロに打ち取った成宮だ。

青道のメンバーは成宮の新変化球の正体が掴めず、2回の表も三振凡退に抑えられてしまう。

そんな青道メンバーに、今大会から太田部長に代わってベンチに入っている落合が成宮の新変化球の正体を示した。

「おそらくだが、あれは高速チェンジアップだろう。」

この一言に青道ベンチの注目が集まる。

「落合さん、チェンジアップって遅い変化球じゃないんですか？」

「そういった認識が多いだろうが、なにも変化球は遅くないとダメというわけではない。肝心なのは打者を打ち取れるかどうかだから。それに、お前が投げるスライダーも一般的なスライダーに比べて球速が速いだろうか？」

落合の言葉にパウプロは素直に頷く。

「まあ、日本では珍しい変化球だからな。攻略するには時間が掛かるだろう。」

そう言って落合がチラリと目線を片岡に送ると、片岡が頷いてから話し出す。

「一球一球集中していけ。打撃だけでなく守備でもだ！」

「「はー！」」



青道と稲城の試合は多くの者の予想通りにパウプロと成宮による投手戦となった。

脅威的なペースで三振を積み重ねるパウプロに対し、成宮は打たせて取るピッチングと三振を奪いにいくピッチングを合わせて巧みに青道打線を抑えていった。

成宮は7回の表に小湊を歩かせてしまったが、それ以外の打者は完全に抑えてノーヒットノーランを続けている。

そんな成宮と投げ合うのが楽しいのか、パウプロは笑顔で完全試合を継続していった。

こういった試合では継投のタイミングが難しい。

故に両チームの監督はエースとの心中を覚悟した。

そして9回裏、パウプロがここでも三人で稲城打線を抑えて完全試合を継続すると、青道と稲城の試合はタイブレークとなる延長戦へと突入するのだった。



十回の表、タイブレークルールによりノーアウト、1、2塁の状況から青道の攻撃が始まる。

先頭打者の青道の2番バッターが送りバントを成功させ、ワンアウト、2、3塁の状況でパウプロに打席が回る。

ここで原田はタイムを取って稲城の内野陣をマウンドに集めた。

「勝負所だ。」

原田の言葉に稲城のメンバー全員が頷く。

「内野ゴロでも失点しかねん。バックホームは意識しておく必要があるが、コーチングをしっかりとやっていくぞ。」

「二応！」

メンバーの返事に頷いた原田は成宮に目を向ける。

「鳴、スタミナは大丈夫か？」

「問題ないよ、雅さん。」

夏の高温のマウンドで体力を削られている筈の成宮だが、その立ち振舞いはエースの貫禄を十分に感じさせるものだ。

そんな成宮を中心に小さく円陣を組んで気合いを入れると、各々の守備位置に戻っていく。

(勝つのは俺だ…パワプロ！)

延長に入ってギアを上げた成宮は初球に渾身のフォーシームをアウトコースに投げ込む。

このフォーシームをパワプロは見逃し、判定はストライク。球場にざわめきが起こる。

原因はバックスクリーンに表示されている球速にあった。151km。

延長でありながら成宮の最高球速が更新されたからだ。

ミットから伝わった手応えに原田の背に震えが走る。

(鳴…お前は、最高のエースだ！)

2球目、原田のサインに頷いた成宮はインコースにフロントドアとなるカットボールを投げ込む。

カキンッ！

バットを振りきったパワプロの打球は場外へと消える大ファールとなった。

歓声と悲鳴がマウンドの成宮に入り雑じって聞こえるが、成宮に動揺はなかった。

(どれだけ飛ばしてもファールはファールだし。)

3球目、成宮はアウトローぎりぎりに決め球であるチェンジアップを投げ込む。

この1球をパワプロは辛うじてバットに当ててファール。

4球目もアウトローにチェンジアップを投げ込んだが今度はボールゾーンに外れ、パワプロはこの1球を見逃した。

見逃されたが成宮と原田に動揺はない。

今の1球は次の1球への布石だからだ。

アウトコースにチェンジアップを2球続ける事でコースと球速に慣れさせて、パワプロをインコースで打ち取る為の配球。

パワプロがインコースを得意としているのは既に多くの者に知られている。

その得意なインコースでエースのパワプロを大事な場面で打ち取る事で流れを呼び込む。

これが成宮と原田が出したパワプロに勝つ方法だった。

カウントはワンボール、ツーストライク。

勝負をするには絶好のカウントだ。

成宮は原田が出したサインに迷わず頷いてセットポジションに入る。

そして、インローに高速チェンジアップを投げ込んだ。

前の1球よりも速いボールでインコース：フォーシームと勘違いしてスイングをする可能性は十分だった。

更にインローのストライクゾーンから僅かにボールゾーンへと変化する事で空振りや打ち損じを誘う。

成宮はリリースの瞬間に、原田はパワプロがアクションを起こした瞬間にこの打席の勝負の勝利を確信した。

だが、パワプロの狙いは最初から1打席目に打ち取られたインコースの高速チェンジアップだった。

カキンッ！

金属バットの快音が鳴り響くと、原田はマスクを勢いよく外しながら立ち上がって打球の行方を確認する。

打球は右中間を高々と飛んでいる。

もし中堅手のカルロスが打球に追い付いてもタッチアップには十分な飛距離だ。

だが、パワプロが放った打球は右中間フェンスに直撃した。

右中間フェンスでボールが跳ねたのを見た原田はポトリとマスクを落としてしまう。

青道のランナー二人がホームインしたのを見た成宮は大きく息を吐くと、諦めずに次の打者である結城に意識を向けるのだった。

## 第214話★

パワプロのタイムリーツーベースと結城のタイムリーヒットで青道は10回の表に3-0と勝ち越しに成功した。

しかし10回の裏に稲城の先頭打者であるカルロスがセーフティ気味の送りバントでランナー2、3塁の状況を作ると、次のバッターである白河の打席で御幸はワンバウンドしたパワプロのカーブを後逸して青道は1点を失点してしまう。

尻上がりに加えピンチの場面で更にギアが上がった事で、パワプロ自身の予測も超えるキレでボールが変化したのだ。

この失点はワイルドピッチと記録されたが、ボールを止める事が出来なかった御幸は試合後も悔しさを隠さなかった。

去年の秋の地区予選決勝以来のパワプロの失点に球場はざわついたが、パワプロは変わらぬ笑顔で残り二人を連続三振で抑えて3-1で試合は終了。

青道は3大会連続で甲子園出場となったのだった。



甲子園に乗り込んだ青道を例年より多数のマスコミが待ち受けていた。

マスコミの目的は何もパワプロだけではない。

青道には今年のドラフト候補と予想されているクリスや結城に小湊とタレントが揃っているのだ。

しかもこのドラフト候補達は容姿も整っている事もあって数字を見込めるとあれば、他社のマスコミと仕事用スマイルで押し合いをしているのも無理はないだろう。

そして、青道を待ち受けていたのはマスコミだけではない。

高校野球ファンがパワプロを一目見ようと、青道の宿泊先に押し掛けている。

試合のそれとは違う熱気に戸惑う青道メンバーの中で、素早く動い

たのは出来る女である高島だ。

高島は無理矢理にでも言葉を取ろうとするマスコミやサインを強請るファンに対応し、青道メンバー達を宿泊先に避難…もとい移動させた。

まさにファインプレーである。

そんな出来る女である高島に異性の噂が影も形もないのが、彼女の父である青道高校理事長の悩みの種であるのは秘密だ。

高島のファインプレーによって宿泊先で英気を養った青道メンバーは甲子園で躍動した。

なんと、甲子園まで勝ち進んできた全国の強豪達を相手に決勝まで大差をつける破竹の勢いで勝ち進んだのだ。

そして迎えた甲子園での決勝戦、青道は北海道の覇者である巨摩大にも9-0の大差で勝利したのだった。



『第〇回高校野球選手権大会は青道高校が春夏の連覇、そして夏の大会の連覇も達成しました！解説の——さん、青道高校の奮闘は如何でしたでしょうか？』

『打の青道といわれるだけあって素晴らしい強打でしたねえ。ですが、その強打の要である3年生も今大会で引退です。秋の大会で青道高校の真価が問われますねえ。』

『なるほど、ところで青道高校のエースである葉輪選手が一大会での奪三振数記録を更新しましたが、この快投の原因はなんだと思われますか？』

『流行りであるムービングボールへの対応で多くの打者がフライを打とうとしているからでしょうねえ。やはり日本の野球は他家芸であるスモールベースボールをするべきなのですよ。バッティングの基本であるセンター返しを中心にスイングはコンパクトに…。』





【怪物】 パワプロを応援するスレ107 【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てるように

422：この解説は何を見てたんや？明らかにセンター返しを狙ってコンパクトなスイングをしてもパワプロのボールを打てなかったんやけど？

428：【悲報】 解説者が無能【いつも通り】

435：あの変態スライダーを投げへんでそれやからね。もし投げたら蹂躪どころの話やなくなるやろうなwww

512：青道は3年が引退して攻撃力が下がるやろうけど、秋の大会は大丈夫なんやろか？

517：512＜パワプロが自援護すればいいだけや！

523：517＜もうパワプロ一人でいいんじゃないかな？

## 第215話

春夏の連覇だけでなく夏の大会の2連覇も達成した事で、俺達が甲子園から青道高校に戻ると去年以上の大騒ぎになった。

地元局の記者に青道高校野球部のOBといった来客が増えたせいで、3年生の引退紅白戦が3日程先伸ばしになっちゃったんだよね。その3年生引退紅白戦も無事に終わると、3年生達は最後に片岡さんを胴上げしてからグラウンドを去っていった。

後日、一也や貴子ちゃんからの又聞きだけど3年生達の進路を聞いた。

哲さんはプロ志望届けを出すそうだ。

それでドラフトに掛からなかったら、社会人野球からプロを目指すらしい。

亮さんは大学に進むみたいだ。

そして大学の4年間で肉體改造をしてもっと長打を打てる様になつてからプロに行くそうだ。

宮内さんも大学に進むらしいけど、宮内さんはプロではなく野球部のある企業への就職が目標らしい。

純さんはスカウトの人から色好い声を掛けて貰っているそうでプロに行くつてき。

秋のドラフト会議が楽しみだ。

丹波さんもスカウトの人から色好い声を掛けて貰っているそうなんだけど、丹波さんは大学に進学するそうだ。

丹波さんは市大三高でエースだった真中さんと幼馴染みなんだけど、その真中さんと同じ大学でエース争いをしたいからとの事。

頑張ってください、丹波さん！

最後にクリスさんなんだけど、クリスさんはプロ志望届けを出すけど大学受験も視野に入れているらしい。

一也が詳しく聞いたみたいなんだけど、クリスさんの今の状態では年間100を超えるプロのシーズンでマスクを被り続けるのは難しいんだそうだ。

だからDHとの併用が出来るパ・リーグならプロ入りするけど、セ・リーグなら大学に進学してじっくりとプロで戦える身体作りをするんだってさ。

ちなみに一也はクリスさんにいずれはメジャーに行く気持ちがあるのかと聞いてみたそうだが、クリスさんは「俺の肩の事を知っても指名してくれた球団に骨を埋めるつもりだ。だから次に一緒にやれる機会は国際試合になるな。」と言っていたそうだ。

国際試合かあ…。

俺はドラフト指名を断つてでもアメリカに行くって表明してるんだけど…日本代表に選ばれるのかなあ？

そんな俺の心配は杞憂に終わる。

何故なら後日、新チームでの練習中に俺と一也がU-18の日本代表メンバーに選ばれたと、礼ちゃんから伝えられたからだ。



「新チームが始動したばかりの忙しい時期に招集に応えてもらい感謝する。俺はU-18日本代表の監督の…。」

硬式野球U-18日本代表メンバーが空港に集まると、日本代表監督の話が始まった。

チラリと周囲を見ると見覚えのある顔がチラホラとある。

稲城からは成宮を始め、カルロス、先日引退した原田さん、そしてシニアで一緒だった白河が参加している。

市大三高からは天久が参加している。

そして薬師からは驚いたことにまだ1年生の…えっと、轟？が参加していた。

ただ、今回は諸事情…主に協会から出される遠征費の関係で関東地区にある高校以外の選手は選ばれていないらしい。

世知辛い理由だなあ。

「これから硬式野球U-18国際大会が開催されるアメリカに向かう！準備はいいか！」

「はい！」

代表監督の檄に伝えて、俺達は搭乗ゲートに向かうのだった。  
よっしゃ！

初めての国際大会の舞台を楽しんでやるぜ！

## 第216話☆

飛行機でアメリカに渡り、宿泊先で一泊をした翌日には今大会の代表チームで練習を始めた。

今大会は3日後に始まるんだけど、予選は参加国の8チームを2グループに分けてのリーグ戦から始まって、そのリーグ戦の上位2チームがそれぞれのグループを突破して決勝トーナメントを戦う形になっている。

これがおよそ2週間の過密日程で行われるんだけど、これは主に日本の高校野球の秋の大会日程に配慮された結果なのだそうだ。

そのせい：というわけじゃないんだろうけど、使用球やストライクゾーン等はアメリカのものになるそうなので、俺達日本代表チームを含めたアメリカ以外のチームは3日でそれにアジャストしなければならぬ。

そんなわけでアメリカの硬式球で日本代表チームは練習を始めたんだけど、愚痴に近い言葉が多くの選手から出始めていた。

「マウンドは硬いしボールは滑りすぎー！」

こんな風にハッキリと文句を言っているのは成宮なんだけど、他の投手も同じ理由で少なからずコントロールに苦戦をしている。

まあ、俺もコントロールに苦戦をしているんだけどね。

パアン！

「パワプロ、ナイスボール！」

俺のボールを受けている一也がそう言うけど、日本のボールで投げている時に比べればコントロールは良くないのが現状だ。

ボール1つ分は狙った所からずれてしまう。

アメリカの硬式球が日本の硬式球に比べて滑るのもそうなんだけど、ボールの縫い目の違いも今まで投げていたボールと比べてノビやキレに違いをもたらしている。

「鳴、どんな調子だ？」

「スライダーは滑ってまともにコントロール出来ないよ、雅さん。でも、フォークとか挟む握りのチェンジアップはいい感じにボールが抜

けるから投げやすいかな。」

原田さんと成宮がそんな会話をしていると、近くにいた他の投手陣も頷いている。

「パワプロ、お前はどうか？」

一也もキャッチャーボックスからマウンドに来て俺に問い掛けてきた。

「どうしても狙った所からボール1つ分は狙いがずれちゃうなあ。」

「確かにフォーシームでも少しずれているな。修正出来そうか？」

「うーん、試合までには無理そうかな。」

「そうか、それじゃそう考えてリードするわ。」

一也がミットで俺の胸を軽く叩いてからキャッチャーボックスに戻ると、俺は変化球も投げ込んで感覚を確かめていった。

(変化球の軌道も日本のボールとは違うなあ。なんかキレがよくなった感じ?)

アメリカのボールは滑ってコントロールが効かないかわりに、変化球のキレが日本のボールよりもいいように感じる。

そのせいなのか、一也は日本ではしっかりと捕球出来ていた俺のカーブも、ミットの芯を何度も外して捕球してしまっている。

「大丈夫か、一也?」

「おう! 気にせずにごんごん投げ込んでくれ!」

一也の要求に応じて俺はボールを投げ込んでいく。  
すると…。

ピロン♪

例の機械音が脳内に鳴り響いたので、一也からの返球を受け取りながら確認をする。

※使用球の変化に伴い、能力の表示を更新します。

ん? どういうこと?

俺はステータス画面を開いて能力の確認をする。

## 基礎能力

最高球速：155 km (※160 km)

制球：B (※S)

スタミナ：S (※S)

変化球：カーブ6 (※7)

変化球2：チェンジアップ6 (※7)

変化球3：高速スライダー6 (※7)

変化球4：高速縦スライダー1 (※7)

制球が2ランク、変化球が1ランクずつ下がってる…。

コントロールは確かに下がっている実感があったけど、変化球は逆に良くなっている感じなんだけどなあ？

まあ、いいか。

とりあえず、制球だけでも成長させるか。

俺は目線でステータス画面を操作して能力を成長させようとする。

しかし…。

ブブー♪

また機械音が脳内に鳴り響いたので確認をする。

※現所属カテゴリーの限界まで成長しているので、これ以上成長させる事は出来ません。

…マジで？

そうになると、高校卒業してからアメリカに来たら、必然的に制球がBまで下がるって事か。

うーん…ミートをSまで成長させようかと思ってたけど、後々の為に技術ポイントは残しておいた方がいいかな？

そんな感じで悩んでいると、監督の指示でキャッチャーが原田さんに交代した。

俺は原田さんを相手に投げ込みをして、アメリカのボールの感覚に

少しずつ慣れていくのだった。



(これが葉輪のボールか…。)

原田はパワプロのボールを受けて驚愕していた。

(真っ直ぐのノビも、変化球のキレも鳴のものとは1つ…いや、2つは違う。)

パワプロのカーブを芯を外して捕球をした原田は、悔しそうに表情を歪める。

(残念だが、今の俺では葉輪のボールを受けきれん…。)

マスクの奥で歯噛みをする原田だが、臆せずにミットを構えている。

(大会が始まるまで1週間…それまでに、少しでも成長してみせる！)

この日から原田と御幸の熾烈なブルペンキャッチャー争いが始まる。

それを見た成宮が不機嫌になるが、原田がそちらのケアも欠かさずにいると、日本代表監督や現地に訪れていた日本球団のスカウト達の評価を上げていくのだった。



## 第217話

パウプロ達がアメリカに渡った頃、青道高校のグラウンドでは練習試合が行われていた。

甲子園を経験した3年生達が引退した事もあって、青道では新戦力を含めた新しいチームの形を模索している所なのだが、青道の支柱であるパウプロと御幸がいない事もあって、青道高校野球部の新しい1軍はどこかまとまりに欠けていた。

そんな1軍メンバーが都外の強豪校を相手にダブルヘッダーで練習試合をしているのだが、その試合内容は秋の大会に暗雲を感じるものになっていたのだった。



午前に1試合目の練習試合を終えて午後となった現在、2試合目の練習試合は4回を迎えていた。

「川上、準備をしておけ。」

「はいー」

片岡の指示で川上がアップを始める為にベンチを立ったのを、落合は横目でチラリと見る。

（思ったよりも東条を引っ張ったが…まあ、まだ1年だと考えれば上出来か。）

そう思いながら落合はマウンドに立つ東条に目を向ける。

（川上が今準備を始めた事を考えると6回までだな。3回までで2失点といった結果だが、2巡目以降の強豪打線相手にどこまでやれるか…。）

頭を掻く落合は午前中に行われた1試合目の事を思い出す。

（沢村、降谷共にランナーが出たら、相手にいいように揺さぶられていた。経験不足もあるが、それ以上に知識と技術が不足しているな…まあ、収穫はあったがね。）

1試合目の沢村と降谷は、落合が思い出している通りにいいように

相手に揺さぶられて大量失点をしてしまい1試合目の練習試合に負けてしまった。

だが沢村は天性のバントの上手さを、降谷は長打力を発揮して後に繋がるだろう好材料を見せた。

(降谷は葉輪の様に外野を兼任させるのもありだな。外野守備で走らせて足腰を、低く速い送球で肩を鍛えれば後々に活きてくる。)

落合は顎髭をしごいて東条を見ながら、沢村の事も考える。

(沢村は…とりあえずアウトコースのピッチングを覚えさせるか。どうもインコースの力勝負に拘る傾向が強いからな。降谷もそうだったが…これもエースの影響かね?)

良くも悪くも後輩達に影響を与えるパウプロに、落合はため息を吐く。

(フィールディングにセットポジションと沢村と降谷はまだまだ課題が山積みか…。だが、指導しがいがある原石ってところか。)

コーチとしての腕の振るいがいないエースの事を思い浮かべた落合は苦笑いをするのだった。



場面は変わってアメリカでの練習初日を終えたU-18硬式野球日本代表メンバーは、宿泊先に戻って身体を休めていた。

その身体を休めている時、パウプロと御幸が泊まる部屋に成宮と原田が訪れていた。

「なあ、パウプロ。お前、卒業したらアメリカに行くって本当か？」

「おう！本当だぜ、成宮！」

「ふん。」

自分から聞いておいて興味がない様な声で返事をする成宮だが、その実はかなり気にしていた。

「成宮はどうするんだ？」

「俺？俺はドラマーでプロに行くに決まってるだろ。」

「メジャーには興味なし？」

「俺はプロでNo. 1になるから、それから大手を振ってメジャーに行くのも悪くないな。」

そんな二人の会話を小耳に入れながら、御幸と原田はキャッチングの事について話し合っていた。

「御幸、葉輪のスライダーだが、どうしている？」

「パウプロのスライダーは横滑りしますよね？なので普通なら脇を開けてミットを横に使う様にするんですけど、右打者のインローに要求する時は逆に脇を閉めてますね。」

「脇か…。」

原田はそう呟きながら左手を動かしてイメージをする。

「まあ、俺も最初はパウプロのスライダーを取れる様になるまで時間が掛かりましたから。」

「だが、今は苦戦しているようだな。」

「進化が止まらない頼もしい相棒ですからね。」

御幸がそう言って肩を竦めると、対戦した者として実感があるのか原田が頷く。

「次回は俺から葉輪のボールを受けさせてもらうぞ。」

「お断りしますよ、原田さん。パウプロのボールを受けるのは誰にも譲りません。」

その後、パウプロと成宮が飲み物を買に行った際に、宿泊施設内で迷子になっていた轟 雷市を保護したりといった一騒動があったりしてアメリカでの日々が過ぎていく。

そして1週間が経ち、U-18硬式野球国際大会の予選リーグが始まるのだった。

## 第218話

U-18硬式野球国際大会の予選リーグが始まる日がやって来た。今大会には日本、台湾、中国、韓国、オーストラリア、プエルトリコ、キューバ、アメリカの全部で8つの国が参加する。

予選リーグのグループ分けはAグループが日本、台湾、中国、オーストラリアとなり、Bグループは韓国、プエルトリコ、キューバ、アメリカとなっている。

このグループ分けにとある国が異議を申し立てたみたいなんだけど、結局その異議は通ることなくそのままのグループ分けで大会は進行されるみたいだ。

さて、この予選リーグなんだけど一つ大きな問題がある。

それは…球数制限だ。

この球数制限で最大でも75球までしか投げられないので、基本的に継投を強いられる事になる。

しかも、25球以上投げた投手は次の試合に登板出来ないというルールもあるのだ。

逆に言えば25球未滿なら次の試合にも登板出来るので、中継ぎや抑えの使い方が大事になるみたいだな。

この球数制限の対策として日本代表チームは20人のベンチ入りメンバーに8人の投手を用意している。

それと、球数制限以外にも日本の高校野球とは違う所がある。

それは…DH制が採用されている事だ。

バッティングもやりたい俺や成宮にとってはあまり嬉しくないDH制なんだけど、他の投手にとってはピッチングに専念出来るとあって歓迎ムードを出している。

ただ、DH制は相手打線が全員野手になるので、不慣れな俺達はピッチングのペース配分に影響が出るだろうというのが監督の言葉だ。

そういった諸々の事があるからなのか、俺は予選リーグでは基本的にレフトでの出場らしい。

それで中継ぎや抑えの場面で1イニングだけ投げる予定のようだ。  
ちなみに予選リーグでは成宮と天久が先発の予定だ。  
さあ、いよいよU-18硬式野球国際大会の予選リーグが始まるぜ

！



予選リーグの1戦目の相手は中国代表との試合だ。

成宮が先発して1回の表は三者凡退に抑えた。

スライダーが滑って抜ける事と球数制限を考えて成宮はカット  
ボール主体の打たせて取るピッチングをしていくみたいだ。

ちなみにこの試合の捕手は稲城でバッテリーを組んでいた原田さ  
んだ。

一也はDHで6番バッターとして出場してるぜ！

さあ、1回の裏になって俺達日本代表チームの攻撃だ。

1番バッターのカルロスがセンター前ヒットで出塁すると、続く2  
番バッターの白河もライト前ヒットで出塁した。

カルロスの好走塁もあってノーアウト、1、3塁のチャンスだ。

このチャンスの場面で3番バッターに入っている俺に打席が回っ  
てきた。

俺は監督のサインを確認する。

好きに打て？

じゃあ遠慮なくホームランを狙おう。

俺が打席に入ると、相手投手はインハイの顔付近にボールを投げ込  
んできた。

そのままだと当たるので身体を反らして避けると、続く2球目もイ  
ンハイにボールを投げ込んできた。

でも、2球目はストライクゾーンにボールがきたのでバットを振り  
抜く。

すると、打球はライトフェンスを超えてスリーランホームランに  
なった。

この一発がキツカケになったのか、続く4番バッターの轟もホームランを打つなど1回から日本代表打線は爆発して試合終了時には18-4の大差で1戦目を勝利したぜ！

しかし、大差だったからなのか俺の登板はなかった。

うーん：残念。

続く2戦目は台湾代表との試合だ。

楊 舜臣が台湾代表に選ばれていたので俺達との試合で投げるかなと思っただけ、楊は前回のオーストラリア代表との試合で先発していたので投げられないみたいだ。

ちなみにそのオーストラリア代表との試合は4-3で台湾代表チームが勝ったみたいだ。

楊は7回を73球で投げ抜いて無失点の結果だったと、日本代表チームのスコアラーの人が教えてくれた。

楊が投げない台湾代表チームとの試合は結果からいうと8-2で日本代表チームが勝利して、予選リーグ勝ち抜きを決めた。

この台湾代表チームとの試合でも俺の登板はなかった。

そして予選リーグ最後の試合であるオーストラリア代表チームとの試合。

中国代表チームに勝って1勝1敗のオーストラリア代表チームは、予選リーグ突破を賭けて全力で日本代表チームに挑んでくるのだった。

## 第219話

「鳴でもスライダーを使えないときついかな…。」

U-18日本代表チームとU-18オーストラリア代表チームとの試合は5回の裏まで進んでいた。

現在は5回の裏のオーストラリア代表チームの攻撃中であり、先発の成宮がツーランホームランを打たれて失点をしたところで、DHでベンチにいる御幸が一人言を溢しているのだ。

「元々、鳴はフォーシームとスライダーで組み立てるピッチャーだから、スライダーでストライクを取れなくなると投球のリズムが崩れるんだな。」

カットボール主体のピッチングで抑えてきた成宮だが、ボールの違いとマウンドの違いでコントロールに苦しみ、カウントを悪くしてしまう状況が続いていた。

「まだ3-2で勝ってはいるけど…この回で追い付かれるかもな。」

御幸の言葉通りに成宮はさらにソロホームランを打たれて、日本代表チームは同点に追い付かれてしまう。

「球数も67球だし、鳴はこの回までか。」

同点に追い付かれてしまった成宮だが、それでも大崩れはせずに5回終了まで投げ抜いた。

「この試合に負けても得失点差で1位通過は出来るけど、やっぱり全勝で勝ち進みたいよな。」

御幸はレフトからベンチに戻ってくるパウプロにチラリと目を向ける。

「監督はパウプロを決勝トーナメントまで温存したかったみたいだけど、今日は出番があるかもな。」

ニツと歯を見せて笑った御幸は、バットを持ってネクストバッターサークルに向かうのだった。



U-18日本代表チームとU-18オーストラリア代表チームの試合は5回までは緊迫した投手戦だったが、6回からは乱打戦となった。

6回の表に日本代表チームが2点を獲得すれば、その裏にオーストラリア代表チームは4点を叩き出して逆転に成功する。

しかし7回の表には日本代表チームが同点に追い付く。

7回の裏に満塁のピンチを迎えたが、継投策がハマってなんとかオーストラリア代表打線を抑え込んだ。

7回の表からパウプロが肩を作り始めたのだが、現地を訪れていたロジャーズスカウトのベックがパウプロがアップを始めたのを見て笑みを浮かべる。

8回の表の日本代表チームの攻撃は無得点に終わったが、8回の裏に日本代表チームは更に投手を交代してオーストラリア代表の攻撃をいなす。

9回の表、日本代表チームの主砲である轟がソロホームランを放って勝ち越すと、日本代表チームの監督は9回の裏のマウンドにパウプロを送り出したのだった。



『どうやらパウプロが投げるみたいだね。こいつはラッキーだ。』

スタンドで試合を見ているロジャーズスカウトのベックが口笛を吹く。

『それにキャッチャーも一也に交代か。こいつはますますラッキーだ。』

ベックはカメラを回しながらメモ張を手取る。

『一人目はオーストラリア代表の4番で左バッターか：パウプロはアメリカのボールにアジャスト出来たかな？』

パウプロが投げた初球にオーストラリア代表の4番は腰を引いた。

しかし、パウプロが投げたボールはまるで壁に当たって跳ね返った様に急激な変化をしてストライクゾーンへと入り込んだ。



『ははっ、高校生とは思えないクレイジーなブレーキングボールだ。でも、一也はパワプロの変化球をしつかりと捕れないみたいだね。マスの奥の表情が随分と痛そうだな。』

メモ張を片手に双眼鏡を覗き込むベックは、御幸の表情を見て苦笑いをする。

『まあ、あのクレイジーなブレーキングボールを高校生に捕れということも酷い話か。打てというのはもっと酷い話だけだね。』

続く2球目、パワプロのインコースのカーブを仰げ反って避けてしまったオーストラリア代表の4番バッターは、3球目のアウトローのフォーシームで見逃しの三球三振に倒れてしまった。

『パワプロ、パーフェクトだよ。君のおかげで、僕の来年のボーナスに期待出来そうだな。』

この後、パワプロがオーストラリア代表打線を三者連続三球三振に抑えて日本代表チームが勝利したのを見届けたベックは、笑顔で球場を後にしたのだった。

## 第220話

「小湊、どうだ？」

「哲、ちよつと待って…うん、U-18日本代表は決勝トーナメントに勝ち進んだみたいだね。」

携帯電話を片手に小湊 亮介がそう報告すると、それを聞いた結城、丹波、伊佐敷、クリスが頷いた。

「へつ、こりゃあ俺達も負けられねえな！」

「ああ、俺達も勝つぞ！」

「「応ー」」

伊佐敷の言葉に頷いた結城が発破を掛けると、その場にいた元青道高校野球部の三年生達が大声で応えたのだった。



「皆、そのまま聞いてくれ。決勝トーナメントの組合わせが決まった。準決勝の相手はキューバ、決勝の相手は台湾かアメリカのどちらかだが、おそらくはアメリカだろう。」

U-18日本代表のメンバーが代表監督の言葉に頷く。

「キューバの先発はエースのアロン・ヂップマンがくるというのが俺の予想だ。ヂップマンは190cm以上の長身のサウスポーで、まだ17歳ながら160kmの真っ直ぐを投げる速球派投手だ。」

ここで一度言葉を切り、日本代表監督はメンバーの顔を見渡す。

「持ち球にスライダーとチェンジアップをスコアラーが確認しているが、ヂップマンはコントロールがあまり良くないらしい。カウントを悪くした時にはスライダーでストライクを取りにくる傾向が強く、そのスライダーが狙い目だ。見逃さずにしっかりと打てよ。」

「「はい」」

メンバーの返事に頷いた日本代表監督が今度は御幸に目を向ける。

「御幸、決勝トーナメントのキャッチャーをお前に任せる。決勝トーナメントからは球数制限の上限が100球に変わるのを知っている

と思うが、それを頭に入れて投手をリードしてくれ。」

「はい！」

御幸がしっかりと返事をしたのを確認した日本代表監督は、次にパウプロに目を向ける。

「葉輪、お前は決勝戦で先発させる予定だから基本的にキューバ戦で投げさせるつもりはない。だが、負けたら終わりのトーナメントだ。気持ちの準備だけはしておいてくれ。」

「はい！」

パウプロの返事に頷いた日本代表監督は最後にメンバーの顔を見渡す。

「決勝トーナメントは明日一日の休養を挟んでからだ。外出は許可するが、必ず複数人で出かける様にしてくれ。以上、解散！」

監督の言葉を聞いたU-18日本代表のメンバーは、まだ十代の若者らしく喜びの声を上げたのだった。



『フーくん、決勝トーナメント進出おめでとう。』

「ありがとう、貴子ちゃん。」

休養となった翌日、パウプロは宿泊先の部屋で恋人の貴子に電話を掛けていた。

『フーくん、アメリカはどう？』

「印象としては食事の量が多いかな。バランスに気を付ければアスリート向きの国かもね。」

『そうなんだ。そっちに行ったら食べ過ぎない様に気を付けないと。。。』

年頃の女性らしくそこら辺は気になっているらしい恋人の様子に、パウプロは笑みを浮かべる。

『今日は休養日でしょ？フーくんはどこかに出掛けるの？』

「アメリカでの初めてのお出掛けは貴子ちゃんとのデートでって決めるから、俺は宿泊先でのんびりと過ごすつもりだよ。」

『…うん。』

恋人の気遣いに電話先の貴子は頬を朱に染める。

その後、幾つか世間話をしてから二人は電話を終えた。電話を終えたパウプロは同室の御幸に目を向ける。

すると、電話で話をしていた御幸もちょうど終わったところだった。

「一也、そっちも話は終わったのか？」

「ああ、お土産は優勝で頼むってさ。」

「ははっ、それは負けられないなあ。」

パウプロが何気無く部屋に備え付けられているテレビのスイッチを入れると、テレビにはメジャーの試合が映し出される。

それを見たパウプロと御幸は顔を見合わせると、同時に笑みを浮かべた。

「一也、俺達もあそこに行くぞ！」

「応！」

## 第221話

U-18硬式野球国際大会の決勝トーナメントの日本とキューバの試合当日、キューバのエースであるアロン・ヂップマンはアップの走り込みをしながらため息を吐いていた。

『ボス（監督）もどうせなら決勝のアメリカ戦で投げさせてくれればいいのに、どうして俺を日本との試合で先発させるんだか…。』

愚痴を言いながら走り込みを続けるヂップマンはチラリと日本側のブルペンに目を向ける。

『あいつはなんであんなに数多く投げ込んでるんだ？肩は消耗品なんだろ？』

日本式の数多く投げる投げ込みをする天久の姿に、ヂップマンは首を傾げる。

『まあ、俺には関係ないし、どうでもいいか。』

その後、ヂップマンは試合開始の時までマイペースにアップを続けるのだった。



U-18日本代表とU-18キューバ代表の試合は日本の先攻で始まった。

初回、先頭打者であるカルロスに対して、ヂップマンは初球にフォーシームを投げ込む。

すると、球場にざわめきが起きた。

「95マイル…たしか、152kmぐらいだよな？」

「ああ。」

「速いな。」

日本代表チームのメンバーが、電光掲示板に表示された球速を見ながら口々に話していく。

「御幸、どう思う？」

「フォームは素直でタイミングを取りやすそうですね。球筋は打席に

立ってみななければわかりませんが、パウプロに比べれば常識の範囲じゃないですか？」

「たしかにな。」

原田と御幸がそう話していると、日本代表チームの監督がベンチにいるメンバーの注目を集めた。

「球数制限がある以上、打ち急ぐ必要はない。だが、決して油断するなよ。」

「はい！」



フォーシームとの球速差が30km以上あるデッドマンのチェンジアップにカルロスが打ち取られると、続く白河は制球の安定しないデッドマンに対してフルカウントまで粘ったが、最後のインコースのフォーシームでセカンドゴロに打ち取られてしまった。

ツーアウト、ランナー無しの状況でパウプロが打席に向かう。

そのパウプロに白河が耳打ちをした。

「パウプロ、デッドマンのフォーシームだけど、ちよつとシュートして。」

「そうなの？」

白河の報告にパウプロが驚く。

日本の野球においてフォーシームは綺麗な縦回転が称賛される傾向にあるが、海外では違う。

あくまで打者を打ち取る事が優先であり、それが出来るならばシュートしようが構わないのだ。

白河の報告を頭に入れたパウプロが左打席に立つ。

初球、足を高くあげるスリークォーターの投球フォームで、デッドマンはフォーシームを投げ込んだ。

インコースのボールゾーンに投げ込まれたフォーシームを、パウプロは腰を引いて避ける。

(あまり見たことない軌道だなあ。)

日本ではいわゆるノビのあるフォーシームに信仰に近い考えがある。

その為、日本ではフォーシームがシユート回転してボールが垂れたり、ストライクゾーンの甘い所にいたりすると、指導者に注意される光景が見受けられたりする。

もちろん、サイドスローやアンダースローのフォーシームは独特な軌道となる事が多いが、オーバースローやスリークォーターの場合は総じて綺麗な縦回転のフォーシームが求められる傾向が強いのだ。

チップマンは2球目、3球目とフォーシームで押してくる。

パウプロはこのフォーシームを狙い打とうとするが、打球が前に飛ばなかった。

(どうしてもボールの上を叩いちやうなあ…。)

一度打席を外したパウプロは、チップマンのフォーシームの軌道をイメージしてスイングする。

(こういうフォーシームも武器になるんだなあ。)

パウプロが打席に戻ると、キューバのバッテリーは1球チェンジアップを挟んでからフォーシームでパウプロをセカンドゴロに打ち取った。

(アメリカに行けば、日本ではあまり経験した事のないボールを武器にするピッチャーが一杯いるのかな?…楽しみだぜ!)

チップマンに打ち取られてしまったパウプロだが、その表情は笑顔で溢れていたのだった。

## 第222話

U-18日本代表とU-18キューバ代表の試合、先攻の日本代表は三者凡退に倒れてキューバ代表の攻撃に移っていた。

この試合の日本代表の先発である天久は先頭打者はショートゴロに打ち取ったが、続く2番打者に右中間への長打を打たれて初回からランナー2塁のピンチを背負ってしまった。

ピンチの場面でも落ち着いていた天久はキューバ代表の3番打者をピッチャーフライに打ち取った後、キューバ代表の4番打者をサードゴロに打ち取った：と思われたが、ここでサードの轟が球足の速いゴロをトンネルしてしまった。

ツーアウトであった事もあり、キューバ代表のセカンドランナーはホームに突っ込む。

しかし、レフトのパウプロからレーザービームの様な低く速い返球がホームに返ってくる。

このパウプロの返球にキューバ代表のベンチは総立ちになった。

何故なら、俊足のキューバ代表のセカンドランナーが滑り込む事も出来ずに挟まれたからだ。

『なんであいつはマウンドじゃなくてレフトにいるんだ？』

パウプロの返球を見たキューバ代表のエースであるアーロン・ヂツプマンはそう言っって首を傾げた。

パウプロのバックホームでキューバ代表の1回の裏の攻撃は無得点に終わる。

そして2回の表の攻撃は、先程エラーをした轟 雷市から始まる。

先程のエラーによる汚名返上の為にここは打ちたいところ。

しかし、打席に入る轟の表情は今一つ冴えない。

調子が悪いのか？はたまた先程のエラーを引きずっているのか？

実はどちらでもない。

現在の轟は左投手に苦手意識を持っているから表情が冴えないのだ。

これは夏の大会でのパウプロとの対戦が原因だ。



そうとは知らない日本代表監督は轟のバッティングを信じて見守ったが、轟はヂップマンのフォーシームに差し込まれてショートゴロに打ち取られてしまった。

続くDHの原田もヂップマンを攻略出来ずに打ち取られ、ツアウト、ランナー無しの状況で6番の御幸に打席が回る。

御幸はバットを指一本分余して持ち、コンパクトなスイングでヂップマンのフォーシームを弾き返した。

(速いボールだけど、パワプロに比べればコースが甘い。)

打球は右中間に飛んでツーベースヒットになり、日本代表チームはツアアウトながらランナー2塁のチャンスを迎えた。

しかし、ギアを上げたヂップマンが160kmのフォーシームを投げ込むと、甘いコースだったにもかかわらず、日本代表チームの7番バッターは空振り三振に倒れてしまった。

その後、5回の表まで両チーム共に無得点が続いたが、5回裏に天久がキューバ代表の3番バッターにソロホームランを打たれてしまい、キューバ代表に先制点を許してしまった。

しかし天久は後続を抑えて5回の裏を終える。

5回終了時にヂップマンと天久は共に90球を超えていた事もあり、両者はこの回でお役御免となった。

天久は今大会の参加チームにおいて、アメリカと並ぶ強打のキューバ代表を相手に5回1失点ならば十分に及第点だろう。

だがヂップマンとの投げ合いに負けた天久は、ベンチに座ると悔しそうに紙コップの中のスポーツドリンクを一気に飲み干したのだ。



『へえ、ヂップマンもいいボールを投げるね。もう少しコントロールを改善出来れば、ロジャーズのクローザーを任せられそうだ。』

スタンドに視察に訪れていたロジャーズスカウトのベックは、メモを取りながらヂップマンをそう評価する。

「さして、中盤にきて先制された日本代表チームはどうするのか？出来ればパウプロがアメリカ代表チーム相手にどんなピッチングをするのか見てみたいんだけどね。」

メモ帳を閉まったベックは、ネクストバッターサークルに向かうパウプロを見て笑みを浮かべたのだった。

## 第223話

U-18日本代表チームはチップマンを攻略する事は出来なかったが、後続のU-18キューバ代表の投手達を打ち崩し8回の表までに7点を奪った。

だがU-18キューバ代表も轟の守備の穴をついた攻撃で9回の裏に2点差にまで詰め寄ったが反撃もここまで。

U-18日本代表とU-18キューバ代表の試合は7-5で日本代表が勝利して、決勝戦へと駒を進めたのだった。



『おっと、先客がいたようだね。』

ロジャーズスカウトのベックはU-18日本代表とU-18キューバ代表の試合が終わった後にチップマンを訪ねようとしていたが、チップマンの元には既に他球団のスカウトの姿があった。

『あの様子だと彼を取られたかな？仕方ない、僕はパワプロと御幸に挨拶をしてから引き上げるとしようか。』



U-18台湾代表とU-18アメリカ代表の試合は8-2でアメリカ代表が勝利した。

台湾代表は球数制限の影響でエースの楊が登板出来なかったのが痛手だった。

こうしてU-18硬式野球国際大会の決勝戦はU-18日本代表とU-18アメリカ代表の組み合わせとなったのだった。



「明日の決勝の相手は予想通りにアメリカだ。各自、後で資料に目を

通しておいてくれ。それじゃ、明日のスタメンを発表するぞ！」

U-18日本代表チームの監督さんがメモを片手にスタメンを発表していく。

先発ピッチャーは俺、キャッチャーは一也とスタメンが発表されていったんだけど、サードは轟じゃなくて別の奴だった。

どうもキューバ戦で4回エラーをした事を考えてサードのスタメンから外したようだ。

でも轟をDHで起用する辺り、バッティングには期待しているみたいだな。

ただ、4番じゃなくて6番にしたのは何でだろう？

「アメリカ代表の先発はおそらくエースのJ・コンラッドがくるはずだ。コンラッドは左のサイドスローで150km以上のフォーシームを投げ込んでくるメジャースカウトからも注目されている男だ。おそらくは体験した事のない角度からボールがくるだろう。」

他にもアメリカのエースの特徴を話した監督さんは、皆を見渡した後、俺に目を向けてくる。

「慣れないマウンドにボールと大変だろうが、決勝のマウンドはお前に任せた。」

「はー。」

さあ、国際大会で初めての先発だ。

思いつきり楽しんでやるぜ！



『明日の日本代表の先発は、おそらくフウロ・ハワがくるだろう。』

アメリカ代表チームの監督の言葉に、アメリカ代表チームのメンバ―は首を傾げる。

『ボス、誰なんだそいつは？』

『まずはこの映像を見てくれ。』

ホームアドバンテージとして地元のメディアから映像を入手していたアメリカ代表チームは、オーストラリア代表との試合で投げたパ

ワプロの映像を流す。

『速いな。』

『へい、コンラッド。お前よりもコントロールがいいんじゃないか？』

『ハッハッハッ！』

パワプロの投球映像が終わると、アメリカ代表チームの監督はチームメンバーの顔を見渡す。

『知人に聞いた話では、ロジャーズのスカウトが彼に声を掛けていらしい。メジャーのスカウトが日本人のまだ学生である彼に声を掛ける：それほどの才能の持ち主という事だ。』

監督の言葉にアメリカ代表チームのメンバーは表情を引き締めた。

『明日の決勝戦は多くのメジャースカウトが視察に訪れる。君達は大いにアピールするといい。そして、日本代表チームに本物のベースボールを教え、我々が勝利するのだ！』

監督の檄に応え、アメリカ代表チームは士気を上げたのだった。

## 第224話

『どうやら間に合ったみたいだな。』

一人のアメリカ人男性がU-18日本代表とU-18アメリカ代表の決勝戦が行われる球場に姿を現す。

そんな彼に声を掛けた者がいた。

『ヘイ、マイク！こっちだ！』

マイクと呼ばれた男性が目を向けると、そこにはロジャーズスカウトのベックの姿があった。

『サンキュー、ベック。』

ベックの隣の席にマイクが腰を下ろす。

『マイク、コークでいいかい？』

『残念ながらビアーは経費で落ちないからね。コークでいいよ。』  
肩を竦めながらそう言うマイクの姿にベックが笑う。

『ところでベック、君が日本で声をかけたという選手はどこにいるんだ？』

マイクの問い掛けに、ベックはブルペンにいるパワープロを指差す。  
『彼がパワープロか。それで、彼はどんな選手なんだ？』

ベックはメモ帳を手にパワープロを紹介していく。

『190cm以上の長身サウスポード、現在は最速97マイル（約155km）のファストボールを投げるよ。』

『97マイル!?彼はまだハイスクールの2年生なんだろう?』

『ああ、その通りだ。』

驚いて目を見開きながらマイクはパワープロのアップの様子を観察する。

『彼の球種は?』

『カーブにスライダーが2種類、そしてチェンジアップだ。』

『器用だな。やはり日本人だからか?』

腕を組んでパワープロの観察を続けるマイクは、更にベックに問い掛ける。

『彼にムービングボールは無いのかい?』

『ああ、無いよ。』

『オールドスタイルか。そこが不安だな。』

マイクの言葉にベックが笑いを噛み殺す。

『なんだい？笑いを堪えているようだが？』

『マイク、パウプロは日本でモンスター（怪物）のニックネームをもらっているんだよ。』

『モンスター？J・コンラッドと同じニックネームじゃないか…まさか、ベックはパウプロがコンラッドに匹敵する選手だということのか？』

『ハツハツハツ！違うよ、パウプロはコンラッドに匹敵するのではなく、コンラッド以上の選手なのさ。』

手を広げるオーバーアクションでベックがそう言うと、マイクが驚いて目を見開きながらベックを見る。

少しの間、そのまま呆然とベックを見ていたマイクは不意に不敵な笑みを浮かべた。

『ベック、そこまで言うのなら賭けるかい？』

『ああ、いいよ。僕はパウプロがノーヒットノーランを達成する事に賭ける。』

『ノーヒットノーラン？今大会は100球の制限があるんだぞ？』

『パーフェクトと言わないだけ、僕は謙虚に言ったつもりだけだね。』

自信満々なベックの様子に、マイクは口笛を吹く。

『ところでベック。』

『なんだい、マイク？』

『僕が賭けに負けたら、奢るのはバーガーでいいかい？今月はちよつとピンチなんだ。』

『ハツハツハツ！コークもつけてくれよ。』

ベックの要求に、マイクは安堵のため息を吐いたのだった。



ブルペンで試合前の投げ込みをしていると、いつもよりも身体が軽く感じる。

投げられなくてフラストレーションが溜まっていたのかな？

パァン！

フォーシームを投げ込むと一也のミットが快音を鳴らす。

うん、試合の後半みたいにボールがキレてる。

早く試合が始まらないかなあ…。

国際大会の決勝戦。

この大舞台が始まるのを、俺はリトル時代に初めて先発をする事が決まった時みたいなきもちで、ソワソワしながら待ち望んでいたのだった。



## 第225話

U-18硬式野球国際大会の決勝戦が始まった。

先攻は日本代表チームだ。

1回の表、アメリカ代表の先発マウンドにJ・コンラッドが上がる。日本代表チームの先頭打者であるカルロスが打席に入つての初球、カルロスはアウトコースを見逃したのだが、ストライクの判定で主審に振り返った。

(今のがストライク?)

体験した事のない横の角度を持つコンラッドのボールに、カルロスはたった1球で冷や汗を流す。

カルロスは1球でも多くボールを後続のバッターに見せようとしたのだが、3球目のコンラッドのスライダーにバットが空を切つて空振り三振に倒れた。

だが、カルロスはまだスイングが出来ただけマシであつた。

何故なら、次のバッターである白河はバットを振る事すら出来なかつたのだ。

続く3番バッターはコンラッドのフォーシームに差し込まれて内野ゴロに倒れ、1回の表の日本代表チームの攻撃は三者凡退に終わつてしまつた。

経験した事のない角度からくるコンラッドの投球に、日本代表ベンチの雰囲気は僅かに暗くなる。

しかし、そんな雰囲気など関係無いとばかりにパウプロは笑顔で1回の裏のマウンドに向かつた。



パウプロの投球練習の球を受けている御幸はマスクの奥で笑みを浮かべていた。

(国際大会の決勝戦でコンラッド程の投手と投げ合える…そんな状況でお前が燃えないわけがないよな、パウプロ。)

パウプロが規定回数 of 投球練習を終えると、同じ高校生とは思えないガタイをしたアメリカ代表チームの1番バッターが左打席に入ってくる。

(コンラッドの初球で飲まれたお返しをしないとな。)

御幸はパウプロにフォーシームを要求する。

笑顔で頷いたパウプロが独特の投球モーションからフォーシームを投げ込んだ。

(…ドンピシャー!)

インローギリギリに投げ込まれたフォーシームに、アメリカ代表の1番バッターは御幸のミットの位置に振り返ってから主審にタイムを要求した。

1回、2回とバットを振るのを御幸は横目で観察する。

(今のでフォーシームに意識付け出来た筈だけど…次はどうする?)

アメリカ代表の1番打者がバットを構えるその時まで御幸は思考を続ける。

(…押すか。)

決断をした御幸が2球目のサインを出す。

2球目、パウプロは同じコースにまたフォーシームを投げ込んだ。

アメリカ代表の1番打者が迷わずにバットを振り切るが、バットは空を切った。

(パウプロのフォーシームに合っていない。続けるか?)

一瞬の間において御幸がサインを出す。

3球目、パウプロはアウトローにフォーシームを投げ込む。

すると…。

バシッ!

『ストライクスリー!バッターアウト!』

見逃し三振に倒れたアメリカ代表チームの1番バッターは、悔しそうに天を仰いでからベンチに戻っていったのだった。



コンラッドの三者凡退に対してパワプロが三者三振で返すと、U-18硬式野球国際大会の決勝戦は高校生同士の試合とは思えない程のハイレベルな投手戦となった。

コンラッドとパワプロの双方が遊び球を用いず、ストライクゾーンにボールを集めて勝負をしていく様子に、現地のベースボールファンは惜しみ無い拍手を送った。

そして4回にコンラッドとパワプロが二桁奪三振を達成すると、ストライクカウントが1つ増える度に観客が歓声を上げ、二人のピッチングに興奮していった。

5回の表にファーストで出場している原田がポテンヒットで出塁した事で、コンラッドの完全試合は途切れてしまったが、それでもコンラッドはパワプロと同等のペースで三振を量産していく。

そして両チームは無得点で双方のエースがまだ球数に余裕を残したまま、試合は終盤の7回へと突入するのだった。

## 第226話

U-18硬式野球国際大会の決勝戦、アメリカ代表と日本代表の試合の7回の表のマウンドに向かう中で、アメリカ代表のエースであるコンラッドは不敵な笑みを浮かべていた。

（メジャーのスカウトにアピールするだけの場だと思っていたが、まさかこれ程の相手と投げ合えるとはな。）

6回を終えて球数71、奪三振14はコンラッドにとってベストピッチである。

しかし、投げ合っているパウプロは6回を球数60、奪三振15でパーフェクトゲームを継続中とコンラッドを上回るピッチングをしている。

『ビッグユニット二世』、『モンスター』のニックネームで呼ばれる様になつてからのコンラッドには、ライバルと呼べる相手がいなかった。

そんなコンラッドは久しく現れた強敵に心が昂っていた。

（100球の球数制限が煩わしく感じるのは初めてだ。フウロ・ハワだったな？お前との投げ合いは最高だぜ。）

その後、コンラッドは8回の表まで日本打線を完封してマウンドを下りる事になる。

彼は日本代表を相手に8回を球数97、奪三振19、被安打1の成績を叩き出したのだった。



8回の裏もパウプロが三人で抑えると、日本代表とアメリカ代表の試合は無得点のまま9回の攻防を迎えた。

「残念ながらコンラッドの攻略はならなかったが、気持ちを切りかえろ！」

「「はー」」

アメリカ代表の2番手投手としてスリークォーターから投げる右腕のムービングボーラーが登板した。

この2番手投手も最速150kmを誇っていたが、日本代表打線にしてみればコンラッドよりもずっと与し易かった。

先頭打者の8番バッターがライト前ヒットで出塁すると、9番バッターが送りバントでランナーを2塁へと進めた。

ワンアウト、2塁の状況で打席には1番のカルロスが右打席に入る。

カルロスは初球をトライアングルと呼ばれる位置にプッシュバントした。

ピッチャー、セカンド、ファーストがお見合いをする内に、カルロスは快足を飛ばして1塁を駆け抜けていた。

急遽集められた代表チームの連携の拙さを突いた見事な奇襲だ。

動揺するアメリカ代表チームに日本代表打線が畳み掛ける様に仕掛ける。

カルロスに続いて打席に入った白河にスクイズのサインが出た。

これを白河はきつちりと決めて、日本代表チームは待望の先制点を奪い取る。

残念ながら日本代表チームの3番打者は打ち取られて1点止まりだったが、日本代表チームはこの1点で勝利を確信した。

何故なら、まだ球数に余裕を残すエースのパワプロが9回のマウンドに上がるからだ。

そんな期待を背負ったパワプロは、球場のベースボールファンによるスタンディングオベーションに包まれながらマウンドに上がるのだった。



「二也、左手は大丈夫か？」

「後1イニングだけならな。」

ここまでパワプロのボールを受けてきた御幸の左手は真っ赤に腫れ上がっていた。

これに日本代表チームの監督は気付いてキャッチャーを原田に交

代しようとしたが、原田は今日のパワプロの変化球は受けきれないと監督に伝えた。

この原田の一言で監督は困り果てた。

原田にキャッチャーを交代するならばパワプロも交代しなければならぬ。

しかしそうすると、パーフェクトゲームを継続しているパワプロを交代する事になり、盛り上がっている現地のベースボールファンからのブーイングは免れないだろう。

さらに帰国した後にはマスコミへの申し開きをしたり、協会から問題追及される可能性がある。

責任者としては御幸にケガをさせるわけにはいかない。

だが、諸々の大人の事情が監督の決断を鈍らせた。

しかしそんな監督に御幸は行けると告げた。

そこで監督は苦心の末に、ランナーを一人でも出したらノーノーが継続していてもバッテリー交代をすると日本代表メンバー全員に通達したのだ。

「日本に帰ったら直ぐに秋の大会だぞ？」

「わかっているさ。でも、ここで無理しなきゃ男じゃないだろう？」

御幸の決意を知ってパワプロは笑みを浮かべる。

「それじゃ、完全試合をやるか！」

「おう！」

パワプロと御幸は利き手で握り拳を作って軽く合わせる。

そして御幸の決意に応えたパワプロは、U-18硬式野球国際大会の決勝戦という大舞台で完全試合を成し遂げたのだった。

## 第227話★

U-18硬式野球国際大会の決勝戦が終わった頃、某ネット掲示板は大きな盛り上がりを見せていた。



【怪物】パワプロを応援するスレ121【ラスボス】

1:このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

568:オオオオオオオオオオオ!!!

573:すげえええええええええ!

576:国際大会の決勝戦で完全試合w

580:慣れぬボールとマウンドでも息をする様に完全試合w

585:いつものw

589:またラスボスカ:w

600:知ってたw

605:パワプロも凄かったけどアメリカ代表のエースも凄かったな

608:誰かアメリカ代表のエースの情報はよ!

620：J・コンラッド 身長190cm以上のサイドスローでサウスポー

150kmのフォーシームと2種類のスライダーが武器  
ビッグユニット二世やモンスター等のニックネームを持つ  
アメリカ版パウプロ

627：620∨サンクス

635：左のサイドで150kmかあ…ちよつと日本では見れない  
投手やな

641：あの長い腕でサイドはヤバイ

645：ほんまにヤバイやろなw

U-18日本代表打線がポテンヒット1本しか打てへんの  
やからw

649：コンラッドもオールドスタイルなんやな。

パウプロといい原点回帰でもしとるんか？

653：ムービングが流行ってきたから逆に綺麗なフォーシームが  
通用するのかも？

662：それにしても…アメリカ版パウプロってwww

667：662∨不自然に感じないラスボスの貫禄www

704：表彰式が終わったで。MVPは残念ながらコンラッドや

710：704∨なんでやねん！



713:704< 阪関無!

717:713< テンプレ乙

725:コンラッドは3試合先発して無失点やからな、しやあないやろ

731:せやけど決勝戦で完全試合やで? MVPでもええんやないの?

736:パウプロが3試合先発で投げてたらMVPやったやろな

742:アンチスレはパウプロがMVPじゃなかった事を燃料に頑張ってる模様www

751:742< アンチwww

754:742< 必死過ぎワロタwww

788:お? 現地メディアがパウプロに取材にきたで!

793:パウプロ、英語ペツラペラやないか!

800:日本代表に帯同していたと思われる通訳っぽい人が苦笑いしとるwww

805:アメリカ行き準備万端のようやな。800< 次スレ頼むで

808:イケメンで野球が上手くて英語ペラペラな程に頭がええん

か…

811：【悲報】天は二物も三物も与える【依怙最眞】

815：これで彼女までいたら暴動案件やなw

818：815＜いるで

822：818＜…なんやて!?

827：高校野球ファンの東京民やったらだいたい知つとるんやないか？

833：827＜せやな、パワプロは普通にデートしとつたわww

w

836：827＜証拠画像ハラデイ

842：836＜それはプライバシーの侵害なんやないか？

845：パワプロにはほんまに彼女がおるの？

850：845＜ワイは東京民なんやけど、バツセンとかで何度も目撃しとるで

858：不純異性交遊やないか！学校はなにやつとんねん！

863：幻滅しました。パワプロさんのファンやめますね

868：863＜何を夢見てんねんwww

872：正直なところ、それって問題ないんか？

875：872＜逆に聞くけど問題ってなんや？異性交遊があかんのか？

878：真面目に練習してる他の部員に示しがかんやろ！直ぐに別れろや！

884：878＜嫉妬乙www

890：交際と野球の両立はパワプロ個人の問題なんやから

外野が騒いでもしやあないやろ

893：890＜試合結果を見たら両立出来てるって一目瞭然やんな

896：素直に祝福したれよ。マスゴミみたいになんでもかんでも問題にしようとすんなや

## 第228話

U-18硬式野球日本代表メンバーがアメリカから帰国すると日本の取材陣に囲まれた。

成宮や原田、轟といった者達が次々に声を掛けられているが、パウプロに取材の声を掛ける者はいない。

中には声を掛けた者達もいるのだが、そういった者達は今大会の事ではなく、パウプロが高校卒業後にアメリカに行く事を追及してきた。

曰く、不誠実。

曰く、裏切り。

これらの言葉を並べ立ててパウプロに追及していく様子は、U-18国際大会の優勝に貢献した功労者に対するものとはとても思えない。

並みの青少年ならば夢を諦めて、彼等の言葉から逃げる為にプロ野球に進んだかもしれない。

だがパウプロは並みの青少年ではなかった。

彼の野球への情熱はこの程度では微塵も揺らがない。

それにパウプロには前世で社会人だった経験もある。

なのでこの程度の状況ならば笑顔で対処出来るのだ。

パウプロは事前に用意していた言葉を放つ。

それは『職業選択の自由』。

これは高島や片岡といった教員から貰った助言だ。

この一言で数に物を言わせて圧力を掛けていた大人達は二の句を継げなくなった。

そんな大人達を尻目に、パウプロは笑顔で堂々と囲みを抜けた。

そのパウプロの後ろに御幸が笑いを堪えながら続く。

すると、その先には月刊野球王国の記者である峰と大和田の姿があった。

「あ、峰さん、大和田さん。」

「お帰り、葉輪くん。そして、優勝おめでとう。」

「ありがとうございます。」

峰がパワプロに声を掛けると、御幸には大和田が声を掛けた。

「御幸くん、少しお話しいいかしら？」

「お手柔らかにお願いしますよ、大和田さん。」

大和田が簡潔に御幸に質問している様子を横目でチラリと見た峰は、目を戻してパワプロと話をしていく。

「先ずは同じ記者として謝らせてくれ。」

「別に峰さんが謝る必要はないと思いますけど？」

「これから先、うちの取材を優先して欲しいという打算があるのさ。」

「それじゃ、峰さんの謝罪を受け取ります。」

正直な峰の物言いにパワプロは苦笑いをしながら答える。

「秋の大会まで時間が無い中であり引き止めるわけにもいかないから2つだけ質問させてもらおうよ。1つ目、向こうのマウンドやボールはどうだったかな？」

「想像以上にボールをコントロール出来ませんでしたね。」

「メジャーに渡った先人達も苦勞した点だからね。葉輪くんも苦勞するのもし方ないさ。でも、その割りには決勝戦で抜群のコントロールだったね？」

「あの時は調子が良かったんですよ。」

サラサラと淀みない手付きで峰は手帳にメモをしていく。

「それじゃ最後に：国際大会の大舞台は楽しかったかい？」

パワプロは峰の質問にとっても良い笑顔で返事をしたのだった。



U-18硬式野球日本代表が帰国した翌日、まだ時差ボケが残る中でパワプロと御幸は青道高校野球部の練習に参加していた。

3日後には秋の大会が始まるからだ。

だがパワプロは先日完投したばかり、そして御幸は左手を痛めているため、二人は軽い練習での調整となった。

そんな二人は今、ブルペンで見学をしている。

パウプロは投手陣に、御幸はキャッチャー陣に気付いた事をアドバイスするためだ。

「沢村、降谷、チェンジアップを投げる時に腕の振りが緩くなってるぞ。」

「オスッ！」

「はい。」

パウプロのアドバイスに従って沢村と降谷はチェンジアップを投げ込んでいく。

「小野、狩場、そうやってチェンジアップを追っ掛けて捕ると、ミットが垂れて見えるから低めの時にストライクを取ってもらえなくなるぞ。」

御幸のアドバイスに従って小野と狩場はキャッチングを修正していく。

そんな彼等の様子に落合は不敵な笑みを浮かべていた。

（葉輪は相変わらず凄い奴だが、御幸は国際大会の大舞台を経験したからか一皮剥けた様子だな。新チームの戦力に不安が残る中で頼もしい限りだ。）

落合がそんな思いで見守っている中でブルペンでの練習は続いていく。

ある程度感触を掴んだところで、沢村と降谷は川上と東条に交代した。

「東条、スライダーを投げる時に肘が下がってるよ。ノリは新しく覚えたカーブを投げる時に手首が寝ちゃっているから気を付けて。」

パウプロのアドバイスで投手陣の球質がドンドン良くなっていく様子に、落合は目を見開く。

（やれやれ、葉輪にはコーチとしての才能もあるようだな…。）

自分の仕事を奪われた落合は、苦笑いしながら顎髭を撫でたのだった。

## 第229話

秋の高校野球選抜東京大会が始まった。

俺達、青道高校はシードなので第2回戦からだ。

今大会なんだけど、俺はレフトでの出場で中継ぎや抑えで投げるのが基本運用らしい。

俺と一也が国際大会に行っている間に1年生投手達やノリのピッチングを見ていったらしいけど、そこで第2先発を決めきれなかったって落合さんが言っていた。

その結果、強豪校と試合をする時に万全の状態で俺に先発させるためにはこうするのが一番なんだそうだ。

中継ぎや抑えも好きだから別にいいけど、出来れば先発で長くピッチングを楽しみたいなあ…。

まあ、チーム事情的に仕方ないか。

多く投げれない分はバッティングを楽しもう。

そういえばクリスさん達三年生だけで出場した国体なんだけど、優勝したってさ。

先輩方！おめでとうございます！



秋の高校野球選抜東京大会の1回戦に勝利した帝東高校は、第2回戦の相手である青道高校との試合に向けて最後の調整をしていた。

「向井、調子はどうだ？」

「いいですよ、乾さん。早く葉輪さんと投げ合いたいですね。」

帝東は今年の夏の大会で東東京代表として甲子園に出場している。

さらに向井は1年生でありながら甲子園の舞台を経験しており、今大会ではエースナンバーを背負っている。

その為なのか、向井は青道との試合が迫っていながらもリラックスした様子で帝東の正捕手である乾と話していた。

「たぶんだが、次の青道戦の先発は葉輪じゃないぞ。」

「チーム事情ってどこですか？1年ナンバーワン投手と2年ナンバーワン投手で投げ合いをしたかったんですけどね。」

向井の物言いに乾は苦笑いをする。

向井は左のサイドスローの投手で抜群のコントロールを持っており、ストライクゾーンの奥行きを使うピッチングを得意としている。

そのピッチングで夏の大会では甲子園出場に貢献している事もあり、向井は自身を世代ナンバーワン投手だと自負している。

そんな向井だが、一人だけ注目している投手がいる。

それは1つ年上のパワプロだ。

現在の高校野球界で誰もがナンバーワン投手だと認めているのがパワプロである。

自信家の向井はそんなパワプロとの投げ合いに勝ち、自分こそがナンバーワン投手だと認めさせたいのだ。

「まあ、先発しないなら引き摺りだせばいいだけですよ。」

不敵な笑みをしながらそう言いきる向井の姿に、乾は頼もしさを感じたのだった。



秋の高校野球選抜東京大会の第2回戦が行われる当日、片岡から今日の試合のスタメンが発表された。

- 1 番セカンド、小湊 春市。
- 2 番センター、白州。
- 3 番レフト、パワプロ。
- 4 番キャッチャー、御幸。
- 5 番ファースト、前園と発表が続いていく。

呼ばれたメンバーが大きな声で返事をする中で、今もまだスランプに悩む倉持は8番ショートで呼ばれた時に、大きな声で返事をしながらも悔しそうに拳を握り締めていた。

（俺自身、打てる気がしねえ…けど、守備でしか期待されてねえのはやっぱり悔しい…。）



9番ピッチャーで降谷の名前が呼ばれた時、倉持は気持ちを切りかえる為に深呼吸をした。

(気持ちを切りかえろ。試合中に悩んでいてミスをしたら、増子さんみたいに下げられるぞ！)

もう一度深呼吸をした倉持は片岡の話に耳を傾ける。

「帝東の先発はおそらく1年生の向井だ。向井は今年の夏に1年生ながら甲子園を経験している男だ。油断をせずにいけ！」

「はい！」

選手達の返事に頷いた片岡は降谷に目を向ける。

「降谷、お前にとって初めての高校野球の公式戦だ。スタミナ配分は気にせずに最初から全力でいけ！」

「はい。」

降谷の返事に頷いた片岡は全員の顔を見渡す。

「昨年は後一步のところで敗れ、春の甲子園には推薦で出場した。今年は最後まで勝ち抜き、自力で春の甲子園に行くぞ！」

「はい！」

## 第230話

秋の高校野球選抜東京地区大会の第2回戦、青道と帝東の試合が行われる球場で、今は青道高校がグラウンドを使ってシートノックをしていた。

「レフトー！」

ノッカーをしている片岡の声に反応してチラリと目をレフトのパワプロに向けた落合は、目をブルペンで投げ込みをしている降谷へと戻した。

「降谷、ただ数を投げ込んでも意味が無いぞ。試合経験の少ないお前はまずは自分の肩の作り方を確立しなければいけない。他にも試合をする球場のマウンドの感触、当日のリリースの感覚の確認など、ピッチャーにはやるべきことが多くあるんだからな。」

「はい。」

高校野球で初めての公式戦を前にしても緊張した様子を見せない降谷の姿に、落合は感心した様に頷く。

（片岡監督が降谷を先発に推した時は大胆な考えだと思ったが、思ったよりも有りかもしれんな。）

パワプロと御幸が国際大会で不在の間、片岡と落合は新チームの投手起用について毎日の様に話し合っていた。

その話し合いの中で、二人は各投手を次の様に評した。

シニアでの実績と安定感の東条。

意外性の沢村。

経験と信頼の川上…といった具合だ。

そんな各投手達の評価の中で、降谷はスタミナとコントロールと経験の不足による不安定さが際立ってしまっていた。

先発投手として起用するからには最低でも6イニングは投げきつて貰いたい。

しかし、スタミナとコントロールに不安がある降谷ではその6イニングすら厳しいかもしれない。

それ故に落合は降谷を先発候補から除外していた。

だが、今回の試合で片岡は降谷を先発に起用したのだ。

(葉輪という絶対的なピッチャーがいなければ、片岡監督もこんな無駄はしなかっただろうがな。)

降谷と沢村という原石を磨くには経験を積ませる必要があるが、経験の少ない二人では多くのピンチの場面を迎えてしまうだろう。

だが、そんなピンチの場面にも絶対的な信頼と共にマウンドに送れる怪物が青道にはいるのだ。

(メディアを始めとしてOBからも批判や非難がくるだろうな。だが、それらを覚悟して教え子の成長を優先するのは片岡監督らしいといえばらしいがね。)

現代野球においても先発完投こそが投手の理想とする者は少ない。

それ故に落合はパウプロを後ろに回す事に批判や非難が殺到するだろうと考えているのだ。

(もつとも、批判や非難がくると確信しても反対しないあたり、俺も随分と片岡監督に毒されているんだろうな。)

自嘲する様な笑みを浮かべた落合は、降谷が試合前に過度な投げ込みをしない様に見守っていったのだった。



青道の練習時間が終わり帝東の練習時間になると、青道メンバーはベンチから向井の投げ込みを観察していた。

「いいコントロールだな。キャッチャーのミットが動いていない。」

「ハツハツハツ！パウプロ先輩のコントロールに比べればまだ未熟！怖れる必要はないですよ！」

御幸が向井のコントロールを評価すると、そんな御幸の言葉を沢村が笑い飛ばした。

「俺もそう思うけど、お前が威張る事じゃないだろ。」

「ボス、俺はいつでも行けますよ！」

沢村は御幸のツツコミを気にせず片岡にアピールをする。

そんな沢村の行動に川上と東条は苦笑いをした。

「沢村のああいう図太さは素直に羨ましいな。」

「川上先輩、先輩の初めての高校野球での公式戦はどうでした？」

「緊張して何も覚えてないな。あ、パワプロが凄かったのだけは覚えてる。」

「去年からノーノーとかパーフェクトを当たり前の様にやってみましたもんね。」

東条が苦笑いをしながらそう言うと、川上もつられて苦笑いをする。

「：川上先輩は葉輪さんと同学年ですけど、何か思わなかったんですか？」

「うちは入部したら身体能力テストがあるだろ？あの時に俺は、『ああ、俺は絶対にエースになれないな』って思ったよ。」

東条は川上の答えに納得した。

自身もパワプロがいる間は絶対にエースになれないと確信しているからだ。

「葉輪さんのボールを見て、投手を辞めようと思った事は？」

「ないよ。」

川上は笑顔でそう答える。

「パワプロはピッチャーとしても凄いいけど、友達としてもいい奴なんだ。だからかな？俺は自然にパワプロに置いていかれたくないって思っって、パワプロの背中を追い掛け続けている。」

「その気持ち、よくわかります。」

川上と東条はどちらともなく、ベンチの最前列で御幸と並んで向井の投げ込みを観察している。パワプロに目を向ける。

「沢村や降谷には負けたくないな。」

「そうですね。」

顔を見合わせて笑みを浮かべた川上と東条は、拳を軽く合わせたのだった。

## 第231話★

帝東の練習時間が終わる少し前に、俺達は新チームのキャプテンである白州を中心に円陣を組む。

聞いた話では新チームのキャプテン候補は複数いたそうさ。

白州、一也、倉持の3人だ。

この候補の中で倉持は、現在スランプである事を考慮して候補から外されたみたいだ。

本命として哲さんは一也に話を持っていったそうんだけど、一也はキャッチャーに専念したいと言って話を断ったそうさ。

一也が断った時にクリスさんと宮内さんが同じキャッチャーとして賛同を示した事で、新チームのキャプテンは残った候補である白州に決定した…との事だ。

ちなみに副キャプテンは一也とゾノが白州に選ばれている。

一也にはこれまで通りに投手との、ゾノには内野手とのコミュニケーションをそれぞれ担当してもらいたい。

さて、新キャプテンの白州から始まった青道野球部伝統の掛け声も終わり、いよいよ俺達の秋の高校野球選抜東京地区大会が始まるぜ！



【怪物】パワプロを応援するスレ127 【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

37：パワプロが先発やないんか…残念やで

41：大丈夫なんか？帝東は夏の大会で甲子園に出とる強豪やぞ？

46：1年に先発を任せるのはキツないか？せめて2年のサイドの奴に任せるべきやろ

52：【名将？】片岡謎の采配【迷将？】

57：パワプロを後ろに回すのはありやろ。なんたつてラスボスやからな

61：57＜ラスボスらしく最後に登場ってか？

65：帝東の先発も1年やし点を取れる算段があるんやろ

68：夏の青道打線を考えると、秋の打線の格落ち感がなあ…

74：68＜それでもラスボスがいれば甲子園行きは安泰やろ

79：74＜ラスボスのボールを捕れるキャッチャーがいればの話やなw

83：たしか国際大会でラスボスとバッテリーを組んだ奴がいるから問題ないやろ

88：83＜せやな。問題は点を取れるかどうかや

92：ラスボスがいて甲子園に行けへんとか貧打も極まるで

95：心配ばかりしてもしゃあないやろ。しっかりと応援しようや！

121：さあ、試合が始まったで！

134：青道の1年君の初球は：145kmの真っ直ぐやな

141：1年君ええんちやう？

145：141✓せやな。低めに決まったいい真っ直ぐや

152：145✓せやろか？横のコントロールが甘いし、

なんか物足りない感があるんやが？

163：152✓ラスボスのせいで感覚が狂つとるだけやwww

167：152✓せやで。1年のこの時期にあんだけのボールを投げられたら十分や

も  
170：1年時点で140km台を投げたら普通はエースになって

おかしくないんやけどなwww

175：左で150km台を平然と投げる怪物と同世代になつても  
うた

不運に同情するでwww

186：お？高めの釣り球で空振り三振を奪ったやんか

192：1年でこの真っ直ぐと高め低めに投げ分けられる

コントロールがあれば十分やな

196：たしかにいいピッチャーや！けど…けど、ラスボスのせいで

物足りない感が…www

205・ラスボスがなければ怪物呼びされてもおかしくない1年  
なんやが…www

213：196、205〈やwwwめwwwろwww

222：お？いいチェンジアップも持つとるやん

227：左右の違いはあるけどラスボスのチェンジアップの質に似  
とるな

230：ラスボス卒業までエースにはなれんけど、ラスボスの指導  
を

受けれるんなら同世代もありやな

235：普通ならレギュラー争いでギスギスするもんやけど、ラス  
ボス程に

実力がかけ離れていたらそうもならんやろうしな

242：ワイの時代の1年は球拾いに声出しで終わったもんやけど  
なあ…w

249：242〈先輩にパシらされるのも忘れたらあかんで！

253：242、249〈おwまwえwらwww

264：ワイは監督に身体が小さいからってバットを短く持って  
ボールを転がす

バッティングを強要されて野球がつまなくなってるやめて  
もうたなあ…

268：264〈なんでもかんでも上から叩けって指導する監督は



あるあるやな

279：お前ら試合を見ろw1回の表が終わってまったでw

283：2三振を含む三者凡退とは青道の1年君もやるやんか

295：ラスボスがおるから守備はどうとでもなるやろ。問題は攻撃の方や！

311：青道の新打線：頼むで！

## 第232話

高校野球で初めての公式戦でありながら、降谷は緊張を見せずに1回の表を三者凡退で抑えた。

続く1回の裏の青道高校の攻撃、1番バッターの小湊 春市が右打席に入る。

(左のサイドスロー…どんな球筋なのかな?)

夏の大会でベンチ入りを果たし、代打で公式戦に出場した経験を持っているからか、春市は打席でも自然体でバットを構えていた。

そんな春市に対して向井は初球にアウトローのスライダーを投げ込んだ。

(遠い…ボール球?)

春市は初球をボール球と判断して見送った。

しかし…。

「…ストライク!」

一瞬の間があつたが主審はストライクをコールした。

この判定に春市は前髪に隠れている目を見開いて驚いた。

(ベースの前じゃなくて奥を通った?俺の見間違い?)

春市はバットを構え直して次のボールを待つ。

2球目、向井はインコースへとボールを投げ込んだ。

春市はボールが身体に当たると判断し身構える。

だが…。

「ストライクツー!」

春市は振り返ってミットの位置を確認した。

(…今のはスクリュー?)

向井の決め球であるスクリューに春市は冷や汗を流す。

(身体に当たると判断して身構えたのにインコース一杯に入るとはね…。)

兄の亮介が認める程の才能を持つ春市だが、まだ1年生の春市には体験した事の無い角度からくるボールに1打席で対応する事は出来なかった。

「ストライクスリー！バッターアウト！」

三振に倒れてしまった春市だが、次のバッターである白州とネクストバッターサークルに入ったパウプロに、向井の球筋を伝えてからベンチに戻ったのだった。



亮さんの弟くんが三振に打ち取られると、次のバッターの白州はサードゴロに打ち取られた。

そしてツーアウト、ランナー無しの場面で俺に打順が回ってくる。

左打席に入った俺は、なんか睨んできている様に見える帝東のピッチャーに目を向ける。

（万が一にも当てられない様に気をつけろかあ…。）

ネクストバッターサークルに向かう前に一也にそう言われたんだよね。

一也は国際大会の決勝でアメリカ代表のエースのコンラッドと対決している。

一也が言うには左のサイドスローの球筋は、左バッターの俺達からすると背中からボールが出てくる様に感じて、ストライクかボールかの判断がしにくいらしい。

（コントロールは良さそうだけど、やっぱり気をつけないとな。）

俺のバッティングの基本はリトル時代から変わっていない。

まずはボールをぶつけられない様に気をつける。

ケガをして投げられなくなるのが一番嫌だからな。

そんな風に考えながらバットを構えると、帝東のピッチャーが投球モーションに入った。

初球は…アウトコースへのスライダー？がストライクになる。

（思った以上にボールが見にくいなあ。）

一也の言った通りにボールが背中から出てくる様に感じて、身体に当たるかどうかの判断が他の投手に比べて遅れてしまう。

（インコースを一球見ておきたいな。）

インコースしか待たない俺がこのボールを打つには、早くインコースの球筋を見ておきたい。

2球目、帝東のピッチャーはアウトコースへのスクリーン？を投げてきた。

これもストライクでツーストライクと追い込まれた。

(外れると思ったボールがストライクゾーンに入り込んできた。面白いボールだなあ。)

成宮のボール以上に横の角度が凄い帝東のピッチャーのボールに、俺は自然に笑みが浮かぶ。

(ピッチャーの数だけ色んなピッチングがある…やっぱり、野球って面白いぜ！)

3球目、アウトコース一杯に投げられたフォーシームにバットを振る。

ガキッ！

バットの先っぽに当たった打球は、3塁線を切れてファール。

俺が笑顔でマウンドに目を向けると、そこには帝東のピッチャーの不満そうな顔があった。

(アウトコースに3つ続けたし、次はインコースに来るかな?)

4球目、俺の予想通りにインコースにボールが来た。

けど、俺はボールが身体に当たると判断してバットを振らずに避ける。

すると…。

バシッ！

「ストライクスリー！バッターアウト！チェンジ！」

俺が身体に当たると判断したボールはそこから横の変化をして、インコースのストライクゾーン奥一杯に入り込んだ。

(こんなピッチングもあるんだな！試合が終わったら一也と相談しよう！)

打ち取られても笑顔でベンチに戻る俺とは対称的に、帝東のピッチャーは不満そうな表情でマウンドを下りていったのだった。

## 第233話

青道と帝東の試合の2回の表が始まった。

帝東の先頭打者である4番バッターの乾が左打席に入る。

御幸のサインに頷いた降谷が振りかぶって投球モーションに入る。

(投球モーションはワインドアップのオーバースロー…タイミングは取りやすい。)

初球、しっかりと低めにコントロールされた降谷のフォーシームが決まる。

(球速は140km台中盤といったところか?ノビがあるいい真っ直ぐだ。)

1年ながら帝東のエースとなつている向井のサイドスローの軌道とは違う、降谷のオーバースローから投じられるフォーシームに乾は感心する。

(1年でこれだけのボールを持っていれば、向井と同じくエースになつてもおかしくないんだがな。)

乾がチラリと目を向けた先にはレフトの守備位置にいるパウプロの姿があった。

(向井は葉輪との投げ合いを望んだが、勝つためには葉輪が登板する前に得点する展開が望ましい。)

怪物。

この世間でのパウプロの呼び名に、乾はどこかで疑問を持つていた。

同い年の高校生なのだからどこかに突破口がある筈だ。

だがそんな乾の思いは、国際大会決勝戦でのパウプロのピッチングを見て消え去った。

怪物の二文字。

乾はこれを否応なしに理解してしまったのだ。

(キャプテンとしては口が裂けても言えないが、うちの打線では葉輪を打ち崩せない。)

だからこそ、パウプロが投げている今が帝東が得点するチャン

ス。

(試合の序盤、まだピッチャーを交代しにくい今の内に勝ち越さなければ、俺達は勝てない!)

乾はまるで試合終盤の勝負所のような集中力でバットを構える。

2球目、高めの釣り球を乾は見逃し、カウントはワンボール、ワンストライク。

(おそらく、この1年投手は真っ直ぐに自信を持っている。決め球も真っ直ぐか?…いや。)

小さく息を吐きながら乾は思考を続ける。

(たしかこの1年生投手は高校野球で初めての公式戦。なら、まだ序盤の今の内に変化球の大切さを教える…俺ならそうする!)

真っ直ぐに自信を持っている投手に力の投球以外を教える。

これは乾自身も通った道だ。

(狙うはチェンジアップ1つ!)

球速のギャップでバットを巻き込まない様に、乾は逆方向への意識を強める。

3球目、御幸はもう1球高めの釣り球を要求した。

この1球を乾はあえて空振りする。

これでカウントはワンボール、ツーストライク。

カウントは追い込まれ、3球続けてのフォーシーム…。

乾が待つチェンジアップが来やすい状況が出来た。

しかし、御幸は今の乾の空振りに疑問を感じた。

一瞬だけチラリと乾に目を向ける。

マスクの奥で笑みを浮かべた御幸が降谷にサインを出す。

頷いた降谷がワインドアップの投球モーションに入った。

4球目、乾はチェンジアップにタイミングを合わせてステップを踏んだ。

しかし…。

バシッ!

「ストライクスリー!バッターアウト!」

低めのフォーシームが決まり見逃し三振。

乾は目を見開いて固まった。

「ナイスボール！」

御幸が1塁の前園に送球をして内野でのボール回しが始まる。

その光景を目にした乾は1つ息を吐いてから打席を去る。

(これみよがしにボール回しをする辺り、随分と性格が悪い奴だな。)

そう思いながら乾は御幸へと振り返ると、踵を返してベンチへと戻っていったのだった。

## 第234話

降谷は帝東の4番を三振に打ち取ると、続く5番と6番を内野フライに打ち取った。

どうも降谷はフォーシームにバットを当てられた事を少し驚いていたみたいだけど、それで動揺せずに逆に燃えていた様に見えた。

いいなあ、俺も投げたいなあ。

そう思っていたのは俺だけじゃなかったようで、ベンチから沢村の声が響いていた。

「降谷！いつでも代わるぞ！」

うん、清々しいまでの露骨なアピールだ。

ノリや東条も沢村程とは言わないけど、もう少し積極的にアピールしてもいいかもね。

さて、試合は2回の裏に進んで、この試合初めての一也と向井ってピッチャーの対決だ。

一也、頑張れよ！



(さて、乾はあのボール回しの意図に気づいたかなつと。)

打席に向かいながら御幸はそれとなく乾に目を向ける。

すると、乾と目が合った御幸は軽く睨まれた。

(たはっ、これは気付いてるな。さて、どうくる？三振を狙いにくるか？それとも…?)

打席で足場を作りながら御幸は思考を巡らせる。

そして御幸がバットを構えると、向井が投球モーションに入った。

初球、アウトコースにスライダーが決まってワンストライク。

(横の角度がきついけど、コンラッド程じゃないな。今のも打てないボールじゃない。それにしても、今のコースをストライクにするのか…乾はキャッチングが上手いな。)

御幸は長身で左のサイドスローのコンラッドとの対戦経験がある



ため、向井のボールに驚きはなかった。

だが、向井のボールをしつかりと活かすキャッチング技術を持つ乾に、御幸は関心を持った。

2球目、向井はインハイのボールゾーンに投げ込み、御幸の身体を起こそうとした。

だが、御幸はボールを避けずに見送った。

この御幸の反応にマウンドの向井はやや不満そうな表情を見せる。

(悪いな、お前以上のボールを投げる左のサイドスローを俺は知ってるんでね。)

胸元を突かれても動揺を見せない御幸に、マウンドの向井はプレートを外してロージンバッグを手に取る。

(この間を取ったのは乾の指示か？それとも向井の判断？)

御幸はチラリと乾に目を向ける。

すると、自身を観察していた乾と目が合った。

(…なるほどね。)

間を取ったのは乾の指示だと確信を掴んだ御幸は思考を巡らせる。

(今のインハイは狙って投げ込んだ1球…意図としては踏み込ませない為のもの。とすると、勝負球はアウトコースなんだろうけど、俺の反応を見た乾は変えてくる可能性が高い。)

3球目、向井はもう1球インハイのボールゾーンに投げ込んだ。

御幸は反応を見せずにボールを見送る。

これでカウントはツーボール、ワンストライク。

(今のは勝負球への布石じゃなく、俺が向井のボールが見えているのかの確認だな。)

乾からの返球を受け取った向井はスパイクでマウンドを削る。

(おそろしく勝負球は…。)

狙い球を絞った御幸は打席で不敵な笑みを浮かべたのだった。



(見送られた…御幸は確実に向井のボールが見えているな。)

左のサイドスローというあまり見ない投手であるのが向井の強みの1つだ。

その強みの1つが御幸にあまり効果が無い事を察した乾は、リードの組み立てを考え直す。

(アウトコースで勝負しようと考えて胸元を突いていたが…身体を起こせなかった以上、少し危険か。)

アウトコースが危険と認識しながらも、乾は次の1球にアウトコースを使う事を決意した。

(アウトハイに真っ直ぐだ!)

乾の要求に向井が頷く。

多少コースがボールゾーンに外れても、自身のキャッチングでストライクに見せてみせると乾がミットを構える。

向井は乾の要求通りのコースに寸分変わらずに投げ込んできた。

この1球に御幸は初めてスイングをする。

カキンッ!

打球音を耳にした乾がマスクを外しながら立ち上がり、打球の行方を追う。

打球はレフト線上を飛んでいったが、外に切れてファール。

あわや長打という当たりには、乾は内心で胸を撫で下ろした。

(ファールはファール。これで追い込んだ。)

1塁に走っていた御幸が打席に戻ってくるのを、乾はマスクを被り直しながら横目で見る。

(決め球はインローのストライクゾーンからボールゾーンに変化するスクリュー!)

乾のサインに向井は自信を持って領いて投球モーションに入る。

向井がボールを投げ込むと、御幸がスイングを始動した。

この御幸の反応に帝東バッテリーは共に御幸を打ち取ったと確信した。

しかし…。

カキンッ!

金属バットの快音が響いて打球はライト線近くを高々と飛んでいく。

帝東の右翼手が懸命に打球を追うが、打球はそのままスタンドに飛び込んだ。

マスクを外して打球の行方を目で追っていた乾は、ベースを回る御幸に目を向ける。

そして御幸の笑顔でリードを読まれていた事を確信すると、乾は悔しそうに歯噛みをしたのだった。

## 第235話

青道と帝東の試合の2回の裏、向井から御幸がソロホームランを打った。

この1打に動揺した向井はコントロールを乱し、この回で3失点をしてしまった。

3回は両チーム共にバットから快音が響かなかったが、4回の表で降谷が突如コントロールを乱す。

帝東は打者2巡目という事もあって、コントロールが乱れた降谷を攻め立てる。

先頭打者である1番バッターが四球で出塁すると、降谷を揺さぶるべく帝東の2番バッターがバントの構えを見せた。

降谷は落合や片岡、そしてパワプロの指導もあってピッチングはかなりの成長を見せているが、フィールディングはまだ覚束無い。

その為、帝東の2番バッターがバントの構えを見せると、降谷はどこかぎこちない動きでバントに対処しようとして前に詰めた。

この降谷の動きを見た帝東の監督は、バッターにあえて降谷の前にボールを転がす様にと指示を出す。

あわよくばバッターランナーも生きられるという思惑で出したこの指示は的中した。

なんと、降谷は目の前にきたボールをお手玉してしまったのだ。さらに送球も浮いてしまった事でバッターランナーもセーフになり、ノーアウト、ランナー1、2塁の状況が出来る。

一発出れば同点の場面で帝東の打者はクリーンナップの3番。

色濃い得点の臭いに帝東ベンチとスタンドの帝東を応援している者達が沸き立つのだった。



「予想よりも早かったですな。降谷には5回までいって欲しかったです。…」

「ええ、流石は夏の大会で甲子園に出場した強豪校です。」

落合の言葉に片岡は肯定する様に頷きながら言葉を返す。

「それで、降谷はどこまで引つ張るつもりですか？」

「失点をするまでは。」

「大丈夫ですか？」

落合の問い掛けに、片岡はマウンドの降谷から落合に目を移す。

「責任は私が取ります。」

そう言つて片岡がマウンドの降谷に目を戻すと、落合はため息を吐いた。

(やれやれ、負けたら終わりのトーナメントでこんな無茶が出来るのも葉輪がいてこそだな。)

そう思いながら落合は目をパワプロに向ける。

(エースか：野球界では色々なエース像が語られるが、葉輪の様なエースは俺のコーチ経験でも初めてだ。)

力投でチームを鼓舞するエース、チームの中心的存在として仲間を引つ張るエースなど色々な形があるが、どの様な場面でも笑顔で楽しむエースの姿を落合は見たことがなかった。

(これから先、俺のコーチ人生で葉輪の様な選手と出会う事は二度と無いだろう。あと1年、葉輪はどれだけの伝説を高校野球界に残していくのやら…。)

自身の想像に苦笑いをした落合は、東条と川上にアップの指示を出しにいくのだった。



ノーアウト、ランナー1、2塁のチャンスの場面で打席に立った帝東の3番打者は、甘いコースにきた降谷のフォーシームを左中間に弾き返すタイムリーヒットを放った。

パワプロが素早く打球を処理した事で2塁ランナーしかホームに帰れなかったが、それでも2点差に追い付いてなおもノーアウト、1、2塁とチャンスが続き、打者は4番の乾を迎える。

帝東ベンチとスタンドの帝東を応援する者達が乾に歓声を送るが、その歓声はざわめきへと変わる。

それは青道ベンチから片岡が動いたからだ。

片岡が主審に話を伝えると、少ししてウグイス嬢から場内アナウンスが流れる。

『青道高校の守備の変更をお伝えします。ピッチャー降谷に代わりまして葉輪、背番号1。レフト葉輪に代わりまして…。』

この場内アナウンスが流れると、スタンドの青道を応援する者達から歓声が上がった。

その歓声を背に受けながらパウプロがマウンドに向かう。

そんなパウプロの姿を見て、球場に足を運んでいたとある者達が笑みを浮かべた。

それは、引退した元青道高校野球部の3年生達だ。

「伊佐敷、降谷のピッチングをどう見る？」

「スタミナが無いあいつにしちや上出来だろ。」

「俺はもう少し持つと思っただがな。」

「降谷は力み過ぎなんだよ。まあ、俺も前はそうだったけどな。」

ピッチャーとしての目線で丹波と伊佐敷が話をしていく。

「やれやれ、後輩達のピンチだっていうのに、丹波も伊佐敷も薄情だね。」

「あん？　そう言う小湊はどうなんだよ？」

小湊　亮介がさらっと毒を吐くと、それに伊佐敷が言葉を返す。

「春市がエラーをしないかが心配だね。パウプロの後ろを守るのは独特の緊張感があるから。」

「小湊の言う通りだが、あれほど頼もしいエースは他にいない。」

亮介の言葉に結城がそう言うのと、その場の3年生達は同意する様に頷いた。

「クリス、お前ならこの場面を無失点で切り抜けられるか？」

宮内が問いを投げ掛けると、クリスは投球練習を始めたパウプロに目を向ける。

「グラウンドにいないと感じられない勝負の流れもあるが…。」

そこまで言うとは、クリスは笑みを浮かべる。  
「あいつとなら、例えプロが相手でもこの場面を無失点で抑えられる  
だろうな。」

## 第236話

青道の先発投手である降谷は4回の表にコントロールを乱してしまい、帝東打線に1点を取り返されてしまった。

そして2点差に追いつかれてなおもノーアウト、1、3塁のピンチというところでパウプロと交代を告げられた降谷は、パウプロにボールを手渡すとベンチへと下がっていった。

「降谷、お疲れ。アイシングの準備をしておくから、汗が冷える前にアンダーシャツを交換しておけよ。」

「はい。」

ベンチに戻った降谷は片岡と落合に労いの言葉を受けた後、小野にその声を掛けられていた。

アンダーシャツを交換した降谷に、小野が氷を入れた氷嚢を差し出す。

「ケアはしっかりしろよ。ケガをしてプレー出来なくなるのが一番つまらないからな。」

自身も指をケガして一時ミットを持たなかった実感を込めて小野がそう言うと、降谷は素直に頷いた。

降谷が氷嚢で右肘と右肩を冷やししながら、どこか呆然とした様子でグラウンドを見ていたので小野が声を掛ける。

「どうした、降谷?」

「さっき、真っ直ぐが綺麗に打たれたなと思ひまして…。」

「甘いコースにいったからな。あれは打たれても仕方ない。」

小野の返答に降谷は納得を示す。

3回の表までは低めに決まっていた真っ直ぐが真ん中辺りに浮いてしまい、それをあつさりやと打たれて失点してしまったからだ。

「もつと投げたかったです。」

「夏の大会で甲子園に行った相手に先発させてもらえただけ、降谷は十分にチャンスをもたらえていると思うぞ。」

1軍から3軍まである青道野球部は、入部から引退まで一度も公式戦に出場出来ない選手も珍しくない。



それを考えれば、1年の秋で公式戦に出場出来た降谷は色々恵まれているのだろう。

それでも中学時代に捕手に恵まれなかった降谷は、投げる機会に飢えているのだ。

「どうすればもつと投げられますか?」

「…結果を出すしかないだろうな。」

降谷が小野に目を向ける。

「高校野球は負けたら終わりのトーナメント方式の大会が基本だ。だからこそ、普通は練習試合とかで結果を出して信頼してもらえなければ実力があっても使ってもらえない。」

「信頼…。」

降谷はマウンドのパワプロに目を向ける。

「パワプロは1年の時から結果を出して、監督やコーチ、そして仲間達の信頼を得ている。だから、このピンチの場面を任せてもらえるんだ。」

ノーアウト、1、3塁で4番打者という状況でも、パワプロはマウンドに笑顔でいる。

降谷は悔しさや羨ましき、そして憧れといった色々な感情に胸に抱くと、拳を握り締めながらパワプロの投球を見ていったのだった。



2点差でなおもノーアウト、1、3塁のチャンス。

しかも打順は4番。

帝東ベンチにいる選手や球場に足を運んだ帝東を応援する者達は歓喜の声を上げていた。

だが、パワプロがマウンドに上がると歓喜の声は必死な声援へと変化する。

そんな声援の中で打席に向かう乾は、緊張による喉の渇きを感じていた。

(落ちつけ…たとえヒットは打てずとも、ボールを転がすぐらいは出

来る筈だ。」

ノーアウト、1、3塁という絶好の好機：スクイズやエンドランなど色々な作戦が考えられる。

有利なのはあくまで帝東：そう考えて乾は己を落ちつかせた。

打席に入る前に乾はベンチに目を向ける。

帝東の監督のサインは『待て』。

降谷からパウプロに変わった事で、先ずは最低限目を慣らさなければと帝東の監督は考えたのだ。

監督のサインを確認した乾が打席に入る。

乾は心臓の鼓動がやけに煩く感じた。

パウプロがセットポジションに入ると、乾のバットを持つ手に力が入る。

見送ると決めていても、無意識に身体に力が入ってしまったのだ。

パウプロがセットポジションからクイックでボールを投げ込む。

左打者の乾は身体に当たると思い歯を食い縛るが、ボールはそこから鋭く変化してストライクゾーンへと納まった。

(今のは…スライダー?)

乾が内心で首を傾げていると、次の瞬間には目を見開いて呆然とする出来事が起こる。

なんと、1塁ランナーが御幸の牽制でアウトになってしまったのだ。

スタンドの帝東を応援する者達から落胆の声が上がった。

(どうして…御幸の肩がいい事はミーティングで話していたのに…)

この牽制アウトを責めるのは酷であろう。

パウプロという絶対的な怪物から点を奪えるかもしれない好機に1塁ランナーの3番打者は絶対にホームに帰ると意気込み、第2リードを少し大きく取ってしまったのだ。

彼も強豪校でレギュラーを勝ち取った選手だがまだ高校生。

舞い上がってしまったとしても無理はないだろう。

むしろ、その少し大きく取った第2リードを見逃さなかった御幸を誉めるべきだ。

帝東の監督である岡本は牽制アウトになった彼に罵声を浴びせなかったが、彼はベンチに戻ってくると、ベンチの奥に行つて泣き崩れた。

打席を外して監督のサインを待っていた乾は、その光景を見て唾を飲み込む。

その乾の様子の変化に気付いた御幸はマスクの奥で笑みを浮かべた。

この後、動揺していた乾はパウプロのフォーシームを転がす事が出来ずにスクイズを失敗してしまう。

まだツアアウト、3塁のチャンスだったが、失敗を続けて勢いを失った帝東にはパウプロを打ち崩すだけの力は残されていなかった。

そしてその後の帝東は投打が噛み合わずに、青道に7回コールドで敗れてしまったのだった。

## 第237話

秋の高校野球選抜東京地区大会、帝東に勝利して3回戦へと駒を進めた青道は仙泉学園と試合をする事になった。

この仙泉学園との試合で先発をする事が決まった沢村はハイテンションで投げ込みをしている。

「ワハハ！どうですか、落合コーチ！」

帝東との試合で登板しなかった事でエネルギーが有り余っている沢村は、肩をグルグル回しながら楽しそうに叫ぶ。

「沢村、ツーシームを投げる時に曲げようとして腕の振りが緩んでる様に見えるが、ツーシーム等のムービングボールは変化の大きさよりもキレを重視するべきだ。」

「つまり、どうすればいいんですか!？」

「しっかりと腕を振る事、そしてボールを前に押し出す力をメインにする事だな。」

「オス！わかりました！」

沢村はパウプロにチェンジアップを、伊佐敷にツーシームを伝授されたが、いざ変化球を投げようとすると腕の振りが緩んだり、変に力んでしまう様になっていた。

これは無意識にムービングボールを投げていた時にはなかったものだが、落合はこの沢村の状態を『多くの投手が成長する過程で経験するもの』として長い目で見守っていた。

「パウプロ先輩！可愛い後輩に何かアドバイスを！」

臆せずにパウプロから貪欲に技術を吸収しようとする沢村の姿に落合は感心する。

「リトル時代にクリスさんに教えてもらったことなんだけど、直球も変化球も腕の振りは同じにするべきなんだってさ。」

「それはどうすれば!？」

「うーん、ロボットみたいの手首から先だけ交換する様なイメージ……って言えばいいのかな？」

パウプロのアドバイスに聞き耳をたてていた他の投手達も手に

持ったボールに目を向ける。

「手首から先だけかあ…東条はどうしてた？」

「なるべく腕の振りは一緒にって考えてましたけど、葉輪さんのイメージで考えた事はないですね。」

川上の問い掛けに東条がそう答えると、先日の試合で先発をしたから休養を命じられている降谷が投げ込みが出来ずに身体をウズウズさせる。

「川上先輩達も試合で投げたのに投げ込みをしてズルい。」

「降谷は先発で一番球数を投げてるから。」

帝東との試合では4回の裏に追加点を取った事でパウプロは1イニングでレフトに戻り、代わりに5回の表から東条がマウンドに上がっている。

試合後に東条は、『シニアの全国大会よりも葉輪さんの後に投げの方が緊張した』と語っている。

東条は5回と6回の2イニングを無失点、川上はコールド勝ちとなった7回の1イニングを無失点で投げ終えた。

この投球結果は夏の大会で甲子園に出場した帝東相手に出したものという事もあって、東条や川上に少なからぬ自信を与えている。

「肩肘を休ませる事も大事だって教わってるだろう？」

東条の言葉に降谷はプイツとそっぽを向く。

理解はしているが投げたい気持ちに変わりはないのだ。

そんな降谷の態度に東条と川上は顔を見合わせて苦笑いをする。

パァン！

ミットの快音に東条達3人は沢村の投げ込みに目を向ける。

「おお!?!今のは良かったんじゃないですか!?!」

沢村のボールを受けている小野が「ナイスボール!」と言って返球する。

小野の返球を受け取った沢村がニツと笑うとその笑みにあてられたのか、パウプロも笑顔で投げ込みを始める。

パァン!!

沢村のボールよりもいい音が御幸のミットから響くと、沢村がぐぬ

ぬと歯を噛む。

「負けませんよ！・パウプロ先輩！」

パウプロへの対抗心を隠さずに出す沢村を目にして、東条達も負けられないと練習を始めるのだった。

しかし…。

「おい降谷、お前は見学だ。」

苦笑いをする落合に止められると、降谷はがっくりと肩を落としたのだった。

## 第238話

仙泉学園。

今年の秋の高校野球選抜東京地区大会の第3回戦で青道と戦う事になった相手である。

近年、仙泉学園は激戦区である東京地区でベスト8の常連になりつつあり、青道や市大三高の様な名門ではないが、強豪校の1つと呼ばれるだろう。

そんな仙泉学園だが1つ特徴がある。

それは、名門と呼ばれる高校からのスカウトや推薦から溢れた者達が集まっている事だ。

「真木、調子はどうだ？」

仙泉学園の監督である鵜飼 一良（うかい かずよし）が長身の男に話し掛ける。

鵜飼は色々な学校を渡り歩き40年以上の監督経験を持つベテラシンド。

よくボヤクのが特徴だが、怒鳴り散らしたりはせず指導する彼の指導方法は、多感な年頃の青少年達からは概ね好評を得ている。

「問題ありません、鵜飼監督。」

鵜飼の言葉にそう返事したのは仙泉学園のエースの真木 洋介（まき ようすけ）だ。

現在2年生の真木は1年生の頃からエースナンバーを背負っていた才能ある選手である。

長身の右腕で威力のある真っ直ぐが決め球で、その長身から投げ込まれるカーブは中学時代に『日本一高いところから投げ込まれるカーブ』という評価を得ている。

しかし、真木も仙泉学園に来た多くの選手の様を狙っていた高校のスカウトに声を掛けられなかった経験をしている。

真木が狙っていた高校というのは…次の対戦相手である青道高校だ。

現在の真木は2年生…つまり、パワプロと同世代なのである。

真木はスカウトから声を掛けられて青道の特待生を狙っていたのだが、結果として青道の特待生にはパウプロと御幸が選ばれている。本来ならまだ推薦や一般入学で青道に進む道もあったのだが、真木は最終的に仙泉学園に進む道を選んだのだ。

「そうか、なら投げ込みはそのぐらいにしておけ。肩を休ませるのも投手の仕事だぞ。」

「…では、走ってきます。」

そう言つて真木が走り込みに行くと、鵜飼は大きなため息を吐いた。

「練習熱心…といえは聞こえはいいが、その実は自信のなさというのがな…。」

ボヤク様に鵜飼がそう言うが、これは真木だけの問題ではない。

思春期真っ直中の多感な時期に挫折を経験した事で、仙泉学園に入学した多くの野球部員は劣等感を抱えているのだ。

「はあ…推薦や特待生を狙っていただけあって、相応に才能がある子達なんだがなあ…。」

教え子達に自信を持たせる為にも名門といわれる所に勝たねばならない。

しかし、ベスト8に食い込める様になっても、名門や強豪校に勝ちきれていないのが現状だ。

「葉輪が2回戦の様に先発してこなければまだ勝ちの目もあるが、真木が崩れないのが最低条件だな…。」

ボヤきながら頭を掻いた鵜飼は、次の青道戦に向けて頭を悩ませるのだった。



「栄純、肩慣らし程度だからね。休むのも大事なんだから強く投げ過ぎたらダメよ。」

「言われなくてもわかってるって。」

仙泉学園との試合の前日、いつもに比べて軽めの練習で切り上げる



事になった沢村は、試合前日の高揚もあってソワソワしていた。

そんな沢村に高島や貴子からアドバイスを受けた若菜は、沢村をキャッチボールに誘ったのだ。

沢村が若菜に向けて軽くボールを投げる。

「前はどう変化するかわからなくてキャッチボールするのが嫌だったけど、今ではちゃんと捕りやすいボールを投げられる様になったわね。」

「うっ!? そう言えばあいつらも俺とキャッチボールをするの嫌がってた…。」

中学時代の沢村はその時の気分でボールの縫い目や握りを変えていたため、キャッチボールでもナチュラルなムービングボールを投げていた。

そのため、中学時代の沢村は仲間達をキャッチボールに誘う度に苦笑いをされていたのだ。

「それで、高校野球公式戦デビューを前にした気分はどう?」

「ハッハッハッ! いつでもエースナンバーを背負う準備は出来てるぜ!」

「気持ちの準備は出来ていても、葉輪さんからエースナンバーを奪うには足りないものが多すぎよ。」

「い、言われなくてもわかってる!」

「どうかしら?」

からかう様に若菜が微笑むと、その若菜の微笑みを見た沢村は顔を赤くする。

そんな沢村の反応に手応えを掴んだ若菜は鼻歌を歌いだしそうな程に上機嫌になった。

二人は15分程世間話をしながらキャッチボールを続けると、明日の試合に備えてゆつくりと休む為にキャッチボールを終えた。

「スタンドから応援してるから、頑張りなさいよ、栄純。」

「…おう!」

沢村は満面の笑みの若菜に見送られて意気揚々と寮の部屋に戻る。

しかしそんな沢村を、同室の仲間達が尋問準備万端で待っていたの

だ  
っ  
た。  
。

## 第239話

秋の高校野球選抜東京地区大会の第3回戦、青道高校と仙泉学園の試合が始まった。

先攻は青道。

1回の表、仙泉学園の先発マウンドに上がった真木は、青道の先頭打者である小湊 春市にツーボール、ツーストライクと追い込んだ状況からライト前ヒットを打たれてしまう。

これは真木の立ち上がりが悪いわけではなく、春市が真木の球質に近いボールを知っていたのが大きかったと言えるだろう。

真木は直球が決め球で持ち球にカーブを持っているのだが、青道には右腕のカーブの使い手である丹波、そして右の速球派である伊佐敷がいたのだ。

その二人のボールを春市は紅白戦の打席で見しており、さらに右の速球派の降谷のボールも見てきている。

その為、春市は真木のボールに1打席で対応出来たのだ。

マウンドの真木は少し目を見開いてショックを受けていた様だが、ネクストバッターサークルに入ったパウプロの姿を見ると闘志を燃やす。

ノーアウト、1塁の状況で打席に入った2番打者の白州はバントで春市を2塁に送る。

白州は華のあるプレーは少ないが、こういった堅実なプレーの確かさは青道でも1、2を争う程に優秀な選手なのだ。

キャプテンである白州がチームプレーで春市を2塁に送ると、スタンドにいる青道野球部2軍、3軍の者達が大声で称賛を送った。

これはキャプテンとして普段から多くの者達とコミュニケーションを続けて信頼を築いていた白州の人徳が現れたといえるだろう。

ワンアウト、2塁のチャンスの場合でパウプロが打席に入る。

そのパウプロをマウンドの上から真木は睨んでいた。

ここで仙泉学園の監督である鵜飼はキャッチャーにタイムを取らせてマウンドに行かせる。

青道のスカウトから声を掛けられる事を望んでいた真木がパウプロを相手に熱くなるのは理解出来るが、ここは慎重になるべき場面であるからだ。

キャッチャーの言葉を受けた真木がマウンドをスパイクで均す。

その真木の姿を見ても鵜飼は不安を拭えなかつた。

(真木はインコースの真っ直ぐで勝負にいくだろうな…。)

パウプロがインコースに強い事は高校野球界では周知の事実として広まっている。

だが、だからこそインコースでパウプロを打ち取ってプロのスカウトにアピールをしたいという選択をする選手も多いのだ。

しかし…。

カキンッ!

その選択をした多くの者は今の真木のように返り討ちにあつてしまっている。

スタンドに打球が飛び込んだのを見た真木は、膝に手を付いて項垂れたのだつた。



青道高校と仙泉学園の試合は1回の表にパウプロのツーランホームランと御幸のソロホームランが飛び出した。

5番バッターの前園もツーベースヒットを打ったが、後続が続かずに1回の表は3得点で終わる。

そして1回の裏、沢村にとって初めての高校野球公式戦が始まるのだつた。



「ガンガン打たせていくんで、よろしくお願いしますー!」

振り返った沢村がマウンドの上でそう叫ぶと、青道メンバーが次々に返事をする。

「ヒヤハ！後輩の面倒は見ねえとな！」

「任せてよ、栄純くん！」

「沢村！しっかりと腕を振っていけ！」

遊撃手の倉持、二塁手の春市、そして中堅手でキャプテンの白州が大きな声を沢村に送る。

そんな仲間達の声に、沢村はマウンドの上で笑顔を浮かべた。

（ハハ、今ならパワプロ先輩がマウンドで笑顔になる理由がわかる気がする。）

中学時代の仲間達と楽しむ野球も面白かった。

だが、高校野球でも最高峰のレベルで切磋琢磨しあえる今が楽しくて仕方ない。

御幸のサインに頷いた沢村は、抑えきれぬ笑顔のまま投球モーションに入る。

沢村の天性の身体の柔らかさが生み出すボールの出所の見えにくさが、仙泉学園の先頭打者にタイミングを取らせない。

パァン！

初球が御幸のミットに納まり主審がストライクをコールすると、沢村は拳を握り締める。

（俺は…間違いなく野球が上手くなってる！）

中学時代無名だった沢村が、高校野球初めての公式戦で躍動するのだった。

## 第240話★

沢村栄純。

軟式野球出身で中学時代は無名の選手。

左投げ左打ちの投手でバントが非常に上手い…といったスカウトイングメモを見たロジャーズのスカウトであるベックはマウンドにいる沢村に目を向ける。

『まだ線は細いけど、非常に可能性を感じさせてくれる選手だね。』

秋の高校野球選抜東京地区大会の第3回戦、仙泉学園との試合で先発している沢村の投球を見ながら、ベックはメモ帳にスラスラと何かを書き込んでいく。

『僕個人としては沢村の方が降谷よりも好みの選手だ。』

澆刺とした雰囲気を持ってマウンドで躍動している沢村を見て、ベックは笑みを浮かべる。

『しかし、どうも日本では降谷の方が沢村よりも評価が高いみたいだね。僕の評価では降谷が沢村を上回っているのは球速ぐらいなんだけどなあ…。』

そう言ったベックは苦笑いをしながら頬を搔く。

野球界ではスピードガンが導入されてからとある考えが広がっている。

150kmの壁、160kmの壁…といった考えだ。

アマチュアに限らずプロの選手でもこの壁にこだわる選手は多い。

プロの一流選手の技術ともなると理論化出来ずに感覚的にしか説明出来ない事が多々ある。

しかもその感覚的なものは、同じプロの選手でも理解出来ない事があるのだ。

それに比べれば150kmの壁などは数値化されているので非常にわかりやすい。

また日本人投手に160kmの壁を超える事が出来た者が長年現れていない事もあり、プロアマどころか日本の野球ファンでさえも球速に対するこだわりが大きくなっているのだろう。

『まあ、おかげで沢村に接触しやすいのはありがたいかな。今はパウプロと御幸を確実にアメリカにつれていくのが優先だけどね。』  
カメラの電池残量を確認しながらそう言ったベックは、メモ帳を手に観戦を続けるのだった。



沢村が投げている相手は東京地区大会でベスト8の常連になりつつある強豪校候補の仙泉学園なのだが、そんな仙泉学園を相手に沢村はランナーを出しながらも5回まで無失点で抑えていった。

140km台の真つ直ぐをバンバン投げていた降谷に比べて、沢村は130km前後の真つ直ぐと少し見劣りをしてしまう。

持ち球にツーシームとチェンジアップもある沢村だが、130km前後のボールならばそう突出したものでもないというのが正直なところだろう。

だが、仙泉学園打線はあと一步のところまで沢村から点を奪えていない。  
い。

この事が某ネット掲示板では話題になっていたのだった。



【怪物】パウプロを応援するスレ135 【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てるように

523：今の高校野球では130kmなんて珍しくないやろ？  
なんで仙泉学園は打ち込めへんのや？

528：523✓キレがいいんやろ

5 3 3 : 5 2 3 < コクがいいんやろ

5 4 0 : 5 2 3 < のどごしがいいんやろ

5 4 4 : 5 2 3 < キンキンに冷やすのを忘れずにな!

5 5 1 : 5 2 8、 5 3 3、 5 4 0、 5 4 4 < いい連携やな w w w

5 5 5 : 解析班! 解析班はおらんのか!?

5 7 6 : ピッチャーのボールは打席に立ってみなわからんところが  
あるけど、

打者の反応を見るにタイミングが取れてへんみたいやね

5 8 6 : 投球フォームはそこまで変やないな。という事はボールの  
出所が見にくいんか?

5 9 2 : 左の変則ピッチャーか : ラスボスの弟子つてところやろか  
?

6 0 6 : 5 9 2 < 笑顔で投げている所を見ると、その線が濃いと思  
うで

6 1 3 : 現状ではラスボスの下位互換ですらないけど、これはこれ  
でいいピッチャーやな

6 1 7 : 打の青道やなくて投の青道やな w w w

6 2 0 : 6 1 7 < それな w w w



639：アンチスレではラスボスが投げたり引つ込んだりするのを舐めプ言うてるけど、どうなんや？

645：639＜対戦相手に敬意を払ってるかどうかは別として、舐めプに見えてもしやあないやろな

650：アンチスレではラスボスが舐めプしている方向性で叩き始めとるなwww

657：ラスボス程のピッチャーを潰すぐらいなら舐めプと誇られる方がマシやろ。英断や。

673：ちなみにお前らは青道と試合するとしたらどう思う？

682：673＜勝つならラスボスに投げてほしくない。思い出作りなら投げてほしい

705：682＜その通りやなwww

717：アンチがどう叩こうともラスボスに投げさせるだけの力がない対戦相手が悪い

738：興行の事とか高校野球の健全性を持ち上げて叩くマスコミが現れそうやな

741：738＜フラグやめえや！www

748：世間が煽りに煽って投げさせ続けた結果、プロに行く頃には

肩ボロになってた選手が何人いると思ってんねん！

756：片岡監督には周囲の声に負けずにラスボスを大事にしても  
らいたいものやな



某ネット掲示板での懸念が当たったのか、青道高校と仙泉学園の試合の後に高校野球の健全性を持ち出してパウプロの起用法について言及する記事が世間に流れた。

しかしプロの選手達がアマチュア時代の投げ過ぎについて語った事でこの話題が鎮火すると、今度は片岡監督のパウプロ起用について擁護する様な記事が世間に流れ始めたのだった。

## 第241話

青道高校と仙泉学園の試合は6回の裏まで進んでいた。

6回の表までに青道高校は真木から8点を奪っている。

対して仙泉学園は5回の裏までに何度もチャンスの場面は作るものの、後一本を沢村から打つことが出来ていなかった。

沢村のボールはパウプロの様に打席の外から見てもわかる様な凄いいものではない。

それ故にスタンドからは仙泉学園の打者に向けて野次の様な声が含まれた声援が飛んでいる。

しかし沢村のボールの真価は打席に立ってみて初めてわかるのだ。ボールの出所の見えにくさ、思ったよりも手元でピユツと来る真つ直ぐ、そして腕の振りが真つ直ぐと同じツースームとチェンジアツプ。

これらを持った沢村を御幸がリードする事で、仙泉学園打線を無失点に抑えているのだ。

他にも沢村の明るい雰囲気や投球テンポの良さが守備にいいリズムを作り出しているのもあるが、前述の事が仙泉学園打線を抑える事が出来ている大きな要因だろう。

そんな1年生とは思えない快投を見せているマウンドの沢村の元に御幸が足を運んでいる。

「沢村、たぶんだけどお前はこの回までだ。」

「えっ!?俺はまだ行けますよ!」

「その意気込みはいいんだけど、お前のボール浮きはじめているぞ。」「うっ!?!」

「その様子だと、まだ疲れているっていう自覚はないみたいだな。」

ここまでの投球で沢村のボールのキレは失われていないものの、5回の裏からコントロールが乱れ始めていた。

それでも仙泉学園打線を抑えられたのはコールドゲームを回避しようという焦りが大きい。

「まあ、初めての公式戦でここまでやれたなら上出来だろう?」

「パワプロ先輩の公式戦デビューはどうだったんですか?」

「7イニングを8奪三振、被安打7、3失点だったよ。」

御幸の言葉に沢村が驚いて目を見開く。

そんな沢村の姿に御幸はミットで口を隠しながら笑った。

「あいつだって最初から今みたいなどんでもないピッチャーだったわけじゃないぞ。もっとも、リトルでもシニアでも俺が知る限りナンバーワンのピッチャーだったけどな。」

そう言った御幸はミットでポンツと沢村の胸を軽く叩く。

「さあ、疑問や質問は試合が終わったら聞いてやるから、まずはきつちりと抑えようぜ。」

「…おうー」

ちなみに御幸は、ここで沢村がパワプロのデビューの時期を勘違いしている事に気付いているがあえて指摘しない。

それをしたら沢村が対抗心を燃やして力むと確信しているからだ。

マスクを被って人の悪い笑みを隠した御幸がキャッチャーボックスに座ると、マウンドの沢村が大きく息を吸い込んで声を上げる。

「またガンガン打たせて行くんで、よろしくお願いします!」

沢村の声に反応した守備陣にいい雰囲気だ御幸は、サインを出してスツとミットを構えたのだった。



「小野、帰ったらボール受けてくれない?」

俺達は9-1で仙泉学園に7回コールド勝ちをしたんだけど、俺の登板はなかったんだよね。

だから投げ込みをしたくて、こうして試合が終わった後に小野に声をかけてみた。

ちなみに沢村が6イニングを1失点、東条が1イニングを0失点の結果だった。

「パワプロ、俺が受ける。」

「二也でも構わないけど、ノリや降谷のボールも受けておいた方がいい

「いんじゃない？」

「そうだぞ御幸。パワプロの相手は俺に任せておけ。」

そう言つて勝ち誇つた様なドヤ顔をする小野に、一也が笑顔返す。

「いやいや小野さん、大会期間中に指をケガしたらまずいんじゃないですか？」

「いやいや御幸さん、これから先にケガをしない為にもパワプロのボールを受けておかないと。」

お互いに笑顔を浮かべながら話しているのに、目から火花が出ている様に見えるのは気のせいかな？

「降谷、どつちに受けて欲しい？」

「御幸先輩で。」

俺の問いかけに降谷がそう答えると、一也と小野はさらに笑顔のまま会話を続けていくが、落合コーチの介入で俺のボールは小野が受ける事に決まった。

この一件で一也は目に見えて落ち込んだんだけど夏川がそんな一也を慰めていた。そうすると、青道野球部の多くの人達が息の合った連携で二人に中指を立てたのだった。

## 第242話

秋の高校野球選抜東京地区大会の第4回戦である準々決勝の日、降谷に代わって急遽先発する事になった東条は念入りに身体を解していた。

「高校野球で先発をする気分はどうだ？」

「正直に言うと緊張してますね、御幸さん。」

身体を解している時に御幸に問い掛けられた東条は苦笑いをしながら答える。

「今回は降谷が爪を割ったから先発出来ますけど、春の甲子園では実力で奪います。」

「ははっ、そういう気持ちを持っている奴をリードするのは大歓迎だ。」

御幸は身体を解している東条の肩を軽く叩くと、自身も身体を解し始めたのだった。



青道が準々決勝で戦う相手は今年の夏まで財前がいた黒土館高校である。

財前が引退した黒土館にはパウプロや成宮の様な絶対的エースはいないが、トーナメントの組み合わせに恵まれた事で準々決勝まで勝ち上がってきた。

もともと、彼等が勝ち上がった要因はそれだけではない。

引退した財前が後輩達にムービングボール主体の打ち取るピッチングを指導したからだ。

この財前の指導がしっかりと継承されていけば、近い将来に黒土館が強豪と呼ばれる日がやって来るかもしれない。

しかし今の彼等には、まだ強豪との試合は厳しかったのだろう。

1回の表の青道の攻撃で黒土館は4点を失ってしまった。

パウプロのタイムリーツーベースヒットで1点、御幸のタイムリー

ヒットで1点、そして前園のツーランホームランで2点と奪われてしまったのだ。

だが黒土館のメンバーの表情は明るかった。

負けて元々という開き直りだが、彼等は勝利至上主義が多くを占める高校野球のグラウンドをパワプロの様に笑顔で楽しんでいたのだ。

仲間がボールにバットを当てれば称賛の声を上げ、東条がコースギリギリのボールを投げればそれも称賛して野球を楽しむ姿はスタンドの観客達をも笑顔にした。

そんな彼等の声に影響されたのか、青道のベンチからも黒土館の選手を称賛する声が飛び、スタンドからは双方を応援しあう声が飛び交った。

両チームの選手達全員が笑顔でプレーをして試合を楽しんだ。

しかし、勝負の世界とは残酷なものである。

黒土館高校は青道高校に5回コールドで敗れてしまったのだ。

悔しそうに苦笑いをした黒土館のメンバーは、スタンドから降る拍手の雨を背に受けてグラウンドを去っていった。



「東条！お前にエースナンバーは渡さないからな！」

黒土館との準々決勝が終わって青道高校に戻ると、沢村が東条を指差しながら宣言した。

その沢村の宣言に同意する様に降谷も闘志を燃やす姿を見せる。

そんな二人を見て東条も受けて立つと言わんばかりに二人を見詰める。

(5回コールドだったが、結果としては先発をした1年生で唯一の無失点…。やはりピッチングの完成度は東条が頭一つ抜けているな。)

青道野球部1軍の1年生3人を落合が見比べていく。

(降谷はスタミナに大いに課題がある…。秋の大会で3回までしか持たんのでは、夏の大会で先発をさせるのは厳しいと言わざるをえない…。オフシーズンには徹底的に走り込ませないとな。)

降谷のコントロールはパウプロの助言で改善しつつあるものの、スタミナばかりは一朝一夕では身に付かない。

今大会で降谷自身がスタミナの重要さを自覚したのは好材料だが、落合は3年の夏までにもものになれば十分だと考えていた。

（沢村は時折光るピッチングを見せるんだがまだ不安定だ…経験を積ませるためにも紅白戦を増やす事を片岡監督と検討すべきか？）

本格的に寒くなってくる前に出来るだけ紅白戦をと落合は考えるが、まだ秋の大会中だと気付いて苦笑いをする。

「パウプロが先発をするとなれば安心感しかないのはいいんだが、これに慣れすぎると1年後には苦勞する事になるだろうな。」

気を引き締め直すために顔をピシヤリと張った落合は、まだ睨み合いを続けている3人に声を掛けるために近付いていくのだった。



## 第243話

秋の高校野球選抜東京地区大会の準決勝、青道の相手は市大三高との試合を制した稲城実業だ。

青道の先発はパウプロ、稲城の先発は成宮とシニアの頃からの因縁を持つ二人の投げ合いの可能性が高いとあって、スタンドにはプロのスカウトの姿もチラホラと見える。

そんな満員御礼の球場の中でもパウプロはいつもと変わらぬ笑顔でアツプをしていた。



「パウプロ、今日は真っ直ぐとスライダーを軸にリードを組み立てていくぞ。」

これまでは決め球に使う事が多かったスライダーを軸にするという御幸の言葉に、パウプロは首を傾げた。

「リトル時代から続けていた真っ直ぐとカーブの組み立てを変えるのは抵抗があるかもしれないけど…試させてくれないか?」

「片岡さんと落合さんは何て言ってるんだ?」

「任せるだつてさ。」

「片岡さんと落合さんがいいなら構わないぞ。」

優勝候補を相手に今までやらなかった事をやる。

ある意味で奇襲にはなるかもしれないがリスクも生じるだろう。

それでも片岡と落合がGOサインを出したのは、パウプロと御幸に対する信頼からだ。

「真っ直ぐとスライダーを軸にしなから要所でカーブとチェンジアツプを要求する。それと縦のスライダーもな。」

「わかったー!」

グローブとミットを合わせた二人は、笑顔でアツプに向かうのだった。



試合前のパウプロの投げ込みを、稲城のメンバー達が観察する。動画で何度も何度も繰り返し見たパウプロのボールだが、それでも明確に打つイメージが出来ていない。

1点。

1点でいい。

それを奪う事が出来れば俺達のエースは勝てる。

だが、その1点が果てしなく遠い。

例外なく稲城のメンバーがパウプロの投げ込みを凝視する。

中にはバットを持ってベンチの前でタイミング取る者もいた。

稲城のメンバー達が打倒パウプロに意識を向ける中で、成宮は別の事を考えていた。

それは夏で引退した原田に代わって新たにバッテリーを組む事になった多田野の事だ。

多田野 樹(ただの いつき)。

成宮が声を掛けて集めた優秀な先輩を差し置いて、1年ながら稲城の正捕手の座を勝ち取った男である。

だが、そんな多田野にも一つだけ問題があった。

それは：ブロッキングが甘く、成宮の決め球であるチェンジアップを後ろに逸らしてしまう事があるのだ。

この多田野のブロッキングの甘さが響いて、成宮は準々決勝の市大三高戦で失点してしまっている。

(多田野は五月蠅く要求してくるだろうけど、チェンジアップは無しだな。パウプロと投げ合っている時にボールを逸らされて気持ちが悪えたら絶対に勝てないし。)

成宮は原田と違って信頼しきれない多田野を差し置いて一人でピッチングを考える。

(カットを主体にするとして、決め球はどうする？スライダー？フォーク？)

あれこれと成宮が考え続けていると、多田野が青道の練習時間が終

わったと声を掛ける。

自分の気も知らないでと不満な表情をした成宮は、ため息を吐きながら多田野と共に試合前の投球練習に向かうのだった。

## 第244話

秋の高校野球選抜東京地区大会の準決勝である青道と稲城の試合が始まった。

先攻は稲城。

1回の表のマウンドにパウプロが上がると、球場は歓声に包まれる。

すると、球場のその雰囲気は青道の1年生野手達は緊張で少し身体を固くしてしまった。

その1年生野手の内の1人である小湊 春市もスタンドやベンチからの期待、さらに稲城のメンバー達が産み出すプレッシャーに身体が固くなる程に緊張していた。

(兄貴はこんなプレッシャーの中で当たり前にプレーしてきたんだ…。)

春市も今大会でパウプロが登板をした時に守備についていたが、まだプレーボールのコールすら掛かっていない状況で、これ程のプレッシャーを感じた経験は春市にはなかった。

パウプロがインニング開始前の投球練習をしている間に内野陣がボール回しをするが、春市は身体がふわふわとしているのを自覚した。

(これは…ヤバイ！)

恥ずかしがりやな春市だがプレーボールのコールが掛かると、なりふり構ってられないとばかりに大声を出すのであった。



(さて…どうしたもんかな?)

プレーボールのコールが掛かると同時に、大きく声を出し始めた1年生達の異常に気付いた御幸は頭を悩ませる。

(パウプロは当然としてゾノ、倉持、白州も問題ないか。後は…間違いなく緊張しているな。)

御幸は緊張する様な場面はおいしい場面だと思っているので今の球場の雰囲気は歓迎する状況だが、だが全ての選手がそういった場面で力を発揮出来るわけではない。

(序盤の内にボールを捕らせて緊張を解かせたい。でも、カルロスを塁に出したくないな。)

稲城の不動の一番バッターであるカルロスがバットを構えている姿を、御幸は横目でチラリと見る。

(まあ…先ずは予定通りにいってみるか。)

御幸はパウプロにアウトローへバックドアになるスライダーを要求する。

頷いたパウプロが独特な投球モーションからスライダーを投げると、カルロスは驚きながらもジェスチャーでベンチに球種を伝えた。そのカルロスの反応を確認しながら御幸は次の球種を考える。

2球目、御幸はインローにボール1つ分内に外れるスライダーを要求する。

パウプロが御幸の要求通りのスライダーを投げると、カルロスはバットを振らずに見送る。

これでワンボール、ワンストライク。

(今のコースは取ってくれないか…。なら外は?)

3球目、御幸は外にボール1つ分外れるフォーシームを要求する。要求通りのボールに御幸がマスクの奥で笑みを浮かべるが、主審の判定はボールとなりカウントはツーボール、ワンストライク。

ボール先行のカウントになってしまったが御幸には欠片も焦りはない。

(今までならここでカーブを要求しなくなってたところだけだな。)

4球目、ここで御幸はカルロス相手に3回目となるスライダーを要求する。

この1球はインローのストライクゾーン一杯に決まってカウントはツーボール、ツーストライク。

カルロスはタイムを取って素振りをしてから打席に戻る。

そのカルロスの姿をチラリと横目で見ながら、御幸はパウプロにサ

インを出す。

5球目、アウトローのチェンジアップにカルロスのバットが空を切った。

この結果に御幸はマスクの奥で微笑む。

(投球の軸を真っ直ぐとスライダーに変えてみたけど、こっちの方がバッターは俺好みの反応をしてくれるな。)

パワプロがリトル時代から続けていた真っ直ぐとカーブによる組み立てを変えるのは御幸でも若干の抵抗はあったが、試してよかつたとさらに笑みを深めたのだった。

## 第245話★

(さて…どうしたもんかな?)

秋の高校野球選抜東京地区大会の準決勝の青道と稲城の試合、1回の表の稲城の先頭打者であるカルロスを三振に抑えると、御幸は少し頭を悩ませる。

グラウンドにいる青道メンバーの1年達の緊張を解すためにも他の打者を打たせて取りたいと思っっているのだが、パウプロのボールで狙って打たせて取るのは逆に難しいと感じているのだ。

それにパウプロ個人は三振を好んでいる事もあり、無理に打たせていくよりはいつもの様に三振で試合のリズムを作る方がいいと御幸は考えた。

(仕方ない。審判の心象が悪くならない程度にボール回しを増やして、1年達にボールを触らせるか。)

そう決断した御幸はパウプロに返球せずに、1塁手の前園に送球してボール回しをするのだった。



【怪物】パウプロを応援するスレ141【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てる様に

53：ラスボスの立ち上がりは息をする様に三者連続三振

55：いつもの

58：本来はこんな簡単に三振取れないんだけどなあ…壊れるわあ

WWW

62：しつかり随分とあのえげつないスライダーを多投しとるな。配球の組み立て変えたんか？

66：62＜キャッチャーがラスボスのスライダーをちゃんと捕れる様になったんやない？

71：66＜それや！

77：甘いコースに行っても打たれそうにないのに、低めの隅にピッチャーで投げ込んでくるもんなあwww

81：あのスライダーの攻略法ってあるんか？

83：81＜アンチの住人か？

87：83＜アンチかどうかは別にして、野球人なら知りたくてもしやあないやろ

91：誰か変化球打ちがわかる経験者はおらんのか？

101：変化球打ちの基本はセンター返しとか逆方向への意識とか言われとるけど：ワイにあのスライダーの攻略は無理やなwww

104：101＜一度は打席に立って拝んでみたいレベルの変化球やもんなwww

107：他の球種がきたらごめんなさいレベルで決め打ちしても打てる気がせえへんwww

111：まあ、狙って打てたらプロに行けてもおかしくないやろな



115：やっぱりプロなら打てるもんなんか？

124：i15∨狙ったら打てるやろうけどプロは率も残さなあかんからな。他の球種もケアせなあかんのがつらいところや

131：お？主人公くんの登場や！

134：主人公くんもいいピッチャーなんやけどキャッチャーが1年なのがつらいとこやな

140：134∨どういうこと？

152：140∨あのキャッチャーはワンバンになる様な低めのチエンジアップを何度も後ろに逸らしとるんよ

155：152∨それはつらいwww

161：152∨つらいです…

167：決め球を逸らすキャッチャーでよく勝ち上がってこれたな  
www

175：167∨まあ主人公くんも左で150km投げる投手やからな

178：175∨だが球速もキレもコントロールもラスボスの方が上である

182：178∨やめてさしあげろwww

190：お？主人公くんも青道の先頭打者を三振に抑えたで！

194：あのキャッチャーは危なつかしいなあ…逸らさなかつたけど低めのチェンジアップを弾いてるやん

197：ブロツキングが甘いキャッチャーとかピツチャーからしたら信用出来へんな

203：ワイもピツチャーやってたんやけど、打てなくてもいいからちやんとワイのフォークを止めてくれるキャッチャーがよかつたわ

211：まだ1年やから！稻城のキャッチャーはまだ1年やから！

232：ラスボスきた——!!!

234：ツーアウトからやけどツーベースでチャンスや！4番バッター頼むで！

241：ん？主人公くんがキャッチャーにジエスチャーして立たせたで

243：あつ…（察し）

250：ですよねーwww

255：そら（チャンスにくそ強い4番とは）そう（やって敬遠する）よ

266：案の定青道の5番は打ち取られたかあゝ

275 : 大丈夫や！勝負はこれからや！

## 第246話

青道と稲城の試合の2回の表、パウプロは稲城打線の4、5、6番も連続三振に抑えた。

対して2回の裏の成宮のピッチングだが…苦戦を強いられていた。



(ウザい…チェンジアップは投げねえよ、多田野。)

稲城の正捕手である多田野の要求に成宮は首を横に振る。

出し直されたサインにも首を横に振っていった成宮は、ようやく納得がいくサインに頷いた。

(イライラするなよ、俺。気持ちが切れたら負けだからな。)

夏までバッテリーを組んでいた原田のリードは投手主体のものだったが、現在バッテリーを組む事になった多田野のリードはどちらかという打者主体のリードだった。

どちらのリードにも良い面があるだろうが、やはりピッチャーにも好みというものがある。

そして成宮の好みは圧倒的に投手主体のリードだ。

それ故に成宮は多田野のブロッキングだけでなく、リードにも不満を持ち始めていた。

(雅さんだったらすんなりサインが決まるのにな…。)

そんな事を思いながらも、成宮はカットボールで青道の6番、7番バッターを内野ゴロに打ち取ってランナー無しでツーアウトにする。

「まったく…エースは大変だぜ。」

成宮がロージンバッグを手にそう呟くと、今大会でヒットを1本しか打てていない倉持が打席に入るのだった。



現在打撃においてスランプ中の倉持は危機感を感じていた。

(これ以上はやべえ…どうすればヒットを打てる?)

倉持は守備と走塁においては青道野球部で1、2を争っている。だが打撃に関してはレギュラーである事に首を傾げる状況だ。

そんな倉持は成宮のボールにあっさり内野ゴロに打ち取られてしまった。

それも積極性が見られない当てるだけのバッティングで…。

(くそっ！ヒットの打ち方がわかんねえ…！)

悔しそうに歯噛みしながらも、倉持は攻守交代の為にベンチに走って戻る。

そんな倉持にパウプロが声を掛けた。

「なあ、倉持。」

「…なんだよ、パウプロ。」

投球に関しては高校野球界でナンバーワン。

さらに打撃に関しても青道でトップクラス。

そんなパウプロに倉持は顔を向ける事が出来なかった。

今の自分にパウプロの後ろを守る資格があるのだろうか？

そんな疑問を感じているからだ。

だがそんな事など知らないとも言うように、パウプロは常と変わらぬ様子で倉持と話す。

「今の倉持って、バッティングが楽しいか？」

「は？」

スランプで全く打てないのに楽しいわけがない。

倉持は試合中でありながらも睨む様に目を細めてパウプロを見る。

「たしか倉持って埼玉ホワイトリオンスのトリプルスリーを達成したあの人に憧れているんだろ？あの人ってしっかりバットを振り切るバッティングをしていた様に思うんだけど…違ったっけ？」

「バットを振り切る…あつ。」

自分は憧れを目指す為にスイッチヒッターを続ける選択をした筈だった。

なのに結果が出ないからと縮こまったバッティングをしていて、あの憧れの選手の背中に辿り着ける筈がない。

そう気付いた倉持はどこか吹っ切れた様に笑い声を上げた。

「：サンキュー、パワプロ。なんか難しく考え過ぎてたぜ。」

「うん、いつもの倉持に戻ったみたいだな。」

「ヒヤハツ！俺の所に打たせろよ。全部捕ってやるからな！」

倉持はパワプロとハイタッチをすると、笑顔のままグラウンドに駆け出すのだった。

## 第247話

青道と稲城の準決勝は中盤まで両チーム共に無得点のまま進行していった。

しかしその内容には大きな違いがある。

青道のエースであるパウプロは三振の山を築いているのに対して、成宮はランナーを出しながらもなんとか抑えているといった状況なのだ。

後一本のヒットが出れば得点出来るといふ青道と、ヒットが一本も出ない稲城。

両チームへの声援に込められる感情に大きな違いが出るのも当然だろう。

そして6回の表からパウプロの投球のギアが上がると、スタンドに訪れていたスカウト達の動きが忙しくなる。

スカウト達の中でゆったりと試合を楽しんでいるのはロジャーズスカウトのベックのみだ。

ギアが上がったパウプロがまたしても三者連続三振で抑えると、パウプロは6回の表終了時点で稲城打線から16個の三振を奪っていた。

対する成宮も6回の裏にギアを上げるが、決め球のチェンジアップを投げないからなのか、思った様に三振数が伸びず6回の裏終了時点で青道打線から奪った三振数は7個だ。

この成宮の三振数も十分に優秀なのだが、パウプロと比べてしまうとしても見劣りしてしまう。

そんな事をスタンドにいる人達は感じていた。

そしてそのスタンドの人達が醸し出す雰囲気の影響したのか、7回の裏に試合は動き出す。

7回の裏、青道の先頭打者である倉持が、三遊間の深い所にボールを転がして内野安打で出塁したのだ。

成宮のカットボールに完全に詰まらされていたのだが、パウプロの一言で吹っ切れた倉持は迷わずにバットを振り切っていた。

その結果として生まれた内野安打に、倉持は一塁ベース上で雄叫びを上げる。

そして間髪を入れずに初球で盗塁を成功させると、倉持はノーアウト、ランナー2塁のチャンスを作り出した。

ウエストしても盗塁をされた事に、稲城の捕手である多田野は悔しそうに顔を歪める。

だがピンチの場面を背負っても成宮は冷静だった。

成宮は青道の9番打者に送りバントをさせると、確実にワンアウトをものにする。

その際、倉持がホームに突っ込まない様に声を掛けながらだ。

ワンアウト、ランナー3塁の状況で迎えるのは1番バッターの小湊春一。

スクイズに犠牲フライと作戦は色々と考えられる場面。

しかし、成宮はここで小湊を歩かせる選択をした。

次の打者である白州でゲッツーを取れる状況を作るためだ。

(やつといい状態で打席に入れたのにね。)

歩かされた春一は内心でそう思った。

緊張でいつも通りに動いていなかったのが、第2打席を終えた辺りからやつといいつも通りに動ける様になったからだ。

打席に白州が入ると、多田野はチラリと横目で見ると

(スクイズに時間差でのダブルスチールも考えられる…どうする?)

ここまで成宮が一度もチェンジアップのサインに頷かなかった事で、多田野はリードに迷いが出ていた。

(ゲッツー、三振、どちらを狙うにしても、勝負球にはチェンジアップを使いたい。)

だが、成宮が首を縦に振るだろうか?

そんな迷いを持ちながらも、多田野は成宮にサインを出す。

一球目、稲城バッテリーはスクイズを警戒して外した。

倉持の動きはあくまで自然に、そして塁上で自信に満ち溢れている。

そんな倉持の姿が多田野に疑念を抱かせる。



(…次でくるか?)

2球目、稲城バッテリーはここでもボールを外した。

これでツーボール。

バッターが有利な状況だ。

(次のバッターは葉輪さんだ。このバッターで最低でもツーアウトにしたい。)

多田野は1塁手と3塁手にスクイズ警戒のブロックサインを出してからバッテリーサインを出す。

3球目、成宮が投じたカットボールに白州がバントの構えを見せる。

稲城の1塁手と3塁手がチャージを掛けるが、白州はバットを引いた。

主審の判定はストライクで、カウントはツーボール、ワンストライク。

4球目、多田野はチェンジアップで決める事を想定してフォーシームを要求した。

これに領いた成宮は、横の角度を大きく使って白州の胸元を突くフォーシームを投げ込んだ。

この4球目に白州は僅かに仰け反ったが、主審の判定はストライク。

このピンチの場面で見せる成宮の制球力に、スタンドの人達が盛り上がる。

そして5球目、ここで多田野は成宮にチェンジアップを要求した。

しかし成宮は首を横に振る。

だが、多田野もここでは譲らなかった。

幾度か首を横に振ると、成宮はタイムを要求してロージンバッグを手に取る。

ポンポンとロージンバッグを手の上で跳ねさせると、成宮は大きく息を吐いた。

(わかったよ…俺が背負ってやる。)

何か覚悟を決めた様な目で成宮はチェンジアップの要求に領いた。

そして投じられた5球目。

低めへとしっかりと制球されたチェンジアップに白州のバットが反応する。

しかし成宮のチェンジアップは緩急だけでなく、ホームベースの手前でスツと落ちて白州のバットを掻い潜った。

だがフォークと見間違えう程の落差を誇る成宮のチェンジアップはワンバウンドしてしまう。

多田野はしっかりと膝を落としたが、上体は甘いブロッキングだった。

それを見た瞬間に倉持はスタートを切っていた。

倉持の走塁勘がGOサインを出したからだ。

ワンバウンドしたボールは多田野の肩付近に当たってファールグラウンドに転がったが、素早くマスクを外した多田野が直ぐにボールを手取る。

故に通常ならばランナーはホームに戻って来れなかった。

しかし抜群のスタートを切った倉持は、必死に伸ばしてくる多田野の手を掻い潜ってホームベースに滑り込む。

主審が横に手を広げると、倉持は拳を突き上げて喜びを表現する。

多田野は2塁に直ぐ目を向けたが、そこには抜け目なく進塁していた春一の姿があった。

成宮がタイムを取ると多田野は肩を落とす。

しかし成宮はからかう様な表情で、多田野の肩に手を置いたのだった。

## 第248話★

青道と稲城の準決勝は稲城の1年生捕手である多田野の後逸の間に、倉持がホームベースに滑り込んでもぎ取った1点が決勝点となった。

この結果に試合後の成宮はインタビューに次の様に答えている。

『あれは俺の責任だから。』

成宮のこの一言であるの1球に対する某ネット掲示板での議論は加速した。

曰く、後輩を庇ういい先輩。

曰く、ただのコントロールミス。

曰く、結果として満塁策の方がよかった。  
等々と意見が飛び交っているのだった…。



【怪物】パワプロを応援するスレ147【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

334：ラスボスは息をする様に完全試合を達成

337：当たり前になり過ぎて驚かなくなってきたワイがいる

www

341：ワイはアンチやないけどあのスライダーは反則やでw

346：あのスライダーもエグいけど、なんかスプリットぽいのがあったか？

352：解析班！解析班はおらんか!?

358：352〈動画を見直してみたけど、縦スラぽいとしかわからんwww

363：358〈どういうことや？

369：363〈ボールは挟んでないからフォークやスプリットではないのは確定

それで握りはツーシームなんやけど何故か縦に落ちてるんですよ

377：縦変化の強いツーシームなんやないの？

382：377〈それやと利き腕方向に多少は変化するはずなんよ  
せやけどパワプロの縦変化のボールはそうやないんや

388：382〈つまり：どういうことだってばよ!?

404：388〈あの変態スライダーと同じ投げ方で  
縦に落としているっていうのがワイの結論や!

410：404〈進化するとは流石ラスボスやで!

415：ラスボスの縦スラを動画で見直したけど、変化の大きさは  
それほどでもないな

422：415〈ヤバイのは変化の大きさよりもキレやで

426：415〈せやで！あんな手元でスツと縦に落ちられたら目

が追いつかんわ！w w w

4 3 3 : しっかし主人公くんはきつつい結果になったわなあ

4 3 7 : マス〇ミのインタビュ―に俺の責任だつてハッキリ言つて男らしいで！流石主人公くんや！

4 4 1 : 実際のところあれつて主人公くんの責任なんか？

アンチがラスボスに負けた腹いせに叩いてるんやが

4 4 5 : 逆球でもないのにピッチャ―の責任にされたらたまらんな

4 4 9 : 4 4 5 の言う通りやな

4 5 5 : 誰かキャッチャ―経験者おらんのん？

4 5 8 : ブロツキングはキャッチャ―の基本なんやけど、基本やからこそ難しいんやで

4 6 4 : 4 5 8 < せやろか？

4 7 0 : 4 6 4 < 1 0 0 k m 以上で迫ってくる硬球を身体で止めるんやぞ！

ビビるに決まつてるやろ！

4 7 4 : 4 6 4 < しかもワンバンしたボールが股間をしたから突き上げてくるんやぞ！

あの恐怖がお前にわかるんか!?

4 8 0 : 4 7 4 < つ【チ〇カップ】

485：480∨ファールカップと言えWWW

495：で、結局のところどうなの？

507：495∨ラスボスは別枠として主人公くんも高校野球界ではトップクラスやからな。

まだ1年生のキャッチャーではよう止められへんでもしやあないやろ

509：507∨せやな

517：まあオフシーズンにしこたま練習させられて嫌でもレベルアップするやろ

522：517∨なおラスボスもレベルアップしてくる模様

528：522∨やめて差し上げろWWW

## 第249話

「成宮さんーすいませんでしたー!」

青道との準決勝に負けた翌日、稻城の正捕手である多田野は成宮に頭を下げていた。

そんな頭を下げている多田野を一瞥すると、ため息を吐いてから成宮は練習に向かう。

準々決勝に続いて準決勝でもチェンジアップを後逸した事で完全に信頼を失った。

そう考えた多田野の心を絶望が占める。

「…何してんの?」

成宮の呆れた様な声色に多田野が恐る恐る顔を上げる。

「お前、俺のインタビュー聞いてなかったの?あの失点は俺のせいなの!一年坊が一丁前に責任取ろうとしてんじゃねえよ!」

ビシッと指差しながら言い切る成宮の姿に、多田野は何度も瞬きをする。

「ほら、行くぞ。失った信頼ってのは言葉じゃなくて結果を出さないと取り戻せないんだからな!」

そう言っただけで離れていく成宮の小さな背中が、多田野には誰よりも大きく見えた。

「…はい!」

このオフシーズンは誰よりも練習してやる!

必ず成宮さんのチェンジアップを捕れる様になってやる!

そう心に誓った多田野は、涙を拭いながら成宮の背中に付いていくのだった。



秋の高校野球選抜東京地区大会の準決勝第2試合は、東京地区ナンバーワン右腕の呼び声が高い楊舜臣をエースに据えた明川学園と、現1年生ナンバーワンスラッガーの呼び声が高い轟雷市を擁する

薬師高校の対戦カードとなっていた。

一足先に決勝戦に駒を進めた青道高校野球部のメンバーは、この両校の試合をスタンドから見学している。

試合前には打撃力に欠ける明川学園が不利と予想されたが、蓋を開けてみれば明川学園が2-0の勝ち越している状況で試合終盤である7回まで試合が進んでいた。

しかも、明川学園のエースである楊がノーヒットノーランを継続しながらだ。

「パツと見、なんか凄いボールがある様に見えるけど、これはあれか?! 投球術ってやつか?!」

楊のピッチングを見ながら叫んでる沢村に、御幸は苦笑いをする。

「パワプロ、お前はと思う?」

「ん? なんかあの大きなカーブが関係してるんじゃないかなあつて思ってるけど。」

「パワプロもそう思うか。」

パワプロと見解が一致した御幸はニヤリと笑う。

「どういう事だ御幸!...先輩!」

「いや、取って付けた様に敬称をつけなくていいから。」

中学時代まで大きな上下関係の無い環境で野球をしてきた沢村は敬語に慣れていない。

なのでパワプロやクリス等の沢村が心から尊敬している先輩以外には、時折敬語を話せないのだ。

「楊のカーブの球速が以前に比べて遅くなっている。それが他の球種との緩急に繋がって、楊のピッチングの幅を拡げているんだ。」

「遅く?」

「お前もチェンジアップを投げるだろ? それと一緒にだ。」

楊の持ち球はこれまでフォーシーム、ツーシーム、フォーク、カーブだった。

だが今大会の楊はカーブの代わりにスローカーブを投げている。

この楊のスローカーブは偶然によって得たものだ。

楊は普段の練習に打撃投手をする事を多くしているのだが、その打



撃投手をしている際に切るイメージで投げていたカーブがすっぽ抜けてしまったのだ。

だがそのすっぽ抜けたカーブは、楊がそれまで投げていたカーブ以上にブレーキが効いて、楊のボールに慣れていた明川学園の打者達でも打ち損なう程の緩急を産み出していた。

この緩急に目をつけた楊はカーブの改造に取り組んだ。

もっともそのカーブの改造は夏の大会やU-18の大会には間に合わなかったが、それが今大会に活きて猛威を振るっている。

「一也はあのカーブを打てそうか？」

「…打席に立ってみないとわからないな。」

御幸が楊のカーブに抱いたイメージは、左右の違いはあれども元名古屋の球団に所属し、右利きなのに左で投げていた伝説の投手のスローカーブだ。

「俺達野手が楊を打てるかどうかもあるけど、パウプロは初めての連投だけど大丈夫だよな？」

「おう！大丈夫だぜ！」

意外に思うかもしれないがパウプロはリトル時代から一度も連投を経験した事がない。

これはパウプロが選手層の厚い強豪に入ってきた事に加えて、指導者の指導方針も関係している。

「少しでも違和感があつたら言えよ？」

「本当に大丈夫だよ、一也。」

「お前が嘘をつくとも思わないけど、楽しみ過ぎて自覚症状が無いとかはありそうだからなあ…。」

心配性な相棒にパウプロは苦笑いをする。

その後は大人しく試合を観戦すると、楊が薬師高校相手にノーヒットノーランを達成した。

試合後の挨拶を終えた楊は、スタンドにいるパウプロに目を向けてくる。

パウプロはそんな楊に笑みで応えたのだった。

## 第250話★

秋の高校野球選抜東京地区大会の決勝戦へと駒を進めた明川学園の楊 舜臣は、明日に控えた青道戦の為に念入りに調整をしていた。「舜臣、このぐらいにしておこうぜ。」

「いや、すまないが後10球頼む。」

高校野球連盟規程により、台湾からの留学生である楊は3年時の夏の大会に出場出来ない。

その為、この秋の大会の結果で春の甲子園に行けなければ、この大会が楊の高校野球最後の大会になるのだ。

確実に春の甲子園に行くためには優勝しなければならぬ。

もし青道に敗れても推薦で春の甲子園に行ける可能性は残されているが、話題性を考えれば外国人である自分が中心の明川学園よりも、成宮や轟といった日本人の注目選手がいる高校が選ばれるだろうと楊は考えていた。

だからこそ優勝以外は許されない。

留学を受け入れてくれた明川学園に、己のワガママを聞いて練習に付き合ってくれた仲間達に、そして第2の父と呼ぶ監督に恩を返す為には優勝しかない。

そう思いを抱く楊の目には確かな覚悟が宿っていた。

明日は例え肩や肘が壊れても投げ抜くと…。

そんな楊の思いに、明川学園野球部の皆は気付いていた。

元々明川学園は野球部が強いわけではない。

その為、中学時代に有名だった選手がいるわけではない。

しかし、今年は先年の楊の活躍のおかげで、都外からも明川学園の野球部に入るために来たものが数名いた。

楊を中心に始まった選手の自主性で行われる練習環境が、ガチガチの体育会系が苦手な近年の若者達の受け皿として認識され始めているのだ。

もしかしたら、数年後には明川学園が激戦区である東京地区に旋風を起こす存在になるかもしれない。

その礎を作った楊に、仲間達もまた恩を返したいと心から思っていた。

自分達の打撃技術ではパウプロのボールは打てない。でも、自分の所に飛んできたボールは絶対に通さない。仲間達も楊と同様に汗を流して最後の調整をしていく。そんな教え子達の姿を、明川学園の監督である尾形は暖かく見守っていたのだった。



【怪物】パウプロを応援するスレ153 【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てる様に

513：決勝の相手は明川学園かあ：どんな高校やの？

515：513 台湾からの留学生である楊 舜臣をエースに据えた高校やな

打撃力は低いけど、守り勝つ野球をするから玄人受けがいいんやで

520：515 ほん、それでエースの楊はどんな選手やの？

527：520 最速140km台中盤を投げる右の本格派やな

持ち球はフォーシーム、ツーシーム、スローカーブ、フォークとバランスがいいで！

ラスボスを除けばワイの一押し投手や！

531：ラスボスを除けばつとところに草生えるw

536：明川学園は守り勝つ野球かあ：勝ち目はあるんか？

542：536〈ここはラスボスを応援するスレやぞ

547：542〈まあ楊は最後の大会になる可能性もあるから応援してもしやあないやろ

553：楊が最後の大会ってどういうこと？教えてエロイ人！

559：紳士のワイが教えるで！簡単に言えば台湾の入学時期の影響やね

564：入学：受験：うつ！頭が…！

568：559〈もつとk w s k

572：568〈台湾は日本よりも半年ぐらい入学時期が早いんよ  
せやから台湾では卒業してる筈やから留学生は出場したら  
アカンらしいで

577：572〈どう考えても屁理屈w w w

584：しようもないルールを作つとるなあ。それで若者の野球離れ云々で騒いどるんやろ？

何を考えてんねんって話やな

590：584〈ほんとそれ

601：ワイはこの大会の決勝戦だけアンチスレに行くわ。

留学生くんが甲子園で投げるのが見たいんや！

604 : 601 < おう！いつでも帰ってこいよ！

607 : 601 < アンチスレでの土産話を頼むで！

612 : 早く明日にならへんかなあ…全裸待機してるから風邪をひいてまうで

615 : 612 < パンツはけww

## 第251話

秋の高校野球選抜東京地区大会の決勝戦の日がやってきた。

対戦カードは青道高校と明川学園。

球場に集まった応援者の数は明川学園の方が多かった。

青道高校はパウプロを筆頭に全国から選手が集まった名門であるのに対し、明川学園はエースの楊の奮闘で勝ち上がってきた高校だ。

そういった認識があるからなのか、青道と明川の決勝戦の応援に駆け付けた人は明川学園の方が多いのだ。

そんな人達の中でロジャーズスカウトのベックは葉輪、藤原両家の両親と一緒に青道高校側の応援席にいた。

『それでは、パウプロの…失礼、フウロくんのご両親と藤原さんのご両親もアメリカに来るのですか?』

『一早く孫の顔を見たいというのが一番の理由ですが、日本だと肩身の狭い思いをして風路くん達の足を引っ張りかねませんからね。』

『風路を最員のチームに入れろ! っってうるさかった上司に辞表を見せた時の顔は傑作でしたよ。はっはっはっ!』

藤原、葉輪家の父の話聞いたベックは顎に手を当てて少しの間考える。

『よかったらお二人に僕の伝で仕事を紹介しましょうか?』

『よろしいのですか?』

『選手への手厚いケアも球団の仕事ですからね。それにフウロくんが将来ロジャーズの中心選手になった時に、ご家族へのケアを担当していたとなれば、僕の給料も上がりますから。』

ベックが肩を竦めながらそう言うと、葉輪、藤原両家の両親は笑った。

『それではベックさんの言葉に甘えさせてもらいますね。』

『では、この試合が終わったら直ぐに動きます。』

『「よろしくお願いします。」』

葉輪、藤原両家の両親が揃って頭を下げたのを見たベックは、こういうところは日本人的だなと感じた。

その後、両家の父親はベックと野球談義に盛り上がりながら試合開始の時を待つのだった。



整列をして試合開始の挨拶が終わり、プレーボールのコール前の投球練習をしていた時、御幸はマウンドに行ってパウプロに声を掛けていた。

「ボールを受けた感じだと調子は良さそうだけど、パウプロ自身の感覚はどうだ？」

「絶好調だよ。」

「そうか、でも何か少しでも違和感があつたら絶対に言えよ。」

「一也は心配性だなあ。」

リトル時代から通じて一度も経験した事が無いのだから、初めての連投がパウプロの身体にどう影響するのか心配しても無理はないだろう。

片岡は最悪の場合、一人投げただけでパウプロを交代させる事も考えている。

前の稲城との試合はパウプロ一人で投げきった為、他の投手達を温存出来ているのだからここでパウプロに無理をさせる必要はない。

以前、クリスが手術が必要な程の大怪我を負った際に片岡は、青道野球部の者達に選手のケガと引き換えにしての勝利などいらないと話をしている。

この認識は日頃から僅かな違和感でも選手に申告する様にと徹底しているのだ。

その為、青道野球部の治療用品などに使う部費は非常に多い。

だがそういった環境が、パウプロを始めとして多くの選手達にケガをさせずに成長させてきたのは間違いないだろう。

「俺もパウプロの投球フォームが少しでも変だと思ったら片岡監督に言うからな。」

「わかったよ、一也。」

真剣な表情でそう言ってくる御幸に、パウプロは苦笑いをする。

「よし、それじゃいつも通りにいこうぜ。」

「おうー」

今日の試合の1年生達に稲城との試合の様な緊張は見られない。

これなら方が一も無いだろうと御幸は考える。

慢心をしているわけではない。

パウプロとならば、例え甲子園での決勝戦でも優勝を確信出来る。

それ程の信頼があるのだ。

御幸がキャッチャーボックスに戻ると、明川学園の1番打者が打席に入る。

するとパウプロは笑顔で御幸のサインに頷き、独特の投球モーションでボールを投げ込むのだった。



## 第252話

秋の高校野球選抜東京地区大会の決勝戦、青道高校と明川学園の試合は明川学園の攻撃から始まる。

1回の表、青道の先発マウンドに上がったパワプロは先頭打者のセーフティバントも危なげなく処理をして、続く2番、3番を連続三振に抑えた。

1回の裏の青道高校の攻撃は明川学園のエースである楊のスローカーブを巧みに使った緩急に揺さぶられ、三者凡退に終わってしまった。

2回の表の明川学園の攻撃は5番の楊も含めて、1回から続く5連続三振に抑えられたが、明川学園のメンバーに動揺はなく澁刺とした様子で守備につく。

2回の裏の青道高校の攻撃。

先頭打者の御幸は楊のスローカーブを決め打ちしてレフト前ヒットで出塁したが、その表情は優れなかった。

それは…。

(あのスローカーブ、予想以上に飛ばないな…。)

直球等の速いボールならその分の反発でボールが飛んでいくが、楊のスローカーブの様に遅いボールだと純粋なパワーでボールを運ばなくてはならない。

それ故に御幸は長打を狙うならスローカーブ以外と判断した。

2回の裏の青道高校の攻撃は御幸が出塁をしてノーアウト、ランナー1塁の状況となったが、後続が続かずに終わった。

3回以降はパワプロがパーフェクトゲームの勢いで明川学園打線を抑え、楊はランナーを出しながらも要所要所でしっかりと抑えていく好ゲームになっていった。

そして青道高校と明川学園の試合は9回では決着がつかず、延長タイブレークへと突入するのだった。



延長となる10回の表、パウプロはタイブレークルールなど関係ないとはかりにノーヒットを継続して無失点で切り抜ける。

そして10回の裏、青道高校は打順良く1番の小湊 春市からの攻撃。

延長戦はタイブレークとなるのでランナーが1、2塁にいるのだが、その2塁ランナーには打順の関係で倉持だ。

2塁の塁上に立つ倉持は楊の背中をジッと見ていた。

(…行ける！)

楊が投球モーションに入る直前に倉持はスタートを切った。

この倉持の盗塁を読んでいたのか楊はピッチアウトをしたが、倉持は見事に盗塁を成功させた。

ノーアウト、1、3塁でカウントはワンボールの状況となると、楊は春市を敬遠する選択をした。

(3塁に足の速い8番がいる事を考えると定位置の外野フライでも失点の可能性が高い。この1番はまだ1年だが、俺のボールを狙って外野フライにする技術があるやっかいなバッターだ。ならば、内野ゴロゲッツを狙いやすい2番と勝負だ！)

スクイズの危険性はあるが、それは春市がバッターでも同じだ。

故に楊はより打ち取りやすい白州を選択したのだ。

白州は打席に入る前に大きく息を吐く。

(俺はこの試合ヒット0。明らかに楊に合っていない…どうする?)

キャプテンとしてチームの為に何が出来る?

白州は打席に入る前の数秒でその答えを出す。

打席に入った白州を見て、楊は違和感を覚えた。

(…打つ気配が無い?)

勝負所で集中していたからこそ気付けた白州の違和感。

楊は白州という男の心意気を感じ取った。

(ダブルプレーになるぐらいならワンアウトで次のパウプロに回す…簡単な様で難しい見事な判断だ。)

結果が出なければ明日にはレギュラーの座を剥奪されるかもしれ

ない。

そんな勝利至上主義の世界でチームプレーを選んだ白州に、楊は心の中で称賛を送った。

白州に打つ気配が無いのはわかっているけど、楊は慎重に配球を選んだ。

そして白州からワンアウトを奪うと、次にパウプロとの勝負を迎える。

(ここでダブルプレーを取れるかで、この試合が決まる！)

今日の試合、楊は御幸に全打席でヒットを打たれていた。

決して自身が劣っているとは思わないが、楊は御幸との相性が悪いのを実感していた。

それ故に、ツアアウトでも満塁の状況で御幸と勝負したくないのだ。

パウプロが打席に入ると楊はタイムを取り、アンダーシャツで額の汗を拭う。

(勝負球はアウトロー。インコースのボールは全部見せ球だ！)

試合前のミーティングでキャッチャーと話していた打者パウプロの攻略法。

楊はこの試合を通じてパウプロとの勝負はアウトコースを徹底していた。

それによりここまでパウプロをノーヒットで抑えてきたのだ。

だからこそ、この打席でもパウプロとはアウトコースで勝負する。

楊はインコースを見せ球にしてパウプロをツアボール、ツーストライクと追い込んだ。

だが…。

(インコースには勝負にこないんだろうなあ…。)

パウプロもアウトコースで勝負にくる事は察していた。

そんな中で投げられた5球目、楊はアウトローにツーシームを投げ込んだ。

ストライクゾーンからボールゾーンにボール1つ分だけ外れる楊の渾身の1球。

しかし…。

カキンッ！

金属バットの音に楊が打球の行方を追ってレフト方向に振り向く。ツーンと勢いが勝ったのか打球に勢いはなく、ボールの落下点は左翼手の定位置。

だがボールの落下点を見た3塁ランナーの倉持は不敵な笑みを浮かべた。

明川学園の左翼手がボールを掴むと同時に、明川学園のメンバー全員が同じ声を上げた。

「バックホーム！」

明川学園の左翼手は全力でボールをキャッチャーに投げる。

しかし…。

「セーフ！」

明川学園の左翼手の返球よりも早く、倉持はホームベースに滑り込んでいたのだった。



延長10回の裏、1-0のサヨナラ勝ちで青道高校が秋の高校野球選抜東京地区大会を優勝した。

敗れた明川学園は整列の際に全員が涙を流していた。

そして明川学園のエースである楊は、深々とグラウンドに頭を下げ続けたのだった。

## 第253話

秋の高校野球選抜大会が終わって青道野球部では秋季神宮大会に向けた練習が始まった。

しかし今はドラフトの話題で盛り上がり上がってるぜ！

昨年の青道でプロ志望届けを出したのは東さん1人だったんだけど、今年はクリスさん、哲さん、純さんの3人がプロ志望届けを出した。

この3人がドラフト会議で指名されるのかを、俺達青道野球部の皆がテレビを見て見守っている。

『福岡キングファルコンズ、第1位、滝川・クリス・優。』

1巡目での指名に青道野球部の皆が沸き立つ。

更にクリスさん他のプロ球団からも指名されて、合計で3球団での競合となった。

これに皆が沸き立っている中で…。

『西東京ペンギンズ、第1位、結城 哲也。』

哲さんも1巡目で指名された事で青道野球部の皆はお祭り騒ぎになり始めた。

「結城、おめでとう。」

「ありがとう、クリス。だが、まだ伊佐敷の指名が残っている。」

クリスさんと哲さんの冷静なやり取りに、皆も固唾を飲んで純さんの名を呼ばれるのを待つ。

すると…。

『大阪ブルーブルズ、第3位、伊佐敷 純。』

「うおおおおおおおああああああー！」

名を呼ばれた純さんが雄叫びを上げた。

その純さんの雄叫びにつられる様に皆も雄叫びを上げたぜ！

あ、ちなみにクリスさんは競合の結果、800本以上ホームランを打った伝説の大打者が指名権を引き当てて福岡キングファルコンズに決まったぜ！

◆  
ドラフト会議も無事にプロ志望届けを出した先輩方が全員指名されて終わった。

哲さんと純さんは契約金の額に関係なく契約を結ぶらしい。

クリスさんは父親のアニマルさんを交えて、起用や育成についても深く話し合うそうだ。

さて、俺は現在ノースローでの練習を言い渡されている。

初めての連投だったんだからしつかりと肩肘を休ませろだつてさ。

秋季神宮大会が2週間後にあるんだけど、ノースロー中だから外野練習でも返球が出来ないんだよね。

ああ：早く投げたいなあ…。

夏の大会にU-18の国際大会、そして秋の選抜地区大会でポイントも大分溜まっているので身体を慣らしながら少しずつ成長させていく予定なんだけど、投げて感覚を慣らせないのも少々辛い。

仕方ないので基礎練習を終えると、俺はブルペンで落合さんや片岡さんと一緒にノリを始めとした他の投手の投げ込みの見学と指導をしている。

いや、なんで俺が指導しているんだ？

疑問に思ったので今日一緒にブルペンを見ている落合さんに聞いてみると…。

『自覚は無いのかもしれないが、葉輪のアドバイスをコツを掴んでいる者が多いからな。』

という事だそうだ。

うーん…わからん！

皆が俺にアドバイスを聞きにくるから、俺にわかる範囲でアドバイスをしているんだけど…本当に大丈夫なんだろうか？

まあ、投球が解禁されるまではこんな感じの日々を送るから、あまり気にしない様にするか。

そんな感じで秋季神宮大会まで残すところ3日となると、いよいよ待望の投球解禁日がやって来たのだった。

## 第254話☆

「パワープロ、わかっていると思うけど急に強く投げるなよ。」  
「おう！」

待ちに待った投球解禁日、俺は早速一也とキャッチボールを始めた。

うん、やっぱり成長させたから少し感覚が違うな。

俺はステータス画面を開いて今の能力を確認する。

基礎能力

最高球速：156km（※160km）

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7（※7）

変化球2：チェンジアップ7（※7）

変化球3：高速スライダー7（※7）

変化球4：高速縦スライダー3（※7）

球速を1km、高速縦スライダーを1ランク成長させた。

秋季神宮大会まで時間が無いので野手能力と特殊能力に変化はない。

でもポイントはまだ残っているから、オフシーズンの間にじっくりとどの能力を成長させるか吟味していこうと思う。

さて、肩も温まったし1カ月振りの投げ込みを楽しむぜ！



秋の選抜地区大会以来のパワープロの投げ込みとあって、ブルペンには落合だけでなく片岡や高島も足を運んでいた。

連投によりパワープロの肩や肘に異常が出ていないかを確認するのだ。

だがそんな指導者達の心配を他所に、パウプロは御幸を相手に笑顔で投げ込みをしている。

「一也、もう一回フォーシーム!」

御幸がミットを手で叩いてから構えると、パウプロは独特の投球モーシヨンからフォーシームを投げ込む。

パァン!

御幸のミットが快音を鳴らすと、スピードガンを持っていた高島は驚きの表情を浮かべた。

「156 km…です。」

パウプロが叩き出した最高球速に高島は言葉が詰まってしまう。

「…また速くなった様ですな。確か、左の高校野球最速は157 km でしたかな?」

「…。」

落合の言葉に片岡は頷いて肯定するが、その目はパウプロの姿を捉え続けている。

僅かな異変も見逃さないと、クリスの様にはさせないと真剣なのだ。

風を切る音と共にボールがミットに入り込むと、御幸はマスクの奥で自然と笑みを浮かべる。

(たはっ!パウプロ、お前の成長は天井知らずかよ。)

歩みを止めぬパウプロの成長に、御幸は置いていかれてたまるかと気合いを入れる。

10球程フォーシームを投げ込むとパウプロはだいたいの感覚を掴んだのか、別の球種を選択する。

「一也!次は縦のスライダーいくぞ!」

「おう!」

御幸は縦のスライダーを捕球する為に集中を高める。

(これまでの経験上、縦のスライダーも進化している筈だ!)

絶対に後ろには逸らさないと細く息を吐いて更に集中を高めると、御幸の視界にある景色から色が抜けていった。

御幸は所謂ゾーンと呼ばれる状態に入ったのだ。



パウプロのみが極彩色で見える世界の中でボールが投じられると、御幸にはボールの縫い目がハッキリと見えている様に感じた。

パウプロの高速縦スライダーは、ゾーンに入った御幸でも消えた様に錯覚させる程のキレで変化する。

しかし、それでもゾーンに入った御幸は反応してみせた。

パシッ！

僅かにミットの芯を外してしまっただが、それでも御幸は成長したパウプロの高速縦スライダーを初見で捕球する事に成功した。

だが、マスクの奥の御幸の表情は悔しそうに眉を寄せていた。

「一也、ゴメン！狙いがズレた！」

「パウプロ、もう一球！」

そんな二人のやり取りに、落合はため息を吐く。

「はあ…この意識の高さは高校生とは思えませんな。」

「ですがその意識の高さに、皆が引っ張られているのは確かですよ。」

落合のぼやきに高島が言葉を返す。

高島の言葉通りに、他の投手陣の投げ込みにも熱が入っていた。

「本格的に寒くなってきたというのにあいつらは…。」

「ふふ、やる気があつていいではないですか。」

気炎を上げる投手陣に、片岡の声が飛ぶ。

「沢村！肩の開きが早い！」

「イエッサー！」

「降谷！力み過ぎだ！ボールが浮いているぞ！」

「はい。」

「東条！川上！変化球を投げる際に腕の振りが緩んでいるぞ！」

「はい！」

次々と飛ぶ片岡の指導に、パウプロが片岡に期待した視線を送る。

「葉輪、お前はもう少し抑えろ。久し振りの投球で気持ちが高まるのは理解するがな。」

強面の顔に笑みを浮かべる片岡に、パウプロは笑顔で返事をしたのだった。

## 第255話★

秋季神宮大会が始まった。

俺達、青道高校は順調に勝ち上がっていった。

ただ、関東を代表して出場してくる強豪だけあつてか、沢村と降谷はそれなりに打たれた。

一也曰く、まだまだ経験不足…だそうだ。

そんな1年生投手の中で東条は中継ぎでの登板が主だったけど、準決勝までの通算8イニングで無失点を記録した。

この結果に片岡さんと落合さんは満足そうに頷いていた。

沢村と降谷は対抗心を剥き出しにしてやる気に満ちていたな。

無失点と言えばノリも抑えとして準決勝まで無失点を記録したぜ

！

しかもランナーを一人も出していないパーフェクトリリーフだ！

この結果を聞いて一番喜んでいたのが丹波さん。

ノミの心臓だった頃の丹波さんと1年前の気弱なノリが似ていたから、丹波さんは何かとノリの事を気にしていたそうだ。

そんな丹波さんも目当ての大学に推薦での入学が決まったらしい。

おめでとうございます！

あ、亮さんも大学に推薦での入学が決まってるぞ！

重ねておめでとうございます！

さあ、秋季神宮大会も残すのは決勝戦のみで俺が先発だ！

一也、皆、楽しんでいこうぜ！



【怪物】 パワプロを応援するスレ171 「ラスボス」

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

89 : ノーノーきた——!!!

92 : ラスボスがパーフェクトじゃない事に違和感ww

96 : 92 < しゃあないやろ。ショートのエラーがあつたんやから

100 : 96 < あれはむしろショートのファインプレーやぞ

104 : 96 < せやで！内野安打を防ぐのにメジャー選手みたいな

ベアハンドキャッチから上体を起こさずにサイドでのラン  
ニングスローを

やつたんやぞ！送球が逸れても仕方ないやろ！

110 : 104 < ソフトボールやったら日常茶飯事のプレーやけど  
な

115 : 110 < ソフトではサードへのセーフティバント処理は

ああせな間に合わんからな

118 : 115 < そうなんか？ソフトも面白そうやな

122 : 110 < 野球があソフトがあって比べる奴がおるけども、

スポーツに競技人口の差はあっても上下はないんやで

130 : 122 < 惚れた

135 : 122 になら尻を貸せる

136 : 135 < おう、あくしろよ

147：136＜反応早すぎて草はえるww

159：お前らwラスボスが156kmを投げた事に何かないんかい！ww

163：159＜ラスボスならその内に左投手の高校最速記録を超えるやろ

171：163＜せやな。ラスボスが160kmを投げてもワイは驚かんで！

…やっぱ驚くわww

176：オフシーズンでラスボスがどれだけ成長するか楽しみや！



秋季神宮大会を制した青道高校野球部もオフシーズンに入る。

だが高校野球人にとってオフシーズンは休息の一時ではなく、このオフシーズンにどれだけ成長出来るかに、来シーズンのレギュラーの座がかかっているのだった。

## 第256話

秋季神宮大会が終わりオフシーズンに突入すると、青道高校野球部では本格的に寒くなる前にと、紅白戦の数が増えていた。

これは主に沢村と降谷に試合形式の練習で経験を積ませるのが目的だ。

紅白戦は1軍と2軍、1軍と3軍といった形の時にパウプロを下位の軍に所属させて行っていた。

この紅白戦でいいプレーを見せた2軍の1年生は三塁手の金丸信二、捕手の狩場航、そして投手兼外野手の金田忠大（かねだただひろ）だ。

金丸は持ち前の真っ直ぐに強いバッティングを發揮して1軍昇格へのアピールをした。

狩場は捕手の人数の関係上、普段から度々1軍ブルペンでスキルアップをしているからか、このオフシーズンの紅白戦ではしっかりとパウプロのフォーシーム、カーブ、チェンジアップを捕球して片岡や落合に成長をアピールした。

まだパウプロのスライダーをしっかりと捕球出来ないが、1年後が楽しみな選手だろう。

そして金田なのだが、この選手が2軍選手の中で最も伸びた選手だろう。

金田は2軍チームでパウプロと一緒にいると、積極的にピッチングの事を聞いた。

その結果、それまで全く投げられなかったカーブを投げられる様になったのだ。

金田は真っ直ぐの球速が120km程で、高校野球では打ち頃の球速故に度々打ち込まれていた。

しかしパウプロからカーブを伝授されて緩急を手に入れた事で、金田のピッチングは生まれ変わった。

真っ直ぐとカーブのコンビネーションで、金田は1軍チームから6イニング3失点のクオリティスタートを達成した。

もっともこれは何度も行われた紅白戦で1回達成しただけなのでまだまだと言えるが、1年後には1軍の現1年生投手達の争いに加わるのではと期待が持てる内容だろう。

そんな感じで3人の2軍選手が1軍入りをアピールしたが、1軍選手も負けていない。

1軍選手で最も変わったのは倉持だ。

倉持はバットを振りきるバッティングをする様になると、野手陣の1歩目のスタートが遅れる様になった事で内野安打が増え、オフシーズンの紅白戦では出塁率が4割を超えた。

この結果によって倉持は1番バッターに返り咲いたのだが倉持本人はまだまだ満足しておらず、次は憧れの選手の様長打力も身に付ける様に日々奮闘している。

そんな倉持以上に結果を出したのは御幸だ。

御幸はこのオフシーズンからメジャーに向けてアメリカ製の木製バットを使い出したのだが、その木製バットでパワプロからオフシーズンの紅白戦で唯一となるヒットを放った。

アメリカの木製バットは日本の木製バットの様にしなりではなく硬さによる弾きで打球を飛ばすのだが、この硬い木製バットに御幸は好感触を持った。

何より御幸がアメリカ製の木製バットを気に入ったのはその頑丈さだ。

多少芯を外しても折れない頑丈さ。

金銭に細かい御幸はこの頑丈さを絶賛した。

御幸はこのオフシーズンからアメリカ製の木製バットを積極的に使っていく様になるのだが、この木製バットを使っていく事で飛躍的にバッティング技術を向上させていったのだ。

そんな選手達の成長に目を細める片岡や落合だが、パワプロの成長には驚きを通り越してため息を吐いた。

このオフシーズンにパワプロは非公式ながら、高校野球における左投手の最高球速に並んだのだ。

更に縦のスライダーと野手能力も成長したとあれば、片岡や落合が

驚きを通り越してため息を吐くのも無理はないだろう。

冬の合宿を前にこの成長なのだ。

春を迎えた時にはどれ程成長しているのかを考えるだけでも笑いが溢れる。

だからこそケガには注意せねばならない。

パウプロは青道選手の中でもトップクラスの練習好きだ。

時には高島の根回しで貴子とのデートに行かせたりして、パウプロの練習量を調整しなければならない。

本来ならば思春期の選手達にどの様に練習させるのかを悩むのだが、どの様に休ませるのかを悩む事に落合は苦笑いをするしかなかった。

こうして青道高校野球部がオフシーズンを過ごしていった時、明川学園に一つ吉報が届いたのだった。



「お前ら、春の甲子園が決まったぞ！」

明川学園の監督である尾形の言葉に、明川学園の選手達から歓声が上がった。

そんな選手達の中で、楊 舜臣は安堵の息を吐いていた。

「てゆっか楊、お前も喜べ！」

「はい、尾形監督。」

尾形は楊に喜べと言うが、楊の表情を見てチームの誰よりも喜んでいる事には気付いていた。

もちろんチームメイトも楊が誰よりも喜んでいる事に気付いている。だからだろうか？

チームメイトはアイコンタクトを交わすと、息の合った連携で楊を外に連れ出す。

そして秋空の下で楊を胴上げしたのだった。

## 第257話

オフシーズンに入った高校球児達だが、彼等は野球にだけ打ち込んでいるわけではない。

何故なら彼等は高校生。

そう、学生故の試練たるテストがあるのだ。

このテストに沢村や降谷は苦しんだが、その他の青道野球部の者達は無事に乗り越えていた。

パワプロも勿論テストを無事に乗り越えている。

それどころか御幸と並んで学年トップクラスの点数を叩き出した。後にそれを知った沢村と降谷はショックを受けたが、直ぐに気持ちを切り換えて野球に打ち込み始めた。

そんな感じでオフシーズンも進んでいくと今年も残すところ後少しとなり、とあるイベントの時期がやって来る。

そう、クリスマスだ。

野球に青春を捧げる高校球児達にとっては中指を立てたくなるイベントだが、生憎と青道野球部の者の中にはこのイベントに参加する裏切り者が複数いる。

パワプロ、御幸、沢村の3名だ。

そんな3名は野球部の仲間達を尻目にイルミネーションに彩られた町並みに足を運ぶ。

そして、それぞれがクリスマスというイベントを楽しんでいくのだった。



「唯ちゃん、頑張つてね!」

貴子ちゃんに励まされた夏川が決意を感じさせる表情で頷いている。

今日はクリスマス。

勝負に出るには絶好の日だからな。



頑張れよ、一也！

一也との待ち合わせ場所に出陣していった夏川を見送ると、今度は沢村の幼馴染みである蒼月に貴子ちゃんが声を掛けていた。

「若菜ちゃん、自分から積極的にいかなければダメよ。そうしなきゃ、フーくんや沢村くんみたいないなタイプは気付かないんだから。」

「はい！藤原先輩！」

両拳を握り締めて気合いの入った様子の蒼月も、沢村との待ち合わせ場所に出陣していった。

沢村、頑張れ！

「お待たせ、フーくん。」

笑顔で振り返った貴子ちゃんが俺と自然に腕を組んでくる。

俺も貴子ちゃんに笑顔を返した。

さあ、クリスマスデートの始まりだぜ！



「お待たせ、一也。」

「おう、それじゃ行くか。」

そう言って歩き出すとする御幸の手を夏川が掴む。

「これだけ人が多いのに、彼女がはぐれたらどうするつもり？」

「…わるい。」

御幸が照れ臭そうに顔を逸らすと、夏川は笑みを浮かべる。

「グラウンドじゃ緊張しなくせに、こういう時は緊張するのね。」

「否定はしない。」

デートの始まりは緊張していた御幸だが、時間が経つと共に心から楽しみ始めた。

そして楽しい時間というのはあつという間に過ぎるもので、寮の門限まで後少しとなってしまった。

「げっ、もうこんな時間か…。」

腕時計を見た御幸は残念そうに苦笑いをする。

「…今日は楽しかったぜ、唯。家まで送っていくから、そろそろ帰ろう

か。」

手を引いて歩き出そうとする御幸を、夏川は引き止める。

「どうした？」

「今日はクリスマス…よね？」

「ああ、だからデートしたんだろ。」

「恋人が別れるには、まだ時間が早いんじゃない？」

夏川の言葉に御幸は頭を掻く。

「悪いけど、寮の門限が近いんだ。外出許可は出したけど、外泊許可は出していないからな。」

御幸の言葉に夏川は意味深な笑みを浮かべた。

「なんだよ？」

「今日の外出許可、高島先生に外泊許可と差し替えて貰ってあるわ。」

「…はあ？」

呆然とした御幸の腕に夏川が腕を絡める。

「今日は帰さないって言ってるのよ。」

「いや、それは女が言う台詞じゃねえだろ。」

「じゃあ一也が言ってくれるの？」

からかう様な笑みの夏川に、御幸は諦めのため息を吐いたのだった。



日が暮れ始めた町並みに御幸達が姿を消した頃、沢村と若菜ペアのデートは終わりの時を迎えつつあった。

「栄純、今日は楽しかったわ。ありがとね。」

「お、おう…。」

幼馴染みの若菜とは小さい頃から色々と遊び回ったが、こうしてはつきりとした形でデートをしたのは初めてだった。

それ故か、沢村はいつも以上に若菜を女性として意識していた。

「そろそろ寮の門限でしょ？急がなくて大丈夫なの？」

「い、いや！男として若菜を送っていくぐらいはする！」

「ふふ、ありがと、栄純。」

微笑む若菜を見た沢村は顔を真っ赤に染める。

そしてぎこちない足取りで並んで歩き出すと、徐に若菜が沢村と手を繋いだ。

「なっ!?なんだあ!?!」

「何を驚いているのよ。手を繋いだだけでしよう?」

「そ、そんな事はわかってる!」

「小さい時には手を繋いだ事もあるんだから、今更気にするんじゃないわよ。」

自身と違つて余裕がある様に見える若菜に、沢村は意地を張った。

「そ、それじゃあ!このまま送っていくからな!」

「うん、よろしく頼むわね。」

「お、おう!」

余裕そうに見せていても、内心では若菜も一杯一杯である。

(私から行動を起こさなきゃ。でも…恥ずかしいものは恥ずかしいですよ、藤原先輩!)

次の行動を考えた若菜の顔が真っ赤に染まる。

幸いにも沢村も一杯一杯の為、若菜の紅い顔には気付いていない。

そんな初々しい二人のデートも、若菜の下宿先に辿り着いてついに終わりを迎えようとしていた。

「そ、それじゃあな!」

踵を返して走り出そうとする沢村を、若菜が腕を引いて振り向かせる。

「な、なんだよ!まだ何か!?!」

口を感じる柔らかな感触に沢村が目を見開く。

しばし時が止まった様に固まった沢村から、若菜がスッと離れた。

「冬合宿…頑張りなさいよ、栄純。」

顔を真っ赤にした若菜が下宿先に駆け込むのを、沢村は呆然と見送る。

その後、どうやって青道野球部の寮に戻ったか記憶に無い沢村だが、門限に遅れて反省文を書くことになったのであった。

## 第258話☆

クリスマスも終わって青道野球部恒例の冬合宿が始まった。

夏の合宿を経験している1年生達だが、寒い時期故に夏よりも多く行われる基礎トレーニングで連日筋肉痛に悩まされていた。

そんな1年生達の中でも比較的元気なのは投手陣だった。

もちろん彼等も連日の筋肉痛に悩まされていたが、普段は居ないパワプロが寮にいる事で精神的な支えとなり、つらい合宿の日々を頑張っていた。

冬合宿は一人の怪我人も出ることなく無事に終わり、オフシーズンが過ぎていく。

そしてオフシーズンも終わり暖かくなり始めると、いよいよ春の選抜甲子園大会の時期を迎えるのだった。



甲子園に向かう新幹線の中で、俺はオフシーズンに成長したステータスを確認していた。

基礎能力

最高球速：158 km (※160 km)

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー7 (※7)

変化球4：高速縦スライダー5 (※7)

秋季神宮大会の時と比べて球速を2 km、高速縦スライダーを2ランク成長させた。

次に野手能力を見てみよう。

基礎能力2

弾道：4

ミート：S

パワー：B

走力：A

肩力：S

守備：A

捕球：S

パワー以外の能力を1ランク成長させた。

パワーを成長させる筋力ポイントは球速を成長させるポイントと一緒に成長させなかった。

パワーBでも十分にホームランは打てるからな。

それに、欲しかった特殊能力にかなり筋力ポイントが必要だったからというのもある。

さて、最後に特殊能力を確認しよう。

特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『バント◎』

『驚異のキレ』

『牽制◎』

『クイック◎』

『サブポジ：外◎』

『尻上がり』

『打球反応◎』

『盗塁◎』

『パワーヒッター』

『広角打法』

特殊能力は『打球反応○』と『盗塁○』を成長させて、更に『広角打法』も取得した。

『広角打法』の詳細はこんな感じだ。

『広角打法』

- ・ 逆方向にも強い打球を打てる様になる特殊能力である
- ・ 逆方向の打球が伸びる様になり本塁打が打ちやすくなる
- ・ 『流し打ち』との協力が可能

この特殊能力はアウトコースへの攻めが多くなったので是非とも欲しかった特殊能力だ。

これで東さんやクリスさん、そして哲さんみたいに逆方向へのホームランを打ってやるぜ！

ちなみに俺は走力Aで『盗塁◎』を持っているんだけど、倉持の方が盗塁が上手いんだよね。

あいつ、もしかして走力Sに『怪盗』の特殊能力も持っているんじゃないか？

「パワプロ、どうした？」

そんな事を考えて首を傾げていると、隣の席に座っている小野が話し掛けてきた。

「何でもないよ、小野。」

「そうか、まだ肌寒いんだから肩を冷やさない様に気を付けろよ。」

こういった気遣いが出るからか、小野は投手陣からの信頼が厚い。

もちろん一也も気遣いはするんだけど、一也は投手に対して思った事をハッキリ言うからか、小野の方が何かと相談を受けている姿を見かけるんだよね。

ここら辺は性格の差なんだろうな。

まあ、俺は一也の方が付き合いが長いからか、やりやすくいいんだけどね。

ちなみにブルペンではノリ、東条、沢村、金田といったメンバーが小野に受けてもらう事を頼んで、俺と降谷が一也に頼む事が多い。

狩場は：キャッチャーとしての能力アップ以外も頑張らないとな。

新幹線が神奈川に差し掛かった辺りで眠気が来たので目を瞑る。

春の甲子園：楽しみだなあ。

## 第259話★

『さあ、春の選抜甲子園大会の決勝戦、奇しくも秋の選抜東京地区大会と同じ組み合わせになった青道高校と明川学園の試合も終盤となる8回が始まりました！解説の——さん、ここまでの試合状況を見てどう思いますか？』

『明川学園のエースである楊くんは最後の大会とあって気合い十分な様子ですが、彼は決勝戦まで一人で投げ抜いてきたので疲労が溜まっている様です。それに比べて青道高校のエースである葉輪くんは選手層の厚さに恵まれて体力が十分に残っています。このまま両チームに得点が入らず延長戦に突入したら俄然青道高校が有利になりますね。』

春の選抜甲子園大会を決勝戦まで勝ち抜いてきた両校だが、その内容は真逆だった。

組み合わせに恵まれた青道高校は東条と沢村の二人を先発として、降谷と川上をリリーフとして使いこの決勝戦まで投手パワプロを温存して勝ち上がってきた。

対して明川学園は大阪桐生高校や巨摩大藤巻高校といった強豪との試合を制して勝ち上がってきた。

これによって楊の評価は激増したが、代わりに青道高校との決勝戦を戦うには不安な疲労を残してしまっている。

しかし気力が充実している楊は、青道高校相手に見事なピッチングを見せていた。

『おっとお！楊選手、8回の表も青道打線を0で封じ込めました！』  
『得点圏にランナーを背負う場面もありましたが、最速148kmの直つ直ぐと100km台前半のスローカーブの緩急が効いて、青道打線に絞らせませんでしたね。』

8イニングを終えて無失点、0四死球、8奪三振と正にエースのピッチングを披露する楊の姿に、甲子園球場のスタンドから惜しみ無い拍手が降り注ぐ。

『さあ、8回の裏のマウンドに青道高校のエースである葉輪選手が上



がりました。解説の——さん、葉輪選手のここまでのピッチングをどう見ますか。』

『7イニングを投げてランナーを一人も出さずに19奪三振。こう言っただけなんです、葉輪くんが投げる時には見慣れた光景ですね。プロでも一流の投手が高校野球にいる様なものですよ。』

解説者がかつて怪物と呼ばれて高校野球界を騒がせた一流投手達と同じ様な賛辞をパウプロに送るが、多くの者が彼と同じ感想を持っていた。

『葉輪選手！4番から始まった8回の裏も三者連続三振で切り抜けました！』

『高校野球における左投手の最高球速記録を塗り替えた158kmの真っ直ぐにあのスライダー：打てるボールがありませんでしたね。』

呆れた様な口調の解説者に、実況者は苦笑いをするしかなかった。その後も楊とパウプロは無失点で抑え、春の選抜甲子園大会の決勝戦は延長戦へと突入するのだった。



【怪物】パウプロを応援するスレ199 【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

334：楊とパウプロの投げ合いの決着は延長戦に持ち越しかあ：

339：もつと二人の投げ合いを見ていたけど、

楊の肩肘が心配だから早く終わってほしいジレンマ

345：お前ら：ラスボスが高校野球で左の最高球速記録を塗り替

えた事に何かないんか？

353：345∨ラスボスなら塗り替えると思ってたし

360：345∨どうせラスボスなら160kmを投げるし

367：345∨もうラスボスだからでいいやろ

370：353、360、367∨お前らwww

377：アンチスレではスピードガン盛るなって騒いどるわwww

383：377∨勝てとは言わんからヒットを打てと騒いどるのを  
忘れたらあかんぞ！

411：しっかし現場では楊の応援の方が多いなあ…

415：411∨楊は努力の結晶、ラスボスは才能の塊って対比さ  
れとるからな

楊に感情移入する奴が多いんやろ

419：415∨140kmも投げられんワイから見たら楊も才能  
の塊やぞ！

450：延長12回に入ってから明らかに楊の息が上がってきおっ  
たな

456：今の高校野球って延長戦は15回までやっけ？

461：456∨せやで

468：対してラスボスは笑顔で常時158kmを投げている模様

w

472：468<無理ゲー過ぎるwww

475：勝ち負けは別にして、楊の肩肘の為に再試合にならない  
とええなあ…



春の選抜甲子園大会の決勝戦、青道高校と明川学園の試合は延長戦  
にまでもつれ込んだ。

明川学園の楊はよく奮闘したが最終回となる延長15回裏に、御幸  
にサヨナラタイムリーヒットを打たれて力尽きてしまう。

御幸のサヨナラタイムリーヒットでパワープロが延長15回を投げ  
きつての完全試合達成が確定すると、青道高校は春の選抜甲子園大会  
の2連覇を達成したのだった。

## 高校3年編 第260話

青道高校野球部の春の選抜甲子園大会優勝の報を聞いた1学年上の先輩達が、青道高校を卒業していった。

クリスさん、哲さん、丹波さん、純さん、亮さん、宮内さん、増子さんに多くの先輩達。

そして貴子ちゃんもだ。

クリスさんと哲さん、それに純さんは所属したプロ野球チームのキャンプに参加していたので、残念ながら卒業式には参加していない。

でも、後日に理事長の計らいで片岡さんから卒業証書を渡されるらしい。

亮さんなんかは『俺も片岡監督から貰いたかったな。』とか言ってたな。

先輩達はプロに行ったり大学に進学したり就職したりとそれぞれ新たな道に進んだけど、その中で貴子ちゃんだけはちよつと違う。

貴子ちゃんは1年後に俺と一緒にアメリカに行くので、1年間は色々な事を自主勉強したり資格取得したりする予定だ。

もつとも、貴子ちゃんは小さい頃から準備をしていたらしいから、ほとんど復習するだけでいいらしいけどね。

さて、先輩達が卒業した事で俺達が青道高校野球部の最高学年になつたわけだ。

小さい頃に片岡さんに憧れて入った青道高校野球部での野球も今年が最後…。

思いつきり楽しんで行くぜ！



今年も多くの入部希望者が都内都外を問わずに青道高校野球部に

やって来た。

その中でも俺が注目した：いや、注目せざるをえなかったのはキャッチャー希望の奥村 光舟（おくむら こうしゅう）って奴だ。奥村は挨拶の時に『葉輪さんのボールを受ける為に青道に来ました！』って宣言したんだよね。

その後は一也とライバル心全開で睨みあっていた。

他に注目したのは哲さんの弟くんの結城 将司（ゆうき まさし）って奴とピッチャー希望の浅田 浩文（あさだ ひろふみ）って奴かな。

哲さん曰く、『俺よりも才能や自信を持っている。』そうだ。

哲さんはそう言っていたけど：正直なところ、弟くんは哲さんみたいに打たれるかもって感じがしないんだよね。

これからの成長に期待ってところかな。

弟くんは挨拶の時に『プロに行くために青道に来ました！』って言うってた。

哲さんの言う通りはかなり自信を持っているみたいだな。

ちなみに弟くんの希望ポジションは全部とのこと。

練習頑張れよ。

浅田はなんとというか、初めて会った頃の丹波さんに似ているって感じだな。

近くにいたノリも同じ印象を持ったみたいだ。

だからなのかノリが自分が丹波さんから受けた様に色々アドバイスをするつもりみたいだ。

頼んだぜ、ノリ！



青道高校野球部に多くの1年生達が入部した翌日、青道高校野球部では毎年恒例の体力テストが行われていた。

その体力テストの遠投でパワープロの番がくると、周囲にいた1年生達が注目し始めた。

世間で『怪物』の異名を持つパワープロがどんな遠投をするのか気になっっているのだ。

「いきま〜すー」

パワープロは緊張など欠片も感じられない声を出すと、ノーステップでボールを放る。

すると、ボールは100m先にある外野フェンスにノーバウンドで直撃したのだった。

このパワープロの一投を見た1年生達が驚愕して目を見開く。

しかし、2年生達や3年生達は気にせず己の準備を続けていた。彼等にとってパワープロのこのパフォーマンスは日常茶飯事なのだ。

その後、御幸や降谷もパワープロと同様にノーステップで100mの遠投をすると、これにも1年生達は驚愕して目を見開いた。

ちなみに昨年遠投でカーブを投げてしまった沢村は、今年しっかりと真っ直ぐを投げられると歓喜の雄叫びを上げていた。

記録は100m先にあるフェンスを超える見事なものだったが、パワープロ達の後だった為に1年生達の驚きは少ない。

1年生達の反応に悔しがった沢村は、パワープロと降谷を名指しして残りの体力テストで勝負を挑んでいた。

その勝負は投球テストをまだ残しているが、パワープロの完勝なのであった。

## 第261話

青道高校野球部では恒例の体力テストが続いていた。

現在は投手と野手の希望ポジション別のテストを行っている。

ブルペンでは投手と捕手を希望する選手達のテストが行われていたが、ちょうど1年生投手の投球テストが終わったところのようだ。

この投球テストの結果、片岡と高島から高評価を受けたのは浅田浩文だ。

浅田はまだまだ線が細いが高い身長を持っている。

2年後のエース候補として大事に育てると、高島はメモに書き込んでいた。

投球テストに続いて1年生捕手達のテストが始まる。

投手に選ばれたのは2年生となった東条、沢村、降谷の3人だ。

オーソドックスな右投手の東条、変則左腕の沢村、右の豪速球投手の降谷といった色々な投手のボールを受けさせてテストするのが目的だ。

1人、2人とテストが進んでいくが、あまりいい結果を出す1年生捕手が現れない。

東条はコントロールが良く投球フォームも安定しているのでボールを受けやすいのだが、沢村の投球フォームはボールの出所が見えにくいのもあり、ボールを溢してしまう捕手が多かったのだ。

更に降谷の番となると、降谷の150km台の真っ直ぐをまともに捕れる者がおらず、片岡が1球でテストを止める場面が多く見られた。

そんな1年生捕手達の中で抜群のキャッチングを見せたのは奥村光舟だ。

奥村は東条、沢村と続けて見事なキャッチングでボールを受けていく。

特に沢村の時は、沢村がオフシーズンの間に身に付けた新変化球の高速チェンジアップとカットボールも見事に1球目でキャッチングしてみせたのには高島も驚きの表情を浮かべていた。

ちなみにこの沢村の新変化取得には、クリスマスデートでやる気が向上して冬合宿においてノリノリで練習をしていた事が関係しているとかいないとか…。

さて、沢村のボールも見事にキャッチングしてみせた奥村は、降谷の真つ直ぐも1球目でキャッチングしてみせた。

さすがにミットの芯は外してしまっただが、それでも降谷のボールを捕れた唯一の1年生捕手ともなれば、彼の将来に期待が出来るだろう。

だが、奥村はここでテストを終える事に満足していなかった。

奥村は片岡の目を見据えると、パワプロのボールを受けさせて欲しいと申し出たのだった…。



「監督！俺に葉輪さんのボールを受けさせてください！」

キャッチャーのテストも終わりを迎えようとしていた時、奥村が片岡さんにそう言ってきた。

「ダメだ。葉輪は2日前に紅白戦で完投している。後3日は本格的に投げさせん。」

片岡さんの言った通りに俺は2日前の紅白戦で完投をしているから、今日は本気で投げるのを禁止されている。

だから遠投のテストの時にノーステップで軽めに投げたんだよね。

奥村が不満そうにしていると、そこに礼ちゃんが助け船を出した。

「葉輪くん、いけるかしら？」

礼ちゃんの言葉に片岡さんが目を向ける。

「先日の紅白戦は7回で終わっています。葉輪くんの球数も70球でしたので、比較的疲労は溜まっていないと思います。それにエースのボールを間近で見せておくのも、捕手を希望する1年生達にとっていい刺激になるかと…。」

礼ちゃんの言葉を受けた片岡さんは少し考えた後、俺に目を向けてきた。



「葉輪、いけるか？」

「はい、いけます。それに、ちよつと縦スラの感触を確かめておきたかったのです。」

実は2日前の紅白戦でちよつとポイントが貯まったから高速縦スライダーを1ランク成長させたんだよね。

これで高速縦スライダーも6になったんだけど、次のランクに必要なポイントがえぐい事になっているから夏の大会までにカンストさせる事は出来ないだろうな。

まあ、春季東京大会と春季関東大会を1人で投げ抜けばポイントが貯まると思うけど、片岡さんと落合コーチは俺に限らず先発投手には連投させないだろうしなあ…。

そんな事を考えていると、片岡さんが頷いて話し出した。

「30球までだ。準備をしろ。それと沢村！御幸を呼んでこい！」

「わかりました、ボス！」

沢村が走ってブルペンを出て行くのを見送ると、俺は肩を作る為に奥村とキャッチボールを始めたのだった。

## 第262話

ポジション別テストでパウプロのボールを受ける事を望んだ奥村は、パウプロが肩を作る為にキャッチボールの相手をしたが、今まで受けた事の無い球質に驚いていた。

(こんなボール…受けたことが無い…。)

まだ肩を作り始めたばかりで然程力が入っていない。

それでも奥村は1球受ける毎にキレを増していく。パウプロのボールに必死に慣れようとしていた。

そして僅か15球程のキャッチボールでパウプロが準備を終えてマウンドに向かうと、奥村はまたしても驚いて目を見開く。

(嘘だろ…もう出来上がったのか?)

日本のピッチャーは念入りに投げ込みをして肩を仕上げる選手が少なくない。

それこそ試合前のブルペンで100球近く投げる選手もいるのだ。

そういった投手を見てきた奥村には、球数少なく肩を仕上げるパウプロの姿は未知のものだった。

ちなみに青道野球部の投手達はパウプロにならって試合前でも2、30球程で肩を作る様になっている。

そのおかげなのか青道野球部の投手には肩肘を痛めた者が一人もいない。

もつとも中学卒業までに肩肘を痛めていた者はいるのだが、その者も青道野球部の練習で身体が出来上がっていくに従って徐々に肩肘の痛みが改善されていっているのだ。

パウプロはマウンドの感触を確かめる為に3球程、奥村を立てせて軽めに投げる。

キャッチボールとは違うボールの勢いに、奥村はボールを溢しそうになってしまった。

(集中しろー絶対に後ろに逸らすなー)

奥村がそんな思いを抱きながらボールを受けていた時に、御幸がブルペンに姿を現した。

「御幸くん、奥村くんのキャッチングはどう？」

ブルペンにやって来た御幸に高島がそう問うと、御幸は最早興味無しと言わんばかりにプロテクターを身に付け始めた。

その御幸の姿で察した高島は困った様に苦笑いをする。

「御幸、奥村には10球チャンスを与える。」

「了解です、片岡監督。」

御幸が監督に返事をした時、パワプロの投げ込みが始まったのだった。



さて、高速縦スライダーを投げたいところなんだけど、先ずはフォーシームからいくか。

奥村にフォーシームを投げると伝えてから投球フォームに入る。

指先にボールの縫い目を感じながらリリースしたボールは、奥村のミットを弾いて後ろに転がっていった。

「すいませんー！もう1球お願いしますー！」

奥村の手は大丈夫そうだけど…いいのかな？

俺は片岡さんに目を向ける。

片岡さんは頷いたので続けてフォーシームを投げ込んでいく。

2球目もボールを弾き、3球目はキャッチング出来たものの芯を外していた。

奥村は痛そうにミットの上から右手を当てている。

大丈夫か？

「もう1球、お願いしますー！」

うーん…そろそろ高速縦スライダーを投げたいんだけどなあ…。

片岡さんに目を向けると頷いたので、俺は奥村の要望通りにフォーシームを投げる。

バシッ！

おっ？今度はちゃんと捕れたみたいだ。

続く5球目のフォーシームも、奥村はキャッチングに成功した。

6球目からは変化球だ。

片岡さんの指示に従って横の高速スライダーを投げ込む。

高速スライダーを5球投げ込んだんだけど、奥村は1球も捕れなかった。

でも5球目には後ろに逸らさずにブロッキング出来たから、それを考えれば1年前の狩場よりは上手いのかも知れない。

まあ、今の狩場ならキャッチングは出来なくても1球も後ろに逸らさないだろうけどね。

そんな事を考えていると、片岡さんが奥村にテストの終わりを告げた。

奥村は食い下がっていたけど、そんな奥村を無視して一也がキャッチャーボックスに座る。

「奥村、テストは終わりだ。学ぶつもりがあるのなら、御幸のキャッチングを見学しろ。」

奥村は悔しそうに歯を食い縛ったけど、直ぐに顔を上げて一也に目を向けていた。

「パワープロ、縦スラを頼む！」

お？流石は相棒。

俺が投げたいボールをわかってるね！

俺は自分でもわかるぐらい笑顔になり、一也の構えるミットに向けてボールを投げ込むのだった。

## 第263話

今年の体力テストが終わって春季東京大会の日が近付いてきていた。

あの後、一也を相手に高速縦スライダーの感触を確かめていくと、奥村は悔しそうにしながらも一也のキャッチングを称賛していた。

そして体力テストの結果、今年の1年生で1軍に合流する選手は1人もいなかった。

礼ちゃん曰く、『キラリと光る才能を感じさせる選手もいたけど、やっぱり身体は出来ていなかったの。』だそうだ。

そういうわけで今年入部した1年生は皆2軍、3軍に合流した。

ちなみに俺が入部挨拶の時に注目した1年生達は全員2軍に合流している。

頑張れよ！

さて、春季東京大会が近付いているのもあって、今日の1軍の練習ではシートバッティングが行われている。

ただ、大会前に俺がシートバッティングで投げると、打席に立った選手のバッティング感覚が狂う可能性が高いと落合さんに言われ、俺はバッターに専念する事になった。

うーん…残念！

そんなわけで打席に立つと、マウンドにいる沢村が意気揚々と宣戦布告をしてきた。

「パワプロ先輩を抑えて俺がエースになる！」

沢村の言葉に反応して、守備についている皆から沢村に野次が飛んだ。

「お前には1年早え！」

「俺達が自主練している間にデートしてエースになるとか舐めてんのか?!」

「せめてノーノー達成してからにしろ！」

味方の筈の野手からの野次にマウンドにいる沢村がギョツと驚いている。

「ぐぬぬ……これがアウェイの洗礼か！」

いや、同じ青道野球部の仲間だから。

気を取り直した沢村が笑みを見せながらロージンバッグを手にする。

「行きますよ、パワプロ先輩！」

今日のシートバッティングの相棒である小野のサインに頷いた沢村が初球を投げてくる。

初球はアウトコースにバックドアになるツーシーム。

俺はこの初球を見逃した。

判定はボール。

「くっ！紙一重か！」

やっぱり沢村の投球フォームはボールの出所が見えにくい。

そのせいでボールが打席の外で見たよりもキレがある様に見える。

俺は俺のバッティングの基本であるインコースに意識を置いたまま2球目を待つ。

2球目、沢村はアウトコースに外に逃げるカットボールを投げ込んできた。

沢村の特殊な投球フォームのせいでタイミングは差し込まれ気味。

だけど俺はバットを振り抜いた。

カキンッ！

特殊能力の『広角打法』の感覚に身を任せてバットを振り抜いた打球は、高々と逆方向に飛んでいって外野フェンスを越えていった。

マウンドにいる沢村は悔しそうに歯を食い縛っている。

「ドンマイ、栄純くん！」

「ヒヤハッ！パワプロ相手ならしょうがねえだろ！」

「大事なものは打たれた後や！気持ち切りかえろ、沢村！」

春市、倉持、ゾノの言葉が届くと、沢村は大きく息を吐いた。

「ナイスバッティング、パワプロ。」

俺が打席の外に出ると、次に打席に入る一也が声を掛けてくる。

俺は一也とハイタッチをした。

イエーイ♪

「よく逆方向にあそこまで飛ばせるな。なんかコツとかってあるのか？」

「後ろの手の押し込みかな。後は肩を開かない様にして逆方向に引つ張る感じ。」

俺の『広角打法』の感覚を聞いた一也が、確認をする様に素振りをする。

「うし、それじゃ試してみるか。ちょうど今日の沢村はアウトコース中心みたいだからな。」

「そうなのか？」

「あいつはインコースには攻めるって意識はあるんだけど、アウトコースには攻めるって意識がないみたいなんだよな。その事で昨日、落合コーチと話しているのを見たからな。」

そう言えば沢村はインコースに投げ込んで真っ向勝負するのが好きだよな。

それを落合さんに指摘されたのか。

「練習なんだから程々にしてやれよ、一也。」

「沢村からホームランを打ったパウプロが言う台詞じゃないよな？」

「それはそれ、これはこれ。」

こうして俺達は春季東京大会に向けて練習を重ねていく。

もちろん狙うのは優勝だ。

やってやるぜ！

幕間：プロに行つた青道卒業生達の春のキャンプ

時は今年の2月頃にまで遡る。

全国各地でプロ野球球団の春のキャンプが始まった頃の事だ。

大阪ブルーブルズに入団した伊佐敷は威勢の良い挨拶をしていた。

「伊佐敷 純です！よろしくお願ひします！」

パチパチと送られてくる拍手に伊佐敷は顔を紅潮させる。

テレビで見たプロの選手達の姿を目の当たりにして感動しているのだ。

伊佐敷の他にも今年大阪ブルーブルズに入団した選手達の挨拶が続いていく。

昨年のドラフトで大阪ブルーブルズが指名した高卒選手は伊佐敷1人。

それ故に伊佐敷が真つ先に挨拶をする事になったのだ。

一通り新人選手の挨拶が終わるとブルーブルズ的首脳陣の挨拶が始まる。

チーム方針などが話されていくと、伊佐敷は改めてプロの世界に来たんだと実感していた。

さて、大阪ブルーブルズがどういったチームなのか説明しておこう  
大阪ブルーブルズはプロ野球界で初めてストライキが行われたとある問題の末に2つの球団が合併して生まれた球団である。

もともとブルーブルズの母体となったチームはファンの好みもあつて『打つて勝つ』チームだったのだが、球団合併などの問題で有力選手が何人もいなくなつてしまつていた。

その影響なのか大阪ブルーブルズは所属リーグにおいて毎年の様  
に最下位争いをしている。

そんな大阪ブルーブルズが抱えている問題が投手力不足だ。

エースと呼べる存在と守護神と呼べる存在の不在。

そこで出てくるのが伊佐敷だ。

伊佐敷は青道時代に先発、抑えとして経験を積んできている。

それ故に首脳陣は伊佐敷に期待しているのだが、まだ1年目の高卒



新人という事もあってプレッシャーを掛けぬ様に慎重に見守っていった。

だが、伊佐敷はこの春のキャンプの紅白戦で躍動した。

「ツシヤアー！」

ツーシームを中心にプロの先輩達を軽快に打ち取っていくと、首脳陣だけでなく先輩達も驚いた。

ツーシームを始めとしたムービングボールはメジャーでは既に主流だが、日本球界ではチェンジアップぐらいしかまだ浸透していない。

それ故に伊佐敷の2種類のツーシームは、面白い様にプロの先輩達を打ち取っていった。

低めにしつかりと制球されたツーシームで球数少なく打ち取る伊佐敷のピッチングスタイルは、大阪ブルーブルズの投手陣に新たな風を吹き込んだのだった。



場面は変わって西東京ペンギンズのキャンプ地。

そこで結城 哲也は黙々とバットを振り込んでいた。

「固いなく、結城。プロは身体を休めるのも仕事だぞ。」

「はい、古畑さん。」

球界の頭脳と呼ばれる古畑の言葉に、結城は素直に頷く。

昨年のドラフトで結城を単独1位指名した西東京ペンギンズは、今年の春のキャンプで結城の近くにチームの中心選手である古畑を置いていた。

西東京ペンギンズでは長年日本人選手による主砲が不在している。

そこで西東京ペンギンズの首脳陣は結城を主砲として育てるべく、かつて首位打者を取った事もある球界の頭脳を結城の側に置いたのだ。

「プロは年間140試合以上戦わなきゃいかん。シーズンを通してパフォーマンスを維持するには、休める時に休まないかんぞ。」

結城はプロの選手としてはまだ線が細かった事もあり、今シーズン1軍の試合に出場する事はなかった。

しかし彼が西東京ペンギンズを中心選手になる日が来るのは、それほど遠くないのかもしれない。



場面は福岡キングファルコンズのキャンプ地へと移る。

福岡キングファルコンズに入団したクリスは、日本球界で不滅の本塁打記録を持つ伝説の大打者から直接指導を受けていた。

「目付けは出来ているね。では、肩が大丈夫ならフォロースルーをもう少し大きくしてみようか。」

「はい。」

伝説の大打者の助言通りにクリスがバッティングのフォロースルーを大きくすると、クリスが放つ打球にもう一伸びが加わった。

ニコリと微笑んだ伝説の大打者はクリスを称賛する。

「素晴らしい！今の飛距離なら文句なしにスタンド上段に飛び込むよ！」

近年、この伝説の大打者は体調に不安を抱えているのだが、そんな様子を微塵も感じさせずに楽しそうにクリスを指導していく。

（彼を育てるのが、僕の監督としての最後の仕事だ…。）

今年、体調の不安から現場を退くつもりだった伝説の大打者だが、ドラフトでクリスの交渉権を得ると監督続投を決意している。

それだけクリスの才能に惚れ込んでいるのだ。

（願わくば彼がマスクを被ってチームを優勝に導く瞬間を、監督としてみたいものだ…。）

伝説の大打者が暖かい眼差しで見守る中で、クリスのバットから快音が響いていく。

空高く飛んでいく白球に、伝説の大打者は目を細めて微笑むのだった。



◆ 神奈川シースターズのキャンプ地にてプロ2年目を迎える東は、ひた向きに練習に励んでいた。

(プロを舐めているつもりはなかった。せやけど、年間140試合以上をこなす事を軽く考え過ぎとったわ。)

昨年の新人王に輝いた東は打率・301、本塁打30、打点84という記録を残している。

高卒新人で本塁打30の記録は往年の名選手以来の2人目とあって、神奈川シースターズのファン達に大きな夢を見せる事が出来た。

しかし、東はこの記録に納得していなかった。

(夏場にバテへんかったら40本は打てた…。ほんま情けないで…。) 昨年の東は1軍選手の故障もあって4月中旬から1軍に昇格していた。

そして代打出場のプロ初打席で見事に本塁打を放ち、神奈川シースターズのファンと首脳陣に東 清国の名を刻み込んだ。

代打で結果を出し続けると5月中旬に1軍スタメンの座を手にした東は、そこから本塁打を量産していった。

7月が終わると打率・354、本塁打18と高卒新人離れた成績を残していたのだが、プロの世界のプレッシャーと連日の試合による疲労が東の身体からキレを奪っていた。

そこから東のバットから快音が消え、辛抱の日が続いていく。

そしてシーズン最終戦で辛うじて30本塁打に届いた東は、体調管理の大切さを改めて認識したのだ。

(1試合結果が出たからって油断したらあかん！プロならシーズン通してパフォーマンスを維持せな！)

こうしてプロの自覚を胸に、東 清国のプロ2年目が始まるのだった。

## 第264話

今年の春季東京大会が始まった。

俺達、青道はシードなので2回戦からだ。

俺達是对戦相手になるかもしれない相手の試合を見学している。

優勢に試合を運んでいるのは成孔学園という高校だ。

その成孔学園なんだけど、選手全員の身体がガツチリとしている。

かなりウエイトレトレーニングに励んでいるみたいだな。

でも、そんな成孔学園の選手達の中で1人だけふくよかな身体をしている奴がいる。

そいつはエースナンバーを背負ってマウンドに立っているんだけど、時折ランナーを背負いながらも粘り強く相手打線を内野ゴロで打ち取っていた。

「あれは…スクリューか？」

スクリュー。

簡単に言えば左投手が投げるシンカーの様なものだ。

名古屋ナーガに所属しているラジコン好きなプロ野球選手が投げているボールだな。

それは置いておいてあのふくよかなピッチャー、ランナーを背負う度に何かを口ずさんでいる気がするんだけど…気のせいかな？



「♪」

成孔学園のエースである小川 常松（おがわ つねまつ）はマウンドで歌を歌っている。

彼がリスペクトするヒーローの歌だ。

小川は昨年の秋の選抜東京地区大会において、満塁からの押し出しによる失点で負けた事で一度自信を失っている。

そんな自信を失っていた時、小川は彼のヒーローと出会ったのだ。

「♪」

歌を歌いながら投球フォームに入ると、小川は球質の重いボールを投げ込む。

歌を歌ってリラックスした状態から投げ込まれたボールは、ストライクゾーンの低めにしっかりと制球されており、相手打線に内野ゴロを量産させていく。

気分良く、そしてリズム良く小川が投げていたその時…。

「タイムー！」

成孔学園の捕手である柁 伸一郎（ます しんいちろう）が主審にタイムを取り、マウンドの小川の元へと駆けていった。

「どうしたっすか、申さん？」

「おい、常。マウンドで歌うのはいいけどせめて鼻歌にしろ。」

「無理っす。これは彼へのリスペクトっす！」

「ア○パンマンを彼って言うんじゃねえ！」

試合中とは思えない緊張感の無さで柁と小川がやり取りをしている。

「まあいいか。それよりも5点差あるから、ここからはスクリューをなるべく投げない様にするぞ。偵察にきている青道にあまり見せたくないからな。」

「偵察っすか？」

柁の言葉に小川はスタンドにいる青道メンバーへと目を向ける。

「青道もバイキ○マンみたいな事をするんすね。」

「ア○パンマンのキャラで例えるんじゃねえよー！」

ミットで小川の胸を叩いてツツコミをいれた柁は、小走りでキャッチャーボックスに戻っていったのだった。



「俺達の相手は成孔学園で決まりだな。」

一也の言葉に皆が頷くと、席を立てて帰り仕度を始める。

「高校生でスクリューを投げるとは珍しいですな。」

「ええ、球質も重そうなので油断出来ません。」

落合さんと片岡さんが成孔学園の対策についてあれこれと話をしている。

「降谷、左右の違いはあるがお前の真っ直ぐと縦のスライダーが一番小川の球質に近い筈だ。戻ったらバッティングピッチャーをしてもらう。」

「はい。」

片岡さんからの指名でバッティングピッチャーとなった降谷は、嬉しそうにホクホクとした顔をしているな。

ちなみに降谷は昨年から今年にかけてのオフシーズンに縦のスライダーを覚えている。

縦のスライダーは俺が教えた。

降谷は俺と同じ投げ方で縦のスライダーを投げられる様になったんだけど、横のスライダーは何故か投げられないんだよね。

それと降谷はオフシーズンにカーブも覚えようとしていたんだけど、現状では使えるレベルになっていない。

どうしても腕の振りが弱くなっちゃうみたいなんだよね。

降谷以外にも青道投手陣はレベルアップしているので、青道高校のブルペンはとても投げ応えがある。

そう考えていたら投げたくなってきたな。

降谷が羨ましいぜ！

その後、青道高校に戻った俺達は降谷をバッティングピッチャーにしてバッティング練習をしていく。

そして時が過ぎ、成孔学園との試合の日を迎えたのだった。

## 第265話☆

春季東京大会の成孔学園との試合の日がやってきた。  
俺は試合前に能力を確認する。

基礎能力

最高球速：159 km (※160 km)

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7 (※7)

変化球2：チェンジアップ7 (※7)

変化球3：高速スライダー7 (※7)

変化球4：高速縦スライダー6 (※7)

投手能力はオフシーズンから今日までの間に球速を1 km、高速縦スライダーを1ランク成長させた。

次に野手能力を確認する。

基礎能力2

弾道：4

ミート：S

パワー：A

走力：S

肩力：S

守備：S

捕球：S

野手能力はパワーと走力、そして守備をそれぞれ1ランク成長させた。

パワーを成長させるのに必要な筋力ポイントは球速を成長させるのに必要なポイントでもあるので、高校野球でのパワーの成長はここ

までかな。

基礎能力全てをカンストさせたいとは思ったけど、出来ても夏が終わってからになりそうだ。

特殊能力は新しいのを覚えたのではないけど、ついでだから確認しておこう。

特殊能力

『鉄腕』

『鉄人』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『牽制◎』

『クイック◎』

『尻上がり』

『驚異のキレ』

『打球反応◎』

『サブポジ：外野◎』

『バント◎』

『盗塁◎』

『パワーヒッター』

『広角打法』

◆  
こんな感じの能力で俺は春季東京大会を戦っていく。  
よっしゃー！やってやるぜ！

成孔学園との試合、俺達青道高校は後攻になった。

片岡さんから先発メンバーが発表されていく。

1番バッターは遊撃手の倉持。



2番バッターは二塁手の春市。

そして…。

「3番、レフト、葉輪！」

「はい！」

今大会で俺が先発する予定なのは成宮がいる稲城実業と、天久がいる市大三高、そして轟がいる薬師高校の3つだ。

ただ、今大会の組み合わせで稲城と薬師が準決勝でぶつかるから、俺達が決勝まで勝ち上がっても俺が先発で投げるのは2試合だけだ。

うーん…残念。

俺がそんなことを考えている間にも片岡さんが先発メンバーを發表していく。

4番は捕手の一也。

5番は中堅手で主将の白州。

6番は一塁手のゾノ。

そして7番は…。

「7番、ライト、降谷！」

「はい。」

降谷はオフシーズンに俺とよく外野守備練習をしていたんだけど、以前と比べて外野守備が格段に上手くなったんだよね。

元々降谷は肩が良く、さらにバッティングも長打を期待出来るので守備さえまともなら外野のレギュラーを任せられるというのが落合さんの言葉だ。

そんな降谷は紅白戦で最高球速154kmを出している。

2年生の春の時点でこれなんだから、来年には160kmも期待出来るな！

ちなみに昨年から今年にかけてのオフシーズンでは、落合さんの指示で東条と沢村も外野守備練習に参加している。

目的は外野守備練習で走り回る事で足腰を鍛えるのと、遠投で肩を鍛える事だったらしい。

そのおかげなのか、東条と沢村は紅白戦で140kmを投げた。

二人ともメチャクチャ喜んでたな。

あ、ちなみに沢村は蒼月と正式に交際を始めたらしい。

貴子ちゃんから聞いた情報なんだけど、今年の2月のイベントで蒼月から告白したそうさ。

蒼月の告白に沢村はかなり動揺したみたいだけど、沢村は去年のクリスマス時から蒼月を幼馴染みとしてではなく、一人の女性として意識していたのもあって告白を受け入れたそうさ。

沢村、蒼月、おめでどう！

そんなことを考えている間にも片岡さんの先発メンバー発表は続いていく。

8番は三塁手の『シユー』という口癖が特徴の樋笠 昭治（ひがさしようじ）だ。

同じ三塁手の金丸は先発メンバーに選ばれなくて悔しそうな表情をしている。

そして9番バッターで先発投手には沢村が選ばれた。

沢村は蒼月と正式に交際を始めてから、集中しながらもいい感じに力を抜いて練習が出来たりと色々絶好調なんだよね。

俺と一也もそうなんだけど、プライベートの充実が野球にいい影響を与えてくれたりするのかな？

さあ、先発メンバーの発表も終わってよいよ成孔学園との試合の始まりだ！

思いつきり楽しんでいくぜ！

## 第266話

「〜♪」

春季東京大会の青道高校と成孔学園の試合、1回の裏のマウンドで成孔学園のエースである小川は彼のヒーローの歌を口ずさんでいた。

小川はチラリとランナーに目を向ける。

1回の裏、ノーアウト1、3塁。

そしてバッターはパウプロというピンチの状況だ。

成孔学園のエースである小川は彼のヒーローの歌を口ずさみながら左腕を振るう。

球質の重い真つ直ぐとスクリューを駆使してパウプロからカウントを稼いでいく。

小川は左バッターが相手の時、決め球にインローのスクリューを投じる事が多いのだが、パウプロのインコースの強さは広く知られている。

それ故に成孔学園の正捕手である柁はアウトローへの真つ直ぐで勝負にいった。

だが…。

カキンッ！

パウプロのバットから快音が響くと、打球は逆方向に高々と飛んでいく。

そして打球はそのままスタンド上段に飛び込み、青道高校は初回である1回の裏から3点を先取した。

ヒーローの歌を口ずさむ小川は精神的に崩れなかったが、パウプロの一発で勝負の流れを持っていかれたのか青道打線の猛攻が止まらない。

パウプロに続いて御幸もホームランを打つと、白州、前園とヒットが続き、降谷、樋笠がタイムリーヒットを打つ。

流石に沢村のところまで連続ヒットは止まったが、それでも沢村は職人芸の域に達しているバントで更にチャンス拡大する。

打者1順しても青道の猛攻は止まらず、1回の裏が終わった時には

スコアボードに11点が刻まれていた。

1回の表で三者凡退をってしまった成孔打線は2回の表で先ずは1点をと沢村に挑むが、御幸のリードに青道野手陣の堅守で得点どころかランナーを出す事も出来ない。

そして成孔打線が四死球以外でランナーを一人も出せぬまま迎えた5回の表、沢村は5回コールドの参考記録ながらノーヒットノーランまで後1人と迫っていた。



「フー…。」

大きく息を吐いた沢村の耳に次々と仲間達の声援が聞こえてくる。その中でも一際良く聞こえる声援がある。

それは…。

「栄純、あと1人よ！」

幼馴染みから恋人になった蒼月 若菜の声援だ。

若菜の声援が聞こえた沢村はマウンドで笑みを浮かべる。

(心臓の音が聞こえる程緊張しているのに、楽しくて仕方ねえ！)

御幸のサインを見た沢村が打球フォームに入る。

大きく足を上げてから踏み込むと、沢村の天性の身体の柔らかさにより左腕が遅れて出てくる。

タイミングを掴めない成孔学園の打者は、バットを振る事が出来ずにボールを見送る。

「ストライク！」

主審のストライクコールに沢村の胸が更に高鳴る。

あとストライク2つ。

待ちきれないとばかりに沢村が御幸のサインを覗き込む。

だが、御幸は中々サインを出さない。

すると…。

「なにを慌ててんのよ！バカ栄純！」

若菜の声にハツとした沢村はタイムを要求してロージンバッグを

手に取る。

深呼吸を1つ、2つとしてから沢村はプレートに足を掛ける。

出されたサインに頷いた沢村は、いい具合に脱力をしてボールを投げ込む。

「ストライクツー！」

成孔の打者が明らかに振り遅れると、沢村の心臓は痛いほどに早鐘を打った。

(あと1つ…！)

身体から力みを抜こうと、沢村は何度も深呼吸を繰り返す。

「栄純！あと1つよ！頑張れ！」

若菜の声援に沢村の細胞が応える。

周囲の色が少しずつ消えていき、沢村の目には御幸のミットだけが鮮明に色付いて見えていた。

初めての不思議な感覚の中で、沢村はゆったりと投球フォームに入る。

大きく足を上げてしっかりと体重を乗せ、踏み込み、脱力の状態からリリースで一気に力を解放。

全てがイメージ通りに出来た最高の1球が、御幸のミットに向かっていく。

そして…。

バシッ！

「ストライクスリー！バッターアウト！ゲームセット！」

主審のコールが耳に届くと、沢村の視界に周囲の色が戻る。

そしてマウンドの上で沢村が雄叫びを上げると、スタンドの若菜も嬉しそうに喜びの声を上げたのだった。

## 第267話★

【怪物】 パワプロを応援するスレ2223 【ラスボス】

1:このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てる様に

315:青道の先発よかったやん

320:315<せやな。5回コールドやけどノーノーやったから  
な

326:ツーシームとカットボールを駆使するムービング使いか…  
ワイ好みやで

319:左で140kmを投げていたし将来有望やな!

334:ところで成孔は青道先発のサツワのボールに  
ほとんど差し込まれとったけどなんでやの?

337:334<キレやろ

340:334<コクやろ

343:334<のどごしやろ

350:337、340、343<この流れすつきやでWWW

354:334<マジレスすると投球フォームが特殊なんやないか  
?

サツワのボールはラスボスほどキレてるようには見えへん  
しな

360：投球フォームが特殊やとなんか違うのん？

363：360＜リリースポイントが見えにくくてタイミングがとりにくかったり、

バッターの予想以上にボールがピツときたりするんよ

370：これはサツワがラスボスの後継者か？同じ左投手やし

373：370＜球速でいえば降谷やろ。150kmを投げられる  
みたいやし

377：373＜球速信者乙

381：ワイは東条を推すで！青道の2年の中で一番コントロール  
がええからな！

402：おまいら…ラスボスの3打席連続ホームランに何かないん  
かい！

405：402＜ラスボスやし

406：402＜ラスボスやし

407：402＜ラスボスやし

411：405、406、407＜圧倒的…圧倒的説得力！

415：なんで逆方向にあんなに飛ばせんねん！お前はピッチャー

やろ！

418：ラスボスが完全に打撃開眼してて草

422：あんだだけ打てれば肩が壊れても安心やな

427：422∨それは不謹慎発言やろ

434：422∨せやで、ラスボスは日本人の左ピッチャーで初めて160kmを

投げられるようになる男やからな！

440：434∨ワシは投げた！

445：おじいちゃんご飯はもう食べたでしよ

453：成孔のピッチャーには試練やったな

460：453∨せやけど、あんだだけ大量点を取られても自棄にならんかったし将来有望やろ

466：ワイの鼻肩のピッチャーもあんだだけメンタル強ければなあ  
：

470：ラスボスがおって打の青道も復活したら勝てるところがな  
いやん

478：主人公くんの成長に期待やな





春季東京大会を準決勝まで順調に勝ち進んだ青道野球部は午後の市大三高戦を前に、もう一つの準決勝である稲城実業と薬師高校との試合を見学していた。

「ここで轟か…。」

稲城実業と薬師高校の試合は最終回となる9回の裏を迎え、ツーアウト、満塁の状況で薬師高校の主砲である轟を打席に迎えていた。

「3-0…轟に一発が出れば逆転サヨナラ。勝利だけを考えれば敬遠してもおかしくないところだが…。」

落合はそう呟きながらスタンドを見渡す。

四球や打球のイレギュラーなどで満塁となった稲城実業にとっては嫌な流れ。

その嫌な流れで一発のある轟とは勝負を避けてもおかしくはないが、球場に訪れている高校野球ファンは一樣に勝負を望んでいるのがわかる。

「片岡監督ならどうしますかな？」

「勝負します。結果はどうあれ、選手達には胸を張ってしてもらいたいからです。」

稲城実業の正捕手である多田野がキャッチャーボックスに座る。

どうやら稲城実業も勝負する事を選択したようだ。

稲城実業のエースである成宮は2球で轟を追い込むと真っ直ぐ、スライダー、フォーク、カットボール、高速チェンジアップと持ち球を駆使して勝負していく。

しかし、轟は驚異的な粘りをみせる。

成宮のボールを次々とカットしていき、この打席だけで成宮に10球を投げさせた。

そして1-1球目、真っ直ぐが外れてツーボール、ツーストライクのカウントになると、成宮は多田野のサインに迷わずに頷いた。

1-1球目の真っ直ぐは次の決め球のチェンジアップへの布石。

成宮はこの1球で轟を打ち取ると、渾身の1球を投げ込む。

低めにしっかりと制球された成宮のチェンジアップは、フォークと錯覚させる程の落差で変化する。

その変化に轟の体勢は完全に崩された。  
だが…。

カキンッ!

金属バットの快音と共に打球が勢いよく右中間方向へと飛んでいく。

しかし角度は低くライナー性の打球だ。

稲城実業の中堅手であるカルロスが打球から目を切って全力で駆ける。

ライナー性の打球は右中間の外野フェンスに直撃した。

フェンスに当たってクッションしたボールに少し振り回されたカルロスだが、ボールを捕球すると素早くカットマンに返球する。

薬師の1塁ランナーだったものは、3塁コーチャーの制止を振りきってホームに突っ込んだ。

成宮を相手にまともにヒットを打ったのは轟のみ。

しかもこの試合を通じて先程の一打のみだ。

それを考えるとこれ以上の連打は難しい。

だからこそ、ここで同点に追い付いておきたかったのだ。

カルロスからの返球を受けた稲城実業の2塁手が素早く多田野にボールを投げる。

薬師高校のランナーと多田野のタッチがホームベース上で交差し、砂煙が舞い上がる。

判定は…?

「…アウト！ゲームセット！」

主審の判定がグラウンドに響き渡ると、轟が塁上で悔しそうに天を仰ぐ。

そしてキャッチャーのカバーに入っていた成宮は轟に打たれた事に苦笑いをしながらも、多田野とハイタッチをしたのだった。

## 第268話★

春季東京大会の準決勝、稲城実業と薬師高校の試合が終わると、青道高校と市大三高の試合が始まろうとしていた。

この試合で高校野球ファンが注目しているのは、市大三高のエースである天久がどこまでパワープロに食い下がれるかだ。

その注目を察した天久だが、特に反応を示さずに淡々とアップをしていた。

「天久ボーイ、コンディションはどうかかな？」

「まあまああってとこっすね。」

市大三高の監督である田原の問い掛けに、天久は首を傾げながら答える。

そんな天久の様子に田原はニコニコと微笑んでいた。

（天久ボーイ、君もやはり葉輪ボーイや成宮ボーイと同じジーニアスだ。）

天久は最高球速147kmとパワープロや成宮と比べたら少々物足りなさを感じるかもしれないが、高校野球の投手として見ればキレ、コントロール、変化球の種類と変化量は一級品だ。

更に新変化球としてパワーシンカーを覚えた天久のピッチングは、楊舜臣には及ばないものの右投手としてはトップクラスの評価をプロのスカウトから得ている。

（天久ボーイ、モンスターとのファイトは君に任せたぞ。）

田原が見守る中でも、天久は淡々とアップを続けていったのだった。



『さあ、春季東京大会準決勝の第2試合が始まろうとしています。解説の——さん、青道高校の葉輪選手と市大三高の天久選手の対決をどうご覧になりますか？』

『両校ともに東京地区では名門と言われる高校ですが、選手層の厚さ

では青道が一枚上ですね。市大三高の天久くんがどこまで踏ん張れるかが勝負の鍵になるでしょう。』

『なるほど。ところで天久選手と言えば今年のドラフト候補の中でもトップクラスの右投手ですが、解説の——さんはどの様に評価していますか？』

『140km台後半の真っ直ぐにスライダー、カーブ、フォークと変化球の種類も豊富です。更に新変化球としてパワーシンカーを身に付けた事も考えれば、右投手としてトップクラスの評価を得ているのも納得ですね。』

『ドラフトの話題と言えば葉輪選手の事も欠かせませんね。彼は指名を蹴ってでもアメリカに渡ると公言していますが、現在のドラフト制度はどのようになっていっているのでしょうか？』

『優先交渉権を得たプロ球団は1年の期間、対象の選手と交渉する権利を有するのですが、これはあくまで日本球界に限りですね。ドラフト会議は11月にあるのですが、翌年の3月末から海外の球団のトレードアウトを受ける事がルール上では可能となります。』

『そこまで話すと、解説はマイクを通して聞こえる程の大きなため息を吐く。』

『ですが、指名を蹴ってでもアメリカの球団のトレードアウトを受けに行く葉輪くんの行動は紳士的とは言えませぬねえ。何よりも指名をしてくれた球団への誠意に欠けます。この様な問題を防ぐ為にも早急にメジャーのコミッショナーと話し合いを……。』



【怪物】 パワプロを応援するスレ237 【ラスボス】

1: このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

13：ルール上問題ないならトライアウトを受けに行ってもええやん

何をぶつくさと文句を言ってるねん！

18：13＜気に入らなければ感情論で騒ぐ奴がいるのはいつもの事や

29：そういえば今年のドラフトからルールが追加されるって話やけど？

33：29＜明らかにパワプロを意識したルールやな

40：33＜どんなルールやの？

45：40＜ドラフト指名されてプロ入りを断ったら3年は日本の球団で働けないって感じやな

海外の野球コミッショナーとの話が纏まらんかったから急遽追加するって噂や

51：45＜要するに言う事聞かんなら出戻り出来ない様にしたろってことやろ？

ほんましようもないルールを作るな。

56：若者の夢を邪魔して競技人口の減少がって騒ぐとか頭おかしいやろ

72：余計な事をしている暇があるなら是非とも日本で野球をしたって環境を作れや！



今年から日本球界では通称『葉輪ルール』と呼ばれるルールが追加されたのだが、それにより若き野球人達の海外挑戦が減ることはなかったのだった。

## 第269話

春季東京大会準決勝第2試合、青道高校と市大三高の試合が始まった。

先攻は青道高校。

1回の表、市大三高の先発マウンドに上がったエースの天久は、青道の先頭打者である倉持をセカンドゴロに抑えた。

続く春市も倉持と同じくセカンドゴロに抑えると、ツーアウト、ランナー無しの状況でパウプロとの勝負を迎える。

パウプロとの勝負の初球、天久は慎重にボール球から投げ込んだ。

今大会、パウプロはこの試合までに8本塁打を放ち、現東京地区屈指の強打者である轟を抑えて本塁打数トップを独走している。

その事もあり、天久はパウプロがピッチャーを本職としている事を忘れ、一強打者として対峙している。

それにこれまでのパウプロはインコースに強いという噂が広まっていたが、今大会ではアウトコースのボールを逆方向にホームランにしたりしているので、最早アウトコース一辺倒の攻めでパウプロと勝負するのは危険なのだ。

天久は2球目もボール球を投げるがパウプロは反応を見せない。

ツーボールとボールカウントが先行してしまっただが、天久に焦りはない。

3球目、天久はアウトローにバックドアとなるカーブを投げてカウントを整えようとする。

しかし…。

カキンッ!

パウプロのバットが快音を鳴らすと、市大三高の監督である田原はギョツと目を見開いた。

パウプロが放った打球はレフト線を切れてファールとなる。

ファールとなったが飛距離は十分な打球に、田原は肝が冷えた。

だがそんな田原と違って、マウンド上の天久は冷静だった。

(どんだけ飛ばそうがファールはファール。これでカウントはツー

ボール、ワンストライクつと。)

ロージンバツグを手に取った後、天久は息を吹き掛けて余分な滑り止めを飛ばす。

ふてぶてしいその天久の姿に、田原は鳥肌が立った。

(天久ボーイ：ユーはエースになった。)

その後フルカウントまで進むと、天久は決め球のスライダーでパワープロをファーストゴロに打ち取る。

1回の表から熱い勝負をした天久だが、淡々とした様子でベンチに戻っていったのだった。



1回の裏、青道の先発としてパワープロがマウンドに上がる。

パワープロは市大三高打線を三者連続三振で抑えるが、球場に駆け付けた高校野球ファンに大きな驚きはない。

ある意味で見慣れた光景だからだ。

続く2回の表、天久は先頭打者の御幸にレフト前へのシングルヒットを打たれてしまう。

そして次打者の白州にバントで御幸を2塁に送られるとワンアウト、ランナー2塁のピンチを迎えるが、後続をしつかりと抑えてピンチを切り抜けた。

その後スコアボードに0が刻み続けられるが、6回の裏のパワープロの1球で球場にざわめきが起こる。

電光掲示板に159kmという数字が表示されたからだ。

日本人の野球ファンが夢見る160kmまで後1km：しかも左投手でだ。

このパワープロの1球で球場の雰囲気は完全に青道一色になった。

それが流れを呼び込んだのか7回の表、打球のイレギュラーや市大三高野手陣のエラーで、ノーアウト、満塁のビッグチャンスが訪れる。

さらに打席に入るのは4番の御幸。

市大三高の監督である田原は天久を信じて見守る。



しかし…。

カキンッ！

無情にも天久の決め球であるスライダーは御幸に狙い打たれ、満塁ホームランを打たれてしまった。

パワプロを相手に4点差と絶望の状況でも、市大三高メンバーは最後まで勝負を捨てずに声を張り上げてプレーをしていた。

しかし彼等のその思いは届かず0ー4のスコアで市大三高は敗れたのだった。

## 第270話

春季東京大会の決勝戦の日を迎え、稲城実業の正捕手である多田野は昨年の秋の選抜東京大会での後逸を思い出し、これまで経験した事のない緊張で身体を固くしていた。

（大丈夫だ！俺はもう成宮さんのチェンジアップを捕れる！）

何度も繰り返し己に言い聞かせるが、かつての失敗は脳裏を去らない。

多田野の異変に最初に気づいたのは白河だ。

本来ならバッテリーを組んでいる成宮が最初に気づいたのだろうが、成宮は昨年のオフシーズンに複数球団のスカウトから接触を受けた事で、いつもよりもパワプロを意識してしまっているので気づかない。

パワプロと競うことで色々と成長をしても成宮はまだ十代の若者なのだ。

周囲の影響を受けて視野が狭くなってしまいうのも無理はないだろう。

（あれじゃあ、また鳴のボールを後ろに逸らしそう。）

そう思ったものの、白河は多田野に声を掛けなかった。

（まあ、多田野がボールを後ろに逸らして夏の大会のキャッチャーが代わってもいいか。鳴のボールを捕れるんならキャッチャーなんて誰でもいいしね。）

白河の考えの一つとしてキャッチャーは誰でもいいというのがあがるが、これはリトル時代のパワプロが大きく影響している。

パワプロはリトル時代にクリスがチームを卒業してから組んだキャッチャーの時に、キャッチャーが捕れるように加減をして投げて全国優勝を果たしている。

この時のイメージが今もまだ白河に鮮明に残っているのだ。

（それよりも、パワプロからどうやって点をとるのかを考えないと、いくら鳴がいいピッチャーでも俺達が点をとらないと勝てないからね。）

多田野を一瞥した白河は、踵を返してカルロス達の所に向かったのだった。



『葉輪さん、フウロくんの事前登録は無事に完了しました。』

『ありがとうございます、ベックさん。』

春季東京大会の決勝戦を観戦しにきた葉輪、藤原両家の両親と、ロジャーズスカウトのベックはにこやかに会話をしていた。

会話の内容はメジャーリーグの制度の一つである事前登録制度というものだ。

この制度は近年に導入されたばかりのものなのだが、これはメジャーのドラフトを受けたりトライアウトに参加する為に導入された制度だ。

事前登録制度が導入された経緯なのだが、これは出身国等を詐称する者が多かったのが主な理由である。

『メジャーのトライアウトはアマチュアでも気軽に参加出来るとは思いませんでした。』

『むしろ僕は日本のプロ野球のトライアウトが、プロの選手しか参加出来ないのが不思議で仕方ないですね。』

ここで日米のトライアウトの違いを簡単に説明しておこう。

二人の会話の通りなのだが、日本のプロ野球のトライアウトは日本のプロ球団に所属した事のある選手しか参加を認められていない。

対してメジャーのトライアウトはプロアマを問わずに参加を認められているのだ。

『しかし、これで風路はドラフトで煩わされる事もなく、トライアウトに行けますね。』

『日本の野球は色々面倒な規則が多いですからね。勘違いしてしまいうのも仕方ないでしょう。』

さて、ここでドラフトの事も簡単に説明しておこう。

現在のドラフトで指名を受けるにはプロ志望届を提出する必要がある

ある。

つまりドラフトで日本のプロ球団が選手を指名するには、プロ志望届を提出している選手に限るとなるのだ。

ここまでの説明を踏まえて、パワプロと御幸のトライアウトに参加する道筋を確認してみよう。

- 1：メジャー側に事前登録をする
- 2：日本でプロ志望届を提出しない事でドラフト指名を受けない
- 3：パワプロと御幸は来年の1～2月に行われるメジャーのトライアウトに参加する

4：トライアウトに合格したら青道卒業後にアメリカへ  
これがパワプロと御幸の高校野球引退後の予定である。

以前にパワプロが『例えドラフトで指名されてもメジャーに行く』と発言したのは、メジャーのトライアウトがアマチュアでも気軽に参加出来ると知らなかったからだ。

『やはりトライアウトに合格したらルーキーリーグからですか？』

『おそらく一也くんはそうなるでしょうが、フウロくんの実力なら2Aや3Aからのスタートもありえます。僕なら即メジャー契約を結びますがね、ハツハツハツ！』

葉輪、藤原両家の両親とベックが和やかに会話をしていると、青道高校と稲城実業による春季東京大会の決勝戦が始まるのだった。

## 第271話

春季東京大会の決勝戦である青道高校と稲城実業の試合が始まった。

先攻は稲城実業。

1回の表、先頭打者のカルロスが初球にセーフティバントを仕掛けるが、パウプロが素早いフィールディングを見せてアウトにする。

続く白河はバスターを仕掛けるが、バットがボールに当たらずに三振。

そして3番バッターも三振に倒れ、1回の表の稲城実業の攻撃は三者凡退で終わる。

攻守が入れかわって1回の裏、青道高校の先頭打者である倉持はお返しとばかりにセーフティバントを仕掛けた。

だが、ボールはキャッチャーの目の前に転がってしまった。

倉持のセーフティバントも失敗かと思われたその時、稲城実業の正捕手である多田野の送球は逸れて倉持のヘルメットに当たってしまった。

倉持のヘルメットに当たったボールが1塁側ファールグラウンドを転がっている間に、倉持は1塁を駆け抜けてセーフとなる。

1回から成宮を相手にノーアウトでランナーが出るという状況に、青道高校を応援している者達から大きな歓声が上がった。

塁に出た倉持は貪欲に2塁を狙っていた。

倉持の足の速さは高校野球では既に有名である。

故に成宮が慎重になって牽制をするのも無理はないだろう。

しかし…。

(ヒヤハッ！俺のリードを小さくしたかったら、パウプロ並みの牽制をするんだな。)

特殊能力により抜群の牽制技術を持つパウプロを相手に、倉持は日頃から塁上での駆け引きを磨いてきた。

故に倉持は成宮からの盗塁成功を確信していた。

成宮はセツトポジションからクイックモーションでボールを投げ

込むが、倉持は抜群のスタートを切る。

倉持の盗塁を警戒していた稲城実業バッテリーはボールを外す。しかし、多田野は握りかえを失敗してボールを2塁に投げられない。

ここで成宮は多田野の異変に気付いた。

現在の状況はノーアウト、2塁。

成宮はタイムを取り、多田野をマウンドに呼び出すのだった。



「すみません、成宮さん。」

青道メンバーに見られない様にマスクで隠しているが、多田野の表情は悔しそうに歪んでいる。

「原因はわかってんの?」

「去年の後逸が頭を過って…。」

「ふくん。」

成宮は多田野を責めなかった。

自身も浮わついていたところがあつたのを自覚したからだ。

「この回が終わったら怒られる覚悟をしておけよ。監督が睨んでるからな。」

茶化す様に言った成宮の言葉に反応して多田野がチラリとベンチに目を向ける。

そこにはマウンドを凝視している稲城実業の監督である国友の姿があつた。

『うへえ。』と呻く多田野の姿に、成宮はグローブで顔を隠して笑う。

ため息を吐いてからキャッチャーボックスに戻る多田野の背中に成宮が声を掛ける。

「おい、多田野。」

振り返った多田野に成宮は不敵な笑みを見せる。

そして…。

「逸らすなよ、ギアを上げるからな。」

力強く頷いた多田野は、駆け足でキャッチャーボックスに戻ったのだった。



『春季東京大会の決勝戦、青道高校と稲城実業の試合ですが、1回の裏から稲城実業はピンチを背負いました！解説の——さん、この状況をどう見ますか？』

『キャッチャーの多田野くんのミスですね。二度続けての送球ミス、一昔前の強豪校なら即座に交代させられましたよ。』

呆れた様な口調の解説者に、実況者は苦笑いを浮かべる。

『さあ、バッテリー間のタイムも終わり試合再開です！ノーアウト、2塁の状況で打席には巧打者の小湊選手が入ります！』

『バント、エンドランと多くの戦術が考えられますね。稲城実業は苦しいところですよ。』

『稲城実業バッテリーがどう凌ぐのか注目ですね。成宮選手、セットポジションからクイックモーションで投げました！球速は：なんと！？自己最高球速を更新する152kmです！小湊選手、思わず主審にタイムを要求しました！』

驚く実況者と同じく球場にも驚きの声上がる。

『流石は成宮くん。彼は東京地区で1、2を争うサウスポーですからね。このぐらいは当然でしょう。』

パウプロアンチ故に対戦校を贔屓する解説者に、実況者はため息を堪える。

カウントが進んで春市を追い込むと、成宮はチェンジアップで三振に抑えた。

『成宮選手！小湊選手を伝家の宝刀チェンジアップで三振に抑えました！』

『これでワンアウトですがまだ気は抜けませんよ。』

その後、成宮はパウプロにセンターへの大きな当たりを打たれたが、中堅手のカルロスのホームランボールを掴み捕る超ファインプ

レーに救われてツーアウト目を奪うと御幸を歩かせ、続く白州から3  
つ目の三振を奪ってピンチを切り抜ける。

そして2回の表からは、パワプロと成宮による三振ショーが繰り広  
げられるのだった。



## 第272話

春季東京大会の決勝戦、青道高校と稲城実業の試合はパワプロと成宮による三振ショーが始まった。

2回の表、パワプロが4番から始まる稲城実業打線を三者三振に抑えると、2回の裏には6番から始まる青道高校打線を三者三振に抑える。

3回の攻防もパワプロ、成宮の両エースの三者連続三振に終わったが、4回に試合が動く。

4回の表はパワプロが三者凡退に抑えたが4回の裏、成宮は先頭打者のパワプロに左中間フェンスに直撃となるツーベースヒットを打たれた。

あと一伸びしていたらホームランというパワプロの打球に稲城実業を応援している者達は肝を冷やしたが、マウンドの成宮は冷静だった。

ノーアウト、ランナー2塁の状況で迎えるバッターは御幸。

成宮は勝負したい気持ちを抑えて御幸を歩かせる。

これで御幸は2打席連続の敬遠だ。

青道高校を応援している者達から稲城実業へのブーイングが飛ぶ。

だが、成宮は揺れない。

ノーアウト、ランナー1、2塁の状況で打席に迎えるのは5番バッターの白州。

稲城実業バッテリーは勝負に行ったが、白州が選択したのは送りバント。

青道高校打線の次のバッターはパワーのある前園。

成宮を相手にヒットは難しくても犠牲フライなら可能性があるかと、白州は主将としてチームプレーを選んだのだ。

白州の送りバントにより状況はワンアウト、2、3塁へと変化する。スクイズや犠牲フライでも1点を狙える状況で打席に向かうのは6番の前園。

前園は打席に入る前にオフシーズンでの練習を思い出していた。

◆  
ガキツ!

ボテボテの打球が二塁手正面に転がっていく。

今の打球を打った前園は悔しそうに歯を噛んだ。

「くそっ！なんで打てへんのやー！」

前園はレギュラー陣の中では打率が低い方だ。

その打率が低い原因は自分が極端なプルヒッター（引つ張るのが得意なバッターのこと）だからだと前園は考えた。

そこで前園はオフシーズンの間に逆方向へのバッティングにトライしている最中なのだ。

「すまん！パワプロ、もう一球頼むわ！」

オフシーズン故に抑え気味の力でパワプロはバッティングピッチャーをしていく。

抜群のコントロールで前園が要求するコースにボールを投げ込むが、前園は思った様に打球を飛ばす事が出来ず、何度も天を仰いだ。

「ゾノ、ちよつといいか？」

「なんや？なんかアドバイスでもあるんか？」

「いや、アドバイスってわけじゃないけど、ゾノって引つ張るのが好きなんだよな？」

前園はパワプロの言葉に首を傾げる。

「そうやけど、それがどうしたんや？」

「いや、逆方向のバッティングをしても楽しそうじゃないなあって思ってたさ。」

パワプロの言葉に前園はため息を吐く。

「打率を残そう思ったから逆方向へのバッティングを練習しとんのか。楽しくないなんて言ったられへんやろ。」

「でもさ、それで元々あった引つ張りの感覚がおかしくなったら意味がないんじゃない？」

「そらそうやけど…。」

前園は頭をガシガシと搔く。

「俺が引つ張りしかでけへんとわかつとつたらシフトを敷かれるやろ？ そうなったら打率が下がってまうやんか。」

「むしろそのシフトを敷かれている方向にヒットを打った方がカッコよくない？」

「そんな世界のホームラン王みたいな真似出来るか！」

関西人の血がそうさせるのか、前園はパウプロの言葉にツッコミを入れる。

だが…。

「ゾノ、それって今は出来ないだけだろ？」

パウプロが満面の笑みでそう言うのと、前園は目を見開いた。

「いいじゃん、引つ張りだけでも。それで世界一ホームランを打った人がいるんだからさ。」

「だから俺を世界のホームラン王と一緒にすな！」

前園はそう言うと、パウプロと一緒に笑い声を上げたのだった。



（あれから俺は無理に逆方向に打たなくなった。でもその結果、前よりもヒットを打てる様になった。ほんまバツティングってわからん。でも、今の方がずっと楽しいわ。）

打席に入った前園は不敵な笑みを浮かべる。

（俺は狙って流すなんて器用なバツティングはでけへん。せやけど、意地でも成宮のボールを引つ張ったるわ！）

初球、前園はアウトコースのバツクドアとなる成宮のカットボールを引つ張る。

打球は3塁線を切れてファール。

（これでええ。俺に出来んのは引つ張るバツティングや！）

2球目、3球目と前園はアウトコースのボールを引つ張るが、打球は全て3塁線を切れてファールとなる。

そして4球目、引つ張るには絶好のインコースのボールが来た。

しかし…。

ガキッ！

（あかん！カんでボールの下を擦ってもうた！）

前園は悔しそうにしながらもしつかりと一塁に走る。

打球は前進守備の左翼手の頭上へとふらふらと飛んでいくが、バットを振りきってボールの下を擦った前園の打球はそこからもう一伸びを見せた。

稲城実業の左翼手は予想外の打球の伸びに慌てて下がるが、なんとかボールをキャッチした。

しかし稲城実業の左翼手の体勢が崩れたのを見逃さずに、パウプロはタッチアップをする。

パウプロの足の速さは盗塁こそ倉持に譲るが、ベースランニングでは互角だ。

故に稲城実業の捕球体勢を崩させた前園の打球は、パウプロがタッチアップをしてホームインするには十分だった。

パウプロがホームベースに滑り込むと、前園は雄叫びを上げる。

そして前園は笑顔で手を上げて走り寄ってくるパウプロとハイタッチをしたのだった。

## 第273話★

(パワプロのギアが上がった…。)

春季東京大会の決勝戦である青道高校と稲城実業の試合は6回の表を迎えていた。

6回の表のマウンドに上がったパワプロは特殊能力の尻上がりの効果で投球のギアが上がる。

稲城実業のバッター達はパワプロの159kmのフォーシームにバットが空を切っていた。

(ほんとにパワプロはコントロールを間違えねえな。なんかコツでもあんのか?)

この試合では9番バッターである成宮は、6回の表の先頭打者である7番バッターが三振に抑えられると、ネクストバッターサークルに向かいながらパワプロを観察する。

(俺もコントロールは良くなったけど、それでも1試合に数球は失投をしちまう。4回の裏でもそうだった。けど、パワプロは1試合に1球あるかないかだ。)

パワプロや明川学園のエースだった楊 舜臣には及ばないが、それでも成宮の制球力は東京地区でも五指には入る見事なものである。

そんな成宮が別格だと認める制球力を持つのが楊 舜臣とパワプロなのだ。

「認めるよ、今はお前の方が上だってな。でも、負けたままじゃ終わらねえし。」

この試合2度目の打席に立った成宮は、パワプロに三球三振に抑えられてしまう。

そして6回の裏のマウンドに上がった成宮は、パワプロに対抗する様に投球のギアを上げたのだった。



【怪物】パワプロを応援するスレ250【ラスボス】

1：このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします  
次スレは800を踏んだ奴が建てるように

51：主人公くんもいい投手やなあ

55：左で150km以上の真つ直ぐを投げられてコントロールも  
いいからな

普通なら世代ナンバーワン投手でもおかしくないんやが…

58：55＜なおラスボスがいるせいで永遠のナンバーツの模様  
www

61：58＜やめてさしあげろw

66：58＜そうやぞ！ナンバーツは楊なんやからな！

70：66＜マジレスもやめてさしあげて！w

78：主人公くんは1失点しているのに対してラスボスはパーフェ  
クトペースやもんなあ…

82：78＜いつものことやんか

88：82＜ラスボスの高校野球完全試合数はこの先絶対に超えら  
れないやろうなwww

93：ラスボスって何回完全試合やつとんの？

96：93＜二桁…とだけ言っておく

100：96<おかしなことやっとなる

104：メジャーで完全試合を何回やるか楽しみやで！

107：そういえばメジャーのトライアウトのことなんやけどな

111：107<どうしたんや？

119：メジャーのトライアウトってプロアマ問わずに参加出来るから

ラスボスがプロ志望届を出す必要ってないんやないか？

123：119<あっ…（察し

127：119<確かにその通りや！誰やねん！ラスボスを裏切り者呼びし始めたやつは！

131：ドラフト新ルールってまったく意味ないやん

137：131<ちよつと調べたら社会人野球の選手には意味があるみたいやぞ

143：137<社会人選手完全なとぼっちりやんかwww

151：まあどうなるにしろ、ワイらはラスボスを応援し続けるだけや！

## 第274話

春季東京大会の決勝戦である青道高校と稲城実業の試合も7回の表まで進んだ。

1点差を追い掛ける稲城実業打線も三巡目となるが、パウプロ攻略の気配は感じられない。

稲城実業の先頭打者であるカルロスはなんとか出塁しようとして試みてセーフテイの構えを見せるが、青道バッテリーも内野陣も揺らがない。

青道高校には倉持というカルロスと同等以上の足を持つ選手がいる。

なので練習で何度も経験して足の速い選手への対応に慣れているのだ。

(…ちっ！)

内心で舌打ちをすると、カルロスはタイムを要求して打席を外す。(パウプロとの対戦は、いつも1塁が遠く感じる…)

己の足に自信を持つカルロスも、この日ばかりは自信を失いかけていた。

(くそっ！どうすれば塁に出れる?)

1塁まで行けばパウプロと御幸のコンビが相手でも2塁を盗んでみせる。

そう思うカルロスだが、1塁が遙か遠くに感じる。

素振りをしながらカルロスは倉持に目を向けた。

(なんでお前は鳴から出塁出来た？お前と俺の何が違う!?)

倉持は日頃からパウプロや降谷に沢村といった高校野球界でもトップクラスの好投手を相手に練習を重ねているのに対して、カルロスはマシンバッティングが中心である。

これは両校の監督の練習方針の違いもあるが、選手層の厚さの違いもあるだろう。

エース級の投手が成宮一人の稲城実業。

対してパウプロがいなければエースと呼ばれてもおかしくない実



力を持つ沢村、降谷、東条を有する青道高校。

勿論、青道高校もマシンでバッティング練習をするが、色々なタイプの投手を相手にバッティング練習を出来る青道高校と比べれば、練習での経験に差が出来るのは当然の結果だ。

(何かねえのか?!)

右打席に戻ろうとするカルロスの目に、ふと左打席が映る。

カルロスは右打者である。

遊びで左打席に立った事はあるが、練習や試合で左打席に立った事は一度もない。

更に試合終盤の7回に初めての左打席に立つのはあまりにもリスクが大きい。

しかし…。

(…このままじゃ、結果は変わらねえ！)

カルロスは試合で初めて左打席に立った。

このカルロスの行動にキャッチャーボックスに座る御幸はチラリと目を向ける。

一般的に左投手と左打者では、左投手が有利と言われている。

これはリリースポイントの見えにくさやボールの角度のせいだ。

そのため倉持の様なスイッチヒッターは左投手と対する場合、右打席に立つのが一般的である。

そのセオリーに反するカルロスの行動に御幸は思考を巡らせる。

メジャーのスイッチヒッターは特定の投手と対戦する時に、セオリーを無視して打席に立つ事がある。

そうしなければ、まともにバッティング出来ないからだ。

御幸はパウプロをスイッチヒッターがセオリーを無視して打席に立つ程のボールを投げる投手だと思っている。

しかし、カルロスはスイッチヒッターではなく右打者だ。

(単純に考えれば少しでも一塁に近付いて内野安打、もしくはセーフティ狙いなんだけどな…。)

現在のイニングやカウントを踏まえ、御幸はリードを考え直す。

(カウントはノーボール、ワンストライク。とりあえず、カルロスの目

を慣れさせない為に遊び球はいらないっど。）

御幸のサインに頷いてパウプロが投球モーション入る。

パウプロが投げ込んだのはフロントドアとなるカーブ。

試合で初めて左打席に立ったカルロスは、パウプロが投げ込んだボールが身体に当たると判断して歯を食い縛った。

しかし…。

「ストライクツー！」

ボールはカルロスの身体に当たらずにストライクゾーンへと変化した。

これまで散々打てなかったパウプロのボールが、慣れない左打席に立って1球で見慣れるわけがない。

手も足も出ない現状に、カルロスは悔しさと身体を震わせた。

今の1球でカルロスに集中力がなくなったのを感じ取った御幸は、パウプロに遊び球無しで高速スライダーを要求する。

サインに頷いたパウプロが投球モーションに入るが、カルロスは集中しきれていないままだ。

だが、勝負というのは何が起こるのかわからないものだ。

初めての左打席で慣れないスイング。

振り遅れて更にバットのヘッドが下がってしまうと、いいところのないスイングだ。

しかし…！

ガキッ！

それが上手くはまり、カルロスのバットはパウプロの高速スライダーに当たった。

手に打感を感じた瞬間、カルロスは反射的に1塁に駆け出す。

「サードー！」

「シューー！」

御幸のコーチングがグラウンドに響く中で、青道高校の三塁手である樋笠が猛チャージを掛ける。

振り遅れて差し込まれ、更にバットのヘッドが下がってボールの勢いに負けたカルロスの打球は、理想的なセーフティバントに近い打球

になっていた。

しかし、樋笠も青道高校のレギュラーの座を勝ち取った選手である。

樋笠はボールを素手で掴むと、メジャーの選手のように身体を起こさずの下から送球した。

だが、不安定な握りと体勢から投げられた樋笠の送球はシンカーの様な変化をしてショートバウンドとなる。

そのショートバウンドを青道高校の一塁手である前園が掬い上げるのと同時に、カルロスが一塁を駆け抜けた。

塁審の判定は…。

衆人の注目が集まる中で塁審の拳が握られ始めるのを見たカルロスが天を仰ぐ。

しかし…。

「…っ!?セーフ!セーフ!」

アウトの判定が出掛けていたのに一転してセーフ。

驚いて目を見開くカルロスは、グラウンドを転がる白球を見付けた。

そう…前園はショートバウンドの送球を捕球しきれなかったのだ。

スコアボードにEのランプが灯る。

決して綺麗な形ではないが、カルロスは間違いなくパワプロから出塁した。

その事実を認識したカルロスは、両拳を突き上げて雄叫びを上げたのだった。

## 第275話

春季東京大会の決勝戦である青道高校と稲城実業の試合の7回の表、稲城実業はついにランナーを出すことに成功した。

しかも出塁したランナーは稲城実業で一番の快速を誇るカルロスとあつて、球場に駆け付けた稲城実業を応援する者達のボルテージは最高潮だ。

現在は7回の表、ノーアウト、ランナー1塁で1-0で青道高校がリードという状況。

もしかしたら稲城実業が同点に追い付くかもしれない。

稲城実業を応援する者達は力を送ろうと必死に声を張り上げた。

カルロスも2塁を盗もうと集中力を高める。

しかし高校野球界でもトツプクラスの牽制技術とクイックモーションの技術を持つパウプロに、カルロスはスタートのタイミングを掴めない。

御幸がカルロスの盗塁を警戒したのもあつてカウントはワンボール、ワンストライク。

ここで国友はカルロスの盗塁を諦め、白河に送りバントのサインを出した。

塁上のカルロスは一瞬不満そうな表情をしたが、直ぐに気持ちをきりかえる。

パウプロ相手に連打は望めない。

故にワンヒットで得点が望める得点圏にランナーを進めるのは最優先事項なのだ。

稲城実業で最も小技が上手い白河がバントの構えを見せる。

御幸はチラリと白河に目を向けた。

(バスターは…ないな。じゃあ、ワンアウト貫つとくか。)

サインに頷いたパウプロがクイックモーションに入る。

ハッキリと聞こえる回転音と共にパウプロのフォーシームが投げ込まれると、白河は辛うじてボールを転がした。

反応よくパウプロがボールに詰め寄る。

「1つ！」

御幸のコーチングでパウプロは一塁に送球する。

これで状況はワンアウト、ランナー2塁。

ワンヒットで得点が望める状況だ。

稲城実業を応援する者達がこの日一番の声を張り上げて応援する。

パウプロが公式戦でランナーを出したのは久しぶりだ。

だから稲城実業を応援している者達は忘れているのだろう。

パウプロはピンチの場면을笑顔で楽しむ男だという事を…。



カルロスが送りバントで2塁に進むと、御幸は主審にタイムを要求してマウンドに内野陣を集めた。

「パウプロ、すまん。」

「シュー…。」

前園と樋笠が謝罪するが、パウプロは特に気にした様子はない。た。

「二也、これはどっちの奢りになるのかな？」

「二人でいいんじゃない？」

お小遣いが少ない高校生にとって不穏な会話が行われると、前園と樋笠に焦りの色が浮かぶ。

「ピヤハッ！俺はハーゲ○ダッツな！」

「先輩方、ご馳走様です。」

倉持の要求に春市がちやっかり便乗すると、前園と樋笠はついに慌てた。

「そこはせめてガリ○リ君にせえへんか？今月ちよつとピンチやねん！」

「シユシユシューー！」

前園と樋笠の異議申し立てに、パウプロ達は耳を貸さない。

「それじゃ、このピンチの場面を楽しんでいこう！」

「「おうー」「」

「俺の財布もピンチやねんて！」

「シュー！」

前園と樋笠が悲哀を背負いながら守備位置に戻ると、パワープロはマウンドで笑みを深めたのだった。



7回の表、稲城実業はワンアウト、ランナー2塁のチャンスパワープロに連続三振で抑えられてしまう。

千載一遇のチャンスを逃してしまった稲城実業にパワープロを攻略する力は残されておらず、稲城実業は0-1で敗れてしまったのだった。

## 第276話

春季東京大会を優勝した青道高校は、意気揚々と春季関東大会に挑む。

春季関東大会では沢村、東条、降谷といった次世代のエース候補達が躍動し、経験を積んで成長していく姿に片岡と落合は揃って満足そうに頷く。

「この勢いなら春季関東大会では葉輪を温存出来そうですね。本人は投げたがっていますが。」

「夏の大会ではどうしても葉輪に頼らなくてはならない場面が増えるでしょう。今は少しでも肩肘を休ませるべきです。」

「葉輪を使わない事に周囲が騒ぎそうですが、それも仕方ないですね。」

片岡と落合の会話の通りに、パワプロは春季関東大会では野手として出場していった。

本職は投手でありながら、御幸と肩を並べて大会本塁打王を争うその姿は正に怪物と呼べるものだ。

関東の強豪校を相手に勝ち進んだ青道高校は、決勝戦の舞台に駒を進めたのだった。



「栄純！後2人よ！」

スタンドから聞こえてくる若菜の声に、マウンドの沢村は大きく息を吐く。

「ピヤハッ！ビビッてんじゃねえぞ、沢村あ！」

「栄純くん！後少しだよ！」

「沢村！踏ん張れや！」

「シュー！」

内野陣の檄に沢村の鼓動が高まる。

状況は9回の裏で5-0の青道高校リードでワンアウト、ランナー

1塁。

そしてここまでの相手チームのヒット数は0。

そう、沢村は二度目のノーヒットノーランを目の前にしているのだ。

鼓動はうるさい程に高鳴っている。

だが、マウンドの沢村は笑顔だ。

1塁ランナーをキツと睨んだ沢村がクイックモーションでボールを投げ込む。

相手右打者の膝近くに切れ込む様なカットボールは見逃される。

「…ボール！」

主審の判定はボールで、カウントがワンボールになる。

(…流石に見せ過ぎたか。)

この試合、御幸は沢村に右打者のインコースにカットボールを、左打者のインコースにツーシームを投げさせて、相手打者をテンポ良く打ち取ってきた。

沢村の最大の特徴であるボールの出所の見えにくさで反応を遅らせ、打者の手で動くムービング系のボールで打ち取る。

これがツボにはまり、ここまでノーヒットピッチングを続けてきたのだ。

しかし相手も春季関東大会に出場してくる強豪校である。

7回辺りから際どいコースのムービング系のボールは見送る様になっっていた。

(沢村はコントロールはいい方だけど、パワプロみたいにストライクゾーンとボールゾーンの出し入れを自在に出来る程じゃない。さて…どうすっかな?)

チラリと相手打者を盗み見た御幸が沢村にサインを出す。

頷いた沢村はキツと1塁ランナーを睨んでからクイックモーションに入る。

2球目、御幸が要求したのはアウトローへのフォーシーム。

相手打者はフォーシームを見逃す。

判定は…?



「ストライク！」

これでカウントはワンボール、ワンストライク。

ボールを見逃した相手打者は悔しそうに口を引き結ぶ。

（ツーシームが頭にあつたな？このまま力押しで抑えられればいいんだが…。）

3球目、沢村が投球モーションに入ると、相手打者はバントの構えを見せた。

沢村は反射的にバントされれない様にとボールを地面に叩き付ける様にワンバウンドさせた。

「沢村！気にするな！バッター勝負！」

御幸の声に頷いた沢村はタイムを要求してロージンバグを手にする。

（得点圏にランナーを背負いたくなかったのか？）

御幸は沢村を観察しながら思考を巡らせる。

投手としての経験をかなり積んだ沢村はセットポジションからの投球をそつなくこなせる様になったが、フィールディングに関してはまだまだ成長途上である。

更にノーヒットノーランという記録が目の前に迫っているという状況も重なって、相手打者のバントの構えに過剰反応をしたのだ。

この沢村の様子に気付いた相手チームの監督が打者にサインを出す。

最初からバントの構えを見せる相手打者に、沢村はマウンドの上で大きく深呼吸を始めた。

（つたくあいつは…。）

明確に反応を見せてしまう沢村に御幸は頭を抱えたい思いにかられるが、気取られぬ様に小さく息を吐くと、ど真ん中にミットを構える。

一瞬ギョツと驚きの表情を浮かべた沢村だが、直ぐに歯を見せる笑顔になったのだった。

## 第277話

「栄純、昨日は残念だったわね。」

「わあああああ！言うな、若菜あああああ！」

「傷心真つ直中の昨日言わなかっただけありがたく思いなさい。」

沢村が恋人の蒼月にいじられている。

昨日、俺達青道高校野球部は春季関東大会に優勝したんだけど、その春季関東大会の決勝戦で先発をした沢村が後一人というところで、インハイの甘い所に投げてしまった失投をホームランにされてノーヒットノーランを逃したんだよね。

たった1球の失投でノーヒットノーランどころか完封も逃してしまった沢村は完全に緊張感が切れてしまったのか、その次の打者からストライクを1つも取れずに歩かせちゃってお役御免。

そして春季関東大会の優勝を決めたマウンドにはノリがいたというのが昨日の出来事だ。

「一也、沢村が失投した原因って何なの？」

「力んだんだとさ。つたく、俺達が引退した後が心配になる結果だねえ。」

今年高校三年生の俺達は次の夏の大会が最後の大会になる。

去年同様にU-18のメンバーに選ばれたり、もしくは国体に参加したりするかもしれないけどね。

「俺達が引退した後かあ…。なあ一也、お前は誰がエースになると思う？」

「難しい質問だなあ…。」

俺の質問に一也が苦笑いをしていると、沢村と蒼月のやり取りを野次馬していた小野が俺達の所にやって来た。

「何を話してるんだ？」

「次世代のエースが誰かってな。そうだ、小野はどう思う？」

答えに悩んでいた一也が小野にバトンタッチした。

そのバトンタッチの淀みなさは見事だねえ。

「うくん…個人的には良くボールを受けてる東条か沢村になってもら

「いたいが…。」

頭を掻きながら小野が悩んでいると、現二年生捕手の狩場、そして現一年生捕手の奥村と由井 薫（ゆい かおる）が俺達の所にやって来た。

「パワプロ先輩、何を話してるんですか？」

「俺達が引退した後のエースは誰かって話してるんだよ。」

捕手であるからか、狩場達も興味を持って話に加わってきた。

「沢村さんは全国制覇を狙うなら必要な選手だと思います。昨日も後一步でノーヒットノーランでした。」

そう話すのは由井だ。

由井は小柄な体格なんだけど、それに反してパワーヒッターみたいなんだよね。

貴子ちゃんから聞いたんだけど、リトルやシニアでも活躍して同世代なら知らない奴がないぐらい有名な選手らしい。

そんな由井は二軍で身体作りの真っ最中だ。

「俺は降谷さんを推します。力勝負で流れを引き寄せられるのは大きいですから。」

降谷をエースに推したのは奥村だ。

奥村も現在は二軍で身体作りをしている最中。

由井と奥村は秋以降の飛躍に期待だな。

「俺は東条ですね。東条には沢村や降谷以上の安定感があります。」

東条をエースに推したのは現在次世代の正捕手候補筆頭の狩場だ。

狩場はバッティングに物足りないところがあるけど、後輩捕手達の中では一番キャッチングが上手い。

沢村の癖球や降谷の速球もしっかりと捕れるから、扇の要を任せるには十分な選手だ。

「パワプロはどう思うんだ？」

一也が唐突に俺に話を振ってくる。

うーん…。

「そもそも、エースの定義って何だろ？」

俺がそう言うと、皆はそれぞれのエース像を口にしていく。

チームを勝たせる投手、負けない投手と意見が違っている。  
なんか話が纏まりそうにないなあ。

じゃあ…。

「皆の理想のエースって誰？」

俺がそう言うと、皆は一斉に俺に目を向けてきたのだった。

## 第278話

春季関東大会から十日後、青道高校野球部では数日に渡って紅白戦が行われる事になった。

これは夏の合宿前に暫定的に1軍メンバーを選出する為のものらしい。

夏の合宿での1軍メンバーの人数は40人。

そこから合宿後に半分の20人に篩い落とされて夏の高校野球選手権大会のメンバーが決まる。

青道高校野球部の皆、特に三年生達は最後の大会のメンバーになれる可能性があるとおあってか気合いが凄い。

ただ、この紅白戦が行われる前に俺は夏の合宿の1軍メンバーに当確してしまっているんだよね。

うくん：競い合いたかったなあ。

一也は小野や狩場と競い合うからなのか、笑顔で楽しそうに紅白戦の準備をしている。

羨ましい。

「パワプロ先輩！今度こそエースナンバーを貰いますよ！」

沢村、俺も紅白戦で競い合いたいんだけどね。

残念ながら夏の合宿まで持ち越しなんだ。

そんな感じで夏の合宿の1軍メンバーの座を賭けた紅白戦が始まった。

ちなみに当確している俺は選手として参加せずにお手伝いである。残念。



紅白戦は怪我人も出ずに無事に終了した。

片岡さん、落合さん、礼ちゃん、太田部長が協議してメンバーを選抜するから、夏の合宿の1軍メンバーの発表は後日になるそうだ。

さて、連日の紅白戦の疲労を抜く為に今日の練習は休みだ。

しかも学校も休みなので完全休日である。  
という事で…。

「お待たせ、フーくん。」

貴子ちゃんとデートだぜ！

自然に腕を組んできた貴子ちゃんと一緒に、街中に向かって歩きだす。

デートコースはいつもと同じで代わり映えはしないけど、それでも貴子ちゃんは楽しそうに笑顔でいてくれるのが助かるな。

俺はまだ学生だから交際費の捻出も大変なのだ。

貴子ちゃんとのデートの時間はあつという間に過ぎて時刻は昼。

俺と貴子ちゃんは昼食の為にレストランに入る。

「すみません、ちよつとお聞きしたいんですが。」

レストランに入ると貴子ちゃんが店員に色々質問をしている。

俺の身体作りの為に栄養バランスなんかを考えてくれているのだ。

「ではこれとこれと…。」

質問を終えた貴子ちゃんが俺の分も料理を注文していく。

俺はもう慣れていている光景だけど、周りにはどう映るんだろうな？

「フーくん、ベックから連絡きた？」

「細かい事はまだ決まってるけど、1月の終わり頃だつてさ。」

実は勘違いしていたんだけど、メジャーのトライアウトを受けるのにプロ志望届を出す必要はないそうだ。

メジャーのトライアウトはプロアマ関係なく受ける事が出来るみたいなんだよね。

ただ、メジャーのトライアウトを受けるには個人証明の為に必要なものをメジャー側に提出する必要があるけど、それはもうベックが向こうに持っていつてくれたから問題ない。

そんな感じで料理が来るまで貴子ちゃんと話をしていると、レストランに一組のカップルが入ってくる。

その一組のカップルは一也と夏川だった。

俺と貴子ちゃんは一也達と一緒に昼食をする為に店員さんに一言伝えてから席を移る。

「藤原先輩、この料理なんですけど…。」

現在鋭意勉強中の夏川は、一也が食べる料理について貴子ちゃんに色々と質問をしている。

貴子ちゃんはそんな夏川に笑顔で答えている。

そして俺と一也はというと…。

「パワプロ、ベックからトライアウトの事は聞いたか？」

「一也と夏川がくる前に、貴子ちゃんとその事で話してたよ。」

来年受けるメジャーのトライアウトについて話をしていた。

俺も一也もやるべき事はやっているので夏の大会を前に不安は残していない。

唯一不安があるとすれば怪我をしないかどうかだ。

なので俺と一也はメジャーの事について話をしていく。

「パワプロ、トライアウトに合格したら先ずはルーキーリーグからみたいだぜ。」

「合格した後の事を話すって、ベックも気が早いなあ。」

「それだけ期待してるって事だろ？なら、応えなくちやな。」

あれこれ話をしていると注文した料理が来たので俺と一也は食べ始める。

「食事にも色々とか気をつけないといけないとはわかっていましたけど、スポーツ選手って大変ですね。」

「体重制限がない競技なだけまだマシなのよ、唯ちゃん。」

貴子ちゃんと夏川の会話をBGMに、俺と一也は料理を平らげているのだった。

## 第279話★

青道高校野球部の監督室にて行われている夏の合宿1軍メンバー選抜は難航していた。

「夏の大会には三連覇も掛かっていますし、ここは無難にいった方が…。」

そう口にするのは部長である太田だ。

「太田部長のご意見も理解出来ませんが、それでは現3年生が引退した後が難しくなります。」

「高島先生…それはわかりますが…。」

青道高校野球部の指導者を悩ませるのは世代交代である。

現3年生はパウプロを中心とした世代で、野球雑誌に個人で取り上げられる程の優秀な選手が数多く揃っている。

だが、それが指導者達の決断を難しくしていた。

野球に限らずチームスポーツで難しい事の一つが世代交代だ。

これに失敗するとそれまで常に優勝争いをしてきたチームが、突然最下位争いをする弱小チームに変わってしまう事も珍しくないのだ。

「…由井と結城を夏の合宿1軍メンバーに加えます。」

「か、片岡監督!?!」

太田部長が驚きの声を上げるが、落合と高島は理解を示した。

「賛成ですな。由井は打てるキャッチャーです。これまでは追う立場だった狩場に追われる立場になると自覚させるにはちよūdい。結城は…可能性を狭めたくないと色々と手を出していますが、指導者としては先ばかりではなく今も見詰められる様になってもらいたい。ここいらで1軍メンバーの練習を経験させてみる方がいいでしょう。」

落合の言に片岡と高島は頷くが、太田はひきつった笑みをしながら胃を押さえたのだった。





【怪物】 パワプロを応援するスレ2777 【ラスボス】

1: このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

75: 完全試合出来ないとかwwwパワプロも衰えたなwww

78: まだアンチが沸いとるんか

82: 78< 久しぶりの燃料やったからしやあないやろ

87: ノーノーでも十分過ぎる記録なんやけど、

ラスボスは息をする様に完全試合やったからなw

91: ラスボスはワイらの常識を完全粉碎しよつたでwww

96: ラスボスも夏の大会で高校野球を卒業なんよなあ…

103: 高校球児一同「やっと普通の野球が出来る」

105: プロ選手一同「こっちくんな」

109: 早くラスボスがメジャーで無双する姿を見たいわあ

115: ラスボスが高校野球引退したら誰が常勝青道のエースになるんやろ?!

123: 115< サツワやろ。春季関東大会でノーノーまで後一人までいったし

1 2 8 : ワイは降谷を推すで！あの豪速球こそラスボスの後継者に  
相応しいんや！

1 3 4 : 玄人なら間違いなく東条を推す筈や！安定感抜群やもん！

1 4 1 : サツワも降谷も東条も皆ワイの鼻肩に欲しいで…投手陣崩  
壊しとるんや…

1 5 3 : 川上もラスボスと同世代じゃなきやエースやったのに運が  
ないな

1 6 4 : 1 5 3 < むしろ運がないのは主人公くんやないか？

1 6 9 : 1 6 4 < 主人公くんには試練が必要やから…必要やから！

1 7 5 : ワイが同世代でラスボスと試合したら

間違いなく試合後にサイン貰いにいったんやが

1 8 2 : 1 7 5 < オークションに出す気満々やないかい！www

2 1 1 : そういえば例のパワプロルールが正式に施行されたな

2 1 6 : 2 1 1 < しかも今年から適用やろ？ほんま何を考えてんね  
ん！

2 2 2 : ラスボスがメジャーで有名になったら向こうのマスコミ  
が、

日本の連中を笑う姿が目浮かぶわあ…

## 第280話

今年の夏合宿が始まった。

暫定1軍メンバーに選ばれた1年生は由井と哲さんの弟くんだ。

由井と哲さんの弟くんは息も絶え絶えながら、なんとか合宿練習に食らい付いてきている。

二日目、三日目と日が経つにつれて二人の動きは鈍っていくけど、それでも目から闘志が消える事はなかった。

そうして合宿の日程も過ぎていくと、例年通りの練習試合の日がやってきたのだった。



今年の夏合宿の練習試合の相手はかなり豪華だ。

北海道からは巨摩大藤巻高校、大阪からは大阪桐生高校等の全国でも有数の強豪校がやってくるからだ。

ダブルヘッダーで行われる今日の午前中の相手は巨摩大藤巻高校。残念ながら今日の練習試合に俺が出る予定はないんだけどね。

そういうわけでグラウンドの準備を手伝っていると、巨摩大藤巻高校のエースである本郷が俺の所にやってきた。

「葉輪さん、今日はよろしくお願いします。」

「あゝ…悪いけど、今日の練習試合は出る予定はないんだよね。」

困った様に頬を掻きながら頭を下げる本郷にそう言うと、本郷は真剣な表情で顔を上げた。

「なら、引き摺りだします。」

「おう！頼むぜ！」

俺が親指を立ててそう言うと、本郷は不敵な笑みを浮かべて巨摩大藤巻高校のメンバーの所に戻っていった。

「本郷も随分と貫禄がついたな。」

本郷が去った代わりに一也が俺の所にやってくる。

「パワプロ、知ってるか？俺達の次の世代ナンバーワンは本郷だって

言われてるのを？」

「そうなの？」

『月刊野球王国』の大和田さんから聞いた話だけだな。」

合宿が終わった後に峰さんと大和田さんが青道高校野球部に取材に来る予定なんだけど、去年の秋季大会の時に取材に来た大和田さんは一也と夏川が付き合っていると聞いて崩れ落ちていた。

峰さん曰く、大和田さんは眼鏡男子鼻っぺらしい。

大和田さん、ご愁傷様。

「さて、それじゃのんびりと見学しますか。」

「本郷にはああ言ったけど、出番がこないといいねえ。」

昨日最高球速を成長させたばかりだから、身体が筋肉痛になってるんだよね。

明日には筋肉痛は治ると思うけど、大阪桐生との練習試合中に新しい感覚に慣らさないとな。

俺と一也が見学する中で、巨摩大藤巻との練習試合が始まったのだった。



巨摩大藤巻高校のエースである本郷は、青道高校の先発としてマウンドに上がった降谷を睨むように見ている。

降谷と本郷は同郷なのだが、その降谷が東京に行った事を本郷はよく思っていないのだ。

「降谷：お前にだけは絶対に負けない！」

本郷はパワプロを引き摺り出す事とは別に、決意を胸に練習試合に挑むのだった。



巨摩大藤巻高校との練習試合、青道高校は合宿での疲労で動きが鈍い事に加え、ベストメンバーでない事が合わさって序盤の流れを巨摩

大藤巻高校に握られてしまう。

それでも青道高校の先発としてマウンドに上がった降谷は粘り強く投げるが、予定していた投球回である6回が終わった時には、巨摩大藤巻打線に4点を奪われていた。

降谷の後を継いでマウンドに上がった川上が巨摩大藤巻打線をしっかりと抑えるが、後一步が届かず3―4で青道は敗れてしまったのであった。

## 第281話

夏合宿の練習試合で青道高校は巨摩大藤巻高校に敗れた。

青道高校が敗れたのは2年前の秋以来とあって、少なからぬ動揺が広がった。

その動揺が影響したのか、午後に行われた2試合目の練習試合でも青道高校は敗れてしまった。

先発した沢村が疲労により本調子でなかった事もあるが、それ以上にチーム全体の動きに精彩を欠いていたのが原因だろう。

連敗をした青道メンバーの雰囲気は決してよくない。

しかし、そんな状況を見ても落合は…。

『負けたら終わりの公式戦で負けるよりは、ここで負けを経験出来てよかった。』

と、前向きに捉えていた。

片岡も勝ちに慣れすぎていた青道メンバーに檄を飛ばす。

檄を受けた青道メンバーは悔しさに拳を握り締めながらも、前を向いて返事をしたのだった。



ダブルヘッダーの練習試合で連敗をした青道高校は、翌日の大阪桐生高校との練習試合で合宿の疲労を感じさせないプレーをみせていった。

館の後を継いだ大阪桐生高校のエースも疲労で本調子ではなかったのだが、それ以上に青道メンバーの勝利への貪欲さを感じさせる果敢な攻めは、老獪な松本も称賛の言葉を送る程だった。

しかし、この練習試合で松本が最も驚いたのは青道メンバーの勝利への貪欲さではない。

松本が最も驚いたのは…：パワプロが投げ込んだある1球なのだった。

◆ 「やれやれ…生きている内にこの目で拝めるとは思わなかったで…。」  
松本の手にはスコアラーから渡されたスピードガンが握られている。

そのスピードガンには…160kmが表示されていた。

「時代が変わった…いや、葉輪くんが時代を変えたんやなあ…。」

そう言っつて松本がスピードガンからマウンドに目を移すと、そこには笑顔でボールを投げ込んでいるパウプロの姿があった。

「敵チームのエースやのに、ピッチングを見るのが楽しいやなんてシャレにならないで…。」

苦笑いしながら頬を掻いた松本は、パウプロのピッチングに圧倒されて押し黙ってしまった大阪桐生メンバーに檄を飛ばすのだった。

◆ 練習試合終了後、松本は片岡の元に足を運んだ。

「片岡はん、よう葉輪くんを育てましたなあ。」

そう言っつて手を差し出す松本と握手をしながら、片岡は首を横に振る。

「私は何もしていません。私に出来たのは、葉輪が怪我をしない様に注意していた事だけです。」

「その怪我をさせへんちゅうのが一番難しいんや。どんだけ注意しようとも、レギュラーになろうと隠れて無理をする子もおるからな。胸を張っていいで、片岡はん。」

片岡は松本の言葉に頭を下げる。

「ありがとうございます、松本監督。ですが、私一人の力ではありません。落合コーチ、太田先生、高島先生にご助力いただいで事です。そしてなによりも、選手一人一人が自覚して練習に取り組んでいったからなし得た事です。」

「相変わらず、片岡はんは謙虚やなあ。」

微笑んだ松本はもう一度握手を求めろ。

「今日はええものを見せてもらいました。この礼は甲子園で返させてもらいますわ。」

「ええ、望むところですよ。」

固く握手を交わした二人は、それぞれ選手達の元に歩き始めたのだった。



## 第282話☆

俺が幼少時に片岡さんに憧れて入学した青道高校。その青道高校での最後の夏が始まった。

俺は大会の開会式で整列する中で能力を確認する。

基礎能力

最高球速：160km（※160km）

制球：S

スタミナ：S

変化球：カーブ7（※7）

変化球2：チェンジアップ7（※7）

変化球3：高速スライダー7（※7）

変化球4：高速縦スライダー6（※7）

夏合宿中に球速も現状での限界まで成長させる事が出来ただけど、高速縦スライダーを7にするには変化球ポイントがまったく足りなかつた。

これ以上の変化球の成長はアメリカに持ち越しだな。次に野手能力を確認する。

基礎能力2

弾道：4

ミート：S

パワー：A

走力：S

肩力：S

守備：S

捕球：S

野手能力はパワーを成長させれば完璧だったんだけど、球速の成長

を優先した結果ポイントが足りなかったんだよね。  
俺はピッチャーだから優先させるのは投手能力だ。  
特殊能力も新たに取得したものはないけど確認しておこう。

#### 特殊能力

『鉄人』

『鉄腕』

『身長高い』

『リリース○』

『怪物』

『バント◎』

『驚異のキレ』

『クイック◎』

『牽制◎』

『尻上がり』

『打球反応◎』

『サブポジ：外◎』

『盗塁◎』

『パワーヒッター』

『広角打法』

特殊能力の確認が終わると、ちょうど白州が選手宣誓をするところだった。

さあ、高校野球最後の夏の大会だ！

思いつき楽しんでいくぜ！



夏の高校野球選手権西東京地区大会、シードの青道高校は第2回戦からのスタートで、相手は仙泉学園となった。

仙泉学園はエースの真木を先発に、青道高校は東条を先発に試合が

始まった。

序盤は両校共にランナーを出すも無得点で終わったが、折り返しとなる5回に試合は動きだす。

5回の表の先頭打者である倉持がツーベースヒットで出塁すると、春市がタイムリーヒット、パウプロがタイムリーツーベースヒットで2得点を奪った。

さらに御幸がツーランホームランを放って完全に流れを掴んだ青道は、5回の表だけで7得点の猛攻をみせた。

仙泉学園も反撃をしたが流れを取り戻せず、青道高校は9―3で勝利した。

第3回戦、青道高校は成孔学園との試合の先発マウンドに沢村を送り出した。

成孔学園の先発はエースの小川。

次世代の西東京地区左腕ナンバーワン候補の対決とあって、球場には多くの観客が駆けつける。

しかし、試合が終わると両者の評価は大きく明暗がわかれた。

9回6失点の小川と二度目のノーヒットノーランを達成した沢村。

次世代の西東京地区左腕ナンバーワンの座は沢村に決した。

夏の高校野球選手権西東京地区大会の準々決勝まで勝ち進んだ青道高校は、全国でもトップクラスのスラッガーと呼ばれる轟 雷市がいる薬師高校との試合に挑む。



「雷市く、準備出来てるかあ?」

「シー」

バナナを頬張りながら雷蔵に返事をする雷市の目は、パウプロに注がれていた。

「あの怪物くん、噂じゃあ160kmを投げる様になったそうだ。」

雷蔵の言葉に薬師高校のメンバー全員が驚いて目を見開き、パウプロを注視する。

(うちの雷市もだいたい成長したもんだが、あの怪物くんの成長はそれ以上だからなあ…。)

ガシガシと頭を掻いた雷蔵は、柏手を打って注目を集める。

「正直に言って作戦の立てようがねえ。だから、俺が言える事はたった1つだ！てめえら！怪物くんと勝負を思いつきり楽しんできやがれ！」

「「おお!!」「」

気合い十分に返事をした薬師高校のメンバーは、笑顔でグラウンドに駆け出したのだった。

## 第283話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の準々決勝、青道高校と薬師高校の試合が始まった。

1回の表の攻撃で青道高校は、パウプロと御幸のタイムリーヒットで3点を奪う。

パウプロが先発をする試合で3点差。

薬師高校を応援する為に球場に駆けつけた観客には半ば諦めの様な雰囲気漂う。

しかし、薬師高校のメンバー達は違った。

一人一人が実に楽しそうに打席に立っていく。

その選手達の姿に薬師高校を応援する者達は息を吹き返した。

まだ行ける！選手達は諦めていない！

薬師高校を応援する者達は選手達に力を送ろうと声を張り上げた。

しかし、そんな応援する者達の希望をパウプロが力付くで振じ伏せていくのだった。



4回の表の攻撃が終わって防具をつけている時、御幸は薬師高校メンバーの様子に違和感を感じていた。

(薬師の連中…なあんか違うんだよな。)

薬師高校の野球は文字通りに『打って勝つ』である。

その為、非常に攻撃に特化したチームなのは周知の事実なのだが、選手一人一人が考えて動くからなのかチームにはこれといった形がない。

唯一形があるとすれば、4番の雷市がチームの精神的支柱といったところだろう。

それ故に雷市に繋ぐようにする傾向が時折見受けられるのだが、この試合ではそういった打順の流れの様なものは一切無いのだ。

(緊張感が無い？試合中だぞ。いや、待てよ…。)

スコアボードに刻まれる数字を一切気にしない薬師高校メンバーの姿に、御幸は推測を立てた。

(試合の勝ち負けを気にしていないのか?だとすれば…。)

御幸は薬師高校のベンチにチラリと目を向ける。

そこにはどっぴかりとベンチに腰を据えている轟 雷蔵の姿があった。

(随分と思いきったもんだ。これは秋の大会では苦勞するだろうな。まあ、後輩達の頑張りに期待するとしますかね。)



(ちっ、ばれたか。可愛い気のねえガキだ。)

無精髭を擦りながら雷蔵は舌打ちをする。

(世間じゃあ最後まで諦めの悪い連中が称賛されるが、勝負の世界に生きる者にとっちゃあどんだけ頑張ろうが負けは負けだ。負けに意味があるとすりや、次の勝ちに繋がられるかどうかだろうよ。)

一口水を飲んだ雷蔵は、頭上に響き渡る声援にため息を吐く。

(全力でプレーしろ?諦めなきや勝てる?そういう時もあるだろうよ。だがな、どうにもならねえ事だつてあんだよ。高校生のガキ共がああ怪物くんに勝つとかな。)

帽子をとって頭をガシガシと搔いた雷蔵は、マウンドのpapプロに目を向ける。

「あの怪物くんはうちの雷市でも歯がたたねえんだ。点の取りようがねえだろ。宝くじの様な確率に期待してバットを振り回せてるか?そんな事するぐれえなら、うちのガキ共を上レベルを体験させて次の大会の糧にする方がよっぽどマシだぜ。」

雷蔵が呟き終わると球場にざわめきが広がる。

何事かと雷蔵が周囲を確認すると、電光掲示板に注目が集まっているのがわかった。

雷蔵も電光掲示板に目を向けると、そこには160kmの数字が刻まれている。

球場に大歓声が響き渡った。  
大歓声が響き渡る中、雷蔵は苦笑いをしながら脱帽をしたのだっ  
た。

## 第284話★

青道高校と薬師高校の試合でパウプロが高校野球公式戦で初となる160kmの速球を投げると、球場は驚きのあまりざわめきの1つも無くなってしまうた。

『皆さん電光掲示板をご覧ください！なんと！なんと葉輪選手が160kmを投げました！』

『スピードガンの故障ですかねえ…？』

スタンドにいる観客の一人が何かをポツリと呟くと、その呟きは徐々に広がっていきざわめきへと変わる。

そしてざわめきの中から一人が歓声を上げると、球場は割れんばかりの大歓声に包まれた。

『日本の高校野球史上初となる160kmです！この偉業を成した偉大な選手を是非ご覧いただきたい！葉輪選手です！現在、マウンドにいる葉輪 風路選手です！』

『スピードガンの故障でしょうねえ。それ以外考えられませんよ。それと実況者であるのにその鼻息した物言いはよくありませんよ。我々は事実を伝える為に常に冷静に…。』

『現実を見れない頑固ジジイは放っておきます！さあ、葉輪選手の轟選手に対する2球目！おおっと！？また160kmです！葉輪選手の特徴的な投球フォームから笑顔で投げ込まれたボールがまた160kmを記録しました！これはもうまぐれでもスピードガンの故障でもありません！葉輪選手が日本の高校野球史に伝説を刻み込んでいるのです！夢なら覚めないでくれえ！』



【怪物】パウプロを応援するスレ293【ラスボス】

1：このスレはパウプロこと葉輪 風路を応援するスレです  
アンチは別スレに移動をお願いします



次スレは800を踏んだやつが建てるように

314 : 160 kmキタ——!!!

317 : うおおおおおおお!

319 : 流石ラスボスやで!

322 : 知ってたw

325 : 左の160 kmやぞ!? 凄いなってレベルやないで!

334 : ワシは170 km投げた!

337 : 334 < おじいちゃんご飯はまだよ

340 : しっかし実況も思いきつたなあ。解説を放置して大丈夫な  
んか?

344 : 340 < あんな老害いらんわw

349 : しっかし薬師の打者達は楽しそうに打席に立つなあ

355 : 349 < 打てる打てへんを考えなければ、ワイも打席に立つ  
てみたいで

360 : アンチスレがなんか騒いどるでwスピードガンの故障だの  
球速盛りすぎだのw

367 : プロテインきめてるには草生えたwww

371：実況も言ってるけどラスボスは間違いなく伝説になるやろなあ：

376：ラスボスを生で見れる事に感謝せなあかで！

382：ラスボスレベルになると早よメジャーに行けと思うのはワイだけか？

388：プロ選手一同「早よメジャー行け」

403：ちよつと上司にアメリカに転勤したいって嘆願書出してくるわ！



薬師高校との準々決勝でパワプロが完全試合を達成すると、続く準決勝の市大三高戦にも先発したパワプロが連続で完全試合を達成する。

高校野球界がパワプロの160kmに騒然とする中、青道高校と稲城実業の夏の高校野球選手権西東京地区大会決勝戦が始まろうとしていたのだった。

## 第285話

「鳴さん、ナイスボール！」

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦当日、成宮はブルペンで少ない球数での調整を行っていた。

（たしかに肩肘はこっちの方が楽だな。でも、リリースの確認ぐらいしか出来ねえから、マウンドに上がるのに不安が残るけど…：パワプロはこれで調整してるって言ってたし、俺も出来るようにならねえとな。）

大会前に成宮は月刊野球王国の峰と大和田に取材を受けたのだが、その時にパワプロの調整方法を聞いて大会中に何度か試してみたのだ。

結果として少ない球数での調整をした試合は、試合後の肩肘の疲労が軽くなったのだが、立ち上がりでコントロールがやや不安定になってしまっていた。

それに不安を残しているのだが成宮はこの調整方法を続ける事にした。

何故か？

それは昨年のオフシーズンに怪我をしたからだ。

幸い背中筋肉を軽くつただけだったが、大事をとって1週間練習出来なかった事で成宮は調整方法やケアについてよく考える様になったのだ。

（うしー！学生では最後の対決だ。今日こそは勝たせてもらおうぞ、パワプロ！）

コンディション、モチベーション共に最高の状態に仕上げた成宮は、高校野球最後の大会を楽しもうと笑顔になったのだった。



1回の表、青道高校からの攻撃。

成宮は先頭打者の倉持に対する初球にフォーシームを投げ込んだ。

横の角度がついたフォーシームが右打席に立つ倉持の膝元に吸い込まれる。

パァン！

「ストライク！」

電光掲示板には成宮の最速である152kmが表示された。

（ヒヤハッ！いいボールだぜ。正直、手が出なかった。）

一つ息を吐いた倉持はバットを指一本余して持つ。

（短く持つても当てにくいバツティングじゃなく、しつかり振り切る！）

2球目、成宮はアウトローにバックドアとなるスライダーを投げ込む。

ガキッ！

倉持はしつかりとバットを振りきつたが、打球は1塁線を切れてファール。

（ちっ、ボール球だった！）

ボール球を打たされた形で追い込まれた倉持は、打席で大きく息を吐く。

3球目、成宮はインハイにフォーシームを投げ込む。

倉持の身体が反応したが、バットは途中で止まった。

パァン！

稲城の正捕手である多田野が塁審にスイング判定を求めるが、判定は振っていない。

冷や汗を流す倉持はヘルメットの鍔を触る。

（今日の成宮のボール…キレてやがる。）

4球目、成宮はインローに高速チェンジアップを投げ込んだ。

ガキッ！

倉持のバットはしつかりと振りきられていたが、引っかけってしまった打球は遊撃手の白河の真正面に転がり、倉持はショートゴロに打ち取られてしまったのだった。



1回の表を成宮が三者凡退で抑えると、パウプロはお返しとばかりに1回の裏を三者連続三振で抑える。

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦は、成宮とパウプロによる高校野球最高峰の投手戦となっていたのだった。

## 第286話

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦、青道高校と稲城実業の試合は中盤に突入していた。

5回の表、成宮がランナーを出しながらも余裕を持って青道打線を抑えると、5回の裏のパワプロはここまでランナーを一人も出さないパーフェクトピッチングを継続した。

6回の表、青道打線はこの試合初めてとなるスコアリングポジションにランナーを進めたが、成宮はピッチングのギアを上げて青道打線を振じ伏せる。

6回の裏、パワプロが特殊能力の『尻上がり』でピッチングのギアが上がると、フォーシームで160kmを投げる様になって球場の観客達から大歓声上がる様になり、球場の雰囲気は青道高校のものに染め上げられた。

もちろん稲城実業を応援する歓声もあるが、青道高校に対する歓声には明らかに及ばない。

7回、8回と試合は進んでいき、夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦は0-0の延長戦へと突入するのだった。



青道高校と稲城実業の試合は延長戦の11回の表まで進んでいた。

地区大会は決勝戦でもタイブレークルールであり、ノーアウト、1、2塁の状況からスタートする。

そしてこの11回の表の青道高校の攻撃はパワプロからだった。

マウンドに立ち続ける成宮は、夏の暑さと熱投の疲労で流れる顔の汗を拭う。

(まったく…俺はけっこう一杯一杯だったのに、パワプロはまだ余裕を残してやがる…ほんと生意気な奴！)

汗で滑らない様にロージンバッグを手に取った成宮は、マウンドで胸を張ってパワプロを見下ろす。

多田野のサインに頷いた成宮がセットポジションからクイックでボールを投げ込む。

成宮がアウトローに投げ込んだフォークは、ストライクゾーンを僅かに外れる。

「ボール！」

多田野が称賛の声を送りながらボールを成宮に投げ返す。

ボールを受け取った成宮はスパイクで軽くマウンドを均してからプレートに足を掛ける。

多田野のサインに頷いてボールを投げ込んでいくと、成宮はワンボール、ツーストライクとパワプロを追い込んだ。

追い込まれてもパワプロは笑顔のまま。

そんなパワプロを見て、成宮もマウンドで笑みを浮かべた。

追い込んだ状況で成宮が投げ込んだのは、左打者に対して絶対の自信を持つインローへのチェンジアップ。

リリースの感触から成宮はこれまでの野球経験を通じて最高のボールを投げ込めたと確信した。

しかし…。

カキンッ！

パワプロがバットを振り切ると、白球は夏の青空へと高く舞い上がっていく。

(ほんと生意気で…むかつく程すげえ奴だよ。)

夏の青空へと高く舞い上がった白球を見送った成宮は、そのまま天を仰ぐ。

しかし天を仰いだ成宮の表情は、楽しそうな笑顔なのだった。



「成宮くん、ちよつといいかな？」

夏の高校野球選手権西東京地区大会の決勝戦終了後、球場から出てきた成宮に月刊野球王国の記者である峰が声を掛ける。

「峰さん、俺、最後の大会に負けて傷心中なんだけど？」

「その割りには試合後に涙を流さなかつたみたいだね。」

峰の指摘に成宮は臍を曲げた様に顔を逸らす。

両者の間にしばらく沈黙が続くと、成宮は頭を掻きながら大きくため息を吐いた。

「あく…高校野球つてさ、野球人にとって一つの節目じゃん？ここで燃え尽きる奴だっているだろうし。でもさ…。」

そう言つて成宮は顔を上げる。

「俺は負けっぱなしで終わるつもりはねえ！次のステージでリベンジだ！そう思つたらさ、泣いて立ち止まるよりも、今を楽しんで笑つた方がいいってね！」

年相応の青少年らしい爽やかな笑みを浮かべた成宮を、峰の後ろにいた大和田が撮影する。

峰は成宮の答えに笑みを浮かべながら問いを続ける。

「次のステージというのはメジャーかい？」

首を横に振つた成宮は腰に手を当て胸を張る。

「俺は日本のプロ野球に行く！そして、日本一のピッチャーなる！そんなぐらい出来なきや、メジャーに行つてもパワプロにリベンジ出来ねえからな！」

声高に宣言をした成宮は、胸を張つて球場を去つていったのだつた。



## 第287話★

夏の高校野球選手権西東京地区大会を制した青道高校は、優勝候補の呼び声に恥じない堂々とした姿で夏の高校野球選手権大会の本選に挑んでいった。

現2年生の沢村を始めとした投手達が、パワプロの後のエースナンバーを継ぐのは俺だと言わんばかりに活躍して、甲子園に駆け付けた高校野球ファンの目を楽しませた。

沢村達のピッチングを見たスカウトの一人が『これから忙しくなりそうだな。』と呟く。

もちろん活躍をしているのは沢村達だけではない。

御幸を始めとした野手陣やベンチ入りした選手達も甲子園の地で躍動して、全国から集まった強豪を相手に破竹の勢いで勝ち進んでいく。

そして夏の高校野球選手権大会の準決勝、大阪桐生高校との試合を制した青道高校は夏の大会三連覇、春夏通じて甲子園五連覇をかけた決勝戦へと進むのだった。



「松本監督、少し時間よろしいでしょうか?」

甲子園球場に駆け付けた月刊野球王国の記者である峰が、試合を終えて球場を出てきた大阪桐生高校の監督である松本に声を掛ける。

「たしか月刊野球王国の記者さんやったな?これ以上敗戦の将をいじめるのは勘弁してやあ。」

おどける様な口調で話す松本に峰は苦笑いをする。

「冗談や。さつきまで他の記者さん達に揉みくちやにされとったんで、ちよいといじわるを言っただけや。」

「それでは?」

「うん、かまへんよ。」

峰はメモ帳を片手に、大和田はレコーダーを片手に松本の話聞く

態勢をとる。

「青道高校との試合を振り返ってどうでしたか？」

「監督として言ったらあかんのやろうけど、ノーノーで終えられたんやから上出来やろ。なんせプロ野球選手…いや、メジャーリーガーが高校球児の中に紛れ込んでいたんやからな。」

「高校球児の中にメジャーリーガーですか…かつて怪物と呼ばれた投手の時は一人だけプロが紛れ込んでいると謳われた事がありますが、それ以上という事ですか？」

「僕にはそう見えただけや。まあ、僕は葉輪くんのファンやから、鼻根目でそう見えとるだけかもしれんけどな。あつ、ここはオフレコで頼むで。」

茶目っ気を見せてウインクする松本に、峰と大和田は苦笑いをする。

峰と大和田は幾つか質問を投げ掛けていくが、松本は真摯に返答をしていく。

「それでは最後に…大阪桐生高校の監督としてこれからの意気込みをお願いします。」

「せやなあ…高校野球ファンの人達も青道高校さんが甲子園を制してばかりで飽きてきてとるやろうし、春の大会はうちが制させてもらいますわ。」

不敵に宣言した松本は、恰幅の良い身体を揺らしながら去っていった。



【怪物】 パワプロを応援するスレ334 【ラスボス】

1:このスレはパワプロこと葉輪 風路を応援するスレです

アンチは別スレに移動をお願いします

次スレは800を踏んだ奴が建てるように

212：夏の大会3連覇まで後3人や！

215：ついでに完全試合まで後3人や！

219：完全試合がついでな件www

224：219<ラスボスが息をするように達成するんやからしやあないやろ

235：うおおお!?また160kmや！

241：なんで9回に平然と160kmを投げれんねん！

246：241<ラスボスやから

249：246<真理やな

255：巨摩大藤巻の打者が当ていくバッティングしてんのに  
ボールにバットが当たらんwww

260：誰や！高校球児の中にメジャーリーガーをませたんわ!?

267：パワプロがメジャーリーガーとかwww

272：267<アンチは別スレやぞ

274：272<大阪桐生がラスボスのパーフェクトを阻んで  
ノーノーにしたからテンション上がってるんやろ

278：ノーノーでも十分凄いのに、それでアンチが歓喜する事に  
違和感を感じない今日この頃www

312：さあ後1人や！

314：やってまえ！

317：既に伝説やけど更に伝説を作れええええええ！



高校球児達の夏が終わった。

憧れの舞台にたどり着いて感極まる者、夢半ばで敗れて涙を流す者、そして栄冠を掴み喜びの声を上げる者と、高校球児達は様々な姿を見せてくれた。

そんな高校野球界に今年、決して色褪せる事のない伝説が刻まれた。

夏の高校野球選手権大会3連覇。

この偉業を青道高校が達成したのだ。

大会後、選手達を率いた青道高校野球部監督の片岡は次の様に語った。

『私は選手達に多くの感動を与えてもらい、多くの事を教えてもらいました。この結果に慢心せずに、これからも選手達と共に野球道を歩んでいきたいと思えます。』

青道黄金時代。

ここ数年間の高校野球は、そう遠くない未来からそう語られる事だろう。

こうして一つの伝説が終わり、伝説は新たな舞台へ…。

## エピソード

パワプロ世代が引退した秋、新青道高校野球部は秋の大会の決勝戦で轟 雷市を有する薬師高校に敗れてしまった。

その秋のドラフトでパワプロと御幸がプロ志望届を出さなかった事が話題になったが、その事は割愛しておこう。

冬になると青道高校野球部は推薦で春の甲子園への出場が決定する。

これで春夏合わせて6連続で甲子園出場とあつて話題になるが、パワプロの一つ下の世代の者達は秋の大会の雪辱を果たすべくオフシーズンの練習に没頭していく。

そして年が明けて1月の終わり頃、パワプロと御幸はトライアウトに参加する為にアメリカに渡った。

結果は…二人とも無事にロジャーズ入団が決定した。

この結果に勇気を貰った青道高校野球部は春の甲子園で躍動するが、準決勝で本郷をエースに据えた巨摩大藤巻高校に敗れてしまった。

涙を流して悔しがらる後輩達を激励してからパワプロと御幸は再びアメリカへと渡る。

そして日本の高校野球界で一つの伝説が終わってから5年…。  
新たな伝説がメジャーリーグを舞台にして起ころうとしていた。



『我らロジャーズが誇るエースのパワプロが、ワールドシリーズ史上初となるパーフェクトゲームまで残り3人だ！ファンの皆！スタンディングオベーションでパワプロを出迎えようぜ！』

地元の名物実況者の掛け声に呼応した様にロジャーズスタジアムのファンは総立ちで、最終回のマウンドに向かうパワプロを迎えた。

マウンドに上がったパワプロの元にロジャーズのユニフォームを着た御幸が歩み寄る。

「パワプロ、いつも通りな。」

「おう！楽しんでいくぜ！」

「父親として、子供に野球の楽しさを見せてやんねえとな。」

そう言っただけで御幸がスタンドに目を向けると、幼児と共にいる貴子と夏川の姿があった。

「パワプロ先輩！後3人！油断せずに行きましょう！」

大歓声の中でベンチからよく通る沢村の声に、パワプロと御幸は苦笑いをする。

沢村は元々ロジャーズスカウトのベックの評価が高かったが、最後の夏にエースとして甲子園を制覇した事で更に評価を上げてトライアウトに招待された。

その招待を受けた沢村は無事にトライアウトに合格し、パワプロや御幸と同様に恋人の若菜と共にアメリカへとやって来たのだ。

そして2年の月日を掛けてメジャーに昇格すると、パワプロと同じく大きな怪我をしない先発として首脳陣からの信頼を勝ち取り、ロジャーズの先発ローテーションの一角を担っている。

「そんじゃ、パーフェクトやりますか。」

「ロジャーズ念願のワールドシリーズ制覇も付いてくるとなれば、オフの契約交渉が楽しみだぜ。」

銭闘員である御幸の言葉にパワプロが肩を竦めると、御幸はキャッチャーボックスに戻っていく。

「やっぱり、野球って楽しいよなあ……。」

ワールドシリーズ史上初となるパーフェクトゲームまで後1イニングと迫っていながらも、パワプロは欠片も緊張を感じさせない笑顔でマウンドに立っている。

そのパワプロの姿にロジャーズスタジアムに訪れているベースボールファン達の誰もが、パワプロのワールドシリーズ史上初となるパーフェクトゲームの達成とワールドシリーズ制覇を確信した。

御幸のサインに頷いたパワプロが更に笑みを深めると、アメリカの子供皆が真似をする独特の投球モーションを始めるのだった。



メジャーの舞台でも笑顔で野球を楽しむパウプロの姿は、多くの子供達に野球の楽しさを伝えていく。

パウプロの影響で野球を始めた子供達から新たな伝説が産まれるかもしれない…。